平和教育のための教材

シベリア抑留と満州棄民

～戦後に始まった悲劇の証言集

原作：橋詰　四郎

編纂：水野　晴仁

協力：全国強制抑留者協会　愛知県支部　シベリア抑留者愛知友の会

目次

はじめに 8
発刊によせて 12
本教材のダウンロード 13
第１章　最後の皇軍（がんばった初年兵）　～橋詰四郎の証言 16
　少年時代 17
　　今上天皇（きんじょうてんのう＝在位中の天皇）の生まれた朝 17
　　教育勅語 20
　　町内で１番の親孝行の娘 24
　　級長 25
　　遊び 26
　　墓守（はかもり）の子 27
　　歌 28
　青年時代～徴兵 32
　　下宿生活 32
　　召集令状 33
　　中野正剛 35
　　人糞を鉄板で焼く 36
　関東軍時代 37
　　時代背景 37
　　氏子 37
　　最後の皇軍 39
　　渡満 40
　　朝水陣地 42
　　入浴事件 45
　　戦友 47
　　制裁 48
　　刺青 51
　　夜間訓練 52
　　特殊部隊 53
　　新兵 57
　　新型爆弾 58
　　開戦 59
　　朝鮮人従軍慰安婦 61
　　降伏 62
　　逃避行 63
　　シベリアへ 64
　シベリア捕虜時代 65
　　抑留された場所 67
　　気温 68
　　日の出と日没 68

シラミ……68
捕虜の死ぬ順番……69
食料……69
体力検査……70
蒸気機関車修理工場……71
ノルマ……72
捕虜の労働賃金……73
献血……74
ダモイ……75
欠礼……75
新聞屋……76
農場……77
ピスモー（手紙）……78
はがき……79
数……80
ツビティー（凍傷）……80
営倉……81
故障……82
食事当番……83
食料倉庫番……83
万年筆……84
思想委員会……84
選挙……85
有給休暇……85
眠い（スパーチコーチス）　おやすみなさい（スパコイノーチ）……85
子は宝……86
機関車……86
ダモイ（帰国）……87
ナホトカ……88
シベリア　いろはカルタ……89
帰国とその後……90
屈辱の帰国……90
進駐軍……91
舞鶴引き揚げ桟橋の復元式での奇跡……92
父の遺骨をお迎えできて　～山本美智子……95
引揚港　舞鶴の記録……95
第２章　関東軍兵士の軌跡……96
棄民のあしあと　～夏梅誠一の証言……97
ソ連編……97
中国編……120

なぜ「生体手術演習」をする軍医になったのか　～湯浅謙の証言.....166
初年兵の悲劇　～片又利雄の証言.....169
流転の万年一等兵　～長尾堅造の証言.....171
生死を分かつ瞬間　～稲葉迪夫の証言.....175
戦争が終わり平和になってから　～多田久男の証言.....177
大人の国（たいじんのくに）　～陰地茂一の証言.....183
シベリアと 7 年間の記録　～渡辺敬止の証言.....189
ソ連法廷で政治犯 25 年刑　～篠田恒の証言.....199
前職でつるし上げられる.....199
ハバロフスクで裁判を受ける.....200
政治犯 25 年の威力.....201
好々爺（こうこうや）　田辺老人.....201
収容所流転の旅の始まり.....202
囚人食から捕虜食に格上げ.....204
キラ星のごとき将軍集まる.....204
哀しき葬儀.....205
諸将軍と別れる.....206
日本から励ましに来ても.....206
帰国始まる.....206
社会党代議士来る.....207
ノルマ事件発生.....208
日本からの品物で殺傷事件発生.....208
ソ連相手に作業拒否闘争に突入.....209
あわや童貞喪失.....210
また帰国に漏れる.....211
光は東から.....211
不当抑留 11 年に終止符.....212
17 年ぶりに踏む祖国の土.....213
舞鶴.....213
故郷へ向かう.....214
シベリア鉄格子の中で　～小池義人の証言.....215
苦難のはじまり.....215
ラーゲル炎上.....215
下獄.....216
独房.....216
裁判.....217
判決.....218
囚人中継刑務所をたらい回し.....218
牢名主.....219
病魔と闘う.....219

高熱に負ける……220
本命刑務所へ　～　収監は判決 5 ヵ月後……220
マローズ……221
懲罰刑務所……221
ハバロフスクへ……222
日本国へ　～　敵前上陸儀式……223
乗船……224
舞鶴……224
戦争の被害者　～伊藤安治の証言……225
虎林第 2639 部隊にて　～鳥谷定夫の証言……229
第 3 章　一般市民の軌跡……240
男狩り　～若尾和延の証言……241
第 4 章　逃避行　～満州在住女性の軌跡……244
従軍看護婦の軌跡　～小宮山里野の証言……245
戦争になったら今度はあなたかもよ　～沢井冨子の証言……250
満宝山開拓団　～岡本澄子の証言……255
痛哭（つうこく）の記　～多田幸子の証言……258
満蒙開拓団　～西岡秀子の証言……259
黒河をあとに　～足立加代の証言……262
戦争体験記（良かったこと 2 つ）　～鈴木ツヤの証言……265
私の避難記　～小倉あやよの証言……267
女の私に戦後はない　～従軍慰安婦の証言……269
逃亡の最中、赤ちゃんを失う　～塩井キミ子の証言……274
第 5 章　黒河事件　～日本人捕虜による収容所脱走と逃避行……280
「黒河事件」の概況……281
黒河事件の前後　～井上龍助の証言……283
幾度も地獄から助けられる　～山岡三夫の証言……289
今も忘れじあの苦闘　～上村喜代蔵……294
ああ、黒河事件　～桜井悦太郎の証言……295
黒河事件に巻き込まれる　～西向克巳（第六国境守備隊歩兵一中隊所属）……296
黒河事件に関する厚生省公式資料……302
第 6 章　満蒙開拓義勇軍　～岩間典夫の軌跡……306
満蒙開拓青少年義勇軍……307
朝水訓練所……309
別れ……310
オロチョン日本人……311
第 7 章　最後の帰還者　～蜂谷弥三郎のこと……314
厚生省宛て文書……315
クラウディアの手紙……316
蜂谷の帰国……317
第 8 章　引き揚げの母と呼ばれた女性　～田端ハナの証言……318
平の引揚桟橋は語る……319

引揚とは……320
引揚記念公園……323
私と引揚思い出あれこれ……324
援護局閉局される……325
ある日の思い出……325
引揚船人港……326
第 9 章　スターリンへの感謝文……332
スターリンへの感謝文を読む前に……333
スターリン大元帥へおくる感謝文（草案）……336
第 10 章　シベリア抑留関係展示会より……346
渓谷沿いの邦人、兵士の悲惨な姿が今も眼底に焼きつく……347
敵機に発見され戦車隊の攻撃を受け、自決する将校、また弾に当たりに行く者……348
歩けない将校を丸太のように倒し、重戦車を走らせ虐殺……349
うそと泥棒を何とも思わない人種……350
狭い輸送貨車の中で 20 日間程寝泊りする、生きられたのは皆、帰りたいの一心から……351
北緯 53°の厳寒地「ロンドコー」収容所で越冬の強制労働開始……352
厳寒のもと過酷な強制労働は 1 日 5 ㎡の石割がノルマ……353
朝、暗くても労働時間厳守で、暗いときは友と抱き合い体を動かし温めあう……354
体感温度マイナス 100℃で働かされ、1,000 名の収容所で約 600 名の友が亡くなる……355
栄養失調と過労で朝、目が覚めると隣の友は冷たい……356
亡くなった友は深さ 25 ㎝くらいの穴を掘って土葬、飢餓生活はいつまでも続く……357
目視による体力検査でノルマの等級を女医が決める……358
ソ連軍による攻撃……359
行軍～ソ連領への連行……360
収容所……366
収容所の生活……368
食糧と水……370
運搬と貨車おろし……372
飢餓と死……383
装備品……388
敗戦後　ソ連軍の鬼畜的な婦女凌辱事件……391
遺書……392
第 11 章　補足情報……394
収容所の分布……395
復員庁留守業務局鮮満残務整理部作成　ソ連地区収容所掌握概況表……396
満州の人口……397
詔勅および協定……398
陸海軍軍人に賜はりたる敕諭　1882 年（明治 15 年）1 月 4 日……398
教育勅語　1890 年（明治 23 年）10 月 30 日……401
戦陣訓　1941 年（昭和 16 年）1 月 8 日……402
日本国およびソビエト連邦間中立条約及び声明　1941 年（昭和 16 年）年　4 月 13 日……410

米英両国に対する宣戦の詔書　1941 年（昭和 16 年）12 月 8 日 411
カイロ宣言　1943（昭和 18）年　12 月 1 日 412
ヤルタ協定　1945（昭和 20）年　2 月 4 日　米国国務省発表 413
ポツダム宣言　1945（昭和 20）年 7 月 26 日 414
対日宣戦布告文　1945 年（昭和 20 年）8 月 8 日深夜　日本に手渡す 415
終戦の詔書　1945 年（昭和 20 年）8 月 15 日 416
参考文献 417

はじめに

この教材は、小学校教諭の私が 2014 年（平成 26 年）5 月から翌年 2 月にかけて作成したものです。私の友人にして人生の師、橋詰四郎さんは、この原稿を作成した 2014 年時点で 89 歳の元気なおじいちゃんです。この教材は、橋詰さんがその半生をかけて書き留められた膨大な手記を下に、それを時代順、テーマ毎に取りまとめたものです。

私の専門は数学です。社会科の教員免許も持っていませんし、歴史研究の専門家でもなく、歴史資料の編纂の経験もありません。その私がなぜ、この教材を作成することになったのかを説明します。

橋詰さんが兵隊になったのは、たったの 19 歳の時でした。当時の日本では、国中の健康な男子はすべて兵隊として戦地に送られました。送っても送っても次から次に戦死して足りません。そこで第二次世界大戦の最後の時期には徴兵年齢を 19 歳まで引き下げました。橋詰さんは当時、最年少の日本兵でした。日本の軍隊は天皇陛下を頂点とする組織で、天皇陛下の「皇」の字を用いて「皇軍」とも言いました。橋詰さんは最後の最後に徴兵された「皇軍」の兵士として軍隊に入ったのです。

軍隊に入ったばかりの新米兵士は「初年兵」と呼ばれ、鬼の軍隊生活では最低の身分で、ひどい扱いを受けます。その初年兵の橋詰さんは関東軍といって、今の中国の東北部、その最北端のソ連との国境地帯を守備する部隊に配属されました。そこは日本とソ連が 1945 年（昭和 20 年）8 月 9 日から激しく戦闘を行った場所でした。

橋詰さんはソ連との死闘を生き抜き、敗戦後は捕虜としてシベリアに抑留された経歴の持ち主です。そんな苛烈な人生を送られた人物と小学校の先生が、どうやって知り合ったのか。それは、私の小学校の恩師が、私に橋詰さんを紹介してくださったからです。私の恩師、下原九州男先生は、お母様が長崎に原爆が投下されたときに被爆されたことも影響したのか、私が小学生の頃に、戦争の悲惨さを熱心に語られました。「はだしのゲン」の単行本を教室に置き、「猫は生きている」という絵本を読んでくれたことも記憶に残っています。戦争の悲惨さを子どもに伝える教育は、下原先生のライフワークだったのでしょう。赴任先の中学校に橋詰さんを招き、戦争体験を語っていただいたとのことでした。私が下原先生と 20 年ぶりに再会した折、下原先生は橋詰さんを私に紹介してくださったのです。その後下原先生は、半年もたたない内に病気で亡くなりました。おそらく、私に橋詰さんを紹介して、平和教育の継続を期待されたのだと思います。

そうして始まった橋詰さんとの交流でしたが、この橋詰さんというおじいちゃんはとにかく凄いのです。シベリアから奇跡の生還を果たしてからも、ご自分で手記を書きため、また、戦友の皆さんにも呼びかけて当時の貴重な体験談を集めて全部ワープロで打ち込み、毎年「戦争体験を語り継ぐ集い」を企画して、若い世代に当時の悲惨な状況を伝えていらっしゃいます。また、シベリアや満州に置き去りにされた人々の帰国を援助したり、児童保護施設に暮らす子供たちを励ますのために様々なイベントを企画したりと、89 歳にして現役バリバリのスーパーおじいちゃんなのです。

私は、橋詰さんご自身が作成された手記や、戦友の皆さんの証言をまとめられた資料などをすべてお預かりし、それらを整理して、中学生や小学校の高学年の子どもたちにも読めるような教材を作ろうと思いました。そしてできたのがこの教材です。

この教材を作成するにあたり私が最も時間を費やしたのは、写真やイラストをふんだんに取り込むことでした。橋詰さんからご提供いただいた資料は、ほとんどが文字情報だったのですが、読んでも私ですら知らない言葉がたくさんあり、それらの説明には写真やイラストが欠かせないと思ったからです。また難しい漢字や言葉遣いなども、日常会話で使う平易な言葉に置き換えたり、たくさんの注釈を盛り込んだりしました。

当時の写真は、橋詰さん所蔵のアルバムや各種の書籍・雑誌、市立図書館から借りてきた本、インターネット等から入手しました。また、本資料に掲載されているイラストや当時の品物の写真は「全国強制抑留者協会 愛知県支部 シベリア抑留者愛知友の会」の皆様のご好意によって入手することができました。夏休みを利用して京都府舞鶴市にある「舞鶴引揚記念館」にも訪れ、シベリアからの生還者を日本に迎え入れた人々の様子を教えていただき、分かりやすい資料も提供していただきました。この教材は、そうした多方面からの協力を得て、数ヶ月をかけて出来上がったのでした。結局 300 ページ、20 万文字を超えるボリュームになってしまいましたが、ぜひ、がんばって全編に目を通して頂きたいと思います。どのページにも執念（？）を込めて作成しました。

この資料の構成を簡単に紹介します。

第 1 章は橋詰さんの半生の物語です。橋詰さんの幼少期から始まっています。軍国時代の日本がどんな空気だったのか、そういうことも感じ取ってください。軍隊に入るとどうなるのでしょうか。「初年兵いじめ」といって新米の兵隊は、先輩兵士からボコボコにされます。軍隊生活がどんなものなのかを知ることができます。日本とソ連との激しい戦争が起こりました。どうやって敵兵士を殺し、どうやって生き残ったのでしょうか。その様子がリアルに語られています。シベリアに連れて行かれ、収容所に入れられて、ロシア人といっしょに機関車修理工場で働く様子。多くのトラブルが発生します。どうやって日本に帰ることができたのでしょうか。日本に帰国したその日、何が起こったのでしょう。やっと帰宅して、その後どんな生活が待っていたのでしょうか。そういうことが全部分かります。

第 2 章は、関東軍の兵士の方々の証言集です。橋詰さんの上司、初年兵の仲間たちの戦中、戦後の壮絶な生き様が描かれています。歩兵、工兵、軍医など様々な人々が、敗戦後、シベリアに連行されて強制労働を強いられました。そして、多くの仲間が失意の中、死んでいきました。中には、政治犯として逮捕され、法廷で有罪判決を受け、囚人として 11 年もの間、拘留された人もいます。軍医として、生体実験と称して、健康な中国人の体にメスを入れてきた人の話も掲載しました。ソ連の厳しい環境下に病で倒れ、中国に送還され、その後は、中国の収容所で働かされたという人もいます。日ソ戦における敵味方の攻防の様子や、ソ連、中国において、関東軍兵士たちが遭遇した様々な事件、事故、そして現地人との交流の様子を垣間見てください。

第３章は、満州で働いていた一般市民男性の証言です。シベリアに連行されたのは、兵士だけでなく、在満の一般市民男性も、ソ連軍によって拉致され、強制労働をさせられていました。

第４章は、女性の証言を集めました。敗戦を迎えた満州では、兵士や一般男性はすべて捕らわれ、村や町には老人と婦女子が置き去りとなってしまいました。敗戦の瞬間から、彼らの逃避行が始まります。従軍看護婦、従軍慰慰安婦、そして、満蒙開拓団の一員として満州で農業を営んでいた女性らが、どのようにして帰国してきたのか。その壮絶な足取りが描かれています。

第５章の「黒河（こっか）事件」は、おそらくほとんどの日本人が耳にしたことがないと思います。ソ連に連行され、そこで病気になった人たちは、中国の「黒河」という町の収容所に送還されました。中国に棄てられた病人たちが黒河の収容所を脱走し、命がけで逃走する様子が描かれています。

第６章は中国少数民族オロチョンに拉致され、オロチョン族として生きた日本人の話です。この人は満蒙開拓義勇軍として 15 歳で満州に渡り、17 歳のときに日ソ戦に巻き込まれてソ連に連行され、収容所で死亡した人々の遺体をトラックに載せる仕事をしていました。未成年であることを理由に中国に戻され、中国の共産党軍に従軍、軍事物資を運搬中にオロチョン族に襲われ、オロチョン族と共に生活し、後にオロチョン族の指導者となった日本人の人生の記録です。

第７章は、ソ連から最後の最後に日本に帰国した人の話です。敗戦直後に妻子と引き裂かれ、ソ連に囚人として連行されて帰国は許されず、ソ連人として生きてきた人の人生です。

第８章は、ソ連や中国から引き揚げてくる日本人たちを、京都の舞鶴港で受け入れていた地元婦人会の主要メンバーで「引き揚げの母」と呼ばれた女性の証言です。日本からの第一回引き揚げ船で起こった悲劇には、だれもが絶句することでしょう。

第９章には、日本人捕虜たちが帰国する際にソ連の指導者スターリンに宛てて作成した「感謝文」を記載しました。この資料もおそらく国内では初公開となります。無理やりソ連に連れて行かれた日本人捕虜がソ連の指導者になぜ「感謝」するのか、だれもが疑問に思うでしょう。この章で、そのあたりの事情を知ることができます。ロシアの国立公文書館に所蔵された「感謝文」の草案を、命がけで日本に持ち帰った人がいたからこそ読むことができる資料です。

第 10 章は、全国強制抑留者協会　愛知県支部　シベリア抑留者愛知友の会が主催された「シベリア抑留関係展示会」の出展物を掲載しました。シベリアの抑留の「現実」を示す貴重なイラストや収容所の写真を掲載しました。日本人捕虜が極寒の地で用いた装備品の数々もご覧になれます。

第 11 章は、関連する詔勅や国際協定を掲載しました。文語調で記述された原文をもとに、現代語訳しました。参考文献も付記しましたので、興味のある方は、ぜひ、手に取ってください。

このように、本教材は多種多様、多方面の人々の証言集です。一兵隊、一市民、一人間の、生の言葉から成り立っています。ここで証言をしている方々に共通するのは、ただ一点。国に強いられた戦争に翻弄（ほんろう）された小さな市民である、ということです。

私たちは、今、平和な日本にいます。しかし日本は、尖閣諸島の帰属でもめる中国、竹島問題でもめる韓国、拉致問題でもめる北朝鮮、北方領土問題でもめるソ連、沖縄基地問題でもめるアメリカなどの諸外国と解決困難な問題を抱えています。日本には戦争放棄を掲げた憲法九条がありますが、攻撃を受ければ戦争が始まります。戦争が始まれば、この資料の証言そのままの悲惨な状況にすべての人々が陥るのです。

歴史の証言者たちの数々の証言と人生に触れて、皆さんはどんな思いを抱かれるでしょうか。

私はこの教材の編纂を通じて、人間の叡智（えいち）というのものは、他国と共存共栄できる世界の構築に向けた努力にこそ注がれるべきだという思いを強くしました。

2015 年 2 月

水野 晴仁



橋詰宅にて（私と橋詰さん）

発刊によせて

戦争を憎み、平和を求め行動した下原先生が生前「私の後継者です。」と誇った水野晴仁先生が、下原先生亡き後、私を注視し、昭和と共に歩み、まだ生き残った「昭和と戦争」の証人の生きザマを、「消える言葉」でなく「残る文字」でつづって下さったことに感謝申し上げます。

隣国、満州国（中国東北）へ派兵。軍隊で「娑婆（しゃば)」と呼ぶ民衆生活圏と接する公用外出の時、すれ違った満人老婆から鋭い低音で「リーベン・クイズ（＝日本の鬼)。」と吐き捨てるような罵声（ばせい）を浴びた。ブラジル、パラグアイ、ハワイへ移住は原生林の開墾からだが、満州国では後からきた日本人が先住人の築き上げた高級住宅地区と、農地は美田良田を軍事力で奪い、「娑婆」でも「この国のご主人様は日本人だ。」と満人に「言葉と行い」で示していた。子供も親を真似て。

敗戦で一億総懺悔（ざんげ）したと思ったら、巧みに恥部「侵略」を「隠す戦争・教えない戦争」へマインドコントロール化。わずか敗戦後 15 年で元首論が浮上。驚く世論に時期尚早と思ったのか「冬眠」。「目覚める」頃合いを見計らっているようだ。昭和の戦争で双方の死者数 2,316 万人と認め合った。内、2,000 万人とアメリカを含む連合軍兵士 6 万人は日本による犠牲者数。一方、日本の死者数は、一夜で 10 万人焼死の東京大空襲、南方戦場での病死餓死、広島、長崎も含め 310 万人だ。実に日本の死者数は全体の 13%だ。この数字実体も沈黙で隠さず、語り継がなければと思う。

帝国主義を「正義」にマインドコントロール化。世界の宝「憲法 9 条」を白あり同様食い潰そうとする。1945 年（昭和 20 年）8 月 9 日から 21 日まで、強力なソ連戦車軍団と死闘を展開し生き残り、なお、シベリアも生き残った戦友たちと「戦争反対、守れ 9 条。」と叫び、戦友たちの体験記を戦争反対へ役立つ資料へ提供した。1989 年（平成元年）夏から毎年、生涯学習センターで「戦争体験を語り継ぐ集い」を開催できる機会を得て、平和の働き場を「戦友会」から「市民の仲間」へも入れて頂き、メンバーの 1 人として小中学へ戦争体験談の出前もし、2001 年（平成 13 年）愛知教育大学岡崎附属中学校へ 4 人で出前。翌年、同中学より 5 名が「戦争体験を語り継ぐ集い」で「明治維新政府の政策　～列強入りから侵略戦争への過程」を発表。「戦争は僕たちの祖父母まで続いた。」と結んだ。2003 年（平成 15 年）中学生の孫を通し諸輪中学校の下原先生を知り、先生を通し、戦争体験を「語り継ぐ」中学生たちに聴衆は「平和を守る大切さ」を逆学習させられた。

私は思うがままに、平和運動をさせてくれる妻に感謝し、結婚 60 周年の 2014 年（平成 26 年）5 月 5 日、朝日新聞に掲載された平和を願う 21 編の拙文を軸に「愛を正義を祈る文集」と題して自分史を発刊した。

この自分史に戦友たちの、敗戦と同時に異国満州で棄民された邦人の手記も含め、故人となられた下原先生の意志を受け継いでおられる水野晴仁先生が「平和教育の教材」として「隠す戦争・教えない戦争」を引き出し「戦争に反対し、9 条を守る」資料にと編纂されたと思う。神に感謝。

2014 年（平成 26 年）12 月 3 日　ネームデーに　橋詰　四郎

本教材のダウンロード

本教材は、次のホームページからダウンロードしてご覧になることができます。

http://www.geocities.jp/mizney_land/

このホームページには、改訂版を随時掲載していますので、ご活用ください。

また、この教材に関するご意見、ご質問などがございましたら、次のアドレスにてご連絡ください。

mizney@me.com

なお、本教材の説明会や講演など開催希望、取材等のご依頼は、可能な限りお受けしたいと思います。このアドレスにご連絡ください。

中日新聞（夕刊） 2015年（平成27年）6月22日（月曜日）
©中日新聞社 2015
（日刊）



水面

シベリア抑留者ら30人の証言集

悲惨体験 後世へ

平和教育に力を入れていた小学校時代の恩師の遺志を継ぎ、愛知県日進市香久山小学校の水野晴仁教諭(49)＝同市岩藤町＝が、戦争体験者の証言集を作った。「シベリア抑留と満州棄民」と題し、恩師に紹介されたシベリア抑留経験者ら約30人の話を収めた。戦後連れて行かれた極寒の地で、懸命に生きた話などが詳細につづってある。水野さんは「戦後70年を迎え、将来を担う子どもたちに読んでほしい」と願う。（日進通信部・並木智子）

戦後70年

恩師は下原九州男さん。母親が長崎で被爆したこともあり、子どもたちに祖父母の戦争体験を聞き取らせたり、戦争体験者を語り部として授業に招くなど平和教育に熱心だった。日進市北小では、水野さんが小学四、五年当時の学級担任を務めた。二〇〇八年三月、五十九歳で亡くなった。

水野さんは大学卒業後、民間企業に勤務しながら教員を目指し、〇七年秋に教員採用試験に合格した。下原さんに報告すると「病気のため余命がわずかしかない」と打ち明けられ、語り部の一人でシベリア抑留経験者の橋詰四郎さん(八九)＝同県豊明市＝を紹介された。「教員のバトンを渡されたような気がした」

橋詰さんは長年、戦友の体験談を集め、戦争体験を語る集いを開いてきた。水野さんはそうした資料の提供を受けることがたびたびあり、「貴重な証言を後世に残したい」と考えるようになった。子どもたちも読める教材を作ることを橋詰さんに提案し、「多くの人々の生きざまが残る」と賛同を得た。橋詰さんをはじめ、橋詰さんの戦友、軍医らの証言を昨年五月から約十カ月かけて集めた。橋詰さんが所有する写真や、団体から提供を受けたイラストも添え、難しい漢字にはルビをふった。

証言集は三百八十七ページ。橋詰さんは少年時代から出征、シベリア抑留、帰国までをつづった。シベリアでは「家畜の餌や粟などが食料だった。壁にもたれている者に食事が来たと教えると死んでいた」という場面も。証言者の一人で、旧満州（現中国北東部）の山中にいた元従軍看護婦の女性は「爆弾を抱いて敵戦車を爆破するために壕を出る兵は『手を握って励ましてください』と言った。だれ一人帰ってこなかった」と記した。

このほか「生体実験」に関与したことを告白する元軍医の話や、シベリアで病弱になって労働力にならないと判断され、中国の収容所に送られた元兵士の話などさまざま。

水野さんは「下原先生は平和教育の継続を期待していたと思う。今度は私が子どもたちにこの貴重な資料を伝えたい」と話す。

証言集はホームページから閲覧できる。アドレスはhttp://www.geocities.jp/mizney_land/



上 戦争体験の証言をまとめた水野晴仁さん(左)と元シベリア抑留者の橋詰四郎さん＝愛知県豊明市で
下 「シベリア抑留と満州棄民」の一部分



日進の教諭 **恩師の遺志継ぎ「教育資料に」**

元法制局長官ら「違憲」

安保法案質疑 **与党推薦者は「必要」**

安全保障関連法案に関す　は「政府は『自国を守るた　ることで相手に日本攻撃の

憲法学者の小林節慶応大名誉教授は、憲法上、わが国は海外での軍事行動が本来的に不能。解釈で憲法を踏み越えて行うことは、法の支配を放棄した独裁政治の宣言に等しい」と批判した。

一方、憲法学者の西修駒沢大名誉教授は「憲法上、

中日新聞 夕刊
発行所 中日新聞社
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号
〒460-8511 電話 052(201)8811
2015年（平成27年）
6月22日（月）

名古屋おもてなし武将隊 オリジナルLINEスタンプ
出陣じゃ！ Here We Go!
50コイン・120円で販売中!
お申し込みはこちらから!
http://line.me/S/sticker/1126971
スマホで便利
中日新聞プラス
登録のお問い合わせは
0120-664411

きょうの紙面

銭湯守れ 24歳熱いぞ 11
暗号が最多 特定秘密 初の国会報告 3
劇団四季 「アラジン」冒険、恋描く 7
東京五輪 8競技 追加種目に望み 10

中日新聞（夕刊）2015年（平成27年）6月22日（月曜日）掲載

第１章　最後の皇軍（がんばった初年兵）　～橋詰四郎の証言

少年時代

今上天皇（きんじょうてんのう＝在位中の天皇）の生まれた朝

♪日の出だ　日の出だ　鳴った　鳴ったサイレン
　うれしや　かあさん　皇太子さま　おんまれ　なさった♪

私がこの歌を歌えるのは徹底した皇国民教育の影響だと思っている。1943 年（昭和 18 年）86 歳で死んだ祖母は「天子（てんし）様はありがたいお方で、生きている神様だから、わしらのような平民が天子様を見ると目がつぶれる。軽々しく口にすると口が曲がる。」と大まじめで話し、それを信じて死んでいった。

男尊女卑の封建制土壌で公・候・伯・子・男。貴・華・士・平と、やたらに人を序列化して権威の象徴とし、奴隷の子は奴隷のごとく、嫡子外は人権もなく、人間も売買された。平民は身分制度の最下層で、戸籍謄本に記載されて就職・婚姻等の身分証明に活用。それまでは「士・農・工・商」に区分され「商が最下位とは。」とクレームを付け、今は使用禁止の差別語で番外とし「商」を満足させた。明治新政府制定の「平民」グループがこれまた「最下位とは。」と文句を放ち「平民」の次に「差別禁止グループ」を「新平民」として不満を和らげた。この差別は敗戦で制度として無くなったが、思想の差別意識は根強く、現在も暗黙の中で厳然と強い思想として残り「就職・婚姻」の「さまたげ」となっている。私が 30 代の時、京都の友人ご夫妻が「差別解放運動」に取り組んでいた。私はたしなめる気持ちで「寝ている子を起すようなことはするな。」と助言すると、奥様は涙を浮かべ「理由のない差別で苦しみ泣いている人たちを見もしないで『寝ている』とは情けない。」と叱責され「目から鱗（うろこ）」で私も運動に参加するようになった。今、私は、日本の「三大差別」は「被差別」「ハンセン病」「アカ」だと位置づけしている。

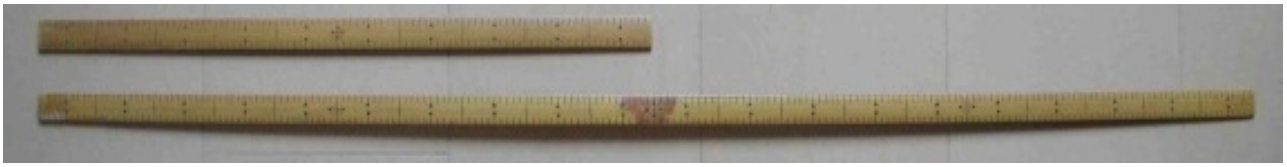
私の育った地区は洋服屋、学校の先生、市役所の職員、鉄道員や会社員等で占められ、工場は無かったので工員労働者はいなかった。「調味料、味の素」が出始め「耳かき一杯分ですごい味。」として、使っている家は羨望（せんぼう）の的にされていた。冬の朝には路地の空き地でだれかが炭俵（すみだわら＝炭の詰まった俵）を燃やし、それに廃材を継ぎ足して井戸端会議をしながら暖を取る習慣があった。その時 8 歳の私もなぜかその輪の中にいた。天皇家は 1925 年（大正 14 年）から 1931 年（昭和 6 年）の 6 年間で、成子様、祐子様、和子様、厚子様の 4 人の女児の誕生が続いていた。「皇后様。今度は男の子を。」と合唱しながら祈りに近い大人の会話があった。

市役所は 6 時、正午、18 時にサイレンで時を告げ、火災発生はサイレンを連続で鳴らして住民に火の用心の意識を高めていた。今回の誕生には 1 回なら内親王、連続 2 回なら皇太子と、サイレンで知らせる通達が出ていた。

1933 年（昭和 8 年）12 月 23 日の朝、たき火を囲み井戸端会議の最中、突如サイレンが朝の冷気を破るかのように鳴り響いた。大人たちは男子、男子と声を上げ、合掌し祈っていた。サイレンの音が小さくなっていくと、今度は「もう 1 回。」の合唱になり、サイレンが再び元気よく鳴り響いた。大人たちは「皇太子様だ。」と大歓声を上げて喜んでいた。踊り狂うとはこのことかと子供心に思った。

2 度目のサイレンも鳴りやみ静かになったが、たき火の輪ではまだ大人たちの興奮が冷めぬままであった。その時、何を思ったか私は大人たちに「もう 1 回鳴ったら火事だよね。あぁ、よかった。」と大声で話しかけた。言った途端、後ろにいた大人が「この罰当たり。口が曲がるぞ。」と怒鳴り、私の背中を突き飛ばした。私は燃え盛るたき火の中へ前向きで倒れた。助け出されたのか自分で飛び出たのかは覚えてはいないが、たき火で霜柱が解けたぬかるみに土下座して、ご近所の皆様一人ひとりのひざにすがりながら、何度も頭をペコペコしながら平謝りする母の姿があった。

私は 2 歳の誕生日前に父を亡くしている。けんかでは負けても勝っても、けんかの原因も聞かずけんかをしたたけで、また、先生にしかられたと分かると、先生様にしかられるようなことをしたというだけで裁縫の 2 尺（約 76cm）のクジラ尺（＝着物の布地の長さを測るのに使われる定規）で私をたたいた母が、なぜかこのときは「火事でなくて良かったね。」と言ってしかりもたたきもしなかった。



クジラ尺

しばらくして学校で前述の歌を教えられ、この歌を歌いながら旗行列やちょうちん行列をしながら神社に参拝し「天皇陛下、万歳。」を三唱した記憶が残っている。



炭俵



旗行列

登下校は、誘い合う者同士または単独。分団登校はなかった。学校給食はなく、ほとんどの子供は昼ご飯を家に食べに行った。体育館は無いので、雨の日は教室で自習となり、単行本「猿飛佐助」などを静かに読んだ。体操の教科書は無く、走る、飛ぶ、鉄棒で採点された。

夏になると 2 週間、海水浴の授業のため、3 年生以上が汽車で 2 区の海岸まで往復した。白の水泳帽子をかぶり、鮫が近づかないように 3 尺程、前垂れが出るように褌（ふんどし）をした。5,000 メートルの遠泳に合格すると、幅 5 センチの黒帯が水泳帽子に縫いつけられ、赤旗で囲んだ外側から内側を監視する役を仰せつかり、誇りと名誉とされ合格を競い合った。汽車賃の出せない家の子は学校で自習していた。夏休みは誘い合って川で泳ぎ、川原の焼けた石に褌を広げて干すと 10 分ほどで乾くので、乾くと褌で覆面し、皇室のために活躍する「鞍馬天狗」（＝勤王の志士を助ける剣士、嵐寛十郎が主演した映画）遊びに興じた。



水泳の授業

教科書は全科目「国定教科書」で全国共通の全額保護者負担。教科書を買えない家庭もあり、家庭内やご近所同士の払下げ。「払下げ先が決まっているから大切に使え。」と言われた。最初に習う文字は「ひらがな」でなく「カタカナ」。





小学校 1 年生の教科書

習字は 2 年生から、最初に「ノ」「メ」「ク」「タ」の文字を習った記憶がある。小 4 ぐらいから大全科参考書を買い、教科書は学校に常に置いていた。通学はカバンでなくふろしきを使っていた。

「書き方（現在の習字)」「唱歌（現在の音楽)」「図工（現在の工作)」「図画（現在の美術)」の教科書を持たない子供が大勢いた。席は 2 人がけであったので、そういう生徒は隣の人の教科書を見て学習した。唱歌は先生の弾くオルガンに合わせて歌い点数がつく。絵の具の筆は習字用の筆 1 本で習い、評価は全科目「甲」「乙」「丙」の 3 段階だった。6 年生の冬の「体操（現在の体育)」はラグビーで、級長の「中尾」が笛を持ち審判役、1 個のボールを 50 人以上で追いかける。4〜5 人いなくてもばれないから、裏門から抜け出し駄菓子屋で焼き芋を食べる楽しみもあった。

教育勅語

1931 年（昭和 6 年）1 月 17 日、政府は、天皇の写真「御真影（ごしんえい)」を各学校に御下賜（ごかし＝高貴な人が、身分の低い人に物を与えること）した。しばらくして、中に何が入っているかは知らされず「奉安殿（ほうあんでん)」と呼ぶ耐震耐火の建物が学校正門に建立された。その前を通るときは建物に向かって帽子をとり、不動の姿勢をしてから深々と最敬礼をするようにと先生にも生徒にも義務づけられた。「男女七歳にして席を同じにするな。」という軍国主義の時代で、子供の頃から男尊女卑（だんそんじょひ、男性を重くみて女性を軽んじることの意）の教育。男女別々のクラス編成であり、子供たちは幼児から一目で「男」「女」が分かる服装をしていた。



奉安殿



奉安殿に向かっての最敬礼

男子生徒の遊び「兵隊ごっこ」は、学生帽子の普通かぶりが「戦艦」、横かぶりは「巡洋艦」（戦艦の補佐的役割をする)、後ろかぶりが「潜水艦」。戦艦は巡洋艦に勝ち、潜水艦に負け。巡洋艦は潜水艦に勝ち、戦艦に負け。潜水艦は戦艦に勝ち、巡洋艦に負けるルールで、奉安殿ができてからは、止まって最敬礼をする奉安殿前に追い込む作戦が勝敗を決めるようになり、けんかも逃げる相手を奉安殿前に追い込むなど悪ガキたちは奉安殿を「お味方」にして遊んだ。

毎週月曜日の 1 時限目は天皇陛下に忠義を尽くす教育。先生は「教育勅語（ちょくご)」を目よりも高く奉持（ほうじ＝丁重に捧げ持つこと）し、途中出会った者は最敬礼をしなくてはいけない。先生は奉書（ほうしょ＝教育勅語）を高々と掲げ「勅語。」と一言。生徒は直立不動の姿勢で頭を下げ、勅語を読むまじめ声と、生徒の鼻をすする不まじめ音が妙に調和して、笑いをこらえつつ拝聴した。1 年生から月曜日毎の儀式で、勅語は先生も子供もそらんじている。先生はひきょうにも、目より更に高く上げ、生徒の勅語を聞く姿勢を見ながら朗々とそらんじ、読み終わるやあくびや、手足、体を動かした生徒を前に呼び、むちでたたき、皇国民教育（天皇神聖＝現人神（あらひとがみ）＝この世に人間の姿で現れた神、と教えた）を行った。



教育勅語の奉読

兵隊になって戦死するのが天皇陛下への最高の忠義で、最大の親孝行と教わった。小学 6 年生で義務教育は終了し、就職する子もいた。男子は家業を手伝う者、丁稚奉公（でっちぼうこう＝商店など下働きとして勤めること）に出される者、女子は女中見習や花柳界（かりゅうかい＝芸者や遊女の社会）に売られていく者もいた。校長先生や病院先生も自転車。病院にも学校にも駐車場などはなかった。朝食は麦飯に味噌汁（みそしる）と自家製の沢庵（たくあん）くらい。沢庵を食べたときの屁（へ）は鼻が曲がるほどの悪臭を放ち、ひんしゅくを買った。屁をひった子は起立し「勅語。」と叫び、遊び仲間を起立させ、先生の口調を真似して「朕は思わず屁をひった。汝（なんじ）臣民（しんみん）臭かろう、御国のためだ、我慢せよ、鼻をつまんで御名御璽（ぎょめいぎょじ＝天皇陛下の署名捺印の意)」と教育勅語をもじり鬼ごっこにも採用。捕まりそうになると「勅語。」で鬼を起立させて逃げ切る作戦に利用したが、逃げるヤツはハアハア息切れで「朕は思わず屁をひった･･･。」を唱え始める。鬼はその間ニヤニヤ笑いながら静かに呼吸を整えていた。

いつの時代も 1 人ぐらい「アホ」がいる。教室でにおってきたと思ったらだれかが「勅語。」と叫んだ。私たちは反射的にガタガタと音を立てて素早く起立。担任も「勅語。」の大声に直立し顔はうろたえている。勅語の暗唱が終わると先生は「窓を開けよ。」と叫び、窓から身を乗り出して深呼吸をしている。教室を吹き抜けた風で悪臭は飛ばされ、窓を閉め終わると担任は「他の先生の時は絶対するな。」と約束させた。

習字の先生はひげを生やし、羽織袴（はおりはかま）でいつも威厳を保っていたが、次の動作に移るときに「ヨイショ。」と言うのが口癖であった。この時間にアホが「勅語」と叫んだ。私たちはガタガタといすを動かし素早く起立した。おひげは何事かと驚きながらも子供たちが不動の姿勢なので、ご自分もあわてて生徒に従い直立不動の姿勢を取ったが「･･･鼻をつまんで御名御璽。」が終わるや烈火のごとく怒り、起立している子供を席順に 1 人ずつスリッパで殴り回った。1 クラスは 50 人で 20 人くらい殴ると先生は息切れ、半数も殴らず職員室に帰ってしまった。私たちは洗面所と教室の間を走り回り、手ぬぐいやタオルを水道水でぬらして殴られたヤツのほおを冷やし介抱した。



教育勅語

その出来事の何日か後、始業の初めに担任が「今日で君たちとお別れです。先生は台湾の高砂族（たかさごぞく＝台湾先住民）の子供たちを教えにいくことになりました。」と話した。先生の出発の日、駅でお別れをしたのは級長の両親と教頭の 2 人だけで、こっそりと他人に知れると困るような転勤であったと級長のお母さんは言っていたそうだ。更にしばらくして、母から思いがけないことを聞かされた。「お前たちは何か先生様を困らすようなことをしたのか。」「お前たちのやったことを警察やお上が知ったら、校長先生や親も警察に連れていかれる。騒ぎが大きくなる前に急いで先生を台湾の山奥へ逃がした。」と言うのだ。



当時の学校職員



高砂族

その後「勅語遊び」は沈静化していったが、次々と遊びを考え出すのが子供である。習字の「おひげ」は大のへび嫌いだった。春、秋の遠足に「おひげ」も参加するというので、私たちは「へび探し」にいそしんだ。へびを振り回し「おひげ」のまわりを走り回る。毛皮を満州の兵隊さんに送るための全校生徒による山裾（やますそ）でのうさぎ狩りも「へび探し」になる。へびを習字の時間に教室に放つなど、相談も話し合いもしないのに自主的に「おひげ」を困らせた。体育館はなく、雨の日の体育は教室で自習だった。この時、だれかが次の習字に使うから野草の「ドクダミ」を 1 人 10 本以上持ってこいと命令した。50 人の生徒が持ち寄り、教室の後ろに山のように積んだので悪臭が充満して頭痛がするほどだったが、それに耐えたのも子供の幼稚さかと思う。



ドクダミ

職員室でも話題になり、2 時限目に入る前に担任が「薬草だから教頭先生が欲しい。終わったら捨てずに小使室（現在の用務員）に運ぶように。」と言われた。習字はすずりに水を入れ、背筋を伸ばし、左手は指をそろえて机の端に置き、右手は手首を固定し墨を垂直に持ち腕を前後して墨をする。この時ドクダミの葉や茎も一緒にすりつぶすから、においは更に広がる。「おひげ」は黙って黒板に大きく「蛇」と書き、この字を自習せよと言って職員室に引き上げてしまった。「それ。」とばかりに当時流行の「霧隠才蔵」（きりがくれさいぞう）「猿飛佐助」（さるとびさすけ）「真田十勇士」などの単行本を静かに読んだ。担任は「習字の先生が言うには君たちは先生がいると騒ぎ、いないときは静かになる珍しい組だと言っておられた。」と私たちにぼやいた。



霧隠才蔵

町内で１番の親孝行の娘

どの家も水道はなく、共同井戸を利用。小学 4～5 年生になると男子は天秤棒で水汲みをさせられる。炊事から風呂水も男坊主の仕事だ。内風呂の家は少なく銭湯が主力。共同井戸は屋根を広くして洗濯場にもなっていた。叔父の家が近くにあり、私は叔父家の炊事から風呂水を汲んでいた。祖母は「お父さんがいたら汲まされないのに。」が口癖だった。悪事を働くと、力では母に負けないのに「柿の木に縛るから先に行きなさい。」という母の言葉に従い、炭俵の荒縄を持って後から来る母を待ち、抵抗もせずに柿の木に縛られ、蚊とアリに責められるのが辛かった。側を通るオバサンたちは「まだまだ。」と解いてくれなかったが頃合いを見計かって解いてくれた。オバサンも母にわびを入れ、家に入れてもらえた。

燃料は薪と炭で、ガスはなかった。薪に火を移すのは枯れた松葉で「ゴ」と呼んでいた。「松葉拾い」「ゴ掻き（ごかき)」も男坊主の仕事で、遊び場の山で集めていた。沢山集めても軽いので運ぶ苦労はなかった。オバサンに「イボ蛙を捕まえて。」と頼まれバケツの底が見えないほど捕まえて渡した。夕飯を食べていると外で悲鳴がして、同時にオバサンが裸足で飛び込んできて母の後ろに隠れた。同時にオジサンが青い顔をし、息切れでハアハアしながら裸足で包丁を振りかざして飛び込んできて「殺してやる。」と叫んだ。母は「四郎、コップに水を。」とオジサンに飲ませ「ゆっくりと殺す理由を言いなさい。私も納得したら殺させてやる。」と応じた。肺病ではないがオジサンは長い間静養している。オバサンは「イボ蛙が良い。」と聞いて飲ませたのだ。オジサンは「いつもの薬と違う味だから蓋（ふた）を取ったら、イボ蛙が白い腹を見せ、土瓶の中でひしめき合っていた。」と怒っていた。

共同井戸に一番近い家のお父さんは肺病で寝ていて、お母さんと私より年上の女の子との 3 人暮らしだった。母が時々「卵を 5 コお見舞いに。」と私に持たせた。玄関を開けると結核の甘酸っぱい匂いがして、私はそれを吸うと伝染すると思っていた。

夕方この家に知らない和服を着た男が入った。少しして近所の人たちが集まってきた。私たち子どもが「敵」と呼ぶオジサンも来た。いつも私たちに威張って「サーカスに売るぞ。」と怒鳴るので「敵」と呼ぶようになったのだ。冬になると「敵」は私を「坊ちゃま」と呼んだ。冬になると私は兄たちのお下がりの「ラシャ（＝毛織物の一種)」の学生服を着ていた。首筋や背中がチタチクするので「俺も小倉木綿の服が着たい。」と言うと「お父さんがいないから･･･。」の一言で諦めさせられた。「敵」はラシャの学生服姿の私を「坊ちゃま。」と呼んでからかっていたのだろう。

肺病の家から泣き声が漏れてきた。母は私の手を握り「敵」の隣へ移動し「四郎。もうすぐ出てくるから、町内で 1 番の親孝行の娘さんの顔をよく見ておきなさい。」と言った。突然泣き声が大きくなった。「敵」が「今、お金を受け取った。」と皆に聞こえるように言った。男と娘が出てきて手をつないで遠ざかっていった。私は「敵」が男をやっつけると思っていたが、何もしなかった。母が私の背中を小突くので振り向くと、娘の後ろ姿に合掌していたので私も真似をして手を合わせた。「敵」に失望した私は「敵」の自転車の空気入れの心臓部「ムシ」を取り外す報復に努めた。

級長

小学 6 年生までは義務制だが、その上に高等小学校が 2 年制であった。高等小学校は義務教育ではないため授業料が徴収された。6 年生で旧制中学校や高等女学校を受験する者が 10 人程度、高等科へ進学しない者が 10 人くらいで、残りが高等科へ進み、高等科で再度受験する者もいた。

級長は、小学 4 年生から高等科卒業まで「中尾」。副級長は入れ代わっていた。中尾は桶屋（おけや）の一人息子で、走れば早い、習字も絵も上手、歌はうまいし工作も器用。学業も全科目 1 番。私とは別の悪ガキ集団のリーダーもしていた。先生が中尾の父親に師範学校を受験するように勧めたとき「桶屋の息子は桶屋が一番。桶屋に学士様はいらん。」と言ったそうだ。桶屋は戸を開け放った土間が作業場で、新品よりも修理の方が多いようで、私たちは学校の帰りにかがみ込んで見学し道草した。中尾のお父さんは仕事をしながら、よく話しかけてきた。「士官学校には志願するな。士官学校にいくと人を殺せと命令するいばった人にされる。嫌でも丈夫な体なら兵隊にされる。」と話していた。

その中尾の父親が、ある日、わらで作った肩までの深編笠（ふかあみがさ）をかぶせられて警察に連行され、中尾も学校を休んだので私たちの組は動揺した。どうして捕えられたのかだれも教えてくれなかった。1 週間ほどで帰ってきて仕事も再開した。母やご近所の大人たちはヒソヒソ話で「コワイ、コワイ。」と話し合っていた。子供は何がコワイか分からなかった。中尾のお父さんは話しかけても下を向いたまま返事もせず、黙って仕事を一生懸命するだけになった。



桶屋



深編笠の罪人

当時の墓は土葬。腐った棺（ひつぎ）の上を歩くと腰まで埋まることがある。中尾が墓場で斜めに切った竹が足に刺さって化膿（かのう）して少し足が不自由になった。中尾のお父さんが「俺の息子は親孝行だ。兵隊にいかなくてもよい体になった。」と喜んだ。父を知らぬ私は、勉強ができ、足が不自由になっても親を喜ばせる中尾がうらやましかった。

遊び

4 年生か 5 年生の時「ゴン」と呼ばれる朝鮮半島の子が転校してきた。習字が抜群に上手でクラス一番になった。両親は鉄屑（てつくず）を買ったり拾ったりする仕事だ。お母さんは日本語が苦手で、ゴンが通訳をした。古い自転車の輪を保持する鋼鉄の針金をもらって、杉のつぼみを弾にした「杉の実鉄砲」を雌竹で作り遊んだ。小学生の男子は刃渡り 5〜10 ㎝ほどの「菊一文字（きくいちもんじ）」「肥後守（ひごのかみ）」という銘柄のナイフを持ち、冬は Y の字の形をした小枝とゴム管と少しの牛革でパチンコを作り、大豆の大きさの小石を弾にして山で鴨（ヒヨドリ）など狙った。Y 形小枝は楓（かえで）が最高級。牛革は靴屋で切れ端をもらい、ゴム管だけは買った。株屋の同級生は五寸釘を大量に買い、ゴンの家の鉄床と鏨（たがね）で釘の頭を切り落して弾を作り、本体はゴンの父にプレゼントしていた。夏は「モチ」の木の皮を削ぎ取り、わき水で洗いながら静かに叩くと純粋な「トリモチ」だけが残り、トンボ捕りに使った。

ヒヨドリは駅前の鳥屋に 1 羽 15 銭（当時の 1 銭は現在の 40 円）で売った。映画は 5 銭。私は「大森林」というカラー映画を見た記憶がある。森の中の大きな湖に飛行艇が着水する映画で、森と湖の真っ青さは今でも覚えている。夏は川でフナやドジョウを捕え、秋は墓石を足場に木に登ってアケビを取った。冬の小寒（しょうかん＝1/5~6）、大寒（だいかん＝1/25 頃）には「寒詣で」（かんもうで）といって、夜、各商店がそろって稲荷大明神を巡り、油揚げ、稲荷ずし、かりん糖を供え回る情報を昼間キャッチし、尾行してかりん糖を失敬。翌日、学校へ持参し戦果を報告するのが楽しみだった。



ヒヨドリ



アケビ



かりん糖



明治～昭和初期の硬貨

墓守（はかもり）の子

D は「墓守（はかもり）」の子だった。墓守とは、深い墓穴を掘る仕事をする人のことだ。近所のおばさんたちは、自分の子を D と遊ばせたくなかったので、子どもたちの親分だった私に「D とは遊ぶな。体が汚れるから。」と注意した。その頃、私は「お医者」「お坊様」「墓守」は死ねば困るので死なない人たちだと信じていた。「D と遊ぶと、なぜ体が汚れるの。」と母に尋ねると、母は「あの子は、お前よりも洗濯した、さっぱりした服を着せてもらっている。」と言い「一番きれいな子だ。おばさんたちの言うことなんか放っておきなさい。」と答えた。

歌

6 歳の時、満州で戦争が始まった。子ども心にも兵隊さんが一番偉いと思うような世町中になっていった。

♪ 義勇奉公四っの文字 ／ 胸に刻みて鞭を上ぐ ／益荒男ナカムラシンタロウ
行くては達し興安嶺

の歌を歌った。7 歳の時、今度は上海で戦争を始め、「爆弾三勇士」（※）

♪ 廟行鎮の敵の陣 ／ われの友隊すでに攻む ／ 折から凍る如月の ／ 22 日の午前 5 時
我らが上に戴くは ／ 天皇陛下の大みいつ ／ 後ろに負うは国民の ／ 意志に代る重き任

の歌を行列して高らかに歌い、出征兵士を駅まで見送る数も増え、兵隊に行った家の表札の横に、長さ 15 ㎝、幅 4 ㎝、厚さ 2 ㎝ほどの「出征兵士の家」の板を市役所が取り付け、戦死すると「軍国の家」に取り換え前を通る時は神社と同じ「礼」が命じられ、毎週月曜日の「教育勅語」教育の身近かな模範教材に取り上げらた。映画館のニュース映画は日本軍が攻め、支那軍が逃げ、城壁にひしめき合った日本軍の万歳場面を上映していた。

歌はラジオとレコードだが蓄音器を持つ家庭はなく、ラジオで戦争賛美を流し、国民を洗脳、マインドコントロールした。子ども向けは、

♪ 父よあなたは強かった ／ 兜も焦がす炎熱を ／ 敵の屍（かばね）と共に寝て
泥水すすり草を食い ／ 荒れた山野を幾千里 ／ よくこそ勝ってくださった



肉弾三勇士の像

（※）爆弾三勇士（ばくだんさんゆうし）:
独立工兵第 18 大隊（久留米）の江下武二（えした たけじ）、北川丞（きたがわ すすむ）、作江伊之助（さくえ いのすけ）の 3 名の一等兵。1932 年に第一次上海事変で敵陣を突破して自爆し、突撃路を開いた英雄とされる。肉弾三勇士とも言われた。

奥様向けは、

♪　東洋平和のためならば　／　なんで泣きましょう国のため
　散ったあなたの形見の坊や　／　きっと立派に育てます　♪

母親向けは、

♪　心おきなく国のため　／　名誉の戦死頼むぞと　／　涙も見せず励まして
　我が子を送る朝の駅　／　散れよ若木の桜花　／　男と産まれ戦場に
　銃剣執るも大君のため　／　日本男子の本懐ぞ　／　生きて帰ると思うなよ
　白木の箱が届いたら　／　でかした我が子天晴（あっぱ）れと　／　お前を母は誉めてやる

男は、天皇陛下のために名誉の戦死をするので、このような歌や軍歌で　「武運長久」と寄せ書きした日の丸をたすき掛けし「祝入営　〇〇君」の幟（のぼり）旗をなびかせ、太鼓にラッパ。金持ちの地区は花火も上げた。騒がしく駅まで出征兵士を見送ったが、沈黙のお迎えが出始めた。

前もって厳しく「私語は厳禁。沈黙を守れ。」と言われ駅前に。大人の女性は全員純白のエプロンに幅 20 ㎝ほどの白タスキに「大日本国防婦人会」と黒く染め抜いた服装で、「タスキ」のない女性は仲間外れにされた。汽車が到着し、しばらくすると、駅長に先導された将校が白布に包まれた遺骨箱を胸に広場に現れ、沈黙のまま未亡人に渡され、未亡人は一礼後、我が家に向かって静かに一歩を踏み出し、夫の通勤した道を奥さんの胸に抱かれて家へ。沈黙の行列から嗚咽（おえつ）が漏れると、軍服姿の「敵」が「靖国に祀られた護国の英霊だ。泣くな。」と叱咤（しった）して回った。新聞、ラジオは「無言の凱旋（がいせん）」と美化、泣かない妻を「軍国の妻」のけなげさと絶賛。月曜日「教育勅語教育」で天皇陛下の御為（おんため）と教わった。「無言の凱旋」が増えると「沈黙」から「海ゆかば」を演奏付きで歌うようになり、忠君愛国の鏡と称えた。

♪　海ゆかば　／　水濃く屍　／　山ゆかば　／　草むす屍　／　大君の辺にこそ死なめ
　かえりみはせじ



出征兵士の見送り



タスキをした婦人会

母が「四郎、お目様が沈むまで帰ってくるな。」と私を外に出し、ラジオの音量を上げ「私の家で思い切り泣きなさい。」とお迎えに行った。昼だというのに雨戸を閉め、押入に隠れ、外に漏れないように泣いた人もいたと聞かされていた。戦争で死ぬことは現人神（あらひとがみ)、天皇陛下を神といただく日本人の模範であり名誉のことなので、胸を張り誇り、泣くことは天皇陛下への不忠義と烙印を押されるのだった。

イギリスで戴冠式があり朝日新聞社が単発「神風号」をイイヅカ、ツカゴシの操縦士、機関士で給油を受けながらロンドンへお祝い飛行を成功させ、国威発揚と国民を興奮させ、負けじと毎日新聞社が、1年遅れで双発「ニッポン号」で世界一周を宣言。

♪　国を埋めた日の丸の　／　歓呼の中に羽ばたいて　　我がニッポンは真っしぐら
6万キロの空を飛ぶ　／　遠く祖国を幾千里　／　異郷に暮らす同胞も
我がニッポンを仰ぎ見て　／　君が代高く歌うのだ


神風に輝く世界新記録
今暁・零時三十分（日本時刻）
遂にロンドンに安着
鵬程一萬五千三百キロ
わが國最初の榮冠獲得
ローマ、パリを通過
朝日新聞

神風号の報道

何故か飛び立つ前に日本中にこの歌を流行らせて見事成功させ、少年の心を大空へ。更に「航研機」なる飛行機が無着陸記録を出すと富士山上空を旋回飛行。空を御する者が世界を制すると、月刊「少年クラブ」の付録も飛行機の組み立てと「官民」して少年たちを「少年航空兵」へ見事誘導した。



少年倶楽部

空ばかり見上げていたら突然、西住戦車隊長が「軍神」と大報道。愛読書「少年クラブ」に「来たれ！少年戦車兵」の大文字。スズキギョスイ。カバシマカツイチの戦争挿絵も少年たちを興奮させ、「少年航空兵」「少年戦車兵」「満蒙開拓青少年義勇軍」。女子は「従軍看護婦」と少年少女を官民して戦争へ吸い寄せていった。



少年飛行兵と少年戦車兵の募集

青年時代～徴兵

下宿生活

私は 1941 年（昭和 16 年）から 1944 年（昭和 19 年）7 月まで東京で下宿生活を送っていた。品川区五反田大崎警察署裏門に通じる道が私の生活した下宿屋の裏口で、下宿は 2 階の 6 畳と 8 畳を区切る唐紙（からかみ）を取り払った部屋に、徴兵適齢前（満 20 歳に達する前）の男ばかり 4～5 人が、徴兵検査を受けたが軍隊に入れない体の弱い 22 歳の M を暗黙の部屋頭として共同生活をしていた。時代は太平洋戦争の真っただ中、男は国民服、女はモンペの時代なのに M はいつも和服の着流しで、定職もなく千葉県の実家からの仕送りで生活していた。年下の私たちは何となく彼を尊敬していた。

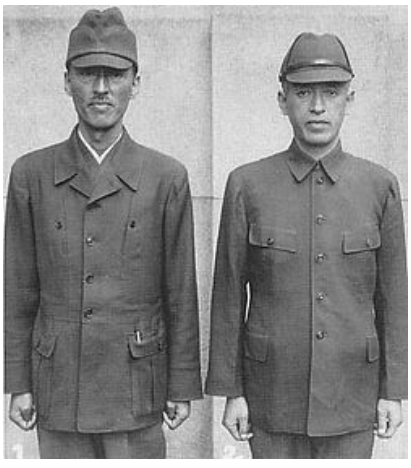
入浴は銭湯、食事はすべて外食。朝食抜きの習慣で昼まで持ちこたえていた。米は切符制。米と交換する食券（家庭用米穀通帳）を 1 ヵ月分すべて食堂に前渡しして、1 日 2 食しか食べないので食堂の主人はよくしてくれた。下宿は私の入居前から大崎警察署のお巡りさんの隠れ昼寝揚所にも提供されていた。私たちは近所の人にも大崎警察署のおまわりさんにも名前でなく「岡田のあんちゃん」と呼ばれた。



唐紙



もんぺ



国民服

召集令状

1943 年（昭和 18 年）この M に召集令状（赤紙）が来た。クリスマスの日、私たちは山手線五反田駅で「万歳、万歳。」と隣組の人たちと見送ったが年が明けて M が帰ってきた。なんでも入隊した日に殴られて気絶して陸軍病院に入院し、2 週間目に除隊させられたというのだ。家主は「今まで通り仲良く。」と私たちに伝えたが、町内の理髪店や隣のクリーニング屋は「M は特高（特別高等警察＝思想、政治活動の取締りが目的、憲兵と共に国民には恐怖の存在）だ。」とうわさしていた。M は「田舎では、この非常時に天皇陛下のお役にも立てないと非国民呼ばわりされるので、ここで隠遁（いんとん）している。」と話していた。私たちは M に「年末から年始 2 週間でなく 12 月から 1 月まで足掛け 2 年も軍隊にいたのだからもっといばってください。」と励ました。



家庭用米穀通帳



召集令状（※）

※「召集令状」: 赤い紙を使用したのでアカガミと呼ばれ、これが届くことを恐れた

20 歳前の男が 4～5 人もいれば、銀座派（軟派）もいるし浅草派（硬派）もいる。日曜日に銀座派が日劇ダンシングチームを見にいくと、開場前に並んでいた全員が憲兵に皇居前広場まで連行され、皇居広場の草抜きを 1 日中させられたと怒って帰ってきたことがあった。浅草派が粗悪紙のプログラムを手に「〇〇館でパンチのある歌い方をする笠置シズ子がすごい。」と絶賛するので連れだっていったら歌はナシで終わってしまい文句タラタラして帰った。翌朝、M が新聞を見せて説明してくれた。「彼女の歌い方は敵性国家（アメリカ）的な歌い方なので官憲に逮捕され今後歌うなと命令された。」ということだった。国は「非常時、非常時。」と国民をあおり、1 日に食べる米の量も決め、娯楽まで剥奪（はくだつ）していた。自由のない恐ろしい時代だった。



兵隊を見送る人々



特別高等警察による検閲の様子



笠置シズ子

中野正剛

私は中野正剛（1886～1943）（なかのせいごう。大正・昭和期のジャーナリスト、政治家。東条内閣の転覆を企てが発覚し逮捕された。釈放後、自宅にて割腹自殺したが現在まで理由は不明。）に心酔していて、彼の追っかけをしていた。電柱や板塀に B4 紙の「中野正剛大演説会」の知らせが張られると聞きにいった。会場は目黒区、港区、品川区の公会堂が、私が徒歩や自転車で聞きにいける範囲で、私たちは M を中心に 10 代で天下国家を論じ合った。富国強兵を旗印にし、これから親孝行の働き盛りを戦場に送り戦死させ、銃後（じゅうご＝戦場の後方、戦闘に参加していない一般国民）は人不足と物資不足。特に食べ物不足で雑草を食べる戦争の不思議などを論じ合った。



中野正剛

弁士（べんし＝講演をする人）は壇上の中央、左右どちらかの隅にサーベルをつけた巡査が 1 人腰掛け、弁士の話す内容をチェックし、駄目なら「注意。」と大声を発し、言論の自由は完全に剥奪されていた。「注意」で弁士は話す内容を変えねばならず、「注意」3 回で講演ができなくなる法規制であった。弁士と警察官との「注意」発言のやりとりは聴衆に人気があった。戦争批判や戦争反対などの内容は「におわせただけ」で投獄、拷問死させられる時代だった。出征兵士や戦死者の遺骨送迎に出ないだけで「非国民」「天皇陛下への不忠義者」のレッテルを張られ、物資配給や情報伝達を制限されるなどの仕打ちを受けて地域社会から排斥された。

明治から戦争をしている日本は、戦争で死ぬことが天皇陛下への最高の忠君愛国で一家の誉（ほまれ）であり、戦死した家族が人前で泣こうものなら天皇陛下への不忠義者と地域でつるされ、人前で泣くことも許されない天皇中心の軍国主義の国であった。中野正剛は私たち若者に「死ぬな。」と言えないので「天皇陛下の御為（おんため）に名誉の手柄を立てるのが最高の親孝行だ。手柄話を両親に話すために、絶対生きて帰ってこい。」と「絶対」を力強く話すのであった。この日は既に「注意」を 2 回受け、3 回目の「注意」で話を締めくくるぞと期待して聞いていると「赤子である諸君は、快眠、快食、快便し、天皇陛下からいただいた質実剛健の身体で天皇陛下にご奉公すべきである。天皇陛下も皇后陛下も快眠、快食、快便で諸君と同じである。天皇は現人神（あらひとがみ）、生きながらの神でなく諸君と同じ、飯も食べるし糞（くそ）もする普通の人間だ。」と言い放った。これはもう立派な不敬罪。警官は「注意。」でなく「逮捕。」と叫び立ち上がったとき、中野正剛は壇上から飛び降り正面の扉へと逃走。聴衆は左右に分かれて逃走通路を開け、後を追う警官を妨害した。

人糞を鉄板で焼く

この時の模様を部屋で話したら、1人が「天皇陛下のウンチはどうするのだろう」。続いて「おそれおおいから人の日に触れないように地中に埋める。」「水洗で流し品川沖で魚のえさになり、江戸前ずしのネタになって帰ってくる。」「いや天皇陛下の分身であるウンチを食べた魚を国民が食べるのはおそれおおいから魚介類にも食べられないように薬品で焼却する。」「ウンチを焼くと、どんなにおいがするのだろう。」「論より証拠、焼いてみよう。」と話し合った。かくして岡田のあんちゃんたちは正常な人なら考えもしないウンチ焼きを大崎警察署裏門で始めた。どの家もトイレはくみ取り式。くみ取り口は裏木戸側。この裏道に七輪コンロを持ち出し、炭火をガンガン起こして鉄板が赤くなるほど焼いた。円陣の中央のコンロを囲み、ウンチ焼きの準備が整ったのである。



裏木戸（イメージ）



七輪コンロ

だれかが「そろそろ乗せてみるか。」と言い、くみ取りにいった者がひしゃく山盛りにして持ってきた。「鉄板が小さいから半分乗せろ。」乗せた瞬間、バチバチという音と共に真っ白い湯気が上がり、熱で跳ね返り飛び散る熱いウンチ。強烈な臭気。これらが一気に頭の先から足の先まで全身に飛びかかり、あっという間に周囲に広がった。「アチチ。」と飛び上がり一瞬、全員の脳裏に床屋がひらめいた。床屋に飛び込み無言で我先に洗面台を占領した。ほっとする間もなく床屋の親父や客が「くさい。くさい。」と騒ぎ出し「とんでもないヤツだ。」と放り出される。悪臭は警察署にも届いた。近所のおばさんは「岡田のあんちゃん、出ておいで。」と叫び、警官も「岡田の小僧、出てこい。」と探していた。付近は悪臭プンプン、炭火はまだあり、うんちは大方焼けて炭化。それを囲み、鼻を押さえながら、おばさんたち、隣のクリーニング屋、床屋一家にお客ややじ馬も混じる中で私たちは必死に弁明した。気の早いおばさんたちは「失礼な。天皇陛下様がおかわいそうに。」と非難を始め罪状を探している。やじ馬たちは「神聖な天皇陛下を侵したから逮捕は間違いない。」とか「徒党を組んで天皇様をばかにした行為は重罪だ。」と勝手に人民裁判を始め、私たちの罪をだんだん重くしていく中でお巡りさんの事情聴取が始まった。

警察署の裏だからおまわりのやじ馬も数人いる。経過説明の途中、昼寝によく来る私服のおまわりさんはクスッと笑って全部を聞かず「これからは、おそれおおいから天皇陛下のお名前は出さないように。」との厳重注意で勘弁され、居合わせた者たちには「忘れるように。」と言い渡した。しかしこの「天皇陛下とウンチ焼却事件」は、当時の娯楽もなく抑圧された生活に「一服の清涼剤」となって広まり、町内の人たちはもちろん、それまで面識のない人たちまでが銭湯や飯屋で鼻をつまむしぐさをして「あんちゃんたち、やったんだってね。」と絶賛してくれた。

関東軍時代

時代背景

江戸幕府から天皇政治への移行を国民に分かりやすい教材でと、薩長政府は後醍醐天皇を引用して「維新」と称し、「列強入り（＝目的)」「富国強兵（＝国益)」へ向け国民をマインドコントロール。「国家神道」を用い「皇国民教育」を確立。神社を格付け、お伊勢さんを超一級と指定し、天皇を神にして拝ませ、従わぬ者には不敬罪罰を適用。「日本教＝天皇崇拝」であり、天皇は大元帥で軍隊の最高位司令長官。さらに神官、神主の最高位に位置付けられ、政治の根幹、三権をたばねる頂点に君臨した。大日本帝国首都の東京を「帝都」とし、20 年毎に「神道再確認行催＝式年遷宮」を実施。伊勢は「神都」、広島は軍国主義日本の「軍都」。「天皇、日の丸、君が代、教育勅語、靖国神社」の 5 点セットにプラスして「民族差別」を実施。「日出る国の優秀な大和民族」が「大東亜共栄圏」を建設、つまり「天皇陛下のおそれ多い大御心を、アジアの隅々にまて行き渡らせる」という「皇民化政策」により「帝国主義路線」をひた走り、国民総催眠術化に成功。天皇の軍隊「皇軍」の戦いは「聖戦」。侵略地の一神教徒に対しては「君が代斉唱、日の丸掲揚」と「宮城遥拝」を義務化。「八百万神（やおよろずのかみ)」を強制し、従わぬと「見せしめ刑」に処した。アジアの隅々から「リーベン・クイズ＝日本鬼子」と恐怖させた史実を国民に隠蔽し教えなかった歴史教育が今に至り、近隣国との摩擦は依然として解消されていない。

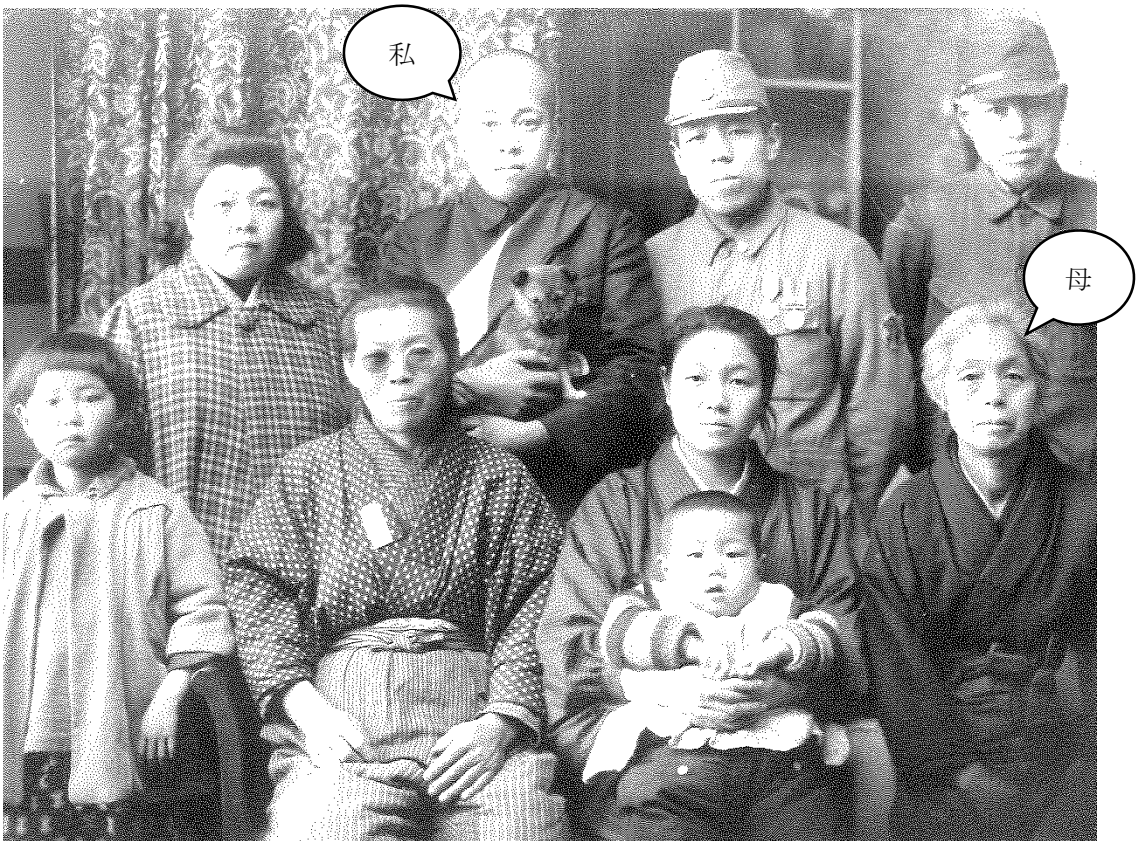
氏子

今では考えられないが、当時、日本では何の手続もしないのに生まれた赤ん坊は「赤子（せきし)」（天皇の子）とされた。生まれた土地の「氏神様」の「氏子」に自動的に奉納され、他県に引っ越しても転居先の「氏子」にされるという仕組みであった。

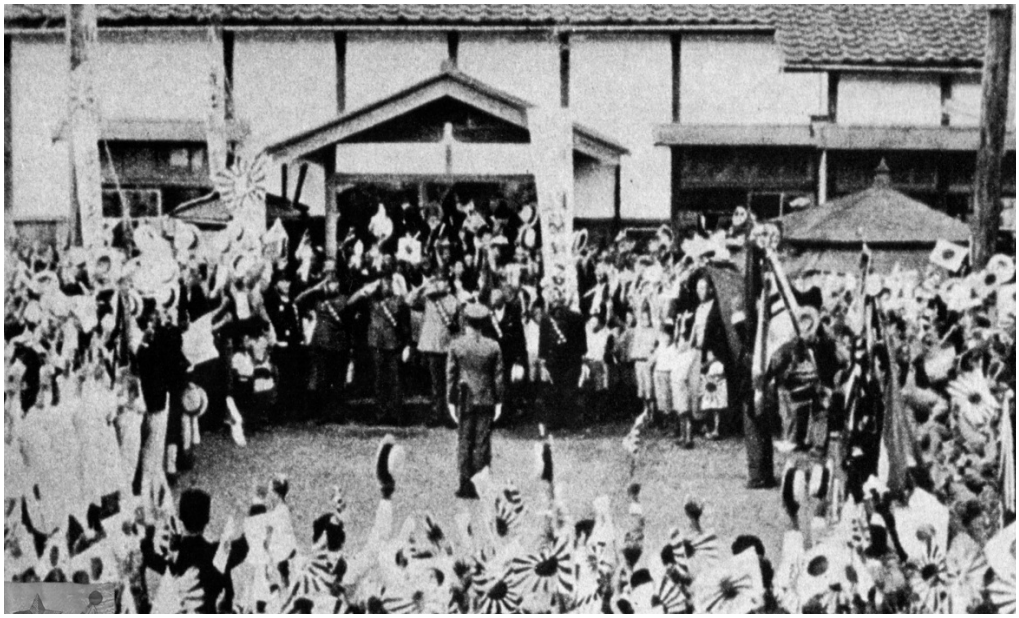
天皇に忠誠を尽くす軍隊に入るときは「氏子」たちと「氏神様」に集まり「武運長久」（＝武人としての命運が長く続くこと）を祈願した。村の長老たちからはうんざりするほど「天皇陛下の御ために励め。」と聞かされ「氏子」である住民や学生たちが後に続いて軍歌を歌う行列で駅まで見送った。

駅で私は「橘詰四郎、天皇陛下の御ために、粉骨砕身（ふんこつさいしん）（※)、滅私奉公（めっしほうこう）（※)、尽忠報国（じんちゅうほうこく）（※)、靖国神社に会いにきて下さい。」とあいさつ。見送り者が一斉に「橘詰四郎君、万歳」と唱和。親も住民の前で我が子に「立派に死ね。」と言う。これが全国津々浦々で行われた出征兵士壮行セレモニーであった。町村民が総出の大騒ぎであり、これに参加しなかった者は「天皇へ不忠義」のレッテルを張られて差別的扱いを受けた。

※「粉骨砕身」: 力の限り努力すること。
※「滅私奉公」: 私利私欲を捨てて、主人や公のために忠誠を尽くすこと。
※「尽忠報国」: 忠節を尽くし、国から受けた恩に報いること。



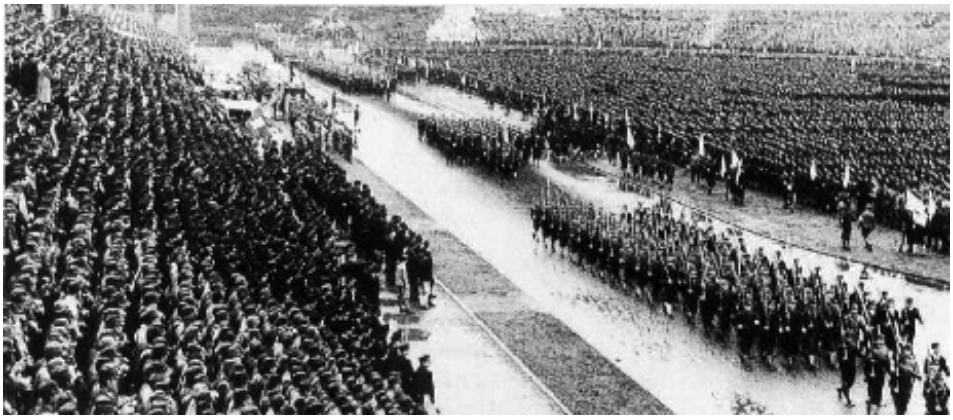
家族と撮った写真



出征兵士壮行の様子

最後の皇軍

私は 1925 年（大正 14 年）生まれ。19 歳で徴兵検査を受けた 19 年徴集兵だった。当時、日本男子は 20 歳に達すると兵役の義務があったが、戦争の敗色が濃厚になると、大学、高等学校、専門学校の学生への徴兵猶予の恩典が廃止され、1943 年（昭和 18 年）に学徒出陣、更にその年の 12 月、徴兵年齢が 1 年引き下げられ、私もその年に該当することとなった。この背景には、戦争で国内の成人男子を使い果たしてしまったという事情があった。私は天皇の命令による徴兵年齢「最年少」の経歴の持ち主である。だから私の年代が死に絶えると天皇の命令による義務兵は皆無となる。現在、私が属している「戦友会」も 19 年徴収兵が仕切っていて、我々が絶滅した時点で戦友会は「自然消滅」となるわけだ。私は「最後の皇軍」（天皇陛下の軍）の兵士であった。



学徒出陣

私は旧満州（現在の中国東北部）の北満第六国境守備隊歩兵だった。歩兵は小銃と手榴弾（しゅりゅうだん）で相手を殺すための訓練と、爆弾を抱いて戦車に体当たりする「人間爆弾」の訓練を受けた。私は世界一の自爆殺人訓練を受けた 1 人だったと思っている。国境守備隊はソ連軍から陣地を 3 時間だけ死守する捨て石部隊。この 3 時間が南満部隊の戦闘準備時間だった。軍隊は階級を示す星の数と、1 日でも早く軍隊の飯を食べた者に服従することが鉄則だった。これは「上官の命令は朕の命令と思え。」という天皇の命令に基づいていた。日本国最後の兵であった私は、たまったものではなかった。制空権も制海権もなく、日本からの補充兵も途絶えて後輩が来ないため、戦争が終わるまでずっと「初年兵」扱いを受けた。これが私の所属した「軍隊」だった。

「万歳、万歳。」と勇ましく歌ってもらって華やかに入隊したが、日本を離れるときは国民にも内緒で気付かれないように深夜、広島駅に向かった。駅に続く両側の家は真夜中なのに起きて電灯をつけ、家々は日の丸の旗を掲げ、街路樹や電柱の陰に隠れるようにして私たちに向かって無言で合掌しおがんでくれていた。この姿を見た途端「生きて帰る。」という決意は崩れ「よし、このおがんでくれる広島の人たちのために喜んで死のう。」と決心し死ぬ覚悟をした。

渡満

博多で乗船し、しばらくすると「玄界灘だぞ。」と言われ、油くさい船底で寝ていると大きな揺れを感じた。船酔いする者が急速に増え、吐いたゲロと油臭が混ざり異臭が充満した。「船に酔わない者は、甲板へ集合。」と言われ、潮の香りを深呼吸で満喫した。「敵の潜水艦の潜望鏡探し」と「弁当配り」に別れ、菅井と「刺青」（いれずみ＝ニックネーム）と私の 3 人はチームを組んで弁当配りを担当。船の狭く急勾配（こうばい）のはしごを、弁当を持って繰り返し上り下りした。曹長殿が「3 人組、がんばるのう。」と声をかけてくれた。釜山（プサン）で下船、鉄道に乗換え朝鮮半島を抜けて満州へ向かった。



玄界灘



釜山港

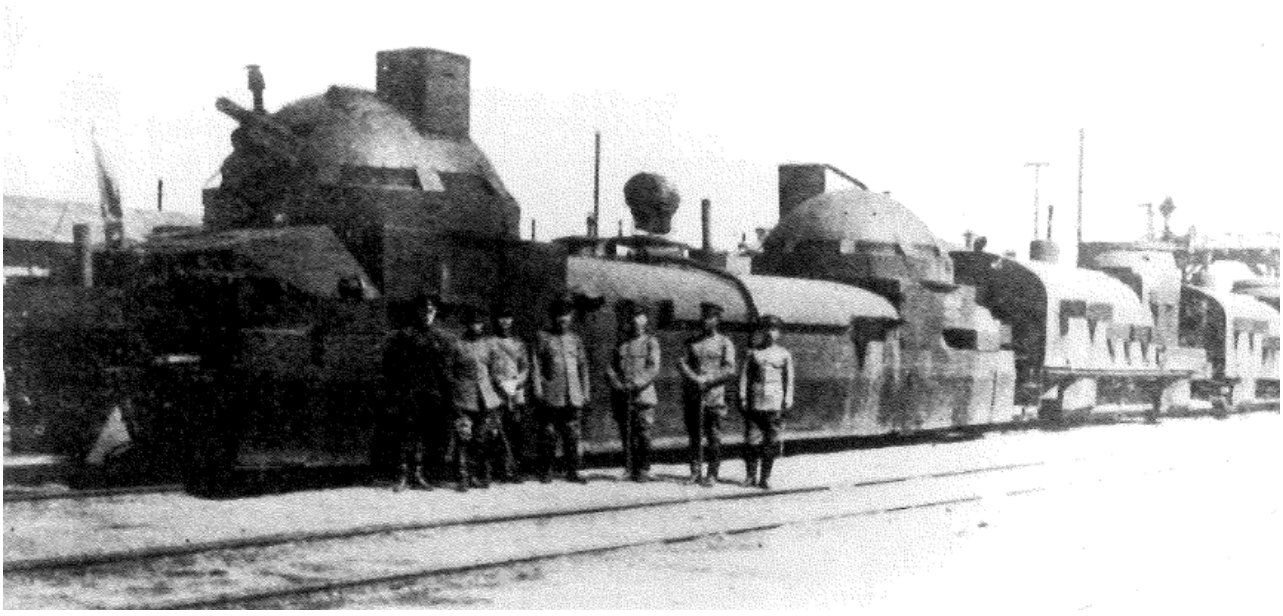
斉斉哈爾（チチハル）で最後尾に三方向に銃座を備えたトーチカ車が連結されて更に北上。北安（ペイアン）で機関車の前にもトーチカ車が連結され「敵地に侵入するようだ。」と興奮した。「王道楽土、五族協和（※）はうそか。」といぶかっていると、満蒙（まんもう）開拓青少年義勇軍出身兵が「北満も奥にいくほどオロチョン（※）以外は反日、抗日だ。」と教えてくれた。「みんな仲良し平和な満州国。」はうそだと分かり覚悟の一つに加えた。

※「五族協和」：満州国を建国の理念で、五族は日本人・漢人・朝鮮人・満洲人・蒙古人。
※「王道楽土」：アジア的理想国家（楽土）を、東洋の徳による統治（王道）でつくる。
※「オロチョン」：北東アジアの興安嶺山脈周辺に住む少数民族)。





チチハルの街並み



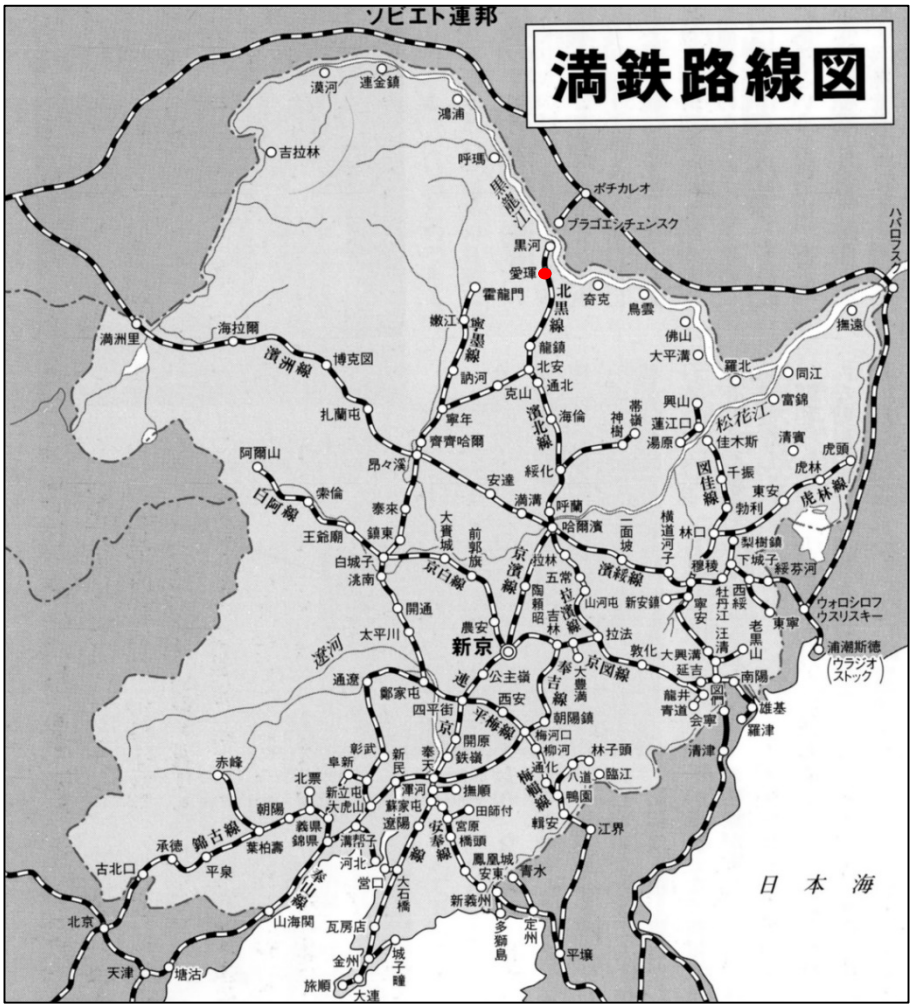
トーチカ車

朝水陣地

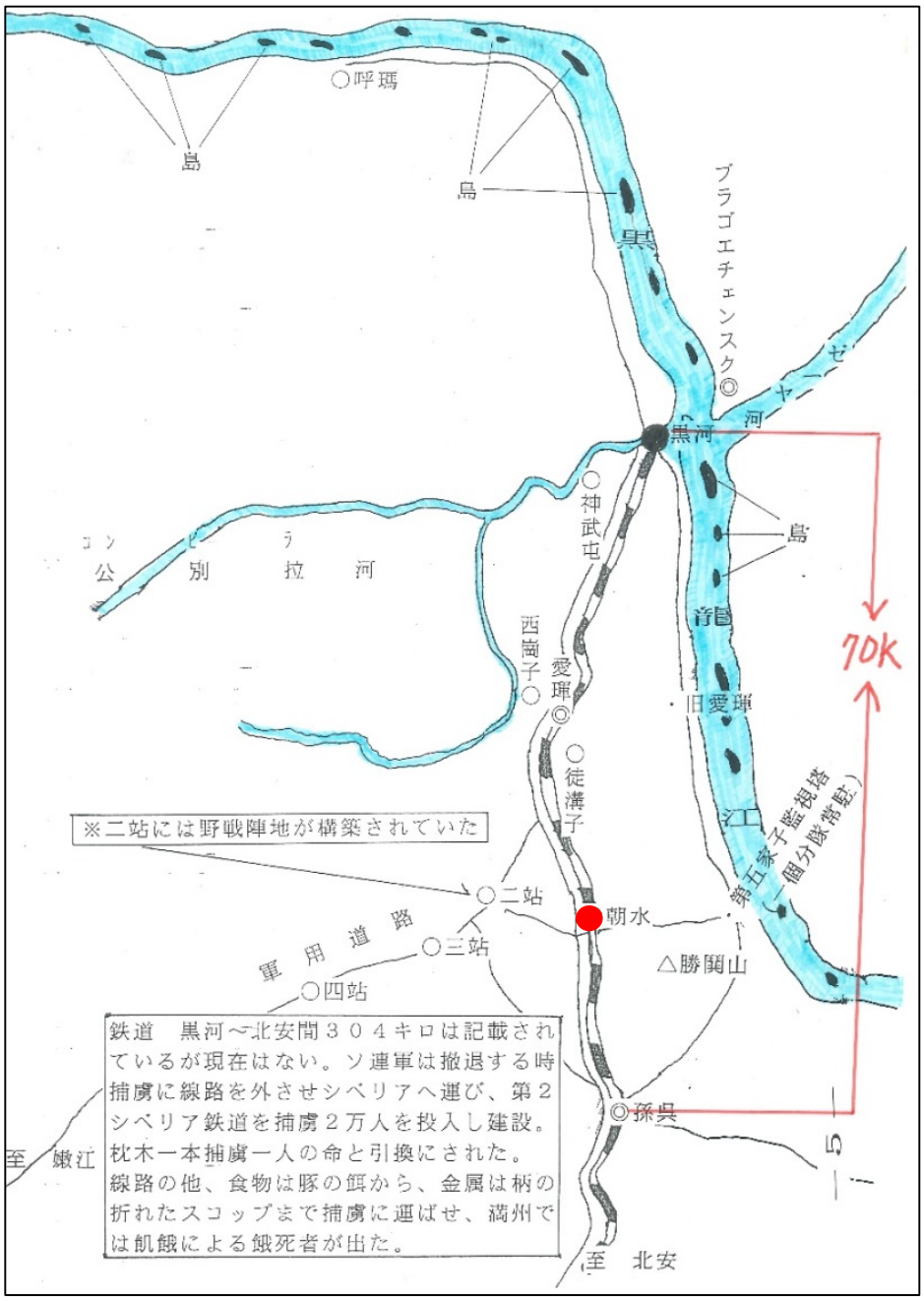
私も含め 150 名ほどが朝水（ちょうすい）で下車。他の者は 1 区先の璦琿（あいごん、あいこん）へ。駅周辺には小屋のような家が 5～6 戸ほどしかない寒村風景が広がっていた。ここには満蒙開拓青少年義勇軍の「朝水訓練所」があり、義勇軍の「不届き者」のための刑務所のような場所だと教えてもらった。線路に沿って立つ電柱に描かれた「→」矢印マークは、この場所から近い駅の方向を示していて、襲撃されたときに逃げるための目印だと教わった。電線や電話線がやけに太いことに驚いたが、実は氷雪が付着していただけで、春先にそれが解けると普通の電線と同じ太さであった。



朝水駅



満州路線図（1939 年）


○呼瑪
島
島
ブラゴエチェンスク◎
黒河
ゼヤー河
○神武屯
島
コンビ
公別拉河
西崗子
愛琿◎
旧愛琿
70K
○徒溝子
※二站には野戦陣地が構築されていた
○二站
朝水
軍用道路
○三站
○四站
△勝関山
第五家子監視塔（一個分隊常駐）
江口
◎孫呉
至 嫩江
至 北安
鉄道 黒河～北安間３０４キロは記載されているが現在はない。ソ連軍は撤退する時捕虜に線路を外させシベリアへ運び、第２シベリア鉄道を捕虜２万人を投入し建設。枕木一本捕虜一人の命と引換にされた。線路の他、食物は豚の餌から、金属は柄の折れたスコップまで捕虜に運ばせ、満州では飢餓による餓死者が出た。

朝水





朝水の風景（現在）

徒歩で関東軍第六国境守備隊朝水野外兵舎へ。歩兵 9 中隊、歩兵 10 中隊、砲兵 4 中隊に振り分けられ菅井と私は歩兵 10 中隊擲弾筒（てきだんとう）班。「刺青」（いれずみ）は 10 中隊歩兵砲班。歩兵は他に小銃、軽機関銃、重機関銃の 5 種で編成され、この 3 中隊で眼下の黒竜江で分かつソ満国境警備にあたる。「玉砕してでも 3 時間、陣地を死守することが天皇陛下の至上命令である。」ときつく教えられた。内務班に案内され開口一番「大本営にもなめられたものだ。六国に子供をよこしやがって。」と怒鳴られた。男は 20 歳の徴兵検査に合格して一人前と認められた時代である。私は自分も含め全員が 19 歳だと思い込んでいたが、3 ヶ月後に未成年は私だけだと知った。



擲弾筒（てきだんとう）



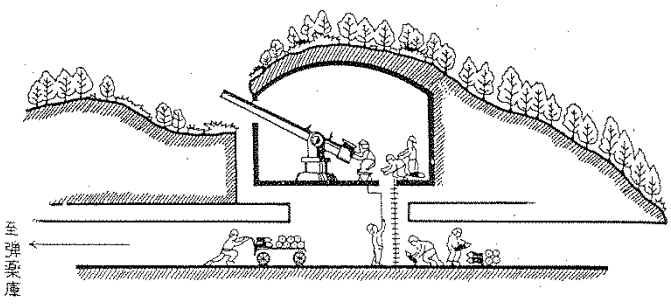
重機関銃



氷結した黒竜江上の国境警備



歩兵



砲兵と要塞（ようさい）砲

入浴事件

長旅をねぎらわれて「今日一日、諸君は客人です。何をしても言っても怒りません。旅の疲れと垢（あか）を洗い流しなさい。」と言われ、太陽が真上に輝く昼に入浴することになった。大浴場はサトイモを洗う以上の満員。菅井が「入るすきまがない。」というので、私が頭を指さして「ココを使わなきゃ。」と合図。「初年兵、出よ。」と私が大声で叫ぶとドバーっと全員が浴槽から飛び出た。そしてタオルに石鹸（せっけん）をつけて私たち 2 人を囲み、頭のてっぺんから足の先まできれいに洗ってくれた。職場や地域の軍隊経験者が、初年兵の心得の一つとしておふろでの振る舞い方を教えてくれたので、それをやってもらった。菅井と共にご満悦な入浴を体験しルンルン気分で帰った。

ところが内務班に戻ると「下士官室へ行け。」と命じられた。大勢の下士官が何事かといぶかる顔をしていた。直属上官の竹田班長殿が「何かしましたか。」続いて別の下士官が「君、入浴場で大声を出しましたね。今ここでやりなさい。」と言う。内心「しまった。」と思った。広島を出発し、客車に閉じ込められ、食っては騒ぎまくって 1 週間以上。心を引き締めなかった天罰だと後悔した。私が下を向き小声で「初年兵、出よ。」とつぶやくと「ガラス窓がビビるほどの大声だったぞ。」と怒鳴られたので意を決して「初年、兵出よ。」と叫んだ。一瞬の静寂の後、一同、大爆笑。「これは面白い初年兵だ。」「こんなヤツは初めてだ。」「皇軍初の出来事だ。」「それにしても大きな声だなぁ。」と下士官たちの感想。竹田班長は恐縮している様子だった。私は顔面蒼白（そうはく）で震えていた。

我関せずと机に向かって仕事をしていた偉そうな人が「どれどれ、顔でもおがませてもらおう。」と言って私の顔を見るや「お前か。」とつぶやいた。私もびっくり。班長殿が「曹長殿は橋詰をご存知でしたか。」と丁寧な言葉遣いで尋ねた。「輸送指揮官を拝命し、広島へ出張し、この者たちを連れてきた。こいつは船中で食事分配の使役をしていた。船酔いで食べられないヤツの弁当を、こいつは返納せずに自分たちの場所に運び積み上げていた。3 人では食べきれない量だったから、どうするのかと注視していたら下船するときに他の者にも手伝わせて列車に運び込んだ。腹の減ったヤツに売るのかと思ったら、船酔いで食べられなかった者を探して配り終わると、コイツが大声で『〇時〇分、任務完了。』と怒鳴っていた。狭い閉鎖的な船中や車内で楽しみを探していたのだ。ここへ来るまでは楽しかったのにな。」と言われ釈放された。初日に上官全員に顔と名前を覚えられ、以後、良くも悪くも私に付きまとい影響を受けた。

階級		旧陸軍	旧海軍
士官（将校）	将官（しょうかん）	大将（たいしょう） 中将（ちゅうじょう） 少将（しょうしょう）	大将（たいしょう） 中将（ちゅうじょう） 少将（しょうしょう）
	佐官（さかん）	大佐 中佐 少佐	大佐 中佐 少佐
	尉官（いかん）	大尉 中尉 少尉	大尉 中尉 少尉
准士官（じゅんしかん）		准尉	兵曹長
下士官（かしかん）		曹長（そうちょう） 軍曹（ぐんそう） 伍長（ごちょう）	上等兵曹 一等兵層 二等兵層
兵		兵長 上等兵 一等兵 二等兵	水兵長 上等水兵 一等水兵 二等水兵

軍人の階級一覧表（昭和 20 年当時の基本的なもの）

組織	内容	司令官
総軍	関東軍、支那派遣軍（しなはけんぐん）、南方軍などのこと。	大将
方面軍	総軍の下に属する組織。中支那方面軍、第一方面軍などがある。	大将・中将
軍	戦闘における一軍事行動を担当した組織。 通常は師団（しだん）のほか、兵科が異なる複数の舞台から編成された。	中将
師団	通常、師団司令部、2 個歩兵旅団を中心として、砲兵、通信隊などが下に編制された組織。15,000～25,000 人。	中将
旅団	同じ兵科の 2 個連隊以上からなる組織。	少将
連隊	3 個歩兵部大隊を中心として、砲兵、通信隊などから組織される。 3,500～4,000 名。	大佐・中佐
大隊	3～4 個歩兵部中隊を中心として砲兵、通信隊などから組織される。	少佐・大尉
中隊	2～4 個小隊で構成。戦闘部隊の中核。	大尉・中尉
小隊	2～4 個分隊で構成。 戦時には、入営した兵士が日常生活を送る内務班が小隊となった。	少尉
分隊	通常 10 名ほどで構成される最も小さい組織。	軍曹・伍長

陸軍の編制（主なもの）

二等兵と上等兵を見分けるのは簡単だ。帽子や襟についている☆印の数が違う。二等兵は帽子に1個、左右の襟に1個ずつ、全部で☆3個。上等兵は片方襟だけで☆3個。兵長は神様より偉いとされ「お伊勢さん」と称された。初年兵であるのは後輩が来るまでのこと。私は日本軍最後の兵隊で、シベリア捕虜となったため後輩はおらず、舞鶴上陸まで「初年兵」だった。軍隊では「大声」が「ヨシ（良し）」とされた。他の班では「橋詰を見習え。」と怒鳴られている者もいた。



二等兵の制服



将校の制服

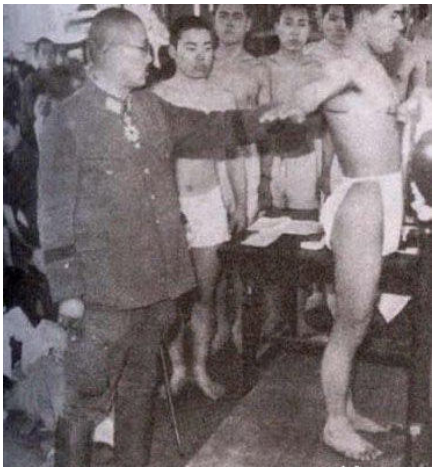
私の2歳の誕生日前に父は病死。兄3人、姉1人。私の大声は、私だけが耳の遠い祖母に育てられた日常会話が原因と思うが、近所の大人たちから「婆育ちは三文安い」と蔑視（べっし）された。親にならって「パパソダチハ　サンモン　ヤスイ。」とはやしたてるガキを殴っては家来にしていた。

戦友

初年兵には「古年兵殿」と呼ぶ先輩の一等兵の中から1名「戦友」と称する先輩兵が割り当てられた。初年兵は「戦友」の「褌（ふんどし）」「襟布（えりふ）」を毎日洗濯し交換する責任を負わされた。これは「葉隠（はがくれ）の精神」に由来するものと思われる。「葉隠」は江戸時代の書物の名で「武士道と云ふは死ぬ事と見つけたり（※）」という一節が有名な「武士道」の解説本。これを受けて「戦って死ぬときは下着だけでも洗濯したものを身につけよ。」という諭しの発想もあったのだろう。実際、超多忙の初年兵は不潔になりがちだったため、皮膚病やシラミの発生源にならぬように鬼の先輩の下着と一緒に洗濯し、清潔を保たせるねらいもあったと思う。「襟布」は三角巾（さんかくきん）を襟幅（えりはば）に折り曲げ、負傷したときに素早く取れるように軍服の襟の内側に粗縫いした。

※「武士道と云ふは死ぬ事と見つけたり」

武士はいついかなるときに死んでも後悔せず、未練や恨みのない人生を生きなければならない。



ふんどし姿の徴兵検査



襟布

私の「戦友」は夏梅四年兵殿。彼は他の一等兵より 3 年も多く軍隊の飯を食べていたのに一等兵のまま昇格していなかった。夏梅は私に「他家の男子に、ふんどしを洗わせるなどもってのほか。」と断固拒否し「だれかに聞かれたら洗っていますと言え。」といって私を奴隷扱いしなかった。消灯で床に入ると黙って私の鼻をつまみ、私が息苦しくなって口を開けると、かんでも音のしない甘味菓子を口に押し込んでくれた。「できる限りお前を守るが、守れない場所は炊事だ。炊事で『除夜の鐘』制裁（＝食べ物を運ぶズンドウの大食器を頭からかぶせ、スコップで横を強く殴る）に遭遇したら、アホみたいに口を開けて殴られよ。口内は切れても治るが、力を入れていると口内は切れないが鼓膜が破れる。破れた鼓膜は治らない。」とアドバイスをしてかわいがってくれた。

全下士官同席のもと中隊長殿との個人面談もあり 1 週間ほどは決まった演習も行動もなく、湯わかし場や洗濯・洗面所の下水掃除をしていた。そこにドヤドヤと大勢の足音が入り口のところで止まり「分かっているな。橋詰には手を出すな。」という。一等兵たちの声だ。「承知。」という者。「なぜ。」と尋ねる者もあった。私はびっくりして身をかがめて息を殺した。「分からんか。橋詰の後ろには夏梅がついている。夏梅は四年兵だぞ。」とやりとりが続いた。

制裁

「制裁」は次のように行われた。上等兵の 1 人が一等兵の 1 人に「貴様ら、近ごろたるんどるぞ。」と気合を入れる。気合を入れられた一等兵は他の一等兵に伝えてすべての初年兵を集め「全体責任」の名目で殴るけるなどの暴行を加えた。その手加減を上等兵は黙って見ている。殴り終わると「分かったか。」と怒鳴る。殴られた理由など分からないまま「はい。分かりました。」と初年兵は大声で叫ぶ。この繰り返しが「黒を白に変化させる」洗脳なのだと思った。「制裁」は夕食後から消灯の時間に行われた。天皇は将校に「兵に考える隙（すき）を与えるな。」と命じているので将校は見て見ぬふり。「制裁」は男社会の「無娯楽の軍隊生活」の中でエスカレートする一方だった。

夕食後、古兵（一等兵）が「橘詰、これを持っていけ。」と言ってきた。「どこへでありますか。」と尋ねると「読めば分かる。」と言う。四つ折りされた紙を広げると「30 分、帰ってくるな。」と書いてあった。下足場で営内靴（えいないか＝古い軍靴をスリッパにしたもの）に履き替え外に出た。初年兵は屋外では常に駆け足するのが決まり。握りこぶしを腰につけ、営庭を円を描くように走らねばならなかった。

周囲の森には眼光鋭いオオカミが生息していた。「一匹オオカミ」という言葉があるが、それはうそ。オオカミは集団行動の動物。馬屋がざわめいたり養豚場の豚がキイキイと鳴いたり軍用犬がほえたりすればオオカミが来た証拠だ。オオカミに襲われれば食い殺されるだけ。そんな中を走らされるくらいなら数発、往復ビンタを食らい、目から飛び出た火花と星を、顔を左右に強く振り払って「ありがとうございました。」と大声で「お礼」した方が楽だと思った。一方、私が 30 分駆け足をしている間、初年兵たちは「全体責任」で顔が変形するほど殴られていた。

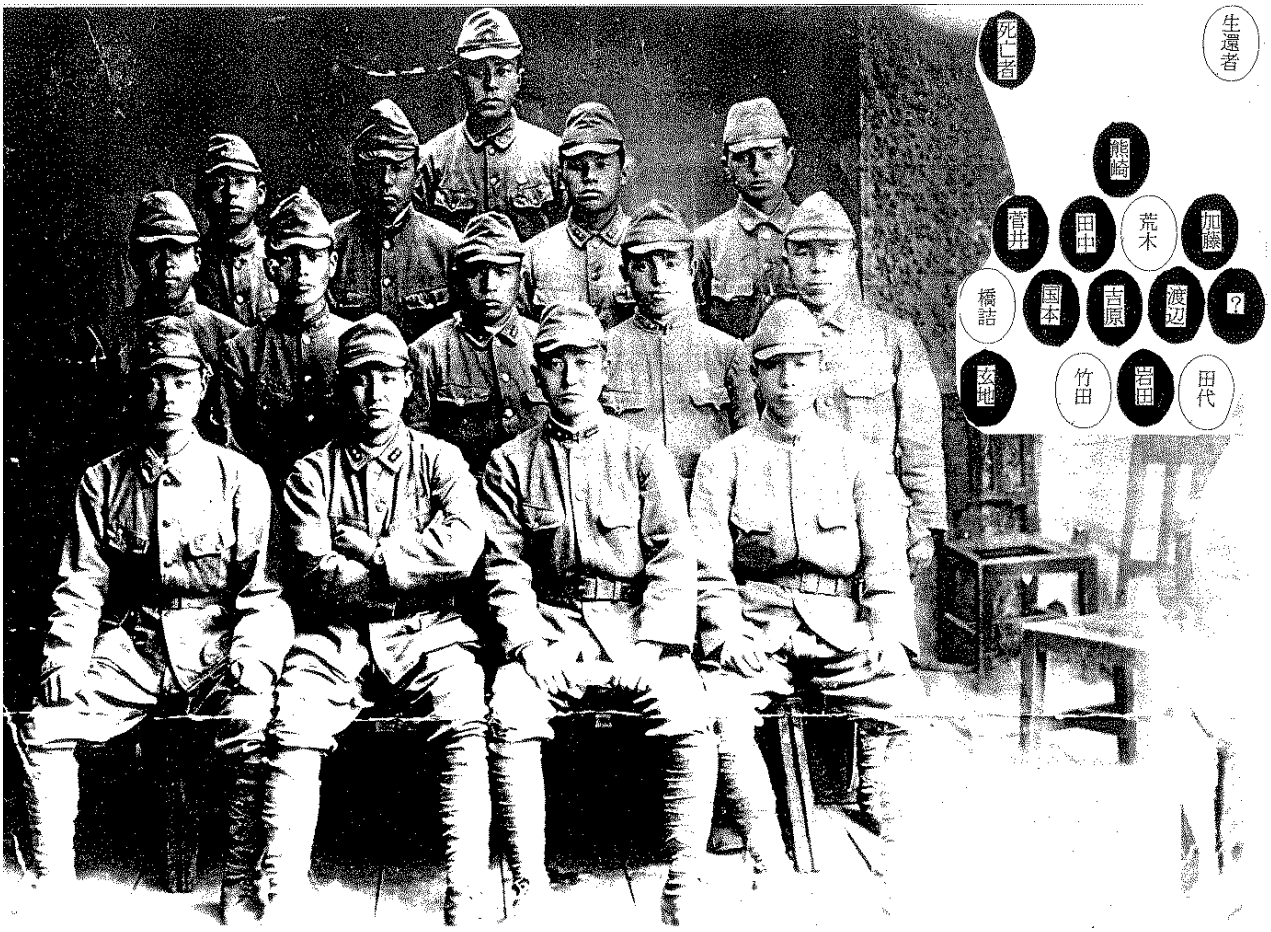
別の夜、古兵が「橘詰兵器係、軍曹殿に届けよ。」と大声を上げて封筒を手渡してきた。私も中隊一番の大声で「橘詰兵器係、軍曹殿に書類を届けにいってまいります。」と復唱し、訳も分からず軍曹殿に届けると「そこの腰掛けに 30 分腰掛けて帰りなさい。」と言われた。このように古兵たちは初年兵に「鉄拳（てっけん）制裁」を加える前に私を「避難」させたのだった。「制裁」前に私に大声で命令の声を張り上げたのは、中隊のどこかでどくろを巻いているであろう夏梅四年兵に対して、自分たちが橘詰に危害を加えていないということをアピールするためだったのだろう。

上官の軍曹までもが一目置いた夏梅四年兵の御威光（ごいこう）はすごかった。今でも夏梅さんには感謝しているが、その時は「広島の人たちが祈ってくれたおかげだ。」とも思っていた。



営内靴

初年兵は外出もできず、休日は身辺の整理と使役に追われた。半年がたち、竹田班長に引率されて初年兵だけの写真を撮りに出かけたのが唯一の外出だった。



北満第六国境守備隊歩兵 10 中隊の初年兵
（田代より頂戴した写真、戦友の生死の確認も田代による）

日曜日毎というわけではないが古兵たちには「休日外出」があり、外出する先輩は班長や週番士官から「陛下からの贈物を抱いてこい。」と 1 個ずつ性病予防の衛生具（避妊具）を受け取って顔を輝かせて出ていった。夕食後から消灯までは「恐怖の地獄」の時間だった。なぜなら外出から帰った兵のうち慰安婦からすげなくされた者が、初年兵に八つ当たりしてうっぷん晴らしをするからだ。直立不動となり、上体が前後左右に揺れでもしたら制裁は倍増。なぜなら初年兵は「天皇陛下」の前に立っているからだ。帯革（たいかく＝ベルト）や営内靴で顔を殴られた。鼓膜が破れ口内や舌が切れた。制裁が終わると直立不動の腰を 15 度折って敬礼し「お世話になりました。」と大声でお礼を言った。この声が小さいと振出しに戻ることになる。私より体力の弱いヤツが、私たちが逆らえないことを知っていて暴行を加えた。本当に情けなかった。

刺青

ある日竹田班長殿が「中隊長殿がもう一度お前と個人面談するそうだ。」と呼びにきた。中隊長からは「刺青（いれずみ)」と私の関わりについて質問を受けた。軍隊では「同県意識」が強く、何かあれば助け合いかばい合った。個人面談では、同じ県の出身か、また知人がいるかを必ず聞く。私は「皆無であります。」と答えた。そんな中「刺青」は「知人は橋詰であります。」と答えたらしい。「血肉を分けた兄弟以上にお前を頼って、ほれ込んでいるようだ。理由を話せ。」と中隊長殿。

私が思い当たったのは内地（日本）でのこと。満杯の入浴場の空いている場所に行くと「刺青」がいた。皆が敬遠して近寄らない理由が刺青だと理解した。背中一面にオールカラーの閻魔（えんま）大王のものすごい形相、二の腕や太ももにも桜吹雪がちりばめられて実に見事だった。その図柄にふと違和感を覚えた私は「立派だが、何か変だな。」と話しかけた。刺青の男は「分かるか。」「分からんが何か変だ。」と言うと会話が進んだ。彼は福岡県の炭鉱労働者で、職場で「刺青者は軍隊で殴られない。」と教えられ、彫り師に「軍隊で殴られない刺青」を注文。本来は桜の花弁の１枚１枚に白粉（おしろい）を彫りこみ、ふろで体が温まると花弁が桜色になるように細工を加えて完成とするのだが、痛いので白粉を入れなかったため「物足らない刺青」になっているとの説明だった。私は「彫り師が君への武運長久の祈りを彫り込んだのだな。」と絶賛した。

私は「私がヤツの刺青を絶賛し、差別しなかったからだと思います。」と答えた。中隊長からは「刺青が暴れたら、お前も鎮めよ。」と頼まれた。



刺青（イメージ）

夜間訓練

満州に来て知ったことの一つに、手袋の指先を少し引っ張って指先に空間を作ると指先が寒さで痛くならないというのがあった。氷点下 30 度以下になるのを待って初年兵だけの夜間訓練があった。風速 1m で体感温度は 1 度下がるという。風速 10m の中での耐寒訓練だ。雪は粉雪サラサラなので転がっても雪だるまにはならない。粉だから服のすきまから入り込み、解けて体温を奪う。粉雪は風に飛ばされて地面のくぼみにたまり首まで漬かる有様で、涙や鼻水までが凍りつき、凍死を覚悟したほどだった。兵隊らしくキビキビ動作もできず、凍えてフラフラ。敗残兵と思うほど哀れな姿となりながら帰営した。営庭で整列点呼が終わり、中隊長の「解散。」の声と同時に真っ暗な兵舎が一斉に点灯し、1 人に 4～5 人の古兵が群がって雪まみれの防寒靴、防寒コート、冷え切っている軍服から下着まで脱がして丸裸にして手際よく暖かい衣服を着せてくれた。冷えた衣服を脱ぐと体が温かくなる不思議を初体験した。古兵たちはキビキビした動作で「鼻ヨシ、耳ヨシ、指先ヨシ、足ヨシ。」と大声で確認。初年兵の凍傷箇所を探しているのだと分かった。一息つき安らいだところで温かい「小夜食」をいただき、ホクホク温まり就寝。毎晩のように理由もないのに殴り「はい。分かりました。」と言わせる憎い鬼の古兵たちが慈母観世音菩薩（じぼかんぜおんぼさつ）に思えた。



防寒装備の兵



慈母観世音菩薩



寒中訓練

特殊部隊

朝食中、週番士官が大声で「そのまま聞け。1 班、橋詰。2 班、〇〇・・・。」と 200 名近い中隊員から 5 人の名前が読み上げ「以上の者は、食後、直ちに背嚢（はいのう＝リュックサック）を除く軍服で内務衛兵所前に集合。」と命令された。

私は巻脚絆（まききゃはん、ゲートル）を巻くだけ。他の携帯物は残る者がテーブル上にそろえ、「任務、ご苦労様です。」と送り出された。衛兵所前には九中隊からの 5 名も並んでいた。最低の二等兵の私から「お伊勢さん」と呼ばれる「兵長」までいる特殊部隊が編成された。兵長殿も任務を知らされておらず「何事だ。」といぶかっていた。「分かった。射撃上位者ばかりだ。」と一人が叫んだ。任務の目的は「射撃か。」と緊張が走った。兵器係軍曹が衛兵司令も立ち会う中、1 人 30 発の実弾を支給し 5 発を小銃に装てんし安全装置を施す。400 名近い 2 中隊合同作戦ではなく狙撃兵（そげきへい）10 名。「ばれては困る極秘任務か。」射撃大会ではなく人殺しなので、皆、一様に緊張し異様な雰囲気だった。



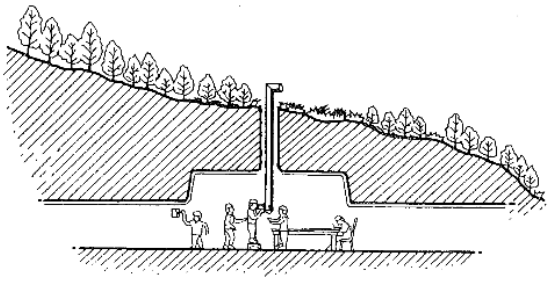
背嚢



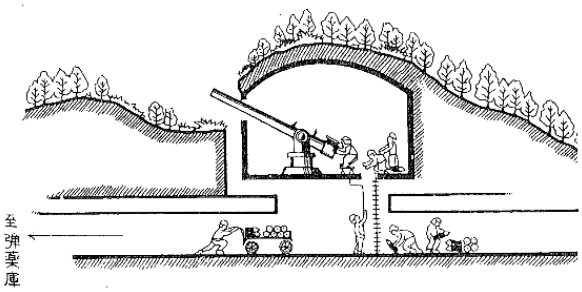
巻脚絆

拳銃（けんじゅう）を携帯した 2 人の通信兵が加わり、週番将校から任務が下された。私たちは階級に関係なく通信兵の指揮下に置かれ「昨夜から途絶している通信線の切断箇所を探し出し、通信を回復させる任務の通信兵を護衛せよ。」と命じられた。「討伐」ではないと分かり重苦しい雰囲気がホッと明るくなった。

通信兵は探索始点を陣地衛兵所からと決めた。南満州に連なる小興安嶺（しょうこうあんれい）山脈の最北起点「璦琿から朝水」の 30km の山腹に、厚さ 1m50cm のコンクリートで固めたトンネルを作り、大砲から重機関銃の銃座まで、歩兵 10 個中隊、砲兵 4 個中隊が地中から防御攻撃もできる巨大永久要塞（ようさい）を構築した。日本軍はこの軍事機密地を「北鎮台」（ほくちんだい＝北を鎮圧する地）と命名した。



指令塔



重榴砲塔（じゅうりゅうほうとう）

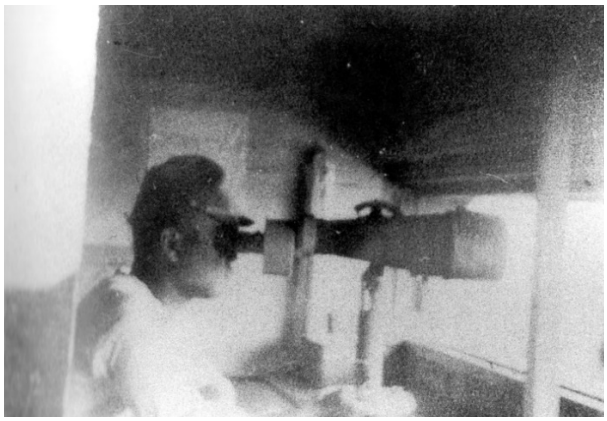
陣地沿い、黒竜江岸 30km の要所には高さ 10m 以上の監視哨望楼（かんししょうぼうろう）がありそれぞれに 1 個分隊が常駐。24 時間体制で 100 倍の望遠鏡により黒竜江を通過する船舶とソ連領を監視して定期的に陣地衛兵所へ異状の有無が通信で報告されていた。



朝水陣地の警備



監視哨望楼

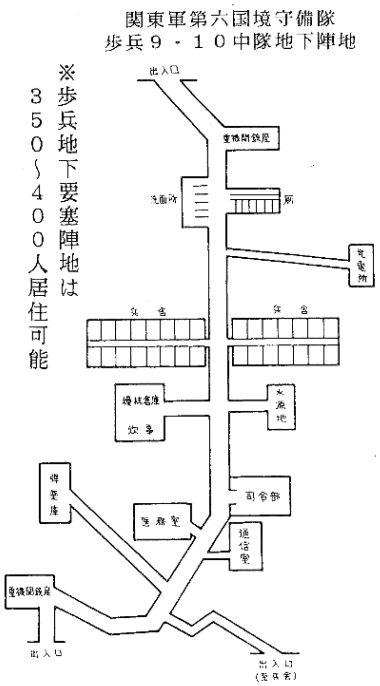


江岸監視の兵士

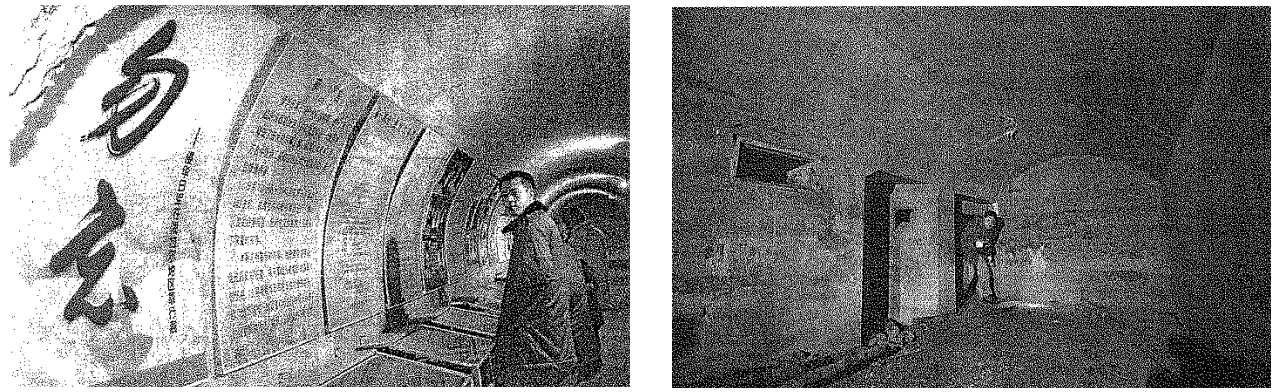
陣地築城は、日本の優秀なトンネル採掘技術者が工兵を指導。北支派兵の日本軍が華北（中国の北部）から屈強な中国人男性ばかりを 800 名ほど拉致（らち）して建設にあたらせ、陣地が完成すると機密保持の目的で全員を殺し、枝のように分かれている沢に埋めたと聞かされた。「世界のどの軍隊の砲弾、爆弾にも耐える要塞だ。」と士官たちは自慢していた。



小興安嶺



地下陣地



現存している地下陣地の内部（現在）

「北鎮台」は、深い戦車壕（ごう）で取り囲まれていたが、一見、平凡な山並みである。夜になるとソ連領から赤青、色とりどりの信号弾が打ち上げられ、我々の陣地内の北鎮台山中や黒竜江岸からそれに呼応するかのように信号弾が上がった。江岸望楼監視棟と陣地衛兵所から軍用犬を連れ、一斉に打ち上げ地点に向かうが敵は逃げた後。一晩に双方から 40 発の信号弾が上がったときは陣地衛兵司令官は「非常呼集（戦闘態勢）」を覚悟したという。常に緊迫した国境だったのだ。そしてこの緊迫と防衛力が満州の日本人の地位、生命、財産、名誉を守護していたのである。

1本の電話線をたどれば切断箇所に行き当たると思っていたが甘かった。複雑に入り組んだ陣地各所へ張り巡らされている電線には偽装線もあり、私たちの任務は「護衛」から「電線探査」となってしまった。沢、林、谷、森、尾根伝いに見晴らしのよい頂上に達すると、四方から丸見えで裸同然の無防備状態となった。通信兵が小声で話し合い私たちに「俺があの高い木に登り、点検中に狙撃（そげき）されたら、お前は狙撃者を捕まえることができるか。」と聞いてきた。「お伊勢さん」が「隣の尾根は距離的に逮捕するのは無理。谷底からなら銃声が沢に響き合いこだまし合うから発射場所の特定も困難だ。」と。通信兵は「護衛もできない護衛兵に護衛をされるのは不愉快だ。帰る。」と反発。「命令違反だ。」とお伊勢さんが詰め寄ると、通信兵は「俺を殺したヤツを捕まえるなら任務を継続する。犬死はごめんだ。」という。「ならば、お前が言う通りの位置に護衛兵を配置してやるから、さっさと木に登れ。」と押し問答になった。

この北鎮台を含む小興安嶺山脈地帯は、射撃の名手にして神出鬼没の狩猟民族「オロチョン」の縄張りでもあった。オロチョンが敵か味方かは、その時々の「買収条件」で異なるといわれていた。オロチョン以上に警戒しなければならないのが「匪賊（ひぞく）」「馬賊（ばぞく）」。彼らは「リーベン・クイズ（※）は日本に帰れ。」と叫び、日本兵と戦った抗日・反日の愛国者と朝鮮独立運動家だった。

※「リーベン・クイズ」：リーベンは「日本」、クイズは「鬼子」の中国語読み。



オロチョン族



「馬賊」と呼ばれた抗日・反日勢力

通信線の切断箇所も発見せず、死ぬのは嫌な指揮官の権限で我々は帰路についた。皆、足取りは重く無口。通信兵は命令違反の理由を狙撃手（そげきしゅ）の責任にするだろう。営倉（※）と軍事裁判を覚悟した。帰隊すると瑷琿側からの通信兵が通信網を回復させてくれていた。木に登って点検さえしていれば面目を保てたはずだったが、翌日、通信兵の姿は本部から消えていた。

※「営倉」：えいそう。旧陸軍で、陸軍懲罰令により罰せられた者を留置した建物。

新兵

新兵は一定の訓練、検閲等を終えると各部署に配置される。炊事、馬屋、軍犬、伝書鳩、裁縫、官舎、酒保（※）、事務のほか、公募されるものとしてラッパ手、衛生兵、憲兵、特務機関、下士官候補があった。軍隊の戯歌（＝ふざけ歌）に「一にヨーチン、二にラッパ。」というのがあった。ヨーチンとはヨードチンキのことで、衛生兵はおくびょう者の筆頭にランクされていた。班長らは自分の部下から衛生兵を出すと「指導手腕が劣っている。」と評価されるので、新兵が衛生兵に名乗り出ようとすると「断念せよ。」と迫った。字が上手な者は「インキつぼ」と呼ばれる事務方に配属された。

※「酒保」: 基地、施設、艦船内に設けられた売店。

中国語が堪能（たんのう）な熊崎が「特務機関に志願する。」と言ったとき、私たち同年兵はそろって断念するように迫った。「お前のようなお人好しが他人をチクることはできないぞ。」熊崎から「開戦と同時に 3 時間で全滅する六国より南満州へ脱出したい。」と本心を告げられ「それなら俺たちの分も生きろ。」と励ました。3 ヶ月後、人事係曹長が「熊崎の遺骨を受け取りにいく。」と言った。熊崎はハルピンの中国人よりも貧しい服で貧民窟に潜入し、反日の情報を集めて憲兵にチクる任務をしていた。ある日、匿名の中国人から憲兵に「家畜の糞溜め池で、日本人がうつぶせになって死んでいる。」と通報があり、それが熊崎だった。熊崎は原隊（＝軍隊で以前に所属していた隊）に骨となって帰ってきた。私たち同年兵は延命を望んで最初に死んだ熊崎の「屍衛兵（しかばねえいへい）」を志願し冥福（めいふく）を祈った。



ハルピン市街（奥は松花江）

私は「中隊当番」を命じられた。中隊当番とは「中隊長の便利屋」。中隊長が「当番。」と呼べば聞こえる場所に当番室がある。中隊に届く郵便物も最初に受け取り中隊長に渡すのが役目。はがきを先に読めるという楽しみもあった。夏梅四年兵には「敵機頭上　家屋家族安泰　励め奉公」と毎週、父上から来信があった。達筆で簡単明瞭（めいりょう）文意明白な夏梅の父上を私は密かに尊敬していた。前夜「全体責任」で私を殴った古兵が悪びれもせず「腹が減った。食べ物はないか。」ともらいにきた。中隊長には食べきれない量の食事が届けられるため残すと知っていたのだ。食い終わると「だれにも言うな。」といばって帰っていった。

練兵休（れんぺいきゅう＝入院していない病人）と中隊当番だけは中隊演習を免除された。私は営内靴の普段着姿で馬屋から中隊長の馬を引き、くつわを強く縛って中隊全員が重装備で整列している真正面に立った。遅れて中隊長が乗馬して点呼が始まった。竹田班長が「1 班、総員 18 名、欠 2 名。現在員 16 名。欠 1、夏梅四年兵。欠 2、中隊当番、橋詰。」と報告。すると中隊長に「当番。夏梅を呼んでこい。」と言われた。内務班で寝転んでいた夏梅のところにいき「四年兵殿、中隊長殿が演習に参加せよと申しております。」と伝えると、首だけ私に向け「ご苦労さん。休むと言ってくれ。」これを中隊長に伝えると、中隊長は何もなかったかのように「中隊、前へ、進め。」と号令をかけた。私は中隊が営門を出るまで直立不動の姿勢で挙手敬礼し見送った。私は夏梅四年兵の度胸に心酔した。

新型爆弾

8 月 6 日正午頃、私は中隊長の佐久間中尉から大隊本部へ命令受領にいくように命じられた。命令書は茶封筒に入った通信紙 1 枚。縦書き数行にタイプされた簡単なもので封もされていなかった。私は見ては命令違反と知りながら中隊長に渡す前に読んでしまった。そこには次のようなことが書いてあった。

一、広島に新型爆弾が投下された
二、兵を屋外に出すときは白の長そでを着せ、皮膚面を露出させるな
三、兵の脱走、逃亡に特に注意すること

私はこの新型爆弾を、皮膚面に触れるか皮膚より体内に吸収されると今までにない打撃を与える新型の化学毒ガス弾と考え、白の長そでに軍手、白手ぬぐいで顔を隠すと防げると考えた。3 時頃、中隊長に呼び出され出頭すると、

「正直に答えよ。命令書を読んだか。」「はい、読みました。」「だれかに話したか。」「話していません。命令は中隊長殿が中隊全員に伝えるものです。」「分かった。だれにも話すな。これが命令である。」

新型爆弾が私の想像通りか知りたかったが、伝えられることもないまま、8 月 9 日、ソ連空軍による地上兵舎破壊攻撃で日ソ戦争が始まった。


讀賣報知
東西兩面より越境
地上攻撃を開始す
滿鮮要地に分散空爆
ソ聯帝國に宣戰布告
滿ソ國境に戰端開く
戰爭早期終結に協力
ソ聯政府佐藤大使に宣戰通告
對日宣戰布告正文

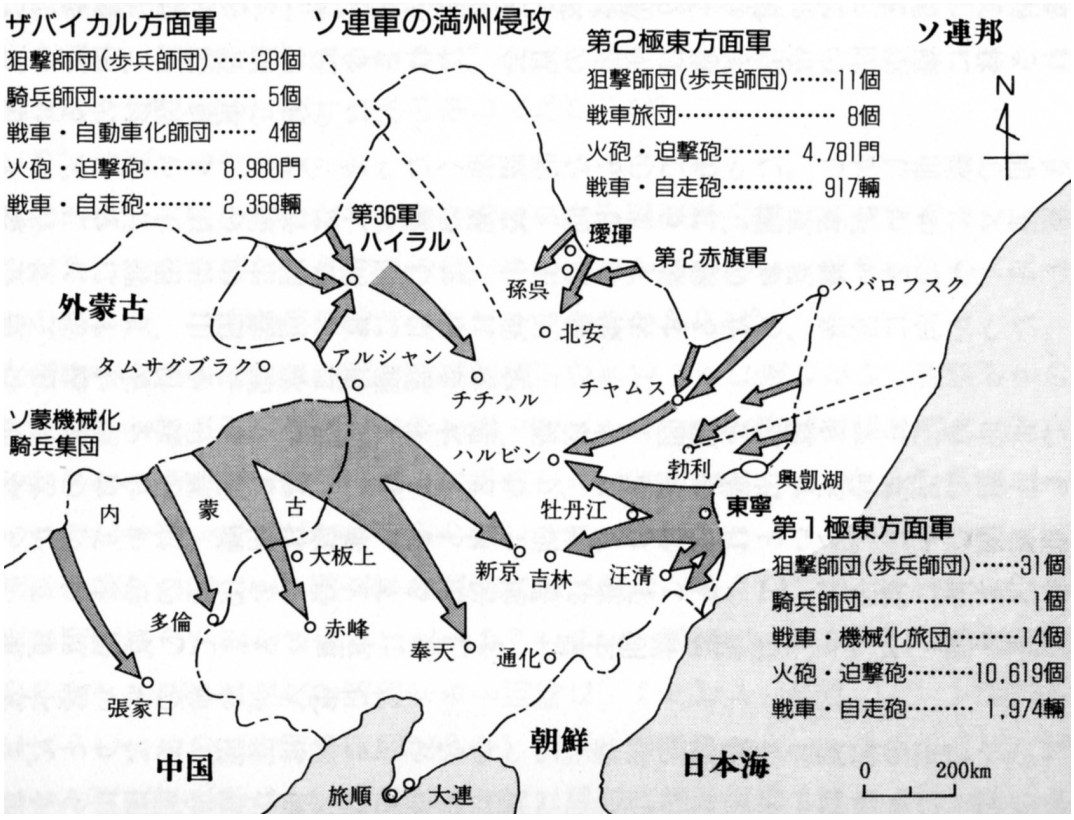
開戦

ソ連軍の戦闘機が飛来し、地上兵舎は爆撃を受け、あっという間に全焼。直ちに地下要塞（ようさい）陣地に布陣し、最初に爆弾を背負い戦車へ「自爆特攻」する人員と順番を数字クジで選んだ。衛生兵、ラッパ手、狙撃手（そげきしゅ）を除き 10 名が決定。その場で 2 階級特進の生き神「軍神栄誉礼」を受けた。私は「狙撃手」だったのでクジを逃れた。「特攻兵」は隠れておえつをこらえ「お母さん。」と叫んで母親と決別していた。私は「俺も後から行く。靖国への道案内を頼む。」と何人も特攻兵を送り、皆、勇ましく出撃するも生還者はゼロ。特攻兵は靖国ではなく、間違いなくお母さんの懐へ帰っていったと私は確信している。



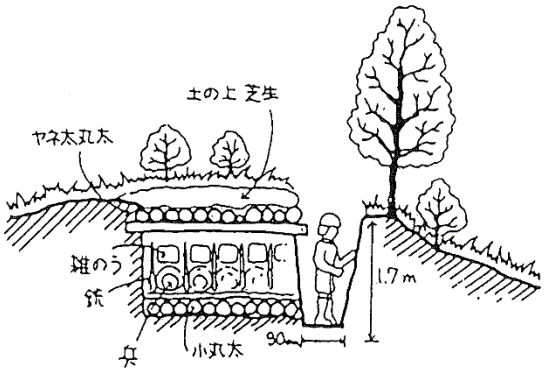


侵攻するソ連軍

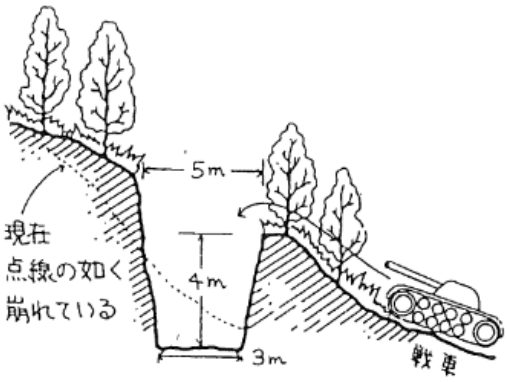


ソ連軍の満州侵攻

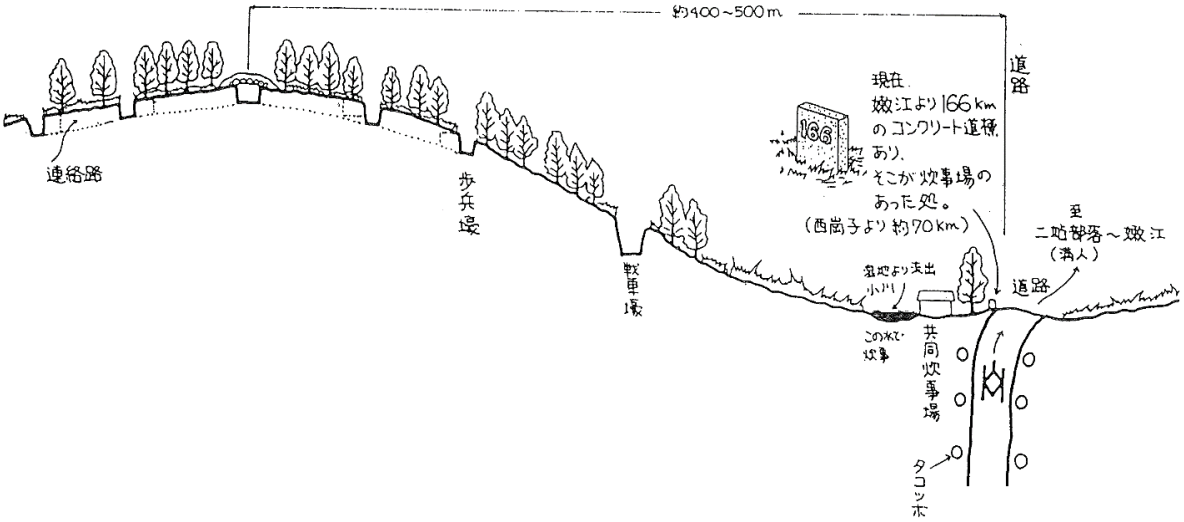
ソ連軍は強力な戦車軍団を先頭に、日本軍の自爆攻撃から戦車を守る随伴歩兵を戦車の後方に配置し、私たちが訓練演習で想定した通りに攻めてきた。私たちは「空の戦友１機１艦、我ら１人１戦車。」を合い言葉に訓練通り迎撃。「タコツボ」を味方に、敵の戦車を破壊擱座（かくざ＝動けなくすること）させた。ソ連軍は日本兵を焼き殺す線上に味方兵がいてもお構いなしに火炎放射器をぶっ放した。ソ連の歩兵はこれに恐れをなし、私たちを見つけると戦車を置き去りにして逃げ出した。



歩兵壕（ほへいごう）



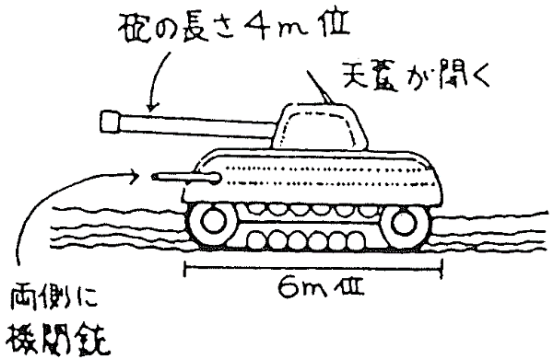
戦車壕（せんしゃごう）



陣地の様子



火炎放射による攻撃



敵戦車

戦闘は苛烈（かれつ）を極め、敵も味方も大勢死んだ。通信設備も破壊されて孤立。連日の雨で水に浸ったタコツボに隠れながら私たちは戦車を破壊し続けた。深夜にソ連陣地に忍び寄ると敵兵がすすり泣いている声が聞こえた。そこへ手榴弾（しゅりゅうだん）を投げ込み、逃げ帰ってきたりもした。私たちは当初の目標であった 3 時間どころか約 2 週間、大元帥陛下が降伏したことも知らずにソ連軍と互角に戦った。

朝鮮人従軍慰安婦

戦闘と同時に民間人を地下陣地に保護したが、その中には朝鮮人従軍慰安婦もいた。敵陣を攻めにいき、帰らぬ者は収容が不可能のため戦場に放置。兵への炊き出しと負傷者の介抱は、朝鮮人慰安婦が率先してやってくれた。日本婦人は「朝鮮ピーとは一緒に働けない。」と差別語を公然と発していばっているだけだった。日本婦人たちの地位が主人の地位と同じであるのには驚いた。将校婦人は「そこの兵士。」と用を言いつけ「天皇陛下の兵士」を私物化する者もいた。女性たちにも序列があり女性同士の意地悪さも目の当たりにした。朝鮮人慰安婦は最下層の日本人女性の更に下に位置付けられていた。

朝鮮人慰安婦は毅然（きぜん）として立派だった。日本人女性のようにオロオロとして騒ぐこともなく、負傷兵を看護し「兵隊さん、死んだらいかん。オモニ（母親のこと）が泣くから。」「天皇陛下がいるから日本は負けない。」と兵を励ますなど、日本人以上に誠実な皇国民だった。朝鮮民族に対し日本が徹底した皇民化教育をした結果だったのだと今になって思う。彼女たちは「〇〇報国隊の部隊募集に応募し、鉄砲か弾丸か飛行機の組立てでもするのかと思っていたら慰安婦にされた。」と話していた。



朝鮮人による宮城遥拝（きゅうじょうようはい）（※）

※「宮城遥拝」:

皇居の方向に向かって敬礼する行為。占領した国の言語、宗教を無視し、神社を建立。君が代斉唱で日の丸を揚げ、宮城遥拝と天皇を拝ませ「私共は大日本帝国の臣民です。」「私共は心を合わせて天皇陛下に忠義を尽くします。」と「誓詞の言葉」を斉唱させ、従わぬ者には「見せしめ刑」。シンガポールにも「昭南神社」を建て市長、警察署長ら有識者にも拝ませた。

降伏

8 月 21 日、前方のソ連軍陣地からソ連軍将校が白旗を掲げて私たちの陣地にやってきた。私たちは日本が勝ったと勘違いし「万歳、万歳。」と狂喜乱舞した。その敵将校が「ミカド（天皇陛下）が 15 日にラジオで負けを全世界に宣言した。」と伝えてきた。「最後の 1 人になっても負傷しても降伏せず戦え。」と兵に命じておいて、自分は断りもなく勝手に降参していたと聞いて、詐欺師のペテンにかかったようだと怒り心頭に発し、裏切られたと情けなくなった。

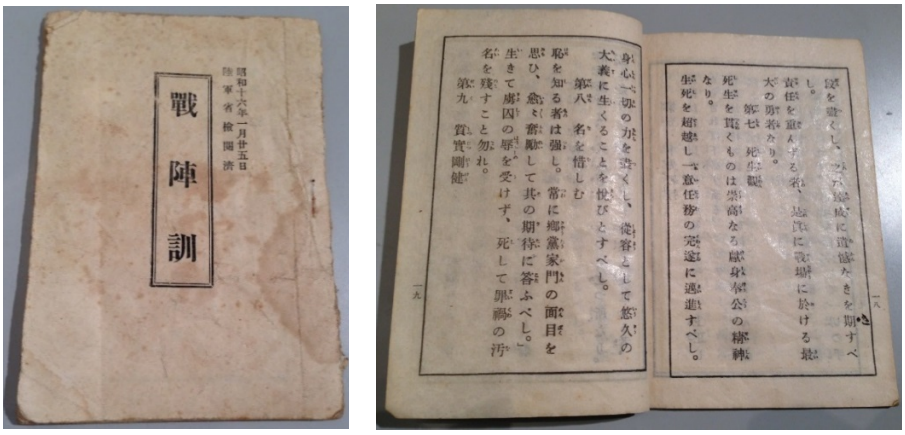


ソ連軍に降伏し銃器を渡す日本兵



ソ連軍に引き渡される日本の戦車

1941 年に当時陸軍大臣だった東條英機が、軍人に軍規を徹底させるために示達した「戦陣訓」には、「生きて虜囚の辱めを受けるな。」という一節がある。しかしこの思想が日本兵の犠牲の原因だと私は信じていない。なぜなら初年兵は入隊すると最初に持込み物品を調べられ「戦陣訓」の持参者は「貴様の中の東条英機をたたき出してやる。」と殴られ焼却させられたからだ。そして「直属上司の命令＝天皇の命令」「兵は戦闘中に負傷しても自分で応急処置を行い、八方手を尽くして戦闘を続けよ。たとえ戦闘できなくなっても後退してはならない。」「指揮官を失っても、自分の武器を信頼し、戦闘を続行しろ。」と徹底的にたたき込まれた。私たちがこの信念を愚直に守り戦い抜いた 1 週間も前に天皇は降伏していたのだ。多くの兵が自暴自棄となり、虚無感にさいなまれ、放心状態で降伏することを決めた。



戦陣訓



東条英機



大元帥陛下（昭和天皇）



玉音放送を聴く民衆

逃避行

私は自分が捕虜になれば家族が「村八分」（地域で仲間はずれになること）になると思い、降伏を拒否。たった一人で逃亡することを決めて 8 月 21 日の深夜に陣地を脱出した。

私は、線路沿いに実っているトウモロコシを食べながら南下すれば、大連（だいれん）か釜山（ぷさん）に着くとだろうと考え、拳銃に手榴弾 6 個を持ってひたすら歩いた。塩とマッチを別々に油紙で包んで竹田班長が持たせてくれた。ソ連軍の前線をくぐり抜けホッとすると同時に、これから周囲は全部敵だと分かり後悔した。2〜3 日も経った頃だろうか。会話する人もなく、今日が何日かも分からなくなった。ひたすら線路沿いに山中をさまよった。野菜畑があると近くに農家があると知った。精も根も尽き果て、線路の見える山中に隠れていると、下の道を 1,000 人以上の日本兵がソ連軍に連行されていた。私は「あれだけ大勢なら、殺されずに日本に帰ることができるだろう。」と思い、すきを見て夜、野宿の部隊に潜入。本部で今日までの行動を申告した。大隊長が「だれか、この薄汚れた敗残兵を拾え。」と告げると「私が。」の声。彼が福永中隊長（福岡県）であった。この部隊は奉天（ほうてん）で 15 日にソ連軍もいないのに自主武装解除して投降。私もソ連兵を殺していない仲間になりきり、逃げてきた道を再び北上した。朝水戦闘地付近の凄惨（せいさん）な激戦地では、破壊されて動けなくなった戦車、放置されたおびただしい死体の数に震える者もいた。



日本兵の死体とロシア兵



白旗を上げ連行される日本兵

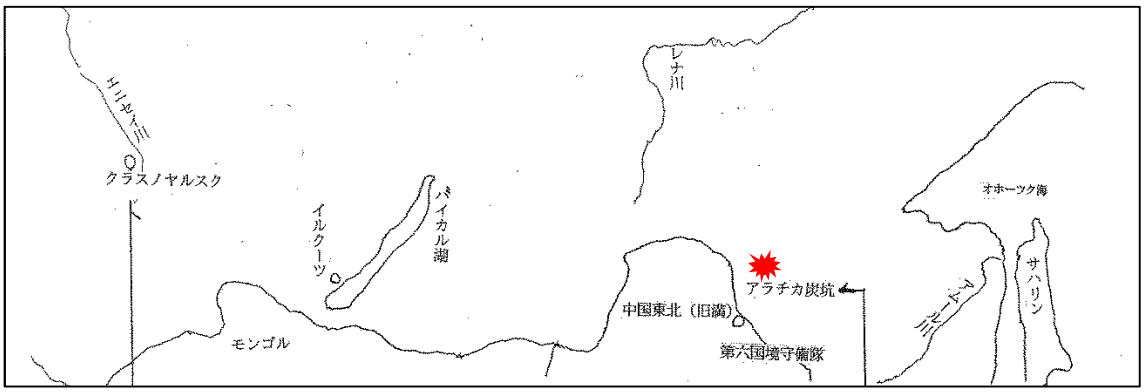
シベリアへ

ブラゴエから行き先も分からぬまま列車に乗せられ、西方向に進む貨車が止まると進行方向を指し「ウラジオ行きだ。」「ロシア人はモスクワへ。」と話し合った。これを何日も繰り返した後、トンネルの続く地帯に入った。36 まで数えると前方に水平線の大海原が出現した。「日本海だ。」「いや、ウラジオだ。」と大歓声が上がった。海を指さし「ここはウラジオか。」とソ連兵に尋ねると返事は「バイカル。」だった。「シベリアのど真ん中に連れられてきてしまった。」と皆で話す。更に何日も西へ西へと汽車はひた走り、進行方向を指さしながらロシア人が「モスクワ。」言うと、これを「もう少しで帰れる。」と解釈した「帰れる組」と「帰れない組」とが口論となり殴り合いになった。結局、私はクラスノヤルスクで下車。第 7 捕虜収容所（半地下の囚人用）に収容された。



バイカル湖（現在）

一方、朝水で降伏した私の原隊は、入ソ後、氷雪の中、野宿 1 ヶ月。畑から畑へ、その日の食料となる馬鈴薯（ジャガイモ）を掘りながら連行され、アラチカ炭坑に着いた時点で 3 分の 1 が行路死。更に 4 年間、ロシア人の囚人と共に炭坑での強制労働をさせられて残りの 3 分の 1 が死亡した。「ソ連兵を殺した報復を受けた。」と戦友から聞いたのは 1986 年（昭和 61 年）のことだった。

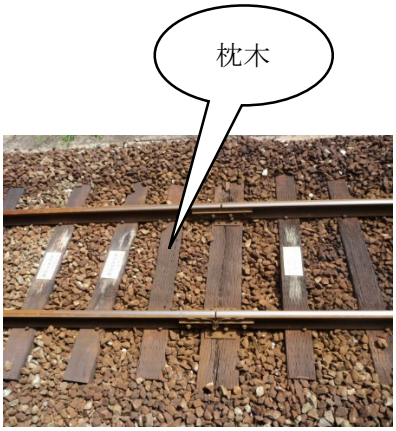


アラチカ炭坑

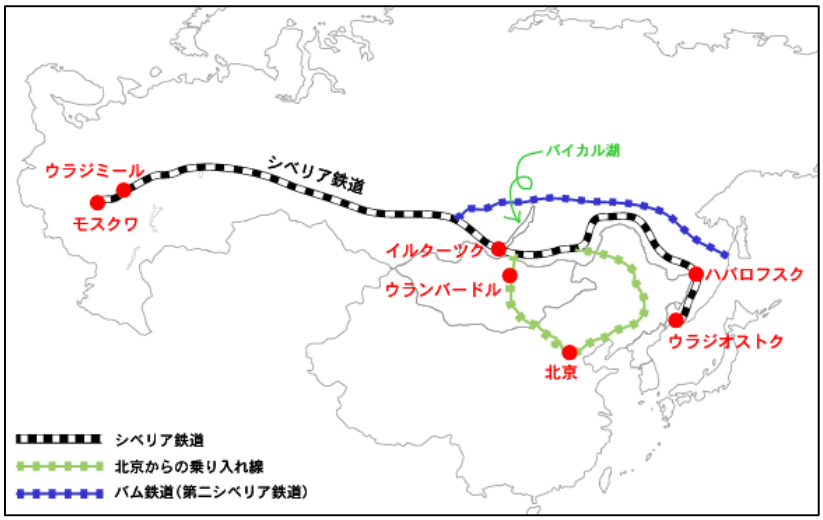
シベリア捕虜時代

1945 年（昭和 20 年）8 月 8 日、ソ連は日本に対して「日ソ不可侵条約」破棄し、翌日 9 日から攻撃すると宣戦布告。千島、樺太、朝鮮半島、満州、蒙古に侵攻した。この地域には、270 万人の日本人がいた。これは日本国外にいた日本人の 41%にあたる。派兵されていた日本軍が 76 万人だった。宣戦布告を知らない日本軍は「国際法違反だ。」と応戦。天皇は 8 月 15 日に全世界に向け「負け」を宣言した。

戦争が終わると、ソ連は、軍人は捕虜に、一般男性は「男狩り」して、労働力としてシベリアに移送、隔離。長期にわたる抑留生活と奴隷的強制労働により多数の人的被害が生じた。厳寒環境下で満足な食事や休養も与えられず、苛烈（かれつ）な労働を強要されたことにより、多くの抑留者が死亡。中でも「タイガ」と呼ぶ森林を切り開いて通した第 2 シベリア鉄道（バム鉄道）の建設では、枕木（まくらぎ）一本＝捕虜一人の命」と言われるほどの過酷なものだった。工事開始時には宿舎すらなく、捕虜に立ち木を伐採させ、居住用の小屋作りから始まったという。



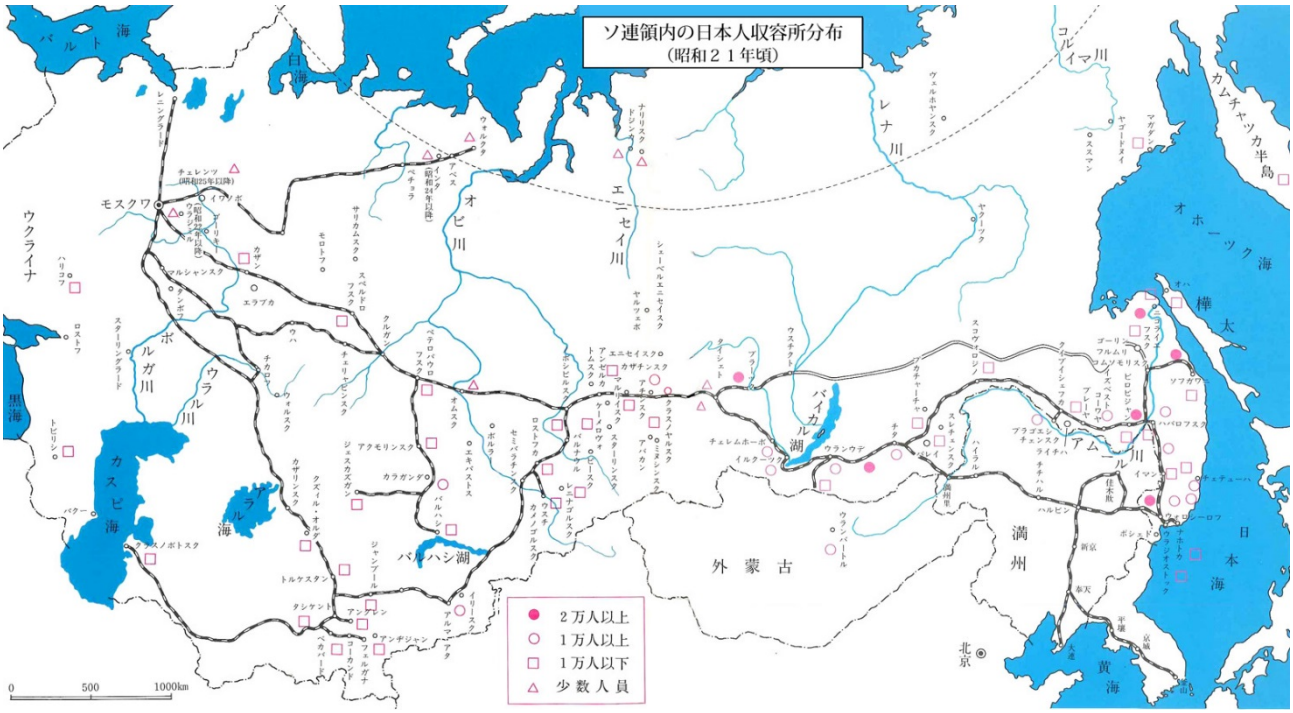
枕木



シベリア鉄道の路線図

非人道的な強制労働の地は、東はカムチャッカ半島、西はモスクワ、レニングラード（現在のサンクトペテルブルク）、ウクライナ、キエフ、南はパミール高原、北はエニセイ河下流の北極圏（北緯 66 度 33 分以北）のソ連全域に加えモンゴルまで広がる。収容された場所は不備な監獄棟などが利用されその数は 1,800 ヶ所。背後から銃でねらわれ、戦後復興のために強制労働させられた日本人は実に 80 万人以上という。世界が、そして日本が平和になってから始まったシベリア抑留、更に満州邦人の棄民扱いを、私は広島、長崎に次ぐ悲劇だと思っている。

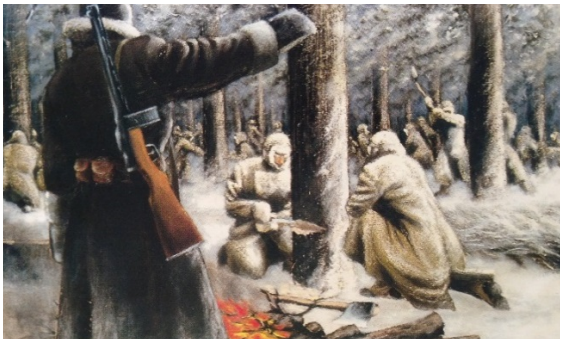
夏服の日本人に世界一の寒冷地は秋がなく 1945 年（昭和 20 年）9 月には雪が降り、極寒、飢餓、重労働、疫病が襲い掛かった。最初の冬は大勢が死んだが、ソ連は死亡者名簿の作成を禁じ、記録上は死者ゼロ。翌年 3 月、ソ連は働けない病弱者と国際法に抵触する 18 歳未満の者を、日本ではなく満州、北部朝鮮へ追放。満州の「黒河（こっか)」に追放された日本人は 1946 年（昭和 21 年）6 月、八路軍（中国共産党）の番兵を殺して集団脱走し、半数が捕まり銃殺された（詳細は第 13 章を参照)。



ソ連領内の日本人収容所分布（1946 年（昭和 21 年）頃）







強制労働の様子

抑留された場所

私が抑留されたのはシベリア鉄道とエニセイ河の交差するクラスノヤルスク第 7 収容所だった。収容所には半地下の囚人用の穴倉に 1500 人がいて、道路、建築、工場、荷役など、ソ連軍の銃口に背後からねらわれ労働させられた。



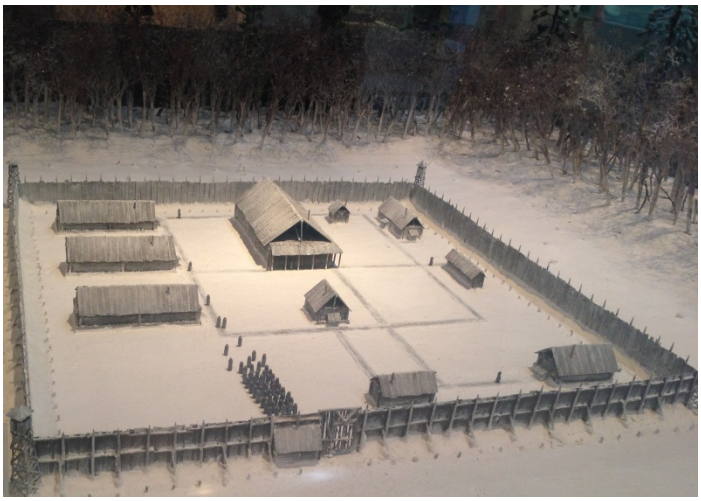
収容所の捕虜



収容所



廃墟（はいきょ）となった収容所（現在）



収容所

気温

気温は氷点下 45 度まで体験した。バナナを凍らすと釘（くぎ）が打てる。空中の水分が凍り輝き浮遊するダイアモンドダストの神秘さに感動することなど皆無。「明日は俺が死ぬ番か。」と思う日々の連続だった。トイレは小屋の中を深く掘り、板が渡してあるだけ。排泄（はいせつ）すると湯気が目の前で霜になって天井に付着し、逆さ樹氷の形に垂れ下がった。これがたまると板を取りバールで崩して捨てにいった。お尻やチンチンを見ながら相手が終わるのを並んで待った。



トイレ掃除


収容所内の様子

日の出と日没

夏は 3 時頃明るくなり、太陽は北から出て、東、南、西と天空を大きく回り北へ沈む。23 時頃でも野球ができる明るさ。冬は 10 時頃に明るくなり、太陽は南から出て南の地平線をかすめて南に沈み、15 時頃には暗くなる。ロシア人に「日本の夏はザールカ（暑いか）。」と聞かれたので「日本では太陽は、北のシベリアへ行った頃もう一つ別の太陽が南に上がってくるのでムノーガザールカ（すごく暑い）。」と答えたら大うそつき野郎と爆笑された。

シラミ

衛生環境は最悪となった。体は異臭を放ち皮膚がただれた。ソ連国境を越えた頃からシラミが大発生し、そでロ、襟首から飛び出してきた。シラミによる発疹（はっしん）チフスが蔓延（まんえん）して血便を垂れ流す兵士が急増した。薬もなく、死ぬと汚れた真っ黒な体とボロボロのシャツから生き血を求めてシラミがぞろぞろはい出してきたが不思議と何とも思わなかった。


野外トイレ



シラミ取り

捕虜の死ぬ順番

体力のない者と補充兵（現役ではなく召集兵）が最初に死ぬ。シラミによる発疹チフス（血便垂れ流し）、飢餓による栄養失調、強制労働による過労死、日本人が経験したことのない極寒での凍死など死因は様々であった。壁にもたれている者に食事が来たと教えると死んでいたという状況だった。死んでも通夜も告別もさせず丸裸にして小屋に積み上げ、トラック１台分になるとどこかに運ばれた。生きているときはシラミと南京虫に食われ、死ぬとどこかで野犬かオオカミに食われるか、白樺の肥やしにされた。河に流されたらチョウザメに食われキャビアに変身すると話し合った。自殺者の遺書に「捕虜は軍人の抜け殻にして腰に飯盒（はんごう）をぶら下げ、木の芽、草の葉を探し、残飯捨て場に集まるを常とする。」とあったし、突然「帰れるぞ。」と叫んで荷物を持って立ち入り禁止の鉄条網に近づき、監視塔から射殺される者もいた。



監視棟



裸にされた遺体に祈る捕虜

食料

ソ連が満州から略奪した家畜のえさ、粟（あわ）、高粱（こうりゃん）、ふすまなどの塩なし粥（かゆ）の「飢餓食」が口に入れることができる食料だった。使いかけの鉛筆やふんどしで岩塩や馬鈴薯（ばれいしょ＝ジャガイモ）と交換した。シベリアに来てから数ヶ月目に塩を粥（かゆ）にふりかけて口にしたとき「これが最高の味だ。」と涙が出た。生野菜はなく体にはデキモノができて、みるみるうちにやせ衰えた。



朝食



昼食



夕食

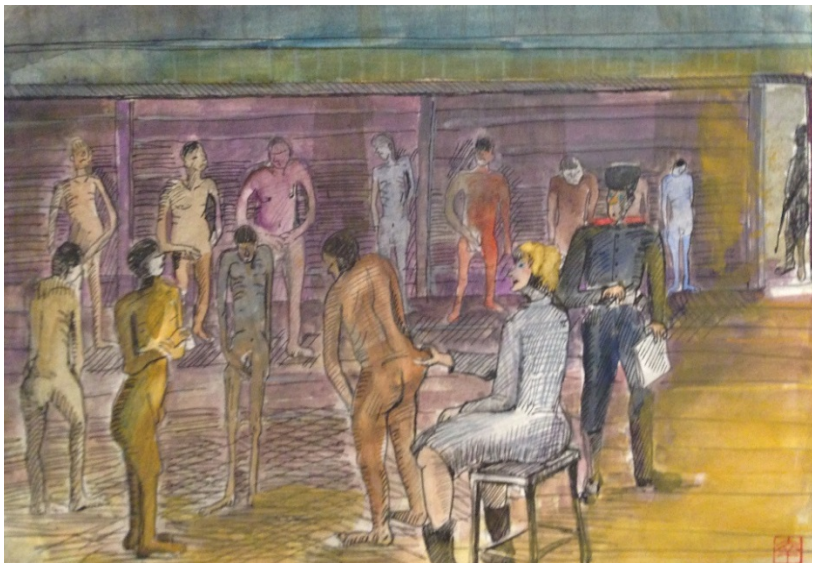
体力検査

「キツネ」（ロシア人の女医につけたあだ名）の前に全裸で立つと、彼女はまず、洗濯板のようになった「あばら胸」と「チンチン」を見て、次に後ろを向かせ尻の肉をつかんだ。聴診器は使わず健康度は尻の肉の厚さで決められた。屠殺場（とさつば）（＊）に送られる豚なみの扱いだった。1 級から 4 級に振り分けられ、3 級は軽作業、4 級は OK（オーカー）と呼び入院となった。「チンチン」の毛は、成長すると同席の床屋にきれいにそり上げられた。毛のない「チンチン」は寒そうで哀れであった。医者の「ノルマ」（課せられた仕事）は「入院」を減らし、働けるものを増やすことなので、4 級が少なく見積もられ 3 級が増える。こうした事情で 3 級の死亡率は高かった。私は技術者として蒸気機関車修理工場へ配属された。

※「屠殺場」: 家畜を食肉にするために殺すところ。



高粱（こうりゃん）



体力検査

蒸気機関車修理工場

工場では 500 人以上の捕虜が、ロシア人と同じノルマで対等に働いた。工作機械は日本製が多く、特に新潟鉄工所の機械が多かった。シベリアでの私の労働は、蒸気機関車のボイラーを組み立てるための鋲（びょう、金属製の留め具の一種）を旋盤で削る作業だった。職場の労働体系は下表の通り。

勤務	時間	構成
①日勤	9:00 ～ 17:00	7 人（旋盤 4 人、ボール盤 2 人、監督 1 人）
②準夜勤	17:00 ～ 1:00	5 人（旋盤 3 人、ボール盤 2 人）
③深夜勤	1:00 ～ 9:00	1 人（旋盤 1 人）

私は、1 台の旋盤を 3 人で受け持ったが、他の 2 名はロシア人女性だった。2 人は「オーリャー（主婦）」と「マローセェー（娘）」で①～③を 3 人で循環し②③の作業は昼間、監督が準備し、他に工作機械ベルト調整・修理の老人がいた。老人とは肩を抱き合いあいさつし、彼の耳元で私が「レーニン ドラーク（レーニンはアホや。）」と言うと、老人は「スターリン イジナーホイ（スターリンはどこかへ行っちまえ）。」と言う仲になっていた。職場にいたリトアニア人は「俺はロシア人を殺していないのにシベリアにいる。お前は殺しているから帰れない。」と言っていた。彼に鉄板にチョークで「リトアニアの地図を書け。」と頼まれたとき、私が「そんな国は知らん。」と言ったら泣いてしまった。



リトアニア

収容所と工場の往復はソ連兵が監視していた。深夜勤では私が 1 人きりになるため工場側から娘 1 人が監視役についた。彼女は栄養失調でふらつく私と腕を組み、私を引きずるようにして歩いた。これが世界一の殺人訓練を受けた関東軍歩兵のなれの果てかと思い情けなかった。女と歩くのも女と腕組みをして歩くのも捕虜としては前代未聞のことであった。

監督はラッシンコと呼ばれる男で「ダバイ（急げ)。」としか言わなかった。ある日、準夜勤で工場に行くと日勤組が暖房用スチーム管の前に並んで「腰掛けニラボーター（仕事拒否)」を決行するという。「クツズーミ（私のあだ名）も座れ。」と言われた。ラッシンコが歩きまわりながら何やらわめくと、労働者たちが反論。仲間たちが「ダー、ダー（そうだ、そうだ)。」と同調するので私も「ダーダー」と叫んだ。この日ラッシンコはクビになり代わって女性監督が就任した。彼女はコマネズミのようによく働き、鋲（びょう）を使うエアーハンマー組との連携も良く、段取りも抜群で私にもよくしてくれた。買物は彼女に頼んだ。彼女は禁制品すらも笑って買ってくれた。



レーニン



スターリン

ノルマ

「ノルマ」とは、決められた目標の達成を指すロシア語である。今では日常用語として定着している単語だが、地獄のシベリアから私たち抑留者が持ち帰ってきた「言葉」であることはあまり知られていない。食事の量もノルマで決められ増減した。ソ連は不法抑留と背中に銃口を押し付ける強制労働の不満を、捕虜同士の「食べ物の恨み」へ転嫁させたため、捕虜同士の血を見る争いがよく起こった。基準を 100 とし、超えると表彰され、ノルマ未達成者は営倉刑や食べ物を減らされるなどの非人道的な扱いを受けた。ノルマの決め方は不公平を通り越して「でたらめ」。例えば「電柱の穴掘り」では木製スコップと金属スコップのいかんにかかわらず「1 日に穴何個」というふうに決められた。飢餓に苦しみ、望郷の願いもむなしく、ノルマをのろって死んでいった多くの戦友を思うと生きて帰ってきた日本人の 1 人として「ノルマ」という言葉の重みを後世に伝えたい。



ノルマを課され労働する捕虜

捕虜の労働賃金

女監督が就任してからロシア人と同じように伝票が切られ 1 ヶ月単位で清算された。職場のロシア人は月給 800～900 ルーブル程度の収入を得た。私は 1200 ルーブル稼いだ月もあった。ノルマ 180%の「ハラショ ラボーター（模範労働者）」の栄冠も一度だけあった。月に 401 ルーブル稼ぐと 400 ルーブルが天引きされる。この分は捕虜の衣食住から病人の治療費に当てられ、1 ルーブルのみが手取りとなる。手取りの上限は 150 ルーブルで残ったお金は賠償金になった。「諸君が働くほど日本の賠償金は少なくなる。」と平気でうそを言っていた。一番の理想は月に 150 ルーブルを受け取ることだ。

私は 600 ルーブルを超えない計算をし、超えた伝票は同組の主婦と娘に「ナ（差し上げます）。」と言って渡した。主婦と娘は、このことを監督に話したため、4 人の秘密となった。収容所ではソ連軍に内緒で 101 ルーブル以上は 100 ルーブルを取り、残りを皆で出し合って「マホルカ（新聞紙で巻いて吸う最低の粗悪たばこ）」を買って無収入者に配った。こうしたお金を出し渋る者もいた。

外出もできず捕虜は買物をすることは許されなかった。ロシア人から金を貸してくれと言われ貸したこともあった。踏み倒されたことはなかったが、お礼の品物をもらったこともなかった。入浴は 2 年で 2 回くらい。石鹸（せっけん）などは使わなかった。クリームやポマードを手に入れて、垢（あか）と埃（ほこり）と油にまみれた顔や頭に塗ってみたこともあったが笑われただけだった。

自分が飲めもしないウォッカ（ロシアの酒）を手に入れ、収容所で振る舞ったこともあった。飲めるヤツは、今日は薄めてあるとかないとか言いながら飲んでいた。八戸市の松村（漁師）は帰国後、手紙で「酒に酔わなくなった。お前に強いのを飲まされ酒に強くなったからだ。」と書いてきた。



ルーブル紙幣


マホルカ

献血

ある日「キツネ」（ロシア人女医）が「兵隊を助けたいが薬がない。頼りは血液だけ。患者の血液を調べる薬もない。O 型の血液者は 3 日間休ませるから血をくれ。」と頼みにきた。

思えば何人殺しただろう。逃亡中は追跡者も殺してきた。戦争とは、殺しに来た者を先に殺すと生き延びると分かった。今も毎日、何人か死ぬ。明日は我が身の心境で、自分の命を落とすことの恐怖さえ、麻痺（まひ）して分からなくなっていた。

同室の戦友たちは「やめておけ。お前が死ぬぞ。」と私に警告したが「3 日休んで 4 日目に死ねば、血便を垂れ流さずにきれいな死に方ができる。日本に帰れた人は、俺の死に様を母に伝えてくれ。」と頼み部屋を出た。皆、沈痛な雰囲気で私を送り出した。

医務室に行くと女医がテーブルに顔を伏せて泣いていた。「今、日本人が 1 人死んだ。」と言ってロシア女性が流す涙を見ても、私はコンクリートよりも固い凍った土を掘っている兵士たちに同情していた。血液提供を申し出ると女医の顔は輝き、ものすごく太い注射器を出した。私は半分の 200cc のメモリを指し「ここまでか。」と聞くと、ソ連はヨーロッパ圏で倍の 400cc だという。「よし、これで死ぬ確率も倍になった。」と思った。名前を聞かれたので「ハシヅメ。」と教えた。女医は、「クツズーミ、クツズーミ。」と連呼しながら病室へ入っていった。

採血後、部屋で横になっているとキツネが私を探してやってきて、米、砂糖、肉、ラードを 300 グラムずつ置いていった。ソ連に入って以来、米も砂糖も初めて目にした貴重品だった。戦友たちは「少しずつ食べよ。」とアドバイスしたが「俺は 4 日目に死ぬのだから、今、全部食べて死ぬ。」と宣言。戦友たちが 4 品全部を飯盒（はんごう）に入れ炊いてくれた。ふた取ると強烈な油の匂いが鼻を突き、表面は脂でギラギラ。「ひまし脂」を連想した途端に「食欲ゼロ」となった。「うまい。うまい」と食べる戦友 7 人の声を聞きながら、私は一口も食べずにふてくされてしまった。

献血 2 日目、職場のロシア人から栄養食の差し入れがあった。橋詰は死にかけた戦友を助けるために自分の血を半分プレゼントしたが、今度は橋詰が死にかけていると伝わったらしい。同室の戦友たちも、さすがにこの「差し入れ」をオネダリすることはなかった。

献血後もその病人が死んだのか助かったのか分からなかった。戦友たちは、お礼に来ないから献血は無駄だったと決め、私が死ななかったことを「よし。」としてくれた。1947 年（昭和 22 年）、地獄のシベリアから夢に見た日本（舞鶴港）に上陸し、明日、それぞれの故郷に帰るという夜「輸血のお陰で帰れました。」と、その人物が会いにきた。その後、一度の交信もなく、会うこともなかった。1987 年（昭和 62 年）私は初めて戦友会の誘いを受け出席し、戦友から「彼」が岡山で結婚し家族がいることを知らされた。戦友は「彼」の無礼を怒ったが、私は献血をしたおかげで、戦友の死を悲しんで涙する女医や、私の身を案じてくれるロシア人に出会うことができた。

ダモイ

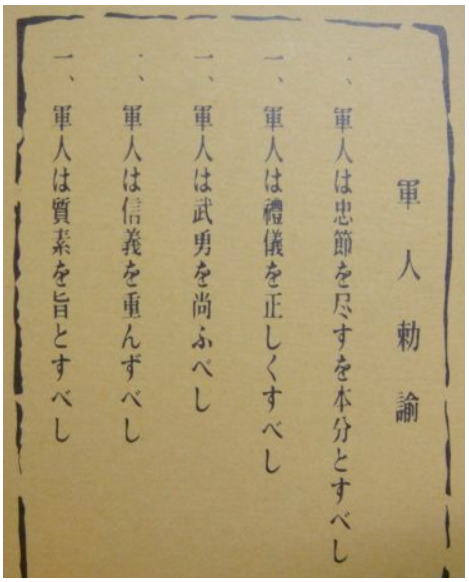
「ダモイ」とは「帰る＝帰国する」という意味のロシア語。「ダモイ」のうわさはどこからともなく出てきた。「正月には日本に帰れる。」とか、「2 月 11 日に帰国だ。」「4 月 29 日には帰れる。」「11 月 3 日にダモイ。」などと噂が流れた。これらはすべて天皇の祝日だった（※）。噂の出所をたどると、いつもある一人に行きついた。この人は自分が噂を流したことすら忘れ、他人からそれを聞いたと信じきっていた。帰国への強い思いが、こうした精神状態を生み出したのだろう。その内「ダモイ。」と叫んで収容所を飛び出し、射殺されてしまうのではないかと心配した。

※「2 月 11 日＝紀元節」: 現在の建国記念の日。神武天皇の即位日として定められた祭日。
※「4 月 29 日＝天長節」: 現在の天皇誕生日に相当。ここでは昭和天皇の誕生日を示す。
※「11 月 3 日＝明治節」: 明治天皇の誕生日。

欠礼

「欠礼」とは上官に敬礼をしないこと。上官侮辱罪で厳罰に処された。点呼の後、准尉が「貴様、欠礼だ。」と大声を出して私の襟首をつかみ「何年兵だ。」と迫ってきた。私の後に兵隊になった者はいない最低の兵籍の私は、震えながら大声で「捕虜初年兵だ。准尉殿は捕虜何年兵か。」と叫んだ。成り行きを見ていた周囲の捕虜たちが「そうだ、そうだ。皆同じだ。いばるな、将校。」と怒号を浴びせ准尉を袋だたき。階級章をもぎ取って裸にして将校室へ投げ込んだ。恐れをなした将校側は階級章をはずし、序列廃止にしようと申し出てきた。呼称も「殿」から「さん」になり、毎朝のシベリアから皇居に向かっての敬礼も、大声で軍人勅諭を叫ぶことも廃止された。圧倒的に多い下級兵は大喜びし皇軍（天皇陛下の軍）の「秩序」は崩壊した。私はちょっとした有名人となった。


軍人勅諭を読む兵士


軍人勅諭

軍人勅諭

一、軍人は忠節を尽すを本分とすべし
一、軍人は禮儀を正しくすべし
一、軍人は武勇を尚ふべし
一、軍人は信義を重んずべし
一、軍人は質素を旨とすべし

新聞屋

「新聞屋」とは、捕虜を共産主義者に洗脳するための「日本新聞」を配るソ連将校につけたあだ名である。最初の冬は大勢が死んだ。まさに地獄だった。春が来て、雪解けとともに食料事情も少し良くなると「新聞屋」が来てソ連を賞賛して共産主義を説くのだが、私たち地獄からの生還者に通じるはずもない。一緒に働いていたロシア人も恐怖政治を恐れていた。ベルト修理の老人は帝政時代を知っていて「スターリン、ヨッポイマーチ。」と言っていた。「ヨッポイマーチ」とはロシア語最悪の侮辱語で使用禁止語だ。けんかでこの言葉を使うと、使った方が負けになる言葉。こんな言葉は日本にはないので訳せない。

「新聞屋」は「諸君が日本に帰ると、ソ連が君たちにしたことが世界中に知れ渡る。諸君はロシア人よりも食料の配給が良いのだから感謝してほしい。諸君がマホルカ（粗末な巻きたばこ）に使う新聞をロシア人に買わせるせいで市民から『新聞が買えない。』と苦情が出ている。たばこに新聞紙を使わないでもらいたい。」と胸を張って言っていた。我々は「新聞紙はトイレにも使っているのを知らんのか。」と反発し、更に新聞の買占めに力を入れた。「新聞屋」は「ロシア人女性に時計を持つものが増えた。理由は分かっている。調べて判明した者は帰国させない。」とも言ってきた。真相は泥棒癖をもつ捕虜が戦友の物を盗んでいたのだ。既に盗癖のある捕虜が 4～5 名が行方不明になっていた。殺されてエニセイ河に流されたのだろうか。それでも盗難は絶えなかった。

この頃からソ連に洗脳され、共産主義を賞賛してスターリンを崇拝する日本人「アクチブ」が台頭してきた。私はアクチブを「スターリンのふんどし担ぎ」と冷笑してきたが「アクチブは早く帰国することができる。」というわさが出て急増し、収容所を制圧する勢いを得た。

「人民裁判」と称して同じ日本人をつるし上げて自己批判を強制。アクチブにすり寄って仲間を密告する者まで出る始末。ついにはアクチブ同士の内輪もめも起こり、互いに密告をし合うなど魂の安売りが横行した。



日本新聞輪読書会



スターリン著「レーニン主義の諸問題」研究会

農場

収容所内でのアクチブのからいばりに嫌気が指していた頃、農民募集があった。私は「自分は生まれながらの百姓」とうそを書き、見事当選した。私以外の 5 人は純粋の百姓だったので彼らを頼りにした。「欠礼事件」で私の名前は知れ渡り、彼らは私に好意的に接してくれた。私のロシア語は彼らより少しマシだった。ロシア人農夫に「マーリンケ・ドバー（小さいのは 2 つ)、ボリショイ・アジン（大きいのは 1 つ）ずつ、畝（うね）に穴を掘って種芋を植えつけろ。」と指示された。6 人の捕虜を監視するソ連兵は 10 代の子供で、一番きれいな娘の家をねぐらに選んでいたが、娘から冷たくされて落ち込んでいる姿は滑稽（こっけい）だった。

畝と畝の間を歩き、両側の畝に芋を植え付け、往復して 4 畝の植え付けを終えたところで昼休みにしようと作業を始めた。シベリアの農園は広大だった。往復どころか折り返し地点まで行ったところで昼になってしまった。弁当は出発地点に置いたまま。夏時間で早く始めたのにと思うとうんざり。「よし。」とばかりに大穴を掘り、植え付ける予定の種芋をすべてその穴に捨てて埋め立て「午後の作業も終了。ノルマ 500%達成。」と笑い転げた。その悪事はすぐに露見し、ロシア農夫からしかられた。こちらが神妙にしかられているのにしかり方が悪い。彼は大まじめに「日本人は芋の植え方を知っていると言うが何にも分かっていない。ここでできるカルトーチカ（芋）は、こんなに大きくなるぞ。」と両手を大げさに広げて芋の大きさを示した。私が思わず吹き出すと、当のロシア人農夫も大笑いした。



コルホーズ（あるいは収容所内）の菜園での収穫作業

大穴に捨てた種芋は掘り返すのは面倒なので、別の種芋を「確保」しなければならない。その夜、私が倉庫番に話しかけて気を引いている間に別の捕虜が種芋を盗みにいった。農民出の捕虜はすごかった。ついでに缶詰や塩漬け肉も盗んできた。盗品は捕虜を受け入れている家族と分け、親交は深まった。

家族たちと親しくなると農作業も楽しく感じてはかどった。捕虜を受け入れた家族は周囲から羨望のまなざしで見られ、捕虜も鼻高々であった。捕虜の１人がリスを捕まえると言い出した。監視兵も誘い丘の上で水汲み馬車を待った。水くみは娘の仕事だった。穴に１人ずつ付き、高い穴から水を流しこむ。監視兵も娘も手伝った。針金を使ってかごを空缶にして風車を作ってやると大喜びされ、捕虜の株は急騰した。

捕虜は機関車修理工場で色々なものを作った。スプーン、フォーク、錠前（じょうまえ）、指輪、剃刀。木工用品では、つっかけ、いす、テーブル、戸棚、机、本棚、食品棚など。「スターリン物資」を拝借して注文主の依頼品を作った。刀は鉄道線路で作ると良く切れると言って注文主に鉄道線路を盗ませたこともあった。私は錠前や指輪を作る専門だった。ロシアは泥棒が多いので錠前をプレゼントすると喜ばれた。指輪は砲金（銅合金の一種で、銅とすずの合金）で作った。やすり、サンドペーパー、仕上げに針の先で磨くと金色に輝いた。農場で「捕虜の金歯と同じ金製だ。」と説明すると農夫の１人が指輪を高く上げ「スコルコ。」（いくらで買う？）という掛け声でせりが始まった。別の農夫が来て「何か欲しいものはあるか。」と聞くので「マホルカ。」と答えると私の帽子を持って走っていき、帽子にマホルカを山盛りにして持ってきた。これでせりは成立。周囲は大笑いとなった。たばこは農家で栽培している自家製だった。

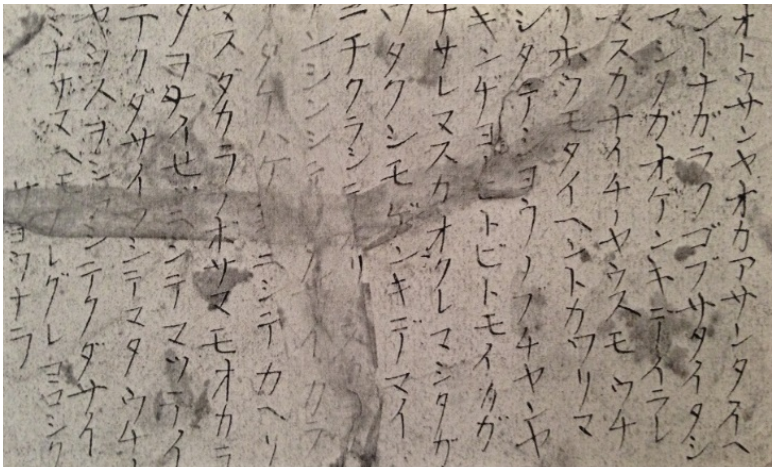
ピスモー（手紙）

工場で「マダーム」が小声で呼ぶのでついていくと人気のない倉庫に連れ込まれた。ゼンギー（お金）を貸せと言うのだろうか。あるいは別の男が隠れていてハンマーで殴られないだろうかと緊張した。「マダーム」は紙と鉛筆（カランダース＝覚えたロシア語）を出し「手紙を書け。」と言った。「字は知らない。」というと「クツズーミ・ドラーク（橋詰はあほだ）」と言われた。捕虜を共産主義に洗脳する「日本新聞」には「アメリカは何％が文盲。ソ連には１人もいない。」と書いてあったのだが彼女は字が書けなかったようだ。

はがき

抑留されて１年ほどたった頃「ハラショ・ラボーター（優秀労働者)」とアクチブの優先順位で、はがきがもらえるようになった。どこにいる、だれといる、何をしている、は書くことを禁じられた。「文面はカタカナで、欲しいものは書きなさい。送ってきたら渡す。」と言われた。アクチブは「スターリン、ダイゲンスイヘイカ、ノ、オカゲデ、ナニフジユウナク、カイテキニ、クラシテイマス。」という模範的な文例を示した。これに各自が欲しい食料、日用雑貨を連ねた。日本でこのハガキを受け取った家族は、さぞかし文意に混乱しただろう。

一番組に小包が届く頃、私にもはがきが回ってきた。私は「キョウアメ　アスハレ」（今日は雨　明日は晴）と書いた。この文面を見た福永隊長は「禅坊主のような文句だ。」と言って、それ以来、私を「珍念（ちんねん)」と呼ぶようになった。「元気でいると安心させよ。」と言われたが私は「これで十分。」と譲らなかった。母はこの文面から「明日は何年先か分からないが、生きて帰ってくると理解した。」と生還したときに話してくれた。



捕虜が書いた手紙（すべてカタカナで書かれている）

数

点呼でソ連兵が捕虜を数える方法は、一人ひとり違っていた。2 列に 4 列に 5 列にと、人によって違うのである。5 列で待っていると 2 列にさせられたりするのだが、氷点下 45 度での並び替えは地獄である。福永隊長の特技は、今朝、何列に並んで待つかを事前に予知し的中させることだった。数をごまかすのも上手で、点呼では他の隊よりも早く屋内に入れたので他の隊からうらやまれたものだ。氷点下 45 度での 5 分と 30 分では天国と地獄である。彼は工場で各職場を回り、捕虜の作業状態を監視する役割だったが、冬は私が仕事する旋盤の前の暖房用スチーム管に腰掛け、居眠りの特技を披露してロシア人から「ヤポンスキー ガマンジェル オーチンハラショ（日本の監督は良いなぁ)。」と言われて「お前も日本人になれ。」とやり返していた。



整列、点呼の様子

ツビティー（凍傷）

ロシア人は障害者が多かった。「戦争か。」と聞くと、酒を飲んで外で寝てしまった人だという。朝、雑巾がけをして手をよくふかなかったのか指先が痛い。工場に着き、手を出すと指先が真っ白になっていた。すぐにロシア人に見せると、大声で人を集めながら私を外に連れ出し、粉雪の上に手を置かせ、交代で汗をかきながらこすって助けてくれた。おかけで指を 8 本切らずに済んだ。「スパシーボー（ありがとう)。」

営倉

準夜勤のある日、旋盤で監督から指示された鋲を削っていると、ボイラー組が「俺たちに必要な鋲を削れ。」と言ってきた。ボイラー組は２人１組。１人はロシア人で、もう１人は捕虜。２人が協力して過酷なノルマを課せられていた。このロシア人は他のロシア人からも疎まれていた札付きの性悪で、相棒の捕虜を大切にせず、嫌われ者で有名だった。私は「監督に命じられた仕事だけでノルマ一杯だ。これ以上は無理。」と断った。ヤツは両手を広げたり片手を交互に上げたりして大声でわめいた。私も手のひらを相手に向け、両肩を少し持ち上げて「ニズナーユ（知らない)。」とあしらった。ヤツは相棒の「引地」にも頼めと言いつけ、引地は両手で私の肩を揺すり「頼む。休ませてくれ。」と懇願してきた。

他のロシア人たちも持ち場を離れて集まってきた。ロシア人がノルマゼロになれば大変なことになるから、事の成り行きに関心をもって見にきたのだ。ヤツは集まってきたロシア人にも応援を求めたが、彼らは同意を拒否するしぐさを無言で示した。皆、私を応援していたのだ。ヤツは烈火のごとく怒り私を脅迫し始めた。私はヤツをにらみ「俺は、俺の監督が命じたノルマを達成するから邪魔するな。」と言うと、見物人から「ウォー。」と私を応援する歓声が上がった。ヤツは「俺が監督だ。」と怒鳴った。「ブロシューウチベヤラボーチ。(うそつけ。お前は労働者だ)。」と私がやり返すと、ついにヤツは「ヨッポイマーチ。」（＝最悪の侮辱語）と怒鳴りながらハンマーで殴りかかってきた。私はスパナで防ぎ、関東軍歩兵として習得した必殺短剣術で反撃。ヤツの額から血が吹き出た。その瞬間、私は「銃殺刑にされる。」と直感。ヤツは逃げ、やじ馬のロシア人たちは私に駆け寄ってきて拍手をしたり私の肩をたたいて賞賛したりする者もいた。彼はまもなく監視兵を連れてきて私は逮捕された。多くのロシア人が私に味方し、けんかの流れを証言してくれた。

銃殺を覚悟したが、泥棒と同じ扱い、眠ると凍死の「営倉刑」だった。営倉に暖房はなく凍死の墓場だ。腹が立ち「死ぬものか。」とがんばった。意識朦朧（もうろう）となりながらも足踏みをしたり壁に頭をぶつけたりして睡魔と闘った。深夜に福永隊長が外の壁を激しくたたき「こら。珍念、眠るなよ。」と一晩中、何度も励ましてくれたお陰で、私は死の営倉からの生還を果たすことができた。





営倉

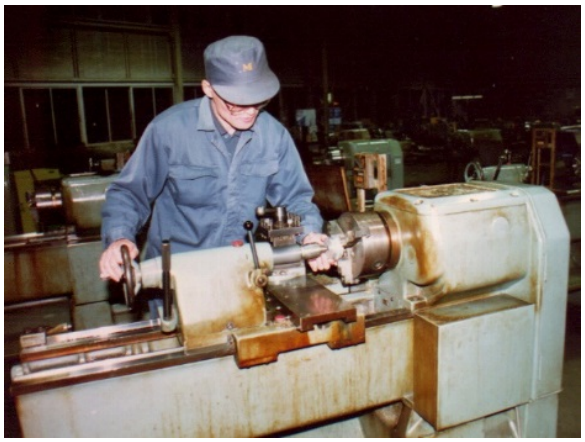
この事件は捕虜にもロシア人にも知れ渡り、私は英雄にされたり無法者にされたりした。私の生還を一番喜んでくれたのは、例の嫌われ者にいじめられていた日本人捕虜の「引地」だった。かの嫌われ者はどこかに連行され、代わったロシア人の相棒は良い人だと引地は喜んでいた。その後、引地はノルマ100%の「ハラショ ラボーター（優秀労働者)」に変身し、食べ物の多いグループに仲間入りした。

私は必死でロシア語を覚えた。なぜなら言葉が出ないと、死に物狂いで達成したノルマを知らない間に横取りさせてしまうからだ。おかげで労働者用の汚い言葉で「ののしり合い」ができるまでになった。

故障

ある日、ボイラーの一基から煙が出なくなった。工場の水道も凍って水が出ず暖房用スチーム管も冷えてだれも腰掛けなくなった。仕事は止まり、皆、火を使う板金鍛冶に集まって暖を取っていた。それから 3 日後、ボイラーの特別鋲を旋盤加工することになるが図面通りにはできず不良品ばかり。マローシェー（娘）はあきらめてリタイア。オーリャーは寒いのに汗をかいて奮闘していた。肩に金モールをつけ、胸に勲章をぶら下げた偉い人が何人か来て、それを更に大勢が取り囲んでいた。女監督はオロオロするばかり。動いている機械はここだけでオーリャーは半泣きの状態だった。

私は不良品と図面の誤差を示しアドバイスした。周囲で声を出して話しているのは私たちだけで、異様な雰囲気だった。監督が私を指名し、オーリャーがほっとした顔になった。私は粗削りでサイズを測りながら正しい寸法になるように機械を調整して 1 本の鋲を完成させ、オーリャーとマローシェーにやり方を指導して 2 人に任せた。私はどよめきの歓声を受け、勲章をつけた偉い人たちは手袋を脱いで私の油にまみれた手に交代で握手をしてくれた。このことが後日、私を助けることになった。



旋盤加工作業

食事当番

私は勤務体系の関係で、昼間、収容所にいることが多かったので、昼食に戻る食事の準備をしなければならなかった。最初の 1 年は食事の分量のことで「血を見る」「殺気立った」けんかがよくあった。ソ連の指示通りに分配すると、不公平なノルマのせいで必ずもめることに。そういうとき社会的地位の高い人の醜さを体験した。偉い人の横暴には「この部屋の 30 人全員、生きて帰ろう。」と戦友と共に押し切った。「いただきます。」ではなく「配分に納得。」の声で食事を始めた。病院使役から帰った者は、青ざめた顔をして食欲がなかった。「腸や胃、内臓や目玉を土に埋めさせられた。」と言っていた。私は「大変な国へ連れられてきてしまった。」と思った。



食事の分量に目を光らせる捕虜

食料倉庫番

休日には捕虜の食料倉庫番に出された。私は、ロシア人老人と犬で番をしたが泥棒によく入られた。倉庫番と泥棒がグルなのは「公然の秘密」だった。

収容所の所長は陸軍中佐で、独ソ戦で負傷したため杖をついていた。彼が向こうから来たので、犬に「うー。」とけしかけた。犬は腹ばいになってうなり始めた。老人は「やめろ。」と手で合図。中佐が前を通りすぎたとき、犬は腹を地面にこすり、飛び出し準備完了の姿勢となった。中佐をやり過ごしたところで黙って犬の尻をたたくと、犬はほえながら中佐に飛びついた。中佐は良い方の足で犬を蹴ろうとして、悪い方の足がすべり転倒。そこで私はかけていって犬を引き離してやった。中佐は紳士らしく「スパシーボー（ありがとう）。」とお礼を言った。中佐が去った後、老人と肩をたたき合って大笑い。更にこの一件を収容所で皆に話して、もう一度大笑い。「そんなことばかりしていると、帰れないぞ。」と言う者もいた。

万年筆

軍隊に入ったとき、ネーム入り万年筆をもらった。満州を逃げ回っていたとき、食べ物と交換しようと試みたが「名前が彫ってあるので駄目だ。」と断られた。日本軍が勢いを取り戻したとき、殺して取り上げたと疑いをかけられるからということだった。

その万年筆を、ソ連軍の将校当番になった斎藤が貸してくれと言うので貸した。するとその将校がそれを見て欲しいと言い出し「どうする。」と斎藤が相談してきた。「俺が持っていてソ連兵に見つかれば略奪されるだけだから構わないよ。」と返事をした。将校が直接お礼を言いたいと 1 個 3.5 kgの黒パンを持ってニコニコしてやってきた。一度、黒パンをまくらにしたかったので私もお礼を言った。1 分ほどまくらにして、戦友 6 人とペロリと平らげた。ソ連は何もないところだと思った。



黒パン



当時の万年筆

思想委員会

作業を快調に飛ばして早々にノルマを達成したところで、余った時間に他の職場探検に出かけた。部屋の中から悲鳴が聞こえたのでのぞき込むとそこは歯医者で、足踏みベルトで機械を回し治療していた。

職場に戻ると旋盤が壊れていた。「怠けたいから壊したのか。ソ連の生産力を妨害、低下させたいのか。」と取り調べを受けることになると福永隊長が教えてくれた。遊び歩いていたとも言えず「不注意でした。」の一言で押し通した。職場のロシア人が次々に証人として呼ばれた。いつか殴ったヤツもその 1 人だ。「態度が大きい。ロシア人にいばって命令して使っているのを見た。」という者もいた。「ああ、本当に帰れなくなったな。」と思った。オーリャーが発言を求め「ボイラーが故障したとき、クツズーミが工場の操業を早くさせた功労者だ。あの時は、ここにいるだれよりも一番貢献した。」と証言してくれた。

私は「同志。」と呼ばれて釈放された。ロシアは死なない程度にしか食べさせない国だった。楽しみはうわさ話だけだった。この事件のお陰で私はまた有名人となった。

選挙

抑留中にソ連の総選挙があった。投票日を休日にして全国民に投票させていた。定数分だけ共産党員が立候補。「アホか。」と言いたかった。地区党員が机の前に座り、その前で投票する仕組みだった。棄権すると強制労働 25 年を課せられると聞いた。選挙の翌朝、新聞屋が捕虜を集め「選挙は同士である共産党員が全員当選しました。これは世界の労働者、農民の勝利です。」と叫んだ。捕虜たちは間髪入れず「ウラー。」と大歓声。アホのアクチブは「ソ連万歳。スターリン大元帥陛下、万歳。」とリード。私たちも大声で唱和させられた。これに遅れるようなことがあれば、アクチブに反動分子でつるし上げられる。全員が当選という茶番選挙を行い、それをソ連は世界に宣伝した。

有給休暇

アクチブが捕虜を集め勉強会を始めるという。「腹が減って、そんなものを聞けるか。」などと言おうものなら一発でリンチに。ソ連労働者の有給休暇日は 1 年に 48 日あり、危険労働は更にプラス。医者、看護婦、運転手も危険労働だと聞いた。有給休暇にはソ連全土にある「休養の家」で家族一緒に給料付きで優雅なサービスを受けると宣伝されていたが大うそだった。セーパー（鉄を直線に削る機械）工場に勤める二人が結婚したが、結婚式当日に休暇を取れたのは妻だけで、夫は休みを認められず強行に休むと、式直前に官憲が夫を逮捕し工場牢に入れてしまった。オーリャーが慰めにいこうと私を誘うので工場牢見学を兼ねて同行した。新郎は「裸足刑」で震えていた。二日酔いで仕事をサボったイワレンコフも入れられていた。「囚人」と話すと反逆罪にされるので沈黙を守るのみ。

眠い（スパーチコーチス）　おやすみなさい（スパコイノーチ）

私が働いていた旋盤の前には太い暖房用の鉄管が通っていて、この上に板を置いて腰掛けたり寝転んだりすることができた。日本人の捕虜は「大の字」に寝転んで寝るが、ロシア人は「両ひざを抱えて」寝る。「日本人のように伸び伸びと寝ろ。」と私が言うと「それでは寝ている間に靴を盗まれる。」との返答。日本のことわざに「寝首を掻く（かく）」（＝眠っているところを襲って首を切り取る）というのがあるが「靴」の方が平和だと思う。

子は宝

私生児（法律上の婚姻関係にない男女間に生まれた子）は「スターリンの子」と呼んで育てるというのがソ連。未亡人や兵士の妻が妊娠しても大喜び。子供は集団で育て、優秀な子は英才教育、そうでない子は労働者。いずれも国の役に立つように育てる。女囚ですら妊娠する。相手となる男を捕えられるかどうかは女の努力次第。ドイツ、ポーランド、イタリア、バルト三国、日本の諸外国から連行されてきた捕虜も「標的」だったようだ。「女囚」が妊娠すると「女」に昇格となり特別扱い。6 人だか 8 人だかを生むと「祖国の母」という称号が与えられ勲章が与えられたそうだ。

スターリンは魔法使いのようだ。難癖をつけて男を女から遠ざけ、女に子どもを産ませて「祖国の女」から「祖国の母」にしてしまった。体力 3 級の営繕係が保育所から帰ってきて「どう見ても日本人にしか見えない子供がいた。」と言うので「まさか、お前の子じゃないか。」とからかうと真顔で否定したので大笑い。彼は営繕係といっても、本来なら入院しなければならないほどの病人だった。「生きて帰れよ。」という思いだった。

機関車

ノルマをやり遂げ、例によって工場探索をしていると、直線 2 キロの試運転線路に機関車が 1 台止まっていた。機関車の上から労働者が呼ぶので上がっていくと男が「太いボルトを締めたいが合うナットがない。大きいナットをねじ込み、ボルトの頭をハンマーでたたいてナットが締まっているようにごまかすから、金鋏（かねばさみ）でナットを持ってくれ。」と頼まれた。私が「そんなことをすると蒸気の圧力で釜（かま）が爆発するぞ。」と警告すると「スターリンはアホだから、部品もそろえずに出庫させろと急がせる。2 キロ走れば合格だ。お前はこの機関車の番号を覚えておけ。爆発するからダモイ（帰国）のときに乗るなよ。」と言った。2 人で肩をたたき合って爆笑した。



蒸気機関車（現クラスノヤルスク駅に展示）

ダモイ（帰国）

1947 年（昭和 22 年）の春、ロシア人の監督が「近く、帰れる。」と教えてくれた。理由は私たちの収容所にソ連の囚人が入り、仕事も交代するからということだった。そして「囚人と一緒に働くのは嫌だ。」とも話していた。

工場労働者が両側に並び「ドスブイダーニア（さようなら)。」と別れを惜しみ、泣いてくれる人もいた。共産主義教育で「言論・集会・結社・宗教の自由が認められ、ソ連は労働者、農民の天国だ。」と教わったが、国民は恐怖政治と密告におびえ消された人も見てきた。収容所は穴倉監獄であった。

日本の将校は「貨車に乗る人員を決める。」と言い残して手を振って一足先に出ていったが、私たちが駅に着くとだれもいなかった。福永隊長たち将校が帰ってきたのは、それから 2 年後だった。この時の模様を福永は「倉庫へ連れていかれ、野菜の塩漬け樽（たる）を一人一樽、道路を転がしながら別の収容所に移された。」と後に語った。気も狂わずによくぞ帰れたと思う。福永たちは地理的に毎日のようにダモイ貨車を見せつけられていたはずだ。心理的苦痛で、発狂寸前であったろう。

私たちを乗せた貨車は東へひた走った。人は生きて生活をすると「物や道具」が増えるものだが、私たちは無一物の丸裸にされてしまった。それでもこのとき私たちの顔は帰国できる喜びで輝いていた。イルクーツクに汽車が停車すると、隣の線路に女と子供と老人が乗った客車が入ってきた。隣の列車の老人に「どこに行く。」と尋ねると「ウクライナから来てサハリンに行く。理由は分からない。ある日、町の男たちが工場に働きに出た後、入れ違いに兵隊が来て連行され、家族と連絡もさせず、この汽車に乗せられた。サハリンはどんな所だろう。」と話した。松村（八戸市出身の漁師）が「サハリンはウクライナより狭く、土地はやせていて冬は凍るので鳥も飛ばない。」と教えた。慰めの言葉もなかった。男たちが働きに出た隙を狙って、留守家族を国家権力が拉致（らち）したというわけだ。「ソ連は労働者と農民の天国。笑わせるな。」と思った。この光景を目の当たりにしてもなおアクチブは「スターリン万歳。」を強要し「天皇島、敵前。上陸準備。」と叫んでいた。アクチブが乗船していたら「祖国へ泳いで帰れ。」と船から落とす作戦を練った。

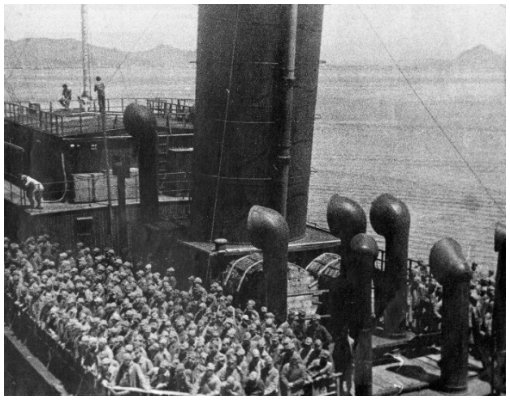




ダモイ貨車とそれを見送る日本人捕虜

ナホトカ

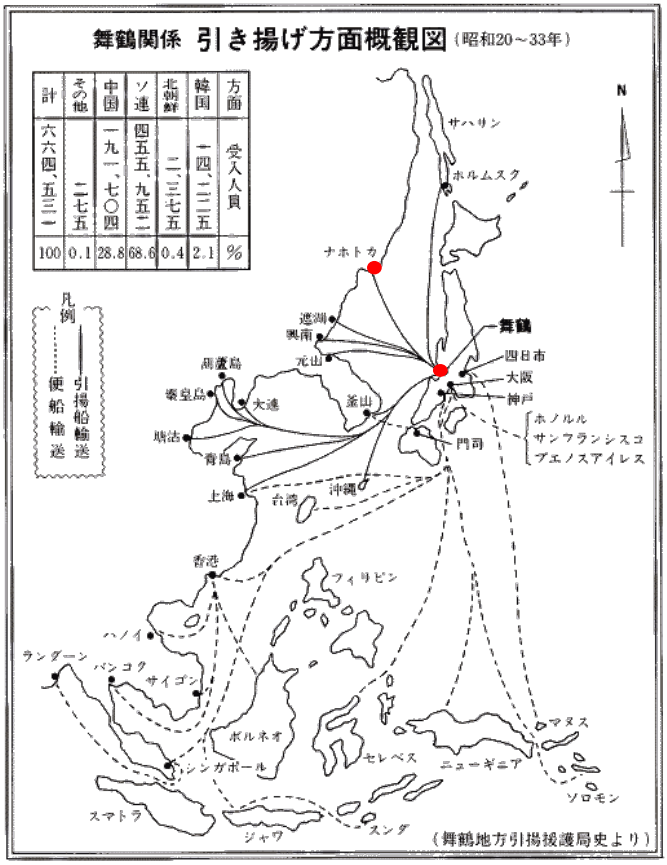
ナホトカはロシア連邦の極東沿海地方に属している商港都市である。ここで 1、2、3 とテントの収容所を繰り上がり、3 のテントに入ると帰国の乗船待ちとなる。3 へはなかなか進めなかった。待機中に、港湾、建築、道路、貨車や船舶の荷作業などをさせられた。ここを仕切るのはアクチブでスターリン以上の悪だった。機嫌を損ねると「シベリアに逆送させるぞ。」といばり散らしていた。小倉（神奈川県）は「橋詰、何も言うな。お前一人の言動で全員が戻されるぞ。」と言いながら私のそばから離れず船に乗るまで私を監視していた。小倉がいなかったら私は帰国できなかったかもしれない。



引き揚げ船上の人々



引揚船上の民主運動



引き揚げ方面概観図

シベリア　いろはカルタ

い	一番最初に陰毛を剃（そ）られ	の	農場で生き返る生野菜
ろ	露助（ろすけ）はうその固まり	お	起きてびっくり隣の死体
は	働かされて殺されて	く	食いたいだけの夢を見る
に	憎いは露助とシラミの大群	や	やっぱり今年も帰れない
ほ	欲しいものは温かさだけ	ま	まつげに氷柱（ひょうちゅう）　零下 30 度
へ	弁護士なしの人民裁判	け	消し炭　粉にして 腹の足し
と	盗（と）られ奪われ丸裸	ふ	不意に撃（う）たれて殺される
ち	血を吸う露助とシラミ南京虫	こ	凍れば無臭　大便　小便
り	理論　屁理屈（へりくつ）　日本新聞	え	栄養失調　チフスに赤痢
ぬ	盗まれぬもの命だけ	て	手土産は共産主義を持たせ
る	留守を狙ってソ連兵	あ	明き盲目の夜盲症
を	拝むは天皇からスターリンへ	さ	裁かれつるされ発狂自殺
わ	若い命もアッと死ぬ	き	聞いた天国　来たら地獄
か	寒暖計はマイナス 40 度	ゆ	夢はふるさと　味噌汁（みそしる）梅干し
よ	よろめいても生きている	め	飯（めし）とは塩汁だけ
た	たばこの代わり乾燥馬糞（ばふん）	み	惨めな尻（しり）の肉　あばら骨
れ	零下 50 度　原野で労働	し	死んだら白樺の肥やし
そ	ソ連は資本家以上に搾取王国	ゑ	得体（えたい）の知れぬオルグ天皇
つ	ついに出た発狂者	ひ	拾ったじゃがいも馬の糞（ふん）
ね	念入りに食事分配　流血騒動	も	問答無用と資本主義幇助（ほうじょ）罪
な	涙も涸（か）れた強制労働	せ	せめて死ぬヤツに味噌（みそ）汁もなし
ら	来年は日本もあきらめる	す	捨てた命は全部無駄死
む	無理なノルマは露助も一緒	ん	運命ではない　シベリア抑留
う	うたた寝は凍死の一里塚	京	京の夢ダモイ（帰国）の夢
ゐ	医務室に聴診器　薬なし		









帰国とその後

屈辱の帰国

1947 年（昭和 22 年)。地獄で白樺の肥料やキャビアにもならず、夢にまで見た祖国に上陸するや、机の上に着ていた物を全部脱がされ、50m ほど先にあった別棟の入浴場まで「フルチン」で歩かされた。アウシュヴィッツでガス室に送られるユダヤ人を体験させられた思いであった。入浴中に数少ない持ち物が全部調べられた。「こんな仕打ちは極悪人スターリンですらしなかった。」と抗議すると、「マッカーサー大元帥陛下の命令だから従え。」と言われた。「これが俺たちの帰還への仕打ちか。俺たちが帰ってくると迷惑なのか。」と悔し涙で食いついた。



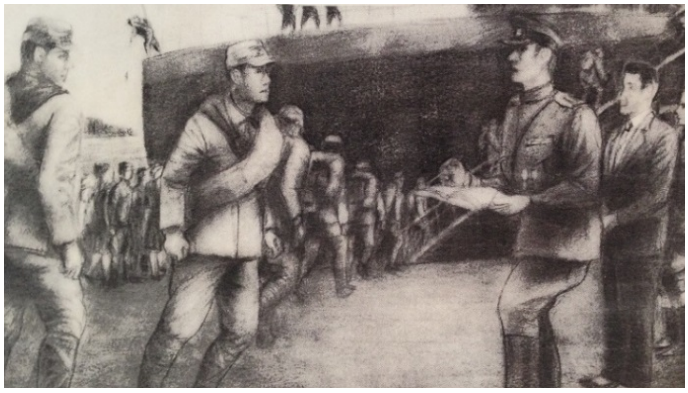
マッカーサー



出迎える家族



船上の帰還兵



上陸

進駐軍

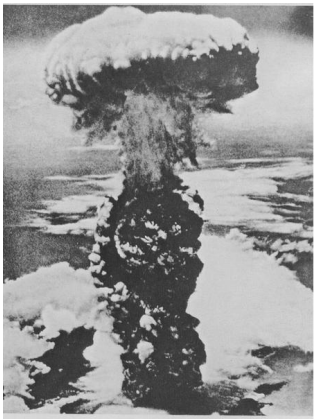
家に帰ると進駐軍から呼び出しがあった。「君は橋詰四郎、頭髪は黒、目は茶色、顔に特徴になるホクロなし、右手に刀傷あり。間違いないか。」と尋問された。自宅から 4km 以上の行動は申告せよとの厳命を受けた。その後、配達された郵便物は、ハガキはもちろん封書も開封されて、文面側 1 枚 1 枚に「検閲済」の濃い紫色のスタンプが「お前を監視しているぞ。」と言わんばかりに押され、文字が満足に読めない有様だった。

深夜に帰宅し家に入ろうとすると背後から「橋詰さんですか。」と呼ばれ振り返ろうとすると「そのまま前を見ていなさい。」と丁寧な口調で言われ「どこへ行っていましたか。」と問われた。反抗的な態度の中国人を痛めつくしてきたことを思い出し、逆らわずに素直な態度で対応した。世間話を 2、3 して気付くと声の主は姿を消していた。

私はいつ解放され自由の身になれるのだろうかという恐怖。シベリアで消されたロシア人を見てきたが「まさか日本で自分が。」と影におびえる日々。1950 年（昭和 25 年)、何度目かの呼び出しがあり出頭した。半そで姿をしていた記憶があるので夏の頃だったと思う。毎回、質問にだけ答えていたが、この時、取り調べ室のいすに座ると同時に私は叫んだ。「私はカトリック信徒だ。」正面に座っていた彼は素早く立ち上がり、私を指さしながら「ネームデー（※）を言え。」と怒鳴った。私も反射的に立ち上がり不動の姿勢で「12 月 3 日、フランシスコ・ザビエル。」と大声で即答した。これを境に郵便物の検閲も尾行もなくなった。残る制限は 4km 以上の行動だけだ。試しに無申告で登山や魚釣りにいってみたが何も起こらなかった。ネームデーが私を解放し「自由の身」にしてくれたのだった。

※「ネームデー」: name day、聖名祝日。自分の洗礼名と同じ名の聖人の祝日。

シベリアの地獄から生還して知ったのは、私たちのために拝んでくれた広島の悲劇だった。上空で爆発した、たった一発の原子爆弾が広島を壊滅させ、14 万人余の市民を殺戮（さつりく）した。犠牲者はその後も増え、慰霊数は 292,325 柱に達している。



原子爆弾のきのこ雲



熱線により重度のやけどを負った犠牲者

舞鶴引き揚げ桟橋の復元式での奇跡

シベリア凍土に埋められた山本美智子さんのお父さんの遺骨が、彼女の元に戻った奇跡を振り返ると「皇国（みくに）の母」の歌詞を思い起こす。

・・・

歓呼の声や 旗の波　あとは頼むの あの声よ
これが最後の 戦地の便り　今日も遠くで ラッパの音(ね)

思えばあの日は 雨だった　坊やは背(せな)で スヤスヤと
肩を枕に 眠っていたが　頬に涙が 光ってた

ご無事のおかえり 待ちますと　言えばあなたは 雄々しくも
こんど逢う日は 来年四月　靖国神社の 花の下

東洋平和の ためならば　なんで泣きましょう 国の為
逝(ち)ったあなたの かたみの坊や　きっと立派に 育てます

・・・

1944 年（昭和 19 年)、当時 1 歳の美智子は 23 歳の母親の背中におんぶされ、28 歳の父親を天皇の命令で戦地へ送ったが、父の記憶など 1 歳の美智子にはあるはずもなかった。

夫の帰りを待つ母に、厚生省から「山本治はシベリア生還者らの証言により昭和 21 年 1 月 15 日、または 2 月 12 日、または 2 月 14 日のいずれかにシベリアで死亡した。」と知らされ「遺族が死亡日を決めるように。」と言われて真中の日の 2 月 12 日と決めた。

美智子の母は昭和 57 年 61 歳で、23 歳のときに別れた夫の元へ旅立った。母の骨を墓に納めた美智子は「この墓には父の骨は入っていない。死んでも一緒になれない戦争が憎い。戦争に巻き込まれた母があまりにも哀れで不憫（ふびん)。」と思い、また見知らぬ父を慕う情念が一気に噴き出て、記憶にない見知らぬ父を探す決心をする。

美智子は、有名な温泉地の旅館組合に「シベリア生還者の集まり」の情報提供を依頼し、知らせを受けると駆けつけ「私のお父さんを知りませんか。」と聞いて回っていた。この美智子の父探しのうわさは私たちシベリア生還者の耳にも届いた。この美智子の思いを当時のマスコミは無視して取り上げなかったようだ。美智子の気持ちは、地獄のシベリアからの生還者にしか理解されない･･･。日本は平和ボケの国になっていた。

シベリア生還者は舞鶴市に、日本にただ一つ、抑留の史実を残す引き揚げ桟橋（さんばし）の復元を2600万円集めてお願いした。



引揚者と出迎える人々



引き揚げ船と桟橋

戦後、大陸などからの帰国者約66万人が第一歩を記し、歌謡曲「岸壁の母」の舞台にもなった「引き揚げ桟橋」が京都府の舞鶴港に復元され、1994年（平成6年）5月27日に完成式が行われた。復元された桟橋は木製で、長さ15m、幅4m。かつての桟橋跡（あと）に復元された。式の後、引き揚げ体験者90名を乗せた汽船が桟橋に着岸した。エプロン姿の女性や、名前入りの幟（のぼり）をもった人たちが当時の様子を再現して出迎える中、当時の軍服や軍帽姿の人たちが桟橋に降りた。





復元された桟橋と引き揚げ再現の模様

私たちは前もって美智子に、父の名前を大きく書いた幟を持って桟橋に立ち、大きく引き伸ばした父親の写真も準備するよう勧め、美智子はそれに従った。

ここ
↓



引き揚げの様子の再現

桟橋に降り立った人たちの中に、静岡県松崎町の須田がいた。須田は上陸するなり、幟を持つ美智子に「俺は山本治さんをシベリア、アラチカ炭坑で埋めてきた。」と伝え、美智子が父の写真を見せると「間違いない。」と証言した。当時の須田の年齢はわずか 17 歳。兵隊でなく満蒙開拓青少年義勇軍の少年であった。

ソ連は軍人だけでなく 45 歳までの男子と、国際法に抵触している 18 歳未満の子供も含め、70～80 万人の日本人を拉致（らち）。須田もまた、その一人だった。

私たちは復元式の 2 ヵ月後の 7 月、戦友が永久凍土に眠るシベリア鎮魂墓参を予定していた。須田に埋葬場所と山本が身につけていたもの書かせ、骨を持ち帰るように墓参者の望月に頼んだ。望月はアラチカ炭坑に 2 年、ライチハ炭坑に 2 年いて、1950 年（昭和 25 年）に生還した。私と同じく 8 月 21 日まで強力なソ連戦車軍団と死闘を展開した関東軍第六国境守備隊の猛者（もさ）であった。

7 月 29 日、望月は地図で埋葬場所を見つけて掘ると、須田の証言通り「祈る武運長久　山本治君」の千人針を巻いた遺体があった。一目で山本だと分かったそうだ。須田の記憶力のすごさには驚いたが、17 歳の少年にとって、それはあまりにも残酷な出来事で、生涯忘れることのできぬ地獄体験だったのだろう。

8 月、お盆前、美智子は父の骨を納骨することにした。骨壷（こつつぼ）を抱き「お母さん、お父さんをやっと探して連れてきたよ。」とお墓の前でむせび泣いた。私たちは骨を渡せた喜びよりも悲しみが先立ち、泣き崩れる美智子を残し、互いに目配せして無言で墓前から去った。

父の遺骨をお迎えできて　～山本美智子

戦況が悪い、1944 年（昭和 19 年）8 月に父は 28 歳で出征したのですが、私は 1 歳 8 か月。

その時に写した記念写真と満州の軍隊からきた軍事郵便はがきの 62 通が唯一の形見であり、その事しか記憶にない父を慕っておりました。

思えば敗戦後、幼い頃、母の手に引かれて舞鶴の桟橋（さんばし）に「父が帰る。」と思い何回も訪れ、今度もだめだったかと母はつぶやいて、泣きながら満員電車で愛知の我が家に帰ったことは忘れは致しません。

春、5 月の桟橋復元竣工式に父の慰霊になればと参加させていただき、悲しみがこみあげましたが、気持ちも吹っ切れて安心しました。

これで私の戦後は終わりました。

引揚港　舞鶴の記録

引揚時期：1945 年（昭和 20 年）10 月 7 日～1958 年（昭和 33 年）9 月 7 日

南朝鮮	14,225 人
北朝鮮	2,375 人
ソ連	455,952 人
中国	191,704 人
その他	275 人
引揚者数	664,531 人
引揚船就航のべ船数	426 隻

第２章　関東軍兵士の軌跡

棄民のあしあと　～夏梅誠一の証言

ソ連編

いささか旧聞になるが、敗戦から 48 年後の 1993 年（平成 5 年）8 月 12 日付け新聞各紙は「敗戦時、旧満州に在留していた民間人・将兵捕虜 180 万人の棄民化計画が『大本営報告書』によって判明した。」ことを大きく取り上げて報道した。それはロシア公文書施設で発見されたもので、同報告書によると「捕虜となった 180 万日本人をソ連指令下に移し、国籍離脱まで想定。現地に土着させ、事実上『棄民』する方針を固めていた」というものだった。



40141号　0446　京都府京都市　京都新聞　1993年(平成5年)8月13日　金曜日　(日刊)

終戦直後の旧満州、朝鮮半島

邦人180万人を「棄民」化

計画、大本営参謀の報告書で判明

現地に「土着」労働力を提供

天皇制維持へ軍部がソ連

ロシア軍関係の公文書施設で発見された朝枝大本営参謀の報告書のコピー

「国体護持」に犠牲いとわず

【モスクワ12日共同】十二日明らかになった百八十万人の邦人の棄民化を提言する朝枝元大本営参謀の報告書は、「国体護持」（天皇制維持）のためには一般国民のいかなる犠牲もいとわなかった当時の日本指導部の考え方を示している。対ソ終戦工作の中枢にいながら真相について口を閉ざしてきた歴史の証人たちの責任も厳しく問われよう。

対ソ終戦工作に関しては、終戦直前に近衛元首相は、終戦直前に近衛元首相は一歩も譲らない代わりに①旧満州、朝鮮半島などは割譲②大陸の一部兵力の労働力提供―を柱とする「和平交渉の要綱」をまとめた。

元捕虜が抑留中の未払いの労働賃金の補償を国に求めている、シベリア抑留訴訟では、同要綱の存在自体は認められたが「一時預託」の申し入れがソ連に伝わったかは不明との判断が示された。

このため、朝枝報告書とこれに続く関東軍参謀長の間聴所見、同軍司令部の文書は、日本側が抑留の過ソ連への捕虜使役申し出の大本営のエリート将校が、対ソ終戦工作で実務文書の作成などを通じ中枢の動きに深く関与していた事実を改めて裏付けた。陸軍のエリートコースで大本営出身者が多かった関東軍の一部将校も重要な役割を演じたとみられるが、十分な証言は得られていない。元抑留者の高齢化が進む中で、昭和史最大の暗部であるシベリア抑留の真相解明が急がれる。（解説）

【モスクワ12日松島共同記者】終戦直後の混乱の中で、当時の大本営が旧満州や朝鮮半島の民間日本人やソ連の捕虜となった軍人計約百八十万人について、ソ連の指令下に移し、国籍離脱まで想定、病人などを除き現地に「土着」させ事実上「棄民」化する方針を固めていたことが、ロシア軍関係の公文書施設で発見された当時の朝枝繁春大本営参謀名の視察報告書で十二日、明らかになった。旧満州で関東軍司令部がソ連に捕虜の使役を申し出た昭和二十年八月二十九日付の文書が最近明るみに出たが、朝枝報告書はこの文書の三日前の同月二十六日付。朝枝報告書に「全面的に同意」するとの関東軍総参謀長の同二十九日付「所見」も同時に発見された。これにより、結果的に六十万人のシベリア抑留の伏線となった関東軍の使役申し出は、日本の国家意志だった可能性が極めて強まった。

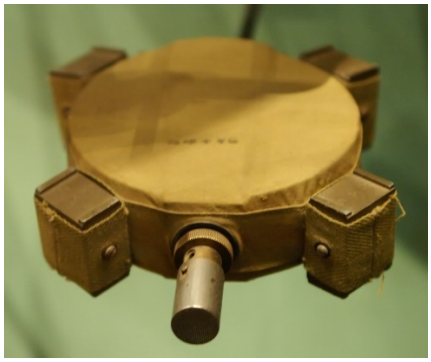
「関東軍方面終戦状況ニ関スル実視報告」と題された朝枝報告書と関東軍総参謀長の「所見」ニ関スル所見並ニ基礎資料」は、シベリア抑留関係者で組織する全国強制連行真相究明協議会（山形県の斎藤六郎会長）が、戦後の天皇制護持を図る日本政府と戦争責任を厳しく追及されていた米国との交渉を通じ、戦争責任を厳しく追及されていた米国との交渉を通じ、戦争責任を厳しく追及されていた米国との交渉を通じ、

私は 1945 年（昭和 20 年）8 月 16 日、北満の孫呉でソ連軍の捕虜となった。孫呉は旧満州（中国東北地方）の北緯 50 度辺りにあり、その北東を流れる黒竜江を境にソ連軍と対峙（たいじ）していた国境守備隊を統轄する第四軍司令部が駐屯する要衝だった。私がソ連軍の侵攻を知ったのは、孫呉北方 250km の山神府（サンシンフ）下士官候補者教育隊に派遣されていた 8 月 9 日早朝の点呼の時。高い金属音を響かせた飛行機が上空を旋回していったその直後だった。この時、私は脳裏で 6 月までいた第六国境守備隊の苦戦を想像した。ソ連軍の攻撃を 3 時間、どのように防御しているだろうか。そして全員戦死の玉砕を。ソ連軍侵攻の報に兵隊たちは緊張した。ドイツ降伏後、ソ連は戦車・重火器を続々とソ満国境に配備増強し、我が国境守備隊は主要兵器と兵員の多くを南方戦線へ移動していたことを、ここにいる兵士たちはよく知っていた。それだけに兵士の中に重苦しい空気が漂っていた。



その夜、兵舎に火を放ち、我が大隊は孫呉を目指し南下した。断続する雨の中を歩き続け、4 日目の夕刻、小興安嶺山脈を背にした孫呉陣地へ到着。白樺（しらかば）や櫟（くぬぎ）などが疎生（そせい）する林の中で野営した。誰もが死を覚悟して「もう日本には帰れることはあるまい。」という思いに唇を噛み、まんじりともしないまま夜明けを迎えた。早々、私たちはミグ戦闘機の爆音にはね起きた。ミグは陣地上空を我がもの顔に旋回し、操縦士の顔が見える至近距離から機銃掃射を反復した。我が方は機銃と小銃で反撃するが、対空砲火が炸裂（さくれつ）することは一度もなかった。

白夜の空が暮れ色に染まるころ、小隊に集合がかかった。教官だった見習士官は「わが小隊に挺身奇襲隊の命令が下った。」と緊張の面持ちで言い、編成、任務を伝え、傍らに置いた 30 ㎤の木箱を兵隊に持たせ「これが破甲爆雷（はこうばくらい）である。順番に回すように。」と言った。私たちはこれが敵戦車に体当たりする日本軍の新兵器であると聞いてはいたが実物を見るのは初めてであった。私はこの木箱を受け取り、ずっしりと火薬の重さを感じた瞬間、動悸（どうき）は高まり全身に恐怖が走った。



九九式破甲爆雷

山神府出発以来、私の頭の片隅にはいつも「死」が居座り続けていた。雨の中を居眠りしながら歩いて前の人にぶつかったとき、小休止でちょっとタバコに火をつけようとした一瞬にも「死」が頭をよぎり振り切ることができなかった。しかし今、「漠然」とした死ではなく「確実」な死の前に自分は生きていることを知らしめられた。ソ連の中型戦車でも擱座（かくざ）できるというこの爆雷を次の者へと次々に回した兵隊たちの胸の内は、「我一死、皇恩に報いん。」などという志とは程遠かった。私も他の者も 5 年以上も軍隊にいて、何度も満期除隊を無視され、望郷の一念で今まで奉公してきたのだ。「こんな破甲爆雷を抱いてソ連戦車と心中など、受け入れることはできない。」という悔しさがにじんでいた。

8 月 14 日も豪雨。早朝、厠（かわや）の帰りに草むらの中でハッとして立ち止まった。びしょぬれになった兵隊たちがこちらへ歩いてくる中に、一緒に派遣された K がいた。挺身（ていしん）奇襲が始まっていたのだ。私は思わず身震いした。K は目をギラギラさせながら「敵戦車の動きを捉え奇襲決行と命じられ、各自、導火線に点火しようとしたが、雨にぬれ、点火不能で処置なしと引き帰った。」と早口にしゃべり指揮天幕へ報告にいった。

翌 15 日、久しぶりに良く晴れた。ミグは一機も姿を見せなかった。昨日まで絶え間なく響いたミグの爆音と「ドドッ。」という機銃のうなり「バリバリッ。」の炸裂（さくれつ）音がうそのように静まりかえっていた。兵隊たちはびしょぬれの軍服と異臭を放つ衣服を脱ぎ捨てて木の枝につるし、裸のまま陣地を守る壕（ごう）や蛸壺（たこつぼ）を懸命に掘り、来たるべき地上攻防戦に備えていた。この孫呉陣地死守を命じられていた 2 万ともそれ以上とも聞いていたこの大部隊は、決戦を前にして一時的にも停戦など考えられなかった。私たちはソ満国境の真っ只中にいたのである。



ミグ戦闘機

私は山神府へ派遣される 1945 年（昭和 20 年）6 月初旬まで、第六国境守備隊歩兵十中隊で内務係准尉の助手をしていた。捨て石部隊の第六国境守備隊の任務は「全員玉砕してでも 3 時間は死守せよ。」で、この 3 時間は孫呉以南の関東軍の戦闘準備時間と言われていて、転属で離れる時は一抹の寂しさもあったが、3 時間だけの「死」の守備隊から逃れられたという安らぎもあった。営外（兵舎の外）居住者である准尉が帰ると、マル秘書類の綴り書類や新聞を読み、将校以上しか知ることのできない情報を一兵士として知る役得もあった。

1944 年（昭和 19 年）に入ると 1 月 31 日、米軍はマーシャル諸島のグエゼリン島とルオット島に上陸。守備隊 6,500 人が玉砕。更に 17～18 日の両日には連合艦隊の南太平洋最大の軍事基地トラック島が米空軍の大空襲を受けて壊滅。しかし新聞報道は「我に必勝の信念あり、一億この難関に挺身せん。元寇（げんこう）以来、戦火帝国領土に波及。」との見出しで「不滅神州の一角に敵兵を上陸させ目下果敢な遊撃戦を展開しつつ…。」というような記事ばかりで、事実の推測は容易ではなかった。しかしガダルカナル以来「転進」や「玉砕」記事が増える一方なので、戦況は日に日に我方に不利であることは、最果ての北満国境守備隊員の私にも本当の状況が伝わってくる思いであった。

1945 年（昭和 20 年）の 5 月、十中隊に 16 名の初年兵がきた。彼らは全員丙種合格の軍人には向かない体力の持ち主で、年齢も 35～36 歳のオッサンたち。もとは商店主や病弱の家庭療養者で、徴用工として軍需工場で働かされ、今度は帝国陸軍に召集されたという。我々が任せている「銃後」には「男」はおらず、子どもと老人と女ばかりとなっていた。その年の 2 月、ヤルタ密約でスターリンが日本参戦を約束したこと、8 月 6 日、9 日に広島・長崎へアメリカが投下した「新型爆弾」の威力の前に日本の命運が決まっていたことなど、私たちは知る術もなかった。

8 月 15 日の午後になって「戦争は終わったらしい。」という情報が兵士たちの間を駆け抜けた。「天皇陛下のラジオ放送があったらしい。」とも流れてきた。「どこの情報だ。」「司令部の兵隊たちがそう言って騒いでいる。」私は天皇陛下が直接ラジオ放送などとは信じられなかった。命令を受領してきた班長が我々に「朕深く世界の大勢と帝國の現状とに鑑み、非常の措置を以て時局を收拾せんと欲し、茲に忠良なる爾臣民に告ぐ。朕は帝國政府をして、米英支蘇四國に對し、其の共同宣言を受諾する旨通告せしめたり。(※)」と読み上げ、続いて「我々はあくまで御聖断に従い行動する。」と関東軍司令官山田乙三大将の命令、中島第四軍司令官の命令を読み上げ、最後に「明日 16 日 9 時、各小隊は所定の命じられた地点に集合せよ。」という大隊長命令で結んだ。

※「朕深ク･･･」:
「私は世界の体勢と大日本帝国の現状にてらして、非常の措置をもって時局を収拾したいと思う。忠実で善良な国民に告ぐ。私は帝国政府に対し、米国、英国、中華民国、ソ連の四カ国が提示した共同声明を受け入れることを通告させた。」

この難解解説付命令を各自が、それぞれの知識で理解しようと努力した。私は「米英蘇支四国の共同宣言の中味は･･･。」「日本はそれにどんな条件を付けたのか。」「集合させ一括伝達できるのに、なぜ最末端組織の班毎で分散伝達させたのか。」分からないことが多すぎるこの「降伏」に涙を流すものは誰もいなかった。状況の急変に翻弄（ほんろう）されていた私は、自分が今朝方まで取りつかれていた「死の陰」の呪縛（じゅばく）から解き放たれていることにふと気が付いた。今日、私に下令されていたかも知れない挺身奇襲の命令はもう下りないと思った。

私たちは「降参」という屈辱で死をまぬがれたのだ。しかも決戦を前にした微妙な状況下で。帝国軍人としては恥ずべきだが「天皇陛下の詔勅に従うのだから憚る（はばかる）ことはない。捕虜の汚名を着ることはあるまい。」と思いたかった。それにしても軍人に賜りたる勅語で「死すとも降伏するな。」と厳命しておきながら、兵が降伏する前にご自分が降伏するとは情けないとも思った。

この先はソ連兵に武装解除され、捕虜収容所行きは確かだ。ソ連兵に虐待されるかも知れない。十中隊にいた時、巡回慰問のニュース映画で、マレー半島で日本軍の捕虜になったイギリス兵がやつれ果て、小さな日本兵に銃剣で追い回されている場面を思い出し、今度は俺たちの番かと覚悟した。これから先、どんな物を食わされ、どのような労働が待っているのか。それが自分に耐えられるか。どのぐらいしたら日本へ帰れるか。次々と不安がのしかかってくるのであった。



日本軍捕虜収容所から餓死寸前に救出された連合軍兵士たち

8 月 16 日も良く晴れた。昨日、私たちは日本の降伏を知らされ、これから自分の運命がどうなってしまうのかという不安で気持ちは沈みがちだったが、それはそれとして、小川で垢（あか）にまみれた体を洗い、ひげを剃り、洗濯もした。日没後も敵機は飛んでこないので存分に火をたき、衣服も乾かし、とっておきの牛缶を開け、この陣地での最後の晩飯を食った。そして武器の小銃を磨き上げ、軍装を整えて司令部幕舎の前に行った。そこでは司令部付の将校が、蛸壺にガソリンを流して点火し、軍の書類を火の中に大量に放り込んでいた。

反対側の広場には機開銃、小銃、擲弾筒（てきだんとう）、軍刀、拳銃（けんじゅう）、銃剣などが分類もされず野積みされていて「できるだけ上の方へほうり投げよ。」と週番腕章を付けた軍曹が大声で指示していた。武装解除とはソ連軍の前で両手を上げ、ソ連兵に直接武器を取られる屈辱儀式と思っていたが、100％日本軍任せのこのやり方に「ロシア人特有の大雑把（おおざっぱ）があるのだろうか。それとも大陸的鷹揚（おうよう）さなのか。」と考えた。ほこり一つ付着していたら顔が変形するほど殴られる「菊のご紋章」の打ち込まれている小銃、しかも 1 時間前に磨き上げたばかりの小銃を投げ捨てた時は一瞬心がうずいた。

武器を捨て、雑嚢（ざつのう）に飯盒（はんごう）と箸（はし）を入れ、水筒を下げ、風呂敷包みの手荷物の姿となった。改めて戦意を失い、憔悴（しょうすい）と疲労の色濃い捕虜の姿に一変し、重い足取りで孫呉陣地を後にした。

雑木林を盾（たて）に延々と掘られた戦車壕や蛸壺に日本兵の姿はなく、陣地を抜け、広い未舗装の道路に出た。ここで初めて数人のソ連兵に出会った。彼らはまだ 17～18 歳の少年のようで、紅潮させた頬に銀色の産毛を光らせ、目の色は子どもの頃に遊んだビー玉と同じなのに驚いた。カラシコフ連発銃を横に構え、かん高い声で私たちを制止させた。目の前をソ連兵を満載した大型トラックが土煙を上げて次々に走り、彼らは私たちを見て銃を上げ「ワァー。」と歓声を上げた。私たちは下を向き沈黙だ。続いて砲身が 3m 以上もあるカノン砲、大口径の榴弾砲（りゅうだんほう）、迫撃砲自走車が次々と続き、その後 T34 中型戦車が轟々（ごうごう）と地響きを立てた。これは装甲板 70 ミリ、85 ミリ砲搭載、重量 25 t という代物だ。この圧倒的な機甲部隊がソ連方向へ北上していった。私たちはソ連に早や凱旋（がいせん）する部隊かと思った。



雑嚢（ざつのう）



飯盒（はんごう）

後日知ったのだが、我々第四軍を無血降伏させたこの機甲部隊は北上しソ連に凱旋（がいせん）したのでなく、私の原隊、私が 6 月までいた第六国境守備隊が敗戦後も降伏せずに抵抗しているので攻撃に向かったというのだ。9 日から 3 時間どころか敗戦後の 16 日も抵抗している戦術と「死んでも降伏するな。」の至上命令を守っている「六国魂」のすごさに驚くと共に、同じ班のひ弱な橋詰を一瞬思った。



ソ連の戦車



日本の戦車

ここまでは日本軍独自の行動であったが、ここからソ連軍将校とソ連兵の監視下で歩かされた。目の前に広がる荒野、人手の入っていない湿地帯や荒野の雑草は立ち枯れて秋の兆しを見せていた。なだらかな起伏の丘を越え、孫呉の街へ入った。孫呉はもともと何もない荒野であったが「ソ連侵攻」に備えて 1936 年（昭和 11 年）2・26 事件に関与した第一師団将兵に、翌 3 月に陣地を構築させ、日本軍将校や軍属などの家族を住まわせた日本人が造った街。今の公営住宅のようなセメント住宅群が何百棟も並び、住宅や兵舎に使用された。一方、先住人の満人たちの住宅は木の枝を交差させた屋根に土を乗せ、土で固めた壁の土造りの平屋ばかりだった。今、この住宅全棟はソ連軍に没収され、住宅の住人であった日本人は満人の小屋かテントへ追いやられていた。

検問が始まった、一人ずつソ連将校の前に立ち両手を挙げ、胸や両脇（りょうわき）をたたかれポケットに手を入れられ、小刀や紙幣、小銭は没収されたが、万年筆や時計、針、糸などは許された。20 人 1 組にされて住宅の六畳二間と台所の部屋へ入れられ、私たちは何年ぶりかで靴を脱ぎ畳の上に座り込み、畳に頬（ほお）ずりして望郷の涙を流した。9 日の開戦から土の上での睡眠であった私たちは、冷気や湿気が直接背中や尻に伝わらぬ畳の心地よさで睡魔に襲われ、みな昏々（こんこん）と深い眠りにおちた。「起床」の声に一瞬、内務班であるような錯覚にとらわれた。点呼があり、ソ連軍将校に日本の下士官も同行し、食料受領に割り当てられた当番が平ぺったい中国風鍋と粗引きのトウモロコシ、それにひとかけらの岩塩を持ってきた。誰かが「こんな物、どうして食べろと言うのだ。しかも 20 人だぞ。これがスターリン給食か。」とあざけり笑った。が、これがすぐに 180 万もの日本人に襲いかかり 3 分の 1 の餓死。おぞましい人肉事件に発展する食料事情の最初とは誰もが想像できなかった。

開拓団から召集されたFは軍隊に入って初めて米の飯が食べられ「軍隊はお天道様と米の飯は付いて回る。」は本当だと話していたが、このFが調理を引き受け「トロトロに炊いてお粥にするんや。皆、燃やすもの拾ってこい。」と言った。電灯も水道もなく私たちはFの言うままに働き、8月16日はこのようにして終わった。

17日、夜明けとともに続々と軍人軍属の他、多彩な職種の日本人役人、警察官、学校教師、商人などの男子や開拓団の少年たちも大勢が入ってきた。ソ連兵に「男狩り」され、取り残された婦女子はソ連兵や満州人の格好の餌食（えじき）となり襲撃されていると聞いた。兵隊の中には不精髭（ぶしょうひげ）のままで血のにじんだ包帯をまき、戦友に支えられている者も大勢いて、第六国境守備隊方面から今も遠雷のように響いてくる爆発音に私の心は痛んだ。轟く（とどろく）砲声の下で死闘を繰り返していた兵隊たちではないかと思ったり、3時間の玉砕部隊だ、全員戦死でこの収容所にたどり着けるわけがないとも思ったり、私の原隊、第六国境守備隊は「陣地死守」の命令を忠実に、しかも死を賭（と）して戦っているのに、ご聖断に従った私は、と複雑な混乱した思いであった。昼間は労働もなく「飯」のために燃料を探したりしながら、疲労と睡眠不足は日に日に回復し、下痢などに悩まされていた者も快方に向かっていた日々が1週間ほど続いた。

朝の点呼で原隊復帰の知らせが入った。しかし私は、私の原隊である第六国境守備隊十中隊は既に全滅と諦めていた。午後「夏梅。お前の原隊が別棟にいるぞ。」と教えられ半信半疑で行くと、3回も召集されていたK軍曹が顔を見るなり「夏梅。生きとったんか。良かったのう。」と抱きついて喜んでくれ、私は不動の姿勢で原隊復帰申告をしようとしたら手でさえぎり「おーい。夏梅が帰ってきたぞ。」と大声で皆に知らせてくれた。A班長や古年兵も車座になり「日ソ戦になれば3時間は死守せよ。」の絶対命令の朝水守備隊が、敗戦も知らず21日まで抵抗した死闘の様子を話し始めた。

K軍曹は「お前が6月下士候教育に行った頃から江岸（満州国黒竜江岸辺）と黒竜江をはさんだソ連側との間に緊張が発生した。江岸からソ連側へ発光信号弾が活発になり、一晩に江岸とソ連領から21発も上がったが一人も逮捕することはできなかった。二站（にたん）に野戦陣地を構築して戦車壕掘りをしていた中隊の主力は、ソ連軍が侵攻してきたので帰隊すると通信してきた。戦闘開始を知った大勢の民間人が陣地になだれ込んできたので「自分で安全思う場所を探し、そこから離れるな。」と怒鳴り落ち着かせた。戦車攻撃砲も沖縄や本土へ送り、使える武器は「人間爆弾の破甲爆弾」だけだったが、残務要員で迎撃体勢をとった。中隊長は歩兵の我々に驚くような戦術を伝えた。それは、撃てば居場所を教える小銃の使用を、狙撃（そげき）兵以外には厳禁し、30m内の手榴弾（しゅりゅうだん）戦だった。一木一草を知り尽くしている地形は我々に有利だったし、蛸壺に隠れソ連兵をやり過ごして、背後から無言の手榴弾攻撃。包囲戦に出て円内に敵を追い込み撃滅もした。一番大きい防御力は戦車壕で、戦車の進入を陣地外で阻止した。2日後、二站から主力が疲れ果てて帰隊した。朝水守備隊への命令は「ソ連軍は主力を以て愛琿陣地を攻撃中、貴隊は迂回（うかい）し孫呉、嫩江（のんこう）を狙うソ連の先遣戦車集団を二站にて阻止せよ。」だった。

F 伍長によると「俺は戦車攻撃の人間爆弾に、敵と一緒に死ねるかと疑問を感じており、俺流の考えがあったので実戦で試そうと、二站で陣地構築していた M 兵長他 3 名と二站へ向かった。出発に際し K 軍曹は、どないしても帰ってこい、と送り出してくれた言葉を俺なりに考え、人間爆弾はやるなと受けとめ、俺の試案を説明して目的地に着くとすぐに行動に出た。まず巻脚絆を解き、先端のひもで破甲爆雷をしばり、道路の脇へ遮蔽（しゃへい）して置く。巻脚絆を伸ばし隠れて俺が持つ。敵戦車接近目標地点で爆雷導火線に点火。同時に俺が巻脚絆のひもを引き戦車の下で爆発させる。点火、監視、狙撃の分担作業を正確にし、集合地点を決め、決行は夕刻か未明と分散してチャンスを待った。



戦場（イメージ）

14 日、前夜から俺たちは登り坂の灌木（かんぼく）とボサの中で待ち伏せた。未明の霧の中を敵戦車が 5 両接近。目標は先頭指揮戦車だった。俺は心臓の音が聞こえるようだった。轟音（ごうおん）を響かせ目前に迫った敵戦車を前に「ヨシ。」と紐を引っ張った。もの凄い爆発音の後、何も分からず、気が付くと俺は灌木（かんぼく）の中に爆風で飛ばされていた。目の前では指揮戦車が真赤な炎に包まれ、鼻をつく火薬と燃料の匂いで我に返った。集合地点には S だけが戻ってこなかった。」

体を固くして F 伍長から聞かされた話に、私は一言もモノが言えなかった。それにしても M 兵長がここにいないのはと思いながら話を聞いていた。

この戦術は M 兵長からの詳細な報告で採用され成功。自爆せず敵戦車を擱座（かくざ）炎上させ、味方兵士の命も救う作戦と高く評価された。M 兵長は 17 日、2 回目の出撃を志願して敵戦車の下で爆発させ成功したが、別の戦車の機銃掃射（そうしゃ）で M 兵長を含む 3 人が戦死、初年兵の F だけが戻ってきた。

8 月 17 日。この日、私は収容所の中で生命の安全を保証されていた。もう一度、朝水、二姑、孫呉の位置関係図を見て戦争の非情さを考えて頂きたい。

9 月に入ると北満の夜は氷点下になり、冷気が部屋のすき間から進入。暖房もなく私たちは手持ちの布やテントの布地などでシャツやチョッキなどを作った。1 日 2 食の高粱（こうりゃん）やトウモロコシのおかゆに、乾燥野菜がほんの少し入っていた。空腹が我慢できない者たちは「ノビル」「アカザ」など、食べられる野草は何でもおかゆに足したが、飢餓感を満たすどころではなかった。その頃、若いソ連兵の監視兵が中年過ぎの兵士と交代した。連中はなれなれしく部屋に入り込み、時計や万年筆とソ連の粗悪たばこ「マホルカ」との強要交換を要求した。連中は全員手首に数字の刺青（いれずみ）を入れていて、恐怖心が先立ち、要求を受け入れるしかなかった。日本軍が占領地でやった事の仕返しと思った。それからしばらくすると奴らは来なくなった。「来るとうっとうしいが、急に来なくなると気になる。」とか「あいつらはシベリアの監獄にいた囚人だろう。今、俺たちから物品を取り上げた罪でソ連国家秘密警察に調べられている。」と、もっともらしい情報を提供する者が現れた。「どこから聞いた話だ。」と問いただすと「今に分かる。」とごまかしていた。こんないい加減な「情報通」の他、怪しげなロシア語で通訳の助手を買って出る者なども現れ、捕虜の集団に、かすかな分化の兆しが現れ始めた。

孫呉に集められた日本人は約 26,000 人。大多数が兵隊と下士官、それに小数の下級将校。他は国策に沿って「王道楽土で一旗あげよう。」という野心家や、冷害におびえる日本の農地を見限り「第二の故郷村を開拓しよう。」という山村からの移民農業者や、満蒙開拓団員と 15～16 歳の開拓義勇隊員が混じっていた。9 月中旬になると毎日 2,000～3,000 人がゲートに集められ、千人位の単位で梯団（ていだん）を組み、連行されていった。

それから間もなく「荷物を持ってゲート前に集合。」と命令され大勢が続々集まってきた。するとソ連兵が 10 人位ずつ選びだし、他の集団へ引率し、見知らぬ者たちの 1,000 人集団を編成した。私も原隊の人たちと別れた。初めて顔を合わせた人の中には 50 を過ぎたオッサンや開拓団員、小柄でやせこけた少年もいた。日本人の炊事係から「二食分だぞ。」と念押しされ、ソ連兵が食べているのと同じ黒パン二切れを受け取り、四列縦隊を組んで北東に向かって歩き出した。



連行される日本兵

歩くと揺れて黒パンから発散する甘酸っぱい匂いの誘惑に勝てず、ちょっぴりむしり取っては食べた。おかゆのような高粱粥（がゆ）で空腹だったので至福の味わいで昼食欠食でもいいやと食べ食べ歩いた。1 日目の夜は設営されていたテントで野宿、地面から伝わる冷気で眠れず、その疲れが 2 日目の行軍に出て、足並みは重く隊列は乱れ長くなった。ソ連兵に「ドワイ・ドワイ・ビストリー（早く、早く）。」とせきたてられ、進む方向は二站だった。この道は日ソ戦と同時に山神府から夜を徹して孫呉へ向かった道で見覚えもあり、山神府を経由して黒河へ行くのだろうか。脇を並行して歩くソ連兵に行き先を聞いても「知らない。」と言って相手にしてくれなかった。それでも中には「黒河、ブラゴヴェシチェンスク、ウラジオ、トウキョウ、ダモイ」と喜ばす者もいた。

小興安嶺山脈の枝脈の登り坂にかかると、今までに体験したことのない異様な悪臭がしてきた。皆、鼻や口を手でふさぎながらやっとの思いで台地にたどり着き、ホッとする間もなく凄惨（せいさん）な光景に思わず後ずさりした。私たちが立っている周囲には 10 両以上の戦車、多数の軍用車両が炎上放置され、ソ連兵も含め大勢の日本兵の死骸が散乱していた。火炎放射器で焼かれたどす黒い死体。腐敗し白骨したどくろ顔。敵も味方も軍服は腐らず体だけが腐り異国の土と化している者もいた。周囲を無数の蝿（はえ）や虻（あぶ）が羽音をたてて群がっていた。機関銃や弾丸も、乱射した薬莢（やっきょう）も散乱しており腐敗ガスで腹をパンパンに膨らませた軍馬が硬直し後足を空に突き出している。ここは、日本から一緒に入隊した M 兵長が 17 日に戦死し、15 日に日本が降伏したことも知らず 21 日までソ連軍を執拗（しつよう）に攻撃して死闘を繰り返した戦友たちの激戦地だった。探し出し、野の花の一輪でもささげて合掌したいが、どうすることもできない情けなさに涙した。

3 日と半日歩き続け黒河の街外れの江岸船着揚に到着した。黒竜江を目の前にするのは大五家子（タウジャウズ）の江岸監視哨（かんししょう）勤務以来だから 2 年振りだった。監視哨の望楼から 100 倍の眼鏡で目の下の黒竜江を上下航行するソ連の船舶名、通過時間とソ連領の兵士の移動などを逐一報告した。時にはソ連領と呼応する信号弾の打上げ現場を押さえようと走り回ったことを思い出した。対岸のブラゴエシチェンスクとは約 3km。夜は点々と灯がつき、大河は黒々と流れていた。私たちは岸辺につながれていた木造の艀（はしけ）に分乗し蒸気船に曳航（えいこう）され、何の合図もなく岸を離れた。同乗していた十数人のソ連兵は自国に帰れるのでにぎやかにしゃべり、一人がバラライカを弾き始めると一斉に唱和しだした。ソ連兵の笑顔の合唱を聴きながら私たちを待っているものはと頭から離れなかった。

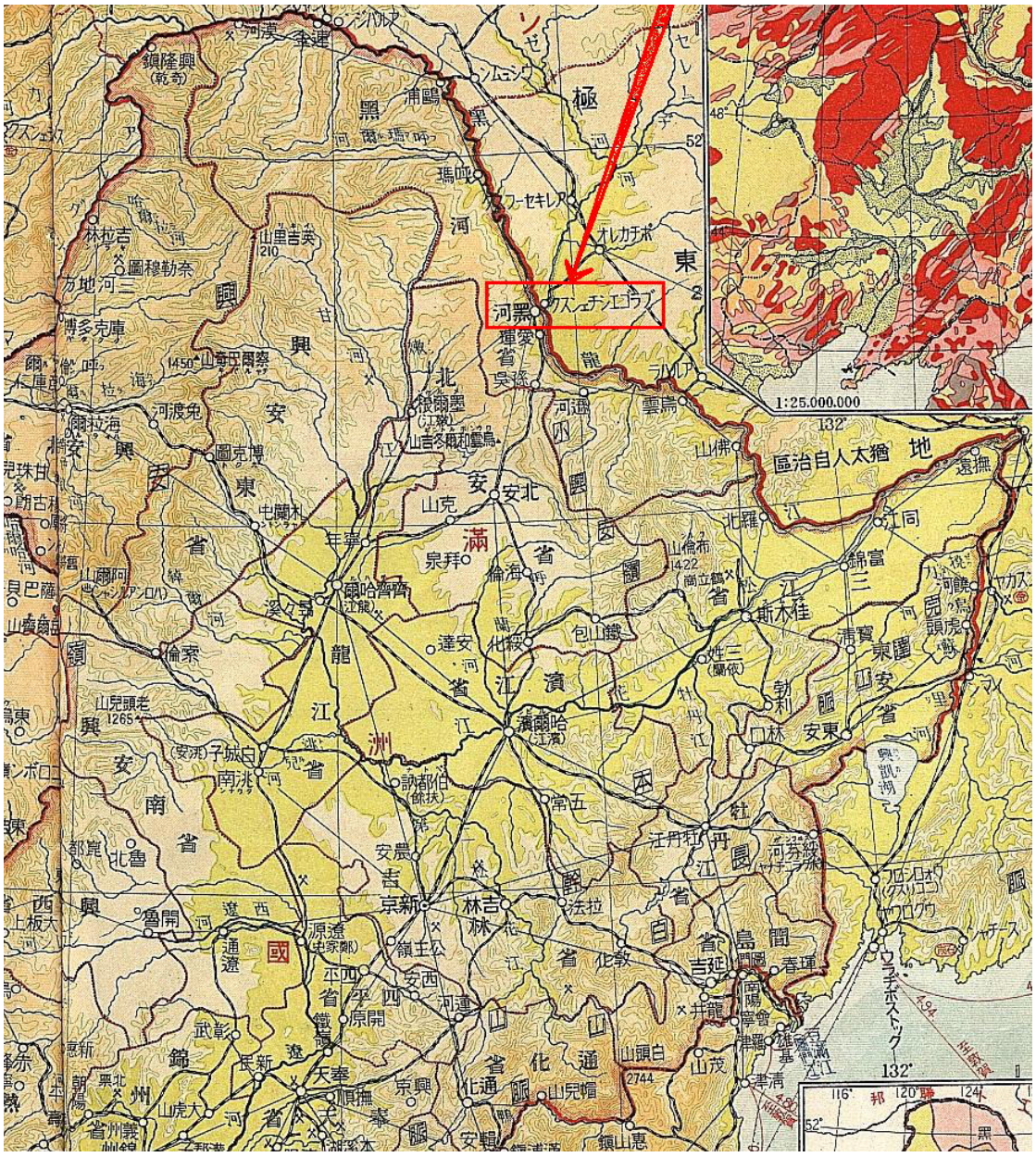


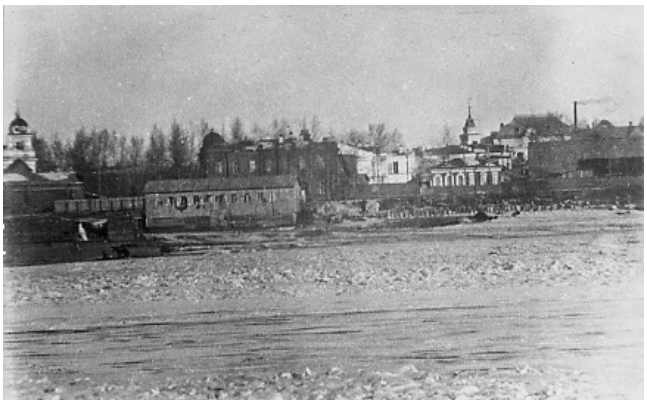
ソ連兵に連行される様子



バラライカ

対岸の街、ソ連領ブラゴエシチェンスクへ上陸させられた。ドスンと軽い衝撃と共に艀は止まり、暗闇の桟橋を渡り道路へ出て更に鉄道線路を横切り白樺林の中へ入り野宿。朝起きると広い白樺林一杯に日本人捕虜がうごめいていた。先着者は「鉄道線路を横切ってきただろう。あの先に引込線があり 1 日か 2 日おきに列車が来て、ここにいるぐらいの人員は家畜貨車に詰め込まれ一度にどこかへ連れて行かれた。森林伐採でもやらせるためにな。」と話した。私たちの「トーキョウ・ダモイ」の幻想など泡のように消え失せ、凍土の中での重労働を覚悟するしかなかった。朝食後、点呼があり 40 人ほどの私たちのグループには 50 歳前後の開拓農民や 16～17 歳の開拓義勇隊員がいることが分かった。統制のない烏合（うごう）の衆のような集団で整列の命令が下ってもダラダラとしか集まらず、ソ連下士官は激怒していた。私たちは服に付けていた軍隊の階級章を引きちぎって捨て「上官の命令は朕の命令」という軍の掟（おきて）を拒否した集団へと変貌（へんぼう）し、そこに軍隊経験のない人々も混ざる中、新しい集団をまとめる秩序作りが、まさにこれから始まるのであった。


ソ
極
東
河黑
ブラゴエシチェンスク
1:25.000.000
132°
滿
洲
省
江
興
安
龍
南
吉
遼
通
化
牡
丹
江
哈爾濱
齊齊哈爾
海拉爾
滿洲里
黑河
瑷琿
孫吳
烏雲
北安
克山
拜泉
綏化
安達
肇東
肇州
肇源
林甸
訥河
龍江
泰來
洮南
鎮賚
通遼
開魯
科爾沁左翼中旗
科爾沁左翼後旗
扎魯特旗
突泉
索倫
阿爾山
興安
東蒙
西蒙
內蒙古自治區
呼倫貝爾
額爾古納
根河
博克圖
牙克石
海拉爾
滿洲里
扎蘭屯
齊齊哈爾
富拉爾基
克山
北安
孫吳
黑河
瑷琿
烏雲
嫩江




ブラゴエシチェンスクの街

400～500 人ほどの集団が 4 列縦隊でブラゴエの街を歩き回された。家並みはみな太い丸太を組合せ、どの家も小さな窓際に花を飾ってレースのカーテンが垂れていた。商店は全く見かけず、道の所々で配給の穀物などを受け取る女性たちが袋を広げて並んでいた。彼女らは私たちを見ると笑みを浮かべてくれた。帰り道、あの引込線の近くまで来たときに列車の振動音が聞こえてきた。家畜貨車の上部にある小窓から顔だけ出した捕虜たちは私たちに懸命に手を振り「サヨナラ。」を叫び、私たちも懸命に手を振った。白樺林の野営地に戻ると斜陽の中には 100 人くらいしか残っておらず、私は背筋に寒気を感じた。

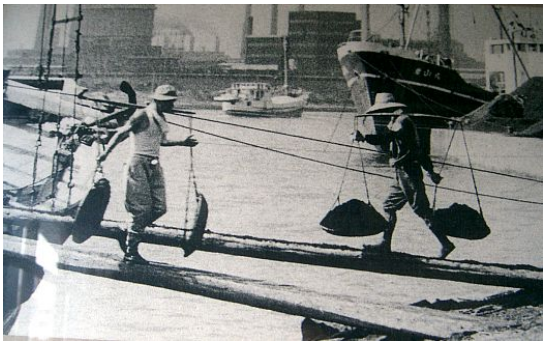
次の日の朝食後、私物を持って集まれと言われ、荷物を持ったまま昨日と同じようにブラゴエの町外れのデコボコ道を寒さに震えながら歩いた。貨車で送られる連中と扱いが違うのが妙に気になった。この辺の家並みは昨日と違い、あり合わせの板を張り付けたような板塀が続いていた。貧富の差のない平等の社会主義国家。労働者農民を搾取する資本家も地主もいない、働く人の天国と宣伝された国家が 30 年ほど前に建国されたはずなのに、もう貧しい人たちの居住群地があるのだと分かった。貧民街を過ぎるとレンガ造りの大きな建物があり、塀は壊れ、窓枠は板でふさがれて廃虚同然だった。敷地の入り口に新しい哨舎（しょうしゃ）が建てられ、建物全体を有刺鉄線が囲んでいた。この昔のお屋敷の大扉は、塗装がはげ落ちて見る陰もないが、良い木材を使い、細かい彫刻で仕上げられていた。「ひょっとしたら帝政ロシア末期の高官屋敷跡かな。」「この建物を破壊したのは革命の赤軍兵士か、それともシベリア出兵した日本軍かも。」などと思いを巡らせた。皆に選ばれた班長は「ここが我々の収容所だ。」と告げ、私物を部屋の中に置き、屋外に集まるよう命じた。私は河一つ隔てた朝水陣地に 5 年もいて、この辺りは朝水と真冬の気温も大差ないことを知っていたので、奥シベリアに連行されず、命拾いした気持ちになった。

しかしその思いはすぐに裏切られた。いつ終わるか分からない苦役の日々。日増しに募る飢餓感と栄養失調。シラミの大発生による発疹チフスの大量死。骨と皮だけになり、木像のような姿になって、ノルマを呪い大勢が死ぬという過酷な運命が待ち受けていたのである。

それから毎日、アムール河（黒竜江）ブラゴエ波止場で、ソ連が満州全土から略奪してきた様々な物資を満載した貨物船からの荷下ろし作業をやらされた。ネッカチーフを被り、銃を持った太っちょの女兵オバサンの監視付きだった。貨物船の前でソ連軍将校が「この船の積荷を今日中に下ろせ。」と命じた。船と岸壁の間に幅 80 ㎝ほどの長い板を渡し、荷物を担いで運ぶ危険作業であった。重さ 60 キロの穀類麻袋を 2 人がかりで背中に乗せられると一瞬息が詰まり重量が足にのしかかる。袋の両耳をつかんでゆっくり立ち上がり、頼りない腰付きで一歩を踏み出す。渡しの板がしなり揺れる。全神経を集中し、揺れに合わせないと転落死だ。

昨日まで野宿だったのが廃屋でも屋根の下に眠れるだけでありがたかった。今日が何日で今が何時かなどは知る必要もない日が続き、着の身着のままの夏服と、夏の下着と手製のチョッキに手袋だ。9 月になると夜は長い。朝も暗いうちに、ソ連兵がレールの切れ端を釣り下げたのを叩く合図音で叩き起こされ、捕虜の長い一日が始まる。起きると顔も洗わず、飯盒（はんごう）に分配された高粱粥（こうりゃんがゆ）をむさぼるように腹に流し込む。食後の一服などなく屋外で点呼だ。4 列に並んだ私たちの間にソ連兵は割って入り、一人ずつ数える。私たちは寒さでイライラして抗議の足踏みだ。覚えたロシア語で 34 と教えても知らんぷりして一人ずつ指で数え、34 人がいることを確認すると「ウォー。」とうなるだけだ。九九のできるソ連兵は一人もいなかった。

荷揚げ作業は沖仲仕（おきなかせ）で超重労働なのに、食べ物は 1 日に高粱粥 2 食だけだった。仕事は弱り切った体力にきつくのしかかり、監視の目の届かない積み上げた穀物袋の陰に隠れて気息奄々（きそくえんえん＝息が絶え絶え）の状態だった。捕虜がのろい苦しめられたノルマは積荷を全部降ろすまで時間に制限はなく延々と続けられ、監視の女兵オバサンも付き合わされるので手や体を大げさに動かし、通じないロシア語で怒鳴っていた。荷揚げ作業が始まるといつも小学生くらいの子どもが 10 人ほど来て一日中屯（ちゅうとん）していた。子供らは荷を担ぐ私たちに「ピュー。」と鋭い口笛を吹き「ここへ袋を落とせ。」と指で合図をする。担ぎ方を直す格好をして落とすと袋が破れ大豆が散乱する。子供たちはそれを夢中でかき集めて持ってきた袋を満杯にし、担いで一目散に我が家へと散らばっていった。中にはこの寒さなのにはだしの子もいた。港からはストーブの燃料を集めながらの帰路である。さびたベンチが並んでいた。ベンチの木造部、レンガ造りの花壇が壊れ、花壇を取り巻く木造柵、緑色に塗られた長い板塀をベリベリと引きはがした。収容所に帰ると作業中に盗んだ穀物をポケットや風呂敷で作った袋から出し合い、水で洗って飯盒でストーブの上に並べて、炊き上がるのを待つ楽しみもあった。



沖仲仕（おきなかせ）の作業風景

ストーブの上で飯盒の大豆が煮えている。ストーブの煙突は四方八方から針金で支えられている。この針金はこの建物に張り巡らされていた電線の被覆線を引き抜いた裸銅線で、被覆線を代用ローソクにして燃やす照明だった。「照明は俺に任せよ。」と、この方法をあみ出した人は尊敬された。私たちは天井裏や屋根裏の電線まで探した。手足が温まると上着とシャツを脱いでシラミ退治が日課だった。孫呉に収容されて以来、下着の洗濯どころか顔を洗う水もなかった。衣服の縫い目に沿ってシラミの卵がびっしりと並んで生み付けてある。血を吸ってポンポンに膨らんだ親シラミと縫い目に並んでいる卵シラミを指先で押しつぶして殺していくと爪（つめ）の回りがどす黒くなり、血と人間の油が混ざってネバネバになる。やせ細った人間の体から脂気がなくなり皮膚は乾燥して粉をふいていた。




シラミ

飯盒の大豆が香ばしい香りを出し始め、荷役作業で盗んだ岩塩を一つまみ入れる。スリコギに似せた棒でつき始めると大豆汁はみるみる牛乳色になる。よくかきまぜ飯盒のふたに均等に分配する。大豆汁をフーフー吹きながらノドへ流し込む。至福の味だった。消化能力を失った胃袋に優しくしみ込んでいくのが分かった。大豆は畑の肉といい大事な栄養源。食料や塩を盗めない捕虜たちもいると思えば、ありがたかった。雑嚢（ざつのう）を枕に、胸の上に上着を乗せ、二つ折りの毛布の間にサンドイッチになって横たわる。目を閉じれば父母兄弟、友人たちとの会話が脳裏を駆け巡りたまらない郷愁に誘い込まれる。大豆汁に涙を流す落ちぶれた姿のままでもよい。故郷の土を早く踏みたいとまた涙す。孫呉の野戦陣地で班長から「戦争は終った。おそれおおくも天白王陛下は、耐えがたきを耐え、しのびがたきをしのべ、と仰せられた。諸君は陛下の御心を拝し奉るように。」と訓辞されたことなども走馬灯のように思い浮かべ、この耐え難い生き地獄がいつまで続くのかと涙するのであった。

青い空が鉛色に変わり、粉雪がちらつき始めた。私たちにソ連軍用の防寒外套（がいとう＝コート）、防寒帽子、防寒手袋、防寒長靴が渡され、冬を越すのだと覚悟した。日本の軍隊でも「服に体に合わせ。」「足を靴に合わせ。」なければならなかったが、外套は裾が長く地面を引きずり、防寒長靴はフェルト製で左右同じ、フェルトを圧縮したもので手触りは温かくロシア人が履いているのと同じである。ソ連は靴下がなく、代わりに布を足首から指先に向けて包みこむように巻いていた。この日以来、私たちは外套の裾（すそ）を引きずり、防寒帽子の耳垂れを下ろし、頬の肉は落ち真っ黒に汚れた顔。目だけギョロギョロさせた「亡者の行進」に見えたかも知れない。フェルト長靴は足に巻く布がないので靴の申で足が踊り、始めは温かいがジワジワと雪や氷の水分がしみ込んで靴底が凍り、道路も凍っているので転倒しないように注意深くソロソロ歩いた。「逃げられないためだ。」と言う者もいた。

黒竜江（アムール河）に流氷が現れ出した。2、3 日で大小無数の氷塊になりこの大河を覆い尽くし、水面を漂う水も凍らせてしまうと、もう来年春まで流れを見せることはない。船も動かなくなり私たちは陸揚げした穀類をソリに乗せて引込線に並んでいる貨車に積み込む仕事になった。一年を通して夏時間なので冬も一時間早く作業開始だ。日の出には間がある波止場で仕事をしていると、道幅一杯に大型トラックや鉄道線路を積んだトレーラー数十台が集まり道路を塞いでしまった。ソリも通れなくなり臨時休業。鉄砲を持って私たちを監視しているオバサンと肩を並べて見学することになった。線路を積んだままトレーラーは結氷した氷の上へエンジンを吹かせて進入した。氷の上に線路を敷いてシベリア鉄道と満州鉄道をつなぐのだ。説明がなくとも誰にでも分かった。それにしても凍った河に線路を敷く発想は温暖国に住む日本人には及びもつかない常識外の考えで、波止場で働いているロシア人もノルマを忘れ、世紀のソ満鉄道開通作業を見守ることになった。完成すれば大連、釜山へ乗り換えずに行けることになる。一層望郷の念がつのった。

幌付（ほろつき）大型トラック数台から 100 人以上のソ連兵が飛び降りると、別のトラックから枕木や器材を降ろし、シャベル、スコップ、鶴嘴（つるはし）などで凹凸の氷を人海戦術で平らにする。ソ連兵は防寒帽の垂れも下ろさず白い息を大量に吐き出しキビキビと働いていた。昼も過ぎ灰色の空に太陽が黄色く傾き出した頃、レールは一直線に対岸満州国へ延び、所々での点検作業が終わると、引込線から機関車が 5～6 両の貨車を引っ張って近づいてきた。機関士が降りて将校たちと一言二言話し、機関車に戻ると「ポォー。」と汽笛一斉。世界一の軌道幅のシベリア鉄道の機関車が氷上のレールに向かってゴットンと動きだした。作業員も見物人も車軸とレールと枕木の接点に目を凝らしたが、厚さ 2.5 メートル以上の氷はビクともせず貨物列車は徐々にスピードを出し、今度は大きく吠えるように「ポォー。」と叫ぶと、花火も揚がらず、華やかなテープカットやくす玉割りもなく、満州国へ公然と略奪の王者として進入した。穀類は家畜の餌まで、屑鉄（くずてつ）は折れたスコップの破片まで徹底して運び出した。このため満州では次の収穫まで食料難に追い込まれた。一番被害を受けたのは日本政府からも見離された満州残留のリーベン・クイズ（日本鬼子）で餓死者が続出したという。


毛皮オーバー


カートンキー


防寒帽


鶴嘴（つるはし）

翌日から私たちの作業はがらりと変わった。昨日開通したばかりの氷上線を使い、満州から直接貨車で略奪物資が運ばれてきた。満州側でも準備していたのか、満州の機関車が貨車に物資を腹一杯満載して 30 両、40 両とロシア人機関士の運転でシベリアの奥地へ運ばれ、この地域で必要な物資を積んだ貨車は切り離されて私たちが降ろした。貨車も 30t 積みや 50t 積みと巨大だった。降ろす荷物は食料だけでなく旋盤とか圧延（あつえん）という工作機械。輪転機などの印刷機。レントゲンや歯科の機械の中古品を分解し、木枠で梱包（こんぽう）。必要な物資を選んで略奪したのでなく、手当たり次第略奪としか思えなかった。荷物は重く冷たく、穀物よりあじけなく、何よりも私たちの栄養補給源は完全に絶たれてしまった。

不思議なのは満州から来る貨物列車だ。満州へ発車したのは「開通式」の記念 2 号便だけで、実に到着便が多いのだ。極めつけは、春近くの氷上線最終便。満州の北安（ペイアン）から黒河までの線路 304 キロメートルのレールと枕木（まくらぎ）を日本人捕虜に解体、積み込ませ、レールはバム鉄道（第二シベリア鉄道）建設へ回し、枕木は暖房用にした。バム鉄道建設に従事した捕虜は「枕木一本、捕虜一人の命」であったと証言している。北安～黒河間の鉄道が再開されたのは日本で新幹線が開通した 1964 年（昭和 39 年）である。

一番こたえたのは石炭降ろしだ。満州国の無蓋（むがい）石炭運搬専用車は積載 30t から 50t で実によくできていた。車体の外側に取り付けてあるレバー操作で石炭車の底が開き石炭が落下する仕組みだった。石炭車を石炭貯蔵場所の高い線路へ誘導し下へ落とす段取りだが、レールの周囲にあふれた石炭を遠くへ運ぶ繰り返しで忍耐と根気でイライラするのだ。酷寒で雪と露にぬれた石炭は貨車の形に凍って落下しなかった。それを先の尖った鉄棒で突き落とすのが容易でない。フェルト靴がコチコチに固まって歩行困難。防寒帽の垂れをおろして鼻当てをしているので息がまつ毛やまゆ毛の上で凍り、呼吸の度に鼻毛が鼻腔（びくう）にベタベタとくっついた。この現象は氷点下 30℃以下で起こる。湿った防寒靴は足の指先の感覚がなくなるほど冷たくなり、凍傷となれば切断されるので必死に足踏みと指先動かしを繰り返し、ようやく足も体も少しは温かくなるとホッと一息し、また鉄棒で突っつき始めた。



石炭をトラックに積む捕虜

その日の朝、点呼前に重い扉を押して表に出た。警備兵は銃を持ち私たちを監視する任務だが、最近はズボラなソ連兵が増えてきて、今朝も入り口に銃を立て掛け石段に腰を下ろし、大きな顔写真が掲載された新聞を開いて、近くにいた開拓団少年に写真の人物が誰か知っているかと聞いていた。少年が「知らない。」と答えると、満州でソ連兵に男狩りで拉致（らち）された民間人が「レーニン」と一言。警備兵は自分の問いに答えた者がいて嬉しかったのか親指を立て「ハラショー。」今日は船から荷揚げした穀物を引込線の貨車に積む仕事だ。そろそろ炊事係がリヤカーで高粱粥を届けに来る時間かと思う頃、班長が皆を集め「明日 11 月 8 日はソ同盟の 20 何回目かの革命記念日で祝日となった。今からこの付近は前夜祭で混雑するから、作業を止め収容所へ帰ることになった。」とうれしい朗報を伝えてくれた。「だから今朝の新聞にレーニンが…。」と納得した。

前述した貧民街を抜け収容所に着くと炊事係が炊事場へ行ってみろと言う。行くと 20 人以上のおばさんたちが調理台に乗せられた白い脂肉の間に少し赤肉が交じっている大きな豚肉の固まりを囲んで、興奮して大声を出し合っていた。白い口ひげを生やしたじいさんが斧（おの）のような刃物で豚肉を叩き切り、天井からつるした天びん秤に乗せ、紙切れのような切符と交換して持ってきた平鍋や洗面器に入れて皆ニコニコだった。ヌルヌルと台から滑り落ちそうな内蔵を指先でちぎりポケットにねじ込むおばさんもいた。明日のレーニン祭の特別配給らしいが、大勢集まる家屋がないので、廃屋お屋敷の料理場が利用されているのだった。それにしても日本人捕虜に自国の貧しさの一端を堂々とさらけ出している度胸に感服した。

レーニン寮の恩恵は私たちにも平等に与えられた。夕食に炊事係がトウモロコシのお粥の大なべのふたを取ったとき、湯気と共にいつもと違う香りが漂った。なべの中に薄っぺらい脂身が少しだが浮いていた。肉とは軍隊以来の再会で食欲をそそられた。夕食後、久しぶりのごちそうと明日はレーニン休みということで、皆申し合わせたように早くから横になったが、アコーディオンや太鼓に合わせて炸裂する爆竹音と大きな歌声で起された。毎日往復するするこの道の付近にこんなに大勢の人が住んでいたとは思わなかった。あくる朝、ストーブには大豆や粟を浸した飯食がいくつも並べてあり、集合も出発もないのでゆっくりとシラミ退治をしたり服やシャツの破れを繕ったりしていると、2 階へ遊びにいっていた K が戻ってくるなり声を殺して「おい。来年 3 月に帰国できるらしいぞ。」とびっくりするような情報を発表した。

思わずレーニン恩赦かと聞くと真顔で怒り「コックリサンのお告げだ。」と言った。K が言うには紙も鉛筆もないので板の間の上にストーブの灰を平らに敷き伸ばし、いろは 48 文字を書いて 3 本の小枝をそろえ、上部をしばって下部を大きく広げ、広げた 3 本のうち 2 本を 1 人ずつ持ち、1 本は誰も触れないようにして呪文（じゅもん）を唱えてお祈りすると、不思議なことに誰も触れていない 1 本が文字の上をなぞるように動きだし、一時停止した場所の文字をつなぎ合わせたら「らいねん　さんがつ　きこく」とお告げが出たと言うのだ。「コックリサン」を信じる者も信じない者もこの冬を越す自信はなく、私たちは「コックリサン」にも見離されてしまったと感じた。

飢餓食の改良はレーニン前夜祭の夕食一食のみで相変わらず高梁粥を胃袋へ流し、裾（すそ）を引きずった外套（がいとう）を着て防寒帽をかぶり、紐でつながっている防寒手袋を肩からぶら下げ、底が乾かないフェルト長靴をはいて波止場へダラダラ歩く日々。ブラゴエの人たちはこの隊列が日増しに人数が減って、足取りも弱々しくなっていくのに気付いていただろうか。早朝の寒い屋外点呼にソ連軍の軍医が現れ、兵士たちに何か命じた。兵士たちは私たちとは離れている棟に入り、しばらくすると頭からスッポリと毛布を被り目鼻だけを出した幽霊みたいな連中を 30～40 人連れ出してきた。みな目をしょぼつかせ、足はフラフラ。中には熱のせいかガタガタ震えている者もいる。軍医は何人かの目や口の中を診て部下の衛生兵に何かを指示していた。

高熱でうなっている病人が一人残らず氷点下 30 度の屋外へ引きずり出されて以来「あれから何人か死んだぞ。」と次々にうわさが流れてきた。そんなとき私は数人の仲間とその「棟」へ行くことになった。中に入ると屋根も窓枠も床もないレンガ造りの廃屋で、地面の土間に 10 人くらいの遺体が積み重ねられ、遺体に衣服はなく生まれたままの姿であった。遺体はそれぞれが思いの姿で硬直していた。手のひらを広げて腕を突き出し、曲がった膝（ひざ）は枯れ枝より細く絡み合い、目が落ち込んで骸骨（がいこつ）のように口を大きく開けている遺体は、歯並びから若者のようだった。私たちは言葉が出ず呆然（ぼうぜん）と立ち尽くし、手を合わせることもできぬほどの恐怖にさらされ、流す涙も出なかった。私はこのブラゴエと決まったとき、死の恐怖を感じていたシベリア奥地森林伐採から逃れたのを僥倖（ぎょうこう＝思いがけない幸せ）と思ったが、この姿の前に立つと、自分との間にどれほどの隔たりがあるかと思い身震いした。

「立って三尺、寝て五尺」というが、私たち捕虜がくつろげる場は板の間に敷いた肩幅だけの空間だけだった。しかもこの空間は湿っぽくほこりと人垢を吸い込んだ。ノミ、南京虫、ダニ、シラミの巣窟（そうくつ）で、爪先で一匹ずつ押しつぶすくらいでは駄目なのだ。全身が赤い発疹（ほっしん）で埋まり高熱にうなされる者が増え、恐ろしい発疹チフスや回帰熱患者が発生し、血便垂れ流しの悲惨な状態へと追い込まれていった。私たちはこの建物に入れられた時、全裸で軍医に尻を向け、尻の肉具合で①から④に分けられ屠所（としょ）に売られる家畜扱いをされた。①は働く。②③は軽作業の炊事と営繕雑用。④はオーカーといって入院。①が休めるのは体温 38 度以上。便所は周囲をアンベラで囲い、春夏秋冬露天である。地面に幅 80 ㎝ほど、深さ 2m ぐらいの穴を 8 個ほど掘り、80 ㎝幅のところへ分厚い板を 2 枚並べたのに足を置いて用を足す。掘っているときは土葬の穴かと思っていたが、今この寒さでは土は凍り何日もかかるだろう。この異常に深く大きなトイレも今は上へ上へと凍り積み重なり、うず高く糞尿（ふんにょう）の山となったが、凍ってしまい無臭だった。高梁粥は消化できず、水分大量の下痢なので、乳白色に血便の血も混じり、色ガラスと思わせる芸術模様の凍り便だった。高くなりお尻を突くようになると②③がバールで崩しリヤカーに積みこんで捨てにいった。



零下 30 度の状況（便槽断面図）

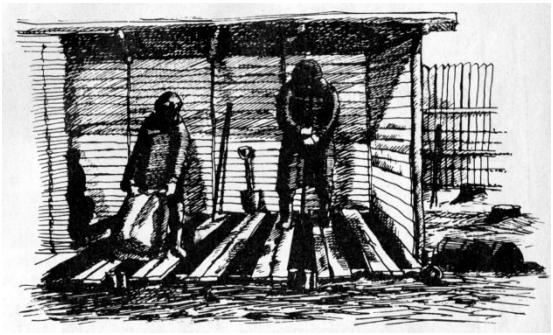


凍った小便の瀧

私たちの班で最年長の I が発熱。彼は満蒙開拓少年義勇軍の少年から「先生、先生。」と慕われていた教官だった。頑健そうな体格をしていたが、それだけに高熱を出すと手足をばたつかせ回りを困らせた。一週間ほどで熱は治まりおとなしくなって故郷の稲刈りを率先してしているうわ言をしゃべるようになったが、気が付くといなくなっていた。皆で探したら外に放置してあるポンコツトラックの運転座席に座ったまま凍死していた。それ以来、何人もの死者を告別も葬儀もせずに送ったが、総じて言えることは、頑健そうな人はバタバタとよく動き回って脳症を起こして絶命。丈夫でなさそうな人はグッタリと死んだように動かず。こんな状態で波止場作業ができる者は半数以下になりソ連側もようやく労役中止に出たが「本音は血便垂れ流しの伝染病患者に街を歩かせないためだ。」と言う者もいた。

捕虜の死ぬ順番は体力のない者と既婚者からだ。②③の中には入院や病欠が相当なのに医者のノルマは働く①を増やすので②③が①にされ死ぬのである。波止場作業がなくなり一息ついたが、入院クラスの②③の炊事や雑用係は、医者のノルマの犠牲にされて死んでいくので、雑務当番がすぐに回ってくるようになった。嫌な使役が二つあった。その一つが前述した凍った人糞（じんぷん）山くずしで、作業を終え帰ると衣服や体に飛び散った破片の糞尿（ふんにょう）が解け、匂い出した。「臭いぞ。しっかり払ってこい。」と外へ追い出された。これほど皆のために必要な仕事をやりながら、これほど嫌われることのばからしさにつくづく悲しくなった。父母兄弟には見せたくない姿にさらされ、人間性も剥奪（はくだつ）された。

もう一つの使役。これも順番がくると朝から気分がめいる。「棟」の遺体は全員裸で井桁（いげた）に 5 層 6 層と積まれていて、それをソ連兵が持ってきた馬車の荷台に積む仕事だった。30 体、40 体とうず高く積みロープをしっかり掛け、市民に悟られないように真夜中、引込線の奥にある白樺林へ向かうのだ。私たちはブラゴエに着くと白樺林に野宿して大きな深い穴を掘らされ、各集団は穴の使用目的も知らずに移動して行った。私たちもそうだった。その大きな穴の前に着きロープを解くと凍っている遺体はゴトゴトと鈍い音を立てて枯れ草の上に転がり落ちる。落ちたのを「一、二、三。」で穴へほり投げる。死亡者名簿作成もせず、どこの誰かも一切不明。死亡者名簿を作らないということは、誰も死んでいないということと同じだ。遺体運びは早く終わらせたい一心で作業をしたが「仲間を、人を、モノ扱いにした。」と気付くこともあった。



トイレ掃除



全裸で横たわる遺体



数日後の夜中に私はひどい悪寒に襲われた。毛布、外套、上着を頭からかぶり、膝を折ってひざまずくようにうつむき、ガタガタと全身を震わせていた。明け方になると身体中がカッカと熱くなりだし、頭痛が激しくなってきた。記憶はここまでである。それから何時間、何日たったのか、暗い床板の上でゆらゆら揺れていた。玄界灘の荒波に大揺れして大連へ向かう輸送船の船倉にいるような気がしていた。身も心も朦朧（もうろう）の状態からようやく脱し、仲間に背中を支えられ粟粥をすすれるまでに回復した。倒れてから最初のトイレに行けるようになり、それまでは絞るような腹痛と一緒に乳白色の粘液と黒ずんだ血痕（けっこん）が混じった水のような便だったのが、血液は混じるものの軟便に近くなってきたので安心した。医者も診てくれず薬もないほこりだらけの板の間に毛布をかぶってイモ虫のように転がっていた。私は医薬がなくとも自力で回復の兆しが見えてきたが、兆しが見えてから大声で騒ぎ

暴れて死ぬ者との分岐点にいるのだと思った。死はすぐ目の前にいるようだが、漠（ばく）としているようにも感じられた。

ようやく熱も下がり、トイレへ行くのにふらつくこともなくなってきた。捕虜の排便は二通りだ。私のような水分主体の下痢組とまったく排便しない組だ。これはまさに悲痛で「助けてくれ。かき出してくれ。」とうなり苦しみ、叫びもだえていた。下痢でも回数の多い方がうらやまれていた。捕虜にされてからトイレットペーパ類の使用も入浴も一切絶たれ、人間以外の動物と同じにされた。後輩の橋詰君はシベリアの奥地、クラスノヤルスクへ運行され、生野菜と塩を半年以上も絶たれ、全員デキモノで苦しめられたと話していた。飯盒のふたの熱い大豆汁をフウフウと吹きながら少し飲む。その熱い液体が至福の味となって食道を通過し、胃袋へと届く感触は今でも忘れられない。そのおかげか体力も回復してきたので看護の仕事を手伝おうと決心した。食事の支度や後片付け、食べられない人の手助け、熱にうなされ昼夜を問わず大声でわめき散らす人をなだめたり、体力がなく歩行困難な人を支えて酷寒のトイレを往復したりした。病み上がりで私もフラフラになるが、私もしてもらっていたので恩返しと思いがんばった。

ある朝、暗いうちから古い木材を積んだ大型トラックが十数人のソ連兵を乗せ、私たちの棟の裏手のレンガ造りの廃屋前で止まった。こんなところにまで来るのかと遠巻きに見ていたら、私たちの警備兵に追い返されていた。私たち伝染病患者に、作業するソ連兵を近づけ感染させないためだったのだろう。数日して廃屋の内装工事が終わったようだ。翌朝班長は全員集合をかけて氏名を読み上げ、私も呼ばれた。呼ばれた者は重症者が多く、軽症の私たちが重症者の毛布や外套、雑嚢を表へ持ち出しホコリを払った。すると煙のようなほこりが舞い上がり、目も開けられないほどになった。重症者の荷物をソ連兵が造ってくれた新しい宿舎へ入れた。窓枠は板が打ち付けられ、わずかなすき間から入る光だけで内部は薄暗かった。

新宿舎は厚い板で三段ベッドが造られた。これで隣同士手足が触れたり寝返りで腹を蹴られたりする心配もなくなるのでありがたいと思った。敷物は今までと同じ板の上に毛布だけである。私には三段ベッドの上段が割り当てられた。荷物をまくら元と足下に置き横になったらすぐにでも眠りそうになるほど気持ちがよかった、思いがけない高待遇で捕虜たちは「へぇー。」「ほぉ。」「寝台列車だ。」と感嘆詞を発したほどだ。介護や手助けを必要とする人が低い一段目、二段目にされ誰も苦情は言わなかった。「これで今夜からゆっくり眠れる。」と思うと嬉しさが込み上げた。伝染病棟らしいので外出は禁止。点呼も「死の氷点下 30℃以上」の屋外でなく室内で。亡くなった連中や今でも熱病と栄養失調でうなされている連中がいる中でうれしがってはいられなかったし「彼らにすまん。申し訳ない。」という気持ちはその後、今でも消えることはない。

以前、軍医が仮病者発見目的で、氷点下 30℃の早朝の野外に熱にうなされていた連中も引きずり出して点検し調べたが、あの時あの軍医たちがこのような新宿舎の必要を建議実現していれば、今までにこれほどの死者は出なかったと断言できる。ソ連側が補修してくれた廃屋の中、古材とはいえガッシリした三段ベッドの上段で、私は久しぶりに前後不覚に眠りこけた。翌朝、屋内点呼で寝台前に並んだみんなの顔も久々に生気が蘇ったように見えた。ここは病人と半病人の病院になった。しかし薬もなければ病状を診る医者もおらず、ただ粟のお粥をすすって寝るだけの毎日なので、私のような半病人は病人の

食事の世話や身の回りの手伝いをするだけになり、時には昼間から人に踏まれずに自分の三段ベッドの上でひっくり返っている余裕もできた。

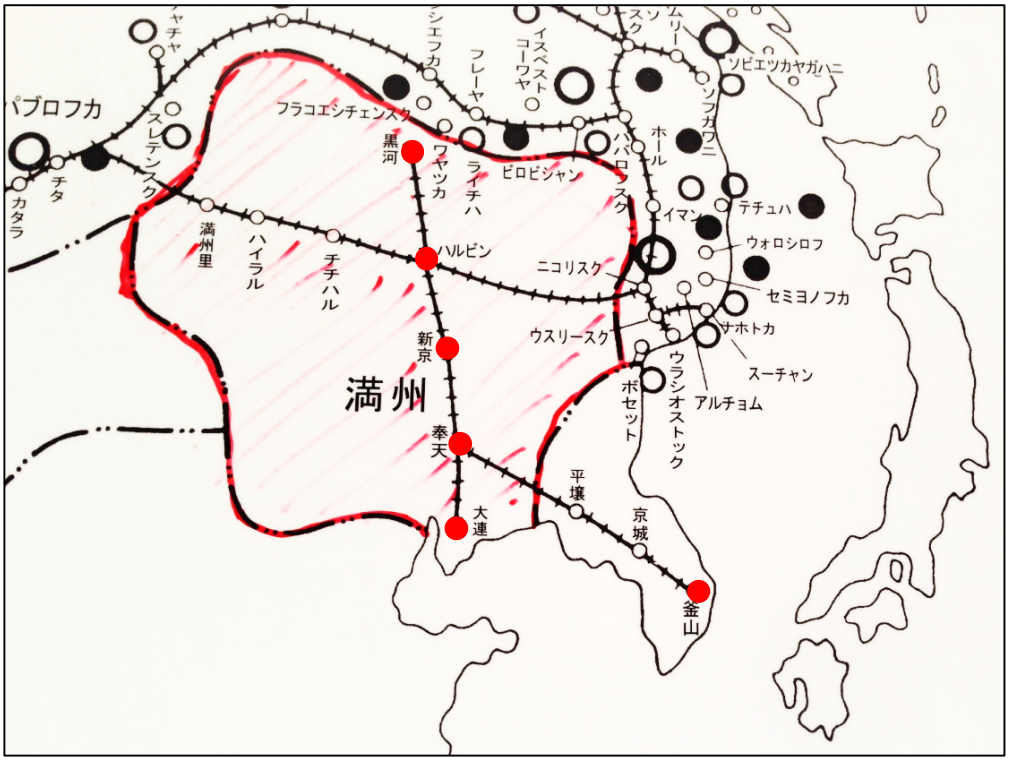
医者や薬にも見離された伝染病棟の私たちは苦痛な屋外点呼もなく、食事は今まで通りだったので微塵（みじん）も悲壮感はなかった。皆が回復を夢見始めた頃、私物を持たされ全員が屋外に出された。私はソ連軍の外套を引きずり、半ぺらの毛布を肩に飯盒と雑嚢を持って、薄暗い部屋から日の当る場所に久しぶりに出た。私たちはまぶしい光に目をしょぼつかせ、病人ばかりなのでところ構わずあちこちにへたり込むのをソ連兵が強引に隊列に押し込み、軍医の前に連れていかれて二組に分けられた。私は熱病のあとスッキリしないフラフラ組だ。誰かが「今度はどこへ連れて行くのだ。」と聞くとソ連兵は「トウキョウ・ダモイだ。」と言ったが、誰もまともに受け取る者はいなかった。100 人ほど残された中に私も含まれ、他の人は再び病棟へ戻された。

「病人ばかりをどこへ連れていこうというのか。次のところはここ以上に厳しいに違いない。」私はそう思い込み頭を下げ、うずくまっていた。「立て。」というソ連兵の命令でみな足をふらつかせて立ち上がった。収容所のゲートをくぐり、引込線のある死体を大勢投げ込んだ白樺林の方へ向かった。「まさか生き埋めにされるのでは･･･。」と思ったが、引込線の踏切を渡ったので「間違いない。」と覚悟した。降伏するなと天皇陛下の御命令に忠実な日本兵は、降伏した敵を軽蔑（けいべつ）して穴を掘らせ、その穴の前に立たせ銃殺してきたのだ。ソ連もかと思った。何人死んで何人埋めても死亡者名簿を作成しないから、死亡者ゼロ扱いにされるのか。生きてきた証は絶たれ、日本政府にも親にも、私はロシアにはいなかったことにされるのだ。貨車が並んでいる横を歩き、先頭近くの有蓋（ゆうがい）貨車の前で止められた。ソ連兵は貨車の扉を開き「乗れ。」と合図。冷え切った貨車の中は米俵ほどの乾草束がいくつもあった。私たちがその上に腰を下ろすと「サヨナラ。」と言って扉を締め、カギをかける音が聞こえた。

生き埋めから逃れたようだが「またもや、どうしようもない。」と思ったりしていると、ゴトンと前からの衝撃が伝わり機関車が連結されたと分かった。ゆっくりと動き出し、レールの継ぎ目がゴットン、ゴットンとリズムを刻み出した。上部の小窓から外を見ていた者が「オーイ。この列車、波止場へ向かっているぞ。」と叫んだ。私たちは反射的に薄暗い貨車の中で立ち上がり、歩行困難の病人まで歓声を挙げて興奮した。列車は徐々に速度を落とし黒竜江上の新設線路に入り、注意深く徐行しながら満州国に進入した。大連が、釜山が、このレールと繋がっているのだ。皆あきらめていた祖国日本に帰れると万感胸に迫る喜びがわき上がった。

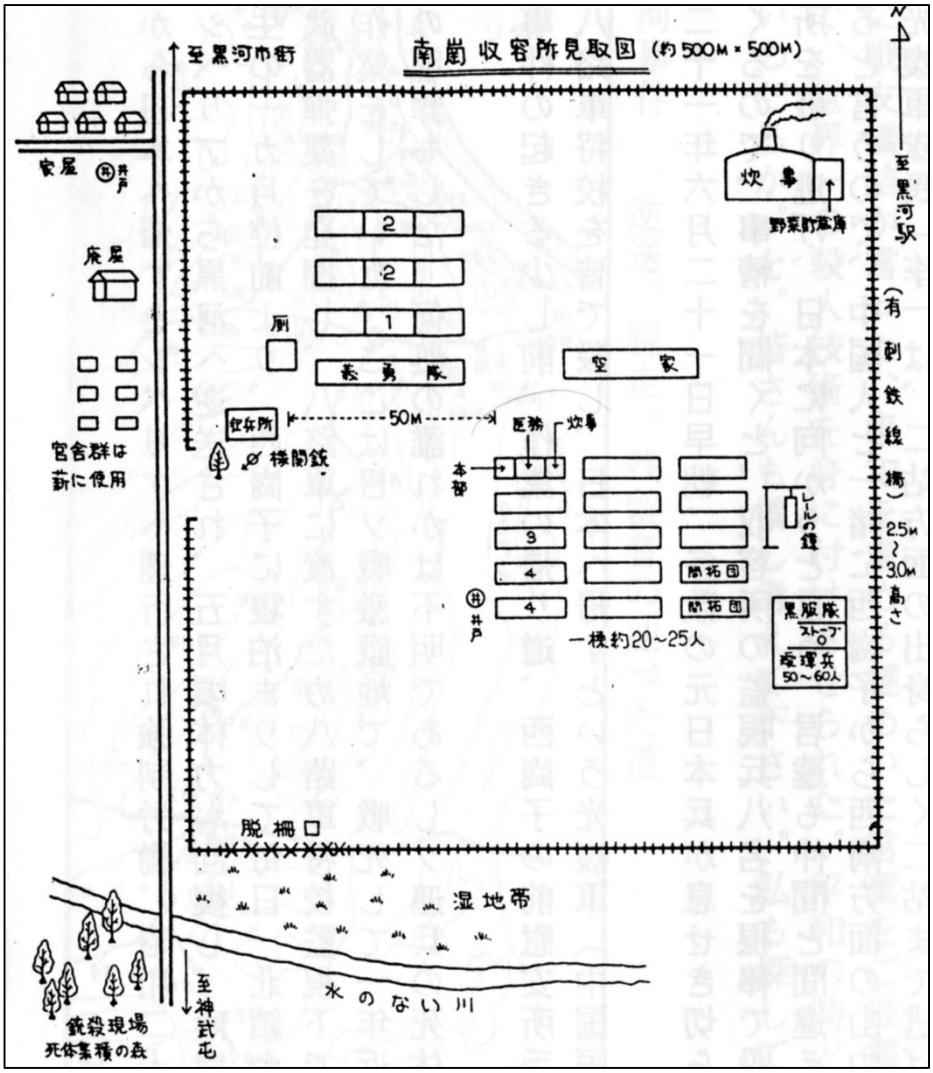
中国編

貨車は大連（だいれん）、釜山（ぷさん）につながる線路上を走った。「大連まで、釜山まで止まるな。」と祈り続けたが、黒河駅の引込線の一つに止められた。強制重労働で「着たきり雀（すずめ）」の衣服は、シンシンと迫る冷気を肌に直接伝え、私たちは身をかがめ体を寄せ合って貨車の中で懸命に寒さに耐えていた。砂利を踏む足音が止まり、ガチャンと鍵（かぎ）をはずす音と共に重い扉が外から開かれ、黒木綿（くろもめん）に綿（わた）の入った服に「東北人民政府」と印刷した布片を胸につけた若い男が「降りろ。」と手振りで指図した。体力をすっかりソ連に奪い取られた病人の私は、地面と貨車の高低差 1m を飛び降りる力もなくモタモタしていた。それを見た若者はイライラした顔つきで「快快的（カイカイデー）。」（＝早く、早く）と大声でせかした。数ヶ月前までは日本人が中国人に連発していた言葉だった。日本人の命令や指図に緩慢（かんまん）な動きしかしない中国人に日本人はイライラして罵声（ばせい）と体罰で「早く、早く。」と叫んだ。今や立場は逆転したのだ。



貨車から降りた私たちは駅付近の飲み屋街を思わせる飲食店が軒を並べている通りに入った。輪にした腸詰めを紐（ひも）でつないでぶら下げている店や、油焼きした肝臓などがガラスケースの中でテカテカに光って並べられていた。ブラゴエでは商店はもちろん飲食店も皆無なのに、河を渡っただけの黒河には夢に見た食べ物があふれ、ふらっと入りたくなるような雰囲気をかもし出している。そこを通り抜け、花崗岩（かこうがん）の太い門柱にブロンズの装飾がほどこされた扉を過ぎると、その先の広場で止められた。年配の男が空箱の上に乗り、通訳なしで一方的に話し出した。体力もなく疲れ切っている私たちはボンヤリと彼の話しぶりを眺めていたが、彼は突然話すのを止めて私たちの中へ入り込んできて一人の男を捕まえ、いきなり平手打ちを数発食らわして引き揚げていった。突然の成り行きに、これからの収容所暮らしが思いやられた。

新入りを集め、収容所での注意事項や決まり事も伝えず、見せしめに数発ビンタを食らわせて入所式は終わったようだ。私たちは目の前の大きな建物の中に入った。広い板の間に八つ折にした毛布が整然と並び、その上に寝転んでいる者が大勢なので、こんなに先客がいたのかと驚いた。毛布の敷いていないすきまを探し、私より若いと思われる先客に「ここ、空いていますか。」と断わって自分の毛布と荷物を置き名前を伝えて「よろしく。」とあいさつすると、彼は「K です。こちらこそ。」と歯切れのよい返事をしてくれたのでホッとした気持ちになった。朝、ブラゴエで病人組に選別され「働けないものは不要。」と中国へ送られ、黒河の街の人たちの厳しい蔑視（べっし）のまなざしにさらされ疲労困憊（ひろうこんぱい)。ただ眠りたかったので K に「眠らせてくれ。」と言って深い眠りに入った。ソ連から河一つ隔てただけなのに黒河には東洋の風が吹いているように感じられ、心が安らぐ思いがして涙が出た。「涙も出ない厳しい国から、少し優しい国に来たのかも。」と思った。



南崗収容所見取図

収容所は労働もなく、昼は毛布をきちっと八つ折にしたら、後は寝転ぼうと枕（まくら）にしようと自由で、シラミ退治に専念しながら食べて静養できたので回復に向かっていく気分になった。それにしても朝食時の人数と、朝食後の人数に大差があるので不思議に思い、Kに「どこか行くところでもあるのか。」と聞くと「お金を持っていますか。」と尋ねられた。私は胸のあたりを触って内ポケットに名刺サイズの薄っぺらい膨らみを確かめ「ある。」と言った。これは1942年（昭和17年）軍隊に入るときに餞別（せんべつ）で頂いた一部を「お守り」と一緒に縫い付けたものだった。Kは私がお金を持っていると分かると「ちょっと出ましょう。」と誘い、二人は裏口から外へ出た。

Kは歩きながら、「自分は1945年（昭和20年）1月、現地召集で第七国境守備隊に入隊したが、ソ連は私たちを攻撃せず、8月15日の天皇の命令で武装解除し捕虜になった。シベリア北西部のコムソモリスクのタイガと呼ばれている森林で、氷点下40℃以下でも伐採をやらされ、3ヶ月で半数が死に半数が自分のような病人になった。無傷の第七国境守備は森林伐採でわずか3ヶ月の間に全滅した。」と話した。話を聞きながら、自分がコムソモリスクの森林伐採をしていたら、果たして生き残れたかと思うのであった。



タイガ

連れていかれた場所は建物の反対側で、3mくらいのフェンスが張り巡らされ、近くに40人ほどの捕虜たちがたむろして、両手で抱えるように煎餅（せんべい）のような食べ物をほおばっていた。私は不覚にも生唾（なまつば）を呑んだ。

フェンスの向こうでは、「焼餅（シャオピン）、麻花（マファ）。」と中国人が売り声を出していた。彼らは垢（あか）と油でテカテカに光ったそでの付いた綿入れの中国服を着て、箱の両側に紐（ひも）を肩にかけ駅弁売りにそっくりだった。売り物はメリケン粉を使った焼餅と、同じ材料を棒状にして折りたたみ油で揚げた麻花である。Kは人差し指と中指で日本の5円札をはさみ「シャオピン、リャンガ。」（＝焼餅2個）と買い「今度はおごってもらいますよ。」と1枚くれた。甘酸っぱいメリケン粉の焼餅が発酵したにおいと胡麻（ごま）と醤油（しょうゆ）の焦げた香りが口の中いっぱいに広がり、味覚を反芻（はんすう）するようにかみしめ、久しく口にしなかった人間らしい食べ物がこんなにうまいものかと味わった。

敗戦国日本のお金が通用する驚きで、売り買いを観察していると、統治者の「東北人民券」より、侵略者日本を追い出した同盟国「ルーブル」の価値が高く、更にそれより「円」が高く流通していることが分かった。収容所に戻り早速お守り袋の縫い目を根気よくほどくと、成田山のお守りと100円札1枚、10円札が数枚出てきた。「これで、しばらくの間は栄養補給ができる。」とKと顔を合わせニヤッとした。

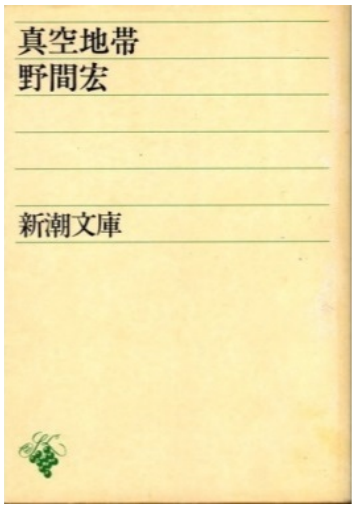
私は、戦争に負け、この地域に何の影響力もなくなった日本のお金が今も流通していて、戦勝国としてこの地方を支配している東北人民政府発行の「人民元」よりも、中国を日本から開放したソ連通貨よりも、幻になってしまった「円」がはるかに高いということが驚きだった。Kが言うには「自分たちがここに来たときよりも今は『円高』で、人民元の値打ちは半分以下に下落している。この国は内戦中で、国民党軍が北安付近まで侵攻しているというううわさも影響しているようだ。」と説明した。私は思いがけなく多額のヘソクリを所持することになり、その日からKと一緒にフェンス裏でウロウロするのが日課になった。

しばらくすると、露天市の取引商品に衣料品が加わり始めた。大きな布袋を持った中国人が袋の中から、日本軍の戦闘帽子、軍服、シャツ、靴下、地下足袋（じかたび）などを首から下げ「交換、交換。」と大声で売り始めたのだ。日本人捕虜の中には、春になれば荷物になるソ連で着せられた防寒外套（がいとう＝コート）、防寒帽子、防寒上着、防寒大手袋、防寒靴を次の冬のことなど考えもせずに交換し、差額を東北人民元で受け取り、栄養補給の財源にする者が増えてきた。だれも皆、ソ連の支給品を処分することの後ろめたさは微塵（みじん）も感じていない様子だった。そして、あの忌々しい日本軍の軍装を身にまとって何となく安心感を覚えていた。

数日して驚く場面を目撃する。3人の捕虜が物売りの中国人と話し合っていたが、突然3人は着ている軍服を脱いで中国人服と交換して身にまとい、受け取った差額の「人民元」で平然とした顔つきで「中国人顔」をして焼餅を買い食べているのだ。先覚者（せんかくしゃ）（※）は勇気ある行動が求められるが、次からは流行になり、軍服を脱ぎ中国服と交換する者が急増した。一番の理由は「差額の人民元」を「食べ物」に換えることであったが、私はそこまで踏み切る気持ちにはなれず、数日前まで過ごしていたブラゴエの収容所の日々が思い起こしていた。

※「先覚者」：人々より先に物事の道理や時代の流れの変化を見抜き、事を行う人。

鉄条網に囲まれたブラゴエ収容所。ゲート脇の哨舎（しょうしゃ）には自動小銃を持った哨兵（しょうへい）数名が配備され、四隅の望楼にも狙撃銃でねらいをつけている監視兵が目を光らせる中で雨の日も氷点下30℃の日も貨物船に積み上げられた麻袋の荷下ろしをやらされた。収容所に戻ると、大勢の仲間たちが死と隣り合わせて床に伏している枕（まくら）元で「総員何名、事故何名。事故の何名は、足下の病気就床者。使役何名。現在員何名。番号1、2、3、4、5、･･･。」と大声で叫び、小説「真空地帯」と同様の日々に身を置いて「耐えがたきを耐え」てきた。天皇の軍隊の「しがらみ」から抜け出せずに汲々（きゅうきゅう）としていた自分と、今、目の前で軍服を食物にするために中国服と悪びれもせず交換する彼らとの隔たりを否応なく考えさせられた。

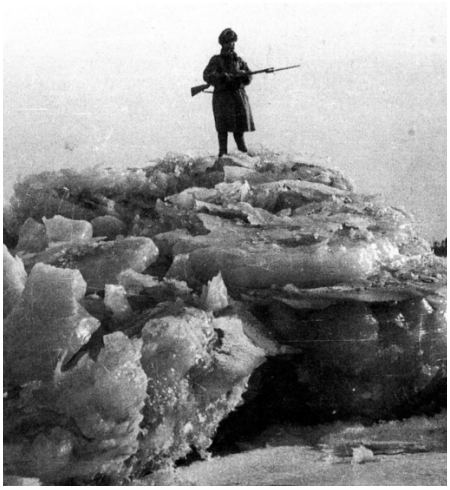


真空地帯

ブラゴエの収容所からこの収容所に移ったとき、私たちは自分の目を疑った。出入り口の門は無人で、銃を持った哨兵もいない。私たちを監視する警戒兵の姿はなく、何よりも驚いたのは「夏梅以下何名、本日付をもってブラゴエ収容所から転出を命じられ、ただいま到着致しましたことを、ここに謹んで申告致します。」という今朝ブラゴエを出るときにしてきた皇軍の儀式が、ここでは不要だということだった。広い部屋の空いている場所を自分で見つけ、隣の先住者に「よろしく。」と声をかければここの住人になれた。朝礼も点呼もなく、食器の飯盒（はんごう）を並べておくと食事当番がシャブシャブの粟粥（あわがゆ）を入れてくれるのでそれを黙って食べ、次の食事までゴロゴロと寝転ぶもよし、シラミ退治するもよし、患者それぞれに任せた休養を与えていた。そして敗戦国の「円」が一番力をもっており、今や私も百数十円の金持ちになったのだった。

この収容所に来て一番喜んだのは初年兵だった。天皇の軍隊は階級制度が厳しく、割の合わないことや辛い仕事は「初年兵集合」と集めて初年兵にやらせ、自分たちは高みの見物をきめこんでいた。初年兵が解除されるのは次の新初年兵の到着後になり、戦争に負けた今では初年兵が誕生することは永久にないのに、シベリアではこの制度が厳然と守られていた。一見「ほったらかし」のように思われるここの生活様式だが、世界一を誇った「日本軍隊の組織」を見事に解体した凄腕（すごうで）の中国流に恐れを感じるのであった。

真夜中、不意に「パシュッ」と鋭い音で目が覚め、少ししてまた鋭い音が続いてきた。背を丸め、目を閉じながら「今日か明日か。」と、この音を待ちに待っていた喜びが生きている確かな証となって耳に響いてきた。口の中で「春だ。」とつぶやいた。滔々（とうとう）と流れる黒竜江をピタリと閉じ込めていた氷が引き裂かれ、割れて無数の氷塊となり、ひしめき合って流水となって日本海へ押し流されていくさまを想像する喜び。あの音を初めて聞いたのは初年兵から 2 年兵になったときだった。「パシュッ」という突然の鋭い高音に「敵襲か。」と身構えると、古参兵が「あわてるな。ありゃ、2 月下旬になると決まって黒竜江の氷が割れる音じゃ。」と教えてくれた。歳月と時間をはく奪されていた私が、今日は昭和 21 年 2 月下旬だと知り、少し人間界へ戻った日でもあった。



氷結で盛り上がる黒竜江

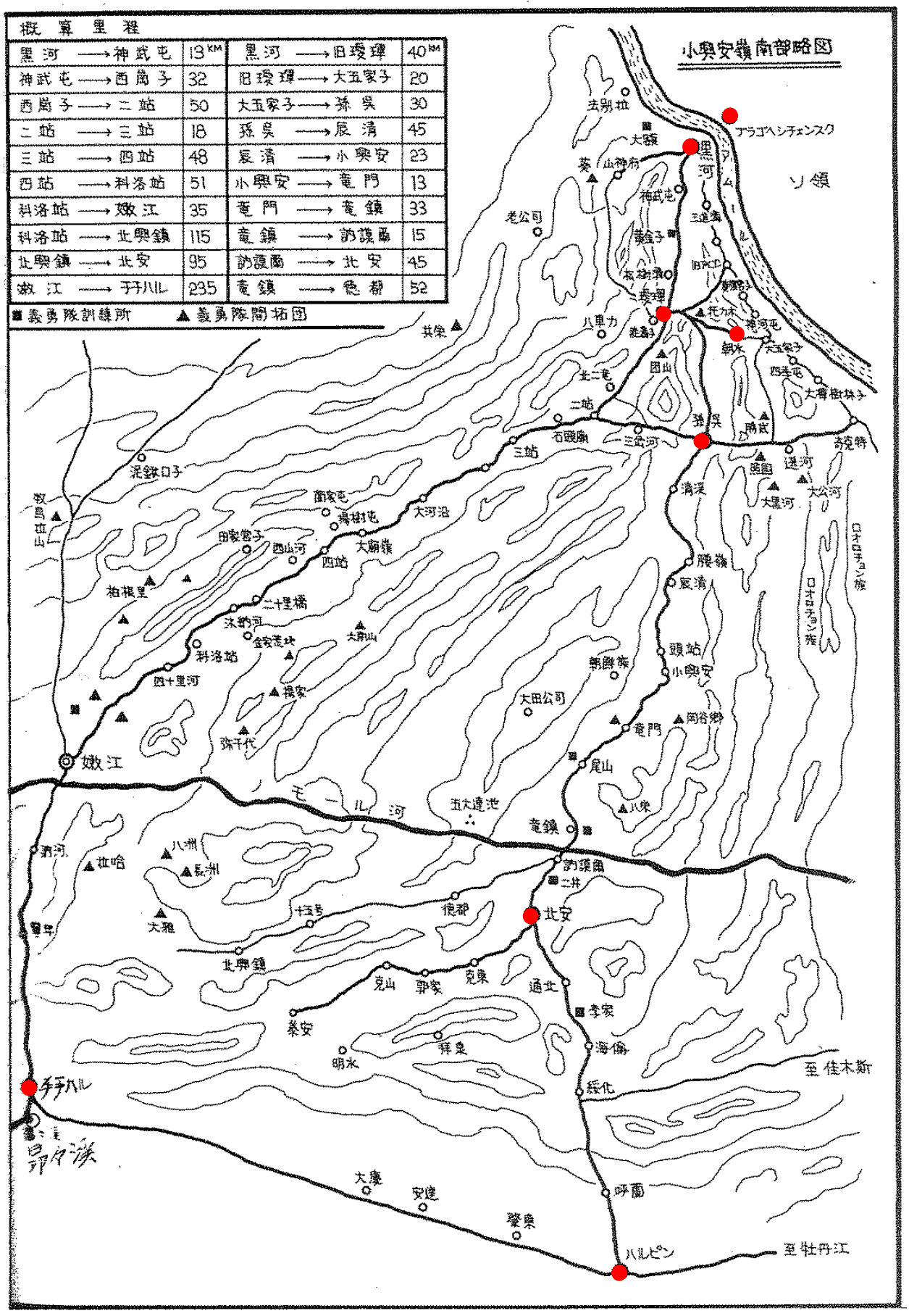
廊下の窓ガラス越しに早春の光を受けつつ、シラミ退治の連中も上半身は裸の甲羅干しで、しばし余裕のようだ。一方、毎日のように来る露天商の中国人が「お前たちも近いうちに南の方へ移動するのか。」と聞いてきた。「南に移動」とは南下を意味し待ちに待った日本に近づく一歩なのだ。これまでソ連兵のデマに散々惑わされてきた私たちは、こんな話にも飛びつくことはなく、できるだけ冷静に話の出所を聞き出そうとした。「そのような話は、どこのだれが言っていたのか。」「江岸南の収容所の日本人から聞いた。」「一人か、二人が言っただけだろう。」「いや、収容所の役人が捕虜全員に話したと聞かされた。それに昨日から防寒物を交換に出す者が増えてきた。」

この話に他の中国人も相槌（あいづち）を打っていた。「これが本当だとすると…。」私たちは考えを変え相談を始めた。「向こうの収容所だけ、なぜ移動計画が発表されたのか。」「ここには何の音沙汰（おとさた）もないとは、どういうことか。」「向こうの捕虜と私たちとの間に、区別される理由があるだろうか。」すると K が「その辺のことを聞いてみます。」と言って、いくつかの質問を中国人にした。今度は中国人が何やら話し合い結論を K に話した。K はうなずいたり聞き返したりしてから「江岸南の日本人と私たちの違いは、向こうが私たちより 7 歳くらい年上だけらしい。」というのだ。この付近一帯は国境なので、現役兵が防御しているはずで、そうだとすれば、向こうも私たちと同年齢であるはずだ。年齢が上ということであれば兵隊ではなく民間人か。すると彼らは非戦闘員だから早く帰れるのか。嫌な予感が迫ってきて、皆、次第に無口になっていった。

次の日もフェンス露店に行くと、昨日の中国人が「やっぱり話は本当だよ。江岸南の日本人は北安まで行くらしいよ。」と自分たちの情報が間違っていなかったことを強調した。私たちは彼らの情報が自分たちに及ぶものではないと分かりガックリとショボクレはしたが、一夜明けると、ブラゴエの時のように後味の悪さを引きずることはなく「北安まで行くにしても、線路もないのにどうするんだ。」「歩くことも難しい病人はどうするんだ。」などと心配する余裕も出てきた。ここ黒河と北安間の鉄道線路304km はソ連がレールはもちろん枕木までシベリアへ略奪していった。北安までの道程は町や集落を結びながら 350km にも及ぶことを、国境守備隊兵ならだれもが知っていた。

それから数日後の朝、食事当番がいつもの粟粥を配りながら「食事が終わっても、そのまま待つように。」と言って回り、中国人の物売りから聞かされた「南下」の良き知らせかと、いつになくざわめきながらの朝食だった。ほどなくして黒服の東北人民政府の役人 2 人が私たちの真ん中へ入ってきて一人が立ったまま中国語で少し話し、続いて、もう一人の男が流暢（りゅうちょう）な日本語で「私は S といいます。収容所長の言われたことは、3 日後に皆さんを北安へ移し、ソ連から日本人の病人を迎えるということです。移動は野宿しながらの徒歩です。」と説明した。更に細かい指示が続いたが、それは努力と根気で解体した帝国軍隊の組織を復活させる組織づくりだった。私はお金の使い方を教えてくれた K、上官風を吹かせない S、開拓団出身の補充兵 F でチームを組むことにした。

1946 年（昭和 21 年）4 月下旬、よれよれの軍服、中国服、地下足袋（じかたび）に飯盒と雑嚢（ざつのう）、ペラペラになった毛布を肩にかけ、服装も哀れなら体力もない病人が、黒竜江の河原に集められた。既に 400 人くらいの、一見、私たちよりも 5 歳ほど上の捕虜が、服装は私たち同様だが大きな荷物や手製のリュックを背負っていた。私たちより物持ちだと思った。露天商の中国人が言っていた日本人だろう。私たちの周囲には約 60 人の「東北人民解放軍」という胸章をつけているが階級を表す表示がなく階級不明の兵士と、解放軍と一緒に働いている日本人が、いくつも運ばれてきた麻袋を開け、小隊別に穀物、岩塩、マッチを手際よく配った。私たちも 1 週間分の粟の現物を受け取った。北安への350km をたった 1 週間で踏破せよというのだ。50 台くらいの馬車には歩行もできない病人が不安そうな面持ちで乗せられ、名簿と本人の確認も終わったのか、バタバタ走っていた兵士たちも隊列の両側に立った。前方で笛の音が聞こえ「出発。」という号令で馬車の御者台の中国人が棒の先につけた長い皮の鞭（むち）を高く振り上げて空中で一発パシッと鳴らした。ゴットンと馬車が動き、私たちも歩き出した。


概算里程
黒河 ⟶ 神武屯 13KM
神武屯 ⟶ 西崗子 32
西崗子 ⟶ 二站 50
二站 ⟶ 三站 18
三站 ⟶ 四站 48
四站 ⟶ 科洛站 51
科洛站 ⟶ 嫩江 35
科洛站 ⟶ 北興鎮 115
北興鎮 ⟶ 北安 95
嫩江 ⟶ 齊齊ハル 235
黒河 ⟶ 旧瑷琿 40KM
旧瑷琿 ⟶ 大五家子 20
大五家子 ⟶ 孫吳 30
孫吳 ⟶ 辰清 45
辰清 ⟶ 小興安 23
小興安 ⟶ 竜門 13
竜門 ⟶ 竜鎮 33
竜鎮 ⟶ 訥謨爾 15
訥謨爾 ⟶ 北安 45
竜鎮 ⟶ 徳都 52
義勇隊訓練所
義勇隊開拓団
小興安嶺南部略図
ソ領
黒河
孫吳
辰清
小興安
竜門
竜鎮
北安
嫩江
齊齊ハル
ハルピン
至牡丹江
至佳木斯
呼蘭
綏化
海倫
通北
克東
克山
北興鎮
徳都
訥謨爾
竜門
尾山
大田公司
頭站
二站
三站
四站
科洛站
四十里河
二十里橋
太廟嶺
大河沿
西山河
泥鉄口子
牧馬山
柏根里
共栄
八里力
団山
朝水
大五家子
四季屯
大興林子
石頭廟
三道河
逸河
大公河
清河
大興河
騰嶺
ロオロチョン族
第四隊
岡谷郷
五大連池
八衆
酒河
拉哈
八洲
長洲
大雅
十五号
李家
海倫
綏化
明水
拜泉
大慶
安達
肇東
呼蘭

小興安嶺南部略図

私は去年の秋、この大河の下流の孫呉（そんご）からここ黒河まで歩かされた。あの時は 4 列縦隊で、少しでも隊列が崩れると両脇（りょうわき）を数メートル毎に固めていたソ連兵が自動小銃の台尻で背中や尻や足を小突き回して怒鳴った。今回の行軍も同じように、勝者「東北人民解放軍」の兵士に厳しく小突き回される屈辱に耐える情けなさを覚悟していたが、病人、半病人の集団でもあるのか、隊列が乱れても厳しい叱責（しっせき）もなく、大目に見逃しているようだと見受けていたがそうではなかった。100％私たちの歩行任せなのだ。病人ばかりだから落伍者が現れてもチラッと見るだけで、励ますこともなく収容する手配も皆無。このままでは大量の行路死が出るだろうと心配した。

小休止を挟んで数時間ほど歩いた頃、高粱殻（こうりゃんがら）で屋根をふいた低い土塀の家がまばらに建っている集落に入った。人影はなく、しばらく進むと 5m 四方の建物の敷地内に、破壊されたコンクリートの基礎を雑草が囲っていた。私は思わず「大五家子（タウジャウズ）望楼（ぼうろう）跡だ。」とつぶやいた。紛れもなく、この上に高さ 15m の望楼を組み、通信機材や地図、100 倍の望遠鏡を備え、私も勤務した国境警備第一線の場所だ。夜になるとソ連領から音もなく赤、黄、青の信号弾が打ち上げられ、それに呼応して満州領からも信号弾が打ち上げられた。私たちは軍犬も加勢させ敵の逮捕に走ったが毎回逮捕できず、敵の周到な準備と徹底した警戒心の強さに翻弄（ほんろう）された。国境はいつもこのような緊迫した空気に包まれていた。そしてこの警備の連続が、大満州に生活している日本人の命と財産を守っている誇りだと自負していたのだった。



高粱殻の運搬

その場所で炊事、野営と伝達された。私たち 4 人は 2 個の飯盒（はんごう）と粟飯（あわめし）を炊き、別の 2 個の飯盒に食べられそうな野草の塩汁を作った。熱々の粟飯と塩汁は収容所の生ぬるい食事とは比べものにならないほどおいしかった。天幕もなく直接星空から夜露が全身を覆う野宿なので、開拓団出身の F が「あの辺に積んである藁殻（わらがら）の山があるだろう。今夜はあそこに潜って寝よう。」と皆を連れ出した。藁殻は私たちの身長より高く束ねてあり、束ね山の縄を解いて適当に並べ寝床した。藁殻が出す白酒（ハイチュ）のような香りが体全体を包み、久しぶりに良い眠りをしたと朝を迎え、寝床した藁殻を片付け始めた頃、解放軍の兵士が「君たちは昨夜、たくさんの藁殻を引っ張り出し、その上で眠った。他の連中も君たちの真似をして積んである藁殻を崩した。だれに断って人の物を使ったのか。これは農民たちの大事な副収入の材料だと知っているのか。私たちの軍隊は借りた物は必ず元通りにして返す。いる物は必ずお金を出して買う。君たちも私たちと行動を共にしているのだから、後ろ指をさされることのないようにきちんと片付けてほしい。」と言いつけた。K の通訳は私たちに人間としての恥を知らしめるものであった。



藁殻（イメージ）

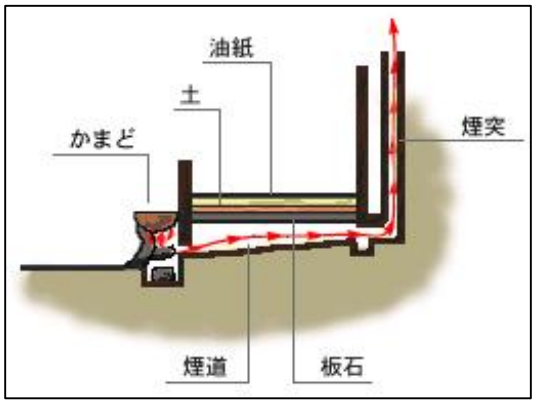
「それでも。」と F が口を開いた。「俺は開拓団にいたから、こんな藁殻でも貧しい農民には大事な収入源やとは知っとる。あの兵隊に言われんでも知っとった。そやけど 3 年以上も軍隊の飯を食っとる間に満州人を人と思わず、こんなものぐらいと思う気持ちにさせられてしまっているんや。」この F の言い訳とも独り言とも取れる言葉が、私自身の今までの体験を呼び起こしたのであった。

大五家子監視所に勤務中、日本の元旦にあたる春節に朝水本部へ馬ぞりで食糧受領を命じられ、E 上等兵と新兵の私は、馭者（ぎょしゃ）（※）をさせる農民を集落へ探しにいった。粗末な農家の玄関を支える両側の細い柱に、短冊ほどの赤紙に「新春発財（※）」と墨痕鮮やか（ぼっこんあざやか）な筆文字と「連」が張り付けてあり、貧しいながらも精一杯、春節を祝う雰囲気であった。

※「馭者」: 馬車の前部に乗って馬を操り馬車を走らせる人。
※「発財」: お金持ちになれますように。

農民は薄暗いオンドル（＝床下暖房）の上に横になり、お酒も入り長いキセルでたばこを吸っていた。国境警備の私たちは実弾を装填（そうてん）した銃に剣をつけ、人を突き殺せる軍装だった。農民は正月早々に剣付鉄砲を持ったリーベン・クイズ（日本鬼子）が 2 人も乱入したので腰を抜かしてビックリ仰天し、飛び起きてひざを抱えて震えている。E は「馭者をやれ。」と命じた。農民は両手を合わせて三拝九拝（さんぱいきゅうはい＝何度もお辞儀をすること）し「今日はご勘弁を。」と哀願した。E は銃を私に渡すと土足のまま上がり無言で農民と胸倉を捕まえ、いきなり数発殴り土間に引きずりおろして「文句を言わず支度せよ。」と倒れている農民を防寒靴でけり上げ、呆気にとられていた私に「てめえのように、ただ突っ立っているから満人になめられるんだ。」と怒鳴りながらみぞうちに一発。一瞬、息が詰まった。そんな仕打ちを受けた私も 3 年後には「陳（ちん）」という名の満人を「名前がおそれ多い。」と殴っては溜飲（りゅういん）を下げる（※）連中の一人に変貌していた。

※「溜飲を下げる」: 不平、不満、恨みなどを晴らし、胸がすっとすること。



オンドルの仕組み



銃剣

S が「立つ鳥、後を濁さず。」と言って率先して藁殻を片付け、それを F が長い縄で縛り上げて元通りにした。この事件後、私たちに注意した解放軍兵士の言葉や態度が気になり、歩きながら考えるようになった。私が東北人民解放軍と初めて顔を合わせたのは、今度の移動のために集まった黒竜江の江岸だった。その少し前まで、人を人間扱いしないソ連にいて病気にされ、厄介者扱いされて中国へ放り出された。一方的に病人の受け入れを強制された中国にとっても私たちはお荷物であることには変わりないのに、彼らがソ連兵と違うのは、病人に対する看護兵の態度だった。私はこの徒歩行に耐えられると思った。

私が知っている中国人は、この最果ての国境に駐屯する日本兵の近くに居住している貧しい先住民族で、それを後から来た日本兵に一方的に武力で便利屋にされ、物資輸送や労役要員に組み込まれた。「モタモタするな。」と罵声を浴びせられても心の奥底を見せず「没法子（メンファズ＝仕方ない）。」の言葉を一度出すと、すべてを忍び耐える姿にすごさを感じていた。外からの力で運命を無法に変えられ、どん底に突き落とされても従容に落ち着き、乱れず受け入れるすごさ･･･。それは私たち日本人にとっては「耐えがたきを耐え…。」という天皇の命令に服することに通じ「我が国の軍隊は、世々天皇の統率し給ふ所にぞある。」という軍人勅諭の体現に他ならないと思った。

黒河を出発して 3 日ほど経過した。K が解放軍兵士たちの会話を教えてくれた。私たちは 1,500 人以上で、今、行列の長さは延々30km にもなり、既に力尽きて死者も出ているという。私たち 4 人は無性に腹が立った。私たちは歩く力が尽きた場所が「墓場」となる南下行の真っ只中にいた。

8 日目。配給された食糧で、1 週間で北安まで歩けるはずだったが、病人の足並みではまだ 3 分の 1 の行程のようだ。隊列は私たちの前後を歩く姿もなく、延々と波打つ畑の畝をダラダラと伸びた。へたばり休んでいる者を追い越す度に「この道で良い。」と確認するのだった。目の前に連なる山々の形に見覚えがあり目を凝らしていたが、その中腹にはコンクリートで固めた四角形の砲眼が掘られていた。私が 1942 年（昭和 17 年）から 3 年間過ごし、昨年 8 月にソ連軍の攻撃に対し、K 軍曹と初年兵たちが必至の防戦を展開した朝水陣地だった。

明治維新後、日本は列強入りを目指し「富国強兵」「帝国主義」で満州に傀儡国家（かいらいこっか）を建設し、ソ連領と対峙する国境に守備隊を配備した。その一つが朝水陣地だ。陣地の構築は 1931 年（昭和 6 年）自作自演の満州事変の翌年、1932 年（昭和 7 年）頃から始まった。労働者募集を行わず、中国北支に侵攻した日本軍が、華北で精悍な中国男子を拉致して建設させ、労働賃金は阿片。阿片中毒にし、阿片欲しさに働かせるという狡猾な手段を用い、1938 年（昭和 13 年）に概ね工事は完了。巨大な永久要塞（ようさい）の秘密を守るため労働者を抹殺し、陣地の谷間に埋めた。陣地は小興安嶺の支脈が、黒竜江の江岸に果てようとする山々の内部をくり貫き、厚さ 1m50cm の鉄筋コンクリートで固められ、内部は部隊の休憩所（兵室）、救護医務室、炊事場、兵器・弾薬倉庫などが完備。発電設備、戦闘指揮所、観測所、砲塔は、武装した部隊が 2 列で歩ける地下通路で結ばれ、陣地の至るところに機関銃、山砲のトーチカを配備。15cm 榴弾砲、10cm カノン砲、高射砲が 30mm の鋼板に護られた 360° 回転する砲塔に据え付けられ、砲弾の運搬にはトロッコを用いた。

この陣地に 1942 年（昭和 17 年）に配属された私は、「3 時間死守」をたたき込まれ、背嚢（はいのう）を背負った完全軍装に防毒マスクを装備し「突撃」の命令で「うわぁ。」と喊声（かんせい＝わめき声）を上げて突っ込む訓練を繰り返した。訓練中、この地域特有の湿地帯で足を滑らすと腰まで湿地の中に沈み動けなくなる。上等兵は「モタモタするな。孫呉熱で死ぬぞ。」と怒鳴った。「孫呉熱」とは、この湿地に生息する寄生虫が原因の風土病で、衣服から皮膚を通り、体内に入ると高熱で死に至る。演習が終わり兵舎へ戻ると自分のことは後回しにして真っ先に班長と上等兵の巻脚絆、帯剣、軍靴を奪い合い、ピカピカに磨き上げて「〇〇二等兵、班長殿の軍靴を持ってまいりました。」と下士官室の扉をたたき「ご苦労。」の声を聞いてから、自分の小銃、剣の手入れと濡れた衣服を洗濯した。「飯上げ」の使役。飯を丸呑みで食べ終え、食缶返納。点呼準備の掃除、防火用水の水換え、痰壺（たんつぼ）の清掃、厠の掃除と追われ、これらをだれが率先してやっているかに古年兵は目を光らせていた。休む間もなく哀調をおびた「消灯ラッパ」で消灯就寝。眠るのを待つかのように「初年兵、起きろ。」の大声で飛び起きると、きれいに磨いた痰壺が汚れていると難癖をつけられて「全体責任」で殴られてから深い眠りに。これが毎日続くのだ。爆弾を抱いて戦車の下に飛び込む訓練は負け戦になってからであった。



痰壺

今日で何日歩いただろう。土塀や楊柳（ようりゅう、やなぎ）が立ち並ぶ集落に入った。道の両側に日本軍の毛布、軍服、靴などを並べ、私たち相手に「安いよ。交換、交換。」と客寄せをしている。私たちは品物の交換よりもまず、今までより大きいこの集落がどこなのか知りたかった。「北孫呉（きたそんご)」と聞き「何とかここまで来たか。」という安堵感と共に、これから先が思いやられた。露天商を見て回るとたくあん、味噌、梅干しなどの「純粋な日本の香り」の前に立ち尽くした。売り手は「安いよ、安いよ。」を連発。ヘソクリで食糧と一緒に日本の味も買い、集落から離れた井戸の水で「野草の味噌汁」「粟雑炊」「たくあん」「梅干し」という豪華な晩飯に、私たちはまたもやしゃべり尽くした故郷の話を続けていた。

今までは道の両側に湿地が多く、その湿地を覆い尽くすように山蕗（やまぶき）に似た大葉が茂っていたが、次第に湿地も少なくなり、道幅も広くなると、一転して高粱（こうりゃん)、トウモロコシ、粟などの苗若葉が葉音を立て、遥か遠くまで畝が連なっている光景が目に入った。私たち 4 人はここが北満州最大の穀倉地帯だと承知していた。昼食は畑の傍らで土のにおいの中で食べた。F は「この付近一帯の土地は、肥料なんかやらなくてもよい肥沃土（ひよくど）で、その厚さは俺の背丈より深いんや。肥料をやらなくてもトウモロコシは背丈が 3m も伸び、良い身をびっしり付けるんや。俺がいた勃利（ぼつり）も、この辺の土壌と同じや。」と言い勃利の方角を指さして更に言葉を続けた。

「俺ら小作農は、自分の農地が持てる満州に開拓村を建設にきたんや。みんなで力を合わせて開墾して、収穫ができるまで何年かかるか分からないが頑張ろうと励まし合い、誓い合い、脱落はしないと約束したんや。割り当てられた入植地へ入ってびっくりさ。開墾などしなくてもよい農地、良く手入れされて、今すぐ種まきができる広大な農地をもらったのさ。でも、その農地は満人（中国農民）のをタダ同然で取り上げ、俺らに分配したと聞いて何とも後味が悪く不安だった。」と話した後「女房、子供たちは今頃どうしとるのやろ。」と目を伏せた。初めて聞かされた 3 人は、彼に何と言えばいいのか分からないまま黙りこくった。

私たちは、互いに労わりつつ、高騰した「円」で食料を買い食いしながら北安にたどり着いた。「4人そろっての北安着は、お前たちだけだ。」と絶賛された。



満州中央銀行券

北安の収容所長は私たちのチーム力を認め、4人で北安軍政学校の炊事係に任命。建物は日本の全寮制旧制中学の校舎だった。日本文字がそのまま残されており6畳の和室を使えと言われた。4人とも場所と環境は違うが、シベリアで死を覚悟し「畳の上での死」を願望したのに、今ここで大の字になって畳に寝転んでいる。荷物は飯盒（はんごう）、箸（はし）、毛の抜け落ちた毛布1枚だった。監視兵もなく、自分の体にあった食べ物を作り、それぞれが回復に勤めた。若い生徒たちは年配の私たちに礼儀正しく接し、少し人間界に戻った気分だった。



4人に体力が少し戻ったと思った頃、収容所長が「君たちより体力のない者と代わって欲しい。」と相談に来た。今までの一方的な命令でないのに私たちは驚き感謝して承知した。行き先は東山（とんさん）の「炭坑」だった。黒河から移されてくる捕虜で北安はあふれ、少し元気な捕虜たちが「貨車」ではなく「客車」で移動できることに再度興奮し東山に着いた。

中国側は10名に1人組長を選び、組長10名の中から寮長1人を決めよと言う。Kが組長を引き受け、組長たちが選んだ寮長は年配のAさん。昨夜、日本側の寮長6名と、中国側3名の代表が話し合い、今日から始める作業について中国側の提案も受け入れて双方が了解した。

中国側に「これから君たちの生活に必要な炊事場、井戸、便所、ふろ場などの生活場建設と、各寮の暖房施設などを1週間ほどで完成してもらいたい。君たちの中の大工、左官（さかん）、板金（ばんきん）などの技術者には、必要な工具、機材、レンガ、セメントなどの材料を渡す。各技術者に他の者は協力するように。君たちの生活場所だから全員の力でやり遂げてほしい。」と言われ、昨日までブツブツ言っていたやつらも「そういう話ならやるしかない。」と重い腰を上げた。

翌朝、大工、左官、板金の親方を先頭に材料を受け取りに行き、ツルハシ、スコップ、大工道具、ブリキ板などを持ち帰り作業が始まった。炊事の竈作り（かまどづくり）はレンガ運びから。腹の前に組んだ手の上にレンガ 6 個を乗せて炊事場になる場所へ。ツルハシとスコップで井戸掘りも始まり、大工が積み上げた材料から井戸枠やツルベを。周辺集落の中国人から 15 台ほど馬車を借り、北安から運んだ炊事道具を駅まで取りに。左官が慣れた手付きでかまどの焚口（たきぐち）を作り、レンガを積み、中国特有の「平鍋」（ひらなべ）を据え付けると、いっぺんに炊事場らしくなった。



井戸とツルベ



かまど



平鍋

圧巻は「板金」だった。板金親方は作る品物のイメージを頭に描き、ブリキ板を鉄ハサミで切り出してレールの切れ端にブリキ板を置いて金槌（かなづち）でたたくと板が円筒に変化し煙突（えんとつ）になったのだ。円筒の片端を膨らませるようにたたき出す。何人かの中国人親子がしゃがみこみ親方を半円形に囲んで驚きの声を上げて見学。親方はブリキ板に大きな「扇」の絵を描き、鉄ハサミで切り出し「バケツ」を創り出した。両面から接続させるひだのたたき出しは細心の技術が伝わってくるので、見物人も静かに見守っていた。たたき台のレールを立てたり斜めにしたりしてバケツの底もたたき接続させ、子供に水を持って来いと頼んだ。親方は見物の中国人にバケツを高く掲げさせ、別の中国人に水を入れさせ、子供に「底を見て、水が漏れたらフォワイラー（＝駄目）と言え。」と命じた。一滴も漏れないのに驚き、中国人も捕虜も驚異の声を上げ、拍手で親方を絶賛した。

寝起きするアンペラ小屋（※）にはそぐわない立派な炊事場は、土ではなくレンガ造りで、ピカピカの煙突が立った。隣のふろ場は、鉄板を溶接して 1 度に 15 人ほど入れる浴槽が備え付けられ、洗い場も広く作られた。無人のアンペラ小屋には舞台ができ、3 人掛けの腰掛けが並べられて小劇場になった。特に炊事場は私たち 4 人が働いた日本人が設計した全寮制中学の炊事場をモデルに、更に日本人向けに使いやすいようアドバイスして作ってもらい、見物の中国人からは「ため息」が出るほど絶賛され「この素晴らしい技術を持った日本人を使いこなせないソ連は愚か者だ。」と悪態をつく者も出るほどだった。

※「アンペラ」：高粱（こうりゃん）の茎（くき）で編んだ敷物。畳の代用とした。

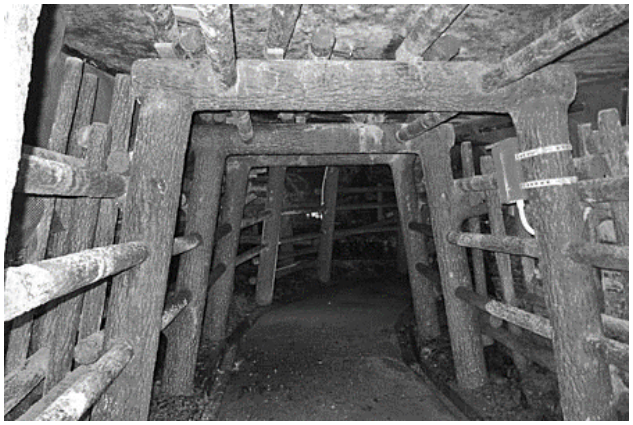
建設作業を始めて 6 日目。初めて炊事場で料理された食べ物が並べられた。脱穀し柔らかくした高粱（こうりゃん）飯に、白菜と豚肉の油炒め、塩の利いた漬物。私たちは「軍政学校以来のご馳走だ。よく働いたご褒美やろうか。」と、いつになく賑やかに食事をした。



高粱飯

翌朝、全員集合。日本側の寮長たちと、中国側の所長、見慣れない中国人幹部がいた。A 寮長が開会を告げ、所長に発言を求めた。所長は開口一番、私たちの働きを絶賛。「私は皆さんの仕事を見てきた。皆さんは、ここに着いたばかりなのに炊事場、ふろ場、井戸掘り、便所など、どれを見ても、十分な材料もない中、素晴らしいでき栄えだ。」と持ち上げ「炭坑は、初体験者が多いので、坑区の次長に説明させるが、その前に諸君の労働条件、賃金も、中国人と対等とするよう次長に求める。」と言った。

次長も、中国人労働者と同一条件と切り出し「この炭坑の炭質は軽量で無煙、火力が強く、需要が高く生産が追いつかない。皆さんの働きに期待している。」と。作業は「掘進」「採炭」が主力。1 日 8 時間労働。どの現場も「朝番」「昼番」「夜番」の 3 交代制。「夜番」の次が休日。各番は 4 人 1 組。番方番号札を受け取り作業開始。出炭台数と賃金計算は、各トロッコに差し込んだ番号札の 1 ヶ月枚数の合計を 1 台出炭単価に掛け、その 4 等分が各人の賃金額になった。他に坑木（こうぼく）を坑内に運ぶ仕事は落盤防止の大工作業の補佐雑務で 8 時間労働の固定給。「どの仕事を選ぶかをまとめ、各寮長に提出し、速やかに坑山事務所に提出してほしい。」と指示があった。



坑木

話が終わっても私たちはだれ一人立ち去ろうとせず、各人がいぶかって疑問をぶつけ合った。私たちは、この東山へ来てから監視兵も鉄条網で囲まれることもない自由人扱いだったが、それは私たちの明日からの生活に「解放されたのか。」と思うほどの希望を与えた。しかし、もしそうであるならば炭坑側（東北人民政府側）は、なぜ私たちを捕虜から解放して帰国させないのか。北安に来て以来、抱き続けてきた疑問を中国側から見たとき、その理由が明らかになるような気がした。

ソ連から役立たない病人捕虜を引き受けた「東北人民政府」は、中国東北地方（旧満州）の一部を占有する地方政府に過ぎず、松花江（しょうかこう）から南は「国民党軍」の支配下で、紙幣を発行しても、その価値は国民党軍が優勢なら下落し、アメリカ製の武器弾薬で武装している国民党軍との戦闘は熾烈を極めているようだった。戦況を詳しく知らされずとも貨幣価値の上下で人民は情勢を知ることができた。



満州国地図（1934 年末）

このような状況下で私たちを解放しようとしても、国家としての形態すら整っていない現状では、米国政府統治下の日本との外交折衝や手続など容易にはできないだろう。それを考えると、私たちの解放、帰国は程遠いと思わざるを得なかった。それは敗戦以来、私たち「いのちながらえた」捕虜が、2 度目の越冬を伝える文通すらできない環境に置かれている現状からも明らかだった。



ボタ山（イメージ）



炭を積んだトロッコ（イメージ）

黒河から同行している私たち 4 人は固い「絆」で結ばれていた。3 週間、風雨に曝（さら）され、夜冷えの野宿を励まし合って、黒河の物売り中国人が「病人が野宿しながら 350km も歩けないよ。」と心配した行程を生き抜いたのだ。倒れた人のモノを食料と交換してたどり着いた人もいた。私たち 4 人は、賃金は安いが昼働き夜寝る大工作業、雑役補佐を選んだ。今日は初日だ。4 人で坑山事務所の出勤簿に拇印（ぼいん）を捺した（おした）。キャップランプの付いた帽子をかぶり、ピッケルのようなハンマーをもった中国人が私たち 4 人に「行くぞ。」と声をかけ出発。鶏や豚も飼っている炭鉱労働者の住宅が並ぶ中を通り抜けると、前方のボタ山（※）にワイヤーでつながれたトロッコが上下していた。

※「ボタ山」: 石炭の採掘に伴い発生する捨石（ボタ）の集積場。

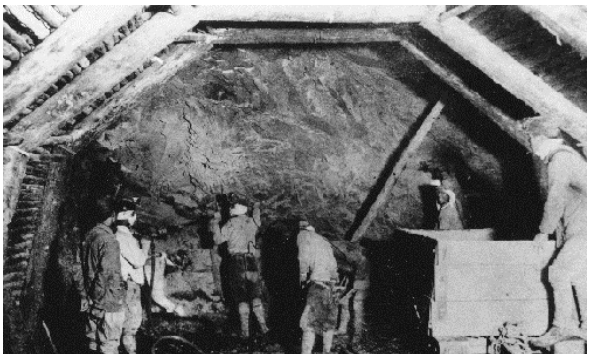
うず高く積まれた丸太の前で私たちを止め「私はこの地区を仕切る監督の A だ。仕事をしながら話を聞け。この坑木を 2 人で担ぎ、向こうのトロッコまで運べ。」と言う。すかさず F が「俺が後ろを担ぐ。」と私をかばってくれた。水分をたっぷり吸い込んだ白樺の丸太はものすごく重く、頼りない腰付きで一歩を踏み出した。朝露に濡れた丸太から雫が背中を伝い、軍隊シャツと夏服と冬服の重ね着をしただけの粗末な作業着の私には、その冷たさと重さが骨身にこたえた。

監督が「前はゆっくり丸太を下ろせ。」と大声。私は腰をかがめ丸太を下ろした。「後ろは丸太を抱え、足をずらしながらトロッコまで進め。」と更に大声。F と私は渾身の力を絞って丸太をトロッコに入れ、分厚いゴムベルトで固定してトロッコに乗った。監督は、「皆、乗ったか。返事をしろ。」と怒鳴る。皆「はーい。」と大声で返事する。やかましい「職場」なので大声でないと通じないし、気を緩めると大怪我だ。監督は握っていた連結棒でトロッコの横を強くたたき出発合図を出す。「頭を下げろ。」と言われ、薄暗い裸電球に照らされた狭い坑内へガラガラッと反射音を響かせ急降下し坑内の平地で止まった。




炭坑内の労働（イメージ）

監督は「ここが『掘進』の現場だ。冬、寒くなると君たちもこの暖かい現場を希望するようになるから、この仕事を見ておくように。」と言った。先端は 2 人の坑夫が左右に分かれ、1m ほどの高さの炭層にやや小さいツルハシを小振りにして溝を入れていた。監督は「あの溝をできる限り深く掘り、上からたたくと、効率よく石炭が取れる。」と教えてくれた。2 人の坑夫が同時に上をたたくとドスンと大きな石炭の塊が落下し砕けて大小に散らばった。スコップ役は 5m ほど離れたトロッコへ何回かに分けて石炭を積んでいった。



掘進作業（イメージ）



トロッコで運ばれる坑夫（イメージ）

監督は「炭層に岩盤が通っているときは発破（はっぱ）を仕掛ける。その時はまた説明する。私は他の現場へ行くから君たちはトロッコで上に戻り仕事を続けるように。」と言い残すと去っていった。私たちだけでトロッコに乗り、F が監督の言ったように「皆、乗ったか。」と大声。皆で返事をすると F が連結棒でトロッコの端を「カーン」と一発たたく。驚く速さで巻き上げられ、一気にまぶしい地上へと出た。私たちは大仕事をしてきたような気持ちになって柔らかな草原にひっくり返って深呼吸をした。

坑木用の丸太運びも 1 ヶ月が過ぎた。私は相変わらず危なっかしい腰付きで F の力を借りてトロッコに積み、固定し、裸電球を頼りに急降下して現場へ担いでいく。一つ間違えれば大怪我で、毎日、身も心もクタクタだった。そこへ秋のない 2 度目の冬が一気に襲い掛かってきたが、それに耐える衣服を持たない私たちは監督の「予言」どおり坑内作業に身を置くしかなかった。

監督は「リーベン・クイズ（＝日本鬼子)」の私たちに、折に触れ、親切丁寧に「掘進」「採炭」「発破」の作業方法を大声で怒鳴るように説明し、この日が来ても私たちが困らないようにしてくれていたのだ。明日から坑木運びの「雑用」から、いよいよ「掘進」の現場に入る前日、初めてソ連の「軍票」と「東北人民券」で賃金を受け取った。寮長は「賃金から当月分の食費、1 ヵ月分の食料備蓄費、炊事等の無賃金者の賃金、病人の食費などを差し引いてある。」と言った。私は差し引かれても思ったより多かったのでほっとした。

ついこの間まで、トロトロの粟粥（あわがゆ）をすすっていた私たち全員には、お金を持ったことで変化が現れた。食物売りの中国人も宿舎の周囲を売り声高くうろつき出し、それぞれが自分の好きな食べ物を買って晩飯に入れた。また中国人が着ている自家製の綿入れ服や、大手袋を持つものも増えた。これらは中国人坑夫の奥さんの手作りで、裁縫の上手下手で人気が二分され、坑夫が宿舎に来て注文を取るようになり、後払いでもよろしいと私たちは信用され、収入の少ない雑役組も、越冬できる衣服を着ることができた。

ある日、この炭坑へ出発するときに乗車した北安駅の別ホームで、軍服を着て顔に煤（すす）を塗り、黒髪を切って男に変装した日本女性の一団がいた。その彼女たちが南山（なんざん）にいると伝わってきた。それを知った何人かが往復 20km もある南山まで「婚活」に出かけた。ボタ山の向こうに夕日が沈む頃、喜色満面の 3 人が絣（かすり）の和服にモンペ姿の「お嫁さん」を伴って帰ってきた。娘たちは汚れた軍服を脱ぎ、とっておきの着物を着て、棄民（きみん）された同士が異国で苦労を分かち合う伴侶を得たというささやかな安堵感と喜びに充ちていた。この夫婦たちに坑山側は「新居」を提供するという粋な計らいをした。



満州勤労奉仕隊の女性

それぞれの新居に案内される 3 組の新婚たちの両側に皆が詰め寄り「おめでとう。」「うまくやれよ。」なとど声がけして頭や背中をポンとたたく者もいたが「これからが大変だなぁ。」という声も聞こえた。私は自分ひとりでも日本へ帰れるかと心配していた。現役兵から捕虜となった日々が「青春」であったその時の自分には、彼らの生き方など到底理解することができなかった。

坑内組は大小に関係なく 1 個の石炭を持ち帰ることができ、炊事、暖房に使った。資格のない大工組は肩身の狭い気持ちだった。真っ黒な顔をして帰ってくるなり石炭をストーブの脇に下ろし、ぶすっと「ただいま。」と言う顔には、イッパシの坑夫の面持ちがうかがえた。そんな連中と初めて「掘進」の現場へ行く私たち新米 8 人は、坑内事務所で捺印を押した後、器材庫でツルハシ、裸電球、ソケット付きの電線などを渡された。先輩が「先の丸いツルハシは、砥石（といし）掛けに余分な時間を取られる。」と注意してくれた。10 数台のトロッコに器材と一緒に分乗し、急降下して現場に到着。私の組は F が先に立ち、坑木の先端に電線を張って裸電球で作業場を明るくし、2 人 1 組でツルハシとスコップ組を適当に交代しながら作業した。

監督が回ってきて、新米の作業をしばらく見ていたが「まぁ、その要領だ。2、3 日すると岩盤が出てきて発破が必要だろう。発破はその時に教える。」と言って他へ回っていった。1m くらいの深さに炭層をはぎ、教えられた通り上をたたくがポロポロとわずかしか崩れてこなかった。「石炭も新米をばかにするのか。」と思い切りたたいたらミシミシと音を立てて大きな塊が落ちてきた。スコップ組が大急ぎでトロッコの方へ放り出した。



石炭をトロッコで運ぶ坑夫

ツルハシとスコップを持ったのは去年の夏、孫呉陣地で戦車壕を掘ったとき以来であった。スコップ組はたまった石炭をトロッコに積み、空車と入れ替えなどで忙しかった。山盛りに積んだトロッコに番号札を立てた数台のトロッコを引っ張り上げるため、F は張りのある声で「上がるぞ。」と連結棒でトロッコの端を力強くたたいた。こうして「掘進」初日の私たち新米は、大きな石炭を一つ担ぎ「ただいま。」とストーブの脇に積み上げた。

3 日目、監督の予言どおり発破になった。いつもの器材の他、12 ポンドのハンマーと六角の鉄棒を握った。その途端、不意に背筋に悪寒（おかん）が走り、血が引いて倒れそうになった。去年の今頃、氷点下 40℃のブラゴエで、満州から略奪した水分で凍りついた石炭を砕き落とした棒と同じだった。そして紙袋に入った 12 本のダイナマイトと導火線を持ちながら私は複雑な心境だった。棄民された捕虜が結婚し、今、私は爆薬を持たされ運んでいるのだ。

石炭断層には、灰白色の岩盤が 70～80cm 幅で層をなし、層に沿って 3 ヶ所に六角棒で深さ 1m の穴を穿ち（うがち）、穴一つにダイナマイト 4 本を装填（そうてん）して導火線と接続する。点火役の電球当番が「準備いいか。」と大声。私たちは工具を持ち、30m 以上離れた避難所へ身を隠して「よーし。」と応えた。もう一度確認し電気当番は「点火。」と叫ぶ。青白く線香花火のような火花が吹き出るのを確認して電気当番は私たちの避難所へ駆け込んだ。緊張の数分後「ドドン、ドドン。」と 2 発。間を置いて 3 発。私たちは「成功。」とうなずき手を握り合った。ツーンと鼻をつく硝煙のにおいと、のどにまでからまってくる炭塵（たんじん）の中で 4 人は一生懸命に石炭をトロッコに積み上げた。

朝 5 時にはツルハシを振るっている 1 番方から、夜寝る頃に仕事に出かける 3 番方までの 3 交代の日程が一巡する頃、私たちは仕事の要領が身に付いてきた。その頃キャップランプを付け、ハンマーを持って監督面をする中国人がうろつき出した。彼らは A 監督の下で働く日本人に余計な口出しをして偉そうに振る舞い「お前らリーベン・クイズ（日本鬼子）は、俺らに快快（早く、早く）と鞭でたたいた。俺は鞭ではたたかないが、もっと早く仕事をしろ。なんだ、このトロッコは。もっと積め。」などと仕返しを始めた。農民 F を除き私たち 3 人は「脛（すね）に傷」（※）のある身であった。

※「脛に傷」：人には隠しているやましい事や、過去に悪事を働いてうしろめたいことがあること。



ツルハシを持った炭坑夫

少しでも早く切り上げたい 3 番方では、明け番が近づき「明日は休みで、次は朝出の 1 番方か。」と思うと足取りも軽くなった。仕事が終わりふろ場で手足を洗い食堂へ。炊事係が運んできた食缶には「ねぎ」「味噌の香り」「甘そうに光る黒豆」。目を丸くして驚く私たちに「今日は日本の正月らしくと炊事が苦労したのや。」と言った。「そうか。今日は 1947 年（昭和 22 年）の元旦か。」「俺の故郷はすまし雑煮だ。」と各々が日本の正月を語り出した。ここは旧正月を祝うので、今日は日常と同じなのだ。それにしても去年はシベリアで正月も知らず、今年は炊事に教えてもらったのだ。

そのような正月早々、黒服（人民軍の制服）を着た新顔が坑山の事務所に現れた。「彼は日本人だぞ。」とうわさされた。彼は思いのほか早く私たちの前に姿を見せた。私たちが食事を終わった頃を見計らって大きなふろしき包みを背負って現れ「これ、回覧本です。読んでください。」と言った。寮長は「これは、これは。」とお礼を言いかけたが「別の寮にも配るので。」と告げるとすぐに出ていった。皆、日本の文字に飢えていたので歓声を上げて喜んだ。横光利一、久保田万太郎、井伏鱒二、芥川龍之介などの本の間に、薄茶色に変色した昭和初年頃に発行された「改造」「中央公論」が数冊重なっていた。私はその 1 冊を取りページを開くと目次の巻末に「蟹工船　小林多喜二」の文字が目に付いた。急いでメールをめくると文章の至る所が「×××」の伏せ字と「〇〇〇行削除」の検閲の跡があり私は愕然（がくぜん）と驚き「やはり本当だったんだ。」とつぶやいた。



改造と中央公論

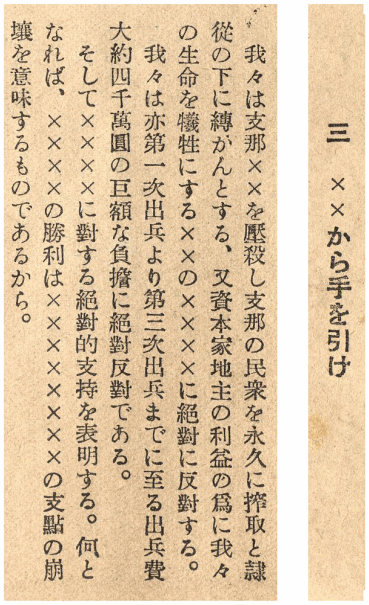
『蟹工船』（かにこうせん）は 1929 年（昭和 4 年）に発表された小林多喜二の小説である。プロレタリア文学の代表作とされ、国際的評価も高く、いくつかの言語に翻訳されて出版されている。この小説には特定の主人公がおらず、蟹工船にて酷使される貧しい労働者たちが群像として描かれている。

軍隊に入る前、学友の兄が、この種の本を回し読みしていると聞いたが、本物を見るのは初めてだった。好奇心も手伝って、この本を借り読むことにした。文意は「伏せ字」と「削除」とで原文をとどめないほどに歪められていた。それにしても、あの時代、特高警察や憲兵の厳しい弾圧下にも屈せずに書いた人と出版した本屋がいたのだ。

そして私たちの年代に入ると「伏せ字」「削除」に覆われた本ですら見ることも発刊することもできないほどの「言論統制」へと突き進んでいったのだと思った。私は「××抹消」や「〇〇行削除」の前後に連なる文脈の流れをいかんとも推測できなかった。それでも、あの時代、この種の本を読み回した人たちは、紙背に達する眼光をもって、それらの紙面を守っていたのかと思った。そして今、アンペラ小屋でこれを読む自分の置かれている立場と状況を考えた。



小林多喜二の著書「蟹工船」


三 ××から手を引け

我々は支那××を壓殺し支那の民衆を永久に搾取と隷從の下に縛がんとする、又資本家地主の利益の爲に我々の生命を犧牲にする××の××××に絶對に反對する。

我々は亦第一次出兵より第三次出兵までに至る出兵費大約四千萬圓の巨額な負擔に絶對反對である。

そして××××に對する絶對的支持を表明する。何となれば、××××の勝利は××××××××の支點の崩壞を意味するものであるから。

伏字された本

回覧本を配った黒服の日本人と私たちの顔合わせが各寮で始まった。寮長を中心に私たち 30 数人が集まり、寮長が彼を「私たちと坑山側や地方政府との折衝役として赴任した H さん。」と紹介した。H さんは「私は皆さんと坑山側との架け橋になれるよう働きます。」と頭を下げ「今、東北（旧満州）の各地域では工場、坑山、事務所、学校、農場などで『学習運動』が一斉に始まっています。この東山（トンサン）でも中国工人、職員たちも学習運動の準備を進めており、私たち日本人も彼らから、この運動に参加しないかと誘われました。それを受けて日本人としてどのように学習するか、その試案を作り、地方政府の指導を受けて原案をまとめました。それを今から皆さんに聞いていただきたい。そして意見、要望などを聞かせてください。」と前置きし次のように話した。

「ここ東山で働く日本人 300 数十人の大半は国境守備隊としてソ連軍と戦い、敗戦後、捕虜として強制労働と伝染病で多くの仲間と死別を繰り返した人たちと、王道楽土建設の国策に従い、開拓農民として渡満した人たちである。両者とも『聖戦遂行』の国家方針の犠牲者と言えよう。あの『大東亜共栄圏の建設』という大号令に、どれほど私心を挟む余地があっただろうか。己の主張など、ありようもなかった。今、日本では戦争の責任を曖昧にするような『一億総懺悔（そうざんげ）』などという風潮にあると聞くが果たしてそれでいいのだろうか。私たちは自信の体験を通して、それに対して考え方を確立しなければならないだろう。それが、これからやろうとする学習の原点だ。」

質問を促された私たちは、まだ「言挙（ことあげ）せぬ民（※）」から這い出そうとせずHの話が終わると、いつものように何人かで頭を寄せ合い「なんか、少しは分かったような気もする。」「要は自分の頭で考えろということか。」などと話し合った。その数日後もう1人の黒服に日本人が現れた。鍛えられた風貌（ふうぼう）で52歳くらいのこの人をMさんと「さん」付けで呼ぶようになった。

※「言挙」：言葉に出して、取り立てて言うこと。

Mさんは、ここへ来た翌日から私たち一人ひとりと個人面接を始めた。皆それを鬱陶（うっとう）しがったが、面接を済ました人によると健康状態や仕事について不満や要望、日本の家族などへの心遣いや不安に思っていること、特技の有無などを聞かれたらしく、私たちの事を考えている人だと感想を話してくれたのでホッとした。

私の番が来た。室内に入るとMさんはいすを立ち「疲れているのに申し訳ない。」と謝り、私にもいすを勧めてくれた。軍隊と捕虜生活で4年以上を過ごした私は久々の「人間扱い」に少し戸惑いを感じた。Mさんはやせている私の体格を最初に気遣ってくれ「体の調子はどうですか。」と。私が「まぁ、何とかやっています。」と答えると「何かやれるようなことはありませんか。」と尋ねた。「デッサンと水彩を少し習いました。」と答えた。

HとMさんが来てから、私たちが寝食するアンペラ小屋にも少し変化が見え始めた。まず顔を合わせても滅多に口を利かなかった1番方と3番方の連中が、回覧本を通して交流するようになった。それからHが軍隊時代の慰問袋に入っていた紙の将棋と将棋盤などを差し入れてくれたので皆飛びつき、勝敗戦に発展。順位付けを始めるほどだった。

その頃、手先の器用な元下士官が、襖（ふすま）の四隅黒枠で見事な麻雀パイを作り、それからは元下士官と古参の召集兵たちが、夜勤明けで寝ている人たちの迷惑も考えず連日ガラガラとかき混ぜるようになった。それに加え、彼らは回覧本のページをちぎって紙巻たばこを作って吸い、灰と煙にしてしまった。そんな図々しさにも皆、何も言えなかった。戦争に負けたのに「上官の命令は朕の命令と同じ。」の階級が死なずに生きていた。

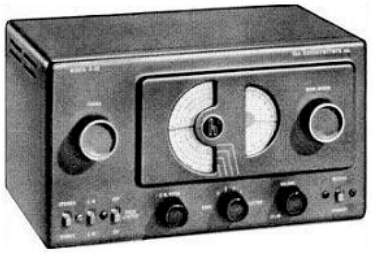


収容所の麻雀牌（マージャンパイ）

シベリアで病気になり戻された黒河では皇軍は崩壊していて、軍隊の階級制も序列もなかったのに、東北人民軍の監視もない炭坑では「天皇の軍隊」が巧妙な形で復活し、次第に重々しい雰囲気に発展してきた。そんな日々が続く中、黒河収容所から行動を共にしてきたKが、時折、出かけたまましばらく戻ってこなかったり、何か考え事でもしているような様子を見せたりするようになった。そんなKが3交代制の朝、仕事の帰り道で「オレ、皆に言うてなかったけど、前からHに勧められていた東北建設隊に入ったんだ。」と言うのでS、F、そして私の3人は「ほぅ。」っと声を漏らした。

Kは「まだ入って間がないんで何やっているのかわからないが、Hが言う『君たちのたどり着いた道程を、今一度、見直してみよう。』と呼びかけたのに共感したんだ。そういう事ならやってみようと思ったんだ。」とつぶやいた。Kの話を聞いて「そういうもんか。」と思った私たちは「これからも、また話を聞かせてくれ。」と言った。Mさんは日本のラジオ放送が聞ける短波受信機を事務所へ持ってきた。それからは電波が伝える「今の日本」の生々しいニュースやトピックスを知るようになった。

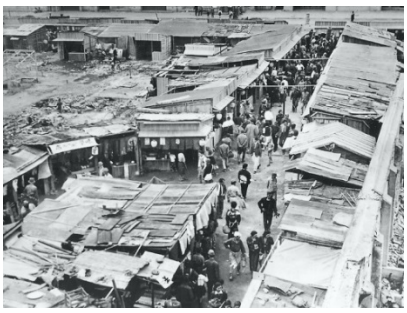
放送は赤裸々に「今」を伝え、大切な着物をヤミ米と取り替えて命をつないでいる人や、B29の大空襲により一家離散した孤児たちが、地下鉄の通路をネグラに残飯を漁り強く生きていると報じ、更に外地から引き揚げてきた復員兵たちが、焼け跡の臭いがくすぶるバラックの間を職を求めてうろついていることを伝えた。「清廉（せいれん）な学者が配給食品以外は口にすることなく餓死した。」という報道は私たちに強い衝撃を与えた。そんな中でも正月ラジオでは美空ひばりという7～8歳の少女が、大人の歌を大人顔負けに歌いあげ、庶民がヤンヤの喝采（かっさい）を送っていた。一方では、隠匿（いんとく）物資のヤミ取引や米軍調達品の横流しなどで車を乗り回して荒稼ぎをする連中や、米兵の腕にぶらさがる女が闊歩（かっぽ）しているなど、対照的な生き方をしている者たちの話も伝えていた。



短波受信機



美空ひばり



立ち並ぶバラック



闇市（やみいち）



米兵と腕を組む女性ら

そのような脈絡もない混乱ぶりを伝えるラジオ放送から、私たちは自分の家族や友人、知人が毎日をどのように生きているのかなど､考えようもなかった｡そんな戸惑いを隠せない私たちにMさんは｢今、東北人民解放軍が勝利のうちに進めている中で、私たちは彼らが目指す国造りの課題について学ばねばならない｡｣と述べ、それと同時に「現在、日本でマッカーサーが進めている諸政策（陸海軍の解体、戦犯の逮捕、財閥解体、天皇のマッカーサー訪問、政治犯の釈放、労働組合の結成、総連挙の実施等々）が、日本の民主化を図ると同時に、アメリカに都合のいい日本の国造りを目指している。私たちはそれにどう対処していくかを見極めるためにも、学習を始めなければ｡」と皆に呼びかけ、資料を持って各寮を回り始めた。そんなMさんの言葉から、皆が故国で生き抜くための「学習」は、ノートも筆記具も持たないまま、ひたすら講義を聴き、話し合うということから始まった。

長い冬、氷に閉ざされた辺境の炭坑の地にも、凍土のすき間からハコベラやヨメナの新芽が吹き出す季節が訪れた。地底の石炭掘りを昼過ぎに終えた私たちは、背中に伝わる陽光の温もりにありがたさを感じながら帰路についた。雑木林を過ぎるといつものように視界が広がり、うねった畑に数人の農民と役人の姿が見えた。彼らは目盛りを付けた長い棒で畑の寸法を測って杭を打ち込んで縄を張り、区画割りをしていたので、私たちは寄り道をして見ることにした。長い棒の目盛りを大声で読み上げ、画板を肩から掛けた男が大声で復唱して記録していた。声を掛け合い作業している農民の表情は、明るく、生き生きとしていた。



土地改革期間、土地を測量する農民



ハコベラ



ヨメナ

F が立ち会っているアゴひげの爺さんに「何をやっとるんやね。」と聞くと「この辺の畑はみんな大地主のものだが、今度のお布令（ふれい）で、わしら小作人に分配されることになり、その地割を決めとるんだ。」と言った。私たちはそこで初めて大きな土地改革か始まっていることを知った。見学を終え、農民や炭鉱夫たちの住居が並ぶ集落に入ると、四つ辻の広場で、ボール紙で作った三角帽子をかぶせられた大柄の男が、2 人の公安に監視され大声で何かを喋っていた。行商人が来ただけで 15～16 人の子供が寄ってくる集落なのに、この場に子供すら姿を見せず無人だった。それでも家影や窓の隙間から住民たちが息を殺して大男の声に耳を傾けている気配が感じられた。F が「大男はこの地域の地主らしい。長年に渡り大勢の小作人や貧農から作物の不出来でも強引に年貢を取り立て、彼らを塗炭（とたん）の苦しみに追い込んだ罪状をお詫びしている。」と解説してくれた。

私たちは少し興奮したが、なぜか足取りは重く、無口のまま帰路についた。次の集落近くの空地では、20～30 人の男たちが村芝居の舞台でも造るように何本かの丸太を縦横に組み合わせ、その上に板を敷く作業を互いに声掛けをして威勢よく働いていた。いつもなら三々五々、数人の炭鉱夫たちが石炭を担いで帰る姿の他は代わり映えしないこの道に、どうして今日に限って思いもよらぬ出来事が続くのかとお互いに首をひねっていると、F が「これはエライことになる前触れかもしれんぞ。」と漏らし「あの爺さんが土地改革と言っとったこの動きは鉱山にも出てくるかも。」すると K が「そのとばっちりが俺たちにも来るのか。」とつぶやいた。いずれにせよ、私たちに迫る「改革」という波がどんなものか知らなければと思った。

翌朝の食後、寮長は「既に仕事の行き帰りに農民や役人たちが一緒に作業をしているのを見た人もいると思うが、東北人民政府はこのほど公報により、東北地域一帯の国民党軍の掃討を終えたのを期に、土地改革の実施を公布した。これを受け、この地域においても地主、不在地主所有の土地を政府が没収し、貧農、小作人たちに無償で供与する作業が始まった。同時に、悪質な年貢の取り立てをした地主たちへの糾弾が始まることが、地域政府から炭坑側にも通告があったことが伝えられた。このように今、工人（労働者）、農民を主体とする新しい国造りの第一歩を踏み出したのだ。その成り行きをしっかりと胸に刻んでおくことは、私たちにとっても決して無駄にはならないだろう。」と言った。

昨日、私たちが仕事帰りに出会った光景と、それを巡るいくつかの疑念に対する答えでもあった。そうして農民が作り上げたあの舞台で、地主たちから罪状を引き出し、謝罪させ、糾弾する中で、大勢の農民たちが戸惑いながらも、この国の主人公になっていくのかと思った。

貧農、小作人たちに対する「農地の無償供与」という東北人民政府の布告は、農民たちが長年ぬぐい切れなかった無気力さを一変させ、その変わりように私たちは目を見張った。空地に舞台を造った数日後、二番方に替わった私たちは、仕事を終えて夜の帰り道を急いだ。ところが、いつもなら寝静まっている中国人の集落の家々に明かりがともり、ガヤガヤ騒がしいので野次馬で見にいった。すると空き地の舞台前に大勢の人たちが集まっていた。舞台上の正面には、赤い布地に白の切り抜き紙を貼りつけて「打倒　蒋介石！　土豪（＝地主）一掃」　の横断幕が掲げられ、両脇にも何本かのスローガンが下げられていた。舞台中ほどには 3～4 人の若者に囲まれた上等の服を着た地主らしき人物が「何とも申し訳ありません。」とか「どうかお許しを。」などと声をつまらせて何度も頭を下げていた。このやりとりは既に長時間続けられていたようだが、舞台下に座りこんだ農民たちからは「そんなことで済むと思うか。」「俺の家の飯米、どれだけ取り上げたか、返事をまだ聞いとらんぞ。」といった激しい怒号が飛んでいた。そんな中、進行役は地主に「早く返事しろ。」と迫り、舞台は緊張感に包まれていた。



蒋介石

それから数日後の早朝、私たちは鉱山事務所の方から聞こえる大勢の声に目を覚まし、何事かと見に行った。すると事務所の偉いさんとしていばっていた連中が、大勢の中国人工人に囲まれて罵声を浴びせられながらこちらへ向かってきた。ただならぬ様子に驚く日本人を尻目（しりめ）に、彼らは通り過ぎていった。早朝の眠りを覚まさせたこの出来事は、農民たちの土地改革に続いて、この炭坑にも改革の波が迫ってきたことを知らせるもので、もはや私たちにとっても他人事ではないと思わせた。翌朝食後、寮長は「今日、緊急に出番別集会を開催する。」と皆に告げた。私たち二番方の者は朝食後、舞台と客席のある集会棟に集合した。そこには M さんと H さんが後ろのいすに座っていた。冒頭、別寮の寮長が集まった 100 人程の前で、「午後、早々出番の組には時間がないので、要領よく会議を進めたい。」と前置きし「数日前から貧農、小作人たちによる土地改革や地主に対する糾弾が続いている。すでに見てきたように、地主たちの横暴に反抗した農民たちが反撃し、それに呼応したこの炭坑の中国人たちも立ち上がった。その中で私たちは何をすべきか。皆の声を聞かせてほしい。」と述べた。

するとすぐに、満蒙開拓青少年義勇軍の者たちや、初年兵ですぐに捕虜になった連中の何人かが発言を求めた。勇軍だった者は「俺たちは 15～16 才で親元を離れ、開拓と軍事教練で絞られ、挙げくの果てにシベリアでは子供扱いされ、将校や取り巻きの古い兵隊にこき使われた。」と述べた。初年兵は「俺は満 17 歳で『天皇の命令』で兵隊にされ、シベリアでは使役だけは一人前に扱われ、夜中や休日に露助（ろすけ＝ロシア人）が不意に仕事をさせるときは俺たちが割り当てられた。その結果、大勢が死んだ。」と訴えた。すると他の連中が「そうだそうだ。割りの合わない事は初年兵や義勇軍にやらせて、死に追いやった連中や取り巻きがこの中にのさばっている。」と叫んだ。他の者が「それはどこのどいつだ」「どこの寮にもいるではないか。」「名前を言え。」と続いた。するとあちこちから大声で名前を挙げる者が出た。騒然とした中で仕事の時間が迫り、集会は翌日に持ち越された。

前日から始まったこの集会は、かつての初年兵や少年義勇軍隊員たちに、容赦ない使役を強制した連中に対する報復の場となった。若い男に肩を突かれて舞台中央に立たされた元将校は、不精髭をのばして一夜にして憔悴（しょうすい）しきった顔でうなだれていた。進行役は「どうしてここに引っ張り出されたのか。本人の釈明から聞かせてもらおう。」と言った。すると彼は鋭い視線が集中する中「確かに私は軍隊時代から、勤務割りなどを指示する立場にありましたが、それは実務を行う者に一任していたので…。」と釈明を始めた。「なんで俺たちや、新兵や義勇軍の子供だけが 3 日も空けずに零下 30 度以下に引っ張り出されたんや。」他の者が「お前と、お前を取り巻く仲間で使役に出た者がいたら、そいつの名前を言え。」と糾弾した。将校は「それは…。」と言いかけて口をつぐんだ。すると「お前のおかげで俺たちの仲間がどれだけ死んでいったか。死んだ人たちをどう思っているのか言ってみろ。」の声に、将校は「ただ、ただ、申し訳ないことで…。」と頭を下げるだけだった。

すると 2～3 人の男がその将校に向かって駆け寄り、その内の 1 人が「そんなことで済むと思うか。」と拳骨をぶちかました。集会の群衆から「凍土に埋められた俺らの仲間に、どんな面してモノが言えるのか。言ってみろ。」と迫られたが、彼は何も言えず舞台に倒されたまま、すっ飛ばされた眼鏡を手探りで探していた。そんな中で私が一番印象強かったのは、同じ寮の同居人で、キャップランプを付けて監督面して坑内をウロついていた H だった。糾弾の舞台に立たされた H に、取り巻きの新兵がおびえた顔つきで「H さん、あんたと言う人は…。」と言い出すと、進行役が大声で「H さんだと…。お前、何を甘ちょろいこと言っとるんだ。」とその新兵を突き飛ばすや、H の顔に力一杯、往復ビンタを食らわし、鼻血が吹き出た H を「俺と同じように殴れ。」と新兵にどなった。体をコチコチにした新兵は「H。お前は。」とかん高い声を張り上げ、顔を真赤にして思い切り H を殴った。常日頃「上官の命令は朕の命令と思え。」とうそぶいていた上官の H を、星一つの新兵が殴ったのだ。私はこの様子を見て「天皇の軍隊は終焉（しゅうえん）した。」と思った。

翌朝目を覚ますと「傍観（ぼうかん）的態度一掃（いっそう）」と書いた紙が枕元に置いてあり、次は俺かと身震いしたが「沈黙は許さない。」「自分をごまかしている奴がいる。」など大勢が標的にされていた。糾弾の集会は 1 週間続き、糾弾された者はその日の内に公安に連行され、寮には戻らなかった。それから数ヶ月過ぎた頃、連行された彼らが明るい顔で寮に戻ってきた。彼らは私たちに対して「私たちもそれなりに勉強してきました。」と一人一人に握手をして回った。

東北地方（旧満州）における解放闘争は、ソ連（ロシア）にほど近いこの炭坑地帯の農民や工人（労働者）たちにも、この国の主人公になるにふさわしい変わりようを見せ始めた。この炭坑でも我が物顔に振る舞っていたボスたちが連行され、間もなく、数人の黒服を着た役人が赴任しきてキビキビと仕事を始めた。まずは目につきやすい事務所の壁面に「為人民服務」や「実事求是」などの毛沢東筆跡の印刷物を貼り、屋内の壁面には新聞切り抜きを掲示した壁新聞を、屋外軒下には黒坂報を設けた。黒板報には出炭目標や実績。それに到達した労働者名や組名の仕事ぶりを紹介。他にも生活用品などの入荷案内、各種注意事項などを報道した。一方、壁新聞には人民日報の切り抜きなど、内戦状況その他のニュースが掲載された。そこには、アメリカが国民党軍へ供与した膨大な戦車、火砲、車両などを解放軍が捕獲し、捕獲した兵器で攻勢に転じたことが大きく報じられていた。貼られた新聞を読み上げる者や聞く者たちは「好（＝ハオ）好。」と喜び騒いでいた。





為人民服務のスローガン

私たちの中にも変化が現れ始めた。目障りな連中が公安に連行されて以来、うっとうしい空気はなくなったが、碁や将棋をする者も減り、皆が考え事をしているように見えた。そんな中でも東北建設隊の若い連中は元気で「東方紅」や「没有共産党是没有中国」などの歌を歌ったり、勉強会をやったりしていた。その頃、寮内で、週 1 回、7～8 人が一組で学習会が始まった。これは東北人民政府がそれぞれの機関に呼びかけ実施したもので「坦白（たんぱく）」と呼ばれていた。

自らの罪の告白をテーマにした学習会の目的は、日本人が中国人に加えていた非人間的な行為が、命令であろうと、自主的であろうと、その全てを告白し、参加者相互の忌憚（きたん）のない批判を受け入れることにあった。

私の軍隊生活を送ったソ満国境の「朝水（ちょうすい）」は、一個大隊の日本軍と、物資輸送に雇用した 40 数名の中国人以外は誰もいない僻遠（へきえん）の地であった。中国人連は穴倉同様の茅屋（ぼうおく）に寝起きし、垢（あか）としらみにまみれ、ボロ服をまとい、どろどろのお粥（かゆ）をすすりながら、50～60 頭の痩せ馬を飼い、生きるために力ない足取りで馬車をひいていた。荷物運搬の監視役の日本兵の中には、彼らのノロノロした動作に業を煮やし、「快快的（カイカイディー＝早く早く）。」とどなり、編上靴で蹴飛ばしたり殴ったりする者もいた。監視役は先輩と見習い新兵の 2 人。軍事的に国境の最前線なので、銃は実弾を装填（そうてん）し着剣。私が監視見習をして分かったことは、国策で渡満した現地召集兵ほど中国人を見下し、自分の父親ほどの中国人に「満州のご主人様は日本人だぞ。」と暴力で叩き込んでいた。私は「驚いたがとがめることはできなかったし、私も 2 年兵になった頃は当たり前と思って、罪悪感はなかった。」と「坦白」した。

私の「坦白」を聞いた皆は「中国人達を非人間的に扱っていた日本軍の行為を今どう思うか。」「当時日本は『五族協和』『王道楽土』と提唱しながら、反面、この非人間的な行為と矛盾を今、どう思うか。」「他の兵隊が中国人を殴ったとき、制止できなかったことを今どう考えているか。」と質問されたが、その場では答えられなかったので、次回の発表に持ち越された。この私の発言に対し、東北建設隊員たちから厳しい批判が続いた。ついこの前までマリンケ（子供）と呼んでいた彼らが東北建設隊員として学習し、あの糾弾集会で自信をつけたのか、失うものを持たない己の立場を知り始めた彼らと、旧来の風潮からいまだ脱しきれぬ者たちとの違いを見せつけられた思いがした。

私たちが仕事の往復に通う中国人の集落にも壁新聞と黒板報が新設された。行商の焼餅（シャオピン）や豚足、葉たばこなどの荷を並べた四つ辻でも、読み手と聞き手と解説者たちがガヤガヤする風景も珍しくなくなってくるほど盛会になった。東北地方（満洲）を超え攻勢に転じた解放軍が中国全土を席巻する勢いに、新聞を読む彼らの表情も明るくなった。これらは炭坑に要請された「増産運動」にも現れ、工人たちの肩にも掛かってきた。「掘進」に入って 3 カ月が過ぎ、私たちも炭層のどこへツルハシを打ち込むと効果があるかが分かるようになっていた。増炭＝増給料になり、休日には街へ繰り出して外食を楽しみ、一杯ひっかけてご機嫌で帰る者も増えてきた。

その頃、一番方になった私たちへ発破（はっぱ）作業が回ってきた。私は点火担当になり、電球とソケットを持って坑内に入った。炭層が斜めに走る岩盤に向かって 2 人が六角の鉄棒を握り、他の 2 人が六角棒の頭を叩いて 1 メートル程の穴をうがったのを 3 カ所。穴に火薬を装填（そうてん）し導火線を接続し爆破準備完了。他の者が 20 メートル離れた避難所へ入ったのを見届け、私は導火線に点火し発火を確認し避難所に向かった。爆発音を 2 発確認し、1 発はまた不発かと爆破所へ向かった。すると突如爆発し、私はその場にへたり込んだ。炭塵と硝煙の臭いが鼻をつく暗闇の中、左足首にやけるような痛みを感じた。暗がりをはいながら来た仲間が「どうした。」と声かけ、誰かが私の手からソケットを取り点灯。もうもうとした坑内はいたるところに大小無数の岩盤や炭塊が飛び散っていた。もし飛び散る場所にいたらと考えると今でも恐怖心にさいなまれる。

左足首に当たった炭塊の激痛により、私は一週間ほど休んだ。その間に黒河からの仲間は現場変更を申し出ていた。どうにか歩けるようになり、新しい現場は炭車で降りる距離も長く、奥深いところだった。掘進の仕事でいつものように炭層中央にツルハシを打ち込み始めていると、頭がぼぉーっとしてきてツルハシを振る力が出なくなりその場にへたりこんだ。意識も薄れ、誰かが私の体を支えようとした後は何も覚えていなかった。気が付くと地底から地上の草原に寝かされていた。現場は有毒ガスが充満していて、一番弱い私がモルモット役で、全員避難して命の恩人に格上げされた。

数日しても熱が下がらずけが人や病人の静養棟に移された。2～3 日は寝たり起きたりの繰り返しで食欲もなく、混沌（こんとん）とした日が続いた。ようやく普通の体力に戻りかけた頃、珍しく白衣を着た日本人医者が寮長と一緒に来た。寮長は私に「この街の炭坑病院跡へ疎開してきた中国医大の先生だ。」と紹介した。何年かぶりで日本人の医者に診察してもらえるので患者の顔には安心感が漂っていた。診察した先生は「前に胸の病気をしているね。」と聞かれたので「初年兵の秋、胸膜炎で半年ほど陸軍病院に入院した。」と伝えた。もしあのガス中毒以来、胸の病気が再発でもしていたらと嫌な予感がした。

熱も治まり体力が戻ってきた頃、K と F が「今日は見舞いでなく、頼みがあってきた。」と前置きして「もうすぐメーデーだ。今年は街のメーデーにも参加して、後は集会棟で演劇やノド自慢、隠し芸などで楽しむ計画で、各寮対抗もあり盛り上がっている。そこで舞台中央のメーデー横断幕の真ん中にレーニンの肖像を配置して会場を引き立てる案が出ている。そのレーニンの肖像画を誰が描くのかと議論していたら、M さんが「夏梅さんが適役。」と教えてくれたとと言ってレーニンの顔写真の新聞を見せた。その新聞はプラゴエで一昨年の 11 月の革命記念日の朝、ソ連の警備兵が見ていた新聞と同じものであった。突然思いもよらぬ話に私は混乱した。軍隊に入ってから絵筆は無縁となり、プラゴエでは屈強な労働者同様の強制労働。今、炭坑の地底深くツルハシを振るっている労働者の手と指に、繊細な絵筆を持って新聞全開、タテ 82 ㎝・ヨコ 54 ㎝の絵は描けないと私の十指が教えているのだった。



レーニンの肖像画

混乱する私に K は「難しく考えず気楽に。皆も気楽にやっているんだ。楽しみは気楽にやるのが一番。頼むよ。」というので、むげに断ることもできず「やってみるか。」となった。手配で頼んだベニヤ板を舞台脇の窓際に立てかけ、新聞全開の模造紙を「水張り」で固定。食器一杯の水に数的墨汁を垂らしてでき上がった薄墨水を 5 ㎝幅の刷毛（はけ）で紙面上から下へ方眼のように塗り込んだ。下を塗り込む頃には上部が乾いているので、上からと重ね塗込みを繰り返し、根気よく続けるうちに紙面に濃淡が現われる。いきなりストレートに描くのと違い、この手法を取ったからには、手数がかかろうとも続けるしかなく 2～3 日、この作業を繰り返した。

目、鼻、口元など、陰影の強い部分は墨汁液を少しずつ濃くしながら丸筆の穂先を絞りコントラストを付けていく。すると徐々に新聞の写真に近づいていくのだ。その頃、F が木匠（ムージャン）を連れ、額縁の寸法と額縁の「絵」に合う色合いの意見を聞きに来て、後日できた額縁をテストだと木匠が肖像画にはめこんだ、私は「なんとか格好がついてきたか。」と思い、額縁を外さずそのままと頼み、あの写真の引き伸ばしに集中した。多くの人に慕われ、尊敬され、世界中に知れ渡っているこの偉人をどのように表現できるかを考える暇もなく、措いた肖像にどれだけの仲間たちが、「レーニン」を感じるかと、筆先を最注意して動かしていた。翌日、仕上げにかかっている時、M さんと H と K が来て「ほぉ。いいのが出来たね。」「これで全体が引き立つ。」と喜んでくれた。K は「ご苦労さん、皆も喜ぶよ。ありがとう。」とねぎらってくれた。墨一色の絵に。

メーデー前夜祭では、久しく見なかった演劇が催された。小林多喜二の「不在地主」で劇中の「地主」「番頭」に観客から罵声、野次が次々に飛び交い、演劇者が立ち往生するありさまだった。「芝居だから、静かに見よう。」と誰かが呼びかける一幕もあった。写真展は、大人の背丈ほどのタイヤのトラクター、コンバインが見渡す限りの大平原で収穫する様子、喜びに満ちあふれた農民の笑顔、工場では工員たちの自信に満ちた姿を展示し、新生間もない人民国家の将来を垣間見させていた。

メーデー前後は、辺境に生きる私たちにとっては束の間の季節だった。休養室では、ケガや病気から回復に向かった連中が仕事復帰のための雑用に精を出していた。その頃の午前中、以前、私たちを診察した先生が寮長と一緒に来てくれて「みんなの診察が終わったら事務室へ行くように。」と指示された。事務室にはすでに 4 人が待っていた。そこで先生は「君たちは今ここで療養しているが、私が診たところ、回復しても、この炭鉱で働くことは無理だと判断した。病院と鉱山側が、君たちが働ける職場を探したところ、近くの中国医大に受け入れ先が見つかった。」この先生の言葉を受けて寮長が「出発は先方の都合で今日の昼過ぎにしたい。その手続きはこちらでやるので、君たちもすぐに移動の準備をしてほしい。」私たちは突然の話に戸惑いながらも応じるしかなく、ヨレヨレの夏服に雑嚢をさげ、半ベラ毛布を担いでアンペラ小屋に別れを告げた。そして敗戦以来、苦楽を共にした戦友たちと別れの言葉を交わす暇もなく転出に従わざるを得なかった自分たちは、まだ捕虜生活の続きにいるのだと思った。

医大へ行ってもどんな仕事が待っているのかと不安を抱え、口数も少なく歩いていると、丘陵の向こうにレンガとセメントの大きな建物と何棟かの旧日本人官舎が見え始めた。「あれが中国医大か。」などと話しながらその建物のそばまで行くと、守衛室が見えたので案内をお願いした。若い兵士に連れられていくつかの病棟のそばを通り抜け、事務所らしい 2 階建ての階段を上り「教材課」のドアの前で止まった。まず兵士が中に入り、しばらくして私たちにも中へ入るよう促して彼は去った。「教材課」という思いがけない部屋に一瞬、戸惑いを感じながら中へ入ると、会議机の前に座った 3 人の内の 1 人が私たちに「ここへ座るように。」と声をかけた。真ん中に座っている人が「私が教材課長の S です。こちらが絵図室長の U さんで、左が製本室長の O さんです。」と紹介があった。

そこで私たちの代表の H が、鉱山事務所から託された書類を S 課長に差し出すと、一読した課長は、それを左右の室長に回した。私は顔と名前で U さんと 0 さんは日本人だと思った。しかし 2 人の「中国人民解放軍」の胸章を見て、「ほぉ。彼らは解放軍の軍人なのか。それなら私たちも…。」と心中穏やかではなかった。2 人が平然としているのを見て「そんなものなのか。」と思った。S 課長は早々にこの学校の概括的な話を始めた。「この辺境の地に疎開し、炭坑病院を接収した中国医大は、内戦勝利のために負傷した傷兵たちの治療と介護に当たっている。同時に地域住民の疾病（しっぺい）の予防、ならびに治療に当たる医療技術者の育成にも努力している。」と述べ「君たちもその一翼を担う者として仕事に当たってほしい。教材課の役割は、これから実地を見て知ってもらいたい。」と私たちを製本室へ案内した。

製本室には 10 脚ほどの机が並び、6～7 人が講義原稿を見ながら鋼板ヤスリに置いた蝋原紙（ろんばんし）を鉄筆で切っており、窓際では書き上がった原稿を謄写（とうしゃ）印刷していた。S 課長は「これが各部科、教室から持ち込まれた原稿を教材にするための製本室であり、私の他 4 人は引き続きこの仕事の説明を受けるよう指示し、私は U さんと隣の絵図室へ行くようにと言われた。絵図室に入ると U さんは仕事をしている 3 人の手を止めさせ、私を紹介した後、各人にも自己紹介を求めた。彼らはそばに置いた本や写真を見ながら、机からはみ出た画板に置いた模造紙いっぱいに「細菌の拡大図」や「組織図」「筋肉図」などを描いているところだった。私はそれぞれに難しい箇所や所要時間などを質問してみた。同年代らしい I の「まず慣れることが先決です。でも、やり甲斐はある。」の言葉に励まされ、ホッとした。ここが自分の仕事場になり、こういう絵を描くことが仕事になるのかと思うと、やってみようという気持ちが湧いてきた。



印刷用具


蝋原紙に鉄筆で文字を刻む作業

私は絵図室、他の四人は製本室で仕事の段取りや要額などの説明を受けた後、庶務課へ回された。

案内された部屋では、係の者が区分けされた棚から私たちの身丈に合った軍衣やシャツや下着などを各人に渡しながら「これを着るんだ」と言った。敗戦以来ずっと身に着けていたオンボロの日本軍衣を脱ぎ、解放軍の衣服に着替えていると、誰かが「これでいよいよ日本の軍隊ともおさらばか…。」「まだ帰国まで何があるかわからんぞ。」などとささやいているのが聞こえ、「これでまた帰国の道が遠のくのかも。」と不安を感じた。

私たちは着替えと食器袋を提げて教材課に戻り、私は絵図室へ入った。衣替えした私を見たMがオドケ顔で「やぁ、夏梅同志。回来了（シャメイトンズ　ホイライラ、おかえり）」と挙手の礼をしたので、こちらもテレ隠しに頭を下げた。

終業時間になったのでみんなと一緒に大食堂へ行った。大きな建物には6人用ほどの机が行儀よく並び、その一角に私たちは席をとった。椅子はなく立ち食いで、夕食は高粱飯に白菜と豚肉の妙めものと辛い漬物だったが、それら夕食のお菜もこの建物も、北安軍政学校の食堂とほとんど変わらないものと思った。

私たちの宿舎には旧日本人官舎が当てられ、絵図組の同僚と同室だった。床上には畳をはめこんだ木造の寝台が並び、私の寝台には何枚かの毛布と枕が置かれていた。

翌朝、みんなと一緒に掃除を済ませ、粟粥（あわがゆ）と中華みそと生ねぎの朝食をとり、職場へ向かった。自席についたみんなは、写真と描いた絵を見比べたり、仕事の準備を始めたりした。

始業時間になり、私はMと一緒にUさんの席で指示を受けた。Mは仕事をもらって自席へ戻り、私はUさんがアタリをつけた首から下の「背面筋肉図」を見せられ「この前面をI君が描いているから、それを参考にこの背面図を仕上げるように。」と指示された。



背面筋肉図

私は（これが初仕事か）と緊張気味に図面を受け取った。

私は「ちょっと見せてください。」と声をかけ、Ｉのかたわらに立った。Ｉが面相筆を巧みに使い、肩から胸にせまる大胸筋の流れを太く細く線描きで質感を表現するあたりに熟練の筆勢を感じた。それが彼の言う「慣れ」なのかと思った。



面相筆

自席へ戻った私は、いささかの緊張を持って初の面相筆を下ろした。それからは自分が描きなれてきた肘を軸とした手法で線描きを進めていった。

10 時から 10 分の休憩があった。製本室の誰かが「歌唱指導だよ。」と呼びにきたので私もついていった。彼は『東方紅（トンファンホン)』だったかを一節ずつ区切って指導した。

それは日本人工会（労働組合）の教材課小組による文化活動であり、その日本人工会とは中国医大と付属病院で働く医師、看護婦、各技術者など、日本人で組織される学習や文化活動を行う組合であるとＩが教えてくれた。

午後の休憩までに線描きを済ませ、鉛筆の下描きを消し彩色を始める頃、私の席へきたＵさんは 2、3 箇所に筆を入れ、何点か指示された。それを受けて私は朱に近い赤色で筋肉を描き上げた。Ｕさんの指導もあってか、初仕事を何とかこなすことができ一息ついた。

次からの仕事も肩から指先までの筋肉図を与えられたことは、さしずめ線描きに習熟するようにとの指導だと受け取りそれに集中した。教材課初日の仕事を終え、その日の床についた私は、明日の仕事をあれこれ考えているうちに眠ってしまった。

ついこの間まで炭鉱の休養室で抱いていた「体力が回復しても帰国のその日までどれだけ持ちこたえられるのか。」という漠然とした不安が和らいだようだった。

絵図室の仕事は医学書の写真や図形を掛図にするほか、各部科の必要に応え（こたえ）、内科の開腹手術や、腕や足の銃創手術などの写生に呼び出されることもあった。

私はMから、消毒薬と異臭が漂う手術室で医師や助手たちの動きをすばやく捉え写生した、という話を聞いて、その仕事に意欲を感じた。

その機会は意外に早くまわってきた。それは眼科からの依頼によるもので、眼底に表れた症状の写生だった。まずは兎を教材とし、眼底を見る訓練から始まった。暗室で患者の眼底を見るため左手の親指と人さし指で瞼（まぶた）を開き、同時に親指と中指で凸レンズを挟み、右手に持った懐中電灯の光を瞳孔へ通す。すると唯一、人体で血管が直接見える眼底を捉えることができる。そうして本番では、その眼底に表れた症状を先生の指示により写生し、掛図に拡大した。この仕事は初めて患者に接しただけに緊張も高かった。

私たちの勤務は月曜から金曜まで、就業時間は8時から17時で、昼休みは正午から1時間、午前、午後各10分の休憩時間があった。毎土曜日は午前中、業務学習と政治学習を交互に実施していた。午後からは日本人工会による文化、体育活動などに参加した。

私が初めて業務学習に出たときは、ヴィナス胸像のデッサンに入ったところだった。室長のUさんがみんなの実像の捉え方の違いを指摘し、それを話し合ったことは得がたい勉強となった。さらには短時間でお互いがモデルになり、クロッキー（スケッチとも言うが、特に短時間（10分程度）で描かれたものをクロッキーという）をやったことも仕事に活かされていたと思う。



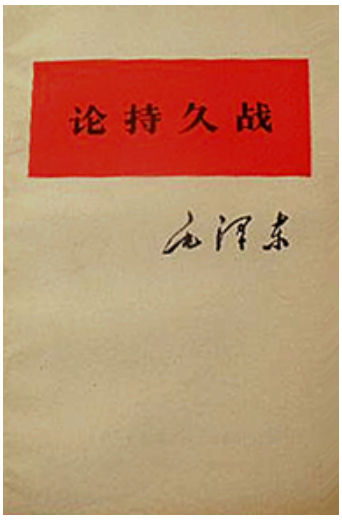
ヴィナス胸像

政治学習は毛沢東の『抗日戦線論』と『持久戦論』のパンフレットの原文をOさんが訳し、教材課の日本人全員参加で討議した。

初参加の私には、今までの学習経過を次のように説明された。

1934年ごろから、延安の洞窟において毛沢東は『矛盾論』『実践論』をはじめ、中国が社会主義をめざす諸文献を次々に発表していた。それらの著作は、いずれも中国人民解放の道筋を照らす灯台となった。その基本戦略は「大きくて弱い中国」が「小さくて強い日本」の侵略に抗する国民党と諸勢力との抗日連合の結成と、圧倒的多数の中国人民との抗日統一戦線の結成を大前提とした。





矛盾論・実践論

次には、反ファシズム戦争を闘う米・英・仏などとの連合、さらには日本国内における反ファシズム勢力との連帯などの大連合の樹立。その「基本戦略」に基づいて、絶対勢力では少数である日本軍に勝利することができる。

そうであっても、現実には優勢な日本軍との力関係の逆転を見るまでは、少数の中国軍が多数の日本軍の分断を謀り（はかり）、局地戦に誘導し、彼らを少数に追い込み破滅する「遊撃戦（ゲリラ）」と、絶対多数の中国人民の協力によって力関係を変えていくことにあった。

日本が満州を植民地化し、揚子江沿岸都市を制圧、さらに南シナ海からの米・英・仏などの援助遮断等を進めていたこの時期、毛沢東は延安において、抗日戦争勝利の展望をこのように指し示していた。

このような文献を初めて「学習」した私は、あの時代の毛沢東が、わかりやすい文言で民衆の共感と支持を得て「抗日統一戦線」を勝利に導いたことに、彼らが言う「新中国建設」についての「基調」に初めて接する思いがした。日本の降伏後、私たちがたどった道のりと、その後の中国国内戦争の推移を見ても、自分が置かれていた立場を考えようとする姿勢が充分ではなかったことを、この学習は私に教えてくれた。

毎土曜午後は、日本人工会の活動に充てられていた。その頃、ふた回りに近い年長の先生方と奥さん方がリーダーになって、社交ダンスを教えてくれた。先生方の笑顔は私たちが知らなかった大正末期からのささやかなデモクラシーの時代を懐かしんでいるようにも見えた。

1948 年（昭和 23 年）年、旧正月の三が日は、初めての祭日休暇となった。

いつもの食卓には分厚く切った豚肉の蒸し焼きや、白菜、ニラ、もやしと肉や卵の妙めもの、鯉のから揚げに野菜のあんかけなどが並び、それらにかぶりついた私たちは「新年好（しんねんはお)」を連発していた。

もう一つの嬉しい話、それは私たちが働く中国医大が、藩陽（旧奉天）の元満州医大を接収し、近いうちに移動する、すでに接収要員は現地へ赴いている。という話に皆の顔つきも変わっていた。それは私たち日本人にとっても帰国への距離が縮まり、戦後、生死の程も伝えられなかった祖国への通信にも期待が持てると思った。



藩陽



満州医大

とはいえ、軍隊時代と捕虜・労役を合わせて 6 年、もし、その年月をとられていなかったら、どのような将来があったのかなど、還らぬ過去を振り返ったりもしていた。

教材課の私たちにも出発の日が来た。厳しい思い出しか残らないこの地だったが、去るとなれば感慨が残るところとなった。

私たちの専用列車が洛陽へ到着し、雑踏する駅前を歩き出すとすっかりおのぼりさんになっていた。私たちが歩く街並みには、つい最近戦われた戦闘の痕跡など見られなかったことに、この街の広さを感じた。

日がかげり出したころ、レンガと鉄柵を組み合わせた塀の向こうに、何棟もの高い建物が並んでいるのを見てみんなは「あれが医大らしいな」と話し合っていた。立派な正門脇の受付を通した私たちは待っていた担当者に大食堂へ案内された。夕食後、私たちは分散している独身寮へ、それぞれに案内された。教材科の日本人は、近くの「育才楼」が割り当てられ、私はＩと同室になり、ここから瀋陽での仕事と生活が始まった。



満州医科大学正門

翌日からの私たちは、図書館業務の手伝いをやることになった。

校門を入ってすぐ右側には大講堂がそびえ立ち、その隣に切妻屋根の図書館が並んでいた。何段もの鉄板敷きの書棚や通路には山積の書籍が散乱しており、その整理や分類、リストアップなど、大変な仕事だと思った。

開校準備は急ピッチに進められていた。私たちは食事の往復などに教室や病棟などをのぞいてみたが、学生や助手たちがすすけた白壁や窓枠などを丁寧に洗いだし、見違えるように明るくなっているのを見て、彼らのこの学校に対する期待と熱意が伝わってきた。

大講堂で「この大学の理念」らしい講義を受けている国民党服や背広姿の人たちが休憩している右投やベンチでしゃべっている言葉は、興山から表に来た中国人でも「わからない」とぼやいていた。

教材課の制作室が決まり、私たちはその清掃と什器（じゅうき）・備品などの搬入と、その配置などの段取りに入った。今度の制作室は思いのほか広かったが、Ｏ課長は「開校すれば教科内容も学生数もぐんと増えるので、ここの要員も大幅に増員するので…。」と言っていた。

旬日を経ずして 12、3 人の新規採用者が私たちに紹介された。彼らは今春、近くの魯迅（ろじん）芸術学院洋画部卒業予定者ばかりだったが、年齢は 22、3 ぐらいから 30 過ぎくらいと幅があり、服装や態度からも異なった環境を過ごした人に見えた。私たちの制作を見て歩いた彼らは、この仕事に関心を寄せているようだった。

春を迎え、彼らが私たちと働くようになってすぐ、室長のＵさんは彼らに、別室でメーデー行進に掲げる肖像画の制作を担当させた。メーデー当日は彼らが描いたマルクスやエンゲルス、毛沢東や周恩来などの大きな肖像画を先頭に、みんなが大行進に参加した。

行進の中で、日本語のプラカードを持った隊列を見かけたが、彼らも私たちと同様、工業部や衛生部で働く大勢の中国人たちと共に南下してきた日本人たちだろうと思った。

開校を目前にした中国医大の正門には、郭松若揮毫（こうもうようきごう）による大看板が掲げられ、出勤時に私たちのような解放軍の軍服姿から青色の国民党服、中国服や背広姿の者たちが校門を通る様子は、興山の通勤とは一変していた。

それから間もなく、教職員と全学生は「中国医科大学」の金属バッジを着用することになった。私たちは「解放軍」の胸章を切り取り、このバッジを付けた。とはいえ、現物支給という解放軍の軍人待遇には変わりなく、国民党で働いていた者や新規採用者のような給料生活者ではなかった。



満州医科大学

そのころ、国民党服姿の日本人の先生が二人、教材依頼を兼ねて顔つなぎに来られた。

彼らはこもごもに国民党時代のことを、「私のような医者や技術者たちは、敗戦前の日本軍よりはるかに高級優遇で、米軍の肉の缶詰や洋酒やさまざまな嗜好品などが支給され、不自由なく過ごしていた。それに反し、敗戦続きの前線を支える将兵たちの軍規はゆるみ、物資の横流しで金儲けをするなど、厭戦気分が漂っていた。」などと語っていた。

待望の故国への通信が実現したのはこの頃だった。私が「なんとか元気で、こういうところで働いている。」という取り急ぎの消息を親元へ送ったところ、父からの返信（本家へ出向いていたとき、息を切らした母がおまえの手紙を持ってきた。文面を見ても、すぐには信じられない気持ちで、何回も読み直した）が来た。

この時期、瀋陽には、日本語の新聞、雑誌などを発行する「民主新聞社」の設立が準備されていた。そこには、元満州映画（株）で働いていた顔ぶれが多く、近く発行の「民主新聞」や月刊「学習の友」などの予告版には日本の戦後事情やニュースなどが紹介され、終戦間もない困難の時代の打開に立ち上がる人びとの姿に驚かされた。



満洲映画協会社屋

当時、日本国内で話題になった戦没学生の手記の映画化『きけわだつみのこえ』のシナリオが民主新聞社へ送られてきたのを機にこのシナリオを演劇化し、新聞発行記念に瀋陽で上演することを企画した。民主新聞社はその実行を元満映の映画監督、木村荘十二（そとじ）さんにお願いし、瀋陽で働く日本人組織に対しても協力を依頼した。

出演者は集められ、絵図室の私たちは舞台づくりに参加した。

『きけわだつみのこえ』の上演は中国医大の大講堂で何日かに分けて上演された。洛陽で働く日本人たちは勿論、この界隈の中国人たちも演劇を観に来てくれた。



私たちは袖幕の隙間から満員の客席を見て安心した。しかし、裏方である私たちは本番中を含めて、稽古中も部分的な場面しか見ることができなかった。

この演劇を観にきてくれた絵図室で働く中国人の同僚たちは、いずれも日本語に通じていたので、それぞれの感想を聞かせてもらったところ（戦争前の日本人の横暴さを知っている私たちにとっては、彼らのような人びとを取り上げる世相が生まれてきたことに驚きを覚えた）というような意見が多かった。

一方、国内戦の推移は、国民党軍から捕獲した米軍援助の軌道装備の操作をいち早く習得し、「運動戦」を拡大展開した。新聞報道は北京への入城を年内必至と伝えるとともに、国づくりの構想から国旗や国歌の制定などについて話し合うよう呼びかけていた。みんなもそれに応え、今まで考えてもみなかった話をするようになっていた。

この年の 7 月、国民党を率いる蒋介石以下は、台湾へ転進逃避。中国大陸を制覇した人民解放軍は、日本をはじめとする列強に食い荒らされた半封建的、植民地的国土を、工人（労働者）、農民を主体とし、それに同調する民族資本などの諸勢力との統一により、新しい国家建設に入っていった。

この夏、私たちに支給されたのは軍服ではなく、濃紺の人民服だった。それを機に国民党の服や背広、中国服で出勤していた同僚たちも人民服に着替えていった。



人民服

それから間もなく、私たちの「処遇の変更」の手続きについてO課長から次のような指示があった。

「……既に気づいていると思うが、この学校は軍管轄から官への移行が始まっており、それによって私たちも中国医大の職員となり、給料生活者に移行することになる。そのための給与規定作成に必要な自己評価表を君たちにまとめてもらい、それに基づく意見を添えて私から上司に提出する。」ということだった。

その査定基準は次の通りで、（一）業務に取り組む姿勢、態度、（二）業務知識、技術等、（三）経験年数・資格等に大別され、（一）（二）（三）の総合を十点とし、それを基準に自己評価を記入することになった。これは頭の痛い申告ではあったが、過去何回も検討会や坦自会などで相互批判を繰り返してきただけに、各人の自己評価と、みんなから出された意見や批判にそれほど差異はみられなかった。

２か月後、支給されたはじめての給料は、それぞれが妥当と思われる水準に納まっていたようだ。その日、相部屋の私とＩは給料明細を見せ合い話し合ったが、それぞれの額面は経験年数の違いほどしかなかった。

部屋代、水道・電気料などは今まで通り無償だったが、衣服、その他日用品は当然ながら個人持ちとなった。新聞や図書の購読といった日常生活費をみても、映画鑑賞など若干のゆとりが出るようになった。また、今までの食事は高粱や粟飯を常食とする大食堂に利用を限られていたが、この機会に食費を前納すれば米食を提供する中食堂へ移ることができた。

このような私たちの処遇の変化を見た中国人の同僚や助手や助教たちは、医大の今後に期待するとともに、来年にも建設される「新中国」における「医療、衛生分野の工作者」育成に努める者としての気概を感じ、この学校で働くことに誇りを感じているように見えた。

私たち日本人もこのような環境に身を置きながらも、彼らと同じように働いてはいるが、それは医療工作者育成のためのよき協力者であろうとしてのことだった。

私たちは 1945 年８月、日本の無条件降伏以来、ソ連における強制労働と飢餓状態の中で生死をさまよう弱者として中国領へ送還された。以来、内戦中の東北人民政府は勝利のため私たち抑留者にも困難に耐えることを求めていたが、捕虜に対する労働提供にはなにがしかの手当を支給することを常としていた。

その後の炭鉱労働においても、中国人労働者と格差をつけることはなかった。中国医大教材課へ転入したときは、解放軍の病院付きの軍人待遇として採用され、業務に見合った処遇が保障され、私たちもそれに応えるべく努力した。

この間における「学習」では、私たちが戦前満州における植民地支配の尖兵（せんぺい）としての誤りを振り返ってそれを正し、再び侵略戦争に加担する愚かさを戒め、「働く者の社会」の建設についての方向を見出そうと学んできた。

振り返れば、1942 年（昭和 17 年）早々、日の丸の小旗と「わが大君に召されたる」の歌声の中をソ満国境へ送られた私たちは「耐へ難キヲ耐へ　忍ヒ難キヲ忍ヒ…」に忠実たらんと捕虜の抑圧に耐えるべく努めてきた。

にもかかわらず、1993 年（平成５年）年、ロシア公文書施設で発見された「大本営報告書」によると、時の政府は「百八十万人捕虜についてソ連指令下に移し、国籍離脱までを想定、現地に土着させ、事実上【棄民】化する」という方針を固めていた。

その衝撃的な事実を知った今、あの抑留に耐えてきた者の一人として、時の為政者から私たちに何らかの表明があって然るべきではないのか、と問いたい。そしてそれは、今なお凍土の下に眠る斃れた（たおれた）者へのせめてもの餞（はなむけ）であってほしい。

私たちは時代に抗する術なくあの道を進んだ。

いま生きる人たちには、私たちのたどった痛恨の時代を繰り返さないよう願うものである。



なぜ「生体手術演習」をする軍医になったのか　～湯浅謙の証言

私は 1942 年（昭和 17 年）26 歳のとき、中国に軍医中尉として出征し、得意満々で自信にあふれていた。「大東亜戦争だ。アジアを開放し、日本が指導して中国人民を独立させるんだ。それに反対する中国人もいるから、これは排除しなくてはならん。」と妄信していた。はだしの子が多くいて「哀れな民よ。」と、ふと人間的な気持ちも起こるが私は帝国軍人の将校だ。だから「戦争には勝たねばならない。」と人間は変わってしまう。

病院は軍医 10 人、看護婦、下士官、兵を入れて 100 人くらいで、戦闘で中国人を殺し、反撃され負傷した日本兵を治療していた。「俺は正しいことをしているんだ。大和民族は優秀なんだ。天皇陛下の始めた戦争は必ず勝つ。」と固く信じていた。私が歩くと中国人は道を開け、私はそれを見据えて堂々と歩き、軍医の職と地位を得意に考え、しかも当然と受け入れ振る舞うようになっていた。開業医の父の後を継ぎ、病に苦しむ無医村にと考えて実行しようとした矢先に不意に現役軍医に召集され、軍隊という非社会集団の偉い一員になり、私はいつしか傲慢（ごうまん）になっていた。

赴任して 1 ヶ月半頃、院長軍医から「今日 1 時から手術演習をやる。」と言い渡された。学生時代、戦地から帰ってきた先輩軍医から生体実験の話を聞いたときは「薄気味悪い。」と思ったが、いよいよその時がきたのだ。手術演習は前線で緊急手術ができるようにと軍が計画的に実施していた。戦線が拡大し輸送距離が長くなるにつれ、負傷兵を後方護送せず、前線で緊急手術できる外科技術が必要とされるようになった。

「材料」は生身の健康な中国人で、憲兵隊や警備隊が「供給源」であった。12 坪ほどの解剖室に手術台が 2 台、師団軍医部部長、院長軍医、指導外科軍医 2 名、助手軍医 3～4 名、衛生兵数名、教育参加の部隊付き軍医 7～8 名がそろって談笑していた。執刀する私は「非人間的行為で許せない。」とは考えもせず動揺していた。「今から生きた人間をそのまま手術するのだ。皆の前で臆病（おくびょう）な振る舞いはするな。」と今までに手掛けてきた解剖手術例を思い出し自分を励ましていた。「材料」は 2 人。1 人は背が高く頬が広くがっちりした体格の若い男性で落ち着いた様子で下を向いていた。もう 1 人は年配の農民風で、縛られた両手を前に突き出して「アイゴー、アイゴー。」（※）と悲鳴を上げながら室内を見回していた。院長の「始め。」の命令で解剖室はシーンとなり私は極度に緊張した。

※「アイゴー」（朝鮮語）：悲しいとき、悔しいとき、痛いときなどに発する言葉。

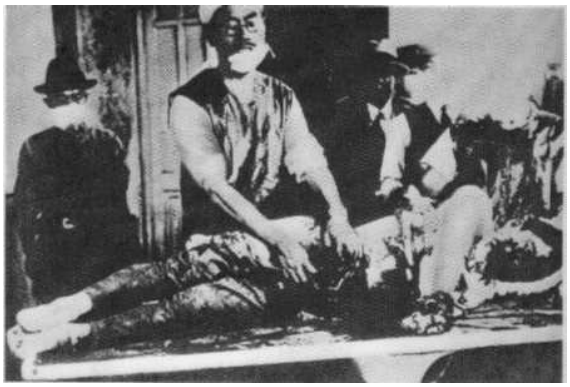
背の高い男は促されるまま手術台に乗った。農民風の男は私の前に立ち、促しても手で押しても後ずさりしては私の目の前に来る。私は冷静と思われたくて彼を両手で前に突き出した。彼はあきらめたように頭をうなだれ手術台に向かった。私は「やった。将校の名誉を保った。」と自己満足した。

看護婦が二人に「麻酔をするから。痛くないから寝なさい。」と言うと、彼らはうなずきながら手術台に横たわった。

腰椎（ようつい）麻酔から全身麻酔に入ろうとしたその時、私は「あ。消毒。」と叫んだ。すると先任軍医が「どうせ殺すんだから。」と笑い返された。虫垂を切除するとき、発病ではないため腫脹（しゅちょう）（※）が見られず、探すのに困惑し3回も腸壁を切開した。腸管縫合、四肢切断から気管切開へと進んだ。負傷した腕と想定して右前腕手術を練習し、1時間半ほどで「手術演習」は終了した。

※「腫脹」：炎症や腫瘍が原因で身体の一部がはれること。





後始末は私たち新米軍医と衛生兵で行った。農民風の男は死んでいた。「材料」の練習体は、衛生兵が既に掘られた穴に放り込んだ。この付近一帯には何回も行われた「手術演習」の遺体が埋められていた。

背の高い男はまだ生きていた。生き埋めは気が引けるので心臓注射を試みた。一旦、血液を吸い上げて針が心臓に達しているか確認した後、空気を注入したが呼吸は停止しない。私は衛生兵に教えられ、全身麻酔に使ったクロールエチール液を静脈に注入して呼吸を停止させた。

これが、私が家を離れてわずか1ヶ月半後に、最初に犯した戦争犯罪だった。この2人は何をしたというのか。故郷も家族も姓名すらも分からない。これ以後、私はこの任地で6回、10人の「手術演習」に関与した。

最初は恐る恐る、2回目は大胆に、3回目からは自ら進んで。「手術演習」の未経験者には「実物がよい。度胸もつくから。」と発言するまでになっていた。日本の製薬会社から注文もあり皮質ホルモン研究用に脳の皮質をはぎ取って、アルコール瓶詰めにして内地に送ったこともあった。

ある日、都市の監獄へ行くよう命令を受けた。監獄には陸軍病院や野戦病院から 40 名の軍医が集められていた。軍医部長が「今日は良い体験をさせてやる。」と言って監獄内の手術室に移動した。室内には目隠しされ、後ろ手に縛られた男が二人いた。軍医部長の「弾丸を抜くまでは生かしておくように。」と言った途端、突然、拳銃（けんじゅう）が 2 発ずつ二人の腹に打ち込まれた。私たちは 10 人 1 組で手術台に乗せ、麻酔も酸素吸入も強心剤も止血剤もなく、最前線さながらの戦闘場面を彷彿（ほうふつ）とさせる状況下で弾丸摘出手術を演習した。弾丸は摘出したが悶絶（もんぜつ）のうちに絶命し、更に 4 発の発射音がして別の組が「手術演習」をした。

私は自分の戦争犯罪を告白することで戦争をなくし平和を守って欲しいと願っている。私 1 人の調査には限界があり全容はつかめないが「手術演習」「生体実験」に関与した軍医、衛生兵、看護婦、製薬会社などの数は数千人になると思う。だがその多くがこの事実を語ろうとしない。自らの行為を恥じてか、あるいは恐れてなのか、あえて避けているのか口にはしない。

語ろうとしない人の言い分もある。「仕方なかった。命令されたから。」「あのような時代だった。」「皆もやっていたから。」「どこでもやっていた。」だから大したことではなかったと。この言い訳の言葉が、戦争肯定につながっていると信じてもらいたい。



湯浅謙氏

・・・・

湯浅氏は、1945 年（昭和 20 年）の敗戦後も自分の意思で中国に残り内科医として中国人民の保健衛生医療のために働いた。1951 年（昭和 26 年）、中国人に対する残虐行為で戦犯として拘置される。自分が関与した「手術演習」を包み隠さず告白すると、意外にも、取り調べ担当官は「よく話した。」とほめ、裁判にはかけられず 1956 年（昭和 31 年）起訴免除となり帰国した。1991 年（平成 3 年）と 1993 年（平成 5 年）の 2 回、中国の病院跡を訪ねて謝罪鎮魂墓参などの日中友好に尽くされた。

初年兵の悲劇　～片又利雄の証言

私たち 60 名の初年兵は北満国境の最前線に配備された。入隊した日は上げ膳、据え膳、入浴も一番の「お客さん」扱いで、明日の起床ラッパから帝国軍人の精鋭「関東軍魂」をたたき込んでやると訓辞され、第一夜の眠りに就いた。

2 日目。歩兵銃の持ち方も知らぬ 60 名は背嚢（はいのう＝リュックサック）を除く完全軍装で「一本松」と呼ぶ戦闘訓練地へ連れていかれた。そこには腰を杭（くい）に縛られた屈強な中国人が目隠しもされずに立たされていた。「お前たちに度胸をつけさせてやる。よく見ておけ。」と軍曹が見本を示した。60 名の初年兵は震え、おびえ、足がガクガクして倒れる者も出た。次々と銃剣で刺され殺される人間の悲痛な腹底からのうなり声、刺される剣を渾身（こんしん）の力でつかみ防ごうとする動き。平成の今でも夢でうなされ眠れない夜もあり、これは死ぬまで続くと覚悟している。2 人の初年兵は怖がって、とうとう命令に従わず、下士官から「貴様、何が恐ろしいのだ。」と数発殴られた。「本日の訓練は、これで終わり。突かなかった 2 名は命令違反により処分は後で示す。」突いた 58 名は命令に従ったから殴られなかった。





捕虜の処刑

3 日目。初年兵全員、銃剣術の訓練で整列する。昨日、突けなかった 2 名が呼び出され 58 名の初年兵は「円陣を組み見学せよ。」とのことで、4 人の下士官と 2 名初年兵の銃剣術合戦が始まった。2 名はめったやたらに突きまくられ、たちまち気絶して医務室に担ぎ込まれて翌日死亡。戦病死とされた。私たち 58 名は陣地のくぼみで荼毘（だび）にふしながら「明日は我が身」と思いながら二人の骨を拾った。このようにして普通の「人」が、軍人精神と称して天皇陛下のために働く「人殺し」に改造させられていった。生き残りたい者は、そのスピードに乗り遅れるなと考える余裕もなく必死についていくだけだった。

それから 3 日後、58 名の初年兵から 2 名が逃亡した。簡単に憲兵に逮捕され陸軍刑務所に送られていった。2 人は良心に従い、「人」としてよく考え、狂気の殺人集団を、自分の命と引き換えに拒否したのだ。かわいそうに、兵隊の階級章も上着のボタンもズボンの紐まで取られ（軍服のズボンはベルトではなく紐で結ぶ）スリッパを履かされて私たちの前を通っていった。その顔は、人殺しは嫌だという落ち着いた顔であった。ここは国境の前線。逃亡は銃殺刑である。

今しきりに思う。軍国主義のあの時代に、あの 4 名が本当の「人」ではなかったのかと。お互いの名前を覚える暇もない、わずか 1 週間の間の出来事であった。残った 56 人は私も含め「死」の恐怖におびえながら、超一級の殺人者に仕立て上げられていった。

流転の万年一等兵　～長尾堅造の証言

私は、1939 年（昭和 14 年）現役で第六国境守備隊に工兵として配属され、中国人 10 人を使って徒溝子（とこうず）陣地の掩体（えんたい）（※）を構築した。この中国人は第五師団（板垣征四郎中将）が中国山東省を進行中、畑で農作業をする中国人をうさぎ狩りでもするかのように捕まえ、北満の陣地構築の労働者として送ったといわれている。戦後、山東省中国人を徴発した責任で、内田銀之助少将が戦犯として中国に逮捕された。

※「掩体」: 敵弾から味方の射手を守るための土嚢（どのう）などの設備。

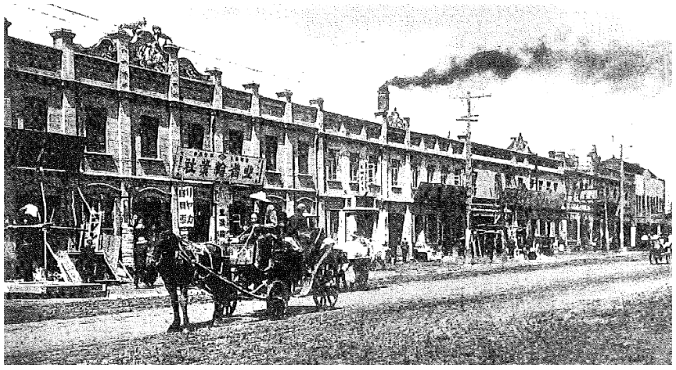
一日の労働が終わると中国人に二粒の阿片（アヘン＝麻薬の一種で、ケシの実から生産される）を渡した。彼らはとても喜んだ。中には自分は吸わずに貯めて売る人もいた。阿片の魔力は大変なもので、阿片が切れると空っぽのモッコ（上部な布か縄を編んだ土を入れて運ぶ道具）も持てなくなるが、阿片の吸口についているヤニをなめさせるだけで元気が出て、土を山盛りにしたモッコを 2 個でも担ぎ出した。麻薬中毒にして阿片欲しさに働く彼らを私たちは酷使した。1940 年（昭和 15 年）5 月 9 日、一期の検閲が終了して一等兵に進級。精勤章（せいきんしょう）をもらい上等兵候補を命じられ、西溝（せいこう）の陣地構築に転属した。更に 1941 年（昭和 16 年）には関東軍特別大演習（関特演）の大動員で、桂木斯（ジャムス、チャムス）の独立工兵大隊へ転属。



掩体



精勤章

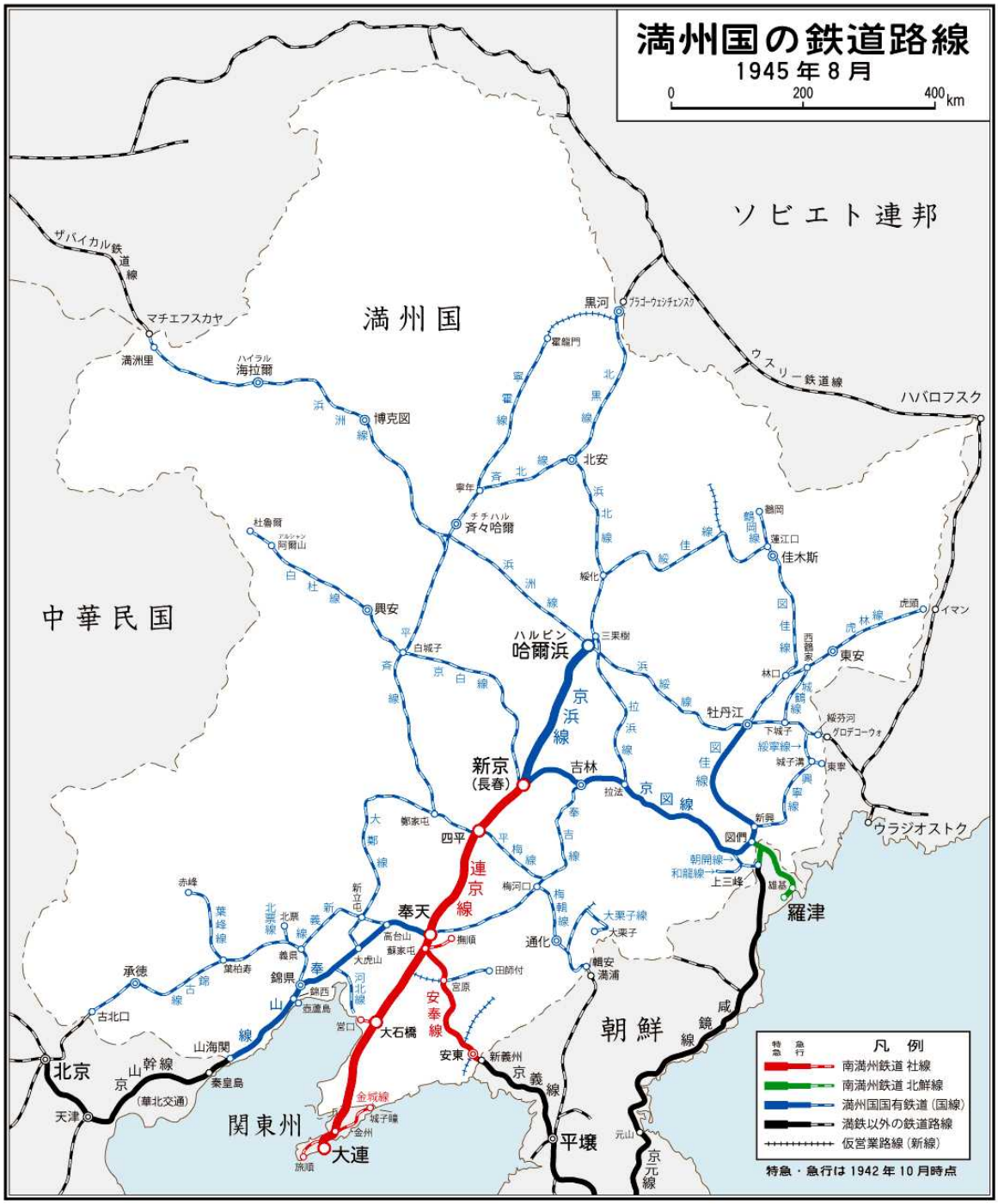


ジャムス



関東軍特別大演習

そろそろ上等兵に進級の頃と腹積もりしていたが、17 年から 18 年は次のように転属の連続で、員数外にされてしまったと思うようになった。虎林（こりん）→中支（ちゅうし）→安徽省（あんきしょう）→虎頭（ことう）→佳木斯（ジャムス）→ハルピンを転々とし、1943 年（昭和 18 年）4 月 18 日（山本五十六将軍が撃墜戦死した日）、ハルピンの司令部に出張したとき、街中で偶然にも市民服の同年兵に「長尾ではないか。」と呼び止められた。「なんだ、一等兵でまだ軍隊にいるのか。同年兵は全員、3 年間のご奉公を終え、上等兵や兵長で満期除隊したぞ。お前の使っていた中国人も、俺らが使っていた中国人も、陣地の完成と同時に軍事機密を守る理由で殺したぞ。」と教えられた。「私がかわいがっていた中国人まで殺すとは。」と腹が立った。

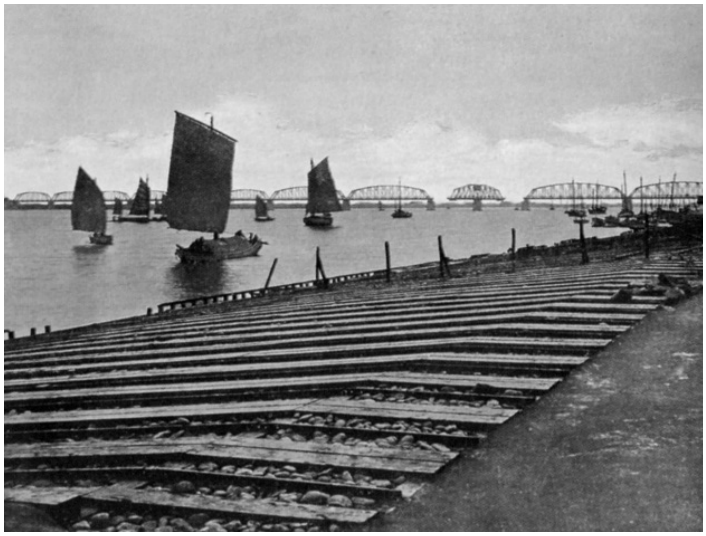


満州国の鉄道路線

4 年間も軍隊にいる一等兵は「四年兵殿」と呼ばれて怖いものなしだ。腹が立った私は出張から帰るなり満期除隊を申し出た。「下士官適任証と善行章を出すから辛抱せよ。」と言われたが、受ければ進級して兵役に服されるので断ると不服従行為とされて営倉に入れられた。営倉から出ると陸軍士官学校出身の 3 歳も年下の若僧、田中少尉に顔が変形するまで殴られた。しばらくすると満期除隊命令が出て他の満期除隊者 450 人と赤羽の原隊に帰った。他の者は伍長、兵長で、上等兵はいなかった。私は一等兵だったが「四年兵殿」と呼ばれ一番いばって帰った。軍隊の規律は上官の命令に絶対服従というのが表の事情。裏は刑務所と同じで、一日でも早く軍隊の「飯」を食べた者がいばれた。

家に帰って 7 日目に召集令状が役場から届けられ「やっと生きて帰った大事な働き手をまた連れていく。」と父母は天皇陛下を恨んだが「万歳、万歳。」の声に送られ、再び呪（のろ）う軍隊の営門をくぐった。釜山（プサン）に上陸後、鴨緑江（おうりょくこう、中国東北部と北朝鮮との国境となっている川）を渡り、中支（ちゅうし、中国大陸の中部地方）に行った。京漢（けいかん）作戦、洛陽（らくよう）作戦では渡河させた歩兵半数近くが戦死した。





鴨緑江

内蒙古（うちもうこ）の包頭（ほうとう）では、私の部下がいばり散らす分隊長を刺し殺し、私も責任を取らされ、紐（ひも）もボタンももぎ取られて重営倉 3 日の処分を食らった。まだ 1 日残っているのに営倉から出され、黄河渡河作戦の舟艇長にされる。その後、第 2 次京漢作戦、老家口（ろうかこう）、西峡（さいきょう）作戦では食う物がなく、ネズミ、蛇などで命をつないでいるうちに半数がマラリアで死亡。1946 年（昭和 21 年）5 月 5 日半死半生で舞鶴に帰還。思えば 1939 年（昭和 14 年）から 7 年もの軍隊生活で私の青春はボロボロにされた。


ソヴィエト連邦
シベリア
シベリア鉄道
イルクーツク
チタ
③満州国建国
1932.3
愛琿
ハバロフスク
⑦ノモンハン事件
1939.5~9
ソ連軍機械化部隊に敗北
満州里
ウランバートル
ノモンハン
チチハル
桂木斯
モンゴル人民共和国
①柳条湖事件
1931.9.18
鉄道爆破口実に満州占領（満州事変）
ハルビン
牡丹江
吉林
④盧構橋事件
1937.7
日中戦争開始
新京（長春）
ウラジオストク
張鼓峰
奉天
撫順
赤峰
張家口
錦州
⑥張鼓峰事件
1938~7
国境付近でソ連軍と交戦
日本軍敗北
包頭
大同
北京
大連
旅順
天津
太原
石家荘
芝罘
延安
1936.10
共産党大西遷終了
済南
青島
釜山
蘭州
鳳陵渡
⑤南京占領
1937.12
南京大虐殺
木浦
中華民国
開封
徐州
日本
南京
呉松
②第一次上海事変
1932.1
海軍が上海に上陸・占領
蘇州
成都
重慶政行成立
1937.11
漢口
上海
杭州
武昌
漢陽
寧波
重慶
長沙
南昌
温州
衡陽
福州
⑧南京政府（王兆銘）樹立
1940.3
独山
昆明
桂林
瑞金
共産党根拠地
1934.10
大西遷開始
厦門
台北
基隆
広州
南寧
汕頭
ランソン
マカオ(ポ)
香港(英)
ハノイ
広州湾(仏祖借)
海南島
仏領インドシナ連邦
ユエ
0
200
400km
戦線地域
満州国の範囲
日本軍の進路
数字 日本軍の占領・戦闘年日
首都の移動（国民党政府）

日中戦争の展開

生死を分かつ瞬間　～稲葉迪夫の証言

敵戦車を爆破するのは 10 キロ、20 キロの爆薬を背負ったり、胸に抱いたりして戦車の下に飛び込む肉迫攻撃だけだと分かっており、空の戦友、1 機 1 艦ならば、私たちは 1 人 1 戦車と、日夜、肉迫攻撃の訓練を繰り返してきた。

8 月 9 日、ソ連軍の攻撃が始まり、その時がきた。

日本の敗戦は 8 月 15 日だが、敗戦を知らない私たち五中隊に 8 月 19 日、肉迫攻撃命令が下った。私は 21 日に出撃と決まった。既に下士官候補隊には甚大な戦死者が出て負傷者も多く、陣地のある丘陵は敵の砲撃で遮蔽（しゃへい）物の樹木は吹っ飛び、土肌も露出して敵に対し丸裸の陣地になっていた。肉迫攻撃に出なくとも後 2、3 日の命であったろう。

20 日、昼少し前、150m 前方で敵戦車が肉薄攻撃で爆破され、50m 以上も黒煙が上がり、戦車に搭載してある砲弾が戦車内で爆発を繰り返している。夜になり「戦車の甲板の厚さ、搭載兵器、キャタピラの厚さを調べよ。」との命令で調査に行った。複数では敵に発見される可能性が高いので、夜陰に乗じて 1 人で行き帰路で発砲音を聞いたが、私が標的ではなかったようだ。天蓋（てんがい）を開き中を見ると焼け焦げた死体が 2 人。長さ 80cm もある戦車砲の薬莢（やっきょう）が散乱していた。よくもこれだけ撃ってくれたなと腹が立った。天蓋は 20mm ほどの厚さだが、他は 100mm 以上の甲板だったと報告した。





肉薄攻撃

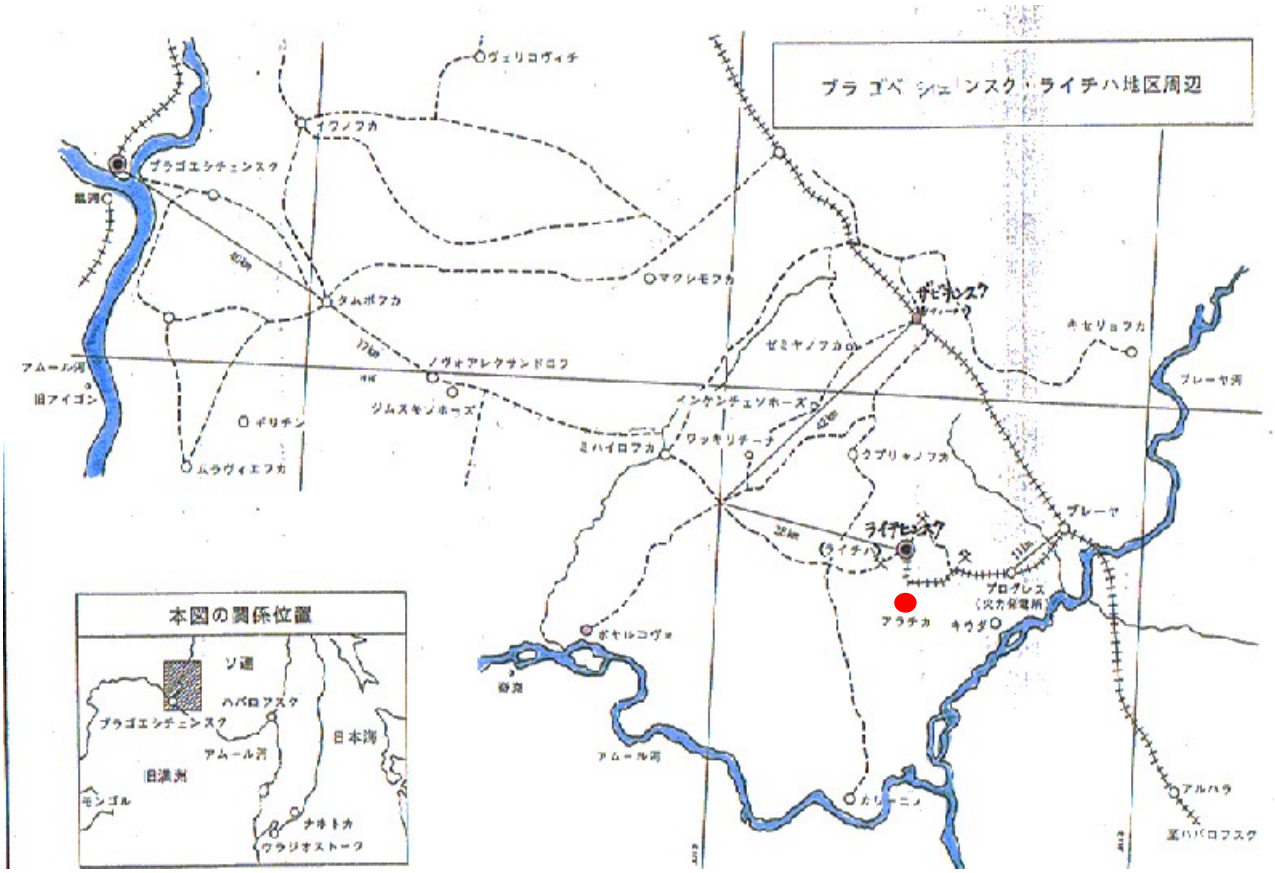
余命幾ばくと覚悟はできたというが、実際にその時が近づくと、そんな単純なものではないことが分かった。その日は胸騒ぎで一睡もできなかった。翌日、出撃予定の戦友から甘味品をもらい慰めの言葉をかけられても上の空で「死出の旅に着ろ。」と新品の軍服上下に褌（ふんどし）まで新品を渡されたが着替える気持ちにはならなかった。それらの品々に目を落としていると、次々と妄想が頭を駆け巡り、頭が割れ、胸が引き裂かれる思いがした。

あと数時間で死ぬと思うと、父母、兄弟、姉妹、親戚（しんせき）の人、小学校の友達、氏神の祭り、運動会、故郷の山河の景色が脳裏を駆け巡る。これではいけないと強引に「天皇陛下」と「靖国神社」を思い浮かべ、新品の衣類を見ながら「お父さん、お母さん。迪夫は天皇陛下のため、明朝、死にます。靖国神社に逢いに来てください。」と独り言で自分の心を強く引き締めたが、母の顔が割り込んで「死の決心」の邪魔をする。頭の中の天皇を母が押し出している。お母さんと叫びたい。

北満の夏の朝は早い。3 時半には弾薬箱の空箱に 10kg の爆薬を詰め、瞬発信管に誘導索を取り付けて背負い紐で結束する。決別のあいさつをしたが、相手がだれなのか分からないほど混乱していた。「稲葉候補生、肉薄攻撃に出撃します。」挙手の礼で壕（ごう）を飛び出した瞬間「稲葉、伏せろ。」の中隊長の大声で、その場に身を伏せた。「稲葉、顔を少し上げ、前方を見よ。敵陣の白旗が見えるか。」戦友たちは壕に身を隠していたが、中隊長だけは壕から顔を出し見送ってくれていたので、敵陣に白旗が掲げられたのを発見したのだ。

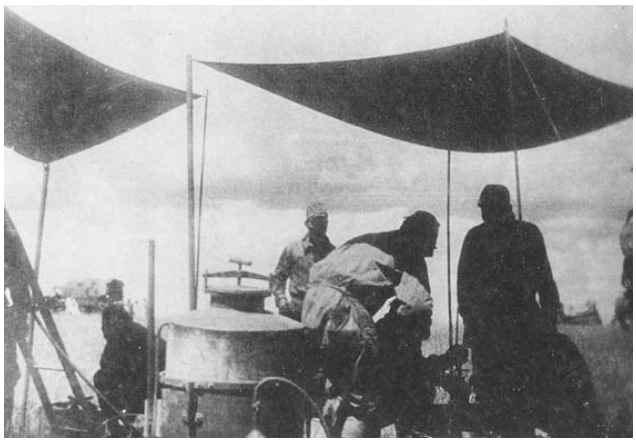
しばらくすると白旗が動き出し、軍用道路を横切り、白旗を持ったソ連将校がこちらに来るではないか。「おーい。日本が勝ったぞ。」

それから 26 歳まで、戦闘部隊への報復とも思える過酷な強制労働。シベリアで 3 分の 1 が死んだ。これが私たちの青春だった。



戦争が終わり平和になってから　～多田久男の証言

1945 年（昭和 20 年）8 月 21 日、武装解除。9 月上旬、孫呉へ連行され、既に大勢の将兵、民間人が集められていた。私は天幕で、この人たちの診療を命じられた。毎晩、ソ連兵が女を求めにくるので困り果て、朝鮮の元従軍慰安婦に頼んで日本婦人の貞操を守ってもらっていた。



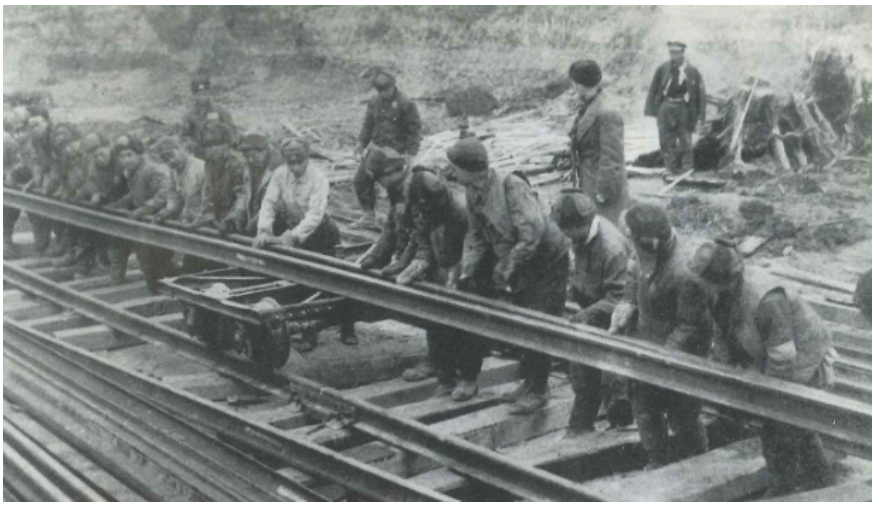
天幕

かわいそうなのは乳幼児で母親はショックと栄養失調で母乳が出ず、米粥を作ろうにも米はなく、高粱粥を作って飲ますが受け付けず、すぐに吐き出してしまうか下痢を起こし、一両日中には衰弱し死亡した。医者として、これほど遺憾に思ったことは他になかった。栄養と医薬さえあったならば、この乳幼児のほとんどは成長し、永く世に生を受けられたはずである。ここにも罪のない犠牲者を見せつけられたのだった。

こうした避難者の多くが戦後 45 年をへて、残留日本人孤児として肉親を求め来日するたびに、私は胸が痛くなると同時に、孫呉で診察した乳幼児の面影が脳裏に去来するのである。

孫呉で「兵隊だけ日本に帰す。」と言われ黒河に向かった。途中、私の所属した第六国境守備隊歩兵九中隊、十中隊が激戦地の朝水を通過した際、戦死した敵味方の兵の遺体が累々と放置され、爆破された戦車も「野ざらし」のままで死臭が漂っていた。

後年、諸調査で分かったことは、スターリンは「自国の戦死者の埋葬」よりもソ連の戦後復興のために「働く男と物資の輸送」を優先。304 km におよぶ黒河～北安間の鉄道線路を、捕虜を使ってはぎ取り、第 2 シベリア鉄道（バム鉄道）の建設に流用した。鉄道建築は枕木 1 本が捕虜 1 人の命であったとの証言もある。その他、秋に収穫した穀物、家畜のえさまでソ連に持ち去ったため、満州はその冬、食料危機になった。




鉄道の敷設作業を行う捕虜

黒河から船で対岸のブラゴエに渡り、夏の軍服で野宿しながら 1 日歩いては 1 日農場でジャガイモ堀り。1 日分のジャガイモをもらい、歩いては芋掘りを繰り返して北へ北へと歩いた。霜が降りて氷が張り雪になった。野宿を 1 ヶ月半してバラック小屋に入れられた。だまされたと知らず、これが日本へ帰るための行軍と辛抱した。

やがて私はブレーヤ収容所の石切り場で冬を越すことになる。だまされ、帰国できないという精神状態と、餓死者が出る食料事情で次第に衰える体力に激しい重労働が課せられ、大多数の将兵が栄養失調になった。この状態に寒気が加わると、すぐに肺炎を起こし腹膜炎になる。とても難治で入院できた人もいたが、ほとんどの人はブレーヤの医務室で亡くなった。死ぬと裸にさせ衣料品もないのか褌（ふんどし）まではがして丸裸にさせる徹底ぶりだった。

肺炎で高熱を出し、危篤状態の人が、床をはいまわっている。どうしたと聞くと「お袋がすしをもってきたのに、なくなったので探している。」と言い、夜明け前に死亡した。日本に帰り、一家で花見をしながら死んでいったと思う。これらは枚挙に遑（いとま）のない（※）悲しい出来事であった。

※「枚挙に遑（いとま）がない」: いちいち数えあげることができないほど、その数が多い。

ソ連側が死亡者名簿を作成したのは 1946 年（昭和 21 年）の春からのことで、それまでに死んだ人の名簿はなく、数えられていない。何せものすごくシラミが繁殖し、毎朝、毛布を外に持ち出し、外気にさらしておくと、シラミはごま塩を振りまいたように凍死するが、卵は死なないので一向に退治できなかった。もし、この状況下でシラミが法定伝染病「発疹チフス」を媒介したら捕虜の全滅は間違いないので、医者としてソ連側に熱湯でシラミの卵まで殺せる消毒所を造らせた。案の定、空恐ろしく思っていた事が伝わってきた。

ブラゴエをはじめ各地の収容所で発疹チフスが流行して皆、血便を垂れ流し、半数が死亡したというのである。ゼーヤ河や黒竜江の氷にバールで穴を開け、捕虜の死体を全裸にして流しているということだった。入ソ１年目の冬の死者数は、名簿作成前であるので数に入っていない。これが後年、ソ連と日本側での死亡者数に大きな開きを生じることになる。シラミは完全に駆除したが南京虫は駆除できず、夏まで待ち、全員屋外に野宿して建物のすきまを目張りし、三日三晩、硫黄をたいて南京虫を駆除した。

シベリアでの最初の冬、朝水開拓団の旭君（17 歳）が、体力のあるうちに黒竜江も氷結したから、朝水で農業をやろうと逃げて捕まり銃殺された。私は検死解剖（けんしかいぼう）を命じられたが、氷点下 30℃の遺体にはメスも刃が立たず、消毒所に運び解凍して解剖したが、弾丸は心臓を貫通しており即死と報告した。銃殺後 7 日目、消毒所が全焼した。旭君の怨念（おんねん）だと捕虜たちは騒いだが、私は怨念ではなく加熱発火だと思っている。

石切作業は、岩山にダイナマイトを仕掛け爆発させるので、春になると、土壌が緩んで突然、巨岩が落下し死亡者も出た。山田君が落下した石に足を挟まれ大腿（だいたい）を骨折、ロシア医者と相談するが薬も医療具もないからギブス包帯を行う。曲君は発破で飛び散った岩石が頭を直撃。骨がめり込み、手術して助かったが（かんしゃく）（※）の後遺症に悩まされた。重傷の凍傷も多く、手足を失くすことは悲劇そのものであった。

※「癇癪」：ちょっとしたことにも感情を抑えきれないで激しく怒り出すこと。



採石作業

人名簿ができ、死亡者名簿が作成されるようになると、死亡者数が日本に筒抜けになるので、急に健康管理が厳重になった。身体検査では、ソ連軍医が裸になった捕虜の尻の肉をつねって、肉の付き具合で栄養状態を「Ⅰ群」「Ⅱ群」「O・K＝オーカー（アズダロヴィナヤ・カマンダ＝栄養失調症の略語）」に振り分けた。私は 100 人ほどの O・K の長に任命された。「こんな食料は家畜のえさだ。働けるか。」と代表でソ連に抗議していた松沢大尉はどこかへ連行されてしまった。



身体検査

呉羽紡績（くれはぼうせき）にいたというロシア語のできる小栗大尉や金田見習士官たちと土地を耕し、トマト、キャベツ、マホルカ（最低たばこの原料草）の栽培もやった。ある日、朝食の汁を飲んだ者が次々に真っ青な顔になり、冷や汗がタラタラと流れ、よだれが出て吐き気、嘔吐を始めた。原因は汁にありと調べると、マホルカの葉を刻んで汁の具にしたことが分かった。喫煙者は何の反応もないが、禁煙者全部が即席中毒で作業人数が半減し大問題になった。それ以後、ソ連将校の立会いで、食物を検査することになった。孫呉から軍馬 2 頭を引き馬車用に連れてきたが、水運搬や燃料の木材運びでやせ衰え、こき使われて捕虜と同様に栄養失調で死んだ。近くの林に埋め、病死でないから食べられるからと、ソ連に内緒で掘り返し食べたが、別段何事もなかった。

ブレーヤの石切を 2 年して、アラチカ収容所に移った。アラチカは佐久間右門中隊長が責任者であったが、私たちと入れ違いにどこかに連行されてしまった。程なくアクチブが台頭し「民主運動」と称する「つるし上げ」が盛んになった。下級兵士がグループの代表になり、ブレーヤから一緒だった真雁軍曹もつるし上げられてどこかへ連行されてしまった。

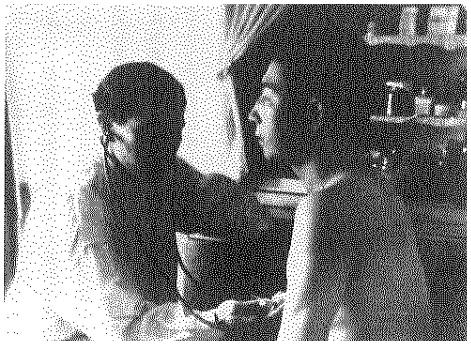
アクチブは「ブルジョア医者を休ますな。」と医者の仕事も病人の診察治療だけでは承知せず、起床前に炊事の毒見役、入室患者の食事、朝の診察、作業出発の立会検査（防寒服、防寒手袋、防寒靴に破れや湿気はないか、あれば凍傷に直結する）の見届け。午前診察が終わったら宿舎内の掃除と衛生施設の点検。午後は通行証明書を持って各作業現場（石炭の露天掘り）を歩いて回り、危険防止、凍傷予防、体力と作業の適否を見て歩く。帰ると夕方の診察。夜は防寒服、防寒手袋、防寒靴の乾燥室の巡視、不寝番の服務状態、夜トイレに行く者の服装チェックと、ほとんど寝る暇もなかった。

そんな中、心臓弁膜症の捕虜が肺炎になり、病院への移送は危険なので医務室で加療していたら、ソ連軍医が「収容所の医務室で死ねば、自分のノルマが悪くなるから入院させる。」と強行に出た。動かせば死ぬと主張したが「命令」と従わせ、トラックの荷台に乗せて付き添ったが途中で絶命した。腹が立ったので収容所長に報告し抗議すると、ソ連軍医が書類を出し「署名せよ。」というので何も分からず署名。すると 1947 年（昭和 22 年）12 月 31 日、私は突然、刑務所に入れられた。署名した内容は「日本軍医として日本軍捕虜の病弱者に対し乱暴な治療で死に至らしめた。」ということだった。

刑務所の独房には大小便兼用の樽（たる）が一つ置かれ、昼夜の別なく見回りがきて、正座していないと更に罪が加算された。食事は黒パンのカケラと 99%水のスープで 10 日間を過ごした。刑務所を出ると懲罰隊に入れられ、古い廃品ワイヤーをタガネで 3cm の長さに切って釘を作る。この釘で薄板をつなぎ合わせ屋根を作った。トントンやっていると収容所長が連れ戻しに来た。

栄養失調もさることながら日本人のだれもが経験したことのない酷寒のせいで「痔」「神経痛」患者が圧倒的に多かった。作業は 10 人 1 組で、1 人休むと作業量はガタンと落ちるが、病人には何とか休んでもらいたかった。夕方の診察で 30 人もの病人を認定すると、翌朝の作業前、ソ連軍医が患者を集め強引に再診を始める。

ソ連軍医の聴診器は明治、大正時代の古物品で、日本では昭和の初めに廃棄した代物だった。革命後、砂上の王国、労働者農民の天国づくりに夢中で、医学は捨て置かれて、帝政時代の骨董品（こっとうひん）を後生大事に使っていた。医学全般が医療道具と同じで幼稚だから見ていられなかった。一番の被害者は診察される患者であった。



軍医による診察

夜、40 度の発熱が記録されていても、朝 37 度台なら健康と診断。軍医は「お前が認定した 30 人の内、20 人は仮病で作業可能だ。」と言う。20 人もの生産サボりを見破れなかったから「1 人 1 日で 20 日間、炭坑の重労働の罰を与える。」ということでツルハシを担いで炭坑で石炭掘りをやらされた。4 日目にまた収容所長が迎えに来て診療所に戻された。

ブレーヤ収容所と、ここアラチカ収容所の全員が帰国できることになった。私は 1 人だけ残され、無人化したアラチカ収容所の門を閉め、施錠をガチャッと掛ける役。私は精神的に追い込まれ、発狂寸前であった。

次はライチハで、民間人も捕虜も入院している病院で医者として働いた。そして 1949 年（昭和 24 年）の秋、病人の捕虜と一緒に貨車に乗せられ、帰国のためにナホトカに着いた。乗船待ちだと喜んでいると、どっこい健康な私には土方作業が待っていた。土掘りをしていたとき、壁が崩れて捕虜が圧死した。帰国を前に、実にお気の毒であった。

明日、乗船と決まり喜んでいると「4 分所の日本軍医が入院したから、お前が医者として残れ。」と言ってきた。「俺は土方の普通の捕虜だ。帰国する。」と言おうとしたが「医者として･･･。」と言われると無下に断ることもできなった。医学生の頃から「医者は仁術」とたたき込まれてきたからだ。

4 分所で働いている捕虜の衛生兵が「軍医殿、1 人でも多く助けて日本の家族へ帰したい。そのお手伝いを･･･。」と言われ残ることにしたが私は立派ではなかった。その夜は煩悩（ぼんのう）にさいなまれ苦しみ寝付かれなかった。

こうして 9 月から 11 月まで病院で診療に打ち込んだ。この 3 ヶ月の間、帰国のためナホトカに集結する帰還者の中に大学の同級生や故郷の人たちとの奇遇も何度となくあった。この人たちが私の家族に私の生存を伝えてくれる天使になると思って「人命を救う職」に懸命の努力を惜しまず注いだ。11 月ともなるとナホトカの地面は凍土化してコンクリート状態になり、ツルハシもスコップも受け付けない。そして寒くなるに従い、けが人や凍傷者、入院患者が増加し、五体満足でやっとナホトカにたどり着き、強制労働を強いられて船を待つ間に事故死、労働災害や凍傷で障害者になる人もいた。

第六国境守備隊で一冬、シベリアで 4 冬を生き抜いた。帰国の途、悪名高い日本新聞の連中と同じ船に乗った。ナホトカ港の背後につながるシホテアリニ山脈を、私は憎悪のまなじりでにらみながら見えなくなるまで船上に立っていた。故郷に帰ったのは 1949 年（昭和 24 年）12 月 4 日であった。




シホテアリニ山脈

＜多田氏の後日談＞

1990 年（平成 2 年）シベリアの限られた地区へ墓参が許可された（遺骨の持ち帰りはその数年後に実現）。多田氏ら数名の墓参団がライチハに到着すると、ロシア婦人が「この中に医者はいますか。」と尋ねた。多田氏がライチハ病院で診察した人の縁故者かと思って手を上げると婦人は子どもを差し出し「この子はチェルノブイリで被爆しました。助けて下さい。」と申し出た。多田氏はライチハ病院へ大量の医薬品を寄付するために持参していたので、その母親に治療薬をプレゼントし、服用方法を教えた。婦人は、放射能に汚染されて永久に住めなくなった故郷を捨て、遠く離れた極東の地を定住先にしたという。その後も多田氏は毎年、現地の方々の治療を兼ねて墓参に通っている。

大人の国（たいじんのくに）　～陰地茂一の証言

ガチャンと重い余韻のある金属音を残して監獄の鍵を掛けられた瞬間、文字通り、目の前が真っ暗になり、絶望と自暴的な思いがわき出してきた。しかし、その翌日からの日常が始まってみると、驚くべきことが待っていた。シベリアの極寒、飢餓、重労働、疫病とは異なる信じがたい世界がそこにあったのだ。新中国が誕生してわずか 9 ヵ月、食糧事情の決してよくない時期で、ここの兵士、すなわち撫順（ぶじゅん）戦犯管理所の人々は、粟（あわ）、高粱（こうりゃん）を主食にしていたとき、私たち日本人戦犯には温かい白米飯、肉、魚、野菜などが食べ放題。ぜいたくにも監房にはスチーム暖房が入り、しかも強制労働は一切なし。しかし最初の 1 年は反抗の連続で「戦犯とは何事だ。殺すなら殺せ。帰すなら帰せ。」と迫っていた。戦争が終わったのにソ連の戦後復興のためシベリアへ。地獄の強制労働を 5 年間も生き抜いた 1950 年（昭和 25 年）7 月、日本へ帰る日本人から、私は元憲兵であると密告され、BC 級戦犯としてシベリアから中国へ移管された。絶望と不安で自暴自棄になっていた。



撫順戦犯管理所（現在）



収容された戦犯

私は 1942 年（昭和 17 年）1 月に現役入隊。3 ヵ月の訓練を受けた後、旧満州に派遣された。憲兵を志願し 10 ヵ月の憲兵教育の後、富錦（ふうきん、ふきん）憲兵分隊に配属された。富錦市はソ連国境に近く、人口 65,000 人ほどの一見のどかな町だったが、一歩憲兵隊の門を入ると、そこは戦場であり地獄だった。鞭（むち）のうなる音、怒号、悲痛な叫び声とうめき声。平和な町とは裏腹の世界が繰り広げられていた。留置場には常に 4～5 人。多いときは 12～13 名入れられて、代わる代わるに呼び出しては拷問を加えた。殴る蹴る（ける）は優しい方で、手の指の間に鉛筆を挟んで紐できつく縛るとか、後ろ手に縛って上からつるし、竹刀（しない）でボロボロになるまで殴る。はしごに両手両足を縛り逆さにして顔にタオルをかけ、やかんでどんどん水を流して呼吸する度に口から鼻から容赦なく水を飲ませる。10 分、20 分、みるみる内に腹がポンポンになり失神。失神すると足で踏みつけ、水を吐かせて意識を戻させ、また繰り返す。時にはアンパンほどの灸をすえる。氷点下 20℃の中で水桶に全裸にして押し込む。男女の別なく性器に線香を差し込み、火をつけてお経を唱える拷問は、インテリ層ほど人間性を失墜させる効果が高く発狂者も出た。



中国人への拷問

なぜこのような非人間的な行為が平気でできたのか。それは教育の結果である。「神州日本」（しんしゅう＝神の国）の大和民族は他民族より優れ、アジアの盟主であると教える思想教育と、侵略した国に神社を建てて拝ませ、宮城遥拝（きゅうじょうようはい）と日本語教育を強制し、他民族を陛下の臣下にする「皇民化政策」による教育でマインドコントロールをされていたのだ。拷問は陛下の御心を教え分からせるためで、何の罪悪感もなかった。1932 年（昭和 7 年）関東軍への勅語（※）にも「東洋平和のため毒草にも等しい中国人を」とある。満州に五族協和、王道楽土を建設するのが大御心（おおみごころ＝天皇のお考え）であり、この陛下のご命令に反抗し抵抗するものを匪賊（ひぞく）、馬賊（ばぞく）と呼んで反逆者として捕え、恐れ多くも大御心を痛める「不逞の輩」（ふていのやから）と教えられ信じていた。一つの疑念も抱かず、天皇陛下のためになるならと洗脳されていたのだから、罪悪感などあろうはずがない。

※「満州事変ニ際シ関東軍ニ賜ハリタル勅語」：1932 年（昭和 7 年）1 月 8 日

満州事変（1931 年 9 月 18 日）に対して、天皇が関東軍に与えた勅語。内容は次の通り。

下枠内は、原文のカタカナ表記をひらがなとし、旧仮名遣い現代仮名遣いに修正した。

曩（さき）に 満洲（まんしゅう）に於（おい）て 事変（じへん）の勃発（ぼっぱつ）するや 自衛（じえい）の必要（ひつようじょう）上 関東軍（かんとうぐん）の将兵（しょうへい）は 果断神速（かだんしんそく）寡克（かよ）く
衆（しゅう）を制（せい）し 速（すみやか）に之（これ）を芟討（さんとう）（※）せり 爾来艱苦（じらいかんく）を凌（しの）ぎ 祁寒（きかん）に堪（た）え 各地（かくち）に蜂起（ほうき）せる 匪賊（ひぞく）（※）
を掃蕩（そうとう）し 克（よ）く警備（けいび）の任（にん）を完（まっと）うし 或（あるい）は嫩江（のんこう） 斉々哈爾（ちちはるちほう）地方に 或（あるい）は遼西（りょうせいきんしゅうちほう）錦州地方に 氷雪（ひょうせつ）を衝
き 勇戦力闘（ゆうせんりきとう） 以（もっ）て其（そ）の禍根（かこん）を抜（ぬ）きて 皇軍（こうぐん）の威武（いぶ）を 中外（ちゅうがい）に宣揚（せんよう）せり 朕（ちんぶか）深く其（そのちゅうれつ）忠烈（よみ）を嘉（なんじしょう）す 汝将
兵（へい） 益々（ますますけんにんじちょうもっ）堅忍自重（とうようへいわ）以て 東洋平和（きそ）の 基礎（かくりつ）を確立（ちん）し 朕（しんい）が信倚（こた）に対えんことを期（き）せよ。

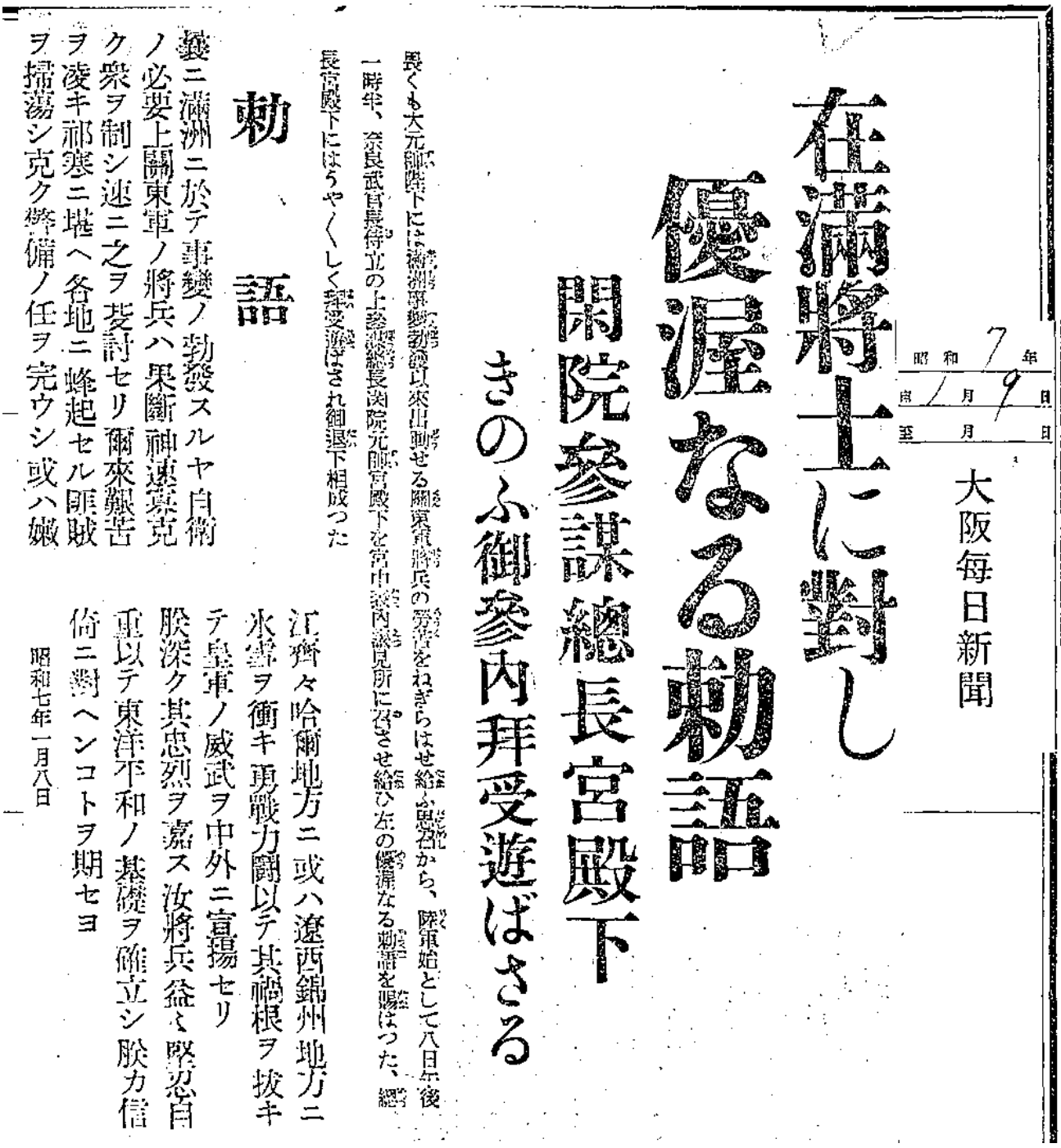
※「芟討」：草を刈るように敵をうち平げること。

※「匪賊」：

支那（しな）人はいやしい民族、日本人は優れた大和民族であるという差別意識が天皇から子どもまで浸透していた。

【現代語訳】

先に満州において事変が起こった際、自衛の必要上、関東軍の将兵は素早く決断して実行し、少数の兵はよく民衆を制圧し速やかに反乱を打ち平らげた。それ以来、困難を凌ぎ、厳しい寒さにも耐え、各地で暴動を起こす匪賊を残らず払い除き、よく警備の任を果たし、嫩江、チチハル地方、遼西錦州地方にて、氷雪を突き、勇ましく力強く戦い、反乱の芽を摘み、天皇の軍隊の威力と武力を内外に明示した。私は深くその厚い忠誠心を嬉しく思う。あなた方将兵は、ますます我慢強く、自重しながら、東洋平和の基礎を確立し、私の信頼に応えることを心に誓いなさい。



在滿將士に對し
優渥なる勅語
閑院參謀總長宮殿下
きのふ御參內拜受遊ばさる

大阪毎日新聞
昭和7年1月9日

畏くも大元帥陛下には滿洲事變勃發以來出動せる關東軍將兵の勞苦をねぎらはせ給ふ思召から、陸軍始として八日午後一時半、奈良武官長侍立の上參謀總長閑院元帥宮殿下を宮中參內所に召させ給ひ左の優渥なる勅語を賜はつた、續いて長宮殿下にはうやくしく拜受遊ばされ御退下相成つた

勅語

曩ニ滿洲ニ於テ事變ノ勃發スルヤ自衞ノ必要上關東軍ノ將兵ハ果斷神速能ク克ク衆ヲ制シ速ニ之ヲ芟討セリ爾來艱苦ヲ凌キ祁寒ニ堪ヘ各地ニ蜂起セル匪賊ヲ掃蕩シ克ク警備ノ任ヲ完ウシ或ハ嫩江齊々哈爾地方ニ或ハ遼西錦州地方ニ氷雪ヲ衝キ勇戰力鬪以テ其禍根ヲ拔キテ皇軍ノ威武ヲ中外ニ宣揚セリ朕深ク其忠烈ヲ嘉ス汝將兵益々堅忍自重以テ東洋平和ノ基礎ヲ確立シ朕カ信倚ニ對ヘンコトヲ期セヨ

昭和七年一月八日

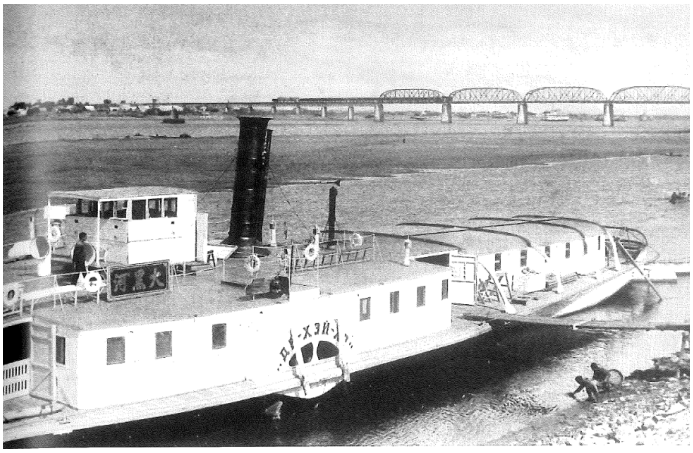
「滿州事変ニ際シ関東軍ニ賜ハリタル勅語」を掲載した当時の新聞

※「優渥」:
ゆうあく。君主（天皇）が臣（日本国民）に対して、ねんごろに手厚いこと。恵みが厚いこと。

拷問を加えて失神させ、死ぬと裏を流れる松花江（しょうかこう）に投げ捨てた。拷問に耐え抜き生き抜いても足腰が立たず、送検も釈放もせず、教育材料にするため陸軍病院に引き渡した。引き渡しが決まると証拠隠滅のため関係書類は焼却した。引き渡し後は教育材料として生体解剖され、陸軍病院の外側の墓地に、家族にも秘密にして埋める。日本が匪賊、馬賊と呼ぶ中国愛国者レジスタンスの情報網はすごかった。埋めた翌日の夜明け前には彼らによって遺体が掘り出されてしまうのだ。するとまた憲兵である私たちが、これと思う人物を逮捕し拷問で取り調べた。

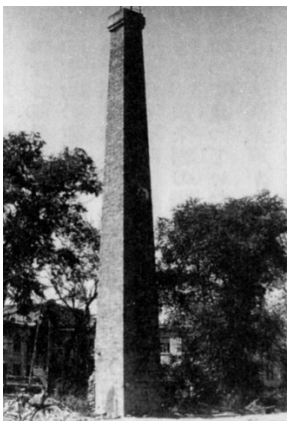


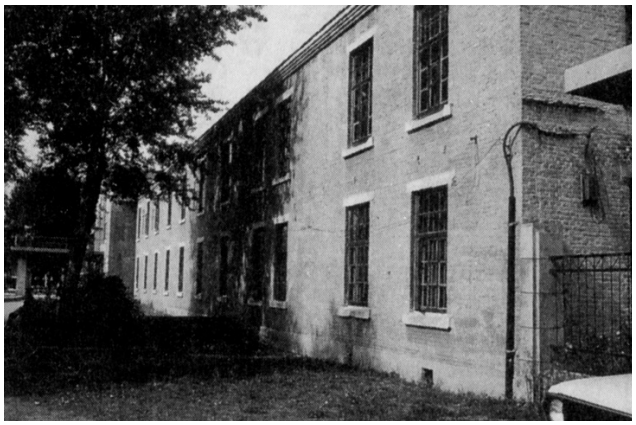
連行される抗日義勇隊員



松花江

1944 年（昭和 19 年）真冬の日、私は同僚の憲兵と「マルタ（丸太）」としか呼ばない中国人 2 人をハルピンの 731 部隊に汽車を乗り継いで連行した。車内で用便を申し出たので手錠のまま連れて行き開き戸式の車内トイレに入るときに、命令された通り片足がトイレのレール上に来た瞬間に力強くドアを閉めた。当然、片足は挟まれ傷つきはれ上がり、これで逃げることができない。はれた足に靴は履けず脱がせたが、汽車から降りると外気は氷点下 20℃の石畳に素足ではたまらない。飛び上がるように傷ついた足をばたつかせた。同僚の憲兵は「どうせ殺すんだ。構いはせん。」と言い捨てた。もう一人の中国人が着ていたシャツを素早く脱ぎ、二つに切り裂いて相手の足を包んでいた。あの時の中国人 2 人が私をにらみつけたものすごい形相は今でも私の目にはっきりと焼きついている。このように 731 部隊に連行された 3,000 人の「マルタ」には一人の生還者もなかった。





731 部隊の本部庁舎

やがて敗戦。シベリアで地獄の抑留生活を 5 年耐えた後、中国へ身柄を移管された。被害者側の中国に人々にとっては八つ裂きにしても飽き足らない私たち日本人に対し、私たちがどんなに反抗しても悪態をついても、ここにいた中国人たちは怒った顔一つ見せずに、いつもニコニコと応対してくれていた。病気になれば診察し、治療と養生をさせ、歯が悪い者には入れ歯を、目の悪い者にはメガネを、シベリアでけがや凍傷で足や手を失くしたものには義足や義手を作ってくれた。とても常識では考えられないことばかりだった。このようにして人間にはだれでも良心があるということを、事実をもって教えてくれたのだと思う。ここへ来て、私たちを監視し世話する中共軍兵士よりおいしい物を腹一杯食べ、労働もなく 4 年目に入った頃、私の罪業の取り調べが始まった。拷問で取り調べた私が、今度は取り調べを受ける立場となった。

いざ始まると、威嚇も強制の拷問も全くない。「自発的に自分の罪を認め、正直に書きなさい。そうすることによってのみ、明るい君の前途を開くことができるでしょう。」と言うのだ。この報復のない驚嘆すべき人道主義、温情主義は、かつて皇国民教育を徹底教育された精悍（せいかん）な私の心を徐々にほぐし始めていた。しかし、いざ自分の事になると「いよいよ来るべきものが来た。これは罠（わな）では。」と疑い、寝付かれない日々が何日も続いた。パン工場が建設されれば死体焼き場に見え、食欲もなくなり、昼夜の区別もはっきりしなくなっていた。完全なノイローゼだ。生き恥をさらしていてよいか、自殺した方がよいか、迷いの「罠」におびえる毎日だった。これは私だけでなく、ここにいる BC 級戦犯の全員が同じ思いだったろう。「罠」におびえ 2 人の自殺者が出た。1 人はクレゾール液を飲み、1 人は便所に飛び込んだ。

便所は穴を大きく掘り、板が渡してあるだけでプールのようだった。夏は排便をため、冬に凍ったのを掘り出して元の大きさに戻すのだ。自殺は夏だった。この時、信じられないことが起こった。監視中の中共軍兵士が私のタオルをもぎ取ったかと思うと、そのタオルで自分の目鼻をくくり、プールのように大きいドロドロの糞池（くそいけ）に飛び込んだのだ。ドロドロの糞尿（ふんにょう）の中を探し回り、探し当てて引き上げた兵士も汚物だらけだった。その兵士は素早く日本兵の口の中の糞を手でかき出したかと思うと、口をつけて人工呼吸を始めたのだ。私も含め 10 数名の日本兵は、あっけに取られて傍観者になっていた。医者が来る、看護婦が来て注射する、傍観者の私たちに「お前たちの仲間だ、兄弟だぞ。見ていないで手伝え。」とも言わず、糞まみれになり、懸命に蘇生の努力を尽くしていた。その様子を見た私たち日本兵は「明日は我が身」の感覚しかなかった。

テキパキと手段を尽くしたが自殺者が生き返ることはなかった。飛び込んだ兵士は亡骸に取りすがり「だれがお前を殺すと言った。どうして俺たちの心を理解してくれないのだ。」と号泣した。この衝撃は、私の自己防衛、私自身の「過去をどのようにして隠すか。」のノイローゼを吹き飛ばしただけでなく「もうこれ以上うそはつけない。」という気持ちにさせた。皇国民教育により、すっかり失われていた私の「良心」を呼び戻してくれたのだ。そして洗いざらい罪業を告白した。そうすると不思議と気持ちが楽になり落ち着きを取り戻すことができた。後で知ったことだが、時の中国の首相、周恩来（しゅうおんらい）が「今、ここで彼らに恨みを晴らしたら、日本の家族はまた日本を恨むだろう。我々は平和のために我慢しなければならない。」と話したそうだ。



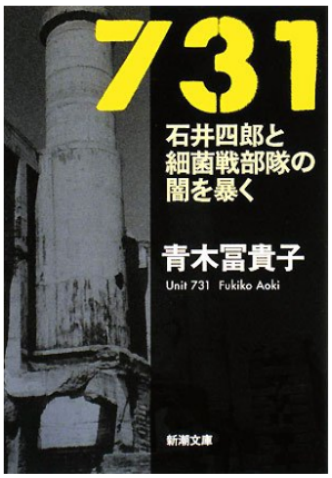
周恩来

1956 年（昭和 31 年）7 月、中国最高人民検察員は、日本人戦犯に対し「不起訴」という驚くべき措置を言い渡した。多くの被告たちは泣いた。命が助かったからではなく、自分の犯した罪への悔悟の涙だった。戦犯管理所は帰国前夜、盛大な送別の宴を催してくれた。その席で所長は、あいさつの最後を次の言葉で結んだ。

「苦しいこともあった。しかし君たちは自分の力で乗り越えた。我々はそのためのお手伝いをしただけのことである。日本に帰ったら家族団らんの生活を送って下さい。間違っても二度と侵略戦争に加わることのないように。」

私は何か恩返しと思いつつ、大きな罪悪の数々を中国大陸に残したまま、渡満 15 年目に帰国することができた。「命令だから仕方なかった。」この思いは最後まで残った。だからこそ、私を最後にして「あの時は戦争だった。命令されたから。」と言い訳する人を一人も出してもらいたくない。

戦争は一握りの偉い人が決め、責任は国民全部が背負わされるものだ。かけがえのない命と家族、財産を失うのは、命令を受けた国民だ。命令を受けた私の責任は、決して歴史の中からぬぐい去ることはできない。



シベリアと 7 年間の記録　～渡辺敬止の証言

現役は甲種合格。初年兵時代は怒鳴られ殴られ辛抱と我慢で、第一選抜で上等兵になり名誉の満期除隊。大府で歯科医をしていた 1941 年（昭和 16 年）に赤紙（召集令状）が来て行き先は王道楽土、五族協和、みんな仲好し平和な満州国（関東軍）。寒さを我慢したら命の保障は万全だとひとまず安心し、新京（しんきょう）部隊を中心に各地を移動。階級は初年兵から「神様」と崇（あが）められる上等兵。現役の上等兵へ「貴様、何年兵だ。」と静かに言うだけで一目も二目も置かれる古兵だった。

職業柄、衛生兵にされて医務室勤務。営庭隅の焼却場で古いカルテを焼いていたら中隊長から「ご苦労さん。」と「ねぎらい」の言葉をかけられ「渡辺は歯科医の衛生兵」と知れ渡る。歯の治療は抜歯ばかり。「液」はあるが「針」が少ないので同じ針を何度も使用。消毒は念入りにしたので予後の感染が皆無なのが自慢だった。

戦争も防戦が続き出動命令が出たが、私は「医系」なので原隊へ戻され、ここでも医務室勤務に。本部のあるハルピンや新京の医務室勤務も拝命した。衛生兵も医務室勤務も解かれ、元の兵営勤務に戻ると上等兵殿と「殿」を付けて呼ばれ、上等兵の古兵ともなれば朝晩、上げ膳据え膳、何らの干渉もなく、これほど気楽なことはないと思った。初年兵時代は地獄で早朝から夜遅くまで振り回され、娑婆（しゃば）でこれほど働かされたら一財産間違いないと思うほどだったので、できる限り初年兵には優しくしてあげた。



新京の日本橋広場

1944 年（昭和 19 年）頃、連隊本部付き乗馬小隊勤務。主に斥候（＝偵察）、連絡の任務で、訓練では裸馬を乗り回し満人集落へ行っては休憩。軍隊から持ち出した軍手や甘味品を満人と物々交換して楽しんだ。満人の家はオンドル暖房。一室に数名の女性がいて、女性が多い家ほど良家だとか。男子禁制でのぞくと無言で不安のまなざし。冬期は農業もできず家の中にこもっているだけだった。

軍隊の機密書類を私一人で、遠方の部隊へ届ける任務を与えられ、満州は親日平和と日本で宣伝しておきながら、実弾を装填（そうてん）した銃を携帯して出発。目的部隊への道も分からず方角だけで、地図も渡されず、大体の方向へ向け馬を走らせる。裸馬訓練での遠出が役立ち、途中に点在する満人集落へ立ちより道を尋ね、平原をひたすら走り、次の集落で道を確かめては西部劇さながら、撃たれても当たらぬよう身をかがめて草原を走り、やっとたどり着いたと言うのが本音だった。

任務を終え案内された炊事で休憩中していたら「渡辺先生。私です。」と軍曹があいさつに来た。かつて歯を治療したことがあり、この炊事の責任者だという。軍曹は部下にご馳走を作らせ、歓待すると言ってくれた。私も帰路は往路の 3 分の 1 の時間で行けると計算し、図太い古兵の貫禄（かんろく）が身に付いていたのでお受けすることに。炊事も衛生兵も軍隊では軽蔑（けいべつ）のまなざしを向けられていた。軍隊の一日はラッパで起床しラッパで消灯。食事も「炊事の野郎、いいところ食べて俺等に残飯食わす。」の歌詞がついたラッパ。将軍が食べるようなご馳走が出てきたので「食事ラッパ」の歌詞は本当だと確信した。衛生兵は「ヨーチン」と呼ばれ、傷はヨードチンキ、風邪はアスピリン、腹痛は胃腸薬だけで「1 銭 5 厘の俺らは、馬以下に扱われている。」と文句を言ったものだ。1 銭 5 厘は郵便はがき 1 枚の値段。上官からは「貴様らは 1 銭 5 厘のはがきで集められるが、馬は 1 頭で何百円だ。」と言われたものだが、馬は大切にされていた。

思いがけず超一級食をご馳走になり、帰路は来た道を快調に飛ばして時間を稼ぎ、少し疲れたので懇意にしている満人宅へ寄り小休止。これも古兵の役得で当然と思っていた。一方、私の部隊では、帰りが遅く日も暮れ始め、狙撃されたかと心配して捜索隊を出す相談しているところへ、私はルンルン気分で元気よく帰隊し、相手部隊長からの親書を隊長に渡し任務完了。行きはオドオド、帰りはウキウキ。ご馳走になったことも、満人宅の休憩も秘密にした。

軍医殿からお呼びの声がかかり出頭すると、私の乗馬技術と射撃を評価して、「遠方の部隊へ馬で往診する私を護衛してほしい。」と言う。命令でなく相談されたので、1 銭 5 厘でなく軍医と平等な接し方に対し快諾し感謝される。軍医護衛は重大任務なのか、兵器係軍曹と衛兵司令立ち合いで実弾を受け取り、両者の目の前で実弾を銃に装填し残余を弾倉へ収納する儀式を見て、軍医は「厳重な扱いだ。」と驚嘆。軍医の前になり後ろになり、馬を自在に楽しく操る。果てしない草原は見渡す限り百花繚乱（ひゃっかりょうらん）のお花畑だ。雪解けで始まる草原の野火の壮大な美しさと合わせ、狭い日本では見ることのできぬ壮観さだった。丘が近づけば駆け上がり双眼鏡で 360 度見渡し、「軍医の馬のほか、土埃（つちぼこり）なしを確認。」と報告。軍医は「私の命は、同じ医者の君に守られていることを実感した。」と喜ばれる。私は口で「任務ですから。」と答え腹の中では乗馬を楽しんでいた。



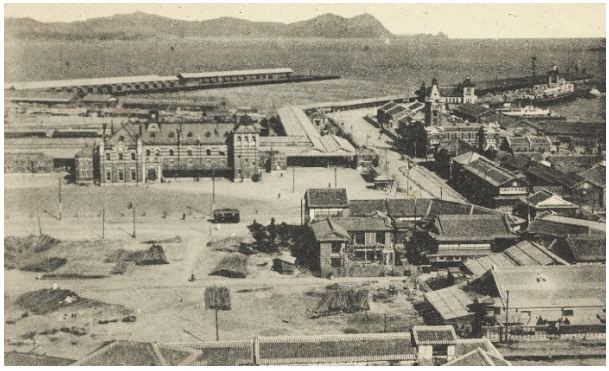
野火（春先に野原や土手などの枯れ草を焼く火、自然発火する場合もある）

満州は戦争もなく平和なので、訓練演習のほか定期的に中隊対抗の各種大会を開催した。勝者中隊は部隊長からお褒めの言葉を頂戴（ちょうだい）する栄誉ある一大イベントだ。射撃、銃剣術、柔道、相撲、短剣術、乗馬などで、関東軍の短剣術は返り返り血を浴びない必殺技と評価された。私は学生のとき柔道を学び、短剣術では相手の剣を払い組み付き、内股、大外刈り、背倒などで倒しとどめを刺す。相撲も柔道の技で勝ち、柔道と乗馬は敵なし。「柔ヨク剛ヲ制ス」の精神で下級兵士や同年兵からも慕われた。

1945 年（昭和 20 年）4 月、「極光」没収の動員が下った。関東軍は「極光」という銘柄のたばこを吸い、このたばこの空箱や吸殻で関東軍将兵の移動が判明するので満州外への移動時は防諜（ぼうちょう）のため没収された。日本本土も空襲の戦場に、満州以外は防戦一方の負け戦の修羅場なので、極光没収動員に、それなりの覚悟をして出動した。行き先も教えられず貨車はひたすら南下、新義州（シニジュ）を通過し釜山（プサン）まで一直線なので、釜山から日本へ米軍本土上陸の防衛だと分かる。釜山港埠頭（ふとう）は日本へ送る物資が山積。日本向け貨物船へ積み荷の中に砂糖の山を発見。偶然にも釜山駅駅長は知人の佐藤氏。これ幸いと軍隊の裏技も習得している古兵なので砂糖を人手。大府（愛知）へ送るよう頼む。これが、私が日本の家族へ出した最後の便りだった。



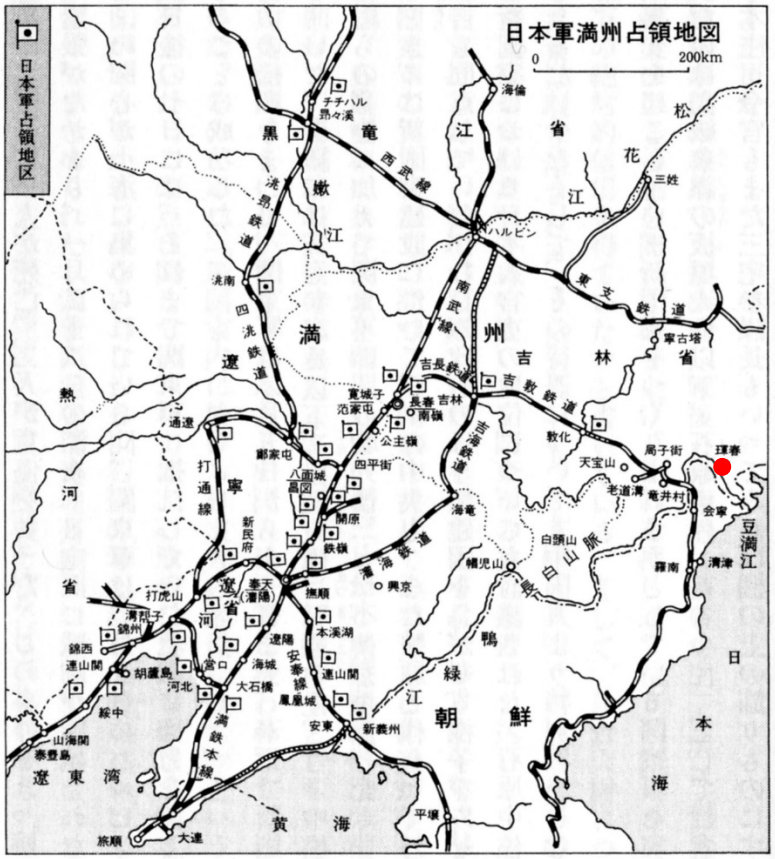
極光


釜山港埠頭

私はこの埠頭で大変な場面を見てしまった。下積みの兵隊の経験をしなくても将校になれる学徒出身の見習士官が、父親のような兵隊を激しく殴り、押し倒し、土足で蹴り上げ散々な暴力を振るっている。私と同じ部隊の将校なら一発で古兵たちの餌食にされる行為だ。「戦場では後ろから鉄砲の弾が飛んでくる。」とも言う。戦場でなくても私の知っている部隊で、明日満期になり満州から日本の家族へ帰る上等兵達が残る兵を集め「お前達には随分お世話になった。何もお礼はできないが、満期兵全員で相談して、それなりのお礼をさせていただいた。遠慮なく受け取っていただきたい。」と、何も置かず言葉だけ残して出発した翌日、近くの河から「暴力将校」が簀巻き（すのこまき）にされ、死体で浮かび上がったのだ。

釜山には本土決戦の兵隊たちが集まり過ぎテントが宿舎だった。1 週間ほどで乗船と残留に別れ、乗船組は敵潜水艦に沈められても、玄界灘を泳いで帰ると喜び、残留組は日本に帰れないので悔しい思いをして再び貨車に乗せられ、行き先も知らされず幾日も後戻りの北上。昼に到着すると「下車は暗くなる夜まで待て。」との命令が下った。

着いたところは「琿春（こんしゅん）」というロシア、北朝鮮の国境が地続きで集まる場所。昼は双方が望楼から望遠鏡で動向を監視し合い、日が暮れてから下車し兵舎に入った。昼は外出禁止。したがって軍隊なのに演習訓練はなし。外を歩くときは家陰や塀に沿って忍者もどきでソ連から見えないように歩く。夜になれば朝鮮独立党の勇士がソ連側との交信に色とりどりの花火のような信号弾を打ち上げた。武器弾薬は沖縄と九州へ送り、国境守備隊は武器もない丸裸で、代わりに丸太の大砲がソ連をにらんでいた。しばらくして在満の日本人が臨時動員され入隊してきた。武器もないのに人員だけ増やす軍隊特有の「員数体質」の犠牲者と同情する。



琿春

地続きのソ満国境で擬似の大砲に枯れ草を乗せ、ソ連領ににらみをきかせているのを見て「日本、負け近し。」と確信する。だれが言うともなく「日本は爆弾で降参した。」とのうわさが流れ、気が付くと部隊の将校が１人も姿を見せず消えていた。上官は部下に悟られぬよう行方不明になっていた。日本軍は最高司令長官大元帥陛下の指揮下に置かれ、陛下は部下の将兵に「戦闘激烈にして死傷続出し、あるいは紛戦を惹起（じゃっき）し、命令徹底せざるか指揮官を失いたるも自己の携帯する武器を信頼し戦闘を続行すべし。」と降伏せず戦えと命じているのに、突然指揮官が敵もいないのに敵前逃亡。軍法裁判で銃殺を覚悟しての蒸発か。残された兵は「携帯」する「武器」もなかった。兵器庫の武器弾薬は根こそぎ本土決戦に向け送り空き家同然。衣料庫は新品軍衣が満載。「武士は出陣に真新しい下帯」の故事に、気持ちだけでも習い全員新品に着替え、炊事で上等の食品から調理して食べた。命令系統喪失なのでだれかが「全員同じになろう」と提案。同意して階級章を外す。上官が「黒でも白。」と言えば無条件で従うよう体質改造された人たちばかり。「自分のことは自分で。」と心掛けた。

在満の臨時兵の何人かが、残してきた家族に会いたい一心で新品軍服を着て無断外出。途中、現地人に捕えられ丸裸にされ逃げ帰ってきた。馬に乗り家路に向かった者も馬もろとも捕えられるなど、兵の単独行は危険になっていた。琿春は朝鮮独立党の拠点らしく彼らは日本軍の小銃で武装し、自警団を組織しているとのうわさも伝わってきた。我々は関東軍なのに鉄砲もない。この有様に「満洲を足場に大東亜共栄圏建設の野望は崩壊し終焉（しゅうえん）を迎えた。」と私なりの解説をしたが、炊事の食べ物が底をつき、馬を殺して食べることになり「だれが馬を殺すか。」の話題にかき消される始末だった。

兵営の近くを流れている川を小型の自動車に定員オーバーで乗ったソ連兵が米国製の小銃で武装し列をなして渡ってきた。ソ連兵は発砲などの攻撃をせず、銃を高く上げ大声で「通過」。指揮官も武器も持たない私たちは「黙認」。ソ連軍が来てからも数週間、命令も、状況の情報も入手できないままの日々を過ごし、現地召集された兵や、朝鮮半島出身の兵は自分の判断で軍隊から離れていった。

私たちはソ連兵に集められ、野営をしながら数日間歩かされた。私たちはウラジオストックから乗船、帰国の希望で我慢して歩く。その内、私たちが持っている時計、万年筆、名刺サイズの鏡、つめ切りなど体中をむさぼる略奪が始まり、両腕に何個も時計を付けている者もいた。ソ連兵の持っている米国製の小銃は日本の単発銃とは比較にならない高性能品。「これでは日本は勝てない。」と思った。食事も米国製缶詰。ソ連兵は略奪した万年筆のインク補充や時計の見方を知らぬ者が多かった。



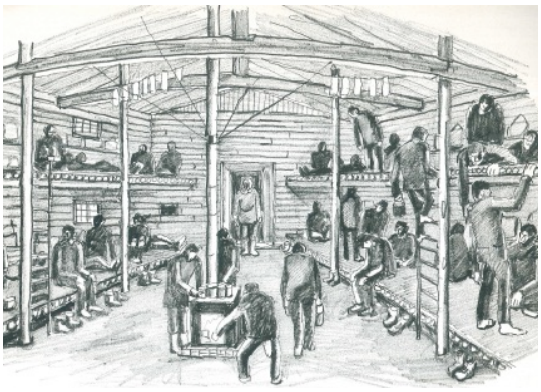
日本兵から略奪するソ連兵

「ジャポン・ダモイ（日本に帰る）。」の声に急き立てられて毎日歩かされ、テント村ならぬテント街に驚くほどの捕虜が集められた。帰国させるどころかソ連の各地へ送り込む基地だったのだ。家畜輸送貨車に乗せられ、途中、ハバロフスク駅も通過した。貨車では何を食べたかあまり記憶がないが、おそらく米国製の食料と残っていた日本の食料であったと思う。

コムソモリスク（ロシア極東部ハバロフスク地方のアムール川下流の都市）の収容所に入れられ、食事は黒パンだった。黒パンは皆さんが想像する小麦の黒パンでなく、燕麦（えんばく）の粗悪品。味は酸味が強く初めて口にしたとき「腐っている。」と捕虜全員が吐き出したほど。初めて見たとき、レンガかと思った。大きさはレンガの倍。頭の方が黒く長さ 1 尺（約 30 ㎝）、高さ 5 寸（約 15 ㎝）ほど。広々とした広野の真ん中に周囲を有刺鉄線で囲まれ、四隅の望楼には 24 時間の監視塔。丸太で組んだ粗末な建物、室内は 2 段式。広間は日夜ドラム缶で暖房の火をたくようになっていた。元々シベリアにはこのような建物が各所にあって罪人を入れて重労働を科していたが、この戦争で兵士にし、空き家になったので私たち捕虜を入れた。



コムソモリスク



2 段式の室内

収容所に入った頃には短い夏が終り、秋はないのですぐに酷寒、飢餓にさいなまされ、暗い内に起されソ連兵に「ダバイ（急げ）、ダバイ。」と小銃で背中をこづかれ伐採の重労働。一抱えもある松を地面も固く凍り滑る危険な足場で、2 人でノコギリを使い両方から引いた。倒したい方向の下段にナタで深く切り込む。思う方向に倒れず足を滑らしながら逃げる。倒した木の枝を打ち払い長さ 7 尺（約 2m）ぐらいに切り決められた場所に決められた高さのノルマになるまで丸太を積み上げる。ノルマ不足組は居残りして達成するか、断念して帰り食事を減らされるかの二者択一を選ばされた。



両側からノコギリを引く捕虜

監視兵は字も読み書きもできず、かけ算もできないのが多かった。彼らは1日中たき火に当たり、退屈のあまり捕虜を呼びつけ「片足で立っていろ。」と迫り楽しんだ。犠牲にされた組は労働力低下でノルマ達成が困難に。ソ連兵を憎まず矛先を「お前の油断が原因。」と仲間同士の争いに発展させる始末。皆さもしいと分かっているのに腹ぺこには勝てず、汚い言葉を浴びせののしり合う地獄だ。黒パン分配を筆頭に食べ物を公平にするため『ハカリ』を作り、全員が見ている前で食べ物を分け合った。多い少ないとうるさく騒ぐのは学歴の高い人たちだった。「衣食住足りて礼節を知る。(※)」正にその通りと思った。

※「衣食住足りて礼節を知る。」:

生活が楽になれば、自然に道徳心も生じ名誉を重んじ恥を知るようになる。



パンの分配

作業は20〜30人でチームを組む。別の場所に積んである丸太を失敬して積み上げ、ノルマ達成をさせたこともあった。緯度の関係で冬の日は3時を過ぎると日没。疲れて帰ると夕食と朝食のパンが1度に渡された。入浴、大の落とし紙、洗面歯磨きもなく、下着どころか衣服の着替えもなかった。今日が何月何日で、今が何時何分かも分からぬ奴隷以下の人間の尊厳を完全にはく奪された環境に放置された。夕食と朝食を一度に全部食べて寝てしまった。残しておくと盗られるのだ。夜の明けぬのに起され空腹の足を引きずる体に「ダバイ(急げ)。タバイ。」と急かされた。

伐採に入る前に白樺の幹の最下部にナタで切り傷を付け、したたる樹液を米国缶詰の空き缶に集めビタミン不足の足しにもした。松葉を煮込んで飲みもした。ソ連の軍医は女性だ。時々身体検査で健康状態を調べ就業の資料に提供していた。女性の前に全裸で立つのはセクハラなのか後ろ向きに立たせられた。「屁」でもヒッて軍医を吹き飛ばしたいが栄養失調で「屁」をヒル元気もなかった。

酷寒では伝染病は発生しないのかと思ったが、暖かくなってきたら吹き出るように伝染病が発生した。主力はシラミが媒介する発疹チフス。着替えもできない、着た切りスズメが血便を垂れ流し、糞にまみれで死んでいく地獄だ。毎日死者が積まれ死体の山ができた。だれもが皆、日本の親兄弟、妻、子供に会いたい。どのようなことがあろうが「会いたい。」という一心で強い精神力を作り出してみせると気力をもっていたのに、死ぬと通夜も告別もせず丸裸にして積み上げられた。私は「白樺の樹液」「松葉エキス」をなめながら「死線を乗り越えてみせる。」とがんばった。

皆より少し元気な何人かが、収容所食料庫の整理をさせられた。食料庫に入ったら白菜の山があった。皆、一言も発せず、黙々と白菜を剥いて食べる。寒冷地のためか糖分が多く最高の美味だった。飢えたウサギ以上の速さで食い荒らし、腹一杯になってから大笑い。おいしいものを腹一杯食べると争い合うことはないという実証場面だった。酷寒とはどんな寒さだろうか。貯蔵庫のジャガイモは収穫時と同じで凍っていない。馬ソリに積み収容所へ運ぶ間に冷凍されるのだった。卵はカチカチに凍っているので落としても少しひびが入るだけで割れなかった。

収容所付近には点々と家があり、シベリアへ送られた捕虜の監視員か指導員の住宅だった。この住人たちはとても親切で、疲れた重い足取りの私たちにカルトーチカ（ジャガイモ）やキャベツ（カブースカ）を笑顔で投げてくれた。私たちは「善意の捨て野菜」と感謝して頂戴（ちょうだい）した。それにしても想像してほしい。足元に投げられた食べ物を喜んで食べる人が、皆さんのお父さんであり、夫であり、わが子であり、弟、兄であったらと。だから戦争に反対しているのだ。

驚いたのは、収容所長の補佐役が日本人捕虜だったこと。満州にはロシアの共産主義を嫌い逃れてきたロシア人が大勢店舗を構え生計を立てていた。このロシア人相手に商売をしていた日本人も多く捕虜の中にも何人かいて、通訳として所長を補佐していた。ソ連は 8 月 9 日に参戦し 15 日、日本の降伏わずか 1 週間で戦勝国になり、ソ連の戦後復興を口実に 70～80 万人の日本人を拉致し強制労働をさせただけでなく、鉄道建設、森林伐採等シベリアの開発を強要させた。その仲介役にロシア語のできる捕虜が重要な役割を担っていた。捕虜より少しよい待遇に釣られて仲間の捕虜を苦しめ泣かせたのだ。今だに「やつらの悪行に時効はない。」と所在を探っている人もいるという。



枕木用の木を伐採しトラックに積み込む捕虜



製材された枕木を鉄道路線盤へ運ぶ捕虜

抑留中に 3 ヶ所収容所を変えられた。その都度友人と別れ、新しい友人に出会えた。その中で記憶にあるのは不思議と同郷の人達だ。A さんは曹長だったと思うが鳴海の人。私が「大府出身です。」と言うと驚き急激に親しくなる。B さんは瀬戸の人、上等兵で警察官だと言っていた。口癖は「自分自身が自分を守る。」で要領のよい人。C さんは体調の悪い年配者で、名古屋で役人をしていたとか。おとなしい軍曹は桑名の人。鈴鹿の山や東山動物園、大須の映画館等、共通の場所が話題を提供してくれ、一緒にダモイ（帰国）の火を燃やし合い、励まし合った。

「働かざるもの食うべからず。」の共産主義国家。一冬を越え、太陽の温もりが感じられるようになると同時に伝染病が蔓延（まんえん）。最初の頃は大丈夫だったのに、突然私は口腔内が赤くはれ上がり、骨膜炎を発症して、働く必要のないランクに入れられた数十名と、外の見えない幌付トラックに乗せられて休養所らしい場所へ移送された。医者はいても診察も投薬もないのが通常なので、ひたすら苦痛と我慢比べ。平屋の倉庫が休養所に使われ、栄養失調で衰弱した捕虜が一杯で、何一つ語ることもなく、一日中静かに寝ているだけだった。戦友たちがどこでどのような強制労働をさせられたかも話せないほど衰弱し、順番に死んでいく中、私は幾日か痛みを我慢する内に何の処置もしないのに治癒し、ありがたく感謝した。

ある日突然「病人の中で、自分一人で歩ける者だけ集まれ。」並ぶと「ジャポン・ダモイ。」だとうわさが伝わってきた。何とうれしかったことか。身も心も引き締まり、体の中からぐんぐん力がわいてきた。トラックから汽車に乗り継ぎ、長い日数をかけて下車し、更に数十日待機させられる内「ああ、まただまされたか。」と不安になってきた。各方面から集められた病人捕虜はウラジオ軍港で日本の貨物船らしいのに乗ったのに、迎えに来るはずの日本の役人も、日本の船員も乗っていなかった。便所の近くまで乗せるだけ乗せ、病人で満杯の船が出航。着いた港は北朝鮮の興南（こうなん）だった。ソ連は不要になった病人を他の国へ押し付けたのだ。私たちはまたしてもだまされた。

持ち物は飯盒（はんごう）に毛の抜け落ちた荒い毛布 1 枚のみ。栄養失調の身にはこの毛布が重くて歩くのにも息絶え絶え。やっと下船し、だらだらと集まり、だらだら歩き、あたりが暗くなってきたので小川の流れている野原で小休止。皆、川の水を飲んだり、顔や体をふいたりして一息入れた。少しして赤レンガの建物に収容されたが、付近一帯は家もなく荒野だった。日本に帰るとき、再びこの道を通ったら、この川は赤レンガ収容所の下水排水路だったと分かり身震いした。この興南収容所でも外に出ることはなく、収容人数すら分からないが、大勢の捕虜がだれ一人として談笑する元気もなく横たわった状態で、死を待つ人たちの集まりとも思えるほどだった。

死者が出ると頼りないが歩ける私たち 4 人で死者を毛布で包み、戸板に乗せて裏山へ運び合掌して置いてくるのだった。どこのだれか名前も分からず、死ぬ人の多さにだれも驚かなかった。診察も投薬もなく、末期の水を飲ませる人もなく、大勢の人がだれにも見取られずに死んでいった。満州で敗戦を迎えたというだけで、ソ連の戦後復興に身をもぎ取られた人々の死。私たちはこの興南収容所を日本兵送還最後の選別所だと認識していた。

興南港から今度はだまされず佐世保に上陸。アメリカ兵が DDT（強力殺虫粉）を頭から浴びせる乱暴な扱いを受けた。消毒、身体検査、諸手続後、私は入院を拒否し一路、故郷へ向かう復員列車に乗り込んだ。



佐世保港に上陸する引揚者

日本の各港に引揚者が上陸したが、引き揚げの史実を残す「引き揚げ桟橋」が舞鶴に復元されたので訪ねた。分かったことは「こだまする　引き揚げ船の海鳴りに　天地も裂けよ　今君帰る」と詠んだ女性を中心に舞鶴の女性たちが生還者を迎えたこと。女性たちはだれよりも早く遺骨に涙し、生還者らに「よく生きて…。」と喜びとねぎらいの言葉をかけたそうだ（詳しくは第 17 章を参照）。



舞鶴に復元された引き揚げ桟橋

私たちは迎えもない静寂の中、夢に見た祖国の土を踏み締めた。シベリアで倒れた戦友の分もと。

ソ連法廷で政治犯 25 年刑　～篠田恒の証言

私は 1945 年（昭和 20 年）5 月、第六国境守備隊歩兵十中隊に現役入隊し、3 ヶ月後に敗戦。9 月は 60 万とも 70 万とも言われた捕虜の 1 人として、シベリアの広大な畑で野宿しながらジャガイモ堀りをソ連兵に監視され強制労働を強いられていた。9 月は雪が降る。急性肺炎で倒れ、テントに収容され、多田軍医の手当てで一命を取り留めた。兵隊 3 ヶ月で敗戦。捕虜になるために軍隊に入ったようなものだと自嘲（じちょう）していたが、よもや自分が「最後の日本兵」になるとは思いもしなかった。

12 月に突然、政治部から呼び出しがあり、前職の満州国刑務官の職歴がばれたようだ。牢（ろう）には特務機関の永井兵長、同僚だった安藤警佐もいたが以心伝心で互いに目も合わさず話もせずに知らない振りをした。2 日間取り調べられ 3 日目から営倉に入れられ更に厳しい取り調べを受けた後、アラチカ捕虜収容所で炭坑夫にさせられた。1948 年（昭和 23 年）2 月、炭坑で負傷しライチハ病院に送られ 1 ヶ月で退院。ライチハ捕虜収容所に入れられ今度は石切作業をさせられた。

前職でつるし上げられる

捕虜から共産主義者に転向したアクチブが台頭し、憲兵、警察、特務機関、教師、公務員などの職歴をもつ者を標的につるし上げが始まり、ただならぬ気配を感じていると、案の定、目標にされ、広場でつるし上げられた。「すべてはソ連に話してある。」と黙秘で対抗したが、やつらはますます狂気じみて迫ってきた。中でも A は声も大きく赤旗をかざし、目を輝かせてリーダー的役割を果たしていた。日本に帰った A は演歌歌手として名を成したが、あの時の勝ち誇った面構えは今も忘れない。毎日がつるし上げで A らは「24 時間闘争」と称して順番を決め、私に 24 時間張り付き、朝、昼、晩「資本家、天皇制の飼い犬、番犬。」と罵詈罵倒（ばりばとう）（※）を私に浴びせ眠らせなかった。つるし上げられた者たちが発狂し自殺すると「白樺の肥やしができた。」と足蹴（あしげ）にしていた。

※「罵詈罵倒」: 汚い言葉で悪口を並べ立てののしること。

ハバロフスクで裁判を受ける

明けて 1949 年（昭和 24 年）2 月、山川警尉と二人でジープに乗せられ、ハバロフスク 7 分所に入った。いきなりアクチブから「今日きたやつらは敵か味方か見分けて本質をつかめ。」とアジられ、針のむしろの上にいるようだった。「同じ日本人のよしみ」など期待できない。そんな甘っちょろいものは一かけらもなかった。

3 月 8 日、ついにハバロフスク監獄に入れられた。厳重な身体検査で、服のボタンは全部むしりとられ、紐類、金属類もすべて取り上げられたが、なぜかたばこだけはよかった。10 畳ほどの部屋にギュウギュウ詰めで、15 歳くらいの不良少年が新入りの持ち込んだ食料、たばこを巻き上げていた。まさに百鬼夜行。巻き上げた食料やたばこは牢名主（ろうなぬし）が取り上げて全員に配分する。この牢名主は日本人の私に好意的でよくしてくれた。収容所では A たちアクチブに「民衆の敵、労働者、農民の吸血鬼。」とつるし上げられ、ノルマ達成でくたくたなところに睡眠妨害までされたが、監獄では敵であったロシア人から同情されて睡眠も充分に取れた。




ハバロフスクでの裁判

同室のロシア人は、ウクライナや中央アジアから 1 ヶ月かけて連行された者が大勢いた。ここは監獄ではなく、難癖をつけて逮捕して囚人の烙印（らくいん）を押し、シベリア全土の強制労働所に配分しタダ働きさせる「囚人製造所」であることを皆が承知していた。当時の囚人の数は 3,000 万人とも 4,000 万人とも言われる。

次に「未決監獄」に。幸い小部屋で、元憲兵の梅沢、機動部隊長の水島少佐、奉天事件の石川信一と牢名主のウクライナ人がいた。6 時起床、10 時消灯。黒パン 300 グラム、塩汁一杯の監獄生活が続いた。その間、一度だけ取り調べを受けたが裁判の下準備のようだった。ここから監獄車に乗せられ 30 分ほどの内務省の一室で政治部の少尉が「これから裁判を行う。」と宣言。小部屋には陸軍中野学校出身の江角、佐藤、西畑の各大尉。元憲兵の岡本、萩原、西と会田老人がいた。私は「兵籍 3 ヶ月の二等兵だ。」と話すと、この人たちは「なぜここにいる。」と同情してくれ「お前は、つるし上げのせいでソ連の標的にされたのだ。」と教えてくれた。

裁判は判を押したように一律 1 人 20 分で「25 年の刑」が宣告された。部屋の真ん中の机に裁判長の少佐。片方の机に検事の中尉 2 名と通訳。扉に剣付き鉄砲の兵が配置され、弁護側は空席で裁判が始まった。

型どおりの本人確認が済むと、通訳を無視して罪状をペラペラ読む。私が理解しているかなどお構いなし。5 分も抗議したのに通訳は「ニズナーユ（知らない）。」と 2 秒のロシア語に訳して判決に入った。罪状は「スターリン憲法 58 条の 4 項、資本主義援助罪に該当」とのこと。まったくばかげているがこちらの言い分は通用しなかった。

収容所の雑談で「前職は先生。」と言うと「小国民を軍国主義者に教育した。」となり「役場の小使いをしていた。」なら「国家権力の片棒を担いだ。」「会社の係長。」と言えば「部下を搾取した。」とアクチブにつるし上げられ資本主義援助罪に処せられた。アクチブは狡猾（こうかつ）な手段でつるし上げの標的探しに躍起になっていた。私は生きて日本に帰ったらアクチブを一人ずつ探し出し、殺して回ろうと思ったほどだ。

政治犯 25 年の威力

この要領で「25 年囚人」が次々とでき上がり私は「既決監房」に。ここは大部屋で日本人ばかり 40 数人がいて自己紹介した。「獄舎では『25 年の政治犯』と言えば、ロシアの囚人も一歩引き尊敬される。」と先輩各位が教えてくれた。あるとき使役で未決者の部屋に修理に行き、この部屋の大男のロシア人からたばこと黒パンをせしめた。やせ細った我輩でも「政治犯 25 年の肩書の威力はまんざら捨てたものではない。」といばったものだ。1 ヶ月程で体調を崩し地下の保護室へ移され、食事は病人食で量の少ないのに閉口した。

好々爺（こうこうや）　田辺老人

保護室の住人は、アカバ特務機関の竹原中佐。樺太師団（からふとしだん）参謀の鈴木大佐。ハルピン特務機関の田辺老人。田辺老人は、四国松山の人で、日露戦争の日本海海戦で撃沈されたロシア巡洋艦ナヒモフの艦長が収監された松山捕虜収容所の売店で働いていたときに、その艦長にかわいがられ、艦長が帰国の際に同行。ウラジオストックを拠点に、アリューシャンからカムチャッカの極東の各都市を巡って大もうけをしたが、ロシア革命で丸裸になったという経歴の持ち主。この老人は同室のロシア人の手紙を代筆したり、文字や文法、計算まで教えたりして、ロシア人から尊敬されていた。この語学力を買われ、特務機関員にされたということだった。

収容所流転の旅の始まり

5 月中旬、日本人の既決囚が集められ、二手に分かれてホロ付きトラックに乗せられた。私は 5 分所に収容。そこには日本人捕虜が 300 人ほどいた。この捕虜たちは格好のつるし上げの餌食（えじき）が舞い込んできたと喜んだが、我々は「札付きの囚人集団」として別棟に入れられ、出入り口は武装ソ連兵に 24 時間監視された。しかし空気までも遮断することはできず、連日連夜、彼らの罵声（ばせい）が棟の四方八方から飛び込んできた。よくも飽きもせず赤旗を振り「インターナショナル」を歌い「スターリン大元帥陛下、万歳。」と大声で叫び続けたものだ。我々を「生きて日本に帰すな。」と絶えずののしっていた。

我々は、ソ連の一方的な判決で 25 年間のタダ働き囚人。働けば認めたことになるので、できる限り「就労拒否」に出て集合時間に遅れ、作業はノルマ無視でダラダラ手抜きをした。5 分所の他の捕虜はノルマ達成に名誉をかけて働いていて、時折、彼らと遭遇するとにらみ合った。

6 月に第 2 団が入所、奉天事件の連中が主力だった。第 2 団に続き続々と入所してきた。スターリン憲法 58 条の裁判が軌道に乗り、快調に動き出したとみえる。そのため私たち囚人だけが 6 分所に移された。ここは資本主義援助者の烙印（らくいん）を押された囚人だけで静かだったが、環境と待遇は罪人の監獄食だった。25 年タダ働きさせられる連中が続々と入ってきた。

主な人たちは、木下英明大佐を始めとする機動部隊の一団。報道部長の長谷川宇一。私の直属上官、独立混成第一三五旅団長の浜田十之助。浜田少将に「私も六国です。」と言うと、少将と二等兵で面識もないのに「よく生きていてくれた。」と涙を流して喜んで下さった。後に少将は高齢のため、脳溢血（のういっけつ）で死亡した。日ソ戦の直前、日本の参謀本部から出張してきた板間訓一少将。朝鮮軍の川目太郎少将。満州国外交部次長の下村氏。満鉄幹部の山本幡男氏。山本氏は「収容所からきた遺書」で広く国民の知るところとなる人物だ。

そして浅原正基が入ってきた。浅原は自分の名前を「諸戸文男（モロトフ）」（※）と読めるように改名し、捕虜を共産党員に洗脳する「日本新聞」の最高責任者になったアクチブ誕生の張本人。70 万人の捕虜の頂点に君臨し「シベリア天皇」の異名を冠された人物である。アクチブ同士の抗争につるし上げられ「25 年囚」の判決を受けてきたのだった。ここにいる人たちは浅原一派のつるし上げで「白樺の肥やしにするぞ。」とアジられた人ばかりだ。浅原と同室の人によると、ヤツは昼も夜も「殺しの死者」が来ると怯（おび）えて自殺を企てたという。

※「モロトフ」
ソビエト連邦の政治家、革命家。ソビエト連邦首相、外相。第二次世界大戦前後の時代を通じてスターリンの片腕としてソ連の外交を主導した。



収容所から来た遺書



モロトフ（左）とスターリン（右）

シベリアで 5 度目の冬が来る頃、瀬島中佐が入ってきた。ここ 6 分所は囚人捕虜ばかりだが、ソ連に激しく抵抗する者だけ収容所の中を更に柵で囲んだ。私もそこに入れられたが、抵抗運動はますます意気軒昂（いきけんこう）になる。早く帰国したい者はソ連に忠誠心を見せようとしていたが、我々は抵抗することに生きがいを感じていた。

労働囚人だから働かされる。アメリカから戦争中にタダでもらった大型軍用トラックに 80 人ずつ詰め込まれ、厳寒の飛行場建築に借り出された。途中 20 分所の前を通るが、ある日、警戒兵が「20 分所の捕虜は元気よく歌を歌っている。お前たちも歌え。」と言った。トラックを止めて聞くと 4 列縦隊でスクラムを組み庭内を行進しながら「労働歌」や「革命歌」を大声で歌い、赤旗を振って気合を入れているヤツも見えた。私たちは「よし。」とばかりに「歩兵の本領」「関東軍の歌」の 2 曲を「軍歌演習」の要領で歌った。20 分所はあっ気に取られて静かになった。警戒兵は「お前たちの方が声が大きかった。」と喜んでいた。後に 20 分所から来た者に聞くと「偉く勇ましい連中がいるものだ。」と感心し、赤旗組はますます「反動責め」に躍起になったそうだ。



反ソ、反共デマの粉砕を訴えるデモを行う捕虜

囚人食から捕虜食に格上げ

2 月になった。突然、囚人食から捕虜食に変わり量が増えた。量を増やし体力をつけさせる理由が不気味に思えたが、量が増えたことはうれしかった。うわさでは囚人だけが残され、他は帰国したらしい。我々50 名は 5 分所へ。他は 21 分所へ移され、他に中国へ B 級 C 級戦犯として送られた者もいた。また、他の収容所の強行分子が 1 人、2 人と入ってきた。その中に内山大尉がいた。彼はコタバル上陸戦の勇士で、博識、見識は大変なものだった。私は和歌、俳句をこの人から学んだ。彼は女流歌人「生方たずゑ」女史の義弟にあたり、帰国後 3 ヶ月、沼田市の家に招かれて美食飽食で体力を回復させていただいた。

キラ星のごとき将軍集まる

朝鮮戦争が 1951 年（昭和 26 年）に勃発（ぼっぱつ）した。市内は平穏、我々の労働拒否運動だけは活発である。4 月に 21 分所に移る。奥地の収容所からも相当数が送られてきた。皆、スターリンに犯罪者にされた犠牲者で、他は全員、日本に帰ったようだ。そして、ここから中国へ戦犯として送られる者も大勢いた。

団長に瀬島中佐を選び後宮（うしろく）大将（旧宮家)、第 2 航空司令官の原田宇一郎、第 5 軍司令官の清水規矩、107 師団長の阿倍孝一、119 師団長の塩沢清宣、123 師団長の北沢貞次郎、135 師団長の大田貞昌、参謀の川目太郎、板間訓一、河越重定、旅団長の野村登亀江、ノモンハン戦闘機隊長の野口少将、朴中将。文官では黒河領事の三井、樺太警察部長の尾形、外交部次長の下村、吉林警務庁官の木村。この次に、連隊長、部隊長、大隊長、中隊長クラスがずらりとそろっていた。この 21 分所を「ハバロフスク派遣軍司令部」と言った人がいた。そんな中に二等兵の私もいた。

班長の川岸大尉は中隊長で、羅南（らなん）に上陸したソ連軍を全滅させた指揮官である。作業に出され、休憩中、ロシアの囚人労働者と話していると、彼は羅南上陸戦の一個大隊の一人だったという。猛烈な日本軍の反撃で彼の部隊は壊滅し、数名が生き残ったが、負け戦の罪で囚人にされたと話した。「昨日の敵は今日の友」で互いに共通の敵スターリンをののしり合ってきたと話してくれた。

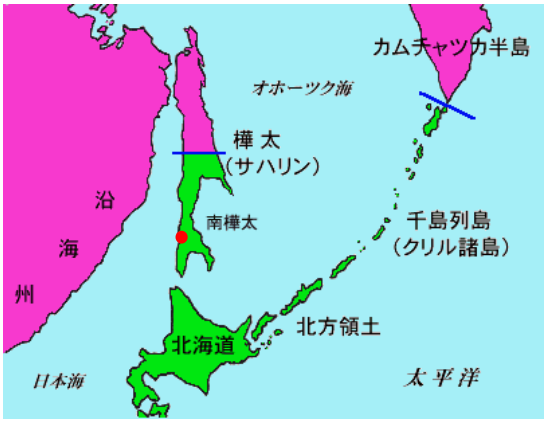
哀しき葬儀

抑留も 6 年目。表君が帰らぬ人となった。浜田旅団長も 1950 年（昭和 25 年 8 月）に鬼籍に入った（＝亡くなった）。ソ連は葬儀を認めなかったが、反骨精神の精鋭ばかりで強行した。斎場は何と風呂場。祭主は後宮（うしろく）大将で厳粛に執り行われた。あの葬儀が本当の離別の葬儀だったと今でも思う。

飛ぶ鳥も落とす高位高官も「瀕（ひん）すれば鈍（どん）する。」（※）のことわざ通り、インテリはたちまち落ちぶれ、士官学校出のエリート将校の非常識、世間知らずのだらしなさは見るに耐えなかった。それに比べて、たたき上げの将校、農民、あるいは徒弟制度経験者の忍耐力、生活力のたくましさは際立っていた。しかし「衣食足りて礼節を知る」（※）で、一応、衣食が満足すると、俄然（がぜん）学問見識が光を放つ。

※「瀕すれば鈍する」：人は貧乏になると、利口な人でも愚かになるということ。
※「衣食足りて礼節を知る」：
人は生活に余裕ができて初めて礼儀や節度をわきまえられるようになるということ。

白髪の小林大佐は、樺太（からふと）の真岡でソ連軍と大激戦を交えた人とは到底思われず、石井氏も北方民族オロッコ出身とは、本人が言うまでだれも思わなかった。カント、ニーチェ、西田哲学や科学、文学、経済、政治と知識のある人の話を聞くことができた。牧参謀の駐独時代の話、板間少将、長谷川大佐らの洗濯場での「俳句会」など、今にして思えば、この時期が「地獄の中の楽園」であった。この俳句会での自作を披露する。





樺太の真岡

極寒に　耐うべきことは　皆耐えて
わめく者ありて　獄舎の夜は更ける
監房の壁に　爪にて　吾が名　刻む
死すべき国あらば　それまで死なれず

諸将軍と別れる

1951 年（昭和 26 年）秋、突然、将官たちが他の施設に連れて行かれた。金田一博士にも劣らぬ文学者の阿部中将、「敗軍の将、兵を語らず。」（失敗した者は、それについて弁解するものではないということ）と言ったキスカ島司令官の峰木中将、飛行機の話には目の色が変わるノモンハン戦闘機隊長であった野口少将、軍政家の塩沢中将、戦略家の板間少将、孫呉師団長の北沢さんも去り、21 分所も秋風とともにさびしくなった。

将軍たちは捕虜協定で労働免除だが、私が「労働拒否」して所内をブラブラしていると気楽に話しかけてくださり雑談もした。私が「ここでは一兵卒だが、ロシア人がいる普通の監獄なら、政治犯 25 年といばって牢名主となり、ロシアの囚人からたばこやパンをせしめることができる。」と話したら「たばこが無くなったら取りに来い。」と言って「パピロース」（高級たばこ）を下さった。

日本から励ましに来ても

帰国の話も立ち消え、希望もなく漠然とまた年を越し、発狂もせず、よくがんばっている自分自身をほめながら暮らしていた。1952 年（昭和 27 年）初夏のある日曜日に「今日はどうしても作業に出ろ。」と詰め寄られた。あきらめの早いヤツは整列して待っていたが「日曜日に働けるか。」といつものように拒否。しかしその日はやけに強行だった。「何かあるな。」と勘ぐったが分からぬまま不平タラタラで作業に出た。

帰ると病人から「日本から参議院議員の高良トミ女史が来た。」とのこと。ソ連側は「元気な人は魚釣りのレクリエーションに行った。」と説明したそうだ。その病人は高良女史に「あなたが来るので、話をさせないようにするため、日曜日だが全員を作業に出した。」と直接伝えたそうだ。「我々を帰すつもりなら会わせるはずだ。」「帰国させる気がないのだ。」と憤りノイローゼになる者が増えた。女史が帰って 1 ヶ月後、女史の手紙が通訳により発表された。「命を大切にがんばって下さい。」とはあったが「帰れます。がんばれ。」とは書いてなかった。

帰国始まる

日本から政治家がはるばる励ましに来ても一向に帰国できる気配はなく 1 年が過ぎた。1953 年（昭和 28 年）の夏、シベリアに強制連行されて 8 年が過ぎ、辛抱も限界となり前途を悲観したのか松野君ら 4 名が脱走して逮捕された。団長であった木村氏も責任を追及され、1 ヶ月の禁固刑に処せられた。脱走騒ぎも落ち着いた頃、初めて少数の第一次帰国者が発表された。帰国は 1956 年（昭和 31 年）までの 3 年間に 13 次まで数えたから、本当に少数ずつの帰国であった。帰国者は残された者の家族に「生きている。」と伝える通知者でもあった。

日数を計算し家族からの便りを待ったが、なかなか届かず、やはりソ連方式だと半ばあきらめた頃に日本から便りが届いた。ソ連側は一人ひとり一室に呼び込み、もったいつけて手渡した。特ににらまれている者には嫌味と脅迫を加えた。後日、この便りは1ヶ月前に届いていたと分かり私たちの計算は正しかったことを証明したが、1ヶ月も隠された間に死亡した人もいたので強行に抗議した。

私には3回目で届いた。懐かしい筆跡の一行一行。読むうち、涙があふれて出て読めない。8年振りで知る家郷の様子。長男と次弟は無事に復員（＝軍隊から戦後、帰ること)。次兄と姉は病死。3兄はインパールで戦死とあった。その夜は一睡もできなかった。また、一時帰国者の数人が、私の消息を伝えて下さっていたこと。伊藤氏は拙宅を探し訪ねて、詳細を伝えて下さったことなどが分かり感謝している。やがて小包も届くようになり、私には長野県の家から来た。心のこもった品々と食品は分け合った。写真も来た。老いた父母、成人した弟妹たち。私は子供のようにはしゃいでいた。

録音で家族の励ましの声を吹き込んだものもあり、バラックの中で聞くと、途中でだれもがうめき声を出し「やめてくれ。」と叫ぶ。家族の悲痛な声、切ない訴え、幼い子のあどけない歌声。私たちの気持ちはかき乱れ、断腸の苦しみだった。とても全部を聞くことはできなかった。この小包も、ソ連側は恩を着せ、入っていた新聞、雑誌、手紙、風景写真は全部没収した。押収された品々は小包で送られてきた物品で買収して取り戻すなどして、日本国内のことはもちろん世界情勢も分かってきた。

こうした中でも、ソ連側にへつらう者と、そうでない者との溝がますます深まっていき、1954年（昭和29年)、9年目の夏を迎えた。

社会党代議士来る

1954年（昭和29年）夏、6分所の全員が移ってきた。この中に、渡満以来、お世話を受けた岡事務官をはじめ、知人が10名ほどいて旧交を温めあった。また、朝鮮、中国、蒙古人も30数名いたが、主力は朝鮮の人で、ほとんどが20代の青年であった。彼らは共産主義教育や赤軍に反抗し、戦後、カムチャッカ方面へ強制連行されて「札付き」の囚人として送られてきたが、中々の好青年たちばかりだった。

夏のある日、作業から帰るといつもと様子が違う。ソ連側も何か忙しそうだ。翌朝、作業出動時間になってもだれも集まらず休みとなった。午後、日本から社会党代議士が来て広場の演台に並ぶ。野溝勝氏が代表で穂積七郎氏があいさつし戸叶里子女史が激励の言葉。我々も意見を述べた。馬場大尉は朝鮮、中国、蒙古の人たちを即刻、それぞれの国に送還せよと訴え、議員も努力すると約束。家族への手紙を委託する者もいた。私たちは全員の名前で国会宛に一文を託したが、なぜか社会党議員たちは国会に提出しなかった。その後、帰国した者が「国会引き揚げ委員会」に問い合わせて、その事実が判明したと知らせてきた。社会党にはほとほと失望した。

ノルマ事件発生

第一次帰国者からの手紙、小包で日用雑貨、食料、衣類が到着。代議士の来訪で全員帰国の光も見え出し、気持ちにゆとりが出てきたが、ソ連当局は依然としてかたくな態度。相変わらずノルマ、ノルマで追いまくるばかりだ。「初年兵と菜種油（なたねあぶら）は絞るだけ絞れ。」の魂胆か、病弱者まで駆り立てて作業人数を増やし、ノルマを達成しないと本人はもちろん責任者も処罰された。

これが、1945 年（昭和 20 年）から 1954 年（昭和 29 年）の今日まで延々と続いていたので不平不満も頂点に達していた。チーシン中尉が作業責任者に辛くあたり脅すのを見て、大堀君が斧で中尉に一撃を加え、数メートルのクレーンに駆け上がって片方の手を切り、腹に巻いていた白布を血で「日の丸」に染め、「海ゆかば」を歌って自決を図った。馬場大尉が後を追い、抱きしめて一命を救った。大堀君は逮捕され、他の作業抵抗者と共に別の収容所へ移っていった。私の帰国は、1956 年（昭和 31 年）。最終船の船上で大堀君と再会した。本当にうれしかった。

日本からの品物で殺傷事件発生

1953 年（昭和 28 年）8 月、第一次帰国後、日本との文通は回数も文面も厳しい制限ながら功を奏し小包も希望品が届くようになった。最初は軍隊の慰問袋と同じように甘味品が多かったが、味噌、醤油、たばこ、缶詰などが来るようになり、マホルカ（ソ連の最低たばこ）を吸う者はいなくなった。厚生省からは 1 人 2,000 円ほどの小包が届き、朝鮮、中国、蒙古の人たちと分け合った。ドロップは一粒ずつ作業現場でラボーチ（労働者）になめさせ、美しい缶は子供たちにあげた。ソ連将校のご婦人は夜会のダンス用に「軍手」を欲しがった。ハンカチーフと風呂敷（ふろしき）は高価で売れ、それを資金源にウォッカを購入した。

日本から送られてくるハンカチーフ、風呂敷は、ソ連婦人の最高級品として垂涎（すいぜん）の品物。ロシアの女性は子供の頃から頭に布を頬かむりする風習がある。入ソした頃は褌（ふんどし）を頭にかぶり、颯爽（さっそう）と歩いている女性もいたが近ごろは見なくなった。だれかが使用法を教えたと思う。風呂敷は絹で、絵柄もよく、スカーフと勘違いしていた。絹の靴下に負けない誘惑心を女性に与えているこの品を、下級兵士に無料配布すれば、何でも言うことを聞いてくれた。

このことを快く思わぬ者がいた。ソ連軍の走狗（そうく）（※）アクチブである。彼らはソ連に魂を売った連中でソ連当局の側に立ち「虎の威を借る狐」（※）で「理論闘争」と称して警備兵を味方に「民衆の敵、資本主義国家の物品で、祖国ソ同盟の国民を懐柔させている。」とアジった（※）。リーダーは元憲兵軍曹の藤松、団長の吉田昭男その他数名で、これに「強い方につけば何とかなる。」と考えている者が多数いた。「作業拒否」で自分の右指 5 本をすべて切り落として抵抗している李君が斧でやつらに襲い掛かり、藤松は顔面を切られて絶命。吉田と張は顔面に重傷。顔面だから後ろからではなく正面から襲撃したのだ。他は難を逃れ一時騒然としたが個人の恨みだけが更に深まり、しばらくして浅原一派はどこかへ連れて行かれた。おそらく浅原は身の危険を感じソ連側に頼んだのだろう。

※「走狗」: 他人の手先になって使われる者。
※「虎の威を借る狐」: 権勢を持つ者に頼っていばる小者のこと。
※「アジる」: 自分の考えに同調して行動するように過激な言葉でそそのかす。

ソ連相手に作業拒否闘争に突入

1954 年（昭和 29 年）も終わる 12 月、我慢も頂点に達して自然発生的に「作業拒否」に出た。今までは私のように「働けば罪状を認めたことになる。」と個人闘争していたが今度は一致団結したのだ。「長」に瀬島中佐を選び「無抵抗」の抵抗を主旨とした。ハンカチーフや風呂敷で買収した下級ソ連兵を連絡員に使い、3 分所、21 分所もストに入った。

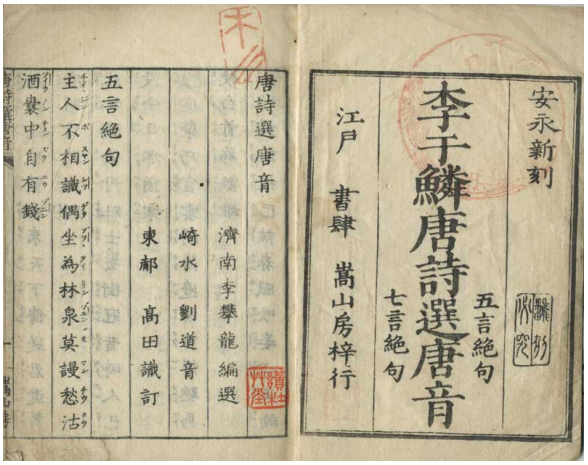
モスクワの共産党本部、最高議会議長、スターリン首相、赤十字社に、人権を無視した労働をテーマに善処を要求する陳情書を提出して様子を見ることにした。そして 1955 年（昭和 30 年）の元旦を迎えた。元旦は、日本の家族から正月用に送られた品々を飾り、送ってきた食料品を出し合い祝った。時間が充分にあるので経験者の講演会を開いた。木下大佐のパレンバン・インパール作戦、斎藤大佐のノモンハン戦、末広大佐のガダルカナル戦、松岡中佐のコタバル上陸戦、上野領事のドイツ軍侵攻時のワルシャワ脱出、香川氏のモスクワ特派員時代のスターリンの粛清、瀬島中佐の宮中皇室皇族の内情や、太平洋戦争開始前後の内閣、軍部の状況など、どれも貴重な内容だった。

厳冬を乗り越え、もうすぐ春だと南風が教えてくれた 3 月 15 日未明、突然「敵襲。」の声で全員が飛び起きた。ソ連兵が手に手に棍棒（こんぼう）を持って塀を押し倒し、四方から襲いかかってきた。指示通り、無抵抗で寝台や柱にしがみつく者。バラックの収容所がギシギシ揺れた。上着とズボンを脱いで寝ていた姿のまま、一人ひとり担ぎ出されてトラックに詰め込まれる。見ると消防車数台も待機し、投光器は昼間をあざむく明るさだ。これが「陳情書」の返礼だった。モスクワから派遣されたバチコフ中将が 3,000 名の兵を指揮して襲ってきたのである。捕らわれた私は「断食闘争」を宣言し抵抗したが、パイプを口に押し込まれて強引に流動食を流し込まれた。

事件が一段落すると少数だが日本に帰る者も出た。この人たちが舞鶴でマスコミに発表し、事件は世界に発信されて真相がソ連側に逆輸入され、収容所職員の大半が入れ替わった。日本人を目の仇（かたき）にしていた政治部のミーシン少佐は降格され、どこかに行った。ミーシンは日本人を巧みに操り、仲間を裏切るスパイ行為をさせていた。私たちはだれがスパイかと疑心暗鬼で仲たがいや仲間割れにまで発展したこともあった。「私は日本人として、皆さんを裏切る行為はできない。」と遺書を残し自決した内藤軍医も、ミーシンによるスパイ強要が原因だった。軍医は私と同じ作業班で、自決前夜、一人でギターを弾いていた。おっとりした性格で、私には曲名は分からないが、静かに心にしみ込む曲であった。

あわや童貞喪失

田村大佐（関東軍参謀）が激戦中も手放さなかった座右の書「唐詩選」をお借りして読みふけった。難解な和訳は大佐が解説もしてくれた。新生中国の人民日報も置かれていた。完訳はできないが、大体の内容を伝えるのが私の役目でもあった。このお陰で、中国が新しく制定した簡略文字を習得した。



唐詩選



人民日報

メーデーも過ぎた頃、収容所の外へトラックを運転し、一人で食料倉庫へ食材や衣服を受け取りに行ったり、駅へ収容所宛ての荷物を取りに行ったりもした。一歩、収容所を出ると市民と同じで、物見遊山の気分になり道草や寄り道をして自由を満喫していた。ソ連は泥棒王国。荷物を積んだ車が上り坂でスピードが落ちると泥棒が荷台に飛び乗って荷物を落とす。通行人は見ているだけ。ロシア人の運転手を日本人捕虜に代えたら被害がなくなったという。運転手と泥棒がグルだった証拠だ。

女囚刑務所へ、女囚が栽培している野菜を取りにいくことになった。女囚に捕まり、たらい回しにされて命を落とした捕虜もいた。入り口で衛兵がつくが、案の定、棟の間から隠れていた女囚の一団が歓声をあげて殺到してきた。年配の衛兵はニヤリと笑い黙認するそうだが運良く 17 歳くらいの子供の衛兵だったので、彼はびっくり仰天して襲い掛かる女囚に向けてマンドリン（自動小銃）を水平発砲し何人かが倒れた。女囚たちは仲間を見捨てて、あっという間に棟に逃げ込み静かになった。

女囚が妊娠すると「女」に格上げされ、6 人だか 8 人だか子を産むと「祖国の母」の名誉称号と勲章が与えられる国。女囚も必死だったのだろう。

また帰国に漏れる

1955 年（昭和 30 年）夏の終わり頃、我が分所から瀬島中佐だけが帰国した。他の収容所から極東軍事裁判に出廷した重要人物や将官も帰国し、浅原一派も帰ったと分かった。私のような初年兵や下っ端官吏が残され、ソ連側の魂胆がどこにあるのか見当もつかなかったが、反共魂だけは、ますます盛んになった。その理由が分かったのは、それから 1 年後だった。

光は東から

1955 年（昭和 30 年）、シベリアへ強制連行されて 11 年目。その内 7 年間はソ連の囚人として、ハバロフスクで強制労働付きの獄舎生活。10 月に入ると一大光明が東から差し込んできた。鳩山首相の訪ソである。日ソ国交回復共同宣言が発表された。もう作業は手につかない毎日で適当に働いたが 11 月に入ると他の収容所と連絡をとってくれるサービスを始めてくれた。喜んでいると何のことはない、日本人墓地を造るから手分けして鉄柵や墓標を製造させるためだった。勤労可能な下級者を帰国させず、この仕事に当てたのだ。



鳩山訪ソ団

私有地は一切ないので、ここと決めると何でもできる。墓地でないところを墓地にし、国交回復で日本からの墓参者を呼ぶソ連の「村起こし」と看破（かんぱ＝見破る）する者もいたが、作業拒否の常習者も率先して祈りながら墓標を製作していた。私たちは密かに墓地と決まった土地の土を持ち帰ることにし、希望されるご遺族にお渡しした。私は長野県庁を経由し善光寺に献じて冥福（めいふく）を祈った。

12 月になると作業は中止され、収容獄舎監視棟の投光器も消えて自由解放の処置が取られ、昼間なら自由に外出が許され、市内見物、映画館にも自由に出入りができ、食料運搬のトラックで市内をドライブしていた私は地の利に詳しく、案内役として重宝がられた。

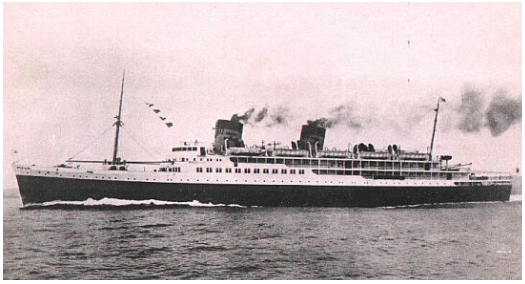
不当抑留 11 年に終止符

他の施設も閉鎖され、欧露（おうろ）（※）やシベリア各地から将官、将校が集められてきた。最後の日本人を帰すとあってソ連側も最大級のサービスに努力し、何を着せて帰すかで問題が発生した。ソ連側は、将校以上に「背広、外套（がいとう＝コート)」を支給するという。このとき将校側から「今日まで生死を共にし辛苦を分かち合った我々は、階級を超越してソ連側に抵抗してきた。服装で差別するとは何事か。破れ服でよいから同じ衣服を与えよ。」と抗議要求し受け入れさせた。しかし欧露、ウラジミール方面から来た将校たちは、ソ連の申し入れを感謝し受け入れると強行に意思表示をし「差別は当然。」と言い切って我々「シベリア組」を唖然（あぜん）とさせた。

※「欧露」: ロシア領土のうち、ヨーロッパに含まれるウラル山脈から西の部分。

12 月 22 日、待ちに待った帰国の日が来た。ハバロフスク駅には収容所の職員、家族、作業現場の監督、労働者が見送りに来て涙してくれる者もいた。何か一抹の情がわいてきた。輸送は家畜用の木造貨車だったが、旅客列車の停車しているホームに案内された。病人と将官は病院車に、私たちは寝台車に乗った。「日本へ帰す。」と言われて貨物に乗せられ、西へ西へ向かった頃を思い出した。7 年あまり過ごしたハバロフスクを後にして、雪の広野を列車は間違いなく「東」へ向かって走った。翌 23 日の午後、ナホトカに到着。ソ連軍楽隊が勇ましい楽隊で迎えてくれた。ナホトカ港は氷に閉ざされていた。岸壁には日の丸をはためかせた興安丸が巨大な船体を横付けしていて、既に乗船している人たちが甲板から手を振ってくれた。

私たちが最後の乗船者だと聞いたが疑心暗鬼だった。ソ連側はいつでもどこでも「バレるうそ」を平気でついたからだ。名前を呼ばれて乗船。舷側（げんそく＝船体の側面）で看護婦が体を抱えるように迎えてくれた。白衣の観音様に見えた。



興安丸





担架で病人を担ぎおろす看護婦

17 年ぶりに踏む祖国の土

乗船して湾内で1泊。うれしかったのは日本が民主主義国家になっていたことだ。病人だけ一等船室。他は序列もなく将官、将校、参謀、兵はみな一般船室。この処遇に「欧露組」は不満側と満足側に分かれ、不満組は船員や看護婦から「皆さんは病人を除き、皆、平等です。」と教育されていた。

名誉団長に後宮大将、団長に木下大佐を決め、その夜の食事は赤飯、鯛の尾頭付き、日本酒一合瓶が配膳（はいぜん）され一口一口を味わった。玉有船長、厚生省係員のねぎらいと歓迎のあいさつ。団長の答辞に泣く者もいた。うれしくて眠れず、語り合う内に夜が明け、朝食は懐かしい味噌汁をすすった。出港の合図の汽笛とドラが鳴り、甲板に全員が出た。興安丸は砕氷船に誘導されて港外に向きを変えた。私は遠ざかる悪魔の山並みを眺め、憎悪が脈々として脳裏を駆け巡り「あの空の下に取り残されている日本人がまだいるはずだ。」という思いが込み上げてきた。

航行 2 日目。日本領海に入った頃、新聞社の飛行機が飛来して新聞雑誌を投下してくれたが半分以上は海に落下した。25 日、夕闇（ゆうやみ）の中に日本の灯が見え始め、ボタ雪が降ってきた。日本の雪の何と暖かいことか。私たちは体に雪を積もらせ日本の「灯」を見続けていた。夜が明け検疫が済むと、先に帰国した瀬島中佐、宮田参謀、益谷参議院議長、山下春江女史らが乗船し、全員整列の前で労苦をねぎらい、後宮大将には直立不動で歓迎のあいさつをされた。巡視艇に乗り換え平桟橋に着き、私は力いっぱい日本の土を踏んだ。

舞鶴

平寮（たいらりょう）へ進む両側の道は家族の人垣が優先され、マスコミは遠慮している様子がうかがえた。少し進むと両側から飛びついてきた者がいた。兄と弟だった。平寮で朝食。ここでも先に帰った仲間たちが大勢待っていた。家族に囲まれ、家族が持ち込んだ料理で一杯やっている者もいて盆と正月が一緒に来たようだ。ソ連から帰国すると、舞鶴では裸にさせられ所持品を調べられ、米軍の厳しい取り調べがあると聞いていたが、日本が独立国になったのか、それらはなかった。

舞鶴 2 日目は、慰霊祭が挙行された。祭壇には荒法師（あらほうし）と呼ばれていた津森中佐が奉持してきた位牌（いはい）とウラジミール監獄で獄死した近衛文隆氏の遺骨が安置され、天皇皇后よりの御下賜品が備えられた。さらに国会議長、京都府知事と市長、舞鶴市民からの花束で飾られ、東本願寺法主と名誉団長の後宮大将により厳粛に慰霊の儀式が行われた。

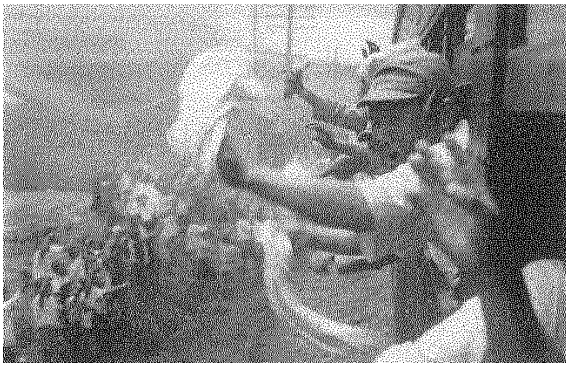
発見されれば没収、再拘留されるソ連の公文書「ソ連の私への囚人判決書」を、私が隠し持ち込みに成功したのを知っていた塩沢中将の勧めで、毎日新聞の記者にそれを見せた。それが翌日の毎日新聞に大きく報道され、外務省、厚生省、警視庁、日赤からも是非と言われたのでお見せした。長谷川宇一大佐から「朝日新聞へも。」と言われ見せたところ、ソ連軍事法廷の判決文は誤字あり文法もデタラメで、罪状を「無効」にできる代物との酷評記事が朝日新聞を通し世界に発信され、私は拍手喝采して溜飲を下げ、ソ連当局は面目を失墜した。

故郷へ向かう

12 月 29 日、舞鶴出発。停車する駅毎で歓迎を受け、花束やお菓子、弁当をいただいた。まるで戦勝国の凱旋（がいせん）兵士の扱いで「捕虜になれば私も家族も村八分にされる心配」がないことが分かった。名古屋で乗り換え、駅員の案内で乗った一両が引き揚げ専用車だった。西沢長野県副知事や先の帰国者 10 数名が名古屋まで出迎えにきて下さっていた。それに舞鶴からの血縁者や報道関係者が加わった。

戦勝国ソ連が自国の戦後復興のために満州から働ける日本人を 70 万人も投入したのに、敗戦した祖国日本の方が豊かな国になっていることが肌に伝わってきた。

順路は名古屋から中央線で塩尻経由、飯田線に乗り換え。12 月 30 日の早朝、飯田に着いた。駅前で県総合事務所長、飯田市長の歓迎を受け、当地出身者 4 名はそれぞれの家庭へ。重病の勝又中尉は舞鶴から付き添った日赤看護婦さんの看護を受けながら病院へ直行。私は次に来た列車で村の駅に降りた。駅では村長さんや恩師をはじめ、知人、友人、多数の村人に迎えられた。この駅を出発して満州に渡り 17 年振りに故郷へ戻ることができた。明日は大晦日（おおみそか）。除夜の鐘をしみじみと聞いた。




復員列車

シベリア鉄格子の中で　～小池義人の証言

苦難のはじまり

1943 年（昭和 18 年）11 月、私は満州（現中国東北）の関東軍独立守備隊へ入隊した。大学を繰り上げ卒業した直後のことだった。厳密な意味では、いわゆる「学徒出陣」ではなかったが、校門から軍隊へ直結していたからやはり広義の「学徒兵」であった。軍隊経験はゼロだが高学歴だったので、将校勤務見習士官の資格で、東満州の佳木斯（チャムス）で初年兵や、中には私より高年齢者の訓練教育に当たっていた。

昭和 20 年 8 月 9 日、ソ連軍の攻撃は、私たち関東軍にとって苦難の開幕であり、15 日敗戦、それに続くシベリア抑留と、歴史の舞台は最高潮に達していく。ソ連軍は降伏した将兵を武装解除し、日本人捕虜を大隊単位で次々にソ連領へ送り込んだ。私たちの大隊がハバロフスクの収容所に入れられたのは、10 月初旬であった。収容所（ラーゲル）は「ハバロフスク第 16 日本人捕虜収容所第 5 分所」。このラーゲルで工作機械経験者の捕虜は工場へ、技術のない者は肉体労働の建築、土木、荷役、清掃等へ回され、いつ帰国できるかも分からないまま、捕虜の辛さ、悲しさを身にしみて覚えさせられ 2 年の歳月が流れた。この間、ソ連は、捕虜に望郷の念をつのらせ、狡猾（こうかつ）に赤色思想を浸透させ、赤色分子のリードで「吊るし上げ」が横行し、「資本主義打倒。帝国主義反対。日本島敵前上陸。」を叫び、帰国近しの幻想を演出していた。



ラーゲル炎上

1947 年（昭和 22 年）12 月 27 日の深夜、ラーゲル内の乾燥室から出火があった。極寒地なので、少しでも湿り気がある衣服、靴は凍傷につながるので、強制労働で濡れた衣服、靴（フェルト製の長靴）を翌朝までに急速乾燥させる必要があった。火事の原因は、過熱による失火と思われるが、たちまち全棟を焼き尽くした。深夜、大隊副官の私は、消火作業と熟睡の捕虜の避難誘導を指揮したが、出火による停電の暗闇に加え、煙が充満して、手の施しようもなかった。夜が明け、火災の炎が赤々と燃え続けている中、私は部下の安全確保と生存確認に最善の努力をした。避難した部下たちが集まり出した頃、私はソ連兵に逮捕され、このラーゲルに戻ることはなかった。

下獄

火災現場で逮捕された私は、ラーゲル本部へ連行され、翌日まで 2 日間にわたり数人の検察官に入れ代わり立ち代わり訊問され、多数の犠牲者が出たことも知らされた。訊問の内容はどの検察官も大同小異で、出火の原因、出火後の状況と対応、思い当たる出火の原因、更に、平素の管理防火体制などなど。同じことを繰り返し聞かれ、見たまま、対応したこと、感じたことを言うだけだったが、私以外の日本人に責任が及ばないように心して受け答えをしていた。訊問の結果も知らされず終わったようだ。帰れると思ったら考えが甘く、ハバロフスク拘置所へ送られ、暗い部屋に押し込められた。「ガチャッ。」と錠を掛ける音が真冬の冷気に響き、これから始まる暗黒の運命を予感した。部屋は 40～50 人ほどの大部屋。異様な風景と匂い。うさん臭い風体の者ばかりで、真夜中というのに皆が私を取り巻き睨んだ。「ウォッ。ヤポン（日本人だぞ)。」の声に睨みから好奇の顔に。「もう一人、日本人が居る。」と、大隊長だった。この房は「カランチーン（＝未決囚の溜り揚)」らしい。

独房

翌日、3 階の独房へ。施錠した看守の足音が去った。部屋は真正面に鉄格子の狭い小窓。天井は円形のかまぼこ型、天井と壁、壁と床、直角部分も丸くて角がなく、壁、天井は濃厚なピンクのペンキで塗られていて床だけが黒い「桃色部屋」だった。取り調べは 10 日間ほどで、その後は 1 週間以上、呼び出しもなく、1948 年（昭和 23 年）1 月 17 日に私は裁判を受けることになった。裁判所の建物は見覚えのある極東軍司令部。玄関に「極東軍ハバロフスク軍事裁判所」の金看板が掛かっていた。私と大隊長は 2 階へ連れられ、階段横の狭い物置部屋に押し込まれ「ここで待っておれ。」と施錠される。本当に狭く膝を突き合すように腰をおろし、小声で互いの情報交換をし「私たちは無力でまな板の上の鯉だが、裁判では言うべきことは堂々と主張しよう。」と励まし合い、我々以外の犠牲者は出さないようにと確認した。



裁判

私は一人で法廷に入った。法廷は会議室を利用。正面壁に飾られたソ連国旗がわずかに法廷らしい威厳を示し、反対側の壁の下が被告席。MBD（＝内務省軍隊）の少佐が裁判長。2 人の兵士とロシア人通訳を従え入廷。別の入口から民間人書紀が着席。看守が 7～8 人の証人を両側の席につかせた。全員、私の部下だ。火事当日、ラーゲルにいなかった N までも出廷していたので不吉な予感がした。N は憲兵軍曹。捕虜になるや、いち早く憲兵の前歴を隠し、赤色グループの先頭に立って、捕虜の赤色化運動を積極的に行い、大勢を巧みに先導して「吊るし上げ」をやるという、自己保身のためなら親でも餌食にするスターリンと同一タイプの人間だった。私はこの裁判は火災だけでなく思想的な背景の導入もあるのではと危惧した。弁護士も与えられずに裁判が始まった。裁判長はにこやかな顔と優しい声で「君は裁判官を忌避する権利を持っている。その権利を使いますか。君は自分に必要な証人を当法廷に呼ぶ希望がありますか。」と、開口一番、物静かに話しかけるように言った。なんと白々しく、余りにも形式な質問かと愕然（がくぜん）とした。私は逮捕されるような罪は犯していないし、裁かれる罪状も知らされていなかった。裁判官の質問への私の 3 分以上の返事を、通訳は 0.3 秒のロシア語で「ニズナーユ（＝知らない）。」「ダーダー（＝その通り）。」と訳した。片言の日本語しか話せない通訳での裁判なのだ。裁判長の問いに対し「私は清廉潔白で犯罪者ではない。この裁判は罪のない私に、私の罪状を説明せず、私を裁こうとしている。せっかくだから計画通り進めてくれ。お手並拝見。」となかば比喩も含め、自虐的に返答したが、この発言も通訳は 0.3 秒に短縮して裁判長に通訳された。

判事の質問は証人たちにも向けられたが、どの証人も「副官は私たちを安全な場所へ避難させ、自分は火災現場へ戻っていた。」と異口同音な証言であった。N が立ち上がり発言を求めた。裁判長は「君は火災当時ラーゲルにいなかったから、私の質問の対象外だ。私が必要としない証人がなぜいるのだ。他の発言も禁止する。」と言い放ち、私を驚かせた。

私が帰国後に知らされたのは、火事責任で私が逮捕されるや、減刑嘆願署名運動がすぐ始まったのに対し、N たち赤色グループが嘆願署名反対運動を展開し、「大隊長や副官ごときは地主、資本家の番犬で、我々を搾取してきた労働者農民の敵だ。極刑に処し日本へ帰すな。」と演説し、署名運動者を吊るし上げ、署名運動を挫折させたとのことだった。

今にして思うのは、N は赤色幹部の地位で証人を志願し、私にとって有利な証言を阻止することが目的だったと思う。証人ににらみを利かし、副官は親愛なるソ同盟の財産を巧みに消失させ、尚、十数名の労働者を焼死させ、祖国ソ同盟の生産能力を低下、妨害工作した重大な犯罪者である。」と、減刑署名運動を阻止したときの演説を法廷で再現し、自己保身に磨きを掛けようとしたのだ。

判決

私の発言は「そちらの筋書き通りにどうぞ。」の 1 回だけで、20 分間の証人証言で裁判は終わった。5 分休憩し、25 分後に判決だと通訳された。5 分後開廷し驚いた。20 分にわたるやりとりが、たった 5 分の間にきれいにタイプ印刷で冊子に製本されていたのだ。到底、5 分間でなしうる技ではない。とすると、既に事前に用意されていて、N の割込発言は入る余地もなく、当裁判に迷惑千万以外の何ものでもなかったのだ。検事、弁護士不在の裁判は、裁判長が判決冊子全文を朗読したにもかかわらず、通訳は見事に短縮し、日本語 6 文字「懲役二十五年」私は遂に自分の罪状も教えられず、30 分間に一人生産する、タダ働き 25 年者製造ベルトコンベヤー裁判制度の犠牲者にされてしまった。

囚人中継刑務所をたらい回し

1948 年（昭和 23 年）2 月 11 日。ハバロフスク拘置所からロシア人囚人 50 人の中に入れられ、駅まで徒歩と決まり私は驚いた。囚人の中には凶悪犯もいるだろう。好奇心で近づいてくる不用意な婦女子を人質に出来るだろうと。囚人 50 人は片手ずつに乾パンと身欠鰊（みがきにしん）一匹を持たされ、5 列縦隊隣りと固く強く腕組みを強要され、前後左右は自動小銃、剣付小銃の兵十数名が取り囲み、数頭の警察犬も動員され「とっとと歩け、馬鹿野郎。キョロキョロするな。」という怒号と罵声に犬のほえ声も加わり、パンと鰊（にしん）を落とすまいと強く握り締めて駅へ向かった。警察犬の威嚇吠えに歩行者は逃げ、誰も近寄らなかった。何とも賑やかな犯罪者護送隊列の、実にみじめで屈辱的な仕打ちに腹が立っていた。



身欠鰊

囚人輸送貨車は家畜貨車を改造。拷問にも似た貨車内の苦しみに耐えながら 5 日後、イルクーツクに到着した。私はたった一人の日本人だったので囚人たちからの差別も覚悟していたが、国境地続きのユーラシア民族だからなのか人種差別も、敵国人扱い差別もないばかりか、ロシア人囚人からは尊敬というか、一目置かれているようだった。私が知らない私の罪状は、ロシア人囚人間では「国家反逆罪」らしく、新生国家建設のヒーローと評価されたようだが、私の不安は募るばかりだった。

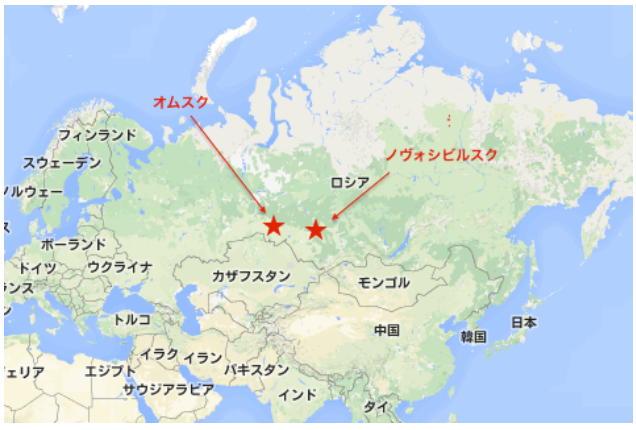
牢名主

「水戸黄門」「大岡越前」にも牢名主が登場するが、ロシアで囚人にされ「ロシア牢名主」の一端を垣間見た。簡単に説明すると犯罪を「硬派」「難破」に区分し、硬派犯罪者は軟派犯罪者を軽蔑する。年齢、体力、地位に関係なく、軟派犯罪者は硬派犯罪者に頭が上がらない。硬派犯罪を上中下に細分し「上」は国家体制批判で、私は「上組」らしい。上ランク者は度胸と決断にすぐれ、捨身で国民に尽くすヒーローなのだ。刑務所が変わる度に「何をして入ってきた。」と聞くので「分からないが懲役 25 年にされた。」と言うだけで一級思想犯の地位を牢内で与えられた。煙草を口にすると刺青の大男が火をつけてくれたこともあった。

イルクーツクの引込線にプラットホームはなく、貨車から飛び降りるのだが、5 日間、狭い車中で動けなかったので、膝が劣化していて飛び降りると同時に転倒者が続出。脱走は到底出来ない。貨車内で膝を退化させるのである。輸送囚人用バスに乗せられ 30 分ほどで「囚人中継刑務所」に着き、一週間滞在。

病魔と闘う

再び拷問的な囚人虐待貨車で三昼夜。ノヴォシビルスクに着く。ここも「囚人中継刑務所」で一夜。翌朝、2 日分の食糧を持たされ囚人貨車に詰め込まれて二昼夜。ペトロパブロフスクだと聞かされる。私は体調に変化を覚え、寒く発熱病状の悪化を自覚する。一人で歩けず舎房に運ばれたが足の踏み場もない満員。地面の土間に直接寝かされる。湿気と冷気が直接はい上がり、破れ衣服にしみ込んでくる。翌朝は立つこともできず 40 度の高熱。私を尊敬しているロシア人囚人たちが「入院。医者を。」と嘆願してくれたが、一人になるのが心細かった。病室はお粗末ながら清潔であった。1945 年（昭和 20 年）、日ソ戦から帰国船に乗った昭和 25 年 4 月まで、寝具に包まれて眠ったのはこの時だけであった。



高熱に負ける

私は治療を受けたのか、医者がいたのかも記憶がない。囚人貨車の中で芽生えた不思議な連帯感のあった仲間から隔離された不安におびえていた。私は突然ベッドの上に立ち、仰向けに倒れ、後頭部をベッドの鉄柵に打ちつけて後頭部を割り、死のうとしたそうだ。気がつくとベッドに縛られ、身動きもできなかった。縛られているのを感じながら眠っていたようだ。病室での記憶はないが見た夢は今も覚えている。縛られて広場に転がされている私を、祇園祭の大きな山車が足元からじわじわ迫ってきて、足、膝、腹、胸、顔と頭を越すと私は死ぬのだ。山車が顔に迫ると足元で父が呼ぶ。頭を持ち上げ父を探すと山車は足元へ戻り、また頭へと迫る。母が呼び、頭を持ち上げる。学生時代の友人たちが、私を救いに足元に集まっている。何日間病室にいたか分からない。頭の傷も回復し、熱も下がったと思ったら元の舎房へ戻されたが、血肉を分けた兄弟より信頼し合ったロシア人囚人は入れ替わっていた。

本命刑務所へ　～　収監は判決５ヵ月後

シベリア鉄道ペトロパブロフスクから支線で南へ 3～4 日でカラパスへ。日本発行地図には掲載されていない場所だが、ロシア人囚人によると、炭田地帯として有名なカラガンダ地方の一部で、流刑地として有名。一般人は居住していないという。この地に 1 ヵ月ぶち込まれ、いよいよ本命の「強制労働刑務所」行きと決まったとき、私は素直に驚きもなく平常心で受け入れることができた不思議を今も覚えている。達観したか、諦めたか、俎上（そじょう）の鯉に到達したか。カラパスから汽車で 1 時間の「カンスパイ強制労働刑務所」に収監された。この地名も日本発行の地図にはない。360 度大草原のど真ん中に位置する刑務所であった。私たちのグループは 20 人。わずか 20 人の人種はドイツ、ロシア、ウクライナ、アルメニア、ラトビア、マジャール、カザックなど驚くほど多彩で、囚人間の公用語、共通語はロシア語。潅漑（かんがい）用水路構築の作業へ。





カラガンダ地方

少し分かった事は、この刑務所は「農業刑務所」。果てしない不毛の大草原を開墾して農地に、一大穀倉地帯を造り出す刑務所なのだ。草原の中へ縦横に網の目のように濯漑水路を拡げる。ソ連は 30 分に一人、検事弁護士不必要、罪状告知不要のタダ働きのベルトコンベア裁判で生産される豊富な労働力を投入しているのだ。肉体労働に不馴れ、病み上がりに過大なノルマは殺人的にのしかかる。一人ノルマならノルマ未達成懲罰も個人だが、4 人 1 組のチームノルマでグループから舌打ちされる辛さ。仲間にかける迷惑は自尊心を深く傷つける。 1 日の労働時間も長く、夏は体温より高い 40℃の炎天で 12 時間。冬は氷点下 30℃以下の酷寒、夏冬屋外屋根なし労働、厳しい寒高気温に耐えるだけでも精一杯てあった。

マローズ

シベリアの冬の挨拶は「ザミヨロス（＝凍りそうだ)。」的確な表現あいさつに感服もした。マローズは超酷寒を指す。マローズになると空気が凍る。空中の水分が凍結する。木端微塵（こっぱみじん）にされたガラス粉が空中に浮遊しているようだ。この自然現象を見ようと目を向けても、ぼやけてはっきり見えず、眠くないのに瞼（まぶた）が重なっていく。目をこすると少し良くなる。瞼が重なる現象は上下のまつ毛に霜が付着して視界を妨げるからだ。こんな時に眉毛はもちろん、鼻毛も不精髭（ぶしょうひげ）も凍る。不精髭を擦るとひげが折れるほどに凍っている。広げた布を半分に折ると繊維も凍っていて二つになる。マローズの後は猛吹雪が三日ほど続く。猛烈に吹き荒れ視界ゼロになる。当然労働休み。この休みが地獄に変貌する。刑務所は 20 人部屋が連なりトイレは部屋にはない。マローズになると部屋へトイレ用桶（おけ）を持ち込み、部屋は施錠される。トイレは室内で。毛布は二人に 1 枚。ランニングとパンツ姿にされ衣服や靴まで取られる。食事は黒パンとスープだか、マローズ 1 日目 1 食抜き。2 日目 2 食抜き。3 日目 3 食抜きパンだけの減食。過去にマローズを狙って脱走があり、脱走者が出る度に厳しくして現スタイルで脱走者皆無になったとのこと。「脱走しても凍死するだけだ。お前たちの命を守る。」「エト・ザコン（＝これが規則だ)。」と。人間の尊厳も剥奪される。

懲罰刑務所

1949 年（昭和 24 年）11 月中旬、私はこのカンスパイからプラチーナ刑務所へ移監された。1 年から 2 年で別の刑務所と聞いていたので、一年半になるからと想定していたので規定通りだと思った。「ソビライ・スペチャーミ（＝荷物を持って出よ)。」2 時間ほど歩いて着いたプラチーナ刑務所は最高に厳しく厳重な刑務所だと思った。四隅の望楼は同じだが、三重の鉄条網と、番犬用の鉄線も取り囲み更に、敷地内の獄舎毎も鉄条網で囲まれ、明らかに特別厳重な警備体制刑務所だった。囚人は「被懲罰者」であるが、それを更に懲罰する刑務所の存在は異常な緊張感と不安を私に与え、私はワルの中のワルに位置づけられていると思った。作業は 4 人 1 組のチームプレーを発揮するノルマ方式で、九分通り出来ているダムの堰堤（えんてい）内部の法面（のりめん）に石垣を張り付ける作業である。大草原の中に万里の長城もかくやとばかりの大堰堤が延々と続いている。何万、何十万とも知れぬ囚人たちの血の結晶で建設したと思われた。



キルギス - カザフ国境付近のダム

忘れもしない 1950 年（昭和 25 年）3 月 7 日の朝、作業出発準備でガヤガヤよザワザワと支度中、看守が大声で「コイケ、ソビライ、スペチャーミー（＝小池、荷物を持って出よ)。」わずか 4 か月で別の刑務所かと落胆しきり。すると囚人が「オッ、ダモイ（＝おい釈放だぞ)。」（ダモイ＝家に帰る、帰国、作業場からの釈放もダモイだった）私は「ニェト、ニビリュー（＝違う。信じられない)。」するとあちらこちらから「ダモイ。ダモイー。」と囚人たちが自分の喜びのように大声で私を取り巻き、肩まで叩いて祝福してくれた。呼びに来た看守は一言も「ダモイ」とは言っていない。戸惑う私は「スパシーボー（＝ありがとう)。」と言えず「うん。うん。」とうなずくだけだった。懲役 25 年がわずが 2 年半で…。

ハバロフスクへ

私は恐怖の「囚人輸送貨車」に一人乗せられ不安の移動。シベリア鉄道本線に出て列車は東へ向かった。停車駅毎に囚人捕虜が乗り込む、なぜか皆一律 25 年刑者ばかり。人数が増える毎に力強くなり「ダモイ。ナホトカ直行。」と怪気炎を上げるも 2 週間後、ハバロフスク到着で下車した日本人囚人の数が 350 人と聞き驚いた。私たちは刑務所や拘置所でなく、日本人捕虜収容所第 20 分所へ。囚人身分から釈放されるらしいと噂する者もいたが、20 分所の役目を聞かされ愕然とした。この分所は憲兵、特務機関の戦争犯罪者ばかりで取り調べ中だと。ソ連は私たち既決囚人と戦犯者を合流させ、日本人専用刑務所でタダ働きをさせるのだと疑心暗鬼となった。

3 日後、私たち 350 人だけが集められハバロフスクを後にしてナホトカへ向かう。囚人用でなく家畜用だ。家畜扱いにされ大喜びするほど私たちはソ連当局に痛め付けられていたのだ。ナホトカでは悪の権化スターリンより悪人化した赤大根（赤色分子捕虜）が私たちに一席ぶった。「貴様らは祖国ソ同盟に対し罪を犯した大悪人共である。貴様らをこのまま人民を搾取する日本へ帰すことはできない。我々が貴様らを一人一人分離し、我々の同士に預けて徹底教育する。覚悟せよ。」これを聞いていたソ連軍将校が「何を考えている。囚人たちはソ連国家への犯罪者だ。犯罪者を勝手に分散されてたまるか。集団で犯罪者として日本へ引き渡す。手も口も出すな。」と、赤大根から隔離され、馬鹿馬鹿しい赤大根の餌食から逃れる事ができた。

乗船前日までの 1 ヵ月半、赤大根から離されたソ連指揮下で、港湾荷役作業や土木工事の強制労働に従事。それなりに楽しんだ。乗船するまで労役作業も含め 100%、捕虜の管理は赤大根に委託委任されていた。スターリンに忠誠を誓った赤大根たちは「祖国ソ連のために働け。手を抜くな。」と叱咤（しった）。夜は「頭脳改造だ。」と共産教育。隊列を組み、革命歌を大声で歌わせ、市内を駆け回されてヘトヘトにされた。4 月 24 日、赤大根から「出陣式を行うから広場に集合。」と命令。反動勢力の牙城日本へ、祖国ソ同盟国家から「敵前上陸」するから「出陣」だという。赤大根の指示で私たち 350 名は中央に、両側に私たちを挟むように捕虜 500 人ずつ、1,350 人が並んだ。

日本国へ　～　敵前上陸儀式

正面壇上には赤旗が林立し「スターリン大元帥万歳！」「ソ同盟よ。ありがとう！」の横幕。アクチブの赤大根が次々と壇上からあいさつ。「いよいよ敵前上陸の時が来た。」「この良き日は、スターリン大元帥のお陰だ。」「祖国、ソ同盟との別れは辛い。」など。歯の浮く激励あいさつが延々と続いた。壇上では最後の万歳三唱の説明になり、両側の捕虜が初め「スターリン万歳」次に私たち 350 人が「祖国ソ同盟万歳」と。ここで万歳典礼を披露しよう。リーダーの音頭に続き大衆、これを 3 回線繰り返して計 6 回と聞き分けるように唱和するのが正式万歳。両サイドが終わり私たちの番だ。リーダーの赤大根が声高らかに「祖国ソ同盟、万歳。」私たち「沈黙」リーダーが更に大声で「万歳。」私たち「沈黙」。他の赤大根は私たちに向かって指を差し、唱和強要の姿勢。リーダーは猛り狂ったように「万歳。」私たちは無言で壇上のリーダーをにらんだままの姿勢。赤大根たちが私たちの方へ駆け寄るのと同時に、両側の千人の捕虜たちが一斉に「ウォー。」と大歓声を上げて私たちに大拍手。この時、日本人だけが一体化した瞬間だと思った。ソ連軍将校は動かず冷静なので、赤大根も引き下がり出陣式は終わった。出陣式の進行は聞かされていないのに、誰一人唱和せず、全員一致した感動を両側の捕虜にも分け与えたのだった。

乗船

赤大根に続き千人の捕虜、私たち 350 人の「犯罪者」はソ連の犯罪台帳の顔写真と見比べられ、囚人扱いのまま乗船手続き。看守が私の名を呼んだ。私はもうすっかり馴れきった要領で、しかも、二度とと再び、このロシア語は使うことはあるまいという思いで、ゆっくりと、落ち着いて「ダー。ヨシト、スタチヤストーデピノストレー、チー、スローク、ドゥワシッチビヤーチ（＝はい。名前は義人、刑法 193 条軍事法廷、刑期 25 年)。」看守が大きくうなずき、間違いなく私だと認め、減刑も釈放もされずロシア囚人のまま、信濃丸のタラップを一歩、一歩、踏み締めるようにして登っていった。

舞鶴

1950 年（昭和 25 年）4 月 25 日午後、信濃丸は舞鶴港岸壁に接岸した。と同時に、ソ連タス通信は「日本人捕虜全員引き揚げ完了」と世界へ向け発信した。私たちの信濃丸は「最後」の引揚げ船だったのだ。

・・・

「捕虜全員引揚げ完了」というタス通信報道に、既にシベリアから生還、ダモイしていた私たちは驚き、徒党を組んでソ連大使館へ。「俺たちをもう一度シベリアへ連れて行け。どこそこに強制労働中の日本人捕虜がいる。教えてやる。」と怒鳴り込んだ。以来、ソ連は引き揚げを再開し、1958 年（昭和 33 年）9 月 7 日、白山丸が最終船とされているが、蜂谷弥三郎（島根県）が帰れたのは 1997 年（平成 9 年）であった。（橋詰四郎）

戦争の被害者　～伊藤安治の証言

先の戦争が終わってからもう 70 年も経つ今、こんな言い方もおかしいのだが、さてこの戦争を何と呼べばよいのか。安倍内閣好みの「大東亜戦争」は論外だが、さりとて「太平洋戦争」という呼称はアメリカ製で、日本が長く侵略していた中国戦線のことが欠けている。そこで「15 年戦争」という称呼が生まれた。もっといい呼称ができれば一番いいのだが、そうでなければ、この２つのどちらかに統一できないであろうか。いろいろ呼ばれているのは、何としても都合が悪い。これも侵略戦争をあいまいにするためかと勘ぐる次第だ。

さて、先の戦争で亡くなった人のことを書いてみたい。初めにお断りするが、引用する数字は様々な食い違いがあるので、大体のところをお受け取り頂きたい。随分前に、私はこう書いた。日本人の死没者は約 310 万人で、うち軍人 210 万人。これに対して侵略した先々の国で、日本人が殺殺したのは 2,000 万人という。私の知ったのはそれだけで、それ以上のことは長く資料を見ることができなかった。その後、戦没者の 6 割は餓死と聞いた。

下の表を見て私がまず思ったのは、フィリピンにおける戦没者が、中国本土より多いということだ。戦争をしていた期間は中国の方がはるかに長いのにである。

地域別陸海軍人戦没者数（厚生省援護局1964年調査より集計）	
日本本土	103,900
小笠原諸島	15,200
沖縄	89,400
中部太平洋	247,200
仏領インドシナ	12,400
タイ	7,000
マレー・シンガポール	11,400
ビルマ（含インド）	164,500
ボルネオ・スマトラ・ジャワ・セレベス	33,200
モルッカ・小スンダ（含西ニューギニア）	57,400
フィリピン	498,600
東ニューギニア	127,600
ビスマルク諸島	30,500
ソロモン群島	88,200
朝鮮	26,500
旧満州	46,700
中国本土	455,700
台湾	39,100
樺太・千島	14,800
ソ連	52,700
合計	2,122,000

1944 年 10 月、台湾沖に接近したアメリカ機動部隊を迎撃、実際は 1 隻も沈めていないのに、未熟な搭乗員の誤報によって、「空母 19 隻、戦艦 4 隻を撃沈撃破」という架空の「大戦果」を発表した。大本営はこれを本気にし、機動部隊が壊滅しアメリカ軍は裸でレイテ島に来るのだから、水際で撃滅せよと命令した。ところがアメリカは大艦隊護衛のもとに上陸作戦を強行、日本軍は大敗北をしたのだった。戦没者の数は主としてその結果だ。無謀な作戦はこれまでも繰り返されてきた。ニューギニアでは、標高 4,000m 級の山を越えてポートモレスビーを攻略するという作戦のために 10 数万の餓死者を出した。ビルマからインドのインパールを目指した作戦では 86,000 人のうち帰還できたのは 12,000 人に過ぎなかった。

初めに上げた死者数の内、侵略先の国々の国民の死者数についてはまったく分からず気になっていた。そこで弟に話したらインターネットで調べてくれた。それによると、次の様な数字が分かった。これらは全て民間人である。

第二次大戦の犠牲者数（国別）　1995 年 8 月 15 日（朝日新聞社）

日本	310 万人	厚生省援護局（朝鮮、台湾の軍人・軍属各約 2 万 2 千、約 3 万人を含む）
中国	2100 万人（37～45）	中国政府
	2100 万人から 2300 万人（37～45）	北京大学歴史学部王暁秋教授
	1221 万 5000 人（31 年の満洲事変から通算）	東大史学編纂所・宮地正人教授
	1000 万人（31 年の満洲事変から通算）	『高校日本史B』（実教出版）
朝鮮半島	少なくとも 35 万人から 36 万人	日本政府から伝えてきた軍人軍属名簿や被徴用労働者数などをもとにした韓国政府の推計
	21 万人	東大史学編纂所・宮地正人教授
	20 万人	『高校日本史B』（実教出版）
台湾	2 万 9000 人	日本政府から台湾赤十字に提供された名簿
	3 万 3000 人	東大史学編纂所・宮地正人教授（いずれも日本軍に加わった軍人・軍属の合計）
香港	6403 人	英連邦戦没者埋葬委員会の埋葬・火葬者数
	365 人（軍人）、1 万人（監獄内の処刑などで民間人）6 万人（飢餓）	香港総督の本国あて電文
シンガポール	4 万人～5 万人（華僑）	東大史学編纂所・宮地正人教授によると、現地の中国系社会や同国の研究者の間の定説
	6000 人から 7000 人虐殺	日本陸軍省報道部機密文書
	8 万人	『高校日本史B』（実教出版）
マレーシア	4 万人から 5 万人（華僑）	東大史学編纂所・宮地正人教授
フィリピン	111 万 1900 人	アラヤ博物館にある日比賠償交渉に関する外交文書
	100 万人	『高校日本史B』（実教出版）
タイ	7928 人	タイ政府が 47 年に米国に報告した数字
インドネシア	400 万人	51 年のサンフランシスコ講和会議で、同国政府代表「日本占領期間中に被った人命の損失」
	200 万人	東大史学編纂所・宮地正人教授
	200 万人	『高校日本史B』（実教出版）
ベトナム	200 万人	東大史学編纂所・宮地正人教授 『高校日本史B』（実教出版） （ほとんどが餓死者とみられる）
ラオス・カンボジア		公式数字はない
ミャンマー	5 万人	『高校日本史B』（実教出版）
インド	350 万人強	東大史学編纂所・宮地正人教授 （ほとんどが餓死者とみられる）
ソ連	1611 万 5 千人（軍人 611 万 5000 人、民間人 1000 万人）	元防衛庁防衛研修所（現防衛研究所）戦史編纂官冨永謙吾氏の調査
ドイツ	660 万人（軍人 325 万人、民間人 335 万人）	
ポーランド	555 万人（軍人 55 万人、民間人 500 万人）	
米国	54 万 5108 人（軍人）	
英連邦	59 万 2767 人（軍人 53 万 2178 人、民間人 6 万 595 人）	
イタリア	55 万 9803 人（軍人 38 万人、民間人 17 万 9803 人）	
フランス	43 万 3000 人（軍人 24 万 5000 人、民間人 18 万 8000 人）	

もちろん、戦争だから当然、相手国の軍人も少なからず殺傷していることは言うまでもない。だが、圧倒的多数は非戦闘員の民間人であり婦女子も含まれていることだと知るべきである。

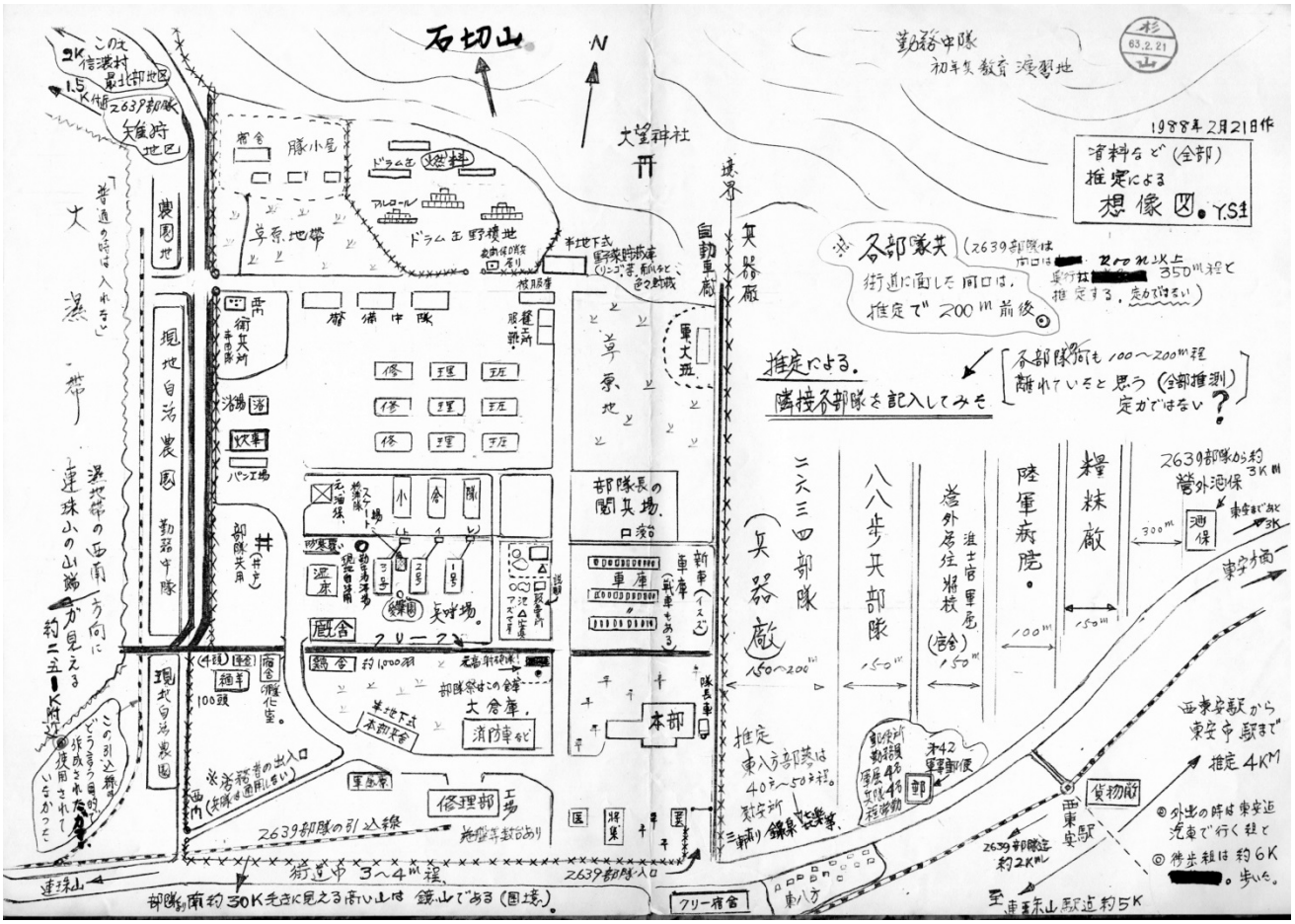
では、この悪魔的殺人行為はどのようにして行なわれたか、私一個人の些細な体験から考察してみよう。私は平和な中国の天津で 3 年ほど生活していた。この地方は「マントウ」は街頭でも販売していて主食でもあった。日本から日本の兵隊が上陸してきたがマントウは小麦粉 100%の美味しい味を保っていた。少しして日本兵が居座りはじめると、小麦粉のマントウに少し雑穀が混じり始めた。戦争が長引き、居座る日本兵の数が増えるのに比例して民間日本人も居座り、街の要職を支配しするようになると、マントウはしまいには雑穀ばかりになった。美味しさを引き出してくれていた小麦粉は、天津の日本人だけでなく、天津港から日本へ積み出されていて、遂には雑穀類まで日本へ送られると中国人の餓死者が出るようになったが、日本軍の武力を恐れて泣き寝入りするより仕方がなかった。何もしない泣き寝入りを、日本人は、従順なお友達と一人よがりに考えていた。中国人は、日本人に逆らえば殺されるのに。

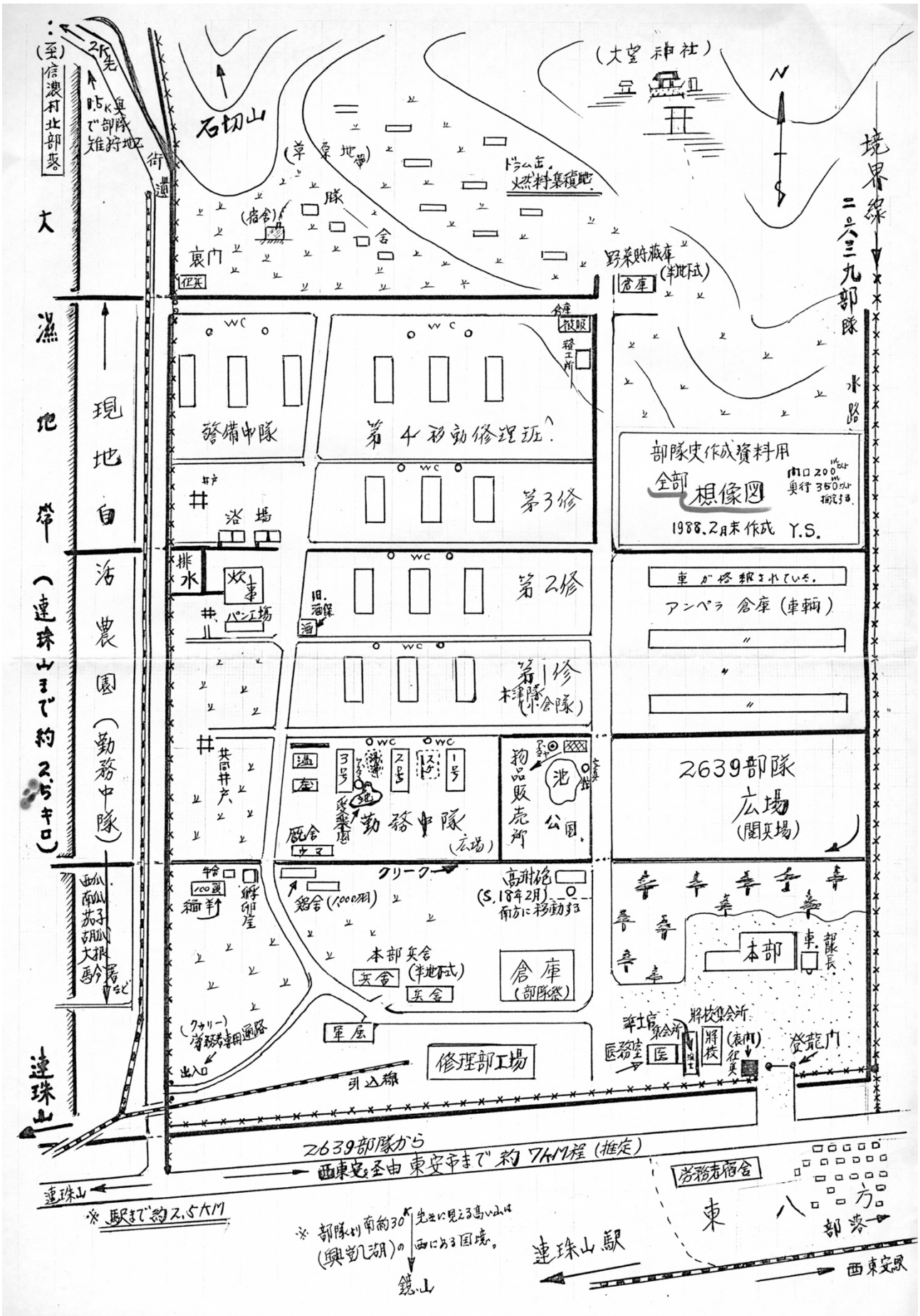
敗戦後、知ったところによると、南京事件や三光作戦にみられるような、民間人大量殺害が各所で行なわれていた。とりわけ食料を現地調達する日本の方針で大量の略奪行為が武力で行なわれていた。南太平洋戦線では侵略した日本軍がミミズやトカゲを食べ、それでも死者の 6 割は餓死とデータが示している。占領した先々で食料を筆頭に徴発し、住民の生命財産の危機にさらした行為は、日本の食料難からも容易に想像できるし、住民の生命財産を犯した理由で裁かれた南方戦線の B・C 級戦犯からも汲み取ることが可能だ。皇軍、天皇の軍隊は侵略した先々で食料だけでなく、恥ずべき行為、ヨーロッパ系白人女性を含む慰安痛も徴発していたのだ。

虎林第 2639 部隊にて　～鳥谷定夫の証言

東安（とうあん）勤務中隊での初年兵教育を無事に終え、ようやく軍隊生活にも慣れた。1943 年（昭和 18 年）に突然、虎林（こりん）転属の命令を受けた。杉浦隊での数々の思い出、戦友とも別れ、5 月 22 日、虎林の日下部隊に転属になった。第 1 班、加藤軍曹の配下に入り、専任兵長 1 名、上等兵、古兵、私たち初年兵が入り、約 40 名であったと記憶している。虎林はソ連の国境まで 12km の所だと聞く。東安と違い、部隊全周に鉄条網が張り巡らしてあり、夜間は電流を通すとのことで、国境間近という感じであった。警備隊歩哨が 1 周すると 1 時間くらい掛かったと聞く。広大な原野に無数の半地下式の倉庫が並んでおり、中にはガソリン、オイル等の燃料が入っていた。作業は毎日、車両燃料の地下倉庫内への移動、運搬、整理、道路側溝の整備、部隊引き込み線貨車にドラム缶燃料の積み込み等を、労務者（クーリー）を使って行った。






(大堂神社)
石切山
(草原地帯)
ドラム缶、燃料集積地
(宿舎)
隊舎
裏門
野菜貯蔵庫(半地下式)
境界線
二八三九部隊
水路
警備中隊
第4移動修理班
第3修
第2修
第1修
本隊(小倉隊)
浴場
排水
炊事
パン工場
旧.油保
現地自
活農園(勤務中隊)
共同井戸
勤務中隊(広場)
酒保
物品販売所
池
公園
2639部隊
広場
(閲兵場)
車が修理されている。
アンペラ倉庫(車輛)
〃
〃
〃
部隊史作成資料用
全部想像図
1988.2月末作成 Y.S.
クリーク
高射砲(S.18年2月南方に移動する)
倉庫(部隊袋)
本部
車.
隊長.
本部兵舎(半地下式)
兵舎
兵舎
厩舎(100頭)
豚舎
(クォリー)
修理部工場
引込線
将校集会所
将校
(表門)
従兵
衛兵
医務室
看護婦宿舎
東八方
部落
資龍門
2639部隊から
西東安まで約7KM程(推定)
連珠山
※駅まで約2.5KM
※部隊より南約30K(興凱湖)の先に見える高い山は西にある国境。
鏡山
連珠山駅
西東安駅
(至)信濃村北部落
大
湿地帯
(連珠山まで約2.5キロ)
N
S

加藤班長は、非常に温厚な人で、色々とお世話になった思い出がある。当時、兵舎内の 40W（ワット）電球の盗難が頻繁にあり、犯人探しに躍起（やっき）になったものだ。結局、犯人は分からず、後日、分かったことであるが、当時、町では物資が不足し、特に 40W 電球は 40 円にて交換できたとの事である。盗難は夜が多かったので、不寝番に不寝番を付けよ、との笑い話があった。盗難防止に金網を被せるが効果なし。切れた電球が付けてあったために、1987 年（昭和 62 年）の知多南浜荘戦友会にて、石田中尉に電球盗難事件を話すと、極度の電球不足のため、２回くらい内地に電球受領に行かれたとの事であり、他の兵舎でも多数の電球が盗難被害にあった模様である。外出時に新品のハンカチに昼食用パン、タバコ（極光）などを持って町にて交換し、飲食等に金を払ったことは無かった。衛兵勤務者の暴行事件、同年兵の逃亡事件等は、昨日のように思い出される。

訓練の一環として、冬季、中隊全員で行う勇壮な雉子（キジ）狩りも、思い出の一つである。出発前、「各人、棍棒（こんぼう）を持って集合せよ」との号令にて約１時間、行軍し、目的地に着く。戦友たちと「空飛ぶキジを捕まえるのに、どうして棍棒が必要なのか」と話し合った。古兵に聞いてもただ笑っているだけだった。現地に着いて、全員が大きく輪になって散開する中を輓馬（ばんば＝車やソリを引かせる馬）にて駆け巡り、雑草内に隠れているキジを追い出すが、始めは 200～300ｍくらい飛ぶが、次は 50～100ｍくらい飛んで雑草に頭だけ突っ込んで胴体は丸見えである。昔のことわざ通り、頭隠して尻隠さずであるため、持参の棍棒にて叩いて捕獲した。棍棒の用途がこれで分かった。２～３時間くらいで 30 羽ほど捕獲したと思う。帰隊後、キジは炊事に差し出し、夕食にはキジすき焼きを全員で食べた。肉は野生のためか、内地の鶏肉より遥かにうまかった思い出がある。

12 月に入り、炊事勤務を命ぜられ、入山軍曹（班長）と渡辺古兵に、料理の急所、要領を手取り足取り、熱心に指導して頂いた事、また、正月用餅つきでは、つき上がった餅を叺（かます＝わらで編んだ袋）に入れて室外に置くと、約１時間にて冷凍庫内食品のように固くなる。食べる時には、内務班のペーチカ（ロシアの暖炉兼オーブン）の付近に置いておくと、つきたての様に柔らかくなった餅を食べたものだ。



叺（かます）



ペーチカ（ペチカ）

炊事勤務を下番後、石田中尉の当番に命ぜられ、営外官舎の居住となった。食事は良く、将校官舎の奥様方にお願いして色々作ってもらったものだ。当時は、虎林の町に公用外出をし、買い物見聞等、軍律厳しい部隊内での生活とは大違いで、約６ヶ月間の当番生活にて、体重も若干増え、心の保養ができた。軍隊は運隊と言うが、勤務内容、箇所によって大違いであることを身をもって体験した。

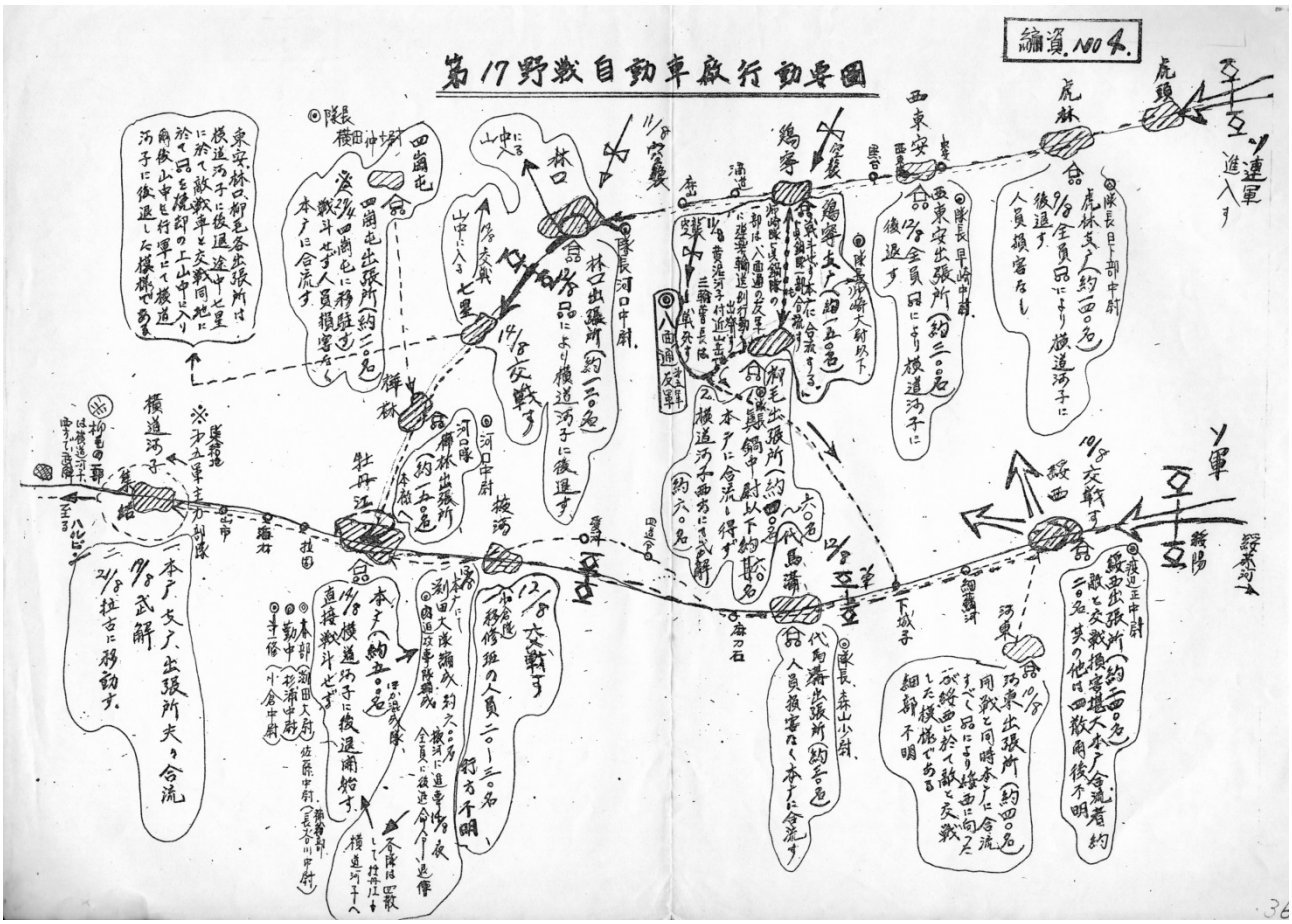
1945 年（昭和 20 年）５月６日、眞鍋中尉以下、約 20 名と共に、柳毛（りゅうもう）出張所に転属した。柳毛は、鶏寧（けいねい）支廠（ししょう＝食料や飼料などの保管・補給・製造施設）より南の方角、山の中ほどで、周辺は山また山の静かな寒村であった。山の麓（ふもと）には開拓団の部落があり、若い女性が４名くらい、部隊事務所にて電話交換、事務関係の仕事をしていた。



柳毛開拓団の跡地

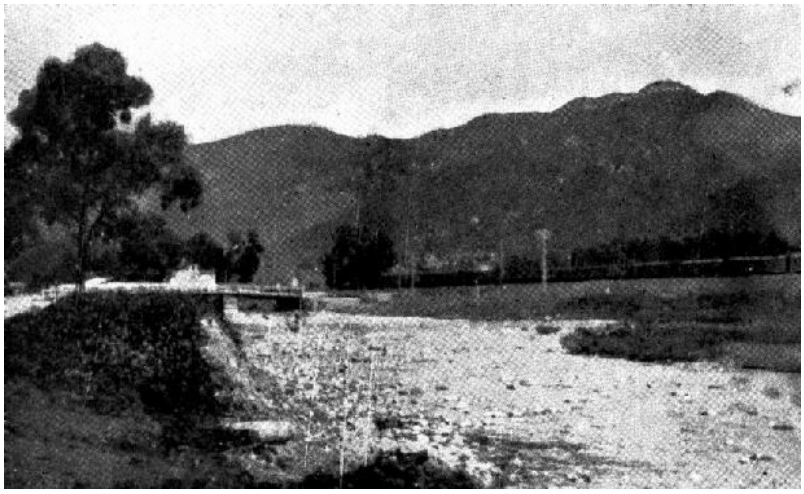
柳毛部隊での作業も、虎林部隊と同じで、燃料補給、整備等であったが、ドラム缶（ガソリン 200L 入り）が数百本、野積みにされていたことには驚いた。特に火気取扱には厳しい規則があった。業務連絡にて鶏寧支廠によく行ったが、鈴木軍曹には色々とお世話になった。

1945 年（昭和 20 年）８月 8 日～9 日、両日の前任不寝番より、今夜は飛行機がよく飛んでいるとの申し送りがあった。何事も無ければよいがと思いながら勤務終了、後任者に注意事項などを申し送りして内務班にて就寝準備中、全員に完全軍装にて兵舎前に集合せよとの非常呼集がかかり、班別に整列する。眞鍋中尉より、ソ連軍侵略により林口（りんこう）部隊と合流するとの伝達があり、すぐに出発する。残務整理班として、松本軍曹、私（鳥谷）、小柳上等兵、上等兵１名、以上４名にて、重要書類などを焼却後、野積みの燃料（ドラム缶）を鶴嘴（つるはし）にて穴を開け、火をつける準備中、ソ連機の掃射を浴びたが、入隊後、初めての戦争体験にて強烈なショックを受けた。ソ連機が旋回し、再度、射撃体勢に入ったため、命あっての物種（ものだね）と部隊の後を追って柳毛駅に向かって出発した。開拓団部落の横を通ったら、畑から開拓団の人達が、「今日は朝から兵隊さんが通らんが、どうしたのかね」と聞かれ、顔色が変わり、胸が傷んだ。部隊は、毎日、訓練のため、開拓団の横の道路を通っていた。我々の前に出発した部隊が、何も連絡せずに後退したなと思った。ソ連軍の攻撃が間近に迫っているから、すぐに引き揚げるようにと通達して柳毛駅に急いだ。



駅では、最後の列車にて鉄道線路を爆破して出発するため、出発時刻ギリギリまで待ったが、開拓団の人達は誰一人、姿を見せなかった。戦後、開拓団の人達は無事、内地に変えられたか、今も心に残っている。鶏寧市支廠を眼下に見渡す場所に来た時、鶏寧部隊は撤退最中で、トラックが長蛇の列であったが、ソ連機が上空を旋回しており、衛門をトラックが一台でも出ると掃射を浴びせかけ、衛門前にて炎上し、見るも無惨であった。部隊を追って林口に移動するが、客車は少なく、民間人、開拓団の人達を乗せ、多数の無蓋車（むがいしゃ）には兵隊ができるだけ多く乗り込んでいた。途中、ソ連機の掃射を度々浴び、何度となく生死の境を往来したことか。ただただ無蓋車の底にひれ伏すのみ。耳元をかすめるピュー、ピューと不気味な弾の音だけであり、我々は、それに対し何らの反撃もできず、口惜しさ、腹立たしさ、情けなさ。反撃する武器もなく、ただ、敵のなすままであった。何とか林口駅に着いたが、無蓋車が多かったため、多数の負傷者が出た。駅構内にも兵隊、民間人等の負傷者、死者が多数出ており、目を覆う悲惨であり、気にはなったが、軍律厳しい軍隊のため、自由にはならず、松本軍曹等と共に、林口師崎隊に合流した。軍司令部では、ソ連軍侵略の情報を事前にキャッチし、作戦上、撤退の美句のもとに、我々よりいち早く後方に退去のため、我々の部隊も、林口出張所を放棄、横道河子（おうどうかし）に着くが、無条件降伏の報を聞き、武装解除不滅を誇った日本帝国陸軍は遂に滅びた。誰が今日有る事を想像しただろう。



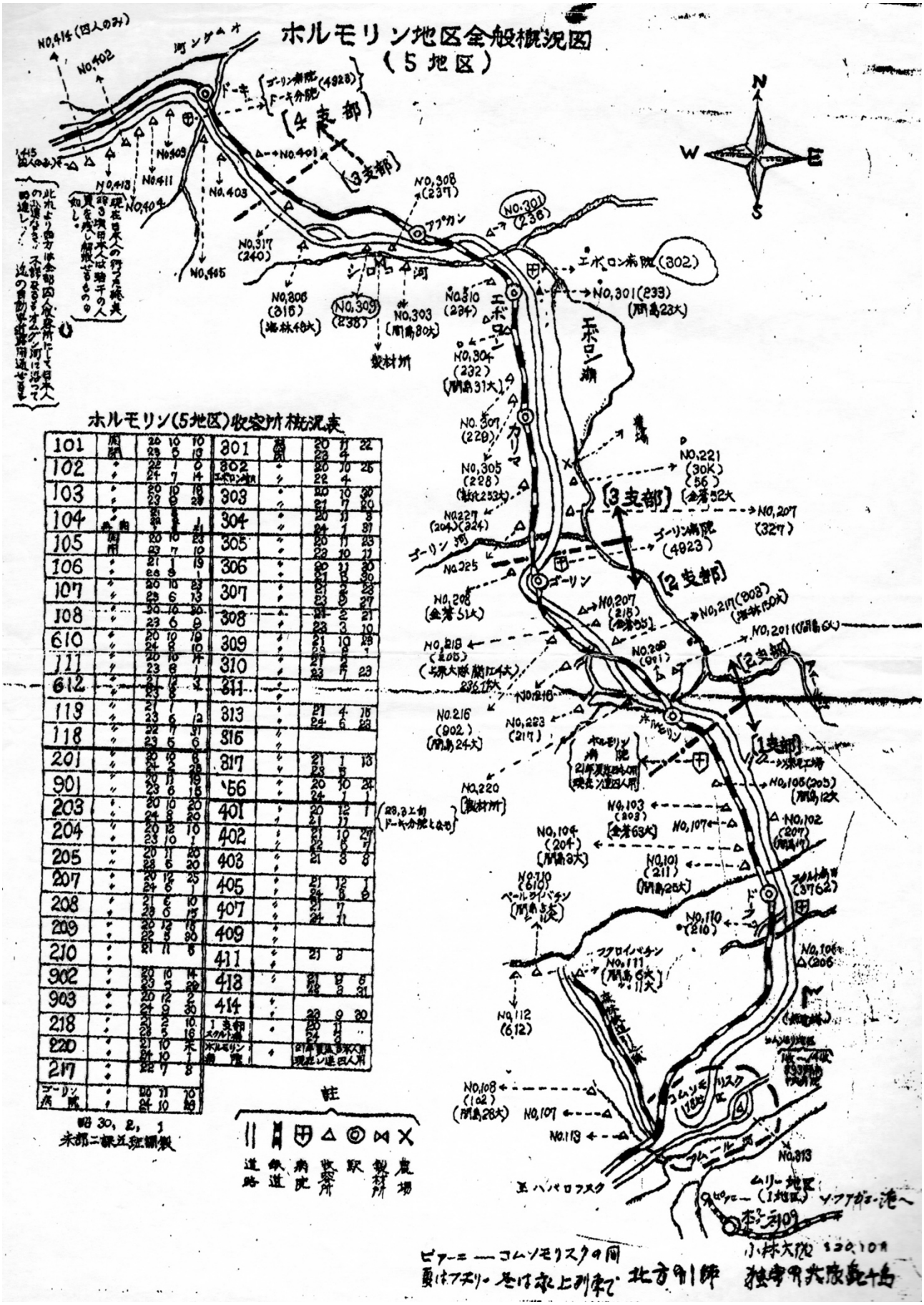


横道河子

かくして厳寒シベリアでの伐採、コルホーズ（ソ連の集団農場）建築作業等の抑留３年２ヶ月の生死の生活が始まった。帰国を夢見て、飢えと寒さのため、異国の丘に眠った死者 68,000 名、復員後、抑留生活の後遺症のために亡くなられた多数の同胞のご冥福を謹んで祈ります。



コルホーズ



ホルモリン地区全般概況図



事實證明書

（日 27 月 9 年 23 昭和）日月年陸上 （丸 復永）名船

本籍地 愛知県名古屋市昭和区堀江町一ノ三〇番地

復員後の連絡先 愛知県名古屋市昭和区堀江町一ノ三〇番地

所属部隊 満洲第二六三部隊 原隊

官等級 陸軍上等兵

氏名 鳥谷定夫

勤務地名 満洲虎頭ヨリ連行ロシヤ、ウゴダオレキオフカヤヨリ ナホトカ

経歴（入隊より歸還迄） 自昭和 17 年 11 月 日 至昭和 23 年 9 月 24 日

傷（病）名 右顔面骨部挫傷

發（傷）病年月日所場 昭和 23 年 2 月 20 日（ウゴダオレキオフカヤ収容所ニテ）

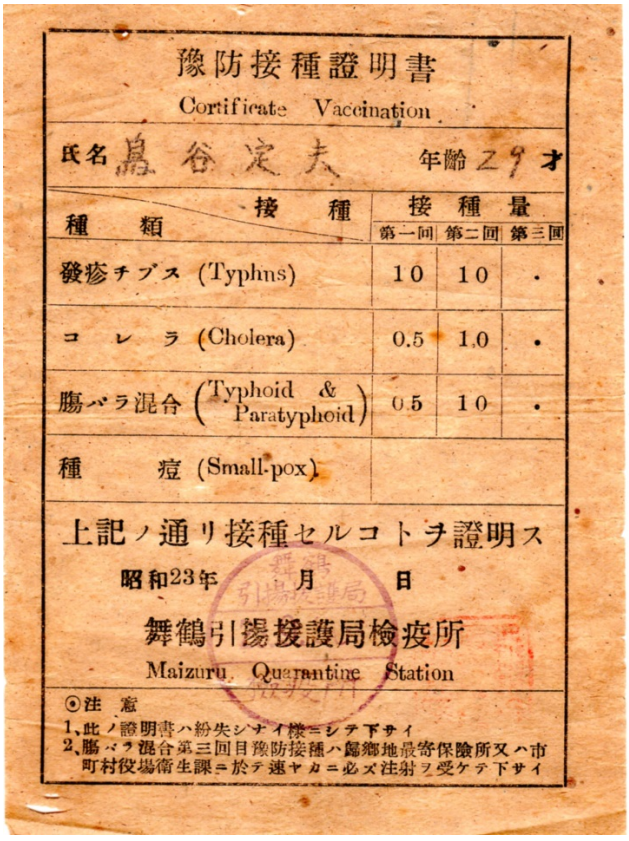
發傷（病）狀況 戰車部隊自動車横断中定場ノ雪ノ凹ニ足ヲ踏ミ外シ横ニ倒レル際深サ約 1m 位ノ雪ノ凹ニ顔面ヲ打チ付ケ挫傷ス

右の通り證明する

昭和 23 年 9 月 19 日

舞鶴引揚援護局復員部長 一色正雄

備考 歸郷先の世話課（旧



予防接種証明書

豫防接種證明書

Certificate Vaccination

氏名 鳥谷定夫 年齢 29 才

接種種類	接種量 第一回	第二回	第三回
發疹チブス (Typhus)	1.0	1.0	.
コレラ (Cholera)	0.5	1.0	.
腸パラ混合 (Typhoid & Paratyphoid)	0.5	1.0	.
種痘 (Small-pox)			

上記ノ通リ接種セルコトヲ證ス

昭和23年 月 日

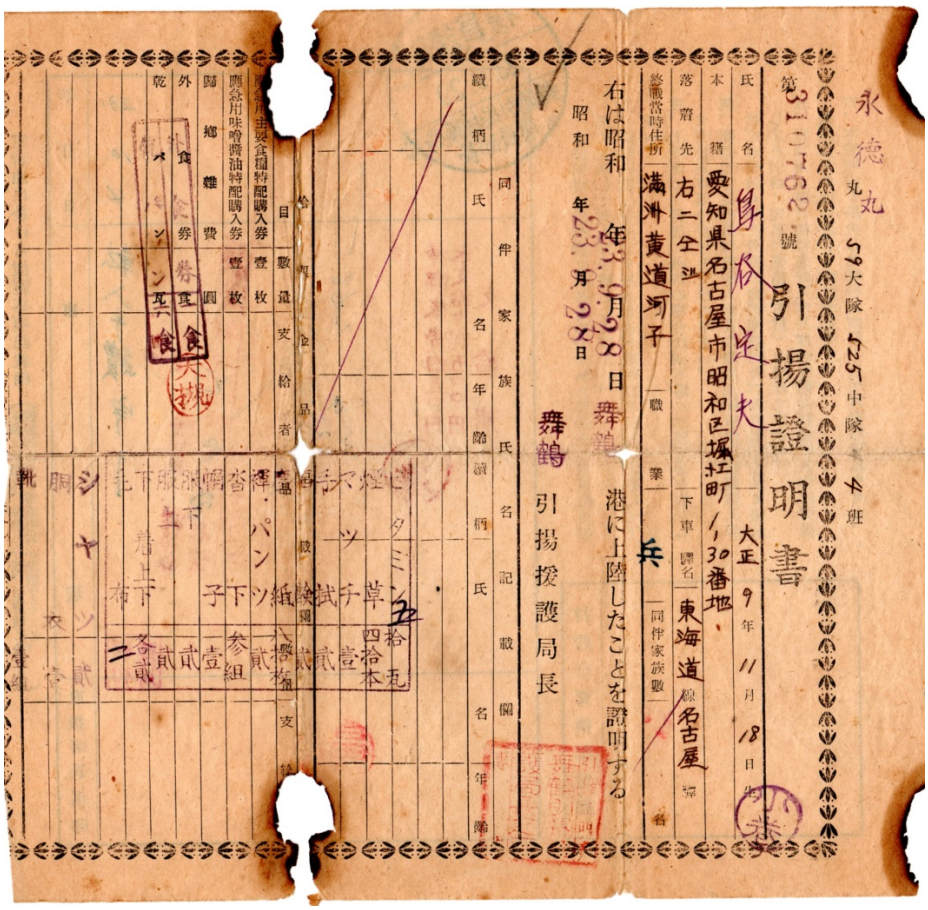
舞鶴引揚援護局検疫所

Maizuru Quarantine Station

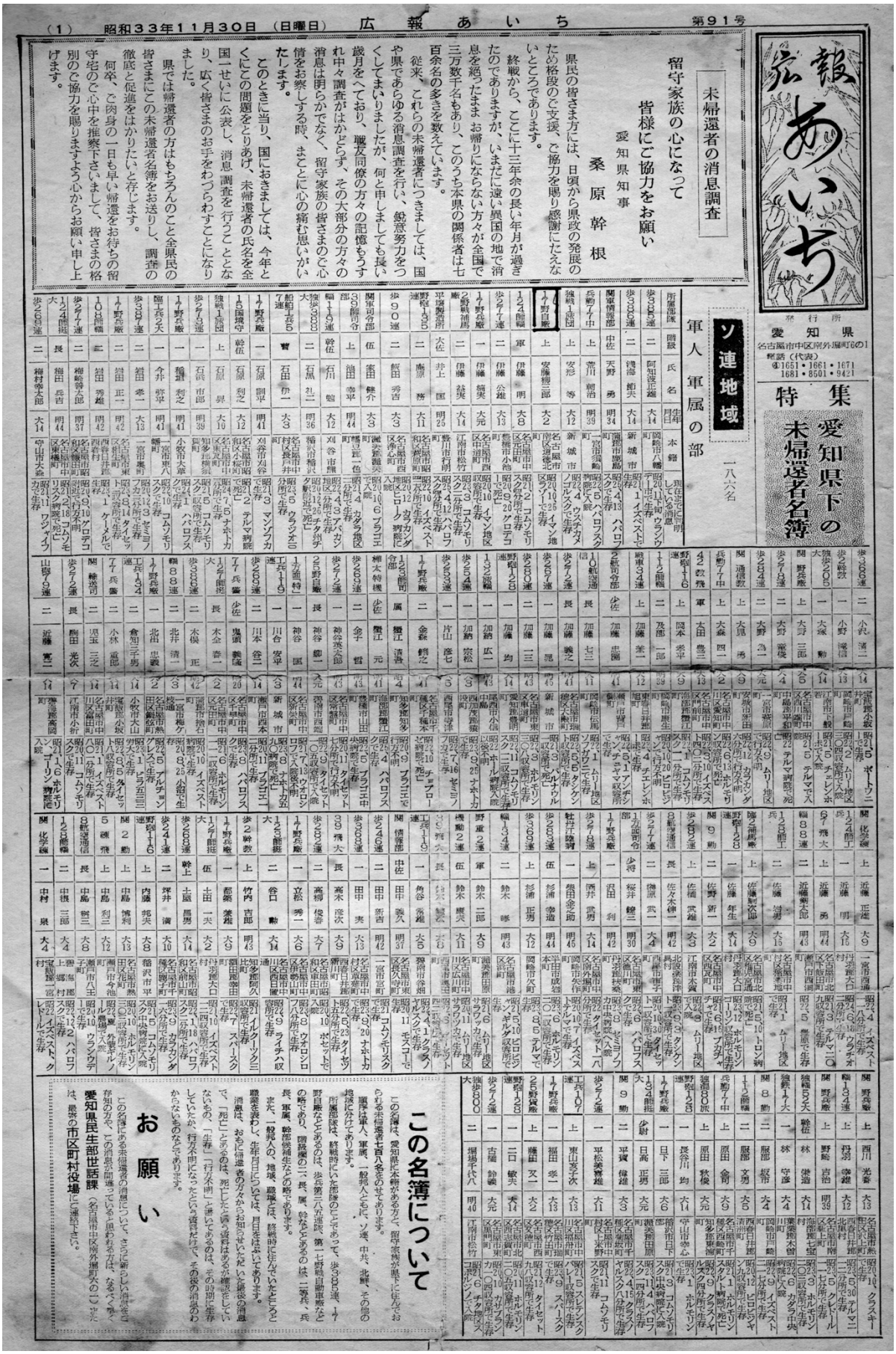
⊙注意

1、此ノ證明書ハ紛失シナイ様ニシテ下サイ

2、腸パラ混合第三回目豫防接種ハ歸郷地最寄保健所又ハ市町村役場衛生課ニ於テ速ヤカニ必ズ注射ヲ受ケテ下サイ


永徳丸
引揚證明書
氏名
本籍
落着先
船舶名
下車駅名
同伴家族数
右は昭和 年 月 日
舞鶴
引揚援護局長
同伴家族氏名記載欄
携帯品
目録
食券
ビタミン丸
ハッカ
パンツ
シャツ
靴下
毛布
復員証明
舞鶴引揚援護局
復員部長
定着地に於ける援護事項記載欄
年月日
事項
取扱者氏名印
持帰金交換記載欄

引揚証明書（表・裏）


（1）　昭和33年11月30日（日曜日）　広報あいち　第91号

広報あいち

発行所　愛知県　名古屋市中区丸外堀町7の1　電話（代表）㊂1651・1661・1671　1681・8501・9421

特集　愛知県下の未帰還者名簿

未帰還者の消息調査

留守家族の心になって　皆様にご協力をお願い

愛知県知事　桑原幹根

県民の皆さま方には、日頃から県政の発展のため格段のご支援、ご協力を賜り感謝にたえないところであります。

終戦から、ここに十三年余の長い年月が過ぎたのでありますが、いまだに遠い異国の地で消息を絶ったままお帰りにならない方々が全国で三万数千名もあり、このうち本県の関係者は七百余名の多きを数えています。

従来、これらの未帰還者につきましては、国や県であらゆる消息調査を行い、鋭意努力をつくしてまいりましたが、何と申しましても長い歳月をへており、戦友同僚の方々の記憶もうすれ中々調査がはかどらず、その大部分の方々の消息は明らかでなく、留守家族の皆さまのご心情をお察しする時、まことに心の痛む思いがいたします。

このときに当り、国におきましては、今年とくにこの問題をとりあげ、未帰還者の氏名を全国一せいに公表し、消息調査を行うことになり、広く皆さまのお手をわずらわすことになりました。

県では帰還者の方はもちろんのこと全県民の皆さまにこの未帰還者名簿をお送りし、調査の徹底と促進をはかりたいと存じます。

何卒、ご困身の一日も早い帰還をお待ちの留守宅のご心中を推察下さいまして、皆さまの格別のご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

ソ連地域　軍人軍属の部　一八六名

所属部隊	階級	氏名	年月	本籍	現在なるに同明
関軍情報部	中佐	天野　勇	明34	滋賀県蒲生郡日野町	昭25.4.13 ハバロフスク分所で生存
独歩7ノ中	上	荒川　朝治	明39	愛知県知多郡一色町	昭22.4 ウスチカメノゴルスクで生存
独戦1歩団	上	安形　等	大12	新城市	昭20.10.25イマン地区ラゾーで生存
歩3305連	二	阿知波正雄	大14	岡崎市八幡町	昭20.11.15ウラジオストク分所で生存
歩3306連	二	後藤　節夫	大14	新城市	昭25.4.13 ハバロフスク分所で生存
関軍情報部	中佐	天野　勇	明34	滋賀県蒲生郡日野町	昭25.5 ハバロフスク分所で生存
独戦1歩団	上	荒川　朝治	明39	愛知県知多郡一色町	昭22.4 ウスチカメノゴルスクで生存
独戦1歩団	上	安形　等	大12	新城市	昭20.10.25イマン地区ラゾーで生存
歩3307連	二	後藤　節夫	大14	新城市	昭25.4.13 ハバロフスク分所で生存
歩7ノ野自隊	上	安形　等	大12	新城市	昭20.10.25イマン地区ラゾーで生存
122師輜	軍	伊藤　明	大8	名古屋市中区丸田町	昭22.2 ゴムソモリスク分所で生存
歩7ノ連	二	伊藤　公雄	大13	豊橋市小池町	昭20.9.20 クロテコで死亡
1ノ野兵廠	一	伊藤　福実	大元	名古屋市西区中道町	イマン地区収容所で生存
2野戦補馬廠	二	伊藤　益実	大14	江南市松竹	昭23.3 コムソモリスク二分所で生存
平壌製糖所	大佐	井上　国	明25	愛知県知多郡阿久比町	昭22.4 ハバロフスク分所で生存
野砲1ノ35連	二	鵜原　務	大11	名古屋市西区那古野	ナホトカで生存
歩90連	二	飯田　秀吉	大3	名古屋市西区那古野	昭20.12 ウラジオストク分所で生存
関軍司令部	伍	塞田　健介	大3	愛知県知多郡阿久比町	昭20.10.6 ブラゴエ
関軍司令部	伍	塞田　健介	大3	愛知県知多郡阿久比町	昭20.10.6 ブラゴエ
39師司令部	上	池田　幸平	明44	名古屋市中区栄町	昭20.9 カタンカ地区二分所で生存
輜13連	曹伍	石川　愉	大12	名古屋市昭和区御器所	昭20.12 カタンカ地区二分所で死亡
独歩308大	二	石黒　礼二	明36	稲沢市稲沢町	昭20.9 ウラジオストク分所で生存
船舶工兵5ノ連	曹	石田　静一	大3	名古屋市中区丸田町	昭21.3 マンジカ
1ノ野兵廠	一	石原　訓平	明41	刈谷市刈谷	昭21.2 テルマ病院で死亡
15国境守備隊	曹伍	石原　利之	大12	名古屋市昭和区御器所	昭24.7 ナホトカ
独戦1歩団	上	石原　昇	大10	名古屋市中区栄	昭20.8 ナホトカ
歩7ノ連	一	石浜　市郎	明39	知多郡横須賀町	昭20.5 コムソモリスク収容所で生存
1ノ野兵廠	一	稲置　利之	明41	小牧市大草	昭20.12.3 コムソモリスク二分所で生存
臨工兵2大	一	今井　幸平	明41	一宮市東八幡	昭22.10.28 ハバロフスク分所で生存
歩38連	二	岩井　幸一	大13	名古屋市東区白壁	昭20.12.3 ウラジオストク分所で生存
1ノ野兵廠	一	岩田　正一	明42	名古屋市東区白壁	昭20.12.3 ウラジオストク分所で生存
108輜	二	岩田　秀雄	明42	名古屋市西区那古野	昭20.9.1 ケールで生存
歩27ノ連	二	稲崎等太郎	明37	名古屋市中区東桜町	昭21.2.18 コムソモリスク病院で死亡
歩27ノ連	二	稲崎等太郎	明37	名古屋市中区東桜町	昭21.11 ワジャイプカで生存
124師捜大	長	稲田　兵吉	明44	愛知県知多郡東浦町	昭22.4 ウスチカメノゴルスクで生存
歩269連	二	稲村栄太郎	大14	守山市大森	昭21.11 ワジャイプカで生存
歩266連	二	小沢　清二	大13	名古屋市熱田区伝馬町	昭20.10 クラスキーで死亡
輜134連	上	小野　福雄	大12	名古屋市中区丸外堀町	昭22.4 ムーリ捕虜収容所で生存
独歩205大	一	大塚　勲	大14	名古屋市中区丸外堀町	昭21.3 チェレンホボで死亡
関野兵廠	上	大野　三郎	大元	名古屋市中区丸外堀町	昭21.5 テルマで入院
歩264連	二	大野　勝信	大13	名古屋市中区丸外堀町	昭22.2 ムーリ捕虜収容所で生存
歩268連	二	大野　義信	大13	名古屋市中区丸外堀町	昭22.2 ムーリ捕虜収容所で生存
関野兵廠	上	大野　三郎	大元	名古屋市中区丸外堀町	昭21.5 テルマで入院
独歩205大	一	大塚　勲	大14	名古屋市中区丸外堀町	昭21.3 チェレンホボで死亡
関通信教	上	大見　勇	大13	名古屋市中区丸外堀町	昭21.5 テルマで入院
関野兵廠	上	大野　三郎	大元	名古屋市中区丸外堀町	昭21.5 ポートワニで死亡
歩266連	二	小沢　清二	大13	名古屋市熱田区伝馬町	昭20.10 クラスキーで死亡
輜134連	上	小野　福雄	大12	名古屋市中区丸外堀町	昭22.4 ムーリ捕虜収容所で生存
独歩205大	一	大塚　勲	大14	名古屋市中区丸外堀町	昭21.3 チェレンホボで死亡
関野兵廠	上	大野　三郎	大元	名古屋市中区丸外堀町	昭21.5 テルマで入院
歩264連	二	大野　勝信	大13	名古屋市中区丸外堀町	昭22.2 ムーリ捕虜収容所で生存
歩268連	二	大野　義信	大13	名古屋市中区丸外堀町	昭22.2 ムーリ捕虜収容所で生存
関野兵廠	上	大野　三郎	大元	名古屋市中区丸外堀町	昭21.5 ポートワニ

第３章　一般市民の軌跡

男狩り　～若尾和延の証言

満州（現＝中国東北部）で働いていた日本人男子はソ連軍の侵攻に備えて、ほとんどが兵隊にされた。ソ連は兵隊を捕虜にしてシベリアに連行し、兵隊になれなかった体力の弱い若い男子を「男狩り」して兵隊と同じように連行し、戦争で疲弊したソ連諸産業の復興のためにただ働きさせた。

私は 1945 年（昭和 20 年）12 月、ハルピンで「男狩り」された。満州全土から「チタ」に集められた男は千人単位で、全員、シャワー中に持参したものを全部略奪され、代わりに薄っぺらでヘンテコな服を着せられて「アルマテイ」（カザフスタン共和国南東部の都市）へ連行された。その後、更に奥の「タシケント」（ウズベキスタン北東部）、天山山脈の雪山が見られる僻地（へきち）の収容所に入れられた。連行される途中の貨車内で発疹チフスが蔓延（まんえん）するなど、不衛生な環境だったので先が心配された。



貨車で運ばれる捕虜



天山山脈

収容所のベッドは板張り 3 段式で、毛布が一人 1 枚。ストーブをたくと 3 段目は熱くて裸になり、1 段目は毛布 2 枚でも寒かった。「熱いからストーブをたくな。」「1 段目と交代させるぞ。」と初日から熱い寒いでけんかが始まった。食事は少量で粗悪だから全員が飢餓状態。夢遊病者の足取りで製粉工場のノルマに追いかけられながら働いていた。私は作業中、足場が崩れて転落し骨折した。もちろん薬などない。傷の手当は 3 日に 1 回、包帯代わりの布を巻き替えるだけのことだった。

突然「移動だ。」と言われ、栄養失調患者と一緒に私は担架のまま貨車へ押し込まれた。内心「帰れるかも。」と期待していたら「カラガンダ」（カザフスタン共和国）で降ろされた。辛抱も忍耐も限界だったので通訳を通して改善を要求すると「お前たちは戦争に負けた国民だ。しかも資本家の手先になって中国を侵略し、中国人民を搾取した極悪人だ。資本家の番犬を保護する責任はソビエトにはない。お前たちは自分の所属を証明する名簿すらないではないか。お前たちの生死は我々の関知するところではない。」と言われた。

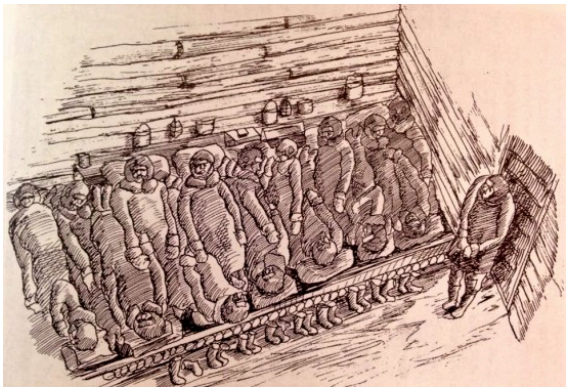
病気になれば治療もなく死を待つだけだった。ロウソクの火が消えるように死へ直行。私は妻と 3 人の子、年老いた母、兄弟のいる日本に帰りたい一心で、生き残るためにあらゆる努力をした。「若尾は豚も食わぬ草を食べている。畜生以下に成り下がったヤツだ。」と冷笑した人は栄養失調で死んでしまった。自然の恵みは実にありがたいもので、春から夏にかけて萌え出る若草には生きる魔力が蓄えられていた。自然の栄養に感謝の念をささげたものだった。本当にあの頃は、生き残るために燃えに燃え、そして苦しんだ日々だった。

ソ連は「中国人民を解放した救世主である。」と宣伝しつつ、日本国民の非戦闘員を何十万と拉致（らち）し、自国の戦後復興のために非人間的な扱いで強制労働をさせたことを世界の人々は知っているのかと言いたい。

シベリアに抑留されたのは兵隊だけではない。一般市民もソ連の戦後復興のために「男狩り」され中央アジアで大勢が死んでいった。最近、戦争をしたがる人がいるようだが負ければ私のようにされることを承知して賛成すべきだ。もちろん私は二度と御免（ごめん）だ。



カラガンダ


収容所で体をよせ合って寝る様子


カラガンダの工業地帯

第４章　逃避行　～満州在住女性の軌跡

従軍看護婦の軌跡　～小宮山里野の証言

私が、日本赤十字、山梨支部で奉職中、第 462 救護班要員として満州（中国東北部）の北満、孫呉陸軍病院に配属されたのは、戦争もたけなわの 1943 年（昭和 18 年）8 月上旬だった。赴任すると満州は想像通り。広く壮大な広野に軍歌「戦友」の「赤い夕日に照らされて･･･」の歌詞そのままの真赤な大きな夕日が地平線のかなたに沈む輝きは、筆舌では表現できないほどの感動ものだった。内地と同じく満州にも戦争はなく、演習や訓練時などでけがをしたり、冬に凍傷になったりした兵隊さんたちの看護をしていた。



満州の風景

戦争が熾烈（しれつ）になると将兵たちも続々と南方に赴き、何人かの看護婦も同行転属したので病院も手薄になり多忙を極めた。渡満して 3 度目の夏が訪れた 1945 年（昭和 20 年）、迎春花（インチュウホウ）の咲く 5 月、私は同僚 3 人と共に最北陣地の瑷琿第六国境守備隊へ業務援助の派遣を命じられた。孫呉は師団司令部もある都であったが、瑷琿は鳥も通わぬ「辺境の地」だと聞かされていた。第六国境守備隊は開戦後 3 時間で玉砕する捨石守備隊と聞かされていたので、それなりの覚悟をした。



迎春花

懸念であったソ連の攻撃が始まった。看護婦たちは「3時間の命よ。」と励まし合ったのを覚えている。私たちの任務は一刻も早く負傷兵を安全な場所へ移送することだった。絶対安静の患者を含む全員を、担架で山奥の陣地にある壕（ごう）へ必死で運び、再び戻ることはできないであろう病院を自分たちの手で焼き払い、燃え盛る炎を背中に浴びながら壕へ向かった。壕の中はろうそくの明かりが頼りで、負傷兵の血なまぐさいにおいと苦痛で叫ぶ声の中で看護に当たった。新たな負傷兵も次々と運ばれてきて、わずかな衛生材料で水もなく十分な手当てができない悲惨な状況だった。



従軍看護婦

圧倒的に多いソ連軍は、すぐ壕の出入り口を発見し、入り口を目標に日夜、迫撃砲を休む暇もなく撃ちこみ、日本軍を壕の中に封じ込める作戦に出た。武器弾薬を沖縄と九州に送り、戦車攻撃用の爆薬しかなかった。特攻に決まった兵は隠れて「お母さん。」とおえつをもらしていた。励ます言葉も見当たらない私は、その姿に合掌するのが精一杯だった。出撃が近づくと振り切れたのか「小宮山婦長殿、〇〇上等兵は明日、正午、肉迫攻撃に出撃します。お願いです。手を握って励ましてください。」と。無駄だと知りながらも決められた順番に爆弾を抱いて雄々しく敵戦車を爆破するために出ていった兵はだれ一人として帰ってこなかった。

8月15日頃からソ連軍の攻撃が弱くなっていた。守備隊はソ連軍の戦力低下だと意気天を衝く武勇となり「攻撃の手を緩めるな。」と盛んに執拗（しつよう）に日本軍特有の夜襲、切り込み隊、奇襲などの出撃を繰り返したが、敵も防御を固め、敵陣にたどり着くことが困難になっているようだった。その証拠に壕の出入り口への迫撃砲の攻撃も少なくなっていた。次の日、私たちは恐る恐る外に出てきれいな空気を充分に吸った。激しい戦闘を忘れたような静けさが訪れたときもあった。

ふもとの方では出撃した守備隊兵を狙い撃ちするソ連兵の自動小銃音が聞こえることもあったが、戦車爆破成功の大炸裂音は次第に減っていった。収容した負傷兵の何人かが昇天した。その都度、私たちは遺品を整理して遺体を近くの安全な場所に葬り、その度に「出撃して帰らぬ兵士は野ざらしのままか…。」と思うと、死者の無念とご遺族への思いに心が痛んだ。

食料も底をついてきた 21 日の朝、ソ連兵が白旗を掲げて近づいてきた。私は不思議な面持ちでその様子を見守っていた。日本軍陣地へ向け、強力なソ連戦車軍団の侵攻を「人間爆弾」で食い止め、ソ連軍と対等に戦い、今も陣地を守り抜いている守備隊員は、白旗を降伏の軍使と思い「日本が勝った。万歳、万歳。」と喜び、感激し、踊り狂って男泣きする者もいた。そして敵から 15 日に天皇が日本の負けをラジオで全世界に向け放送し、降伏していると教えられ、握りこぶしをひざに押し付けて無念の涙にくれた。あの悲壮な攻防戦は何だったのかと思うほど守備隊は抵抗せずにすんなりと降伏し、武装解除されソ連兵に連行された。無敵を誇った関東軍の中でも精鋭集団と認められていた国境守備隊が、静かに降参する不思議さを沈黙して見守っていた。死ぬと知りながら敵戦車へ、戦争が終わっていることも知らずに突撃し、民間人の命を守った守備隊員の後姿に、その誇りはなかった。

残された私たちは茫然自失（ぼうぜんじしつ）で、どのように兵隊と別れを告げたのかよく思い出せない。しかし北へ向かって力なく歩む将兵の武器を持たない軍服だけの後姿には、忘れることのできない哀れさがあった。彼らは山ろくの戦車壕内側に 1 人のソ連兵も戦車の侵入も許さず、9 日から 21 日まで、助けてと逃げ込んできた 300 人以上の老若男女を全員保護し、非戦闘員の私たちを 1 人も死なせず守ってくれた。

私たちは歩くことのできない負傷兵を馬車（マーチョ）に乗せ、瑷琿（あいぐん）から朝水を通る軍用道路を孫呉へ向けて徒歩で出発した。軍用道路では、筆舌では表現できないほどの激しい戦闘が繰り広げられていたことが分かった。戦死者が携帯していた武器弾薬もそのまま、だれも片付けず散乱し、破壊炎上した戦車、軍服でやっと敵味方が区別できる白骨化の進んだ遺体。この凄惨（せいさん）な姿におののく私たちと対照的なのは負傷兵だった。彼らは自分たちの守備区域を「俺らの庭」と呼び、土足で踏み込んできたソ連兵が許せず、散乱している武器弾薬を隠し持ちたいと私たちにせがんだ。前方の峠からが朝水守備隊の防衛地区だと負傷兵たちが教えてくれた。



逃避行する民間人

峠への道は、戦死者の放置死体も見当たらず、長いダラダラ坂で、疲れている体にむち打って一生懸命歩き、峠に着いたのは日没後。高い地形は見張りやすいのかソ連兵が宿泊場所と決めた。テントも敷物もなく、そのままの姿での野宿だった。自動小銃を小脇に抱えたソ連兵の監視の中で、恐怖と夜は冷え込む北満の夏なので、ガタガタ震えながら肩を寄せ合い、横になる寝姿は１人もなく、腰を下ろしたしゃがみ姿での一夜だった。しばしまどろむと夜が明け、目覚めた者たちが次々に騒ぎ出した。見回すと峠からの下り坂、朝水陣地へ向けてソ連兵の死骸（しがい）があちらこちらにわら人形のように散乱していた。日本兵の死骸は見当たらないのが救いだった。



小川に横たわる死体

言葉の通じないソ連兵に追い立てられ、乾パン 10 粒の朝食を食べ、重い足を引きずり出発した。朝水守備隊激戦地の山麓（さんろく）を通った。意気盛んだった負傷兵たちも朝水守備隊攻防戦の凄さを目の当たりにし、意気消沈したようだった。誰もが固唾（かたず）を飲み、全員沈黙して私語もなく、恐る恐る歩いた。突然、ソ連兵が狂ったように大声で叫び、日本兵の死骸に向けて自動小銃を乱射した。返す銃口で私たちも殺されると覚悟した。この事件後、負傷兵も民間人も改めて自分たちが敗戦国民だと認識したのか大人しくなり、無理難題を言う者はなくなった。半日かけ、朝水守備隊激戦地を抜け、さらに悪路を進むと、道路沿いにモンペ、和服、日本人の死骸が現れた。「守備隊へ逃げ込んだら、わしらのように助けてもらえたのに。」と老婆が死人に教えながら念仏を唱えていた。自殺か、ソ連兵か満州人に殺されたのかは分からない。満州人の土地財産を取り上げ、反抗的な態度を見せると逮捕して 731 へ送り･･･。「日本鬼子（リーベン・クイズ)」と陰で恐れられ、表面だけニコニコしていたのを見抜けずに仲良しと錯覚していた。王道楽土、五族協和はひとりよがりで、日本を憎む者はオロチョンを除き、国境へ近づくほど多いと言われていた。

6回の野宿を繰り返し、半死半生で孫呉の原隊を探し出した。日本人の建物は満州人に取られ、日本人は貧民窟に追いやられていた。「小宮山婦長以下、3名、瑷琿より負傷兵、在留邦人を引率してただいま到着しました。」と申告すると気を失った。気がつくと苦力（クーリー）小屋の土間、土の上に毛布一枚で寝かされ、冷えた土から、ご主人様は中国人だと分かった。心身共にやつれきった病人の中には「殺してくれ。」と叫ぶ人もいた。「祖国へ帰る日までがんばるのよ。」と励ましつつ、あふれる涙をどうすることもできなかった。

ここでもわずかな医薬品で看護を続けた。高粱粥（こうりゃんがゆ）をすすり、野草を食べ、遜比拉（ソンピラ）川の小魚をたんぱく源にした。大陸に秋はなく、一足飛びに冬将軍が来襲する。土間にアンペラ1枚の小屋は日毎に寒く、捨ててある枕木を燃やして暖を取ったりした。不潔なのでシラミ（ホワイトチーチー）が大量に発生して発疹チフスに全員がやられ、私も高熱が1週間以上続いて熱にうなされ、故郷に帰った幻覚を見たことを覚えている。栄養も取れず、フラフラして骨と皮ほどに痩せた体にむち打って交互に看護を続けた。他人を頼る人から脱落死。頼られている私たちは倒れても立ち上がる力があったようだ。1946年（昭和21年）の秋に、命からがら祖国の土を踏んだ。

私は一つの事を成し遂げた。私が死を看取った人たちのお名前、性別、年齢、本籍地を記入した紙で、その方々の遺髪と爪（つめ）を包み「私がご遺族に届けなければ。」と肌身離さず持ち帰った。日ソ戦で、孫呉への避難行路や難民収容所にいた人たちのも、本籍地の役場を通してお渡しできた。

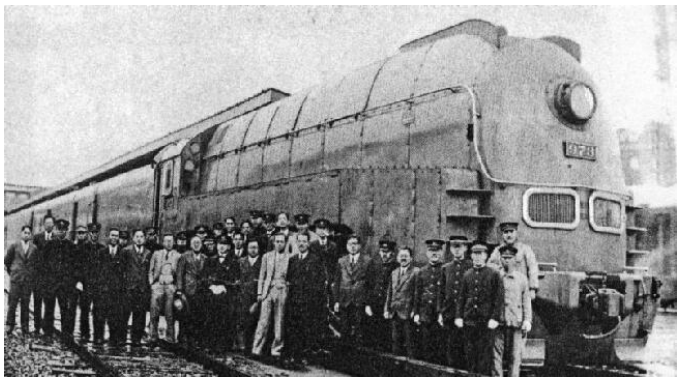
私はこの目で見てきた。敵も味方も、戦場となった異国の地に放置されたままの戦死者を。戦勝国ソ連もお国のために死んだ戦死者を「死んだ人間は用なし。」と使い捨て放置したままだった。戦車の上に敵味方が折り重なって死んでいた。人は死ぬと土に還る（かえる）という。敵味方が同じ満州の土に仲良く還ってくれていると思う。

私は戦争を体験した1人として「戦争の悲惨、残酷さを1人でも多くの人に伝えなければ。」と義務感に駆られている。人間のエネルギーは、地球の平和と人類の福祉にこそ注がなければならない。ご遺族に骨も遺品も届かないのが戦争なのだ。

戦争になったら今度はあなたかもよ　～沢井冨子の証言

忘れもしない 1945 年（昭和 20 年）8 月 9 日。ソ連軍は目の前の黒龍江を渡河して、私の住むソ満国境の黒河に侵攻した。関東軍（満州にいた日本陸軍の別称）が人間爆弾でソ連軍の市街地侵攻を阻止している最中、隣組から「これが最後です。」と届けられた回覧板には「缶詰を取りに来る事。今夜 0 時迄に黒河駅に集合。それまでにもしものことがあった時は、まず子供の頸動脈（けいどうみょく＝首の血管）を切り、その後、自決せよ。」と書いてあった。ソ連軍の砲弾がうなりながら頭上を飛び、各所に命中爆発している最中の出来事だった。

この年の 5 月 22 日、満州鉄道に奉職していた夫は赤紙応召され、2 才の長男、7 ヵ月の長女と私の 3 人で満鉄の社宅に住んでいた。避難するにあたり何を持っていくか考え、実印、時計、満鉄家族カード、娘の百日祝いに写した家族 4 人の写真、入隊前夜、主人が私宛てに書いたメモ、乾パン、湯冷まし、娘のオムツなどを大きな布袋に詰めて肩から掛けるようにした。衣服は 3 人とも着られるだけ着て、長男は冬オーバ、私は綿の入ったネンネコを着て家を出た。真夏に冬物を着込むのは変だと思われるだろうが、黒河の朝は夏でも大変寒いのだ。毛布もあれもこれもと山ほどあるのに、2 歳と 0 歳と私ではこれが限界だった。持ち出す荷物をまとめている時、顔見知りの満人が家具を売ってくれときたが断ってしまった。どんなに負けていても最後には神風が吹いて日本が必ず勝つと教えられ、この家に親子 4 人で帰って来ると信じていたからだ。避難中、いつも後悔していた。あの時、家具を売ってお金に代えていたらと。



満州鉄道の汽車

駅に向かう人々の列、それは初めて見る体験だった。それぞれが大きな荷物を持って、体を海老のように曲げてふとんを背負っている人。避難する人のうずが右往左往し、道路にはほこりがもうもうと立って、汗の顔に粘りついてきた。一般邦人を優先し、満鉄関係者は最後の列車とのことで、駅で随分待たされた。その時、真っ暗な夜空に「パッ。」と火の手が上がった。誰かが叫ぶように言った。「江岸（黒竜江）の方角だ。日本人が火をつけたのだ。」すると今度は駅の近くで炎が夜空をなめ始め、大人の男性が踊っているような姿が黒く浮かび上がった。「あの人は気が狂ったのだね。」という無感動な声が聞こえてきた。夜空に爆音が近づき「敵機だ。」誰も命令しないのに全員一斉にホームから線路に飛び下りて伏せた。私も 2 人の幼子を線路に寝かせ、その上におおいかぶさって 2 人に「お父さんと同じだよ。お父さんもこうして戦争しているんだよ。」と励ました。東の空が明るくなり 10 日の朝がきたが、まだソ連兵は攻めてこなかった。関東軍が江岸で必死になって守ってくれていたのだ。

朝、やっと無蓋（むがい）貨車一両をつけた蒸気機関車が仕立てられ、最後の満鉄関係者家族が乗り込んだ。ずいぶん荷物を持った人たちがいた。先に荷物を乗せてその上に腰かけて、自分の回りを見るとお年寄りもいた。病人も臨月の人も、満人の兵隊も銃を持って乗ってきた。私たちの護衛だろうか。死がそこまで迫ってきている街から、「生」が約束されているところへ行けたらよいのだが、江岸でソ連軍を食い止めているのは私の夫たちだと信じて、とても緊張した出発だった。出発して間もなく敵機が飛んできた。屋根のない平たい貨車で、空からもどこからも丸見えだった。皆無駄だと知っていても伏せて息をひそめ、背中を敵機の銃に狙われているような恐怖を感じた。脅しにきたのか、銃撃することもなく飛んでいった。列車は何度か止まり、また動いて、いつの間にか長い避難列車になっていた。



無蓋貨車での引き揚げ

そのうち命令がきて。子連れの私は小窓が 2 つ付いた屋根付き貨車に乗り換えた。人か乗っているので扉はいつも少し開けたままだった。袋に入った穀類が積んであり、入口近くに負傷した満蒙開拓青少年義勇軍の少年が一人、頭に白い包帯をして穀類袋に腰かけていた。隣は 50 歳位の男の人、その横には老婆と嫁、そして私たちという 7 人だった。突然、敵機が低空で飛んできて、扉のすきまから敵機の操縦士の顔がはっきり見えて私と視線が合い、恐ろしくてとっさに袋の山によじ登った。その瞬間「シャーッ。」という音が聞こえた。振り向くと今まで包帯をして腰かけていた少年の顔が半分なかった。「シャーッ。」いう音は血が体内から飛散した音だった。50 歳位の男の人は静かに、ゆっくりと胸のポケットから封筒を出して「これを表書きの人に渡して下さい。お願い…。」と言い終わらないうちに音もなく倒れて亡くなった。老婆が「背中が痛い。」と嫁に訴えた。厚い綿入れの背中がちぎれ、背骨に傷がつき血が流れていた。お嫁さんが手当てをされたが…。自己紹介もしないうちに、お互いの名前も分からない人たちが、アッと言う間の出来事だった。

忘れられないことがある。乳飲み子が死んでいるのに、日本の土に埋めるまでは離さないと、真夏なのに、おんぶしているので死臭が凄くなり、周りの人が「歩いて一人で日本へ帰れ。」とどなり、停車中、原っぱに埋められるのを泣く泣く見ていた姿。「私の背中の子はまだ生きている。死なせぬものか。」と、私も一緒になって泣いた。

今度の停車は少し時間があると教えてくれたので、近くの湿地帯へオムツを洗いにいった。北満の原野は「野地坊主」の群生した湿地帯が多く、一株が巨大クラゲほどの野地が沼地に密生していて、戦闘中に隠れるのに絶好の場所になるほどだった。洗いやすいくさむらを探していると、くさむらの中を這い這いしながら、眼をぱっちり開けて私を見上げている老人がいた。遠くから歩いて逃げてきて力尽きたのだろうか、死神のような目で私を見たのだ。私は恐ろしさが先に立ち、助けてあげることもできず、両手を合わせ合掌しながら後ずさりして逃げてしまった。私の心は鬼だったのだろうか。



野地坊主

列車は動き出した。敵機は何度も攻撃してきた。日本の飛行機はどうなったのか、黒河から 304km 南にある北安（ペイアン）に着くまで一機も見ることはなかった。北安はまだ北満だ。これから南満を通過して、朝鮮半島を縦断して釜山までと思うと不安ばかりだった。私は耳を疑った。聞こえてきたのは「全員、降りなさい。」という指示だった。日本の女と子供は北満の北安で放り出されてしまった。

そしてあの 8 月 15 日。この日から日本人は「リーベンクイズ（東洋の鬼）」と呼ばれ、世の中がひっくり返ってしまった。日本人ということだけで、何もしないのに子供からも石を投げられたり、いじめられたりするので外へ出られなくなった。8 月 20 日頃から毎日毎日、大勢の日本兵が長い列車でソ連兵に監視され、私たちが出発した黒河へ向けて北上していった。それを毎日眺めて、機関車も列車も私たちから取り上げた理由が分かった。それと同時に北安は恐怖の百鬼夜行の街になった。監獄の囚人ばかりで一番危険な歩兵にされたソ連兵集団は、昼も夜も理不尽な襲撃をしてきた。眉（まゆ）をそり落とし、丸坊主で頭や顔にすすを塗って男に変装した私は逃れたが、娘を連れている親は大変なもので、母親が娘の身代わりと泣きすがっても駄目だった。発狂寸前だった。

両方の腕にいくつもの腕時計を巻き付けているソ連兵も大勢いた。略奪したのだろう。ソ連の女兵隊が若い日本男子を「ダワイ、ダワイ。」と連れ去り、帰ってこなかった。何と言っても婦女子と老人ばかり、襲撃されても通報も逃げることもできなかった。小さな日本の子が木に縛られ、耳をそがれて泣いているのを助けた。もう地獄だった。

私と同じような子供を連れた女性が転がり込んできた。侵入してきたソ連兵に次々と輪姦（りんかん）され、半死半生でたどり着いたということだった。彼女は隠すことなく「拒み抵抗すれば、私は殺され子供たちは餓死するので、このような目に遭いましたが、子供たちは正真正銘の日本人です。この子供たちの命を、私は性を犠牲にして救ったのです。私は生きます。生きて子供たちを日本の夫の家族へ渡すまで死ねないのです。」と語った。私は壮絶とも言える婦人の言葉に感動した。

極寒の冬を北満州の北安で過ごす自信がないので、再び少ない荷物をまとめ、南下する避難列車に乗り込んだ。今度は客車だった。いくつかの駅に止まり、「綏稜（すいりょう）」という駅に止まった。夫は黒河駅に転勤するまでこの駅で、日本人も満人も差別せず働いていた。ぼんやりと思いを巡らせていると「沢井さん、沢井さーん。」と大声が聞こえた。窓から手を振ると満人の方が、「義重大人（ダーレン＝長官）は。」と聞かれた。「応召で兵隊。」と答えると「奥さん、欲しい物を言いなさい。」と声をかけてくれた。欲しい物ばかりだったが生野菜に飢えていたのでキャベツをたくさん頂き皆で分け合った。彼は今もこの駅で働き、南下する避難列車が到着する度に私たちを捜してくれたそうだ。北安でひどい仕打ちをした満人と比べ、地獄で仏様に会えたと思った。そして占領地の現地人に好かれていた主人に感謝した。

ハルピン駅に赤いマークの付いたソ連の蒸気機関車と、ソ連の運転手がいた。線路が続いているので当然だが、占領地の物資を略奪して運ぶのも大変だと思った。いろんなことがあってとうとう南満「奉天（現在の瀋陽）」まできた。また降ろされ次の南下する列車を待つことになった。衣食住がゼロなので同じ境遇なのに、ののしり合う人もいた。特に前職が立派な肩書の人が、食べ物になると一番汚い人になった。力になって励ましてくれる人は、前職が立派な肩書きの人から軽蔑（けいべつ）されていた人たちだった。私はここで本当の人間を見ることができ、改めて夫を誇りに思い、この子供たちを守り抜く決心をした。



ハルピン

宿舎まで歩いた。歩いても歩いても着かなかった。もう何 km も歩いているのに「止まれ。」の合図はなかった。2 歳 6 か月になっていた長男が「お母さん、ボク大きくなったら、お母さんをオンブしてあげるから、今ボクを抱っこして。」と言った。「お母さんは赤ちゃんをおんぶして、両手にお荷物をこんなに持っているから抱っこする手がないのよ。ボクはお兄ちゃんでしょう。強い子は偉いとお父さんがほめてくれるよ。我慢してがんばって歩こうね。」と励ました。ここで止まって座り込んだらもう立てない。歩けない。行路死になる。そのような人たちを何人も見てきた。子供を連れ日本にたどり着くまでは死ねなかった。

日本から進出した大企業の社宅が宿舎だった。3 階建の大きな建物がずらりと並んでいたが、住人は一人も居ず、敗戦と同時に現地人に襲撃、略奪されているので、窓ガラスは一枚もなく割られ、部屋は荒らされ畳も窓カーテンもなかった。各部屋の水道も破壊され、外部に一箇所だけ水の出る所があり、毎日行列しての水汲みは大変な労働だった。ここでもいろんな事があった。生きていくために働いてお金を稼いだ。私は満人が作った「ちくわもどき」を仕入れて露天商をした。ある時、見知らぬ満人がなれなれしく流暢な日本語で「奥さん、かわいそうで見ていられないよ。こんな利の薄い商売よりソ連兵向けの品物をお世話してあげるから。」と話しかけてきた。私は背中の長女をゆさぶりながら断った。

口車に乗らなくて本当に良かった。誘いに乗って落ちるところまで落ちて、日本に帰れなくなり、泣き暮している日本女性がいるのだ。また裸で踊るととてもお金になるという話もあった。「5 歳までの男の子の脳ミソは貴重な薬になるから、人買いが男の子をさらっていく。」という耳をふさぎたくなるような話も次々と聞かされた。私の仕事、露天商は辛い毎日だったが、一日 20 銭のもうけで母子 3 人、何とか薄命をつないでいた。そして私のような境遇の者から早く帰れるようになったのだ。

1946 年（昭和 21 年）7 月、アメリカ軍の戦車輸送船の船底に乗り、葫蘆島（ころとう）から母子 3 人はボロボロの服を着て、心は立派に着飾って胸を張って、二人の子を連れ引き揚げてきた。満人からも好かれていた主人は、1948 年（昭和 23 年）に戦死したと厚生省から通知があった。

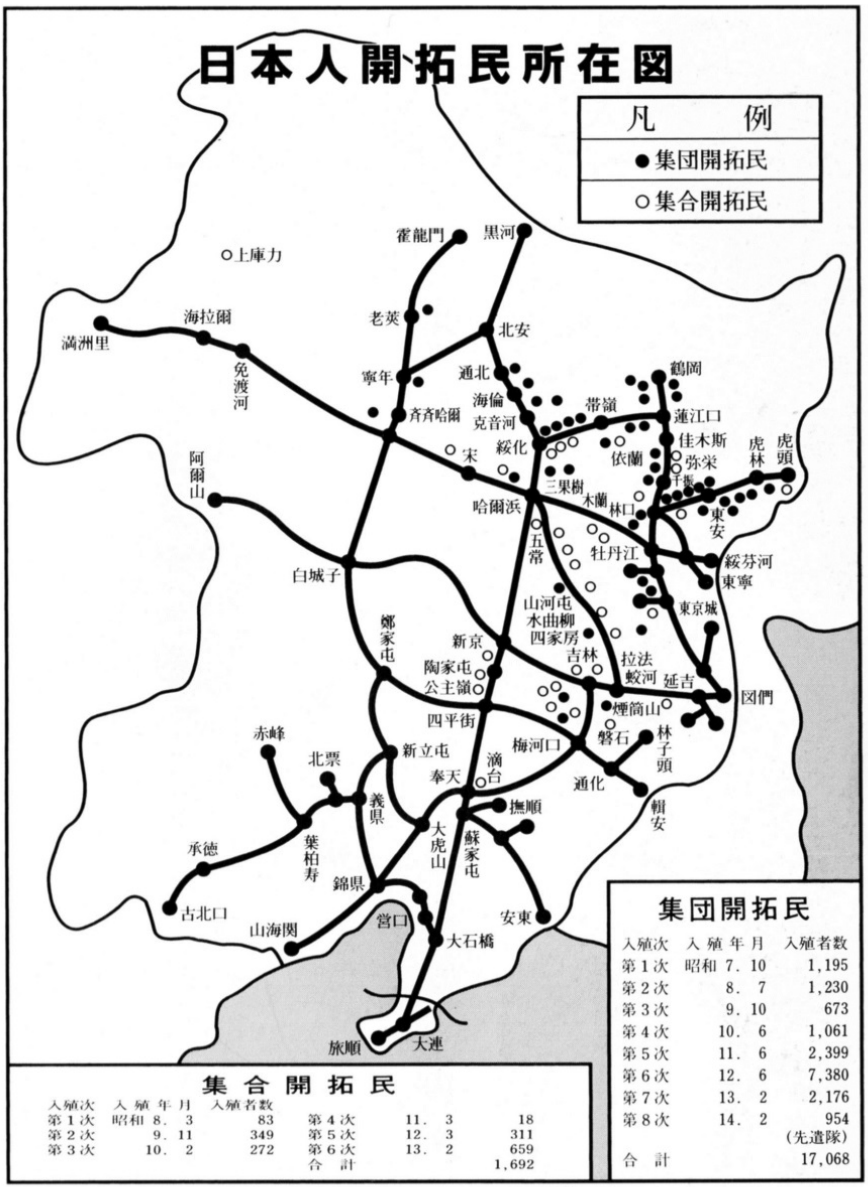


葫蘆島の引揚の様子

また戦争をしたら、あなたは「私は戦争とは関係なく生きられる。」と断言できますか。体を張ってでも戦争を阻止してください。平和のために。

満宝山開拓団　～岡本澄子の証言

1945 年（昭和 20 年）8 月 9 日、ソ連軍が満州国に攻め込んできた情報が流れ、午後 7 時頃には早くも近くの満人集落の者たちが騒ぎ出したと知らせを受けた。開拓団では組長宅に集まって一夜を明かすことになり、手にふろしき包み 2 個とリュックには背負えるだけの荷物を詰め、子供を連れて各自の家を出た。



日本人開拓民所在図

1940 年（昭和 15 年）に入植し、収穫の秋も目前になって開拓地を捨てるのは断腸の思いで、血の出るような努力も、一切が無に帰してしまうのは余りにも残念と、皆は後ろ髪を引かれる思いで家を捨てた。男子は根こそぎ動員で兵隊にされ、残されたのは 50 歳以上の男子 5 人と、婦女子 30 人ばかりで途方に暮れ、これからどうすれば良いかと暗い話しばかりで、組長宅の空気も湿りがちであったが、結局「無抵抗」を決議し「一刻も早く駅まで行こう。そうすればまた何とか逃げられ、生き延びることが出来るだろう。」と言う有様だった。




開拓団の作業

わずか 3 時間後の午後 10 時頃には、空き家になった開拓団家屋に満人たちが押し入り、手当たり次第に略奪する物音が聞こえてきた。幸い日本人が集まっている所へは襲撃してこなかった。眠ることなく夜の明けるのを待った。明るくなると田畑は荒らされ、各家には満人が入り込み、道具類、衣類、什器（じゅうき）に至るまで外へ放り出されていた。そして私たちの方をじっと見つめていた。

私たちの男子は腰に日本刀を、手に歩兵銃を持ち、威嚇（いかく）するために一斉に実弾 12～13 発を空に向け発砲すると満人は驚いて家の中へ逃げ込んだ。この隙に夜中に準備しておいた大車 3 台に急いで乗り込み、馬にムチを当てて駅への道を全速力で駆け出した。これを見た満人は「ワーッ。」とばかりに棍棒（こんぼう）や鍬（くわ）などを振り上げて追って来た。5～6 発打つと追うのを止め、何事か相談を始めた様子だった。この機を逃したら命が危ないと大車を更に走らせた。濛々（もうもう）と立つ土煙に顔も手も真っ黒になるが、構ってはおられない命懸けの逃避行だった。



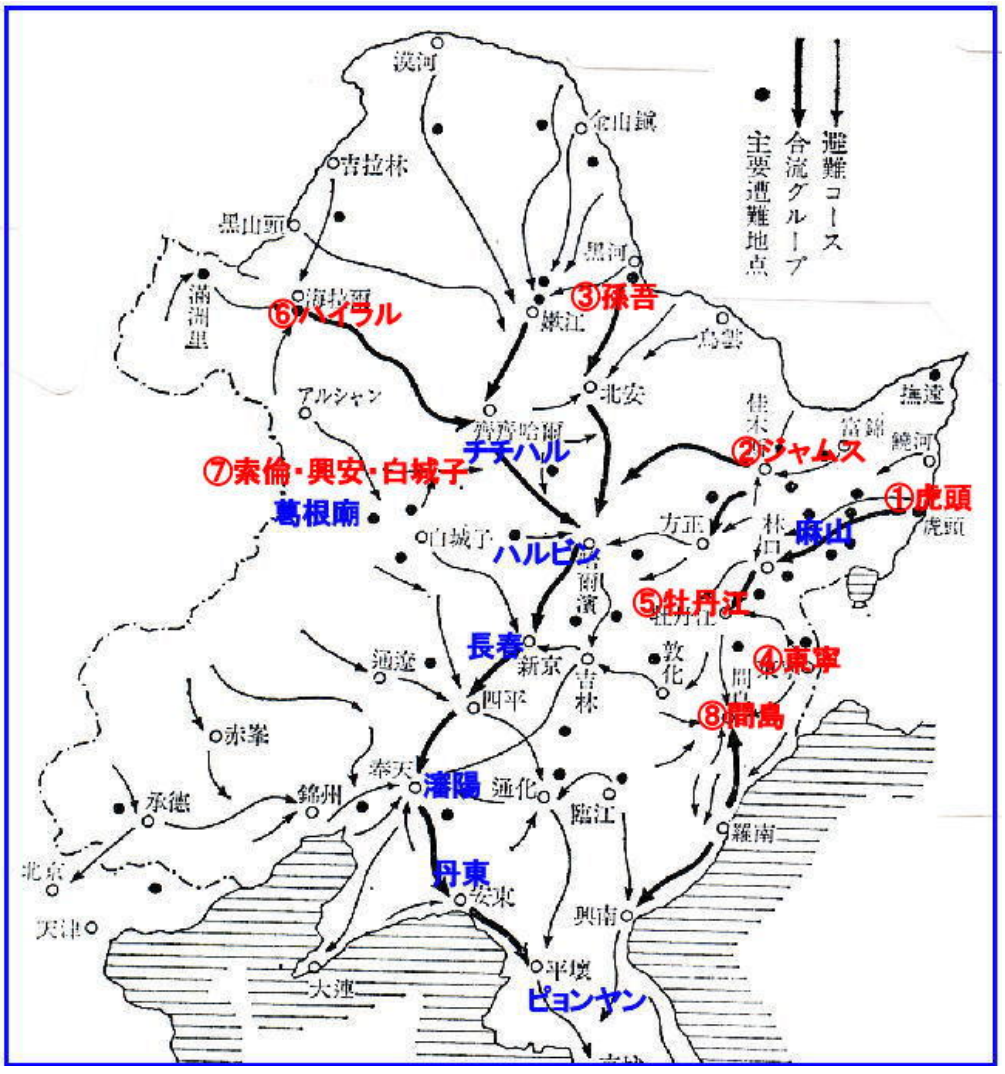
大車

開拓団は匪賊、馬賊に襲撃される危険にさらされていたので、いつも鍬と歩兵銃を持ち、襲われたら歩兵銃で応戦し、馬を走らせて軍隊へ救援を通報する訓練を受けていたので、その仕組みで落ち延びることができた。馬を走らせ一日半で一番近い駅に着いた。この間は食事なしの強行軍だった。徒歩なら全員が襲撃され殺されていたと思う。到着した頃は誰彼の区別も付かず、目はへこみ疲労が激しく、放心状態の有様だった。少し休み駅に近付くと、駅周辺には 200 人以上の満人が群がり、大声で叫びながら棍棒や鍬を振りかざして、駅員に詰め寄っていた。これを見た男子はまた空に向け発砲しながら、私たちを乗せたまま大車を駅の入口にめがけて突き進むと、駅員もこれに力を得たのか、満人を追い散らし一時、正常に戻った。

問題はこれからどうするかであった。汽車がいつ来るかも分からなかった。13 日の朝まで男子と駅員は歩兵銃を武器に徹夜交替で駅の警備に当たった。14 日 10 時頃、白城子（はくじょうし）より新京へ向かう最後の軍用列車がきた。私たちは躍り上がって喜び、余りの嬉しさに抱き合って大声で泣いた。満人は駅の周り 100m 近くまで来て襲撃、略奪の準備を固め、ワイワイと奇声を上げ脅してきた。列車に乗っていた兵隊が、群衆の頭上を飛ぶように軽機関銃をバリバリと撃ってくれたので、群衆はけが人も出ずクモの子を散らすように四散したが、一時的な現象に過ぎなかった。

軍用列車に乗っていた将校が「私たちは新京警備に行く途中です。全員乗って下さい。持ち物も忘れないように。駅員も駅を放棄して避難乗車して下さい。」と言ってくれた。「地獄で仏とはこのことだ。」と、みんな最後の力を振り絞り、荷物と駅の重要機器を外し、急いで列車に積んで飛び乗った。

再び来ることはないだろうと、血と汗で開拓した第二の故郷、ここで生まれた子供たちには故郷である万宝山が次第に遠のいていくのを見ていると、無人と化した駅に満人たちが集団でなだれ込んで行くのだった。動員された父と夫は、とうとう帰ってきてくれなかった。



避難コース

痛哭（つうこく）の記　～多田幸子の証言

汰江開拓団で敗戦を知ったのが 8 月 17 日。直ちに着た切り雀で、慌ただしく脱出して既に三日目になっていた。開拓団農場、家屋が満人に襲撃、略奪され、老人と婦女子だけの脱出だったから足取りも重い。疲れた一行が原野の中にある木立の陰に入り込み休むことになった。みんなヘタヘタと大地に寝転び倒れてしまった。3 歳になった長男に子守歌を低く歌って寝かし付けようとしたとき、不意に飛行機の爆音が聞こえたと思ったら、バリバリと低空よりの機銃掃射を受けた。幸い負傷者もなく一安心と、飛び去る飛行機の後を眺めていると、それに入れ代わったように暴徒と化した 50～60 人の満人が、「ワーッ。」と手に手に棒や旧式の鉄砲をかざして押し寄せてきた。

「ここに居るのは女と子供だ。武器も何にも持っていない。頼む。撃たないでくれ。」と、団長の老人が大声で嘆願するが、日本語なので満人暴徒には通じなかった。驚いている暇はなかった。一同恐ろしさと命を守るために、大人たちは素早く子供たちを真ん中に集め、20 名位の大人が円陣を作って子供を守る姿勢をとった。日本人が暴徒に殴打され続けている中、団長はその前に仁王立ちになり懸命に叫び嘆願していた。私はここで殺されると覚悟を決め、地に座していた。

暴徒の先頭にいた 40 歳くらいの大男が、老人と婦女子ばかりと知ったのか、殴るけるなどしていた仲間を制止し、私たちの持っていたわずかな衣料、食べ物を全部取り上げてしまった。満州の夏の夜は日本の冬の寒さだ。夏服で野宿の一塊りの老人と婦女子の道中は、悲惨などという言葉では表現できない有様だった。やせ、弱り、汗と泥で真っ黒な幽鬼の姿で、体温を奪う雨の中でも、雨宿りする場所もなく、草原をひたすら歩くのだった。もちろん子供も。

どこをどう歩いたのか、何を食べて生き延びたのか分からないまま、壊れ倒れる人が次々と出たが、励ます言葉などもなく黙々と歩き続けた。チチハルに着いた時はたった 8 名だった。団長は責任を感じて自決された。汰江開拓団は「全滅」でなく、見捨てられた餓死行路死集団だった。





引き揚げの様子

満蒙開拓団　～西岡秀子の証言

私は母に抱かれて満州（中国東北）の遼陽（りょうよう）から生後 3 ヵ月で引き揚げてきた。母は「もっと北におったら帰れんかった。」とよく話していた。私も残留孤児になっていたかも知れないとよく思ったものだった。だが北にいた開拓団の人たちについて詳しく知る機会がないまま過ごしてきた。「大地の子」やテレビドラマの「開拓者たち」で、満州開拓地へのソ連侵攻時や避難行の悲惨をわずかに知るくらいだった。



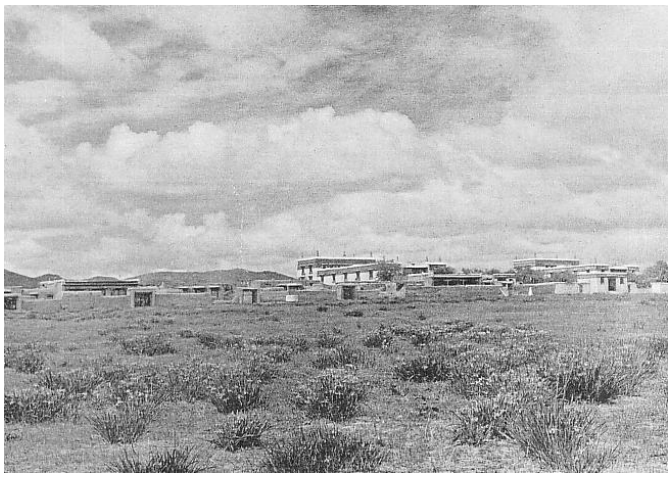


2014 年、父が教えていた遼陽小学校の卒業生から「北満開拓団への勤労動員の想い出」という小冊子が送られてきた。冊子によると中学 3 年生（14 歳）の 6 月に勤労動員で鉄驪(てつれい）駅から「韓家開拓団」の部落に入ったということだった。各開拓団農家に割り当てられて農作業に励んだと。農家の大黒柱であり働く中心の男子は「赤紙」が来て出征したという。8 月 13 日、本部からソ軍が攻撃してきたと連絡があり、次の日、集団で脱出避難することになるが、ハルビンで先生から「各自勝手に行動せよ。」と言われ、ばらばらになって帰路を探ったと。新京・奉天をたどり貨物列車に潜り込んだりして遼陽にたどり着いた時は、友人と 2 人だけになっていて、栄養失調でふくらはぎは押すとペコンとへこんだという。

鉄驪駅から「老営府開拓団」に割り当てられた同級生（14 歳の子供）も、やはり苦労しながら、全身しらみだらけで 9 月 23 日、友人 2 人で遼陽にたどり着き、自宅に入る前に親から「静かに着ているものを全部脱ぎこのセメント袋に入れなさい。」と言われ、風呂場で 2 カ月半の汚れを洗い落としてから部屋に入ったという。セメント袋は焼却された。

私はこの冊子が縁で、もう少し開拓団のことを知ろうと、昨年 9 月に、新京や奉天・拝泉（はいせん）などの各地からの引揚者 9 名で「満蒙開拓平和記念館」を訪問した。長野県阿智村に一昨年オープンしたこの記念館では、証言や写真、地図などの資料から多くのことを知ることができた。また、館内の職員の心のこもった応対に「ここにたどり着いた。」という安心感をもった。

同行したメンバーの 1 人は葛根廟（かっこんびょう）で祖母と従姉妹たち 5 人を殺されたという。葛根廟では、白旗を掲げている婦女子の日本人避難民に、ソ連の戦車 14 台が襲いかかり、無抵抗な婦女子を戦車のキャタピラでひき殺し、息ある者はトラックの上からソ連兵が撃ち殺し、千数百人が殺されたのだ。戦争が終わり日本も平和になり空襲もなくなったのに、満州各所では、婦女子の集団がソ連兵や現地人暴徒の襲撃に追いつめられて「集団自決」したという悲惨な証言もあった。

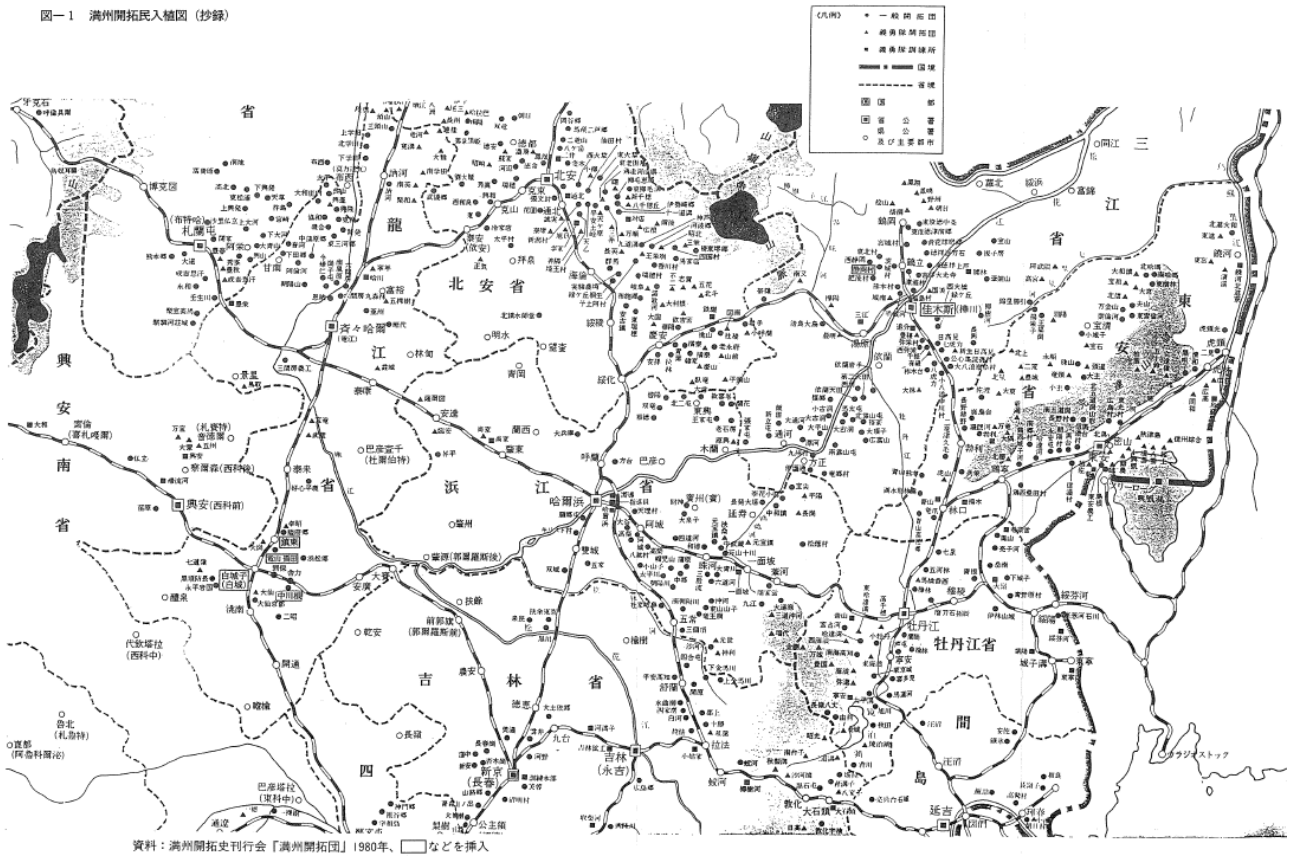


葛根廟



ソ連軍の戦車

開拓入植地を示す地図には、ピッシリと、よく知っている地名が書き込まれてあった。私の出身地のゆかりと思われる所を探すと、四国村・香川村・金毘羅郷などの他に、私の育った海辺の小さな村「鶴羽村」という開拓団も見つかった。満蒙開拓平和記念館訪問から帰って、私の香川県の満蒙開拓の歴史を調べる旅が始まった。



満州開拓民入植図

知らなかっただけで、香川県からでも 10,000 人もの人が国策で満州の開拓地へ渡っていた。高松市の田村神社には、高さ 9.5m の「海外開拓者受難之碑」が昭和 56 年に建てられていた。重たい石の扉の中には 2,000 名を超す合祀者のお名前が並んでいた。また、四国八十八カ所巡りの 70 番札所、本山寺には「五河林開拓団」の慰霊碑があることや、栗熊村の分村で村の半数近くが渡満した「樺林開拓団」では、なんとか帰国できた人たちで大山の麓に「香取開拓牧場」を開いて生活していることも知った。

当時、国策で開拓民として 27 万人が満州に渡り、8 万数千人が犠牲になった。満蒙開拓青少年義勇軍の募集で 84,000 人の青少年が開拓地に入り、死亡者は 24,000 人という。ソ連侵攻以前の 5 月には、大本営や関東軍は満州北部を見捨てて、新京から以南、朝鮮国境地点を守る作戦を立てており、北満の開拓民を初め一般邦人は切り捨てられていたことを知らなかったのだ。まだまだあの戦争で、国家がどのように国民を見捨てていったのかを、知らなければならない。私以上に安倍晋三氏は歴史の真実を学ばねばならない。総理は「新談話」を出すというが、あの戦争に真摯に向き合わない人には語る資格もない。戦後 70 年、もうだまされない。

黒河をあとに　～足立加代の証言

シベリアの死者については、証言はあるが、遺品というものが一切ない。不幸は予告なしに飛び込んできた。主人が 31 歳、私が 28 歳の暑い夏のあの日のことは決して忘れることはできない。

私と主人は手をしっかり握り合ってお互いにじーっと眼と眼を見合うばかりで無言だった。あの時の主人の手の温もりが今でも忘れられない。「後はしっかり頼むよ。」とささやいているようだった。

8 月 9 日の朝、北満、黒河の街は騒然と混乱の極みとなり、鉄道勤めの主人は 9 時半頃、我が家に飛んで帰ってきて「子供を連れてすぐ汽車に乗れ。これが最後の引き揚げ車だぞ。早く、早く。」と貯金通帳、印鑑などを一まとめにしたふろしき包みを手渡してくれたが、私はただ呆然（ぼうぜん）と立ちすくんでいるばかりだった。すると主人は更に語気鋭く「早くせよ。ソ連兵が来るぞ。達者で暮らせよ。二人の子供を頼む。」と目に涙をためて家を飛び出していった。私は大変なことが起こったのだとしか分からず、どうしたらよいか迷うばかりだった。

すると隣の社宅の奥さんがやっぱりふろしき包み一つを抱いて、私に「奥さん。早く駅まで走らなければ列車が出てしまう。」と叫んで、私の手を引いて走った。放念したような私は五里霧中で、言われるままに駅まで走ったが、二人の子供が早く走れず、3 分前に発車した後だった。

幸い居留民団が遅れる人を見込んでいて、大車数十台を準備してくれていたので、やっとの思いで乗り、孫呉まで 100 キロの土道を馬車で後退することになった。1 歳半の息子を背中に、4 歳の娘を左手に、右手にはたった一つの全財産と、わずかな食料を包んだふろしきを抱きしめ、隣の奥さんから早朝からの出来事をやっと聞くことができた。

対岸のソ連領プラゴエより、ソ連軍のアムール艦隊の艇隊が海兵隊員を乗せて来襲と共に、ソ連領より砲兵が黒河をめがけて砲撃を開始しようとしていたので、黒河の街はスッカリ混乱していたし、虎林、虎頭へは既にソ連軍が近接し、東満一帯の日本軍は大混乱となって続々と後方へ撤退中とのことだった。

何一つ財産らしいものも待たず、丸裸の民間人一同は土煙の中を呆然（ぼうぜん）と大車で逃走とは…。疲労と汚れで見る影もない格好で孫呉までたどり着くと、大車の馭者（ぎょしゃ）の満人は一人残らず逃げてしまい、他に方法もないので、北安（ペーアン）までの 200 キロを歩くということになった。そしてわずかな食料を支給されて、婦女子がただ南へ、北安を目指してトボトボと苦しい脱出行。それは惨めなものだった。

今まで戦争といえば、日本軍の発表は「勝った。勝った。」ばかりで、それを信じていたのが今度は反対に、徒歩で、護衛もなく、婦女子が逃げ惑うとは思ってもみなかった。炎天と空腹に耐えながらの集団に、2 歳ぐらいの子を背負っている奥さんがいた。奥さんの肩からダラリと下がっている子の腕は、既に紫色に変色し死んでいるのに、奥さんはまるで背の子が生きているように汗びっしょりで話しかけ、あやしていた。

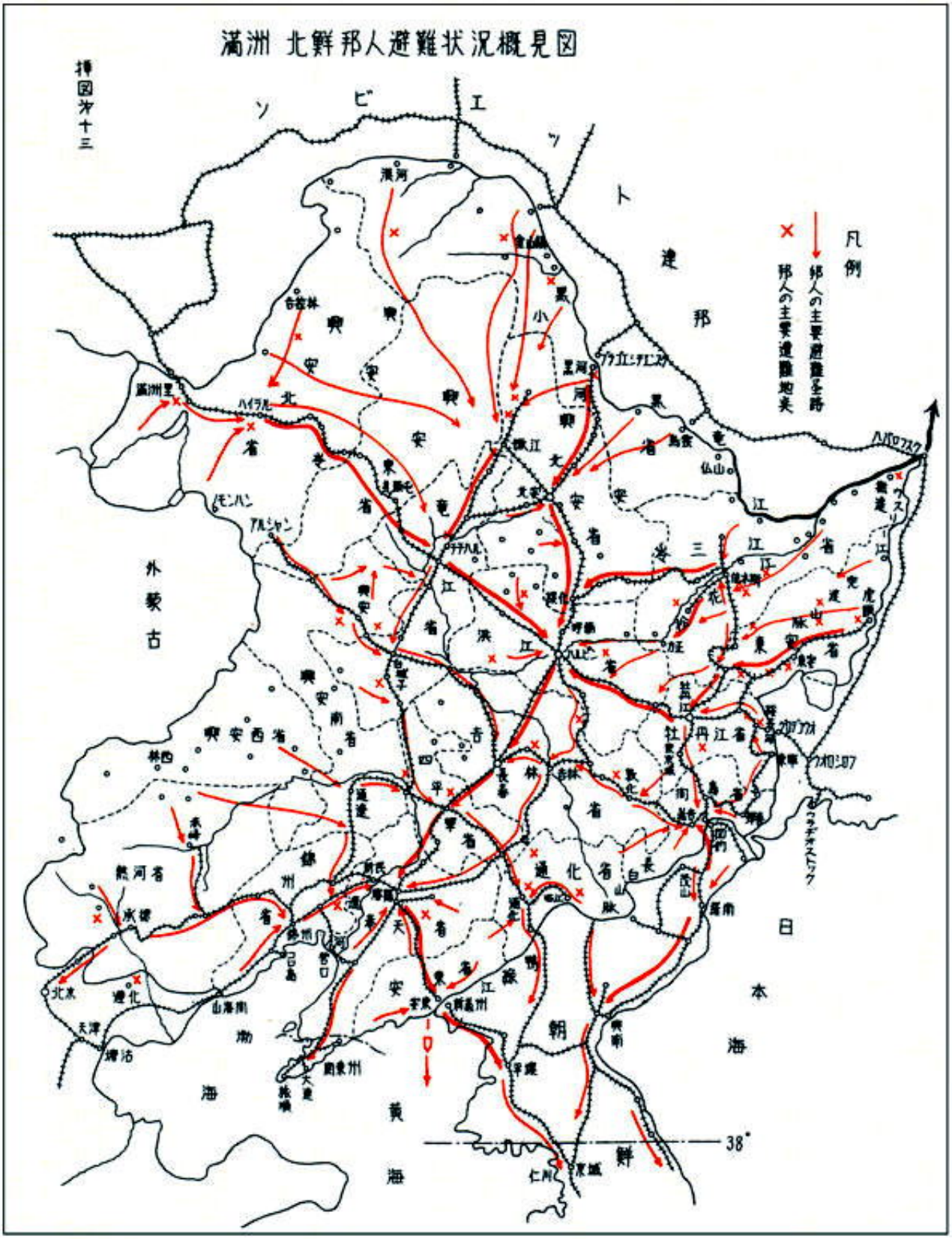
他の人々から「もう臭いから捨てよ。」と言われても放棄できないでいた。「この子と一緒でないと日本へ、実家には帰れない。」と、鬼の形相で一番後ろからついてきていた。皆、もう自分だけが一番大切だった。他人なんか構うこともできないし、そんな余裕なんか少しもなかった。私は「自分の子供だけは死なすまい。」と一人は背負い、一人は手と手を紐でしばって握り、無理に歩かせながら、胸の奥から涙が込み上げてきた。汗と土壌と涙の脱出歩行、4 歳の娘も野宿しながら 200km をトボトボと。

主人がシベリアのどこへ連れて行かれたのか、消息は一切ない。黒河で戦死したとの公報が届いたが、色々のツテを聞いて回ると、鉄道関係者は一団となってブラゴエを経由し、ハバロフスクに送られたとか、外蒙ウランバートル方面に送られたとか聞かされた。それが本当と信じ、どこかでまだ生きているものと信じ、主人は今でも私の心の底に生きている。31 歳の若い顔をして。

私は、あの時の手のぬくもりを思い、この手に残る感触が私の歴史であると信じてきた。これからも生ある限りは、主人の手の温もりを心の宝として、生きる力として暮らしていこうと考えている。



避難の様子


滿洲 北鮮邦人避難状況概見図
挿図第十三
凡例
邦人の主要避難地点
邦人の主要避難経路
ソビエト連邦
外蒙古
日本海
黄海
朝鮮
38°

邦人避難状況概見図

戦争体験記（良かったこと２つ）　～鈴木ツヤの証言

あの苦しかった戦争の頃を思いだし、今でも、良かったと思っていることが二つある。

私は満州（現中国東北）満洲義勇隊開拓団員として、北部満州の斉々哈爾（チチハル）の北にある嫩轍（のんこう）というところにいた。主人は、開拓団団長をしておりました。昭和 20 年（1945）5 月の末頃、100 人はいた男子団員の 60 人以上に赤紙（召集令状）がきて主人も軍隊へ取られた。それから 2 ケ月半たった頃の 8 月 20 日に、日本の敗戦を知ったのだ。すると同時に満人の暴動が始まった。私たちは、着のみ着のまま、全員、体一つで逃げた。40 人程の男は年寄りばかりで、私たち女性ががんばって逃げて、嫩江の日本軍兵舎へたどり着いた。



一月過ぎた頃、今度は 500 人程で満州拓殖公社の社宅へ移された。それからが大変だった。保護援助してくれる国も、人も団体もなかった。9 月はもう冬の前触れ、時雨（しぐ）れるのだ。着のみ着のままなので、兵隊さんが残していった上着ズボンなど、衣料は何でも体に巻き付けた。毎日事件の連続だった。劣悪な環境と飢餓、栄養不良などで伝染病が発生した。10 月頃から幼児や年寄りから次々と死んでいった。私の 2 歳 2 カ月の娘も 11 月 1 日に死亡した。拾い集めた板で木箱を作り棺桶にして広い野原の一隅に埋めた。すぐ氷点下 20 度を越す酷寒の毎日になっていった。何をどのように書いて辛さと寒さと飢えを表現したらよいのかも分からない。

死と隣り合わせで、どうにか冬を乗り越えた。3 月になり南下（日本へ近づくこと）の話が持ち上がり、私も名簿に乗せてもらった。しかし、埋めた子を残して帰る訳にはいかない。何とか一緒に帰りたい。それができなかったら私は残る決心をした。私は、子どもの死後、頼まれて事務所で働いていた。ロシアの兵隊さんも毎日来ていた。言葉は通じなくても、手まね足まねで、親しくあいさつを交わすまでになっていた。

私は思い切って、この職場で一番偉いロシアの兵隊さんに「埋めた子を掘り出し、荼毘（だび）にして骨を持って日本へ帰りたいから、薪が欲しい。」と頼んだ。大方の日本人は通じていないと、最悪を考えて慰めてくれたが。次の日、薪を積んだ荷車を満人に引かせてきたのだ。私が掘り出すと半狂乱になるからと、他の人たちが掘り出してくれた。半年近くも地中に埋めてあり、雨が降っていたら氷づめになり、コンクリートより固くて掘り出せないと説明してくれた。大勢の掘り出し希望者だったが、凍っていて、固くて私の子供をを含めて6体しか掘り出せなかった。掘り出してくれた人が「凍土なので腐敗せず、ろう人形のような顔をしていて、奇麗だった」と教えてくれた。子供の骨は無事に持ち帰って、今も鈴木家の墓に眠って私を待っている。これが、良かったことの一つ目だ。

日本へ帰る南下が決まったが、途中で何が起こるか、思いもよらない事件が発生するか、屋根の無い、食料のない場所で、何日も足止めされるか、今までの体験と経験で、これらを覚悟して、承知しなければならない。健康な人は一人もいなくて、皆、自分の体をコントロールできない病弱者なので「野垂れ死に」覚悟だった。だから、親として我が子をこんな危険に巻き込みたくないので、子供だけでも助けたいと満人に預けたのだ。引き受けた満人は「安心しなさい。偉人（立派な人）に育てます。」と言っていた。

子どもの中に3歳の男の子がいた。お母さんが死んで孤児になり、保護者がいないので残されるのだ。満人にも預けらることができないと思うと不憫（ふびん）になり「私が保護者になります。」と名乗り出た。他の人たちが「共倒れになるわよ。」と警告してくれたが、私は「骨」の我が子が守ってくれると信じた。男の子の胸には祖父母の住所を書いた布が縫い付けてあり、無事届けた。「僕が孤児にも残留孤児にもならなかったのはお母さんおかげだ。」と、北海道から大府（愛知県）まで、私の誕生日に孫を連れて祝いにきてくれる。親子以上の絆で結ばれている。これが良かったことの二つ目だ。



嫩江訓練所

私の避難記　～小倉あやよの証言

戦後 70 年、幸せに暮らしている現在、あの敗戦後の惨めさが、幻のように私の頭の中に浮かんでくる。今、思い出してみると、昨日のように思われるが、70 年の歳月が流れているかと思うと、感無量である。1945 年（昭和 20 年）8 月 11 日、北満（現中国東北地方北部）に暮らしていた私たち軍隊の家族、開拓団の家族の運命が一変してしまった。11 日の早朝、午前 3 時頃、部隊よりの伝令で「ソ連と交戦状態に入ったので、直ちに武装して部隊に出頭せよ。」との知らせがあった。主人も予期せぬことで吃驚（きっきょう＝突然のことや意外なことに一瞬おどろくさま）した。

北満の軍隊には、それだけ情報が遅れていたのだ。部隊に出頭した主人は、1 時間くらいたって再び官舎に帰ってきた。「とうとうソ連と戦争が始まったから、家族は直ぐに避難する準備をして、部隊からのトラックを待つように。」とのことだった。それから「戦争に入ったのだから、女、子供も、どのような運命になるか分からない。万一の時は青酸カリを飲んで死ぬように。」と、私に青酸カリを渡して部隊へ戻った。これが主人と満州での最後の別れだった。平和な時代に育っている今の人に、戦争で、配偶者に青酸カリを渡す怖ろしい時代など、全く信じられないことだろう。それからが私たちの運命を地獄のどん底へと叩き落としていったのだ。

牡丹江（ぼたんこう）の駅から午前 8 時頃、避難列車に乗った。全く動かず夕方まで車内に閉じ込められたままだった。その間、ソ連機の攻撃を受けた。生きた心地などなかった。夕方になって出発した列車は、咬河（こうか）という駅に着き、そこの学校に収容された。そこで 8 月 15 日、敗戦の詔書を聞いた。今まで張りつめていた心も急にがっくり、涙はとめどもなく頬を流れた。この瞬間に敗戦国民となった私たちは、全てをソ連軍の命令のまま動くことになり、飛行機の格納庫に移動させられ、二週間ほどは監禁状態だった。次第に死者が出始め、うなる病人、発狂する人、生まれる赤ちゃん、格納庫の中は人生の坩堝（るつぼ）そのものが繰り広がっていた。追い打ちをかけるように、夜になるとソ連兵が娘さんを連れ出しに来た。皆、下を向いて誰が連れ出されたか分からない振る舞いをした。毎晩恐怖の連続だった。私の前でソ連兵が立ち止まったら、私は素早く青酸カリを飲む準備をしていた。



ソ連の進軍を見つめる満州の住民たち

日にちも時間も分からぬまま、行き先も教えられずに出発だった。何百人かの行列になった。満州の道は赤土色で、行けども行けども果てしのない道だった。皆、顔は無表情、暑さと汗とほこりにまみれて真っ黒。夜は野宿、雨に降られ濡れたまま毛布一枚で夜を明かした。魂の抜け殻の集団だった。背中の赤ちゃんが死ぬし、暑さと疲労で倒れる。戦争に負けた現実をモロに受けていたのだ。死んだ人も倒れた人も、その場に置いて助けることもできないのだ。朝夕の冷えが身に染み、夜の寒さが厳しくなり、つるべ落としのように、冬へ加速していった。この仕打ちは戦争に負けた満州の、日本人が受けた苦しみの序の口に過ぎなかった。生き長らえ、日本の土を踏めたのは、敗戦の翌年 10 月だった。



牡丹江

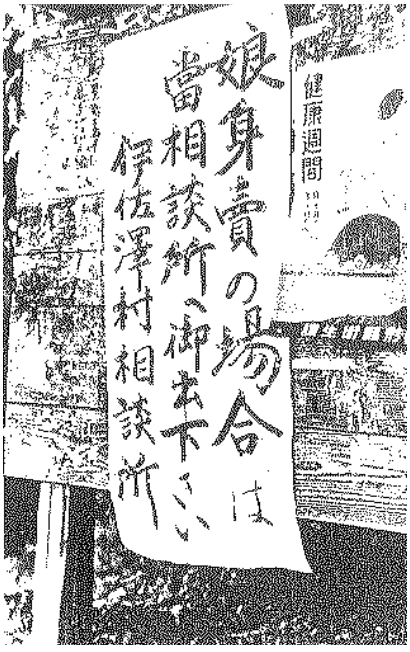
女の私に戦後はない　～従軍慰安婦の証言

並田カレ子（なみだかれこ、仮名）は、関東軍の元従軍慰安婦である。慰安婦となった経緯、満州での壮絶な体験をうかがう機会を得た。以下は彼女の生の証言である。

・・・

男の戦争の話は、手柄話や自慢話ばかりで聞きたくない。男が始めた戦争で、本当に苦しんだのは女や子供よ。満州と聞くだけで懐かしいよ。そう、橋詰さん、兵隊だったの。シベリアまで行ってよく帰ってきたね。シベリアで死んだ人は、見向きもされなかったって聞いてるわよ。犬死扱いで浮かばれないね。

あの頃は、いやだったねぇ。死ぬ勇気もないくせに、生きているのが嫌でね。女に生まれたことを呪ったよ。兵隊さんみたいにパーッと死ねたらいいなぁって。私はね。奈良県の貧乏百姓の娘でね。小作の父は戦死よ。「軍国の家」「軍国の妻」とお母さんは呼ばれていたけど、貧しくてね。私は 16 歳のとき「親孝行ができる。」からと、わずかな前借金をもらって大阪の色街へ女中奉告に出たわ。男手のない小作百姓は大変だったんだろうね。お母さんから「すまないけど、お金を送ってくれよ。」と手紙がくると、親孝行をしなくちゃと思い、前借してお金を送って商売女、そうそう、今、世間で騒いでいる従軍慰安婦になっちゃったのよ。



娘身売りの相談所の掲示板（村役場の相談所）

最初は大連（だいれん）。あの頃、芸者が 4 円。私たちは 2 円だった。芸者だって男相手の商売さ。私たちと大して変わらないわ。軍の命令で検診が定期的にあったわ。検診にひっかかると商売ができないし借金が増えるから芸者も私たちも気をつけたもんだ。生理休みも取らしてもらえなかったね。

大連はね。満州で訓練した兵隊さんたちが南方へ行き、内地からまた兵隊さんが上陸する玄関の港よ。それから「満州の奥地や国境の町へ行くと、お金になるよ。」と言われ、お母さんにお金を送るために兵隊さんと一緒に国境の町に行くのよ。お金の前借は、どんな仕組みになっていたのか今でもわからないよ。でも、働いても借金は消えず増えていくようになっているの。増えればまた借金、そして、早く返したいとお金になる国境の町へ行ったのよ。



大連の港



トラックに乗せられて移動する慰安婦

私の体の上を大勢の兵隊さんが通っていったけど、その数は思い出せないほどだったね。あんたはどう思うか知らないが私たちは商売だけで寝たんじゃないよ。お国のために戦う兵隊さんに「さあ、おいでよ。ここで元気を出して、しっかり戦って。死なないでおくれよ。」と。私たちも一緒に戦っている気持ちだったんだよ。わかってくれるかい。

私は日本人だから 1 級品にされてね。笑っちゃうよ。下士官や将校用さ。兵隊用には、軍需工場で働くとか何とか言って集めた朝鮮の女よ。あの子たちは働く建物も悪くて裏通りだったよ。1 日に 50 何人かを相手にさせられ、ひどい熱で狂って死んだ子もいた。かわいそうだったね。私たちは自由だったけど、朝鮮の子たちには見張りがついていて逃げることもできないのよ。もともと、だまして連れてこられたからね。

ソ連が攻めてきたとき、私を妹のような顔だといっていた軍曹さんが駆けつけてきてくれて「早く逃げろ。」とハルピンまで行けるようにしてくれたのよ。あの親切な軍曹さん、生きてるかねぇ。きっとシベリアへ連れて行かれたと思うよ。



ハルピンの生活はひどかったね。思い出してもぞっとするよ。あれが地獄だね。楡（にれ）やアカシヤの並木は美しかったけど、日本人には地獄だった。方々から避難してきた人が、学校や大きな建物に一杯で、身動きができないくらいだった。夏だったから、死体が腐ってにおうしね。建物の隅や裏通りには、やせ細った死体がゴロゴロ転がっていてね。電気はないし、真っ暗な中で衰弱して動けない人が、のたうち回っていたわ。人買いが 5 歳の男の子を探していたよ（※）。

※「人買いが 5 歳の男の子を探していたよ」:
人買いは、5 歳の男子を漢方薬製造者に売り、漢方薬にされるというううわさがあった。

あっという間に冬が来てね。夏服に満州の冬が来たんだよ。着るものがなくてね。破れた麻袋を体に巻いて、震えながら石炭拾いをするのよ。そうそう。10 歳くらいの姉が 3 才くらいの妹をかばうようにして、何かをすすっていたわ。親もいなかったよ。私は、何にもしてやれないのが情けないやら、悔しいやら、神様や仏様が憎らしくなって泣いたよ。みんな必死で銃後を守ったのに、救ってくれる人はいなかったよ。外地の戦争犠牲者ほど哀れな者はないよ。

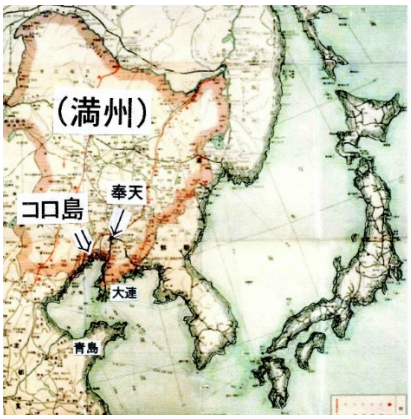
そんなとき、とんでもない話が持ち込まれたのよ。引き揚げ（＝日本への帰国）の面倒を見るためにできた団体の幹部が「ソ連軍が女を差し出せと言ってきた。命令に背いたら帰れない。みんな生きて帰るためだから行け。」って言ったのよ。なんで私たちに目をつけるのよ。「ばか、あほ、体が汚れていても、心は美しいんだ。とぼけた事を言うな。」と言い返したわ。すると今度は、土下座して「お願いします。頼みます。」の一点張りよ。子供を連れた母親を見て、この子のお母さんを赤鬼どもの餌食（えじき）にさせんぞと、あきらめるのさ。この気持ち、わかるかい。お国のための兵隊さんのお役に立つと言われて慰安婦になったんだよ。そして今度は同じ女のために、赤鬼に身を任せるのさ。男には分からないよ。涙もかれてしまったよ。

今夜は何人、と幹部が言うのよ。お願いとも、頼むとも言わなかったわ。もう、その顔は女衒（ぜげん）（※）だったわ。いやいや立ち上がると、お母さんたちが手を合わせて、拝んで私たちを見送ってくれたよ。

※「女衒」: 若い女性を買い付け、遊郭などで性風俗関係の仕事を強制的にさせる人身売買の仲介業。

葫蘆島（ころとう）から日本に帰ったんだがハルピンから船に乗るまでの間がまた大変だった。道中や船を待つ間も幹部は私たちを人身御供（ひとみごくう）（※）にさせるのよ。傷ついた女を犠牲にしても平気だったんだ。私たちの傷ついた心に慰めの言葉の一つもかけず、当然かのように振る舞うのさ。ほんまに満州ゴロの女衒だよ、日本の男は。女や子供を守らず女を日本へ帰れる道中手形にしたんだよ。

※「人身御供」: ある人の欲望を満足させるために、またある事を成就させるために犠牲となること。





葫蘆島からの引き揚げ

やっと船に乗れたのよ。これがまた大変なんだよ。女は絶対に忘れないよ。船の中でも次々と死ぬんだよ。赤ちゃんや子供が死ぬと気が狂ったように泣きわめくお母さん。お母さんも放心して幽霊のようになって衰弱して死ぬ。死ぬとね。水葬だか何だか知らないが海に投げ込むのよ。次々にね。するとまた気が狂って死ぬ。死ぬのは女と子供と赤ちゃんよ。大人の男は死なないね。女に助けられてここまで来たことや船に乗れたことも忘れているのよ。そう、あの男たちは今でも憎い。

九州に上陸して、解散式があったのよ。幹部は何と言ったと思う。「ご苦労をかけました。色々ありましたが、あの時は仕方がなかった。自分は最善を尽くして皆さんを日本へ連れて帰る事ができました。」と、私たちには見向きもしないのよ。幹部と握手して喜んでいるのは男だけよ。女を犠牲にして、最善もくそもあるものか。それが男よ。ばか野郎と思っていたら、お母さんたちが私たちを取り巻いてお礼を言ってくれたのよ。そう、お母さんたちは、自分と同じ女の「性」に助けられたことを知っていたのよ。

幹部が私の記憶の中にある限り、私の戦後は終わらないんだよ。政治家や偉い人が「もう戦後ではない。」と言っているが、そんな立派な人たちに言ってやりたいよ。「あんたたち、どんな辛い目にあったの。」と。

こんな思いはもうたくさん。あんたも女、子供を二度とこんな目に合わせないようにしっかりしておくれ。男はね。忘れようとしているのよ。あの時代は、ああするしか仕方なかったと過去のせいにするのよ。女は違うよ。子供を生んで育てているのだから。あんた知ってるかい。日の丸、君が代が満州を占領していたのよ。満州にいた民間の男たちは、日の丸に守られて、中国人や朝鮮人をばかにしていたのよ。日の丸に逆らうと、ひどい目に合うからおとなしくしている。それを、お友達とか仲良しと思い込んでいばっていたのよ。満州ゴロは、今でも言うのよ。「あの頃はよかった。」と。当ったり前じゃない、親分日の丸に逆らうと 731 行きよ。

嫌になるよね。「あの頃は仕方がなかった。そんな時代だった。」なんて言って片付けるなよ。何でそうなったかを考えて、語り継いで欲しいよ。かしこぶって、知らないくせに「時代が時代だった。」なんて言われるとヘドが出てしらけるよ。

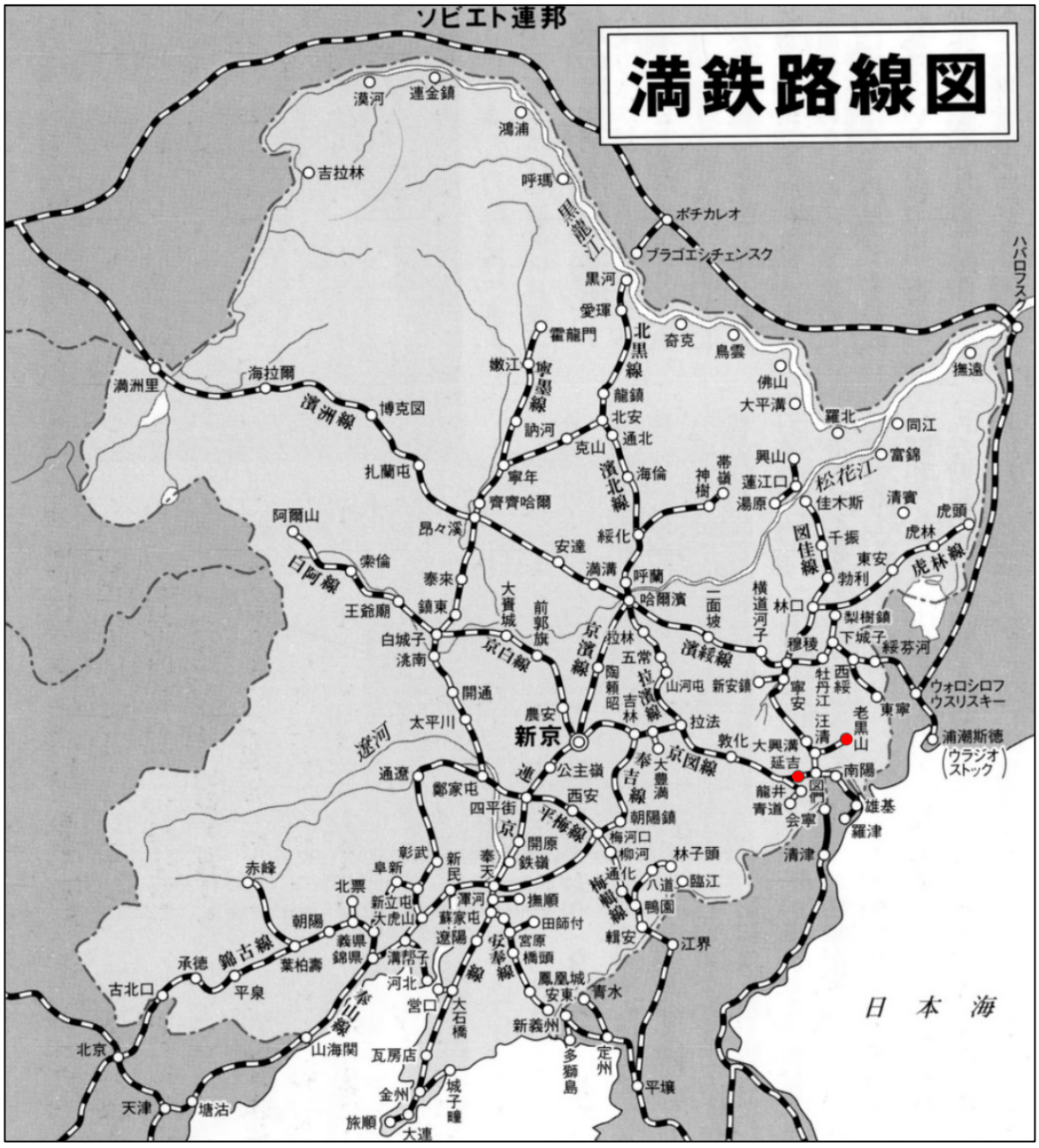




軍の慰安所

逃亡の最中、赤ちゃんを失う　～塩井キミ子の証言

私は、休暇を利用して日本に一時帰国していた陸軍軍人と、家族に勧められて結婚した。出会って１週間の促成夫婦だった。結婚はしたものの、軍人の夫との満州への帯同は許されず、軍の許可が下りて、満州の老黒山（ろうこくざん）で夫と合流できたのは、挙式後２年も経った頃だった。



老黒山（ろうこくざん）は、ソ満国境近くの町である。眼前には、ソ連の町並みが見えていた。冬は男の人の髭は凍るほど、水道管は放っておけばカチンコチンに凍ってしまう寒さだが、春は芍薬の花が自生し、名も知らぬ黄色い百合のような花が一面に咲く美しく穏やかな所だった。



老黒山



芍薬の花

住まいは、主人の勤め先の病院近くの官舎だった。そこには私たち家族の他にも、たくさんの軍人・軍属の家族が暮らしていた。暮らし向きは、食糧難の内地とは状況が異なり、特に食べ物に関しては、ほとんど不自由はなかった。米、砂糖に加え、果物なども容易に手に入った。今思うと、随分と恵まれた環境だったように思う。



内地に暮らす、まだ女学生だった妹が「靴がない」と度々言っていたのを思い出し、軍靴を作る工場に、こっそり頼んで豚の革で軍靴と同様の立派な靴を作って貰い、靴と併せて食糧を送ってみたが、妹の元には届かなかった。どこかで横領されてしまうほど、内地での物資不足は深刻だったのだろう。

1945 年（昭和 20 年）8 月 7 日、ソ連軍の戦闘機が官舎の裏の山を越えて、旋回して帰って行った。日ソ間の開戦の足音は直ぐそこまで迫っていた。そして２日後の８月９日に、ソ連軍の満州への侵攻が始まったのだった。



その日、夫から「直ぐに行かねばならない。早く朝食の支度をするように」と連絡が入った。私は慌てて朝食の用意をし、戻った夫は、そそくさと食事を済ませ、また慌ただしく病院に向かっていった。その日の夕食の準備をしようとした頃、官舎に残された家族に避難命令が下った。産後 20 日を過ぎたばかりの私は、とりあえずの一時的な避難だと思い込み、大きなリュックにオムツばかりを詰め込んで、とるものもとりあえず、すぐに官舎を出た。

夫と合流することもないまま、後にした官舎には火が放たれ、夫が務めていた病院も焼き払われてしまった。このただならぬ状況に、私はただひたすら、追われる思いで駅に急いだ。無蓋の貨物列車に乗り、走り出した汽車から、夜空から降り注ぐ焼夷弾というものを初めて目にした。遠い空が明るく照らされ続けていたのを思い出す。



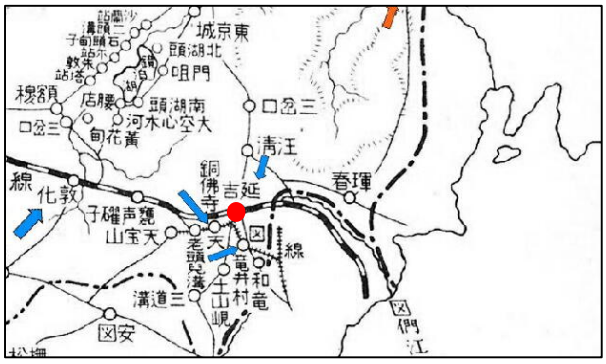
引揚列車を待つ人々



焼夷弾

もう随分あとになってから聞いた話になるが、指揮官の家族等は、ソ連軍の進行が始まった頃には、私達が逃げ惑う混乱の中、ヤミ線に乗り、終戦の 8 月 15 日には日本の地に足を降ろしていたそうだ。

混沌とした状況の中、私達が着いた先は、延吉という所の軍の大きな病院だった。延吉に着いて間もなく、「女、子供を連れて、これ以上逃れるのは難しい。もうこれまでだ」と玉砕の命令があった。私はお風呂に入って身を清め、「これで死ぬのだ」と覚悟を決めた。おって「日本が戦争に負けた」との情報が飛び込んで来た。



延吉



延吉駅周辺

この後に続く過酷な逃避行を思うと、あの時、死んでしまっていた方が楽だったのかも知れない、とすら思う。敗戦国の民となって、私たちの逃避行が始まった。

延吉の病院では看護婦さんが「何かあったら使いなさい。」と、青酸カリを持たせてくれた。延吉の病院から、ドイツ教会に移った頃には引揚者の数は 5000 人を越えていた。毎晩、ソ連兵がその教会にやってきては、体格のよい若い娘さんを連れ出していった。



延吉の教会（現在）

ちょうどこの頃、偶然にも夫と束の間の再会を果たすことができた。夫を含む日本人男性は、ソ連兵に「東京ダモイ（東京に返す）」と聞かされて連行される途中だった。夫は、すれ違う私たちに「自分は先に内地へ引き揚げる。先に帰ってお前たち２人がいつ戻っても困らぬよう準備をして待っている。」と告げて、自分の履いている靴を脱いで「これを売って食糧に変えるように」と持たせてくれた。この後、夫は、極寒のシベリアに抑留されていったのだった。

私たちの教会での暮らしは、長期に及んだ。汗と埃にまみれ、お風呂にも入れず、着替えもない生活の中、シラミの大量発生し、私は発疹チフスに罹ってしまった。病人ばかりが集められた馬小屋にギュウギュウに押し込められ、治療も受けられず、ただ横たわって、何日もの間、私は意識を失っていた。奇跡的に意識を取り戻し、生きて馬小屋を出る事ができたものの、生死を彷徨っている数日の間に、私の赤ちゃんは息を引き取っていた…。

米国船による日本人の引き揚げが始まったということで、私たちは教会を後にし、徒歩で葫蘆島に向かった。野宿しながら、皆と励まし合って、ひたすら歩いた。空き家になったかつての日本人の家に入り、夜露をしのいだこともあった。無人化した家では、家財道具はもちろんのこと、釘の一本までも持っていかれる始末だった。



引揚者



葫蘆島

そして私たちは 1946 年（昭和２１年）9 月を過ぎた頃、葫蘆島の港に辿り着いた。この頃になると最初は 5000 人を超える人々の数は 1000 人ほどになっていた。周囲を見渡しても小さな子供の姿はなかった。最初に亡くなったのは体力のない幼子だった。死人が出ても埋葬する場所すらなく、遺体は防空壕に投げ入れるしかなかった。毎朝、動かなくなった我が子を両手に抱く母親が、表情もなく防空壕の前に列をなしていた。防空壕の外からは積まれた死体が丸見えだった。



防空壕

葫蘆島に着いてからも、すぐに船には乗れず、順番を待った。その間も、生き抜く為に、仲間と巻きタバコを作り、満人相手に売り歩いたり、裕福な家の女中をしたりして日々の糧を得た。女中の仕事を得たのは、敷地にお寺があるような裕福な満人の邸宅だった。日本人と聞くと酷い仕打ちをする人も多い中、そこの若い奥さんはとても気のいい人で、親切にしてくれた。ある日洗濯をしていると「私の衣類はどうでも良いから、姑（しゅうと）の物は特に綺麗にして欲しい」と頼まれた。どこの国でもお嫁さんの気苦労は同じだなと思った。

食糧が手に入らない時は、その辺りに生えている草を食べた。最初は塩で味付けをしたが、塩が尽きると、味のない草を食べて飢えを忍んだ。塩を取らなくなると、ブクブクと身体中がむくんできて、官舎で一緒だった奥さんと再会した際に、私とは気づいてもらえない程のむくみようだった。

ようやく引き揚げ船に乗れたのは、9 月も終わりに差しかかった頃だった。アメリカの貨物船で帰国の途についた。船底にぎゅうぎゅう詰めに押し込められた。ようやく祖国の大地に足を下ろすと、男も女も関係なく着ているものはすべて脱がされ、衣類はドラム缶で煮沸消毒された。私たちは頭から白い粉を振りかけられ、全身を殺菌された。



すし詰め状態の引揚船



DDT で消毒される引揚者

10 月 15 日、日本にいる家族との再会を果たした。しかし、そこには夫の姿はなかった。姑と共に、夫の帰国を待つこと 2 年。生還を信じて疑わなかった夫が、シベリアから帰ってきた。

あの過酷な状況下、どうして私は生還できたのだろう。私の周囲には、励まし合い、助け合う仲間がいたからだろう。生きて帰ると信じ続けた遠い日々が、100 歳になった今でも鮮明に私の記憶に刻まれている。

第５章　黒河事件　～日本人捕虜による収容所脱走と逃避行

「黒河事件」の概況

ソ連は戦争で国力が疲弊し収容、管理、流通能力が低下。無力な 70 万人の日本人を労働力として抑留し、酷寒・飢餓・重労働でやみくもに働けと銃口を向け、抑留 1 ヵ月で日本兵の多くは栄養失調に陥った。1945 年（昭和 20 年）11 月に黒竜江は結氷する。ソ連領江岸で日本兵がバールで穴を開け死体を流し込む光景が黒河側から丸見え、多い日は 60 体を越えたと証言した者がいる。

年が明け、1946 年（昭和 21 年）に入るとソ連は、労働力にならない病弱日本兵を日本へ帰さず、徒歩とトラックで一方的に黒河（こっか）に置き去りにした。満州は日本の降伏後に政情が悪化し、国民同士が交戦する国となり治安は皆無の戦場であった。黒河を支配していた光複軍（中国国民党）は、黒河の旧満鉄の官舎と寮を「南崗収容所」と命名し病弱日本兵約 1,500 名を収容した。

この頃の死者は 1 日 28～30 人との証言もある。3 月、光複軍は八路軍（中国共産党）に破れ、黒河は八路軍の支配下になった。八路軍は一方的に送り込んでくる病弱日本兵の収容に日本統治下の警察訓練所、日本商社木材倉庫を江岸収容所とし 1,300～1,500 人を収容し、更に日本統治時代の陸軍、一般病院には廊下にも収容。廊下で死ぬ有様で、持ち主のいなくなった「つたや旅館」を第 2 病院とした。

八路軍はソ連からの逆送に対応しきれず 1946 年（昭和 21 年）3 月 28 日、1,200 名を第 1 梯団として日本へ向け南下させた。北安到着の 1 番は 4 月 12 日。第 1 梯団は約 800 名が到着し、残余約 400 名は行き倒れ、落伍（らくご）、逃走者で処理。第 2 梯団は 4 月 4 日に 1,522 名で出発。北安到着は 4 月 17 日。梯団中約 300 余名が行方不明者になっている。梯団はハルビンを目指し更に南下したが、松花江（しょうかこう）南岸からは中国国軍（中国国民党）の統治で、日本兵の受け入れを拒否。また八路軍にも「中国軍に渡せば武器を与え敵になるから渡すな。」と意見もあり、松花江北岸で第 1 梯団、第 2 梯団が合流し足止め状態になっていた。

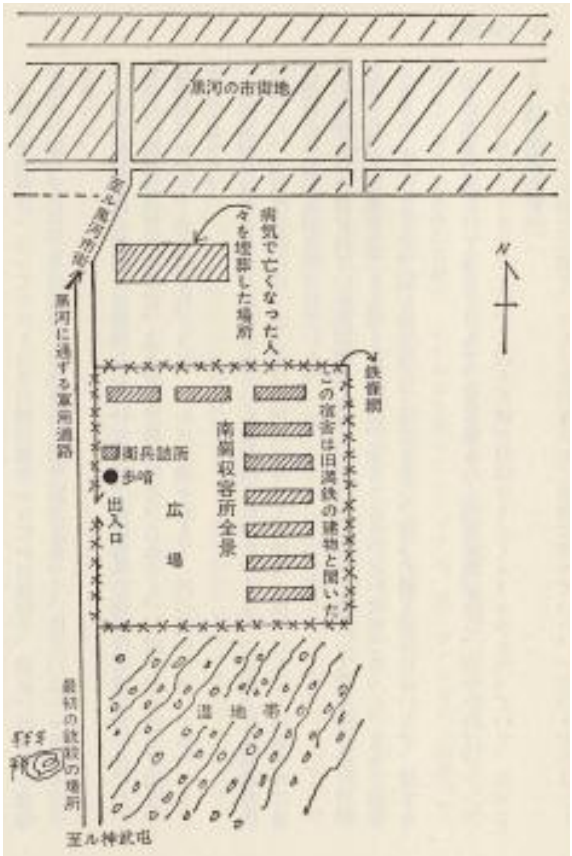
一方、黒河の収容所ではそのような状況は分からず、第 1 梯団は 3 月、第 2 梯団は 4 月初めに出発し、残留者は心をはずませ長坂中尉を団長に第 3 梯団を結成したが、6 月になっても出発の動きもうわさも出ず、何かあると不安が先行し始めた。また同行した八路軍兵士が 1 人も帰ってこないので「本当は鶴崗炭坑へ連れていったのだ。」「八路軍兵士を帰すと兵士から真相が漏れるからだ。」というううわさが真実味を帯び、不安に拍車をかけた。シベリアでソ連にだまされ続けられた逆送兵たちは疑心暗鬼に陥っていた。更に第 2 梯団出発後、八路軍は残留者の健康者を収容所外に宿泊させ、次のような部署に流用したため「残留者は帰国できない。」とうわさされた。

中共軍軍司令部 20 名、清掃隊 30 名、消防隊 20～30 名、発電所 3 名、白酒工場 10 名
平和病院 7 名（軍医・衛生兵）、中共軍副官所 30 名、瑷琿電柱工業所 30 名
瑷琿架橋作業所 16 名、商店及び農家 30 名、孫呉自動車隊整備工 4 名

6 月 10 日頃、黒河の八路軍の手薄な箇所を光複軍が攻撃し大打撃を与え逃走した。光複軍戦死者の中に日本兵がいて八路軍が調査したら、瑷琿清掃隊に派遣した 30 人の日本兵の 1 人と判明。その 30 人は引率者の八路軍将校を殺し、全員が光複軍に加担していると判明した。八路軍は収容所の日本兵が内通していると疑い、連日連夜厳しい取り調べを行い、ついに銃殺刑にされる者も出た。疑心暗鬼に陥った残留者たちは帰国の見通しもなくなる中で、だれ一人 2 度目の冬を越す自信もなく、冬までに日本へたどり着きたい願望にかられた。秋までに朝鮮にたどり着くためには 6 月中に出発しなければと密かに計画を立て、6 月 20 日深夜 0 時を脱走時間と決め決行。その後、先の諸部署で働いていた人々は逮捕され、南崗収容所に残留していた日本兵と共に連日 20～30 名が銃殺。「5 人ずつ後ろ手に針金で縛られて黒竜江に流された。」という南崗収容所残留組の生存者による証言もある。



黒河市街



南崗収容所とその周辺

黒河事件の前後　～井上龍助の証言

黒竜江を船で渡りソ連ブラゴエに抑留され、荷役労働を一冬。生野菜が一片すら支給のない極度の栄養失調。酷寒・発疹チフスの横行に治療もないまま 3 分の 1 の死亡者が出て、ソ連は病弱者を厄介払いするように 1946 年（昭和 21 年）3 月、結氷した黒竜江を徒歩で黒河に逆送した。

私が意識を取り戻したとき、これでは死ぬと澱粉粥（でんぷんがゆ）を作ってなめさせ看病してくれた人が死に、私は生き延びた。酷寒期には街の各所に日本人の死体が積み上げられ凍結。その死亡続出の激しかった 6 月中旬までを黒河で過ごした。

病み上がりの極度の栄養失調者に、食べ物は質・量ともあまりにも悪く、赤色の高粱粥（こうりゃんかゆ）だけが 1 ヵ月も続き、便秘がひどく燕（つばめ）の子が電線にとまっているような姿の糞場では「出ない。」とうなり泣き叫び、血が噴き出すも仕方なく、互いに指でほじくり出し合った。恥も外聞もなかった。人間がこうまでなるのかと、収容所の異常な体験だった。

4 月半ば頃より、使役で黒河の街に出ると中国婦人が、野菜の刻んだのを私たちに向けて投げてくれた。善意の投げ野菜を群がってつかみ合いながら食べた。しばらく後の事だが、何か食べ物とうろつき回り、空き家の貯蔵庫で捨てられている未熟かぼちゃを拾った。まだ凍結が解け切らず、今のアイスクリームの舌触りと同じでおいしかった。残りを抱えて戻った。今思う。だれにでもいい、一口かじらせてやれなかったかと。これが飢餓の現実であった。

春になると明るくなって少しずつ暖かくなり、苦難の私たちの心も明るくなった。救われた思いで天の恵みに感謝した。そして次々と衣類を売り、服の裏地をはがしてシャツに仕立てて金に替えた。木綿針を 1 本 10 円で買い、捨ててある畳から芯の糸を抜き取り、毛布の端を切って服の裏に縫いつけた。どん底に追い込まれると別の生活力が発揮されるもので、戦闘に変わらぬ生きる戦いであった。

「4 人死んだから。」とマーチョ（＝馬車）に乗せ 2 人で運ぶことになり行くと、4 人の死体のはずが 9 人になっていても驚かないようになっていた。本当によく死んだ。軟らかな日ざしを受けた、やせ衰えた断末魔の形相が哀れだった。近づくと何かうごめいている。よく見ると死体からシラミが遣い出していた。骨と皮だけの体、垢で汚れ切った真っ黒いシャツ。それ一面にシラミが動いていた。涙も合掌もなく、塵埃（ちりぼこり）と同じように始末することに慣らされた私もぞっとした。死ぬ者も、生き残っている者も日本のどこかに家族がいて、陰膳を供えて無事を祈願しているのに地獄のここには届かなかった。

地獄絵図そのまま、その描写は難しい。春になっても、次の酷寒期を想像して戦慄（せんりつ）を覚えていた。今まで手記を書けずにいたのも、幾多の生き地獄さながらの状態に突き当たり、書き渋らせていたのが原因である。

その後「黒河事件」の発生する南崗収容所に移り、山梨県人の多い組に編入させられた。ここは軍隊の階級制度もゆるく、やっと初年兵扱いから解かれて、平等に人間として親切にしてもらえた。この人たちからは絶対離れないと決心した。

南崗収容所に移ってから、毎日労役に出ていた。そこで知った日本人民間人の話を記そう。

愛娘をソ連兵士に次々と強姦（ごうかん）、もてあそばれ、娘が自殺した母親の嘆き。
息子を八路軍に連行され、音沙汰（おとさた）がないと案ずる母親。
私が、行方不明の我が子ほどの年だと同情してくれる婦人。

その頃の黒河は、ソ連軍・八路軍（中国共産党）・国軍（中国国民党）・オロチョン・日本の降伏拒否軍が入り乱れ交戦する街であった。

その日も、大煙突の所で労役していると、突然、街中が異様なざわめきと共に市場方面から一斉に動き出し、荷物を担ぎ出す者、手車に積んで動き出す者。街中の中国人はアッという間に逃げてしまった。意味も分からぬまま 30 分位で静かになったと思った途端に銃声が起こり、これは大変と地下ボイラー室に避難した。銃声はますます激しくなり、黒竜江をソ連軍高速艇が全速力でブラゴエに向かっていった。のぞき見してしゃがんだら、正面のコンクリートに銃弾があたり破片が股に刺さった。両方の砲音が激しくなり、対岸ブラゴエからの砲弾が頭上を越えていった。私は戦場のど真ん中にいた。

「シュッ、シュッ。」と弾丸が来るがだれにも当たらず、足下の土に弾丸が刺さった。夕暮れになったので藤原軍曹を先頭に次々とボイラー室を飛び出し、黒竜江岸に向かって走った。双方から敵とみなされて撃たれ、1 発が軍曹の腕を貫通。巻脚絆（まききゃはん）で縛って止血した。ボイラー室より安全と思った江岸は死体が転がり、河面は無数の弾丸で水しぶきが上がり、江岸に地下室を見つけ一夜を明かした。だれかが「ソ連軍が手出ししているから治まるよ。」と言った。翌朝は平静であった。南崗収容所へ戻るため朝早く出ると、通路には死体があちこちに放置されていたが、死体の服も靴もはぎ取られ裸で「素早い人もいるものだ。」と驚いた。

うわさはいつも深刻だった。このまま八路軍に入れられるとか、シベリアへ再連行されてソ連の労働力にされるとか。だれもが 2 度目の冬を越す自信などなく「今度の正月は日本で。」が合い言葉のようになっていた。1946 年（昭和 21 年）6 月 20 日零時、銃声が脱走の合図と決まった。

固唾（かたず）をのみながら待つ。すさまじい怒号と同時に絶叫。「グワー、ウウー。」の声が交差した瞬間「ババン。」と銃声が聞こえた。1 発や 2 発でない。「それ。」と戸外に飛び出し、決められた方向に走る。他の人の事など思う余裕はなかった。湿地帯でヤチ坊主（湿地山帯に生い茂る草、一株が一抱え程で丸くひしめきあって生えている）につまずいて転んでも心は先を走っている。口はやけどのように熱く、追いつき、ヘトヘトになり座り込んだ。暗い中で隊が揃うと歩き出した。

近くに家があるのか犬がほえ出した。「このぉ。」の大声と同時に「キャーン。」と一声で静かになった。一撃でたたき殺す凄まじい殺気だった。神武屯（しんぶとん）兵舎跡に着き、地面に寝て眼を閉じ、耳をそば立てていた。そこへ一人の男が現れたので防諜（ぼうちょう）のために殺した。線路沿いに南下し 2 頭の馬を捕え食べた。その頃から刻々と緊迫した情報が伝わり分散行動になった。

野性の芍薬（しゃくやく）が一面に咲き乱れている丘を歩いたり、山の中に入ったり、私にはここがどこかも分からぬまま、先頭を頼りに歩くだけだった。次の日の夕暮れ、異様な殺気を帯びてかけてきた兵が「やられてきた。」と叫び赤く擦りむけた手首を見せ、矢継ぎ早に話した。



芍薬の花

「50 人位が逃げずに残ったが、全員容赦なく機関銃で銃殺された。5 人ずつ針金で後ろ手に縛られ私は端だった。隣が撃たれ、一瞬の時間差で引っ張られ倒れた瞬間、手首から針金が抜けた。血しぶきの中で死んだ振りをしている内、うめき声も絶え、兵隊は引き揚げ、土掛けが始まり、その隙を見て逃げた。スコップを振り上げて追われたが逃げ切れた。脱走のことは知っていたが、どうにかなると思い残った。まさか殺されるとは思わなかった。」と。

帰国後、黒河事件の真相調査のため、脱走計画は知らなかったという人を探し出し、その人の証言を取ろうと西向、溜口がしているようだが、残って銃殺から逃げた人も知っていたし、私もその一人だ。「冬の来る前に日本へ帰ろう。」と相談し、計画し、準備して決めたはずだ。初年兵の私などは命令を受け従うだけだった。脱走時の鮮烈さ、その後の逃避行の辛酸（しんさん）さは今も忘れない。

途中、意見の相違から慎重派の前島軍曹以下 10 名と、石井中尉以下 20 名とに別れた。確かなあてもなく山中を歩き、砂金（さきん）掘りの場所に出た。次の日、二站（にたん）方面に山の中を歩いていると、前方から駆け戻ってきた 2 人と会った。一人は銃殺の場から逃げた人で「昨夜、二姑近くの空き家で 50 人位が寝ているところを包囲攻撃され、ほとんど殺されただろう。」と言って、横腹に斜めに弾の擦過傷を見せた。別の人は追われる心理か、逃げてきた方を見ながら「早く、早く。」と急がせ「あちらに行ったら危ない。」と言い残して走り去った。

山に入り、夜になったので道路に出たが、エンジン音とヘッドライトで草むらに隠れた。私は自分の息や心臓の動悸（どうき）が遠くまで伝わってしまうのではないかと不安だった。身を伏せると疲労も極限なので眠気に襲われ、いびきをかき始めた人が出た。車が通り去るまでの時間がどれほど長く感じられた事か。それ以後「一人で行動せよ。」と迫った。また山に登り頂上で寝ることにした。下の道を部隊が通過する音が聞こえ危ないところだった。

夜が明けると、遠い道路を山中から見ながら、道から離れないように南に歩き、夜には三站（さんたん）に出た。通路の門は閉ざされており、工藤は中国語が話せるので通過の交渉をした。門の中では緊迫した騒音が起こり「通過させないどころか危ない。」と言った。工藤ともう一人が私たちの行動が慎重過ぎてまどろっこしいと、ここで別行動になり別れた。

私たちは大急ぎで右側の山に登り、更に迂回したところで夜が明けた。斜面を下り柳の茂る川で、煙の出ないように分散して「アカザ」を摘み、粟を炊き食べ、隠れて眠った。午後、遠くで銃声がしてだれかが近づいてきた。山すそづたいに騎馬で発砲しながらの山狩りだった。間違いなくつけられていると思った。皆、伏せて息を潜めた。川を渡って来たら発見される危ないところだった。夜を待ち、恐る恐る歩き出す。地点不明だが数名の一団に会う。二站で戦闘したと言うから「六国」の兵たちで「この付近は守備隊の防衛範囲だから俺たちの庭も同然。」と言って陣地に埋めた手榴弾を掘り出し「あだ討ちをするから。」と誘われたが断った。彼らは軍人精神で、天皇陛下のために戦っていた。



アカザ

分散したり、合流したり、追い抜かれたり、追いついたり、逆戻りしたりしているうちに、遠く離れていても仲間の姿だけは分かるようになった。道を歩いたり、道を避けたり、昼隠れて寝て、夜歩くを繰り返した。脱走後は警戒してばかり。疲れきった私たちは石につまずき、落ちている枯れ枝に足をとられ、煙を恐れながら粟やアカザを炊き、味の無いのをできた者から勝手に食べた。

雨を防ぐものもないので、茂みの下に縮こまっているが、破れ服には水がすぐにしみ込んできた。マッチは缶に入れ、腹の中に差し込んだ。互いに心配そうに目を見合わせながら身を寄せあう。服がぬれると寒さは一層身にしみた。雨を防ぐ場所は橋の下だけ。危険も忘れ橋まで行った。橋の下は流れの端に少し場所があったが、腰まである草はたっぷり水を含み、たちまち水浸しになってしまった。次第に増水し身をかがめることもできず、かがむと尻（しり）が水浸しになった。

不安はつのるばかりだった。動いていると不安から逃げられるので、日ソ戦で覚えた雨露を防ぐ草小屋を作り、ぼろぼろの巻脚絆（まききゃはん）を解き、服を脱いで絞り、火をたいて乾かした。立ったまま眠ったらまつ毛が焼け、ハッと気付くと草小屋が燃えていた。煙が高く上がれば発見されるので急いで雨の中へ少しでも遠くへと夢中で歩いた。

3 人の人影を見つけ、水浸しの湿地に伏せた。3 人は日本人と分かったが、彼らは私たちに気付くとあわてて隠れた。「おーい。」と呼ぶも返事は無し。呼んだり話しかけたりする内、後方の思いがけない草むらから現れたのは別れた中尉であった。中尉の真剣な顔から出た最初の声は「やられた。」であった。追われる身、止まることもできず、ぬれ身の寒さの中、歩きながらの話は次のようなものだった。

10 人と 20 人に別れた後、方向が間違っているのに気付き、山道を直線で二粘街道に出て、用心して二站部落の手前の山で夜を明かした。一人見張りを立て、他は疲労で熟睡、夜が明けても寝ていた。物音で目が覚めると、その時は完全に取り囲まれていた。まだ寝ている者もいる「逃げろ。」と叫んで、山を転げ落ちた。前後左右に銃弾が飛ぶ中、川に落ち、とっさに泥を顔に塗り、柳の枝を折って頭にかざし、岸の草に身を浸け顔だけ水面に出し、敵が去り安全と思うまで隠れていた。私は 19 名が殺されたと思っていたが、復員後の調べで 9 名が殺されたらしい。何人かが足の遅い私たちを後にして雨の中に消えていった。

降りやまぬ雨に体の芯まで濡れ、道はぬかるみ防寒靴の破れた穴から、泥や小石が入り歩行は困難となり、寒気も加わってついに靴を脱ぎ胸にぶらさげた。中には靴を捨てた人もいる。冷たい泥道を素足で歩き、寒気のため凍死するのを防ぐ。睡魔と寒さとの戦いでもあり、どこまで行くという目標も見失った。

疲労の極に達し黙々と歩く一団も、闇に包まれ異様な殺気が漂っていた。山の中のゆるやかな上下の坂が歩行を苦しくしたり、楽にさせたりしながら歩くだけだった。各自の思いは多少の差はあれ、命がけの脱走と南下。「ただ日本へ。冬までに日本にたどり着きたい。」という思いだけだったろう。

暗やみの雨の中、ぬかるみをただ黙々と歩き続けた。峠を越したのか下り道が長く続く。疲労と空腹は寒気を更に倍加した。すると「火だぁ。」と先頭が叫び止まる。先頭は後ずさり、後ろの者は歩を進め、小さな火を見つめながら「どうしよう。」「火には必ず人がいる。敵か味方か。」と話すうち「とにかく用心して確かめよう。」と決まった。だれもが火が欲しかった。食べるものよりも火が欲しかった。暗やみの遠い火。そこには人がいる。それがだれか。敵の中に進入していくような気がした。道は左に曲がったのか、火は右方面になり、また正面になり、ようやく裸火らしいと分かる距離に接近した。「この雨降りに。」と思いは乱れ、近づくにつれ足も乱れる。怖さで列が長くなり一言も発せず息を殺して近づいた。これ以上は近づけないと判断し止まるが、雨も寒さも忘れてたき火を凝視した。一人を調べに出し日本兵だと分かった。皆、安心して雨も疲れも忘れ「これは。」と思うほどの速さで歩き出したのには驚いた。

火は橋の下であった。「山中で雨になったので、山から下りてたき火をしている。」という。大胆なはずだ。国境守備隊員で戦闘継続中の兵隊たちだった。彼らは私たちに場所を譲ってくれた。橋を壊してたき火にしていて、私たちのためにどんどん橋を壊してくれた。うれしさに涙が出たのは何年ぶりのことだったろうか。

橋の下で雨を避け、たき火で暖をとっても、全身ずぶぬれであるので歯もガタガタ鳴り、手足も震えが止まらず。「服よ、乾け。夜よ、明けるな。」と祈った。朝日と共に雨がやみ青空が出て、日が射してきたときは救われた気持ちで、また山の中に隠れ、くぼ地を見つけて服を脱ぎ、水を絞って広げ乾かしながら空腹を辛抱し、死骸（しがい）が転がっているような形で泥のように眠った･･･。

戦争が終わり、もうすぐ 1 年になるというのに･･･。陛下。これがあなたの皇軍の本当の姿でした。

その後もずいぶん危険と苦難の逃避、放浪が続いたが、「黒河事件の前後」の記録報告とさせていただく。

・・・

井上氏は、お子さんたちが結婚すると「俺の財産は無いものと思ってくれ。」と宣言。そのお金で自宅の庭に観音堂を建立し、朝夕、シベリアで、あるいは黒河事件の逃避行で亡くなった戦友の冥福を祈っている。

幾度も地獄から助けられる　～山岡三夫の証言

日中戦争を生き抜き、現役除隊し妻子ある 30 歳の私に、1944 年（昭和 19 年）8 月 15 日に召集令状。名古屋歩兵 33 連隊に入隊し、9 月 1 日には満州（中国東北）第六国境守備隊歩兵八中隊に。今度はソ連兵が相手となった。

人間爆弾で戦車攻撃の特訓。1945 年（昭和 20 年）8 月 9 日、ソ連軍攻撃、七曲り陣地から二站陣地で応戦しソ連軍に大打撃を与え進撃を阻止。21 日、ソ連軍の軍使が白旗を大きく振りつつ日本軍陣地へ。勝利の「天皇陛下、万歳。」が各陣地で起こった。8 月 15 日、天皇はラジオで全世界へ日本の「負け」を放送したと。「負けてもいないのに、天皇が先に黙って負けるとは何事だ。」と怒る者と「ペテンかよ。」と嘆く者。私はどちらでもよかった。20 歳から中国戦線を皮切りに 10 年以上も戦争していたのだ。「これで日本へ帰れる。」と思うだけだった。

軍使は降伏の条件に「諸君は関東軍最強の軍隊であり、ソ連が戦ったヨーロッパのドイツ軍の比ではない。」と絶賛し「軍隊組織のまま日本へ帰す。」と提示したため、将校たち、特に陸軍幼年学校出の職業軍人たちは「体面を汚すことなく名誉を保てる。」と喜んだ。

徒溝子（とこうず）で 100%武装解除され、だまされたと知るも、これがソ連のだましの最初だと気付いた者はまだいなかった。黒河よりブラゴエへ連行され 9 月下旬、ジャガイモ畑で芋を掘りながら、掘った芋 2 個が一食の毎日を繰り返し 1 ヵ月。霜が降り、氷が張り、急速に訪れた氷点下の野宿で凍死者を出しながら 1 ヵ月してアラチカ炭坑に到着したときには 3 分の 1 が行路死。戦闘部隊への報復と怒り心頭になるも、我々は全員立つこともできない体力で、無力にされたと知った。

1946 年（昭和 21 年）2 月、シラミが媒介する発疹チフスにかかった。ソ連は飢餓食で強制労働させ、やせ衰えた病弱者はゴミと同じ使い捨て扱いで、結氷した黒竜江を歩かせて黒河へ追放。その数は 2,000～2,500。黒河は政府軍（中国国民党）の管轄下であったが 3 月に八路軍（中国共産党）に攻撃され、私たちのご主人様は八路軍になった。3 月下旬、第 1 回の 1,200～1,500 人が北安へ向け徒歩で南下。黒河から北安間の鉄道線路はソ連が枕木までシベリアへ略奪してしまったため歩くしかなかった。4 月上旬、第 2 回では 1,500 人が出発。第 3 回を待つ私たちは黒河市街の南崗収容所に移された。南崗収容所はシベリア追放組 500 人と日本人婦女子が約 100 人。隊長は長坂欽次中尉（岡崎市）だった。医薬もないのに体調を回復させた私は八路軍の副官所に泊まり込んで八路軍の雑役を気分転換にしていた。6 月 17 日、屋根修理をしていたら馬を飛ばして来た日本軍人が「お前そんな高い所にいると危ないぞ、今から戦争を始めるから隠れろ。」と教えてくれ、副官所の穴倉に隠れた。

最初は優勢な政府軍に攻撃されていたが、態勢を立て直した八路軍に政府軍は味方の戦死者を残し敗走。八路軍が戦死者を調べたら南崗収容所の日本人が多数いたから大騒ぎになった。これまで八路軍は「侵略者」「東洋の鬼＝リーベン・クイズ」などと私たちを差別せず対等に扱っていた。収容所の食事も自分達と同じ食べ物を私たちに提供し、同じ場所で一緒に食べた。おかげで私たちはシベリアで痛めつけられた体の回復に努めることができた。回復した者たちは収容所の外に出して宿泊させ、道路工事、電柱立て、橋梁（きょうりょう）新設や修理、消防隊、清掃隊、農家の手伝いにあてた。私は副官所雑役などをやりながら、泊まり込み派遣されていた。そのような作業現場へ政府軍が「味方になって一緒に黒河を占領してくれたら日本へ帰す。」と勧誘していたことが判明。この恩を仇（あだ）で返す日本人の裏切り行為に、私たち関係外の日本人は大いに動揺したが、早くもその心配が形で現れた。

4 月に第 2 回が北安へ向け出発してからその後、八路軍は一向に私たちを帰そうとしなかった。このままなら再度、中国の内乱に巻き込まれる恐れがあるので、長坂中尉が八路軍に「早く帰せ。」と交渉に行ったが帰ってこなかった。後に反乱の責任を取らせて銃殺されたと伝わり「日本に帰れないのでは。」という不安が増幅した。6 月 21 日午前 0 時、監視の八路軍 8 名をたたき殺して、婦女子 250 名を含む約 550 名が脱走した。これが橋詰たちの調査している「黒河事件」のいきさつだ。脱走した半数は捕まり銃殺された。

一方、私も含め、黒河の市街や近隣各所に泊まりで出向き働いている日本人は、理由も分からず公安隊に全員逮捕され監獄へ入れられた。私が連行されるときに荷物を持とうとしたら「お前は殺されるから荷物を持っていっても無駄だ。置いていけ。日本人が八路軍兵士を殺して逃げたから、日本人全部を殺す。」と言われた。私は中国戦線を生き抜き、日ソ戦も生き抜き、シベリアでは半死半生にされて発疹チフスになっても助かった。こんな九死に一生の運命も「これでワンラ（完）か。」と心中で嘆き、妻と 2 人の子供に、ここ異国の黒河から別れを告げた。

監獄内は、脱走があっことも知らない無関係な日本人が、日本人であるというだけの理由で逮捕され満員。薄暗い中へ手にロウソクを持った兵隊が入ってきて、ロウソクで顔を照らし「お前とお前。」「そこの 5 人。」と 1 回に 20 人を連れ出しては銃殺。3 日ほどで 3 回続き、60 人以上が銃殺された。ここは監獄でなく地獄で、ロウソクを持った兵隊は閻魔（えんま）大王の使いだった。満員の広間も人が殺され少なくなった 4 日目、今度は廊下から「副官所勤務者、出よ。」と大声で、他の部署の者は呼ばれず私 1 人が呼び出された。「次からは部署毎か。」「最初は副官所か。」とおののき、発狂寸前となった。

あきらめて外に出ると副官所の兵隊が「山岡。殺されていなかったのか。間に合って良かった。」と、抱きついて泣いて喜んでくれた。ソ連ではだまされ続け、ここでは同じ日本人に裏切られて疑心暗鬼なのに、抱きついて泣いてくれる涙を見たとき「助かった。」という思いよりも、何か大きなものに包まれている喜びを感じた。

黒河事件で無関係な日本人を見せしめ刑で銃殺しているのを知った毛沢東主席が「殺され殺しては際限がない。殺された日本人の子が復讐（ふくしゅう）でまた中国人を殺す。止める方法は今、中国人が我慢することだ。」と銃殺中止の命令を出したと言うのだ。この命令を公安より早く知った副官が公安隊に交渉して、殺されずに生きていたら連れてこいという命を受けたということだった。副官は「山岡は痛めつけられ歩けないと思うから馬車で迎えに行け。」と兵隊から教えられたそうだ。3 日後、監獄から全員が出られたと聞いた。



毛沢東

1946 年（昭和 21 年）8 月になると黒河の街に日本人解放のビラが張られた。8 月 15 日、大勢の中国人に見送られて第 3 回として日本への旅に、婦女子を含め約 500 人で最初の目的地、350km 先の北安へ徒歩で出発した。病人や荷物を馬車に乗せ、強盗の襲撃に備えて武装した八路軍が 8 名付いた。野宿しながら歩いて 2 日で 95km の孫呉に着いた。足の弱い人は遅れてどんどん置いていかれ、私たち 5 人の前後には人影はなくなった。

途中、開拓団に取り残された婦人が「兵隊さん助けて。」と声をかけてきた。私たちは「5 人で精一杯。しかも帰る自信もありません。」と断るばかり。励まし、いたわり合いながら歩いた。途中、水も飲み干し、疲れ果てて腹は減るしのどは渇き命の限界と、護衛の八路軍兵士にも見捨てられた。小高い丘の農家に「水を飲ませて下さい。」と倒れ込むと「生水は体に悪いからしばらく待ちなさい。」と 5 人を日当たりの良いところに座らせ「お腹が空いているだろう。」と食事を作って腹一杯食べさせくれた。「たばこはあるか。お金はあるか。」と日本ではとても考えられない言葉と好意に甘えさせていただき、夜露のあたらぬ屋根の下で 1 泊。出発するときにはお弁当を紙に包んで縄をかけ「1 人で持つと重いから 2 人で担げ。」と棒も用意してくれた。

黙々と歩き、いつの間にかこの 5 人に連帯感が芽生え、各自がこの人たちから離れたら死ぬと思うようになった。集落の名を聞き、あと 90km で最初の目的地北安と分かり、最後の力を振り絞ったが 5 人とも限界。極限以上「ここが墓場。」と観念して座り込んだ。疲れ果て、へたばり息が止まるのをそれぞれが待つだけになった。そこへ 2 人の八路軍兵士が現れ、幻のように見えた。「どこから来た。」だれかが弱々しく「黒河。」「そんな遠くからか。」と 2 人の兵士が慌て驚き動いているのがスローモーションのように見えた。この兵隊さんは修理したトラックを取りにいく途中で「動くな。」と言って走り去った。

「後ろは揺れが激しい。」とトラックの前に座らせてもらい、食事やお茶、たばこと至たれり尽くせりのお世話になり北安収容所の前で下ろしてもらった。収容所に着いて驚いたのは、私たちより 5 ヵ月も前に黒河を出発し、日本に帰っていると思っていた第 1 回の人たちや第 2 回の人たちがそのまま残っていたことだ。

日本人は北安から南へは進めないと分かっていたら「黒河事件」は発生しなかったと残念でならない。聞くと黒河～北安間は早い人でも 2 週間、遅い人は 25 日以上かかったと話していた。どのグループも 200 人から 500 人の行路死亡者が出たと言っていた。

1946 年（昭和 21 年）9 月 13 日、明日は北安駅から 1,000 以上の全員が乗車、帰れると喜んでいると入院して帰れない重病人の世話に「二人残れ。」の命令が下った。皆これが最後のチャンスだと思っているので名乗り出る者などいない。不運と言うか今朝、黒河から同行した 5 人組の一人、春日井市の加藤さんが急病で入院し帰国できなくなった。変な一体感がわき出てきて思わず「私が残ります。」と申し出たが、もう 1 人は名乗り出ず、クジで島根県の人になった。翌 14 日、病院の窓から延々長蛇の喜色満面の大行列で駅に向かう戦友達を涙で見送り、とうとう一人ぼっちになったと落胆した。この日が私の 32 歳の誕生日だった。

更に次の日、15 日、入院の日本兵全員を有蓋（ゆうがい）貨車で南下移動させるという通達があった。朝早くから病人を連れ、駅の階段を 30 回以上、上り下りし貨車に乗せて午後 3 時に出発。16 日ハルピン到着。ここで第六国境守備隊の病人を含む 100 名以上を降ろした。私は付添いとして引続き重病人と一緒に南下し、松花江（しょうかこう）の手前が終点となった。

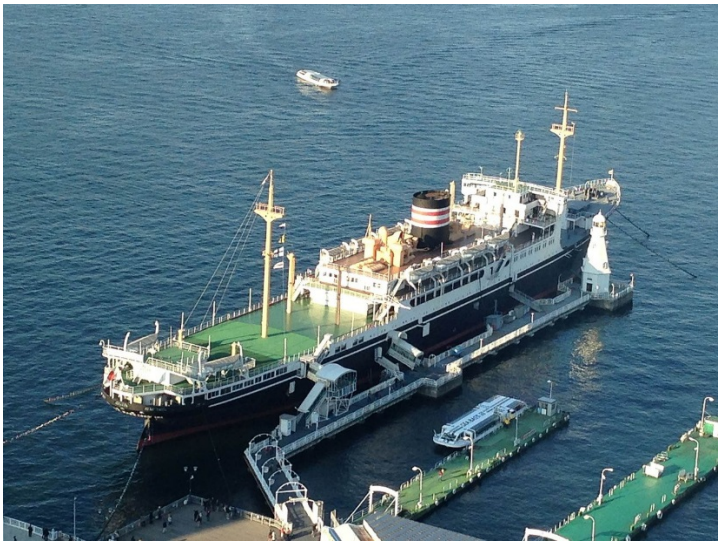
ここで更に驚かされた。松花江の流れが政府軍と八路軍の勢力の分岐となり、内戦の真っ最中だったのだ。河を渡れば政府軍。健康な日本人は南の政府軍勢力になるので、向う岸には行かせられないということだった。線路は破壊されず鉄橋も使えるのに、政府軍と八路軍は話し合って、移動は渡し船を使うことにしていた。不思議なことに政府軍は、手足まといになるであろう日本人の婦女子、老人、重病人は受け入れてくれていた。だから北側の江岸の土手は、健康な日本人が難民となってあふれていた。

重病人と付添いだけ渡し船に乗船し、政府軍勢力地へ重病人と入ることができた。気の毒なのは婦女子と老人で乗船できなかった。後で分かったことだが、14 日に北安を出発した日本人は、牡丹江（ぼたんこう）方面に進路を変え、炭坑で 1953 年（昭和 28 年）から 1955 年（昭和 30 年）頃まで働かされた。松花江を優先渡河した私たち重病人は客車に乗せられ長春へ。長春駅近くの病院別館に着いたのは重病者 25 名と付添い 5 名だったが、5 名の重病者がここで息を引き取った。

病院の大八車に遺体を 5 体積み、長春市街を横断して墓地へ運んだ。遺体の埋葬には墓穴料を支払う必要があるのだが、無一文なので困り果てていると墓守が来て「見ていないからこの穴に埋めなさい。」と案内してくれ、埋葬すると一緒に祈ってくれた。遺体はどこのだれかも分からなかった。翌日、日本人世話人を探し出し、無一物の事情を説明してお金をいただき、重病人の必要品を買うことができた。

1946 年（昭和 21 年）10 月上旬、この病院に入院している病人が日本へ向け更に南下することになった。その中に父親が日ソ戦で兵隊にされて行方不明になり、母親はこの病院で病死して孤児になった 5 歳の美保子がいた。出発に際しだれかが美保子の保護者にならないと美保子は日本に帰れないということだった。だれ一人美保子を連れて一緒に帰ると言う人がいなかった。皆自分一人でも大変だったのだ。美保子の胸には死んだ母親が書いた「迷子札」が縫いつけてあり、岡崎市の血縁先と名前があり私と同じ愛知県。私は日本人よりも中国の多くの人に助けられ、死体の日本人も墓守さんが助けてくれ、ここまでこられたのを感謝し、その恩返しにと美保子の保護者に名乗りを上げた。

病人ばかりなので集団責任者にされ、貨車で長春から葫蘆島（ころとう）へ向け出発した。途中、中国戦線で冒された風土病、回帰熱が発症して 1 週間に 1 回 40 度の高熱に襲われた。葫蘆島に着くと、皆、私と美保子を残し日本へ帰っていった。残された美保子と私は 1 ヵ月加療し、11 月初めに病院船氷川丸に乗った。博多港手前でコレラ患者が出て、幾日も上陸できず落胆もしたが、その都度「道は開ける。」と美保子を話し相手に、時には美保子に励まされ「一緒に辛抱。」と我慢をした。



現在、山下公園前（横浜港）に係留されている氷川丸

1946 年（昭和 21 年）11 月 15 日夕方、名古屋駅に到着。我が家は空襲で跡形もなく焼失し、妻の実家も空襲で焼かれ、物置のようなところに住んでいた。妻は私が一背負っている美保子に驚き、声も出ず呆然（ぼうぜん）と立ちすくんでいたが、私の説明に妻の弟が素早く反応して、美保子の家族を連れて引き取りにきた。

戦争は命令した人でやり、私たちは逃げればよいのだ。命が一番、平和が一番だ。二度と親兄弟、肉親を異国の地へ「埋める」ようなことをしてはいけない。

今も忘れじあの苦闘　～上村喜代蔵

人ソ後、翌年 3 月、栄養失調で逆送され、南崗収容所で黒河事件発生の 1 ヵ月位前より、西崗子（にしこうし）に寝泊まり。毎日、八路軍の将校に連れられ、北鎮台へ日本軍の武器弾薬の発掘作業を中国人と一緒にしていた。また戦死して 1 年近くも放置されたままの敵、味方の戦死体の埋葬もした。どこのだれかは不明だった。黒河事件の起きる少し前、作業の帰り道、西崗子の元慰安所手前の橋の上で、この八路軍（中国共産党）将兵を皆で殺し、光複軍（中国国民党）に寝返った。

1946 年（昭和 21 年）6 月 21 日早朝、多数の元日本兵が息せき切らして西崗子に逃げてきたので、事情を聞くと「暴動」が起きて黒河の収容所を破り逃げて来たと言う。「君たちもすぐ逃げろ。」と言うので西崗子から西溝（さいこう）方面の山中に隠れた。この時の国軍隊長「季」は二站（にたん）方面の出身らしく二站まで逃げた。日本軍人は田中軍曹と脇田明と私の 3 人で、途中で加わった日東一郎はサナダ虫に侵され後日死亡した。

山中でしばらく馬賊生活を中国人としていたが、李隊長は八路軍に投降してしまい、一緒にいた田中軍曹も李と八路軍に行った。

次に隊長となった「馬」は大のアヘン中毒で困り、オロチョン族に頼んで殺してもらう。これが縁でオロチョン族に請われるまま 4 年間、山中でオロチョン族と一緒に生活した。

1946 年（昭和 21 年）9 月頃、中国人を含め 20 人程いたが 10 月末に 3 人に減り、二站で中国人を仲間にして 16 人となり、11 月に 5 人に減るなど、離合分散を繰り返して興安嶺（こうあんねい）を根城にして、時には黒竜江の江岸まで馬賊生活をした。この頃、馬場信一と出会ったが、両足とも凍傷にかかりイザリ同様な体であった。また、山本は自殺してしまった。こうして 2～3 年の間は馬賊生活で、食べ物がなくなると山から下りて部落を襲撃し、馬や食糧を略奪して生活した。その内、八路軍の勢力が強くなってきて、私たち 3 人がオロチョン族の中に隠れていることも知られ、馬賊生活も八路軍の治安努力で苦しくなりチチハル刑務所に投獄された。

1949 年（昭和 24 年）5 月、私だけが改造労働大隊に回され馬場、脇田と別れた。脇田は厚生省記録に 1946 年（昭和 21 年）6 月 23 日死亡と記録されている。私より早く帰国した黒河事件の関係者の証言と思うが、私と同行しており 1949 年（昭和 24 年）5 月まで間違いなくチチハル刑務所に私と一緒にいた。

1951 年（昭和 25 年）の朝鮮戦争の頃は、改造労働大隊で強制労働に服しながら、重度の胸部疾患で入院。胸部疾患のまま 1953 年（昭和 28 年）10 月、舞鶴に復員。田中軍曹は帰国後死亡したと人づてに聞いた。

ああ、黒河事件　～桜井悦太郎の証言

私は、1946 年（昭和 21 年）3 月頃、シベリア・ブラゴエから病弱者として黒河、八路軍（中国共産党）の収容所に送られ、そこで 2 ヵ月半ほどは平和で健康の回復を待った。

5 月下旬と記憶しているが、一番健康でない人から八路軍の輸送で北安へ行ったが、それから一月もたつのに八路軍の兵士は一人も帰ってこないので不思議に思った。

後日、収容所内で暴動が始まり不安の日が続いた。今でも記憶がよみがえってくる。この収容所は「一般邦人」「婦女子」「シベリアから戻された病弱兵」で成り立っていた。

6 月 20 日夜、八路軍の歩哨を銃殺して脱走に成功した。脱走して 2～3 日過ぎた頃到着したのが二站陣地軍用道路。途中、右左に散って休憩していた。すると、トラック 3 台に兵隊を満載して、我々の休憩場所へ猛進して来たので、早々と山を 4～5 人で下った。私たちが河を渡り湿地帯を逃げている時に山の方ですごい銃声が聞こえた。犠牲者が多く出たのではないかと不安であった。慣れた山河を渡り嫩江（のんこう）に着くと、日本婦人が満人と生活を共にしていた。彼女に話しを聞くと「私たちは開拓民です。戦時中この満人部落の人々のお世話をしていたのですが、今は私たちがお世話になっている次第です。」と話してくれた。

麦の取り入れが始まる頃、その日本婦人に相談して満人の家で 2 ヶ月程働いた。その間、八路軍、ロシア兵が 2 人して朝・夕・晩にこの病人部落を偵察に来た。偵察のある度に麦畑に隠れていた。「満人の家になぜ、連日八路軍の兵隊さんが乗るのか。」と聞くと、「黒河で事件が起こり、日本の兵隊なり邦人が当地に着く頃だ。」と説明してくれた。心の中で「俺たちの事だ。」と驚いた。満人の好意のおかげで私たちは救われた。

この頃、日本人の開拓団の人たちは生活に困り、満人に 30 円位で子供を売却していた。満人に「子供を買ってどうするのだ。」と尋ねると「日本人は頭が切れるから、大人に成長したら偉人にする。」と言っていた。どの満人の家にも日本の子供が居る理由が分かった。

邦人引き揚げの際にはこうした事情があるため、親たちも名乗り出られないのだろう。日本人残留孤児の来日調査のとき親子対面がかなわずに終わってしまう。本当に気の毒でならないが、どうすることもできない。

日本が豊かで平和な足跡を積み重ね、高度成長をみることができたのも、異国で国のために戦い、永眠された諸氏の魂の賜物と深く感謝している。

黒河事件に巻き込まれる　～西向克巳（第六国境守備隊歩兵一中隊所属）

♪　あちらの岸はソビエト　赤い狐が刃向かえば　僕は得意の狙い撃ち　♪

このような鼻歌を歌っていた、瑷琿第六国境守備隊の任務は、全員玉砕してでもソ連軍を 3 時間だけ食い止める至上命令であった。この 3 時間で南満州の関東軍が戦闘体制を完備する、私たちはその捨石戦闘部隊であった。

1945 年（昭和 20 年）8 月 21 日。ソ連軍将校が大きな白旗を高く振りながら陣地にきた。私たちは「ソ連が降伏した。」「天皇陛下万歳。」を三唱し、激戦の苦しみをたたえ合った。

ソ連軍将校は、我々に日本の敗戦を告げ知らせにきた軍使だったのだ。「ミカド（天皇）は 15 日、降伏したとラジオで全世界に宣言した。アイゴンスキー（私たち第六国境守備隊のこと）は勇敢だったから、特別扱いで弾薬は没収するが、軍刀、小銃、拳銃を携帯し、軍隊の軍装のまま日本へ帰す。」と降伏の条件を提示した。この条件は将校、特に職業軍人を喜ばせた。

天皇の降伏で天皇の軍隊「皇軍」は降伏した。しかし私に「戦時体験」を書けと言ってきた橋詰や何人かは「赤い狐にだまされるな。捕虜になれば家族が村八分になるぞ。」と、その夜降伏を拒否し武器を持って出ていった。一発の銃声も聞こえなかったのでソ連軍の前線を擦り抜けたのだと思った。私たちは翌日、弾薬を放棄し陣地から数 km 離れた徒溝子（とこうず）で、軍刀、小銃、拳銃を没収され完全に武装解除された。これがうそつきソ連の始まりだった。ソ連はシベリア経由で「トウキョウダモイ（＝日本へ帰す)。」というので、黒河から対岸のソ連領ブラゴエシチェンスクに入った。この日、9 月の始め、前途の不安を暗示するかのような、こぶし大の雹（ひょう）にたたきつけられた。



武装解除後の行列（長春市内）

両側にソ連監視兵が配置され、広いジャガイモ畑で芋掘りをし、1 日分の食料にジャガイモを 5～6 個をもらっては野宿を繰り返し、歩いては芋を掘り、夜は氷点下の野宿。夏服とジャガイモだけで栄養失調や体調不良が激増し、朝、目覚めると何人か死んでいた。歩くことができない者はそこが野たれ死にする墓場になった。「満州から真っ直ぐ日本に帰せばよいのに。」とだれもが思った。すると物知りが「ソ連領から帰すと賠償金が多く取れるから。」と言った。「ソ連の金儲けか。」と毒づいた。

1ヵ月、野宿をしながら芋掘りをして、囚人と一緒に働くアラチカ炭坑に着き、ここで「赤い狐」にだまされたと気付いた。「ソ連兵を殺した戦闘部隊への報復措置だ。」と怒り心頭に発し「賠償金が…。」と言ったヤツを殺したいほど憎むようになった。

着替えも、石鹸（せっけん）も、入浴もない。衛生面ゼロ、シラミが大発生。私は12月に発疹チフスにかかり、血便を垂れ流して意識を失った。幸い両側の人が、私の鼻の下に指をあて「まだ生きている。」と死者扱いに抗議してくれたという。九死に一生を得て命はとりとめたものの、耳は遠くなり足もふらふらだった。何が何だか訳の分からぬまま1946年（昭和21年）2月18日、トラックの荷台に放り込まれ、結氷した黒竜江を渡り黒河の光複軍（中国国民党）轄下の収容所に放り出された。ソ連は病気で働けなくなった日本兵を、治療せず邪魔者扱いで放り出す国だった。

黒河はソ連で働けなくなった病弱者が多く、徒歩で追放された者の多くは黒河にたどり着く前に行路死した。死にかけた病人ばかりで、毎日毎日、逆送兵士の中から幾人もの死者が出ていた。死体をソリに積んで凍った道路を、少し元気な者が引っ張って郊外へ捨てにいった。付添いも世話する人もいない、だれもかまってくれない、どこのだれか名前も分からないゴミ扱いだった。日本では家族が陰膳を供え無事を祈っているのに家族の祈りが届かない地獄にいるのだと思った。

黒河の街にも日射しが緩んできた3月、ラッパを吹き鳴らしながら、弾帯を肩にかけた八路軍（中国共産党）の一隊が入ってきた。今の今まで収容所の監視をしていた光複軍の兵士たちは、クモの子を散らすように逃げてしまった。機を見るに敏なる彼らの「生きる秘訣」を見たような気がした。

当時黒河には約2,000人の日本人がいた。ソ連は自国の戦後復興に労働力として日本人70万人をシベリアへ連行したが、大勢の死者と病人が出て、病気で使えない者を黒河に追放。黒河の日本人は気候が暖かくなるに従い、ソ連からの追放者で膨れ上がった。八路軍は収容所の収容能力調整のためか、日本人の移送をはじめ、3月末に1,000余名を第1梯団。4月はじめに1,500余名を第2梯団として北安へ向かわせた。私は第2梯団に入れてもらい日本へ向かって黒河を後にしたのである。

1946年（昭和21年）4月初め、第2梯団1,500名の1人として私は北安と、その彼方にある祖国日本へ向け第1歩を踏み出した。しかし体力的に集団と行動を共にすることは困難で、1日遅れ、2日遅れては集落近くの馬糧乾草の中へ潜り込んで寝た。少量の粟粥を炊いて流し込み、2km歩いては30分休み、牛歩のような歩みで独りぼっちになり、とうとう粟も食べ尽くしてしまった。

ついに物乞いをしなくては明日の歩行ができなくなり、集落から離れた一軒家を選んで深夜に戸をたたいた。農夫らしい中年男にあっさり断られたが、奥さんらしき女性に粟を恵んでもらった。驚くほど袋一杯に粟（あわ）を入れて下さり、渡すとき「兵隊さん、お願い。連れて行って下さい。」と日本語で言われた。女性は臨月近く、300kmを歩ける姿ではなかった。農夫は「日本人は頭が良いのでお腹の子に教育を受けさせ、偉人に育てる。俺たち夫婦は、老後に楽ができる。」と話した。40年、50年先の遠大な計画に、さすが中国人と驚いた。

その女性は山形県の開拓団の一員で、敗戦と同時に開拓団が襲撃され殺された時、この農夫に助けられたという。私は自分 1 人歩くのが精一杯の現実を伝え「あなたを助けて歩くことばできない。」と断ったが自分の「逃げの姿勢」を自問して辛かった。

夜になると無性に火が恋しかった。たき火を頼っては仲間入りをさせてもらったが朝になると 1 人か 2 人は死んでいた。どこのだれかなど全く分からない。身分が分かるものは何も身に付けていなかった。この私もそうだ。誠に申し訳ないが死者の持ち物は生き残った者に役立ち、死体はその場に置き去りされた。

気の遠くなるほど長い丘陵の道を一人でトボトボと歩いた。前後数 km の視野には人影もない。梯団の最後尾は自分かと思うようになってきた。ゆるやかな丘を越えると視界が広がり数百 m 前方に 1 人寝ている姿が目に入り、更にその先に野火が見えた。野火は猛烈な勢いで大きくなりこちらへ向かってきた。寝ている人に危険を知らせなければと思っても、大声も出せないし早く歩けなかった。火は寝ている人を包んで通り過ぎた。頭髪は全部燃え、地肌は墨を塗ったようになり、軍服からは小さな炎が上がりいぶっていた。死んでから焼かれたのか、焼かれて死んだのかは分からない。私と同じ落伍者（らくごしゃ）の 1 人だった。極限の崖っぷちの激動に翻弄（ほんろう）されていた。

黒河を出て 1 週間もかかりやっと孫呉に辿り着いた。黒河～孫呉間は 70km だから、1 日にわずか 10km しか歩いていなかった。いや違う。歩けなかったのだ。

孫呉は日本軍の要衝（ようしょう）で師団司令部や陸軍病院も備えた軍都。私は公用出張でよく来ていたので知り尽くしている街だった。夜を待ち、たき火を目標に進むことにした。途中、第 2 梯団の遅れ組が粟粥をすすっていた。「私にも一すすりの粥を恵んで下さい。」死にかけの病兵の私でも、物乞いは羞恥心（しゅうちしん）で声にならなかった。「死ぬようなヤツに粥などもったいなくてやれるか。どこかへ失せろ。」これが生死を共に戦った戦友からの返事だった。

食べ物のない人が、食べ物を持っている人に「食べさせて。」と言うのは悪であり、罪悪なのだろうか。私はヤツの目に触れない場所で死にたいと思った。ヤツに私の衣服、靴など身ぐるみ裸にされて中国人と食料の交換品にはさせぬと身震いして怒った。みんな禿鷹（はげたか）のような生き方をしていた。黒河を出てから屋根の下で寝たことがなかったので、死ぬなら屋根の下でと第 2 陸軍病院跡で一夜を明かすことにした。たき火をして暖をとっていると八路軍兵士が巡回してきた。「畑荒らしが多いので犯人を探している。」というのだ。私は梯団と一緒に日本に帰ることをあきらめ、兵士に流暢（りゅうちょう）な中国語で「食べ物がありませんから仕事を下さい。」と頼んだ。巡回の長らしい兵士が「会話のできるヤツを探していた。」と八路軍自動車隊の炊事で働くことになった。

「天は我を見捨てず。」であった。私は自分の体に合った食事を自分で調理した。栄養価のあると思う食材を選んで、少量だが柔らかく調理し、胃腸を驚かさないように薬と思って食べた。ここで体力を回復し、体調を整えるのが天からの授かりだと一生懸命働き、炊事の中国人より字は読めるし計算もできるので重宝がられた。そこで更に信頼を高めようと、炊事で働く中国人 2 人が食料の横流しをしているので、幹部に「よく働く日本兵を 2 人探してくるから。」と交代させた。私と同じように落伍し食べ物のない連中がさまよっていた。「屋根つき、食事つき、寝具つき。」で誘い、ボスは俺と分からすため「命令者は俺」を条件にした。

私たち 3 人は恩義としてよく働き、炊事場や食器類をピカピカに磨き上げ、清潔な職場に変身させて八路軍兵士を驚かせた。自分が働く職場は整理整頓するという日本人の潔癖性がそうさせたのだろう。体力を回復させ、3 人で冬の来る前にはここから逃げて朝鮮へたどり着こうと話し合うのが楽しくなっていた。

ここ孫呉では光複軍と八路軍の小競り合いが続いていた。6 月の終り頃、北安から急派されてきた八路軍の幹部将校が、この自動車隊で車を交換して黒河へ慌ただしく出発していった。車を交換する間に炊事でお茶を出すことになった。この付近にはいない相当偉い人物だと雰囲気で分かった。隊長との会話では、黒河に収容されている 1,000 人以上の日本兵が八路軍の番兵 8 人を殴り殺し逃げたという。

「我々は逃げた日本兵を捕えるのだが、黒河では、逃げなかった日本兵まで手引者として殺している。毛首領はこれ以上日本兵を殺すな、殺された日本兵の子が、殺した中国人の子を親の仇（かたき）と殺し際限がない。殺し合いをなくすために中国人は我慢せよ。」の命令で、殺しに待ったをかけに行くということだった。この話は後に黒河事件を調査している連中を驚かせた。黒河事件で生き残った人々は、北安から「日本人を殺すな。」と伝令が来て助かったと証言していたからである。

私は大変なことになったと身震いしたが、日本兵の身辺が急に慌しくなり、危険が迫っているように感じた。会話の理解できない 2 人には真相を話さず、大人しくしているのが一番だと伝えた。

黒河の詳しい状況を知らない私たち 3 人は炊事場に腰をすえ、よく働きよく食べて体力の回復に全力を注いだ。3 ヵ月が過ぎ、8 月末に逃亡しようと決め準備に入った。毛布で背負い袋を作り、ピンハネした食料で買収した家に食料を貯蔵。8 月 25 日の消灯後「丈夫な体にしてくれてありがとう。」と感謝しながら 3 人は横領した食料を担いで逃亡した。「逃亡がバレるのは明日の朝、朝食ができていないから…。」とは思ったが、生死を賭けたような悲壮感もなく「飼犬が手を噛んで出て行く。」という軽い気持ちで出発したのが誤りの始めであった。

ソ連軍が略奪し線路と枕木のない砂利（じゃり）跡を北安へ向け、8km 行軍（1 時間に歩く距離）の歩幅で元気よく足並みも軽く歩いた。清渓（せいけい）を夜中に通り辰清（しんせい）の手前で夜が明け、我々は驚くほど距離を延ばしているのに自信を高め、逃亡計画の完璧さに自己満足していた。突然背後から軽機関銃の銃撃を受けた。両側は湿地帯なので、3 人はとっさにそれぞれが一瞬安全と思うところへ飛び込むように隠れた。私はその先の小川まではって行き、ドロ柳の根株へ移動し、身を曲げて息を殺して難を避けた。追っ手はトラック 2 台で、小銃と軽機関銃で 15 分ほど乱射した。私は「顔見知りを殺しに来た気持ちは…。」などと考えていた。後は我々に降伏を呼びかけ 1 時間ほどして去った。

この乱射で 1 人が頭を打ち貫かれて即死。川からはい上がった 2 人は粟も水に濡らし塩も水に溶けて食料を一瞬に失くしてしまった。道は歩けず小興安嶺の山に入り周囲を警戒しながら花と球根で飢えをしのいで龍門（りゅうもん）を目指した。私の靴底がはがれてしまい何 km か素足で歩いたが筋肉が露出し、歩ける状態ではなくなった。限界を察した私は彼に別れを告げ残ることにした。

足を布で覆い引きずるように歩いていると、野菜畑があり人家が近いと分かった。畑にはなす、きゅうりが成熟しかかっていた。これを餓鬼のように手当り次第に口へ放り込んだ。おいしかった。すると一匹の野犬がほえ始め、野犬は見るまに数匹になり吠え立てた。歩けないから逃げることもできない。とうとう満州の境野で野犬に食い殺されるのかと観念した。人影がしたかと思ったら銃声がし、野犬は飛び散るように逃げていった。ホッとする間もなく私は簡単に逮捕され、次の目的地とした龍門の留置場に入れられた。牢獄で一夜を明かすかと度胸を決めたが、寝かされることなく激しい尋問と拷問が延々と続けられた。彼ら同士の会話を想像すると、6 月、黒河で八路軍の番兵を殴り殺したやつらが現れる頃だと言うのだ。私は自動車隊炊事場で「殺しをやめる。」と話していた八路軍高級将校の話を思い出した。拷問は日本軍のお家芸で多種多様あり中国人を苦しめてきた。私は死なない程度の拷問だが、殺されるかと思うほどきつく、うなり、もがく度に「殺せ。殺せ。」とうめいていた。殴られ蹴り上げられ鞭（むち）でしごかれるが黒河事件そのものを知らないから答えようがない。かと言って 6 月は自動車隊炊事で働いていたと言えば、黒河事件の疑いは晴れるが、八路軍の信義を裏切り、食料横領、窃盗罪で銃殺は間違いない。正直に黒河を 4 月に出発した第 2 梯団の 1 人と言うも、「今は 9 月だぞ。今頃いるわけがない。うそだ。」と信用しなかった。朝まで一睡もせず尋問と拷問が続き、ここが墓場と観念した途端、スーッと体の痛みが引いていく錯覚に陥った。

どれぐらい時間が経過したか分からないが裏庭に引きずり出された。庭に大きな穴が掘られアンベラの上に死体が一体横たわっていた。私はこの人と一緒に埋められるのかと思い「私と一緒に埋められるこの人はどういう人か知る権利がある。」と言うと、昨日農家に押し入り農夫を撲殺し、農婦を脅し金品と食料を強奪し食事を作らせ、たらふく食べてから農婦に傷を負わせ逃げた。」と言うのだ。「知っているヤツか顔をよく見ろ。」と言われた。銃殺刑で眉間に 1 発、顔が半分つぶれて、苦しまずに死んでいた。なんと 2 日前に別れた人だった。私は知らないと言い切った。私は殺されも埋められもせず留置場に戻された。私を脅して本当のことを聞き出そうとした心理的拷問だったのだ。本当のことは第 2 梯団であったということだけしか言えない。ここに 1 週間留置され拷問、尋問を繰り返し受けていたがトラックに乗せられ、北安監獄へ移送された。

目的地北安へは囚人として到着した。なんと皮肉なことであろう。取り調べもなく来る日も来る日も中国人囚人と足伽（あしかせ）をかけられ街の清掃をさせられた。足伽とは 1 枚板に穴が 2 つありそこへ足を入れるのである。



足枷

2 週間ほどしたある日、街中で一団の日本人とすれ違った。その中に第六国境守備隊歩兵一中隊の南部さんを見つけた。思わず大声で「南部さん助けて下さい。北安監獄にいます。」と叫んだ。2 日後に「出ていけ。」の一言で監獄を出され、南部さんたちと一緒に日本に帰ることができた。南部さんは三重県鈴鹿市へ、私は神戸市にそれぞれ病弱のまま帰った。

思えば長い長い紆余曲折（うよきょくせつ）の道程だった。生と死は紙一重というが、死ななかったのが不思議。日ソ戦以来、死に直面すること数十回、ついに死ななかった。生と死の境目とはどういう意味合いなのか。第六国境守備隊という強い兵団の中で鍛えられた不屈の精神が、陰に日なたに働いてくれたのだと思う。

圧倒的多数の評論家は「腰抜け関東軍」「張子の虎、関東軍」とけなして厳しく糾弾しているが「極東の勝利」を刊行したソ連は、「アイゴンスキーは関東軍最強の軍隊で、ヨーロッパのドイツ軍とは比較にならない。」と記述している。日本でも 1 人、軍記作家伊藤桂一は、関東軍の中でも最後の最後まで関東軍の名を辱めなかった屈強不屈の第六国境守備隊を「讃（さん）たり。」と評価している。

最後に戦友の橋詰は「俺たちは訓練で、世界一の殺人技術を身に付けさせられた。平和になった今、どのように生きればよいのだろか。」と言った。皆さんも考えてほしい。私も答えを探している。

黒河事件に関する厚生省公式資料

第三梯団（脱出組）の状況

一　第一・要二梯団南下後江岸収容所に収容されていた長坂大隊の主力は南崗収容所に移され第三梯団を編成帰国を待った

二　第三梯団の編成は次の通りである

本部　　長坂　欽次中尉以下　　27 名
第一中隊　笹岡　　訊中尉以下　約 150 名
第二中隊　田中武十郎少尉以下　約 150 名
第三中隊　独立速射砲第 30 大隊　瑷琿病院（南崗収容所外居住）
第四中隊　邦人　松尾洋介以下　約 200 名（一般邦人・義勇軍・婦女子・警察官家族 20 名を含む）
総計　約 500 名

三　黒河脱出の経緯

1　長坂大隊は南崗移動後一部の人員を黒河市街並に周辺地区に差出し中共軍要務に従事していた
2　これより先瑷琿に東北光復軍（国府軍系）が勃起し黒竜江沿岸農民を扇動し兵力増大中で昭和 21 年 6 月 18 日黒河の中共軍を攻撃この戦闘により長坂隊にも若干の戦死者と多数の負傷者が出た。
　当時黒河中共軍に留用瑷琿に派遣されていた西村中尉以下約 30 名は東北光復軍に参加した
（注　反乱）西村隊の戦死は西村少尉大川広（三重）負傷者藤原軍曹（京都）山下准尉（静岡）
3　上の戦闘後長坂中尉は第四中隊に逃亡計画が発生した疑により中共軍に昭和 21 年 6 月黒河で銃殺さる
　長坂中尉の死亡は現認者無きも諸証言資料を綜合し確度甲である
4　この事件により長坂隊幹部は部隊全員の脱出を企図し先づ各中隊毎に瑷琿に脱出同地で光復軍に連絡の後ハルピン又はチチハル方面へ出る計画をし昭和 21 年 6 月 20 日夜半中共軍衛兵 8 名を殺し脱出を決行した
　当時健康上脱出に参加しなかった者 56 名上記人員は後中共軍により殺害された模様である
　氏名等不詳である
5　脱出の混乱により各中隊は統制力を失い計画の如く出来ず各行動群毎に区区の経路を径て夫々南下した

四　　黒河脱出後各行動群の状況

1　瑷琿方面

イ　笹岡中尉以下約 80 名は一団となって黒河脱出途中人員を収容し昭和 21 年 6 月 22 日正午瑷琿着人員 120 名であった

ロ　松尾邦人の指揮する隊約 130 名は神武屯に集結後璦琿へその後児玉軍曹（八日市市）は婦女子 14 名と璦琿に到着

ハ　璦琿に集結分宿中中共軍の急襲を受け笹岡　松尾　両隊共混乱し各人個々の行動となるも概ね次の如く二分されて脱出した

◎コンビラ河を渡河ハルビン方面へ　約 3 割

◎嫩江　チチハル方面へ　約 7 割

ニ　璦琿脱出後笹岡中尉等の行動

笹岡中尉は 7 名と行動途中小興安嶺で 3 名落伍 吉田（北海道）以下 4 名と北安南方一里の通北開拓団跡で 7 月 10 日頃松尾隊と合流したが土民の訴えで松尾以下 6 名は北安監獄へその後松尾を除く全員再び開拓団跡に戻るも笹屋以下 18～40 才の男子と未婚の女子等 300 名と部下 3 名は昭和 21 年 9 月 16 日鶴崗炭鉱に移送さる笹岡中尉は残された婦女子約 30 名とハルピンを径て帰国した

ホ　児玉軍曹（八日市市）の行動

本人は脱出後婦女子 14 人を連れ璦琿に到着した後軍人軍属 11 名で璦琿発二站を径て四站に着くも同所で中共軍の攻撃を受け 3 名殺さる

残者は離散児玉は単独行動途中池本中尉以下 3 名と再会するも残余の人員は不明また児玉は昭和 21 年 7 月 27 日頃チチハルにて斉藤中尉（山梨）以下 2 名が中共軍宣伝所勤務を目撃している

2　松花江方面

イ　昭和 21 年 6 月 24 日全員（人員数不明）二龍山陣地に集結し津志田中尉の命で解散後約 20 名毎にまとまって南下した

ロ　石井中尉以下 20 名は二站に於て左の二組に分かれた

a　石井中尉以下 9 名

b　和田篤 奥巻茂左組 11 名 和田は二站で襲撃された者の状況を承知している模様 奥巻とは 21 年 7 月中旬頃嫩江の手前某部落で別れた

ハ　菱田　弘（京都）の行動

9 名で行動す昭和 21 年 6 月 23 日二站で裸体の侭数珠つなぎになり銃殺された 35～36 名の屍体に遭遇付近の装具より判断し津志田中尉　田中少尉　岡野見習士官　遠山春雄も含まれている模様 この状況の好資料保有者は梁川軍曹の他北条中尉　大野中尉　石井中尉　池本中尉　佐久間少尉も承知の筈　菱田は神武屯を径て北安に到り更に南下通北で笹川に会う山本　瓜生は北安で中島はハルビンで死亡す

3　その他の参考資料

イ　森定雄は昭和 21 年 8 月 23 日嫩江で日本婦人から聞いたとして日本軍人 14～15 人が 8 月上旬嫩江で銃殺氏名等不明黒河脱出組の模様

ロ　革命記念日に約 10 名の日本兵が嫩江に投棄された

ハ　脱出組には若干の餓死者があると判断される

ニ　青少年開拓義勇隊員　山口某は満人農家に住み込み生存の由

第三梯団（残留組）の状況

一　残留人員数並びに残留状況

1　南崗収容所に収容された人員中健康上の理由で脱出に参加できなかった人員は脱出組三の４に記述した 56 名である

2　56 名の他次のイ～ルの中共各機関に収容所外勤務として派遣されていた残留人員数は約 200～210 名と思われる

イ　中共軍司令部　約 20 名（含む義勇軍）
ロ　清掃隊　約 30 名　（八木・川村・瓦谷・高木・大西他）
ハ　消防隊　約 20～30 名　（含む義勇軍）
ニ　発電所　3 名　松田兵長他
ホ　白酒工場　約 10 名（軍人邦人各半数）
ヘ　平和病院　7 名（軍医・見習軍医・衛生兵）
ト　中共軍　副官所　30 名（山岡三夫他）
チ　瑷琿電柱工事所　約 30 名（西村・山下・伊藤・岡田・滝川他）
リ　瑷琿架橋作業場　16 名（山下准尉他）
ヌ　商店　及　農家　約 30 名
ル　孫呉自動車工場　4 名（石井軍曹他）

二　南崗収容所残留者は事件発生後即座に中共軍射殺他派遣者は脱出事件報復として黒河刑務所に投獄され中共軍により左の通り処刑された

消防隊員	昭和 21 年 6 月	銃殺	約 20～30 名
清掃隊員	昭和 21 年 6 月	銃殺	約 30 名
混成	昭和 21 年 6 月	銃殺	約 25～26 名
残　下士官全員	昭和 21 年 6 月	銃殺	12 名

三　黒河刑務所に投獄されたが銃殺を免れた者は後出所し中共軍各機関に左の通り再留用された

1　中共軍副官所　約 30 名
2　残余の人員　約 70 名

四　帰国証言者は全員銃殺と言っているが銃殺された清掃隊八木を鶴崗炭鉱で見たと後日帰国者の証言もある

第６章　満蒙開拓義勇軍　～岩間典夫の軌跡

満蒙開拓青少年義勇軍

岩間典夫は、1928 年（昭和 3 年）10 月 3 日生まれ（山梨県石和町)。学校の先生の勧めで、1943 年（昭和 18 年)、15 歳の時、日本の食糧を確保するため「満州国」で農業をする「満蒙（まんもう）開拓青少年義勇軍」に入った。



満蒙開拓青少年義勇軍

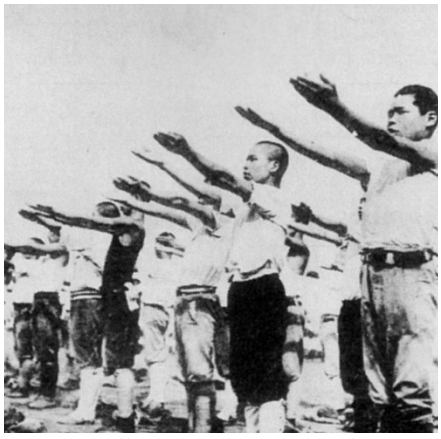


志願した頃の岩間氏

この時代の男の子は、国のために少年航空兵、少年戦車兵、海兵団、陸軍幼年学校、少年義勇軍に応募することが、天皇陛下のためになると教育されていた。

♪若い命の僕たちは　土の日本の前衛だ　炎と燃える感激に
　鋤（すき）を担って来たからは　きっと拓（ひら）くぞ　大満州♪

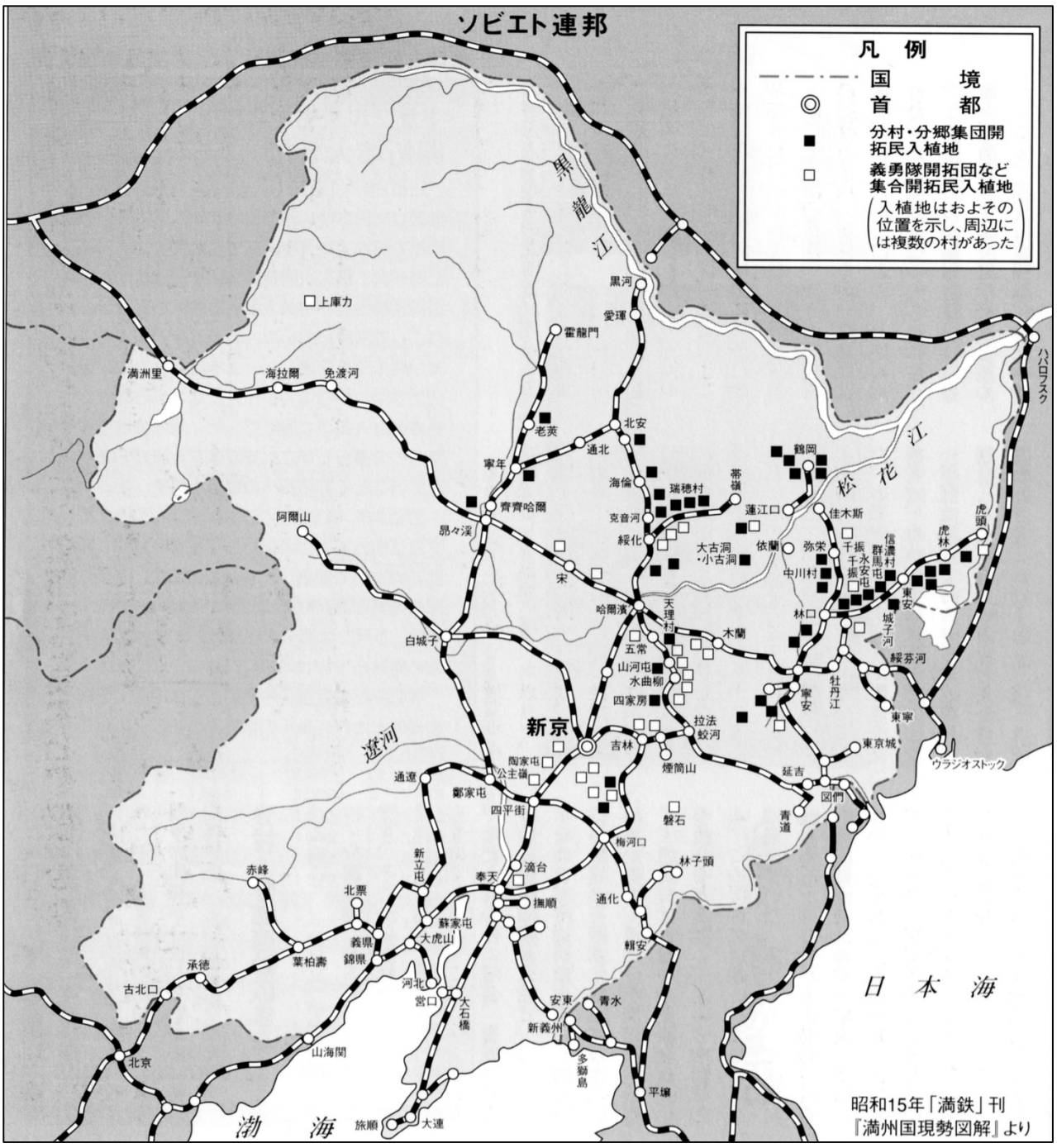
この青少年義勇軍の歌に送られて日本を出発するときは「国のための開拓戦士」「昭和の屯田兵」ともてはやされ、出征兵士と同じように村中の人に万歳、万歳と見送られ、故郷の駅を後にした。満蒙開拓青少年義勇軍の起源は青少年の武装移民の発想であり、加入資格は満 14～19 歳の男子。茨城県東茨城郡下中妻村内原の訓練所で 2～3 ヶ月ほどの訓練を受けた後に渡満し 10 町歩（およそ 300m 四方）の耕作地を与えられた。拓務省の監督下に満洲移住協会を窓口として募集者を集め、訓練所で心身を鍛練して建国精神と協同精神をたたき込み、武装農業移民として満洲に送り出すものであった。



青少年義勇軍の訓練風景



募集ポスター


ソビエト連邦
凡例
国境
首都
分村・分郷集団開拓民入植地
義勇隊開拓団など集合開拓民入植地
入植地はおよその位置を示し、周辺には複数の村があった
黒龍江
松花江
遼河
日本海
渤海
新京
満洲里
海拉爾
免渡河
上庫力
黒河
愛琿
霍龍門
老莢
北安
通北
寧年
齊齊哈爾
昂々溪
阿爾山
白城子
宋
哈爾濱
綏化
克音河
海倫
瑞穂村
帯嶺
蓮江口
鶴岡
佳木斯
依蘭
弥栄
千振
千振水安屯
信濃村
群馬屯
中川村
虎林
虎頭
東安
林口
城子河
綏芬河
東寧
牡丹江
寧安
東京城
ウラジオストック
延吉
図們
青道
大古洞・小古洞
天理村
木蘭
五常
山河屯
水曲柳
四家房
拉法
蛟河
吉林
煙筒山
磐石
梅河口
林子頭
通化
輯安
撫順
敵台
奉天
新立屯
陶家屯
公主嶺
鄭家屯
四平街
通遼
赤峰
北票
義県
錦県
葉柏壽
承徳
古北口
北京
山海関
蘇家屯
大虎山
河北
営口
大石橋
安東
新義州
多獅島
青水
平壌
旅順
大連
ハバロフスク
昭和15年「満鉄」刊
『満州国現勢図解』より

満蒙開拓団入植略図

青少年義勇軍は関東軍の保護下で銃を持って他国の土地を開拓し、匪賊（ひぞく）の襲撃にも応戦した。開拓地に着いた岩間たちの住まいには、家の中に床がなく、地べたにわらが敷いてあり、それが寝床だった。唯一の楽しみは食べることだったが、大豆が入った粗末な混ぜ飯しか食べることができなかった。育ち盛りの少年たちは「国にだまされた。」と気づいたが、どうしようもできなかった。

「幹部」と呼ばれた指導員は昼から酒を飲み、夜は町の売春宿に通った。そのお金は少年たちに食べさせる食料を横流しして作り、中には日本の家族へ送金していた者もいた。当然、栄養失調者が多数出て、死ぬ者もいた。少年たちは考え、幹部に「牛がオオカミに殺された。」と言って 10 数頭の牛を殺して食べてしまったり、養鶏場の暖房をわざと加熱して火事を起こして、千羽近い丸焼けの鶏を食べたりした。

朝水訓練所

それでも幹部たちの横流しは続き、食事は少しも改善されないどころか、少年たちを「お前らは日本からの捨て子だ。」と侮蔑（ぶじょく）する幹部に対し、ついに少年たちは幹部を襲撃し反省を求めた。幹部は岩間を首謀者と決めつけて北満国境の「朝水訓練所」に送った。ここは訓練所と関東軍第六国境守備隊の朝水陣地があるだけの、文字通り、鳥も通わぬ辺境の地。前は黒竜江、後ろは小興安嶺で、柵（さく）がなくても到底、逃げ出せる地形ではなかった。



黒竜江



小興安嶺

この朝水陣地に私は配属された。ここでの訓練は、日夜、人間爆弾で戦車を爆破するというもので私たちの同年兵には１人も長男がいなかった。この同年兵の中に満蒙開拓青少年義勇軍出身の加藤がいた。彼は「今いる軍隊より、義勇軍の方が辛かった。」と体験をよく話していた。

義勇軍も軍隊と同じで、先輩がいばり、軍隊以上の暴力に辛抱できなくなった加藤たちは共謀して先輩を小銃で攻撃。双方で銃撃戦になり、ついに軍隊が出動し鎮圧されたという経験の持ち主。不満を持つ少年隊員に対しては「朝水訓練所に行かせるぞ。」という脅し文句で統制を維持していたそうだ。加藤もその朝水訓練所に入れられ「朝水訓練所は、義勇軍の少年刑務所だ。」と話していた。

8 月 9 日、ソ連軍の攻撃が始まった。陣地に大勢の邦人が避難した中に朝水訓練所の全員も逃げてきた。この中の一人が岩間（当時 17 歳）だった。私たちは義勇軍の少年たちを「ショウハイ」（中国語で「子供」の意味）と呼んで弾薬運びなどに使った。



朝水訓練所跡

別れ

ソ連の攻撃を 3 時間耐えて全員玉砕の予定であったが、私たちはソ連軍と互角に渡り合い、8 月 15 日の敗戦も知らされぬまま 21 日まで戦い、私は降伏を拒否して戦線を離脱。多くの戦友や岩間を含む義勇軍とも別れた。

岩間は陣地で軍人と一緒に降伏し、シベリアに送られた。その冬、シベリアでは大勢の日本人が飢えと重労働と寒さと疫病で死んだ。夏服の捕虜にシベリアの極寒が襲いかかり、最初の冬には大勢が死んだがソ連は死亡者名簿の作成を厳禁。「死亡者ゼロ」扱いの暴挙を強要した。

ラバウルで降伏した 10 万の将兵も戦争が終わり助かった。日本本土も空襲がなくなり助かった。アウシュヴィッツのユダヤ人も戦争が終わり助かった。一方、私たちは世界が平和になってからの「シベリア抑留」「満州邦人棄民」の犠牲となった。

岩間は自分がやらされた強制労働について「ソ連は日本人が病気になると、これとそれは外へ出せと言うので、2 人で外の広場に置くのです。そこは北風吹く、氷点下 30 度の冷凍人間製造所です。毎日、トラック 1 台に日本人の凍死体を積み上げました。これは僕がいた所だけの事ですが、どこのだれか名前も年も分からない人ばかりでした。」と証言した。岩間が連行されたところは朝水陣地の兵隊もいた。私の戦友たちだ。

1946 年（昭和 21 年）3 月、ソ連はシベリアでは使い物にならない病弱者と、国際法に抵触する 18 歳に満たない者を満州まで歩かせ追放した。この追放でも歩けない病人が大勢死んだ。この死の行進の列にも私の戦友が含まれていた。

1946 年（昭和 21 年）6 月 21 日、黒竜江を挟んでソ連と国境を接する中国最北端の町、黒河（こっか）で、これらの追放者のうち約 600 名が深夜、八路（はちろ、パーロ）軍歩哨（ほしょう）8 名を殴り殺し、南満州へ脱走し半数は捕まり、取り残された日本兵が中国兵に殺された。これを「黒河事件」という。私の戦友、児玉（滋賀県）はこの事件を生き抜き帰国、菅井（名古屋市）は銃殺された。八路軍とは、日中戦争時に華北方面で活動した中国共産党軍（紅軍）の通称である。

18 歳未満でシベリアから追放された岩間は、北安（ペイアン）で食物探しをしていると、日本語で八路軍兵士に「仕事をしていますか。」と話しかけられた。「仕事もなく、食べ物もない。」と答えると食堂に連れられ「腹いっぱい食べよ。」と言われて水ぎょうざを腹いっぱい食べた。岩間は、この時を振り返り「15 歳で義勇軍に入るために故郷を出てからこの時まで、腹いっぱい食べた記憶はない。いつも空腹で泣いていた。」と言っていた。「食べさせてくれるなら。」と彼は八路軍に志願した。1 ヶ月は腹いっぱい食べては休養の毎日で、18 歳の若い体力は回復していった。

オロチョン日本人

1946 年（昭和 21 年）5 月。八路軍は 100 台の馬車に物資を満載し、15 名の警備兵に守られ出発したが途中「オロチョン（※）族」に攻撃され、物資は強奪。岩間も捕まった。これが岩間の「オロチョン日本人」としての生活の始まりだった。岩間は少数民族オロチョンの政治家として、後に黒竜江省遜克県の政治協商会議副主席となっていった。現在は、岩間の努力で一族は定住生活に移行。井戸も掘り、トイレも作り、家も中国人と同じになった。

※「オロチョン」:
山の上にいる人、という意味。オロチョン族は中国黒竜江省付近を中心に住む数千人程度の狩猟民族。移動生活だから農耕の習慣はなく、井戸も掘らないとされた。中国の「子供一人政策」はオロチョンには適用されず多子家族である。



八路軍の兵士



オロチョン族

岩間がオロチョンに捕まった頃の黒竜江省の情勢を、戦友の上村（豊橋市）は「シベリアに送られて翌年 3 月、栄養失調で黒河に追放された。八路軍の将校に連れられ戦闘した朝水陣地付近で寝泊まりして、1 年近くも放置されていた敵味方の死体を埋めた。隠しておいた日本軍の武器弾薬を掘り出し、八路軍に渡す作業を 6 月までやっていた。八路軍は我々を日本に帰そうとしないので仲間と相談してこの将校を殺して全員で中国政府軍に寝返った。6 月 21 日の早朝、多数の日本人が逃げてきた。「八路軍を殺して逃げてきた。君たちも逃げろ。」というので隊長と一緒に逃げたが 7 月に入り、隊長と共に八路軍に投降。次の隊長はアヘン中毒で、9 月頃オロチョン族にこの中毒者を殺してもらった。それが縁でオロチョン族と 4 年間、生活を共にした。」と証言した。

このように敗戦 1 年後の黒竜江省は政情の混乱期で、政府軍と八路軍が元日本兵をそれぞれ仲間にして交戦を繰り返し、これに日本の降伏拒否軍やオロチョン族も加わって小競り合いを繰り返していた。帰国した上村から「岩間、オロチョンで生存」が伝えられたが国交のない国では確認もできず、岩間が故郷に手紙を出せたのは 1974 年（昭和 49 年）だった。山梨県石和の実家は政府からの死亡通知を受けて岩間の墓石を建立していた。

狩猟民族オロチョンでは山中や平原を馬にまたがり一発で獲物をしとめて一人前と認められる。1948 年（昭和 23 年）岩間が 20 歳のとき大イノシシをしとめてオロチョンより一人前と認められ、言葉も覚え「莫 宝清」（マオ パウチン）という名前を付けてもらった。1949 年（昭和 24 年）八路軍側の革命政府が樹立。中国共産党の少数民族対策の一環で、岩間はオロチョンに井戸掘りや土壁の家の建築を教え 60 戸ほどを建てた。岩間の埋もれていた才能が次第に花開く時期が訪れたのである。

1950 年（昭和 25 年）5 月、22 歳の岩間はオロチョン族の長老の勧めで、「莫 金花」と結婚した。狩猟民族を定住民族にさせる努力は並大抵ではない。定住し農業を営むだけでは生活の向上は困難。失敗すれば元の狩猟生活に逆戻りすることは明らかであった。義勇軍で習った農業を教え、狩猟で小興安嶺を駆け回っていたときに発見した石灰石、真珠石、メノウの鉱脈の開発を政府に進言してオロチョン族による地場産業を創業。更に「鹿牧場」を作ってその角を漢方薬業者へ売却したり養鶏場や果樹園を作ったりするなど、指導者として辣腕（らつわん）を振るった。私たちも金を集め、山梨でメノウ研磨機を購入して研磨職人を技術指導で派遣した。陣地で弾薬運びをさせた少年、岩間の面影を浮かべて応援した。




メノウ石と研磨工場

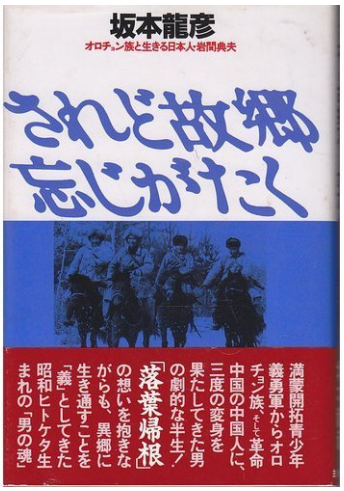
1966 年（昭和 41 年）から始まった「文化大革命」は 10 年近く猛威を振るい、中国の建国に寄与した文化人や知識人の数多くが弾圧を受けた。死亡者、行方不明者は数百万人とも数千万人ともいわれる。中国各地では工業や農業の生産力が破壊される悲劇が繰り返され、岩間も苦難の道に追い込まれた。

岩間には帰国のチャンスが度々あったが、その都度「落葉帰根」（＝落ちた葉は、その根に帰る）という信念を貫き「俺は中国と日本の架け橋になりたい。」と家族と共に耐えに耐え抜いた。「日本鬼子（リーベン・クイズ）」を殺さず受け入れてくれたオロチョン族の人々への恩返しをしたいという一心で中国語の読み書きも覚えた。黒竜江省遜克県の政治協商会議副主席の激務を定年 60 歳まで勤め上げたとき、党と人民から 3 年の定年延長を求められ「落葉帰根」と引き受けた。

1996 年（平成 8 年）67 歳のとき、岩間は日本に永住帰国するためにオロチョンの家族を 5 人連れて日本に永住帰国した。



岩間氏



岩間氏を取り上げた本

第７章　最後の帰還者　～蜂谷弥三郎のこと

蜂谷氏は 1997 年 3 月 25 日にシベリアから 51 年目に生還してきた。彼は戦争中に朝鮮に渡り、平壌（ピョンヤン）にあった陸軍の兵器工場に勤務。妻の久子さん、娘の久美子さんの 3 人で暮らす中、敗戦を迎えた。強者にへつらう仲間の讒言（ざんげん）（※）でスパイ容疑をかけられシベリアに投獄。釈放後もダモイ（帰国）は許されず、監視される生活の中、両親を国家権力により拉致（らち）されたロシア女性と結婚した。蜂谷のロシア妻クラウディアさんが、日本の厚生省宛に書いた文書と、蜂谷氏に渡した手紙を下に掲載する。

※「讒言」
事実を曲げたり、ありもしない事柄を作り上げたりして、その人のことを目上の人に悪く言うこと。

厚生省宛て文書

日本国厚生省援護局第一課引揚業務係　御中

氏名　ノーヴィコワ・クラウディア・レオニードヴナ
住所　ロシア・アムール州プログレス村プーシキンスキ横通５－１

同意書

私は蜂谷弥三郎の妻、ノーヴィコワ・クラウディア・レオニードヴナ。この度、蜂谷弥三郎の祖国帰還永住について、別書の手紙の内容のもとに同意致します。

1996 年 11 月 15 日
ノーヴィコワ・クラウディア

私は、ノーヴィコワ・クラウディア・レオニードヴナと申します。蜂谷弥三郎さんとロシアの法律上、正式な夫婦として登録され、30 有余年、暮らしてまいりました。私たちは類似した運命のもとに苦しい日常を送ってまいり、私はいまだに肉親の生死が確認できぬまま、今日に至ったのでございます。

特に弥三郎さんの場合、過酷な運命に苦しい日常を送ってきた事を、私は十分に理解できるのでございます。北朝鮮に妻や子供を残して連行されたまま、今日までの生涯は筆舌では言い表すことのできない深刻なものでした。日毎ひごとの想い出は、身の上話は、限りなく続くものでした。

また久子さんの立場を思うとき、かよわい女の身で幼い子供を背負い、国境を越え、祖国帰還に九死に一生の望みをかけ、それを果たされた渾身（こんしん）の努力と意志力に、私は心から尊敬致すものでございます。

一日千秋（いちじつせんしゅう）（※）の思いで今日の日を待ち続け、この度の再会を間近に控えておられるのを思うとき、女同士の心の繋がりとでも言いましょうか、涙なくしては決してこのまま見過ごすことはできない、大きな出来事でございます。50 年の歳月が過ぎた今、幸い肉親との連絡も取れ、安否が確認されて、去る 8 月末に娘さんご夫婦、弟の行雄さんのご訪問を受け、夢のような再会をお互いに喜び合ったのでございます。

※「一日千秋」：非常に待ち遠しいことの例え。

弥三郎さんの永年の願いでもあり、肉親の方々の望みでもあり、一時帰国の話がございましたが、私の考えは祖国永住が必然の事と思います。久子さんや娘さんご夫婦とお孫さんに囲まれて暮らす、これが、弥三郎さんが事実上、幸せになり得るならば、私にとっても、この上ない喜びに存じます。共に私たちは高齢期に入り、余命幾ばくもありません。

今日、久子さんのためにできる限りの愛情と心遣いで、老後をお慰めできうるならば、私、ロシアの一女性と致しまして、心から願う次第でございます。もちろん私は天涯孤独、身寄りのない身ではございますが、一人暮らしを致す決心でございます。

クラウディアの手紙

時々、思い出して下さい。ロシアを。プログレス村を。

私たちは思いもよらない人生で出会いました。同じ運命が私たちを引き合わせました。教会で結婚式を挙げず、誠実の誓いを行わずとも、私たちの人生は誠実で神聖でした。

私たちの暮らしは、裕福でもなく贅沢（ぜいたく）でもありませんでした。私たちの人生は、恐怖の下で過ぎていきました。どうか、そんな疑いが二度と繰り返されませんように。どうか年老いるまで安らかに生きながらえていけますようにと、いつも祈っています。



蜂谷夫妻



クラウディア

一切の責任は、戦争にあるのです。私は心の底からあなたを理解していました。両親、妻子、兄弟、姉妹、そして友の人々がいる祖国を恋しく想うあなたの心の内を。

たった生後 6 ヶ月の子と、若い奥様がおられる祖国を、私は、そのすべてを細々と思い浮かべ、いつも涙と共に思い出で話は尽きませんでした。そして食事の時間も忘れ、身を砕くようにして、ただ一心に働きました。そして長い年月が流れました。

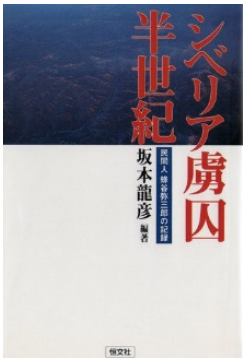
私たちは娘さんやお孫さんたち、それに老いた奥様が健全である事を偶然にも知ることができました。

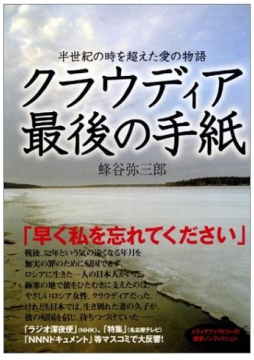
今、年老いて多くの病気を抱えたあなたが祖国に帰ります。一切が失われたようでした。あなたの祖国へと。奥様や娘さんご夫婦、お孫さん、兄弟姉妹、友人の方々が待つ祖国へと。

もはや私たちは再び会うことはないでしょう。これもまた私たちの運命です。あなたが再び肉親の方々に囲まれて温かい情けのもとに、祖国にいるといううれしい思い、その思いで私は生きていきます。

近親者のなかった私たちは常にお墓参りをしておりました。特に荒れ果てた無縁墓地を見る度に、お互いの老後のことを話し合っていたのでございました。幸いにも弥三郎さんには、肉親近親者の皆様に囲まれての老後ですので、安心して永遠に別れを告げる覚悟ができたのです。

私たちは半世紀に渡る監視の下に生きて参りました。苦しみをお分かりになっていただけると思います。絶望の底にあえぐ弥三郎さんを今日まで愛し、お互いに励まし助け合い、慰めあって生きてまいりました。私は今、皆様のご健康とご幸福をお祈りいたしつつ、ペンを終わらせていただきます。





蜂谷氏を取り上げた本

蜂谷の帰国

蜂谷氏は、ロシア国籍のヤコブ・イワノビィッチとして 3 ヵ月の滞在許可で来日し、その後 3 年の滞在期間延長。日本国籍就籍申請を行い日本国籍に戻った。蜂谷氏はロシア国籍だったため、国からの長期抑留補償が得られず、私たちはカンパを募って彼を支援した。

第８章　引き揚げの母と呼ばれた女性　～田端ハナの証言

ソビエト、中国、朝鮮半島などからの帰国者は、引揚船と共に舞鶴港にたどり着いた。戦後 13 年間でその数は約 665,000 名。引揚者を迎え入れるのは家族や親類縁者もそうだが、その受け入れを実際に担ったのは鶴舞市の婦人会のメンバーだった。彼女らは、恐怖と長旅で疲れ果てた帰国者に住居や食事を提供し、帰国者の祖国の第一歩を温かく迎えた。その中心にいたのが「引き揚げの母」と称され慕われた田端ハナさん（故人）である。彼女は市議となり舞鶴引揚記念館の設立（1988 年完成）にも尽力された。

本章に、彼女が制作した「平（たいら）の引揚桟橋は語る」（1989 年 10 月 7 日発行）の内容を掲載する。



舞鶴引揚記念館



平の引揚桟橋は語る

平の引揚桟橋は語る

「引揚記念碑を守る会」の再編成にあたりまして、私たち舞鶴市連合婦人会が、市民の先頭に立って、外地からお帰りになった方々の援助奉仕につとめました記録をとどめておきたいと思います。「光陰矢の如し」とか、本年は引揚開始から 44 年になりました。1988 年（昭和 63 年）4 月 24 日、舞鶴引揚記念館が建設竣工しました。平和のシンボルとして後世への語り部として大切に致します。平和の発進基地舞鶴として、全国に御健在の引揚者の方は「舞鶴には田端がまだ生きているから行きたいんだ。当時の思い出が語り合えるから舞鶴が懐かしいんだ。」と常におっしゃって下さいます。その思い出と皆様方の温かい愛情に育まれ、支えられて私も生きています。それでは一体、海外引揚とは何だったのでしょうか。

引揚とは

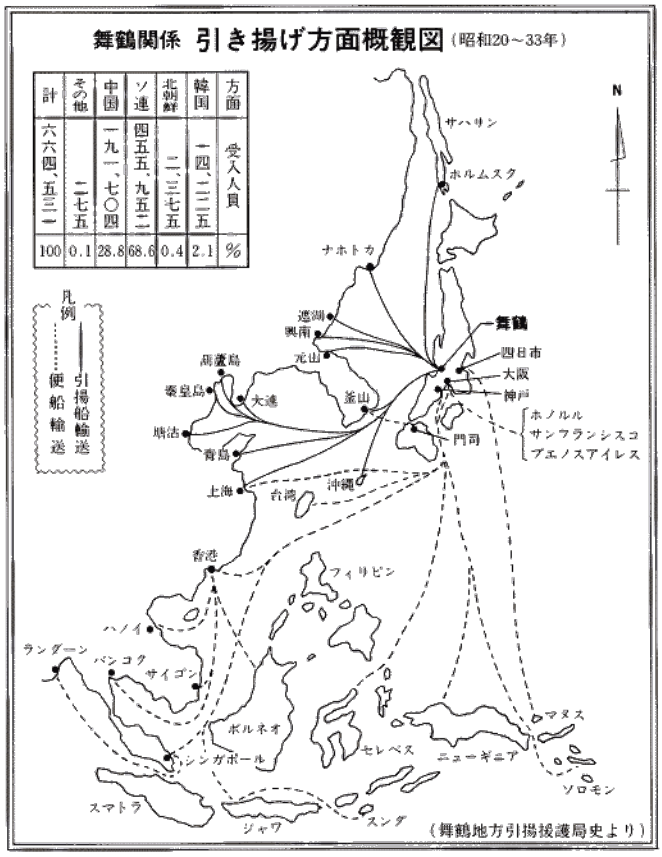
昨春「はるかなる 母なる人に桃一つ　一粒のブドウ　長寿を祈りつつ」は、倉敷の引揚者のK氏が自作の桃やブドウを私に送って下さったとき短冊に書かれていた句でした。私は何度も何度も読み返しました。うれしく思いました。その方の手紙にはこんな言葉が書かれていました。「私は1948年（昭和23年）舞鶴で第2の人生を踏みしめて倉敷に帰り、今もなお元気に暮しています。朔風（さくふう＝北風）吹きすさび零下30度40度の酷寒の地で命を失った亡き戦友の事を思い出し今もすすり泣く夜が度々あります。自分はありがたいと、あの平の引揚桟橋を踏みしめた日の事を思い泣けてくるのです。先生、本当にありがとうございました。舞鶴市民の方、婦人会の方々、白衣の天使看護婦さんの尊い姿が忘れられません。」44年もたった今でも全国の名も知らぬ多くの方々から毎日のように「生きていてよかった。」という喜びのお便りをいただきます。しかしその方々の数も年々少なくなってきます。お便りをいただくと私は必ず御返事を差し上げます。舞鶴の様子を詳しく知らせます。

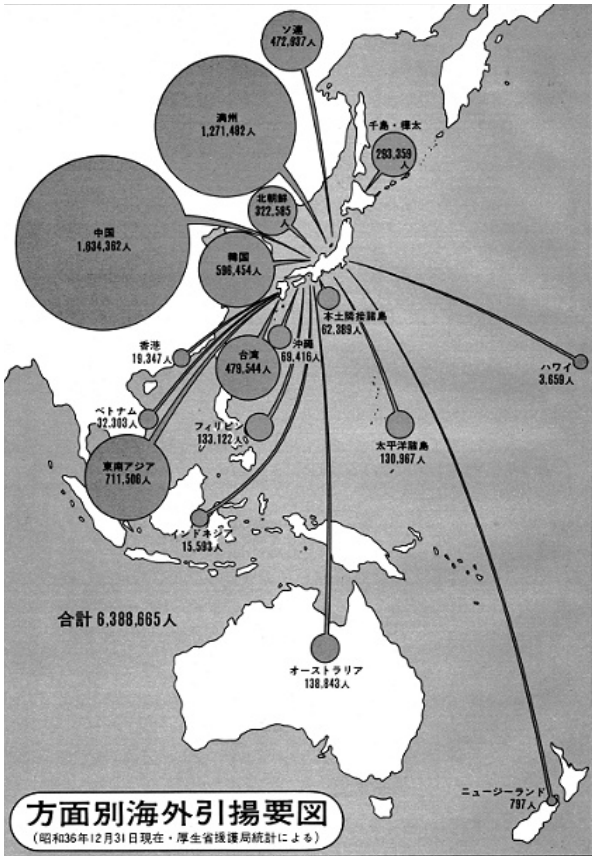
人生の道は未知です。しかしこの道はすばらしく遠く険しい道です。生きているという事は全宇宙の中で最も不思議な奇跡であります。生と死は紙一重と申しますが、無限の可能性のある、深い思考力をもった人間の命が今、生きているのです。この瞬間生きているという事は、だれにも説明のできない奇跡であると思います。そういう人命を私は80年以上も、瞬間の移り変わりに堪えて丈夫で生きてきました。感謝で一杯です。私の生活の中にはどんな時も損得勘定は全くありませんでした。

冬の海鳴り、白銀の嶺、舞う風花、私もまた母として、母なればこそ舞鶴港が敗戦の悲しみの中から行なってきた外地からの集団引揚業務の援助奉仕に、身を捨て家庭を捨てて婦人会員の方々の並々ならぬ献身的な御協力を得て、共々に尊い務めを果す事ができました。日本民族が初めて受けた敗戦の試練を、最後的に処理した所、舞鶴港こそ引揚の原点とも言える母なる港であります。私には引揚の13年間、毎日毎日が来る日来る日が、明暗と哀愁のドラマであり、感動と興奮、無念と号泣の人の世の有為転変の姿でありました。終着駅と同時に再出発への踏切台になった舞鶴港は664,531人の引揚者を迎えました。内訳を申しますと、

ソ　連	455,952人
北　鮮	2,375人
中　国	191,704人
南　鮮	14,225人
その他	275人
計	664,531人

でありました。





引き揚げ方面外観図

なお 16,269 柱の御遺骨をお迎え申し、白衣に包まれた箱を大浦中学校の生徒がしっかりと抱いてくれました。就航引揚船は延べ 426 隻であり、更に中国へ 3,936 人、朝鮮へ 29,061 人の帰国者を送り出しています。舞鶴港への引揚第一船は雲仙丸でした。引揚者自身はもちろんのこと、その何倍何十倍の家族にとっては、生ある限り忘れる事のできぬ港、思い出の港として胸の内に残るであろうし、反面、帰られなかった肉親を持った人たちにとっては希望の灯の消えた痛恨の舞鶴港であった事でしょう。



遺骨を抱く女性



引揚者を見送る舞鶴市民

「端野（はたの）いせ」さんの話は余りにも有名でありますが、船の着く度毎に「新次はいませんか、新次、新次、新次はいませんか。」と呼び続けられた母の腸（はらわた）をえぐられるようなあの叫び声が、私には今もよみがえってきます。また何年もの間、大浦中学校の用務員として船の着く度、いえ船の来ない日も遠く海を眺め、ひたすらに夫の帰りを待ちわびた舞鶴市京口の水島房子さん、いつとはなしに岸壁の母、岸壁の妻という言葉で呼ばれるようになり、こんな方々は沢山ありました。その方々をしっかり抱きしめつつ私も泣きました。

これまでの世界戦史の中でも今次のような「海外引揚」という、民族の大移動はありませんでした。明治以来半世紀の間、海外雄飛を志した日本人が第二次世界大戦で、徹底的敗者の立場に追われた悲惨な姿は、言語に絶するものがありました。今更ながら平和がどんなに大切であり、このありがたさを永久に残さなければなりません。忘れてはなりません。

「国破れて山河あり。」と申しますが、20 世紀は世界各国各地におきましても、闘争の時代であり、戦いの続いた世紀です。今もなお、戦火の消えていない国もあります。

発展途上国といわれる国が世界 50 億の人口の 5 分の 4 を占めています。かつての日本民族も、小国なるが故に闘争をもって、過去の大英帝国のように、国を大きくする事を考え弱者への痛めつけを始めました。日清、日露、日独戦争等、偶然か必然か勝利を収め、闘えば必ず勝つというおごりが裏腹となり、この度こそは徹底的に世界の敗者という座についたのです。天皇が悪い、軍部のせいだ、ではなく私は国民総ざんげの時だと思います。あと 21 世紀も 10 年余りでやってきます。21 世紀こそは、地球は一つ、地球市民として世界のすみずみまで光が輝き、差別のない平和な社会であれと願わずにはいられません。現在日本は世界の経済大国と言われていますが、国民の勤勉と努力もさることながら、軍備を持たず平和に暮らせたおかげだと思います。

戦地におきましても、いまわのきわに兵士は「天皇陛下万歳。」ではなく、たった一言「お母さん…。」と呼んで亡くなられたと聞いています。自分を産み育ててくれた母を忘れられませんでした。母なる国日本、母なる港舞鶴、多くの海外引揚者を迎えた母なる「平桟橋」であります。



桟橋に立ち引揚船を待つ端野いせさん



平桟橋

引揚記念公園

平桟橋のあった港の上の小高い丘に引揚記念公園があります。佐谷市長様の時でした。私は何度か蜷川知事様にお会いに行き、心を込めて「ぜひ引揚記念公園を作って下さい。」とお願いしました。蜷川知事様はだれよりも「婦人の地位向上。男女の平等。差別のない社会。」のためには特に行政面でも、また個人的にも心にかけて下さった得がたい立派な方でありました。佐谷市長様に御協力いただき、あの立派な引揚記念公園ができあがりました。当時私は市議会議員であり、府連合婦人会長でありました。引揚記念公園内には愛の群像と引揚記念碑「あゝ母なる国」があります。そこには次の銘文が書かれてあります。

「全国引揚運動の父、有田八郎（元外務大臣、留守家族団体全国協議会長）守山久次郎（同京都府協議会長）両先生の義に合掌し、舞鶴市民、特に舞鶴地区婦人団体、旧舞鶴引揚援護局員の引揚者援護の愛情に感謝し、今日も帰らぬ同胞の望郷の霊を慰めつつ、岸壁の妻の嘆きをここにとどめ、人類永遠の平和を希（こいねが）うのあまり、海外引揚有志たちがこれを建てる。」

1963 年（昭和 38 年）5 月 18 日、大浦中学校の前の小高い丘の上に桜井氏の御好意により当時は粗末なものながら心あたたまる記念碑を建立されました。その後記念碑老朽化のため、本会からお願いして、銘文そのままを石に刻み、舞鶴市によって引揚記念公園内に建て替えていただきました。1978 年（昭和 53 年）4 月 28 日、除幕式があげられ、当時の故立道市長様に御出席いただき供物や生花をお供え下さいました。留守家族の方々にはこの記念碑は、まさに我が子であり、春秋 2 回は必ず 30 名余りの老父母がお参りされ、吾が子の如くお出逢いに見え、涙ながらに話しあい、詩を吟じ、遠いシベリアを臨み、いつまでも動こうとはされませんでした。今は殆どの方が故人となられました。時の移り変りをしみじみ思わせます。



引揚記念碑



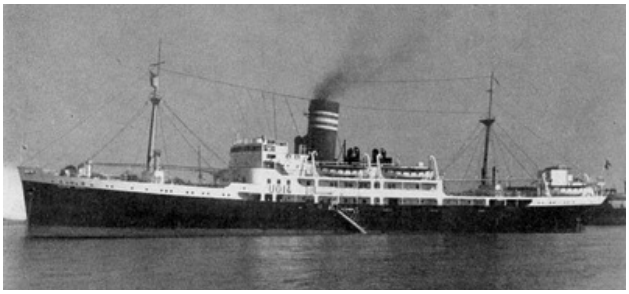
引揚記念公園

私と引揚思い出あれこれ

1945 年（昭和 20 年）10 月 7 日、舞鶴西港へ雲仙丸入港、引揚第 1 船です。故竹ノ内助役さんから私のグループを連れてすぐ出迎えてほしいとの電話連絡がありました。当時まだ婦人会は結成されていませんが、話し合いの会として、私は「さつき会」という 30 名余りの同志会を作り、月 2 回程度会合をもち、時には府下の女性代表の意見発表の場も作っていました。



引揚が開始された昭和 20 年当時の舞鶴西港



雲仙丸

入港の日はうすら寒い午後でした。連絡をすると皆何事かと駆けつけて下さり、近所の皆様と共に 50 名位の方が待ち構えて、海のかなたを見守っておられました。小雨混じりの日で空は曇っていました。海の冷たい風が吹きつけます。じっと見守っている 50 人の視線の先、東舞鶴湾口はるかかなたの水平線上に黒い姿が浮び上りました。かたずを飲み皆黙って見守っています。だれかが「あれよ。」と叫びました。ぐんぐん迫ってきます。30 分近くもかかったでしょうか、やっと船体がはっきり見え、私たちの目の前に船が着きました。「お帰りなさい。お帰りなさい。」口々に出迎えている者は声をかけます。しかし相手はただ無言、何度声をかけても無言のまま、青いハンチングに青い綿の上衣にズボン、男も女も子供も皆同じ服装、皆が黙って上陸、静かに整列、私が「皆様よくお帰りになりました。お疲れの事と思います。舞鶴の港です。日本です。安心してお帰り下さい。」こう申しても、一言のあいさつもお礼の言葉もありません。私たちは不思議に思って顔を見合わせました。大粒の雨が降ってきました。急いで西舞鶴駅への行進です。無言のままの行進です。私は見送りのため共に行進し、すぐ近くの婦人に話しかけました。「私たちは本日無事、この港にお着きになったことを大変うれしく喜んでいます。しかし皆様からは一言の言葉もなく無言です。何かありましたの。」と恐る恐る尋ねました。その婦人は涙を一杯ためて「すみませんお許し下さい。実はこの船に乗っていた 3 人の女性が、昨夜、荒みきった男性の暴力によって無理やりに貞操を犯されました。そのため、今そこに日本が見えるというのに玄海灘に差しかかったとき、3 人は共に身を海に投げて亡くなりました。呼べど答なし、私たちは悲しみに包まれて、昨夜は一睡もしませんでした。」その話を聞かされて、皆様が無言で悲しみと嘖りのあまり言葉の出なかったことが分かりました。これが西港へ初めて入港した引揚船雲仙丸の悲しい秘話でした。朝鮮からの第一報悲しみの雲仙丸でした。

援護局閉局される

1958 年（昭和 33 年）11 月 8 日、舞鶴地方引揚援護局が衆議院議員の山下春枝引揚委員長を迎えて静かに閉局致しました。委員長には婦人団体の活動を評価していただき「希望するならこの援護局も土地も皆差し上げたい。」とまでおっしゃって下さいましたが、私はお志ざしをあつく受けて辞退致しました。この風雪の 13 年間、故国への第一歩を踏みしめた引揚基地舞鶴の名は対岸ナホトカと共に、全国に知られることになりました。平の海は今も変らず美しい波しぶきを立て、思い出の平桟橋も朽ち果て今は跡形もなくなりましたが、1965 年（昭和 60 年）10 月、全国の舞鶴港への引揚者 40 周年の集いを、引揚記念碑を守る会の会長として市の方へ要請し、実行に移していただきましたが、引揚者の方々の御希望により、引揚記念公園内に当時の平の桟橋を偲ぶよすがとして、短いが平桟橋に似た橋を作っていただき、大変喜ばれました。大陸各地から引揚者が厳しい風雪に堪え、苦難の道を乗り越えて帰国の第一歩を踏みしめて舞鶴こそ夢にまで見た故国母なる国日本でした。山の緑、土の香りに涙ぐんだ思い出は、終生忘れる事がないでしょう。私もまた、深まり行く闇の中で、しかと抱き合う母と子、妻と夫、兄姉、新たな希望がわきはじめたことでしょう。極りなく清列な光景の瞬間です。零下 30 度以下に凍てつく土地で友を失い酷使されてきた引揚者の暗い悲しい顔が 40 年以上たった今でも、私のまぶたに焼き付いて消えません。





家族との再会を果たす引揚者

ある日の思い出

舞鶴湾頭水平線のかなたから引揚船が直進してきます。興安丸とうっすら文字が見えてきました。感激で胸が一杯です。着くとすぐ慰問に行き、あるときは玉有船長様から内地にはないコーヒーのサービスを受け「いつも御苦労さま。」と喜んでいただきました。

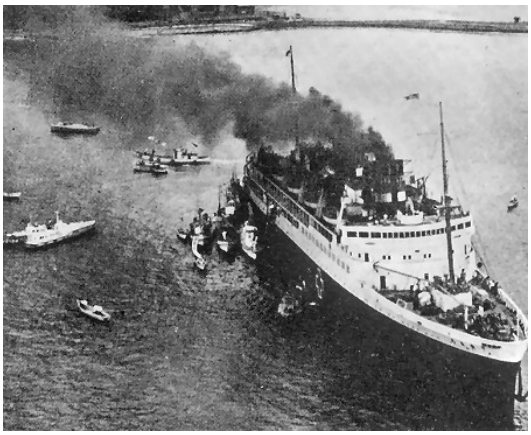
氷雨降る潮にも、もやけぶる夕にも、炎熱の日にもこうして 426 隻の引揚船が入港してきたのです。物語にもなった勇敢な忠犬クマ公もナホトカの氷の海をけって船に近づき、今は亡き優しく温かい興安丸の玉有船長様に助けられて連れて帰られたというほほえましいニュースもありました。

引揚船人港

船が入港すると大丹生（おおにゅう）沖で検疫が始まり、船はいかりを下ろします。当時報道陣（テレビ、ラジオ、新聞社員）はほとんど舞鶴に常駐され、船の着く日を待ち構えておられました。入港し船が止まると、競って縄ばしごや紐を使ってかけのぼり調査にかかられます。私は市がチャーターした西港からの出迎え船の中に市の代表者数人の方と共に出迎えにいきました。毎回声をはり上げメガホンを使って帰国者にごあいさつをしました。「御入港の皆様、御帰国おめでとうございます。ここは祖国舞鶴の港です。本当に長い間ご苦労様でした。この喜びこの感激、私たちも国中上げて一日千秋の思いでお待ち申しておりました。幾年月の長い明けくれ故郷の山を思い、川を夢みてお過しであった事でしょう。これが祖国日本の山々です。海です。舞鶴港の風光をしばし御覧下さい。青く透明な海の色、美しい山々の姿、後わずかで上陸です。きっときっとあの桟橋には、肉親の方々が胸を震わせ固唾を飲んで、御帰国のあなたをお待ちの事でしょう。ではまた援護局でお目にかかります。」喜びと感激に流れ出る涙を抑えながら申し上げました。



婦人会の出迎え



報道陣の船が興安丸を取り巻く

私は大丹生沖まで出迎え船で帰国の方々を迎え、すぐ引返して援護局慰問、その足で国立病院へお見舞に行き、3 日目には駅頭へ、汽車で故里へ帰られる皆様のお見送り、これが私の日課でした。ある日の事です。平桟橋で皆様をお出迎えしている時、思いがけなく「田端先生、森松です。森松です。」と言って私に飛びついてきたやせおとろえた青年がありました。それは私の宮津校時代の教え子でした。母も妻もそこにいらっしゃるのに、森松君は私に抱かれて泣きました。

「ああ、森松君よ。」優秀な少年でした。しかしその青年も 3 年後、栄養失調のため帰らぬ人となりました。奥様やお姉様と文通しつつ今も思い出して泣いています。

国始まって以来、敗戦による海外同胞の引揚という仕事は、思えば大変な大事業でした。「今日も暮れゆく異国の丘に友よつらかろ、切なかろ…。(＝異国の丘)」この哀愁切々たる歌を涙と共に、また一人で口ずさんだ当時が偲ばれてたまらなくなります。舞鶴市の婦人会活動のほとんどは、この引揚援護奉仕への全面協力でした。全国の母の代表、妻の一人として自信と誇りを持ち、66 万有余人の帰国者と、常に 10 万人に近い出迎え家族の織りなす哀歓（あいかん＝悲しみと喜び）の渦、その歴史がすなわち私たち舞鶴市、京都府連合婦人会の尊い歴史でもあったのです。私たちは情熱のすべてを燃やし、全国からお越しになる留守家族の方々の接待にもあたり、無事御帰還を共に祈りました。旅館が満員の時は婦人会員の家にもお泊りいただきました。舞鶴市連合婦人会のみでは十分でないと、物心両面の援助を京都府連合婦人会や、近畿の婦人団体にも御依頼し、私は京都府連合婦人会長の立場から、全国地域婦人団体連絡協議会会長山高しげり先生のお理解とお許しを得て、東京で開催される全国の婦人代表のお集りの席で、つぶさに引揚の実体を報告し、引揚とはかくも切なるもの、そして悲しくも厳粛極りないものである事を涙と共に話し、認識していただき資金のカンパにもあずかりました。私は一生懸命でした。命がけでした。

当地元婦人会としまして物資も少しずつ豊かになった 1949 年（昭和 24 年）頃から引揚者の方々1 人に 10 円のお土産を差し上げようと話し合いました。思えば遥かなる至難の数々よ、忘却とは忘れる事、しかし私の一生、当時を知る舞鶴市民の方々にとって永久に忘れる事のできぬ、世紀の悲劇であり、決して再び繰り返してはならぬ事です。お米も十分でないあの頃、雑炊をすすり、副食もままならず、乏しい食事を笑顔で囲み、家族全員の理解と協力により、時には引揚の余話（よわ＝こぼれ話）に花を咲かせました。引揚の始まった頃はもちろん、1949 年（昭和 24 年）頃にもお菓子や果物は全く売られていませんでした。当時何か食べる物を差し上げたらと相談し、市からトラックを出していただき、農村校下婦人会長の理解と援助によって、さつま芋の供出をお願いしました。当時農村でもさつま芋は貴重な主食の一部でした。トラックの進む所、辻々に皆様の大変な御協力でトラックはお芋の山積みとなりました。ありがたくて皆様の暖かい心に泣きました。私たちは手分けして列車で帰られる方々に、東舞鶴の駅頭と西舞鶴の駅頭で大釜でさつま芋をふかし、乗り込まれる前に熱々のお芋を 1 人に 2 個ずつ差し上げました。「おいしいなあ、8 年ぶりです。ありがとう、ありがとう。」この顔にもあの顔にも涙が光っていました。私たちも共に泣きました。



異国の丘の歌詞



舞鶴駅での見送り

配給大豆の煎り豆、手巻たばこ、これを駅構内へお見送り下さった婦人会の方々が列車の中へ届け必ず湯茶と共に接待していただきました。ある時は列車の中からプラットへ投げ捨てる方もあり、折角の湯茶も飲まずわざとこぼしたり、当時ほとんどがガラス戸ではなく板戸でしたので、パチンと無理に締め切ったり、毎日のお見送りも悲喜こもごもでした。1951 年（昭和 26 年）からは果物やお菓子らしいものの包みができ、入港の翌日には援護局へ持っていけるようになりました。大丹生の青年会の方々からは、いつも貴重な沢山のおみかんを引揚船の中へ届けて下さいました。引揚者の方々はもちろん私たちもその好意に感謝しました。援護局内でも引揚者が帰られた夜には、お赤飯にお頭づきの鯛の御馳走をされていました。また 1953 年（昭和 28 年）頃、宮城県や山形県など東北地方の婦人会長の御好意により、可愛いい小さな男女の「こけし」を沢山送っていただき、故里の香りと母の愛情を皆様に渡し届けました。皆様とても喜んで下さったので、きっと今でも記念に持っていて下さる方があるのではないかと思います。舞鶴港へ入港後、再び帰国者の出迎えに行く船の方々には、ほたるかごや野草で作った花束など、その時々に変った物を届け、また船員の方々への慰問も忘れませんでした。演芸会をもったり、小中学生に慰問をお願いしたり、心の安まる時はありませんでした。喜びも悲しみも幾年月。



舞鶴引揚援護局



大歓迎の中の引揚者

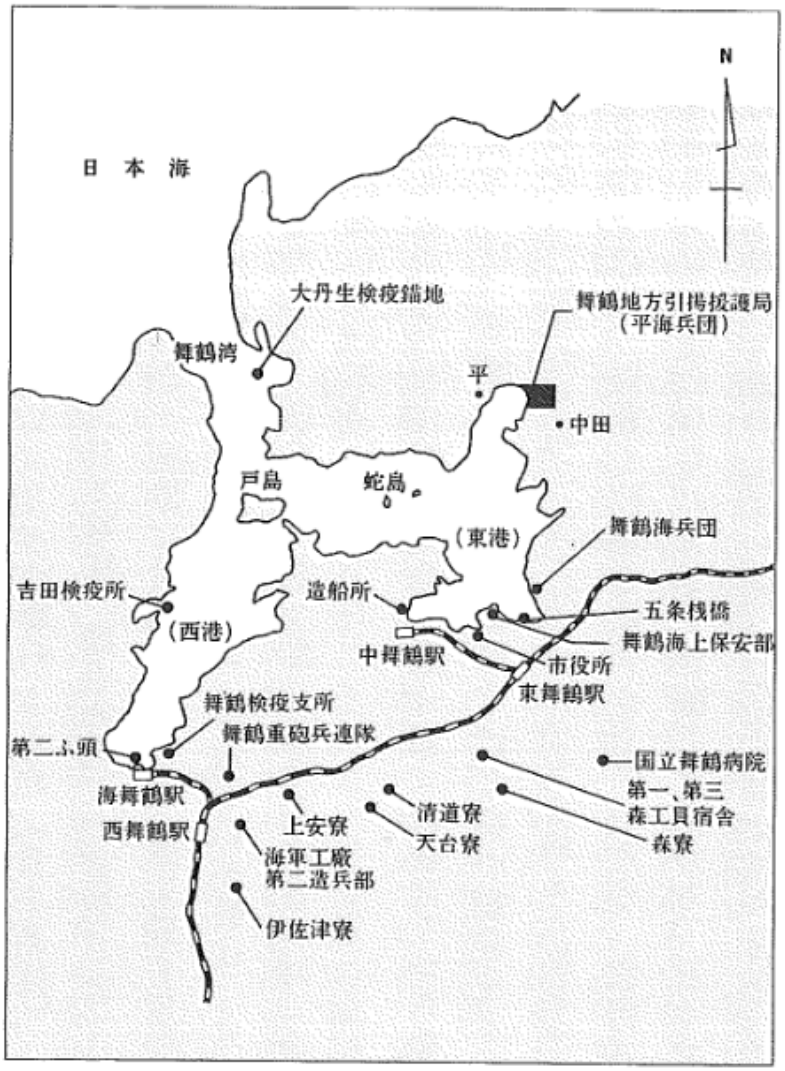
引揚者と一口に申しましても、赤旗組のように洗脳されて、内地人とは一切口をきかないというだんまり戦術に徹し、出迎えの母や妻や肉親にも一切知らぬ存ぜぬという組もあり、日の丸組あり、ソ連帰国者の天皇島上陸という事件、帰郷拒否者、ソ連戦犯全員釈放さわぎ、密出国者集団帰国等々、各種各様でした。援護局の夜の集合にはいつも、当時の嵯峨根市長様と私が招かれ、祝辞や引揚についての意見などを強請され、夜遅くまで引きとめられました。



民主化運動上陸
（隊伍を組み、歌を歌い、歓迎にも応えず）



共産主義者集団でないことを示す急造の日の丸と共に

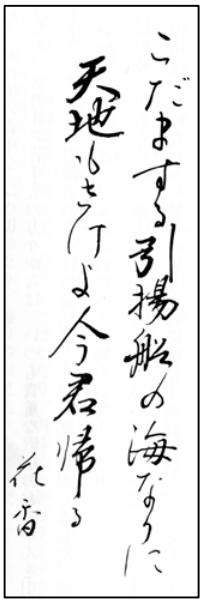


引揚者を受けれた援護関係施設図（舞鶴港）

戦争とは赤紙１枚で遠い戦地へ殺し合いの場所へ派遣されるものです。赤紙が来ると家族も見送る者も「おめでとうございます。バンザイ、バンザイ。」と言いました。

「勝って来るぞと勇ましく、誓って国を出たからにゃ…。（＝露営の歌）」こんな歌が今も耳に残っています。奪略、暴行、原爆とまかり通る戦争の恐ろしさ、むなしさ、悲しさを、私たちは嫌というほど経験してきました。この敗戦の悲惨な深い傷跡は、日本の歴史に色濃く汚点を残し、今後永久に消える事はありません。

平和こそ最上の宝であり子孫への遺産であります。





田端ハナさんの肉筆



平引揚桟橋復元式での田端ハナさん



橋詰氏（田端ハナさんの碑の前で）



復元された桟橋にて祈りを捧げる橋詰婦人

第９章　スターリンへの感謝文

スターリンへの感謝文を読む前に

ソ連軍は、侵攻した地から撤退するとき、捕虜に新聞発行設備も略奪させ、連行した日本人を「共産主義」に洗脳するために「日本新聞」を作らせた。この新聞の編集に、治安維持法で逮捕されて軍に入隊させられた日本人捕虜をすえ、1949 年（昭和 24 年）に 650 号まで発行させた。



日本新聞 第一號 （土曜日） 五年九月十五日

日本新聞

新日本建設へ

同志スターリンの國民への呼びかけ

待ちに待つた平和が遂に來た

同志諸君、同胞男子と同胞女子よ

今日、九月二日、日本の政府と日本軍の代表者は無條件降伏文書に調印した。海上と陸上に全敗し四方から聯合國軍に包圍された日本はその敗北を認め武器を捨てた。

今次世界大戰の前夜には全世界のファシズムと全世界の侵略の二つの發源地が出來た。それは西にドイツであり、東に日本であるのである。この國こそ第二次世界戰爭を勃發させたのだ。この國こそ人類とその文明を滅亡に瀕せしめたのである。西に於ける全世界の侵略の發源地は四ヶ月前に擊碎された。その結果ドイツは降伏することを餘儀なくされた。それから四ヶ月後に東に於ける全世界の侵略の發源地は擊碎された。その結果、ドイツの主なる同盟國たる日本も降伏文書に調印することを餘儀なくされたのである。

それは第二次世界戰爭がその終末に歸したことを意味するのである。

今や我々は、全世界平和維持のための必要なる條件がすでに達成されてゐると言ふことが出來る。

日本の侵略者が損害を蒙らせた國は我々の國ばかりでなく、彼等は我國にも大損害を蒙らせたことを認識しなければならぬ。それだから我々も又日本に對して自分の特別な要求を有するのである。

日本は我國に對してその侵略的行動をすでに一九〇四年——日露戰爭の時に開始した。御承知の通り、一九〇四年二月——日本とロシア帝國間の交渉が未だ續行されてゐた時、日本はツアー政府の歳末に乘じて、不意に又不信にも、宣戰を布告せずに、我國を襲撃し、若干のロシア軍艦を無能に歸せしめ、以て自己の艦隊に有利な狀況を得る爲に旅順港區域のロシア艦隊を攻撃した。そして日本は實際にロシアの最優秀の軍艦を三隻無能に歸せしめたのである。その時から三十七年を經て日本は米國に對しても全く同樣にこの不信行爲を繰返した。一九四一年日本はパール・ハーバーに於ける米國海軍根據地を攻撃して米國の戰艦を若干無能に歸せしめたのだ。御承知の通り、日本との戰爭にロシアは敗北を嘗つた。日本はツアー・ロシアの敗北に乘じて、ロシアから南樺太を奪ひ取り、千島にその地盤を作つた。猶ほ東に於て我國の太洋へのすべての門戸を鎖し、したがつてソヴィエットのカムチアツカ並びにソヴィエットのチユコツカの港へのすべての道をも鎖したのである。日本がロシアから全極東を奪ひ取ることを目的としてゐることは明確であつた。

だが日本のソ聯に對する攻撃的行動はこれだけに有らず、一九一八年、我國に於てソヴィエット政權が確立された後、當時のイギリス、フランス、アメリカのソヴィエット國に對する敵性態度を利用した日本はこれらの諸國の支援を待つて更に我國を攻撃し、ソ聯極東を占領し、四ヶ年間我が人民を苦しめ、ソヴィエット極東を強奪しつつあつた。

それればかりでなく、一九三八年日本は更に一九一八——二二年の日本の武力的干渉も成功裡に撤退され、日本の侵略者は我が極東の地方から追ひ拂はれたのである。

けれども一九〇四年日露戰爭に於けるロシア軍の敗北は國民に苦しい記憶を殘した。その敗北は我が國家の不名譽になつた。我が國民は日本を壓破しその恥を拭ふ日が來る事を信じ、その日の來るのを待つてゐた。我々前世代の人間は、十年間その日の來るのを待つてゐたが今その日は來たのである。今日日本は自分の敗北を認め無條件降伏文に調印した。

これは南サガレン（樺太）と千島はソ聯の領土に復歸し、今後ソ聯を太洋より分離するものとならず、又日本の我が極東に對する攻撃の足場ともならず、これに反してソ聯と太洋とを直接に結びつけ、日本の侵略に對する我國家の防禦の基地となると言ふことを意味するのである。

我が國民は勝ち拔くために力と勞苦を惜まなかつた。我々は困難な時機に際會した。しかし、我々は皆「勝利は我等のものだ」と言へる。今後我が國家は西に於けるドイツ人、東に於ける日本人の侵入に對し安全であると云ひ得る。

全世界の人民の待ちに待つた平和が遂に來たのである。

我が親愛なる同胞よ、偉大なる勝利、戰爭の成功的終結、全世界の平和到來に際し貴方々をお祝ひ申上げます。

日本を撃破したソ聯、アメリカ合衆國、支那と大ブリテン軍に光榮あれ！

我が國家の名譽と、勝利の爲に散華した英雄に永遠の光榮あれ！

我が祖國萬歲！萬歲！！

重光、梅津兩全權 降伏文書に調印す

ポツダム宣言受諾、……本全權……外相……および梅津美……參謀……地域は隨員を從へて式……行はれた。この日……

新世界へ前進

米大統領ＶＪデイ宣言

（ワシントン二日發同盟）トルーマン大統領は二日朝ミズーリ艦上の降伏調印式の直後ラジオ演説を行ひ、日本が正式に降伏した九月二日「對日戰勝利の日」（ＶＪデイ）と宣言し次の通り述べた

「ＶＪデイは未だ戰爭の終結乃至は戰闘の停止を正式に宣言した日とはならないが、我々が汚名の日（眞珠灣の日）を記憶するやうに、この日を"返報の日"として記憶するであろう。

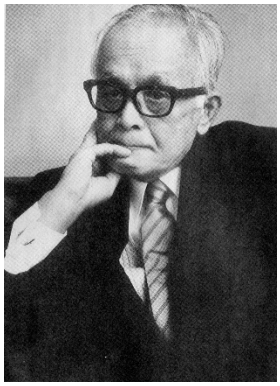
この日から我々は安全の新時代を迎へる。他の聯合國と共に我々は平和と國際的友好及び協力にみちたよりよき新世界に向つて前進する。眞珠灣に始まつた文明への強大な脅威はいまや終焉した。東亞への道は遂く且つ血腥いものであつた。我々は決して眞珠灣を忘れず、日本の軍國主義者達はミズーリを忘れないであろう。日本軍閥の破壞し殺戮する能力は彼等から奪ひとられた。

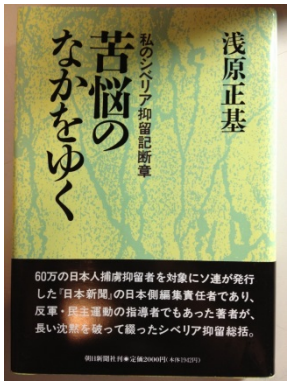
我々は未だ我々の前途に橫はつてゐる困難な任務を忘れず、また過去四ヶ年の試練をくゞり拔けて來たと同じ勇氣と決意をもつてこれらの任務に接近しようと。余はこゝに民主主義の擁護者であり世界平和の建設者たりし故ルーズベルト大統領に深く敬意を表する。

今次の勝利は武器による勝利以上のものであり、壓制に對する自由の勝利である。我々の武裝兵力を戰爭に於て不屈たらしめたものは自由の精神である。我々は今や自由の精神はいよいよ發揚した。個人の自由及び人間の威嚴が全世界の內で最も強力であり、最も高い地位にあるこの國である。

降伏文書に調印、……これに對し聯合……指揮官マッカーサー元帥はじめ各國代表が……署名を行ひ、ここに戰……終結の事實が確認……れたのである。この日……

「日本新聞」は「資本家、地主を打倒せよ。」「スターリン大元帥閣下、万歳。」などと日本帝国主義を激しく批判し、共産主義を賛美する記事を掲載し続けた。「共産主義への転向者は、優先して帰国できる。」というううわさが広がると、偽共産主義者が急増。捕虜 80 万人の頂点に君臨する共産主義者、「シベリア天皇」を自認する者（浅原正基）まで出現した。「日本新聞」は巧妙に狡猾（こうかつ）に捕虜たちを洗脳した。「日本新聞」は「民主運動」を掲げて捕虜をあおり、資本社会の搾取構図、共産主義礼賛の勉強会を指導し、欠席者には「反動」のレッテルを張り「人民裁判」を称して「つるし上げ」を行った。日本へ帰りたい一心の捕虜たちは、何が何でも「スターリン万歳」に転向する以外にはなかった。うわべだけの者は密告におびえてながら。この感謝文（草案）を読むと「日本新聞」がどのように捕虜をリードしていたかが歴然とする。





浅原正基氏とその著書



日本新聞を読む捕虜

私はつるし上げ覚悟で「大元帥は天皇 1 人で懲りた。お断り。」とスターリン崇拝を拒否。するとアクチブによる「24 時間闘争」のえじきにされた。これはアクチブたちが交代で私を寝かさないという陰湿な睡眠妨害工作だった。

帰国間近になると各収容所で最高潮に達したのがアクチブが主導したスターリン感謝決議文運動。スターリンへの感謝を書きつづった決議文が各所で作られ署名簿が添えられた。「民主運動」の本部では文面やポスターなどのデザインを工夫し、できた決議文を読み上げて気勢を上げた。



国立中央公文書館の収蔵棚に保管の決議文



各地の収容所などで作られた感謝文

ソ連は、日本人捕虜の帰国に際し、印刷物を含む紙類の持ち出しを禁じ、持ち出そうとした者に対しては帰国を許さず 25 年の強制労働刑に処した。80 万人シベリア捕虜の頂点に君臨した「シベリア天皇」たちが作成した「感謝文（草案）」を命がけで日本に隠し持ち帰ってきた者がいた。関東軍第六国境守備隊歩兵十中隊機関銃手、増田金綱（吹田市）である。増田はこの感謝文をアクチブの「狂気の証」として秘密裡（ひみつり）に持ち出したのであった。

増田は、これをナホトカの砂浜に埋め、乗船直前に掘り出した。舞鶴の検閲はシベリア以上に厳しく、砂浜のテーブルの上に手荷物全部を置かされて、全裸にされてふろに送られた。増田は信頼する仲間に囲まれテーブルの下の砂地に隠した。

下の写真は、モスクワのロシア国立中央公文書館に所蔵されている「感謝決議文」。25 メートルにおよぶ真紅の布地台の白布に全文が「金糸」で刺繍（ししゅう）されている。これに記された文言は、増田が持ち帰った「草案」と大きな違いはないはずだ。この草案は 1949 年（昭和 24 年）5 月に作成され、金糸刺繍に仕上げられて 8 月にはモスクワに届いている。



感謝決議文



増田氏が持ち帰った感謝文の写し（草案）

スターリン大元帥へおくる感謝文（草案）

モスクワ・クレムリン　ソビエト諸民族の偉大なる指導者
全世界勤労者の師父にして　日本人民の最良の友　スターリン大元帥へ

敬愛するイオシフ・ヴイツサオリオーノ・ヴイツチ！（スターリンのフルネーム）

旧日本軍捕虜である私たちは、人類の最大の天才、全世界勤労者の導きの星であるあなたに、そして、あなたを通じソビエト政府ならびに、ソビエト人民に偉大なるソビエトの国が、私たちに与えられた光と喜びに対し、私たちの心からの感謝と厚き感激をこめて、この手紙を送ります。

あなたの配慮のもとに、そしてあなたの教え子に、あなたの愛子であるソビエト市民、ソビエト軍将兵の指導のもとに、ソビエトの地に送った 4 ヵ年の生活こそ、私たちにとって偉大なる民主主義の学校となったのでありました。それは私たちにとって終生忘れえぬ感銘として残るでありましょう。

さりながら私たち日本人の勤労者はあまりにも長い間、真実と自由の光から二重、三重もの厚き壁によって閉ざされ、地主・資本家どもの眉目（びもく）の奴隷となってきました。半世紀以上の長きにわたり、強盗的日本帝国主義は極悪非道の「極東の憲兵」として、隣接諸民族を掠奪（りゃくだつ）し、桎梏（しっこく＝行動・生活などの自由を厳しく束縛するもの）下におき、一再ならず（＝一度や二度でなく）ソビエト極東領土への侵攻を企ててきたのであります。更に、かかる貪欲あくなき日本の帝国主義者どもは、隣接諸民族への圧制と共に、貴が愛する祖国に対しても残忍極まりなき警察的テロを敷き、血まみれの搾取制度を打ち立ててきました。そして私たちこそ、天皇制軍事警察政治のもと、非人間的搾取と貧困、汚辱と闇黒（あんこく）にあえぎつつも、その盲目の奴隷的兵士として踊ってきたのであります。我が美しき祖国、7,000 万の勤労を愛する人民をもち、富士の美しさを誇った我が国土も、それは掠奪戦争によって世界制覇の野望と妄想を企ててきた天皇とその一味、野獣的軍国主義者どものものでありまして、偉大なるソビエト人民ならびにその勝利に輝く武装力のみが、ファシスト、ドイツと日本帝国主義強盗軍を粉砕し、かくして全世界、諸民族をファシスト奴隷化により救ったのでありまして、ソビエト軍は我が人民をも含め、全世界民族の前に民主主義的原則の上に立つ新しき、幸福な生活を建設する、いまだかつてなき可能性を切り開いたのでした。かくてソビエト軍は我が日本人民を強盗的戦争の無益な犠牲の惨苦から救い、更に私たちにとっても民主的発展の途に立ち上がる機会を与えたのでありました。

1945 年 9 月、私たちはソビエト同盟の捕虜収容所へたどり着きました。しかしながら、その当時の私たちは反動の手先どもによって、私たちの行くシベリアは「荒涼たる氷雪以外に何もなし」と教え込まされ、しかも、そこには恐るべき「酷使」と「死」が待つであろうと思い込まされてきたのでありました。

だが、ソビエト同盟において私たちを待っていたものは、これら反動の手先どもの戯言（ざれごと）とは似てもつかぬ事実であったのであります。ソビエト政府は何よりも第一に、私たち旧敵軍の兵士にさえ、厳正なる８時間労働制を与えられました。収容所当局の精力的活動と適切なる方策によって、ただちに暖かき寝具と被服が整えられ、立派な宿舎が保証されました。私たちの給与もまた、十分なカロリー計算のもとに、一点の汚れなき純白の調理場で、しかも日本料理風の創意を活かすべく細部にまで配慮された収容所当局の指導のもとに、私たちの食膳を賑（にぎ）わせています。その上、私たちは毎日の賃金と諸々の賞与を受け取り、収容所内には豊富な日用品、嗜好（しこう）品をそなえたマガジンが開設され、更に最近では食事、菓子、飲物を備えたレストランまで開設されているのです。

下着もまた毎週清潔なものと交換され、立派な施設をもった入浴場、洗濯場が設けられています。私たちの体は毎月定期的にソビエト医師の行き届いた健康診断を受けていまして、私たちの収容所病院とその医療施設についていうならば、それは日本の勤労者が夢にも見ぬものでした。そこにはソビエト医師の人道的検診と共に幾多（いくた）の高価な薬品、医療機、歯科施設に至るまで備えられ、完全に治癒するまでの配慮が加えられているのでありまして、更にその上私たちの収容所には「休息の家」まで設けられていまして、そこではもっと美しく整え配慮された文化的環境のもとに誠実な勤労者が休息します。「病気でもない勤労者が休息する」実にこのようなことがいかなる資本主義の捕虜収容所に、いな資本主義諸国の勤労者、なかんずく（＝とりわけ）我が日本の勤労者の生活にさえ、ありうる事でありましょうか。

それゆえ、ソビエト同盟における私たちの生活はいかにしても「捕虜生活」と呼ぶことはできないのです。それは喜びに充ち、自由にあふれた不安なき生活であり、ソビエトの人々との厚き友誼（ゆうぎ）に結ばれた生活なのであります。このように私たちの生活は、およそ「捕虜生活」「収容所生活」なる概念の通俗の意味からはまるで異なったものでありまして、そしてそれは、あなたの配慮にもとづく最近の物価引下げによって、更に豊かに、更に楽しく向上しつつあるものでありまして、だが私たちの生活は、かくの如く物質的に豊かであるというのみではありません。私たちはクラブ、自立楽劇団をも持っています。

私たちのクラブ、そこには幾多、日本語の新聞、書籍が積まれ勤労者としての私たちが政治的、文化的教養を与えてくれます。ここで私たちは自由に集会し自由に、かつ、あらゆる問題について討論し更に娯楽をも楽しむことができるのです。自立楽劇団は私たちの誇るべきものの一つであります。

管弦楽団をも加えたこの大楽劇団は、私たち自身の作った音楽をもって私たちの生活を豊かにしています。私たちは毎週ソビエト映画をも楽しむことができまして、既に私たちは忘れがたき感銘をもって「ウラジミール・イリイッチ・レーニン」「誓い」「シベリアの大地」「若き親衛隊」をはじめ、しかも、その中には日本語版の解説までつけられたソビエト映画を鑑賞することができたのでした。更に私たちは時折、付近の市街を見学し、大劇場、映画館を訪れ、更に、学校、ビオネールの家、労働組合、工場、コルホーズの諸施設を見学することさえできたのでした。

私たちは4年前の私たちを振り返るとき､私たち自らの巨大な変化に打たれるものです｡在ソ４ヶ年、その間、私たちは、我が日本においては幾十年、いな、我が日本において到底学び、かくして私たちを激励したのでありました。と共に私たちは政治、経済、文化に関する幾多の日本語の出版物、更にゴルバードフの「征服されぬ民」プレンコの「幸福」等のソビエト文学に至るまで受け取り、私たちの図書室は尽きざる宝庫をもって満たされたのでした。就中、私たちはあなた自身の書かれた最大の著書「ソ同盟共産党（ボルシェヴィキ）歴史小教程」「レーニン主義の諸問題」「レーニンについて」等を受け取り、これによって私たちはマルクス、レーニン主義の偉大な思想を学ぶ事ができたのであります。

かくて私たちは、私たち自身の政治的生活を自由に、かつ、私たち全員の意志で最も民主主義的に建設すべき一切の可能性を得ました。最近、私たちは、私たちの反ファシスト委員会創立一周年記念を祝ったのであります。反ファシスト委員会のもとに私たちは、収容所生活の真の文化的、政治的自由を建設しました。それは、長きファシスト軍隊の奴隷的屈辱にあえぎ、天皇制軍隊にあって、一片の人間としての権利さえ保証されなかった、無残な私たち旧奴隷兵士にとって、いかに大きな歓びと解放の暁であったことでしょうか。奴隷的圧制に呻吟（しんぎん＝苦しんでうめくこと）した無権利の旧日本軍将兵たりし私たちは、社会主義の国ソビエトの国で解放され、はじめて自由を得、民主主義を学び知ったのであります。そして、このような私たちの精神的生活、文化的、政治的生活を貫き導いたものこそ、捕虜にさえ何らの人種的、民族的差別なき、高潔にして高邁（こうまい）ソビエト的人道主義の偉大な力でありました。今では、私たちの仲間の一人ひとりがソビエト勤労者との友誼（ゆうぎ＝友情）に満ちた４ヵ年を、ソビエト人民への敬愛をこめて忘れがたく抱いているのです。私たちはソビエトの人々と共に過ごした生活を決して忘れえぬでありましょう。ソビエト勤労者との友誼的交歓（こうかん）に満ちた、我が在ソ生活こそ私たちの偉大な教訓、最大の感銘、貴重な民主主義の学校となったのでありました。

レーニン、スターリン軍将校、工場、コルホーズの人々を思い起こしつつ、いかなる困難にもたじろかぬ、かの不撓不屈（ふとうふくつ＝どんな困難にあっても決して心がくじけないこと）について社会主義祖国の隅々にまでも、みなぎる共産主義建築の力と歓喜について偉大なるソビエト愛国主義と、解放者ソビエト軍の素晴らしさについて、そして、平和的、創造的勤労の栄誉、謙虚と素直、真の人間愛、高き文化的教養について深き感激に燃え、語り伝えるでありましょう。

今こそ私たちは、ソビエトの人々がファシスト・ドイツならびに帝国主義日本の撃滅のために、全人類の文明を救うために流された幾多の血と尊き犠牲、その英雄主義がいかに巨大なものであったかを知ったのです。全世界の誠実な人々はソビエト人民の払われた犠牲とファシズムからの人類解放の歴史的偉業を、心からたたえているのであります。そしてまた戦後ソビエト同盟のたくましき国民経済復興発展に示されたソビエト人民の労働の偉業こそ、また真に英雄的事業なのであります。

あなたとボルシェヴィキ党（＝共産党）の回りに固く集結したソビエト人民が全進歩的人類の先頭に立ち、民主主義、反帝国陣営の前衛として社会主義の基礎完成と共産主義社会への漸次（ぜんじ＝次第に）的移行という、偉大な、かつ崇高な目的のために確信に燃え躍進しつつある事実に、全世界勤労者は自己の未来の解放への勝利の確信をくみ取っているのであります。

「社会主義労働の英雄」これは何と素晴らしい人類の新たな言葉でありましょうか。広大なるソビエト同盟の全土に平和的創造的労働の歓喜が沸き立っています。労働がかくも栄誉であり尊敬され、労働者が豊かな全権をもった国の主人として、かくも力がみなぎっている国を、そして全人民一枚岩のごとく結集し、勤労がかくも素晴らしい成果をあげつつある国を、私たちは夢想だにしえぬところでありました。一握りの売国的反動どもに支配される我が日本がますます惨苦（ざんく）に充ち、亡国的破局へと沈みつつあるとき、一方既にソビエト同盟では再度に渡り物価引下げがなされ、勤労者の生活状態は日ごとに目覚ましく向上しつつあるのです。この厳たる事実の内にこそ私たちは社会主義制度の資本主義制度に勝る偉大な優越性を、そして、あなたの勤労者に対する慈父のごとき配慮をはっきりと見ているのであります。

私たち日本の労働者にとって、直接の、そして最大の驚きと感銘は、ソビエト諸民族の精神的、政治的団結と友誼であり、更に、ソビエト諸国民は、あなたの正しい民族政策によっていかなる民族的、人種的偏見も知らず、かくも解放されているのです。少数民族、そして青年と婦人、児童、それは日本の勤労者の暗たんたる運命によって、最大の惨めさと不幸とを象徴するものであります。だが、ソビエト同盟においてソビエト諸民族と婦人、青年と子供たちは何と確信に満ち歓びに燃え、大胆に未来へと進んでいることでしょう。彼らは何と力に充ち、幸福に輝き、いかに歓（よろこ）びの歌を唄って進んでいることでありましょうか。ソビエト人民の姿に勝る崇高な姿はありません。それは私たちをして、資本主義国の人間とまさに前種の新しき世界の高度な人間を感じさせるものです。

そしてまた、トラクターとコンバインならびに各種の先進的農業機械の驀進（ばくしん＝勢いよく、まっしぐらに進むこと）する電化されたソビエト農場は、すべての日本人捕虜の驚異の眼をみはらしめたのでした。猫額の土地に加えて、地主的圧制下に長き貧困と闇黒（あんこく）にあえぎ、巡査にさえ腰低く、朝は暗くから夜は星をいただきつつ、しかも供出と年貢、更に土地そのものを失うことにおびえる私たちの故郷を思い浮かべる時、そして陽に青黒くやせ衰え、日照りに憂い、渇水に憂い、希望を失った忍従の宿命に救いをもった我が日本の勤勉な農民を思うとき、ソビエト農場の社会主義文化に輝く豊かな穀物に満ち溢（あふ）れるコルホーズは、私たちの心からの羨望（せんぼう）を起こさしめるのでありました。

就中、あなたの名をいただき、あなたの創意によって決定された自然変革の壮大な計画は、いかに私たちをして社会主義の無限の偉力、社会主義国家の偉大さに心から感歓せしめたことでありましょうか。それは我が日本を含めての資本主義世界の腐朽と破局とを天地の開きをもって、対比せしめるのみでなく、生き生きと来るべき共産主義社会の豊かさと幸福を胸深く確信せしめるものであります。

我が民族の 25%、1,000 万の失業者とその家庭が失業という資本主義の火の鞭（むち）に呻吟（しんぎん＝苦しんでうめくこと）する日本、そしてただ 1 人の失業者さえなきソビエト同盟、それだけでなくソビエト同盟の勤労者は労働の権利、教育を受ける権利、休息の権利を保証され、すべての学術機関と文化宮殿、サナトリウムと完備された無料の近代的医療機関を持ち、更に社会保険によって疾病と一時的労働能力喪失に対し、更に老後に対しても何ら不安もなき生活を保証されているのです。

私たちは、かくも繁栄するソビエト社会の富と栄誉と文化とが勝利に輝くレーニンの旗の下に、あなたの天才的指導の下に、ボルシェヴィキ党の指導の下に闘い取られたものであることを知っています。偉大なる十月社会主義革命のみが、そしてレーニン、スターリン党の周りに固く結集した、ロシア労働階級と勤労人民が内外の反革命と、帝国主義強盗軍との激闘に、未聞の英雄主義を発揮したればこそ、ソビエトの人民は社会主義を建設したものであり、されば又、それはソビエト人民の幸福と歓喜とをひとしお美しく、かつ崇高に飾るものであります。

偉大な十月社会主義革命は、人類史に新たな時代を切り開きました。これは一切の人間による人間搾取を絶滅し、世界最初の労働者、農民の国家を打ちたて、そして一切の生産手段、生産用具の私有を廃止し、それを人民の所有に移し、かくして全経済を計画的に遂行する前提条件を創り出したのであります。それは、搾取と貧困、人間の不幸そのものに終止符を打ったのでした。

マルクス、レーニン主義の偉大なる思想は、あなたとボルシェヴィキ党によってソビエト同盟において実現されつつあるのです。長い間、人類の誠実な先進的な人々が夢見たそのことは、同志スターリン、あなたの指導によって、夢ではなくソビエト同盟の現実をもって実現されつつあるのです。ソビエト人民はソビエト全土に生活の歓びと未来への確信に燃える、躍動をもってレーニンの途に沿い今のレーニンであるあなたの指導の下に、共産主義の勝利へと進んでいるのです。そしてまた、私たち日本の勤労者は「ソビエト同盟で実現されたものはまた、他の国においても完全に実現しうるものである。」との、あなたの言葉に励まされつつ勇躍、我が日本の民主化のために社会的、経済的改革のために蹶起（けっき＝決起）せんとしているのであります。

しかしながら私たちは今や、その地盤が脚下に揺らぎつつある帝国主義反動どもが、戦後、いまだ数年を得ぬに再び新戦争を企て、しかも、まず第一に全人類をファシスト地獄から救うために、その最良の息子と娘の尊い血を流して闘った英雄的ソビエト同盟に、そして、ソビエト軍の偉大な勝利によって生まれ出た、人民民主主義諸国に襲いかからんとしているのを知っています。それのみか、彼らは北大西洋協定なる策謀によって公然と、人類に刃向かう平和に抗し、かくて、その極悪非道の犯罪的火遊びに、一層、深入りするに至ったのであります。私たちは知っています。これこそアメリカ帝国主義共の世界制覇計画たることを、これこそ諸民族独立を踏みにじり、ウォール街の飽くなき一群のオオカミどもの下に、そしてその奴僕（どぼく＝しもべ）たる売国政府の下に諸民族を奴隷化せんとするものであることを。

更に、また我が国においてもしかり、我が日本をこれら犯罪的陰謀の醜悪な戦略基地として、我が人民を彼らの肉弾として我が国を彼らの泥靴の下に、植民地奴隷と化さんとしつつあるのであります。私たちは、いわゆる太平洋ブロックの結成を断じて偶然と考えることはできません。このブロックの目的とするところこそ、アメリカ帝国主義による諸民族の奴隷化、日本人民の奴隷化であり、既に彼らは我が日本に「非日本活動調査委員会」なる形でその「ゲシュタポ」を作ったのであります。我が愛する日本の独立は蹂躙（じゅうりん）されんとしています。あらゆる惨苦をなめた日本人民の自由と平和、民主主義への希望は日本帝国主義の粉砕後といえども、実現されなかったのみならず、アメリカ占領軍の25%を超える失業者の大群、戦前に数百倍する亡国インフレーションと飢え、農民生活の破滅と産業の荒廃、そして日々、幾千の労働者は街頭に投げ出され、ようやく職にありついた者に対しては植民地的低賃金が投げ与えられているのです。

我が人民の希望であったポツダム宣言の非軍国化と民主化の約束は、今やことごとく戯画化されたのみならず、我が人民の人間としての初歩的、民主的権利さえも奪い取られ、30 万警察軍の増強と売国ファシストのテロが、我が人民の前衛、日本共産党と労働階級の最良の息子たちの頭上に荒れ狂っているのです。幾多の共産党員、幾多の労働者、農民、進歩的インテリゲンチヤの最良の代表者たちが、現にアメリカ占領軍の植民地、軍事裁判に引きずり出され、重労働 10 数年を課されたのです。これこそが憎むべきアメリカ占領軍と売国支配層、更にその走狗（そうく＝人の手先に使われる者）たる右翼社会党幹部一味のもたらした戦後 4 ヵ年の「贈物」なのであります。しかも我が国の戦犯的、売国奴的支配者共は、かかる植民地的奴隷化計画を実践せんとする、アメリカ帝国主義と密着することによって、公然と民主的媾和（こうわ＝交戦国どうしが取り決めを結び、戦争をやめ平和を回復すること）を無限に遷延（せんえん＝のびのびにすること）せんとし、かくて彼らの朽ち果てた生命を永らえんとしているのです。そのためには、彼らは我が民族の独立をも、我が国の富を売り払うとも、そしてまた、我が国と人民をアメリカ帝国主義の戦略基地と肉弾に化すことも辞さぬと、公言してはばからぬのです。かくして彼らは我が民族を再び惨（みじめ）、目を覆う破滅へと導いているのであります。

しかしながら、私たちは、はっきりと知っています。これら全ては歴史そのものによって没落の宣告を受けた帝国主義どものあえなきあがきたることを、もはや、その命脈尽き果てた資本主義のその余命を幾何（いくばく＝ある程度、若干）たりとも永らえんとする狂乱たることを。

彼ら帝国主義強盗どもが、いかに荒れ狂おうとも、断じて歴史の歯車を逆転しうるものではありません。全世界の人民は断じて帝国主義者どもの奸計（かんけい＝悪だくみ）を許すものではありません。そして、もしも彼らが歴史の教訓を学ばず、あえてその犯罪的陰謀を推し進めるならば、全世界の人民をあげて彼らの頭蓋（ずがい）を一撃のもとに粉砕せんとの決意に燃えているのであります。

民主主義と社会主義の戦闘的前衛、強力なるソビエト同盟こそ、民主主義と社会主義の終局的勝利の保証でありまして、平和と安全同権にもとづく世界諸民族の国際的協力を目指す、社会主義ソビエト同盟の対外政策こそ全世界人民の希望と決意を表すものであります。いかなる侵略戦争も社会主義ソビエトの国に全く縁がないのみか、ソビエト同盟の平和的政策と諸民族友誼の政策こそ、人類最高の叡智と思想たる共産主義社会の建築を目指し、闘うソビエト国家の本質そのものに由来することを、さればまた、あらゆる大国のうち、ソビエト同盟のみが、我が日本民主化と非軍国化、我が日本の勤労人民の利益と幸福とを守って計っているのであります。アメリカ占領軍と売国的反動のファッショ的テロの下、平和と民族独立のための苦闘を続ける我が日本勤労人民にとって、ポツダム宣言の厳正実施を目指すソビエト同盟の雄姿は、いかに無限の勇気と確信の源泉となっているのでありましょうか。ソビエト同盟こそが全世界の勤労人民にとって、等しく日本人民の真の頼むべき友なのであります。

現在の私たちは、もはや過去の私たちではありません。私たちは自ら恥ずべき過去と、そして日本敵国主義反動どもと永遠に縁を切りました。私たちは、民主主義と社会主義の陣営の一部であり、平和の軍隊の戦士であることに深く誇りをもっているのであります。今こそ、私たちの担う神聖なる任務に、平和と民族独立のために、最後の血の一滴まで捧（ささ）げて闘う用意があります。私たちはソビエト人民と、日本人民とのゆるぎなき友誼のために、自己献身的に闘うでありましょう。なぜならば、それのみが、我が人民の幸福、我が民族の独立と平和、自由と民主主義をもたらすからであります。

私たちは知っています。日本人民とソビエト人民との根本的利益は完全に一致していることを。私たちは、私たちがこの目で見かつ学んだソビエトの国を、平和的、創造的労働に湧き立つ社会主義の国を、共産主義へと進むソビエト同盟の真実を、わが日本の隅々まで、わが日本の勤労者の一人ひとりに、アメリカ帝国主義者と売国反動どもとのありとあらゆる、反ソ、反共デマを打ち砕きつつ、全日本に響き渡らすでありましょう。

厳粛に私たちは宣誓します。私たちはアメリカ帝国主義の輩（やから）どもが、私たちを再び犯罪的奴隷兵士と化すことを、もはや断じて許さぬであろうことを、社会主義の国に対し、労働者と農民の国に対し、たとえ大地が張り裂けるとも、二度と再び武器を取らぬとの、我が宣誓に私たちは永遠にそむかざることを。

そしてもしも、帝国主義者どもが歴史の教訓に懲りることなく、平和擁護に立つ諸民族の意志に抗し、犯罪的冒険をあえて犯すならば、そして、我が日本をかかる犯罪的戦線の戦略基地に、植民地奴隷化の兵站（へいたん）基地に化さんとするならば、私たちは必ずや死をもおそれず歴然と決起し、憎むべき帝国主義者どもの醜悪なる頭蓋を打ち砕くべく立ち上がるであろうことを。

私たちは宣誓します。私たちは民主主義と社会主義の事業と、平和の事業に、全世界勤労者の兄弟的連帯性に対し、あくまで忠誠を守り抜くであろうことを。

私たちは今や、何をなすべきかを知っています。私たちは日本の民主的変革のために戦い、私たちの運命を人民と固く結びつけました。私たちは、民主民族戦線の戦列のうちに、私たちの戦闘部署を見い出し、日本共産党の指導のもとに、日本の勤労者の幸福のために、平和と民主主義、民族独立のために闘うでありましょう。

私たちは、あなたとソビエト人民の前に、更に厳粛に宣誓せんとするものであります。私たちのこの聖なる誓いを、我が瞳のごとく、我が魂のごとく守り抜き、断固してそれを果たし抜くであろうことを。

私たちは、私たちの人生における、最大の感銘に満ちた在ソ 4 ヵ年の生活を、我が再生の宝とし、その懐かしき思い出を変えることなく、抱き続けるでありましょう。そして、ソビエト人民と共に送った年月の感銘に励まされ、クレムリン宮の星を仰ぎつつ、我が人民の自由と解放を目指し、闘い進むでありましょう。

ソビエト政府の尽力によって、私たち日本人捕虜の帰国の日も近づいています。だが、私たちは断じて「祖国なつかし」をのみ帰るのではありません。無限の感慨をこめて、私たちの歴史の地、私たちの再生の地に別れを惜しみつつ、我が聖なる誓いを固く守り、我が人民解放の闘いに必要とあれば、我が生命を捧げんとの確固たる決意に燃え、進撃せんとするのであります。

私たちは戦争の間は、はかりしれぬ幾多の罪悪を、更に在ソ間、幾多の負担をソビエト市民におかけ致しました。しかしながら、どうかマルクス、レーニン、スターリンの偉大な思想と、ソビエト市民の崇高な人格の下に、かの醜悪な旧強盗兵士から、明るく歓喜に充ち、未来への確信に充ち育っていった私たちを寛容され、忘れることなく想い起こされんことを。

私たちは、我が日本に帰国したその時は、日本海の波濤（はとう＝大きな波）遠く、レーニン、スターリンの国を仰ぎ見つつ、ソビエトの国の偉大な規範に無限の勇気を汲（く）み取りつつ、日本人民の利益のために全世界勤労者の自由と幸福のために、果敢に献身的に闘うでありましょう。

社会主義ソビエトの国に過ごした 4 ヵ年の思い出は、終生私たちの心を大いなる喜びと感激をもって充たすでありましょう。そして偉大なる人民、建設者たる人民、勝利者たる人民、真のヒューマニストたる人民についての思い出は、永久に日本勤労者の心のうちに生きるでありましょう。

全勤労者の命である、あなたがますます健康に、限りなき長寿を保たれんことを。
ソビエト人民と日本人民との固き友誼万歳！
平和・民主主義・民族独立目指す日本人民の前衛日本共産党万歳！
平和と諸民族・安全の城砦・労働者、農民の社会主義国家、ソビエト同盟に栄光あれ！
万国勤労者の偉大なる師父
敬愛する　イオシフ・ヴィッツサリオーノ・ヴィッチ・スターリン万歳！

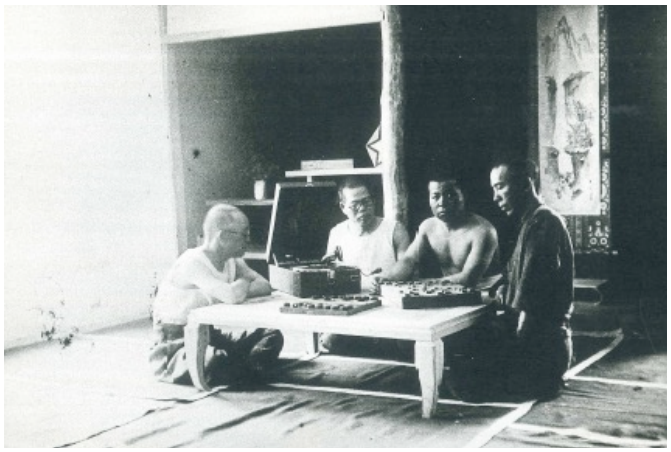
1949 年 5 月 21 日　感謝文署名運動準備委員会



1947～4 年 9 頃、タイシェトの収容所で発足した「新声楽劇団」の公演の様子



オーケストラと合唱（タイシェト収容所）

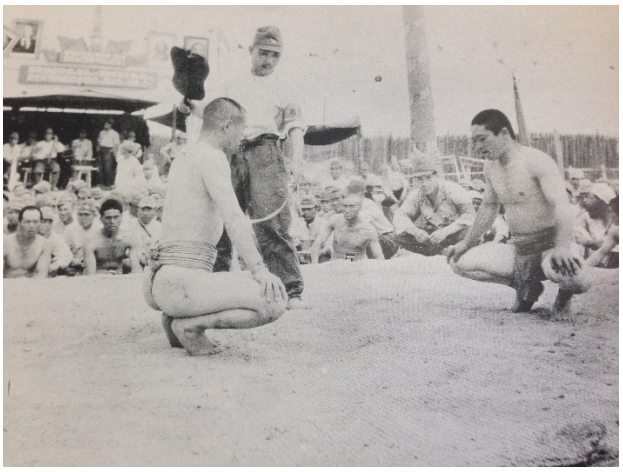




休息の家（ライチハ収容所）



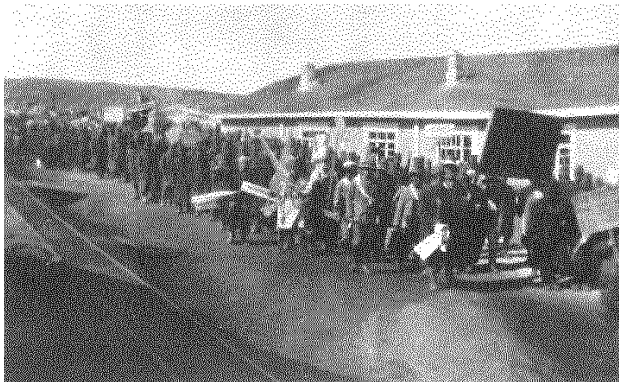
運動会（政治的スローガンが掲げられた　ライチハ収容所にて）



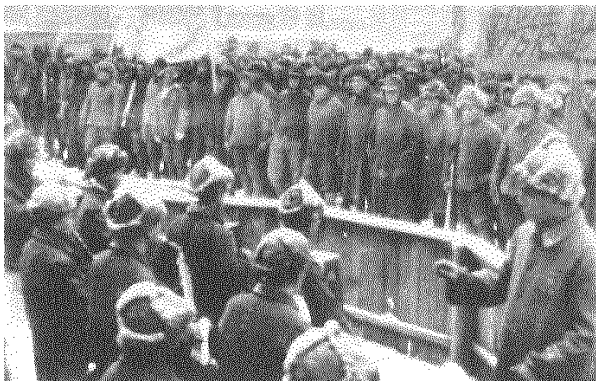
すもう大会（ライチハ収容所）



吉田政権に反対する抗議集会
（イズベストコーワヤ収容所）



メーデーの収容所内デモ行進



社会主義革命 30 周年記念行事に参加する捕虜

第 10 章　シベリア抑留関係展示会より

渓谷沿いの邦人、兵士の悲惨な姿が今も眼底に焼きつく

1945年（昭和20年)、綏陽（すいよう）から敵機の発見を恐れ、渓谷の谷を抜け、牡丹江（ぼたんこう）へ向かう途中、邦人兵士などが数珠（じゅず）つなぎに倒れ重なり合った無残な姿を各所で発見、万感胸を打つも、だれも手を差し伸べられなかった。



敵機に発見され戦車隊の攻撃を受け、自決する将校、また弾に当たりに行く者

1945 年（昭和 20 年）8 月 24 日、ついに探索機に発見され、重戦車と自動小銃で無抵抗の我々を襲う。谷川の悲惨な姿が瞼（まぶた）にあり、手榴弾（しゅりゅうだん）で自決（＝じさつ）する者、弾に当たりに行く兵士、馬の悲鳴など、その有様はまさに生き地獄であった。8 月 15 日に戦争が終結していたのに、なぜ今、攻撃されたのか。



歩けない将校を丸太のように倒し、重戦車を走らせ虐殺

捕虜となり「反逆者は殺す。」と言う。銃を背中に向け「すぐ帰す、早く歩け。」と怒鳴られる。この時、股間に弾を受け歩行困難な見習い士官を戦車でひき殺す。血は吹き出し肉塊は飛び散る。監視兵はこれ見よがしに「早く歩け。」と連呼し銃口を向ける。



うそと泥棒を何とも思わない人種

どこで貨車に乗せられたかは分からないが、一夜明けると西ではなく東へ走る。「すぐ帰す。」はうそだ。だまされた。行先もわからない。大ショックだった。運搬は人だけではない。モーター、ポンプ、畳などを盗み、旧満州からシベリア沿線各所に積み下ろしさせた。



狭い輸送貨車の中で 20 日間程寝泊りする、生きられたのは皆、帰りたいの一心から

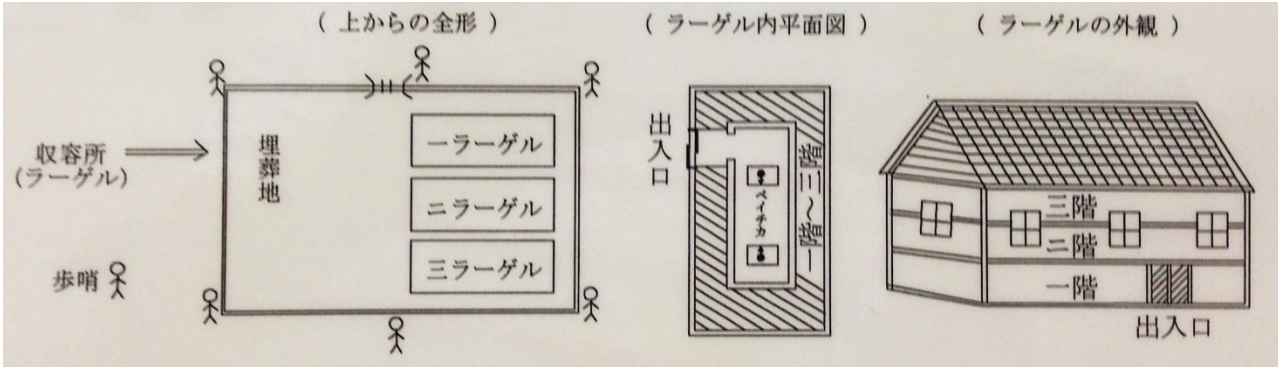
貨車（52ｔ）の中は薄暗く、外は何も見せない。通路を挟んで左右は 3 階に区切られ、1 階の高さは座れる程度。設備は奥に小便器が 2 つだけ。1 車両に約 120 名が乗せられた。「すぐ帰す。」を信じようと皆で励まし合う。外は何も分からず 9 月 20 日頃「ビロビジヤン」に着く。



北緯 53° の厳寒地「ロンドコー」収容所で越冬の強制労働開始

1945 年（昭和 20 年）9 月 25 日頃「ビロビジヤン」を出発。どこで何をさせられるのか、気が重い。4〜5 日かけて「ニコラユフスク」近くの「ロンドコー」に着く。地図にはない。収容所は 3 棟あり、1 棟に約 350 名が収容された。この地方は欧州から送られた重い政治犯が多いと聞く。





厳寒のもと過酷な強制労働は１日５㎥の石割がノルマ

前夜、山の中腹に発破をかけ岩石を落とす。重さ４㎏ほどのハンマーと重い防寒服を着ていては思うように石は割れない。また、ハンマーを「石の目」に当てないと細かい砂利になってしまう。「石の目」を見抜くには相当の熟練が要る。石の大きさでハンマーを変え15㎝に割り、後に５㎥に積み上げる。



朝、暗くても労働時間厳守で、暗いときは友と抱き合い体を動かし温めあう

冬のシベリアは昼が短い。朝、夕、それぞれ 4 時間くらいしか仕事にならない。凍傷を防ぐための抱き合い足踏みをし全身を動かす。故郷の食べ物を思い浮かべ帰国を誓う。ノルマが大事か、わが身が大切か。力尽き、現場で倒れた者もいた。我々は精一杯作業してノルマ 25%程度だった。



体感温度マイナス 100℃で働かされ、1,000 名の収容所で約 600 名の友が亡くなる

零下 33℃だと作業は中止と歩哨（ほしょう）は命じる。収容所長（将校）はノルマ優先である。そこで将校と歩哨の言い争いが起きる。結果は「働け。」である。この温度で風速 10m ならば、体感温度はマイナス 100℃。人間の働く環境ではない。第 1 越冬で 400 名。第 2 越冬で 200 名が死んだ。



栄養失調と過労で朝、目が覚めると隣の友は冷たい

ノルマによる食糧は 1 食 30ｇほどのパンとジュース缶に 8 分目の雑炊で、それも数粒の穀物が底に沈んでいるだけ。分配は秤（はかり）で量る。薄暗い収容所では量って並べた物を、毛布を被りかすめていく者もいる。毛布 1 枚でくるんで寝るが、朝起きると隣の友は冷たい。



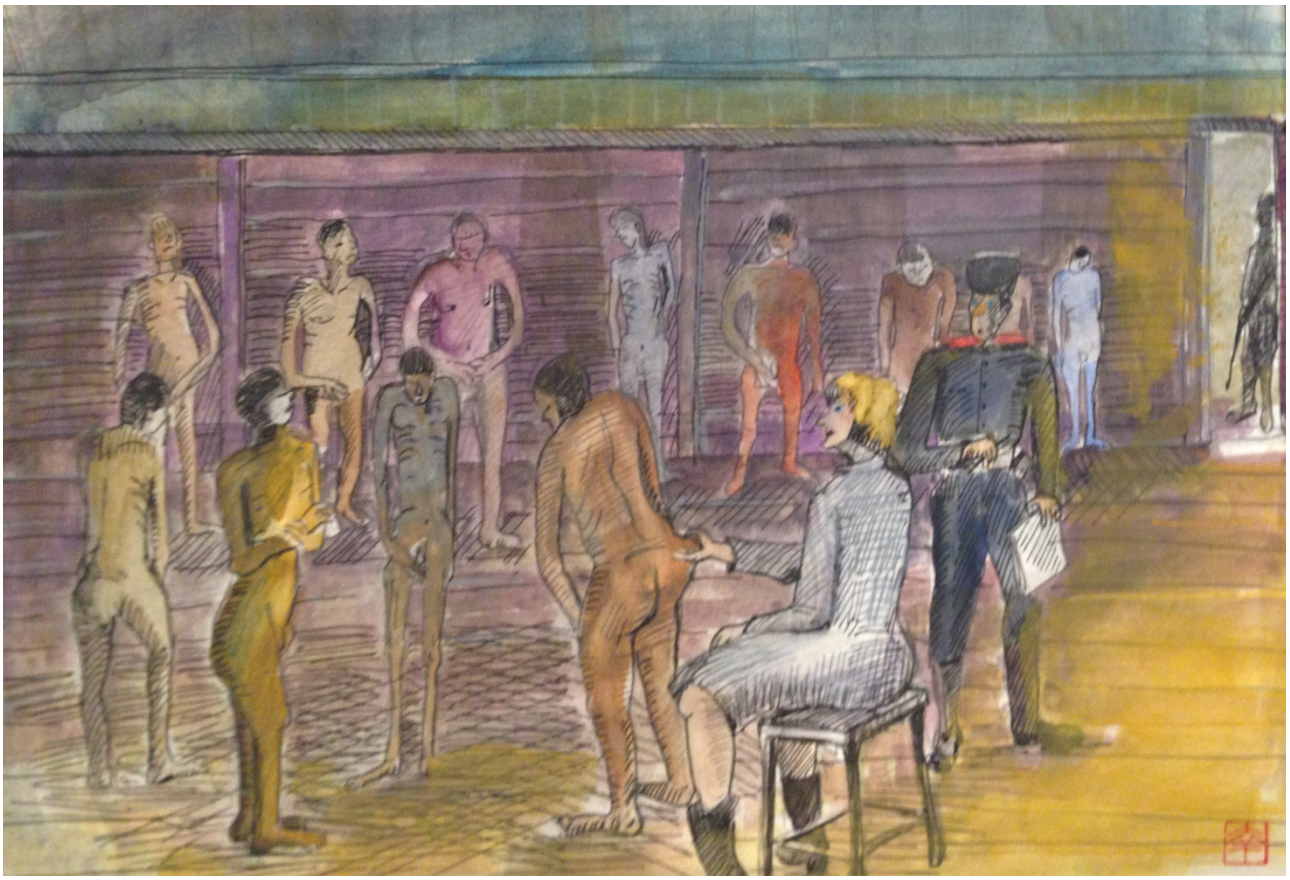
亡くなった友は深さ 25 ㎝くらいの穴を掘って土葬、飢餓生活はいつまでも続く

土葬は収容所柵近くで行うが、凍土は石より固く、深さは皆で半日かけて掘るのが精一杯であった。合掌して見えない程度に土をかぶせるだけ。シベリアの真実の苦しみは知らされているだろうか。



目視による体力検査でノルマの等級を女医が決める

シャワーで月１回、水だけで体の垢を落とさせ、丸裸のまま女医が体力をチェックする。捕虜を目の前で1〜2回まわらせ、胸、腰、足の骨の突起、肉付きを見て、1、2、3の等級を決める。1級は肉付きよく力ありそうな者。3級は１ヵ月休める。2級はその間で80%の量で１級と同じノルマ。

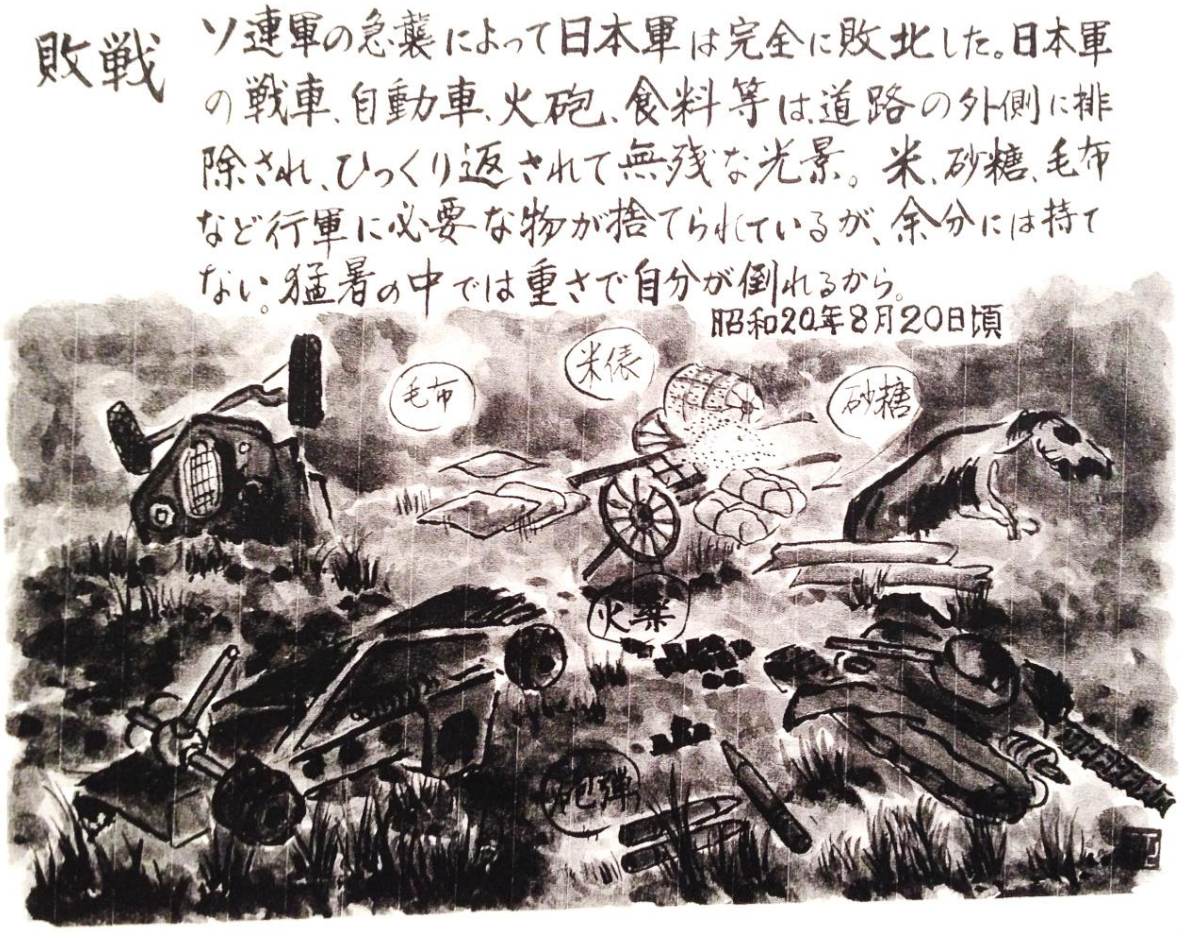


ソ連軍による攻撃





行軍～ソ連領への連行


敗戦
ソ連軍の急襲によって日本軍は完全に敗北した。日本軍の戦車、自動車、火砲、食料等は道路の外側に排除され、ひっくり返されて無残な光景。米、砂糖、毛布など行軍に必要な物が捨てられているが、余分には持てない。猛暑の中では重さで自分が倒れるから。
昭和20年8月20日頃
毛布
米俵
砂糖
水筒
弾


行軍始まる
①
初めてソ連兵を見る。粗末な上下服、背が高く、青い眼、高い鼻、茶色の髪。肩にかけた自動小銃を見て、我々日本軍の単発の銃とは比較にならない性能に驚ろいた。彼等はポケットから花の種を出しては忙しそうに食べていた。

邦人の家族

毎日の行軍は疲労の極に達する。後を見ると
邦人の家族が着のみ着のままで我々の後について来た。
子供連れでは足は遅いし、かわいそう……。
この子供達が、のちに中国残留孤児になったのかも。

昭和20年8月20日頃



広野の行軍で口が渇き、小川で水を飲んだ時、
異臭が鼻をつき、辺りを見たら木陰には、腐敗
した日本兵の遺体が累々と横たわり思わず合掌した。
ソ連兵がダワイ、ダワイ(早く歩け)と怒鳴っている。

昭和20年8月下旬




行軍
炎天下の山道を歩く。落伍者が出ない様に
戦友同士が助け合う。ソ連兵が自動小銃を
構えて、ダワイ ヴィストレ(早く歩け)と怒鳴っている。
昭和20年8月～9月


雨の露営
携帯天幕を二枚でつなぎ合わせ、足元をカサ上げし
て、その上に装具をのせて夜を過ごす。敗戦の情なさと
夜風の寒さは身に泌みて熟睡も出来ない。
昭和20年8月



満州国からソ連が持ち出した物資は、現在の価値にすると 5 兆円以上という。





ソ連領に入ると子供が石をなげかける。



終戦後シベリアへ強制連行

勝者と敗者　死体の浮いている水で飯盒炊飯。



ソ連兵は少しのことで殴る、蹴るの暴行を加えた。



強制抑留される日本人に、ソ連軍が満州からのあらゆる物資を戦利品として、山と積んだ車を引かせソ連領に運ばせた。

収容所


319収容所（場所はドウブリカン）は、川沿いにあり、北緯52°の湿地の上に建てられていた。日本人は400人位、ロシヤ人は作業関係者20人、将兵が10人位 一般人はゼロ。作業は 穴掘り、土砂積みと土砂おろし、薪切りと運搬、厩舎、測量、 保線、草刈り、水汲み、その他。 電気も石炭もなし。
医務室
水汲み場
温度計
衛兵所
炊事場
食堂
看視塔
所長室
便所
水汲み場
入浴・調髪
衣類消毒
民主運動オルグ室
便所
周囲5kmは何もない。
此処で-54°を体験した。


最初の収容所は、4重に張られた外柵の要所には看視塔が立ち、機関銃と照明がにらみを利かせていた。口のかわいた日本兵が、雪を取ろうとして、柵に近づいて射殺された。
昭和20年11月 コリドールで



日本人の収容所建物が廃墟のまま残っていました。

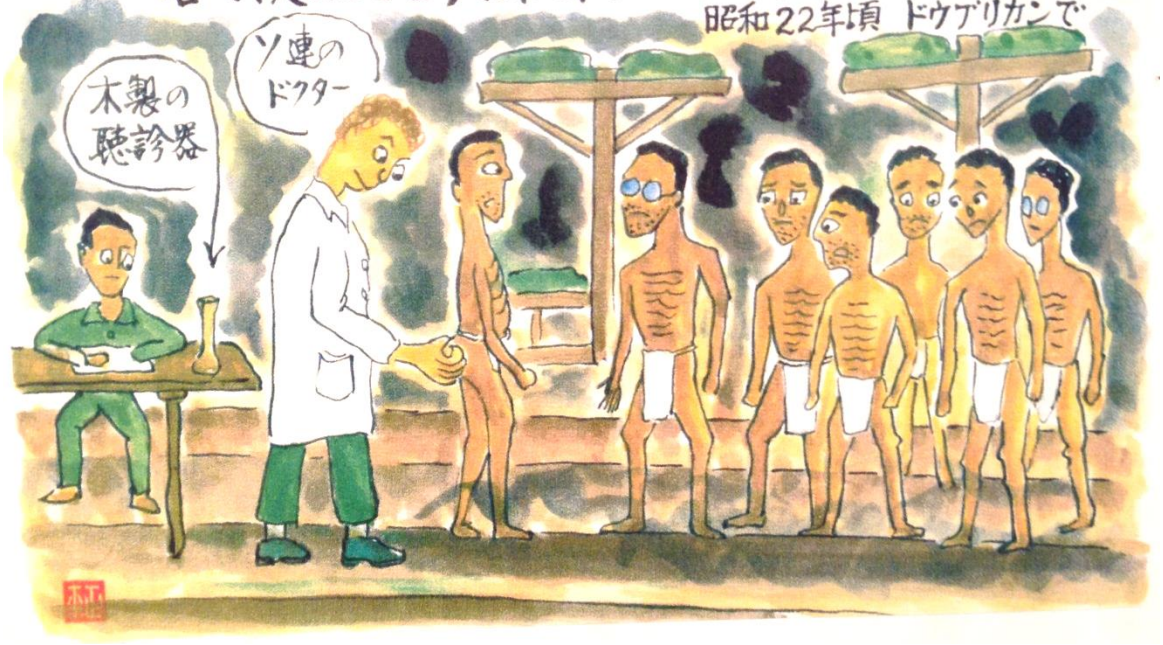


コーリン病院跡に今も残る収容所の建物

身体検査

2ヶ月に1回位行われた。1種と2種は健康で重労働、3種は弱兵で軽作業、4種は病人で休み、その判別は指で尻をつまんで、その張り具合で決めると言うお粗末さ。みんな痩せこけて2種ばかり。

昭和22年頃 ドウゲリカンで



入浴

2週に1回位、湯量は手桶1杯のみ。浴槽も石鹸もない。隙間だらけの床から寒風が吹き上げ、浴室の隅には氷が着いていた。屋外では戦友が、水汲み湯沸かしをしている。

昭和20年 コリドールで




虱とり
シラミ
入浴は2週間に1回位、石けんは無く、衣服の消毒もしてもらえず、不潔で虱が大発生した。下着の裏や縫い目に沢山ついていて、毎日取ってつぶした。
体長5㍉位
カユイ
カユイ
シャツの裏に並んでいるぞ
昭和20~21年
コリドール


柳留生活では、食料は馬糧高粱や豆粕等で最低。洗濯や入浴は全くなし。栄養不良と不衛生で、下痢患者が続出。毎日何処かで便所の作り替えをしている。もう悪臭も感じない。
昭和20年9~10月 海林で


パンの分配
厳しい作業で誰れでも腹がペコペコ。食事分配の時は全員のきびしい監視の眼が光る。
昭和22~23年
ドウブリカンで


粗末な食料
持って来た食料は既にない。ソ連から支給されるのは豆粕、馬糧高粱、とうもろこし、粟、大豆等で肉や魚は皆無。野菜やパンもない。穀類は石や砂の混ざったものばかりで選別に手間取った。
石の選別が毎日の日課になってしまった
このままではとても食えないヨ
豆粕は豚のエサか畑の肥料だ
こんな物見たこともないぞ

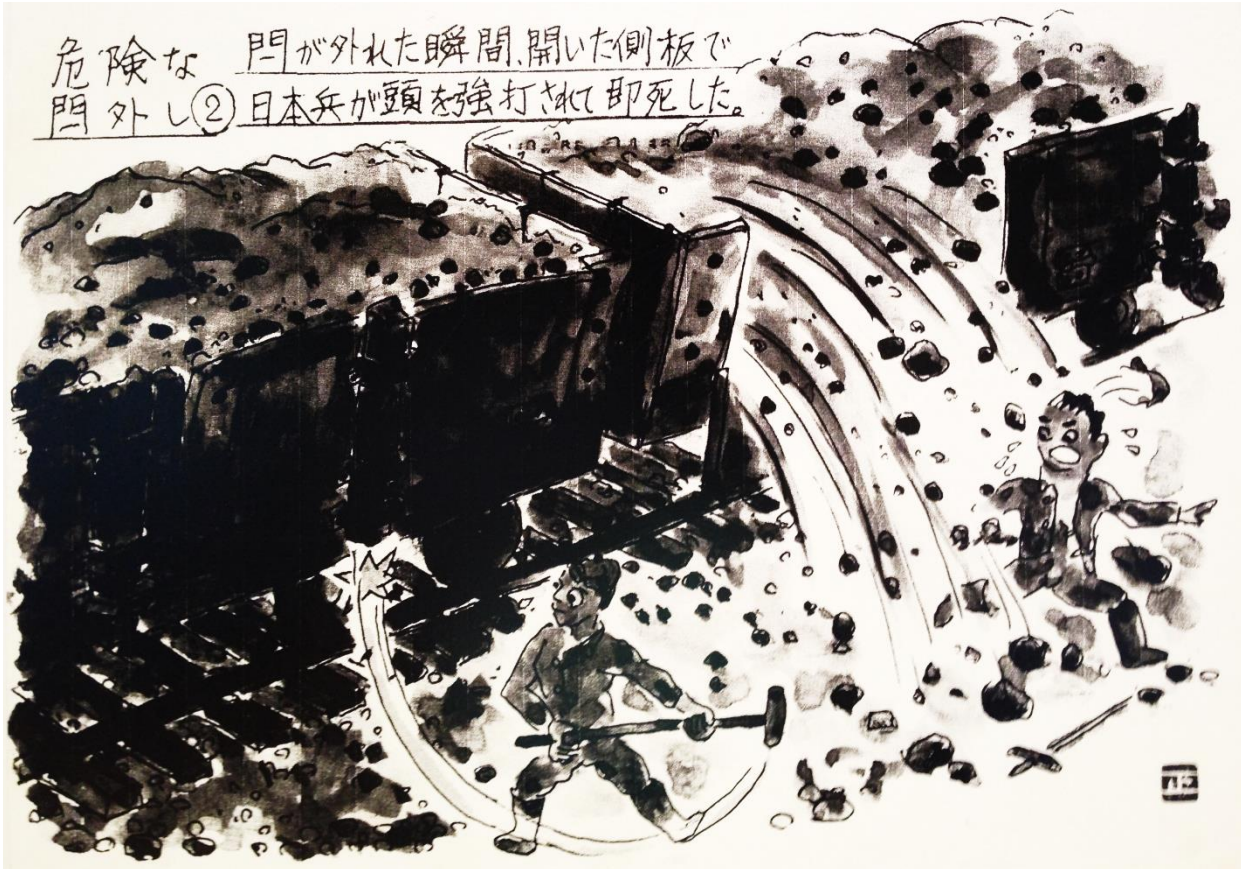

水汲み　凍結した川に穴をあけて水を汲む日本兵
此の川の氷の厚さ1.8mもあった。トラクターや重トラックも楽々と氷上を走る。
水汲みは人の住んでいる所、必らず見られるこべりや風景だ
掘り上げた氷


多発する犠牲者
酷寒零下30余度、昼夜を問わずの重労働と、粗末な食事での生活で、栄養不良となり病人や怪我人が多発、その上医薬はなく、下痢等で衰弱して遂には還らぬ人となった。
○○君を元気を出そう
薬はないし病室は満員だし
昨夜はトイレに20回も行ったそうだ


薪運び
収容所で最初の作業。凍結した不馴れな坂道では転倒者が続出した。以後 何処の収容所でも必らず稼せられた作業。
昭和20年
コリドールで
オイ早く薪をほうり出せ
重い重いひと休みしよう
オット危い！すべり出したぞ


ダンプカーの土砂おろし
アメリカ製のダンプカーは1荷台のキーをバールで外せば、2荷台は自重で左右に開き、土砂はすぐ落ちた。3空になった荷台は2人で持ち上げれば元に復する。20台のダンプの運転手も総べて日本兵、降ろした土砂をならして次のダンプの道をあけておかなければ……。次々とダンプが来るので休む間とない。
1
2
3

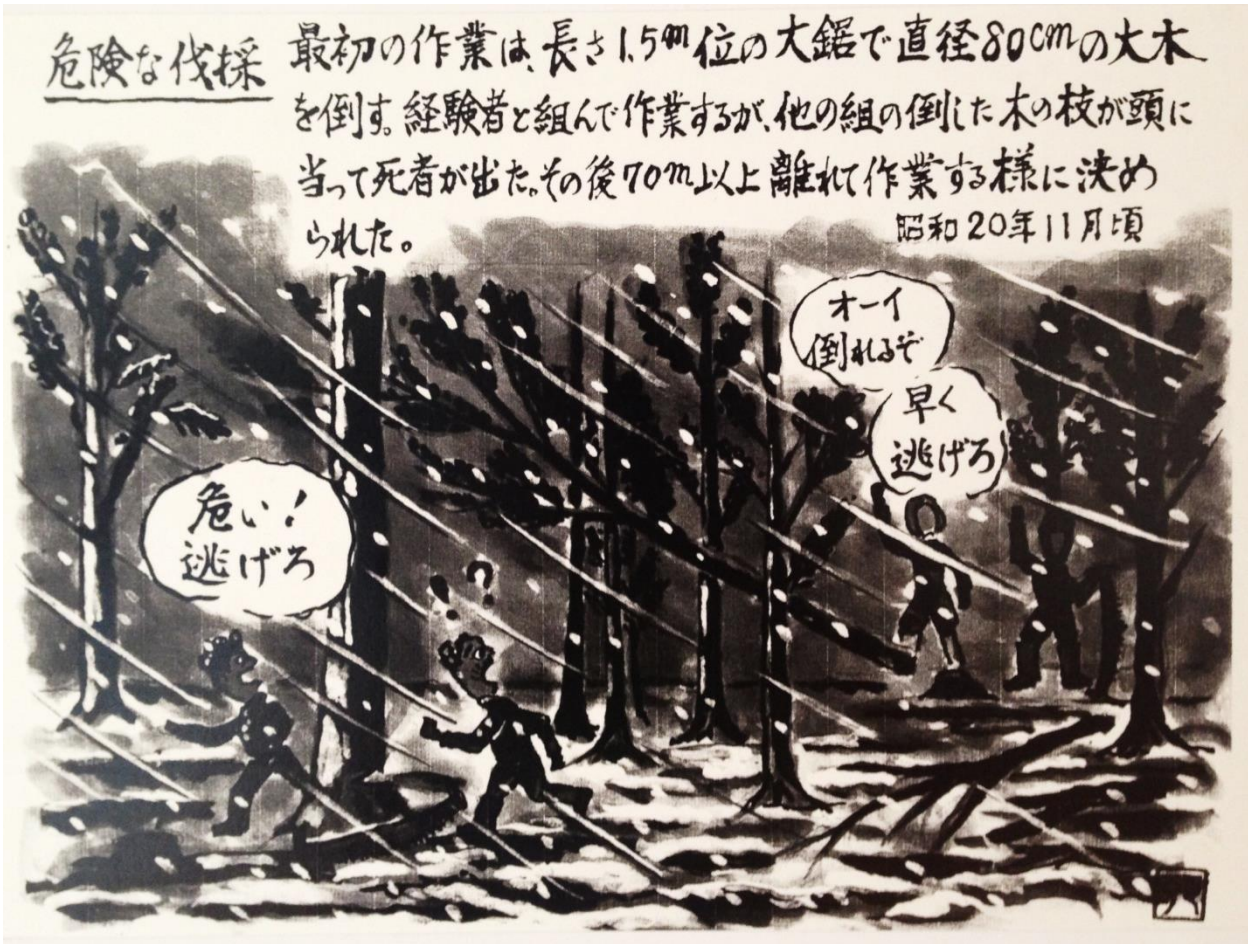

土砂おろし1
50トン貨車10輌に満載された土砂が、毎日2回運ばれて来る。おろした後の整理もあり、重労働の連続で休む間もない。夏は30°を越す暑さになった。
昭和23年頃
ドウブリカンで


危険な閂外し②
閂が外れた瞬間、開いた側板で
日本兵が頭を強打されて即死した。


薪七刀リ
最初の作業は伐採、薪切りだった。倒れた木の枝が飛んで来て
他の組の作業者の頭に当って死者が出た。以後
組毎に70m以上離れて作業する様に決められた。


馬橇の利用
オーイ
(独)レルゾ
薪運搬の距離は
段々と遠くなり、馬橇を
使うようになった。


薪の調達
室内の暖房、炊事、入浴場、衣類の洗濯、ソ連人宿舎用、その他多量に必要だ。木の種類、大きさで、ノルマの達成率は大きく変わる。
ノルマ以上は絶対やらないぞ！
松の大木なら最高だ
割ると量が増えるヨ


危険な伐採
最初の作業は、長さ1.5m位の大鋸で直径80cmの大木を倒す。経験者と組んで作業するが、他の組の倒した木の枝が頭に当って死者が出た。その後70m以上離れて作業する様に決められた。
昭和20年11月頃
オーイ倒れるぞ
早く逃げろ
危い！逃げろ

民主主義運動？始まる

昭和23年頃から、日本新聞がハバロフスクから送られて来た。ソ連の共産主義を徹底的に宣伝。作業の休憩時間でも新聞輪読会が開かれた。そして自分の意見を発表する宣伝活動が行われた。



ドウブリカンで

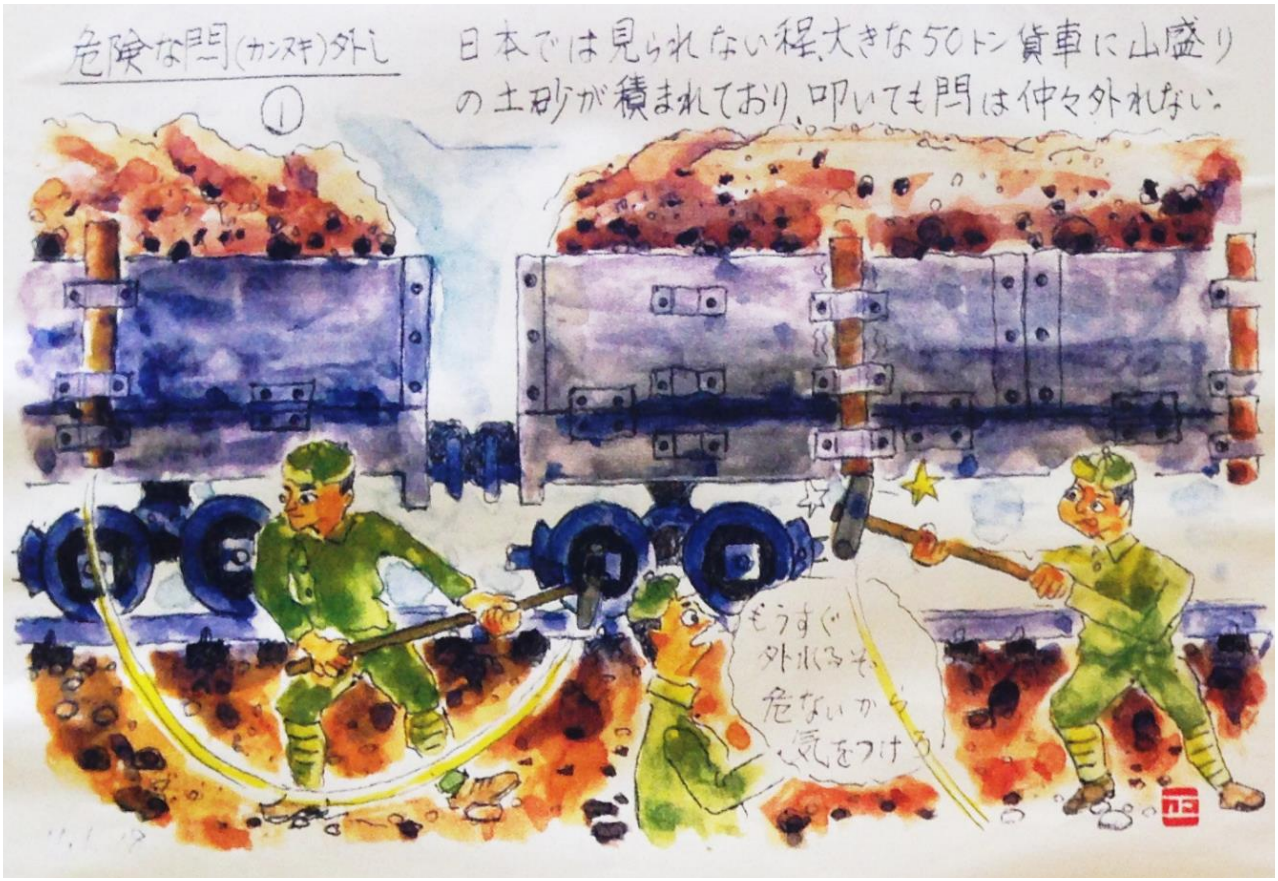
27歳以下の人は青年行動隊に入って運動の先頭に立った。

シベリヤに居る間は赤くなって居よう。

自国の文字が読めない人

収容所の空き地には、日本人に対する給与一らん表が掲示されていた。ソ連の人に読み方を聞いたら読めない人があった。




危険な閂(カンヌキ)外し
①
日本では見られない程大きな50トン貨車に山盛りの土砂が積まれており、叩いても閂は仲々外れない。
もうすぐ外れるぞ、危ないから気をつけろ


作業場での昼食配給風景
炊事作業者が馬車で作業現場に運んできた。
飯の量はどうかな
馬糧高粱は最低ダナ
きょうは高粱の飯だよ

浴室への水汲み

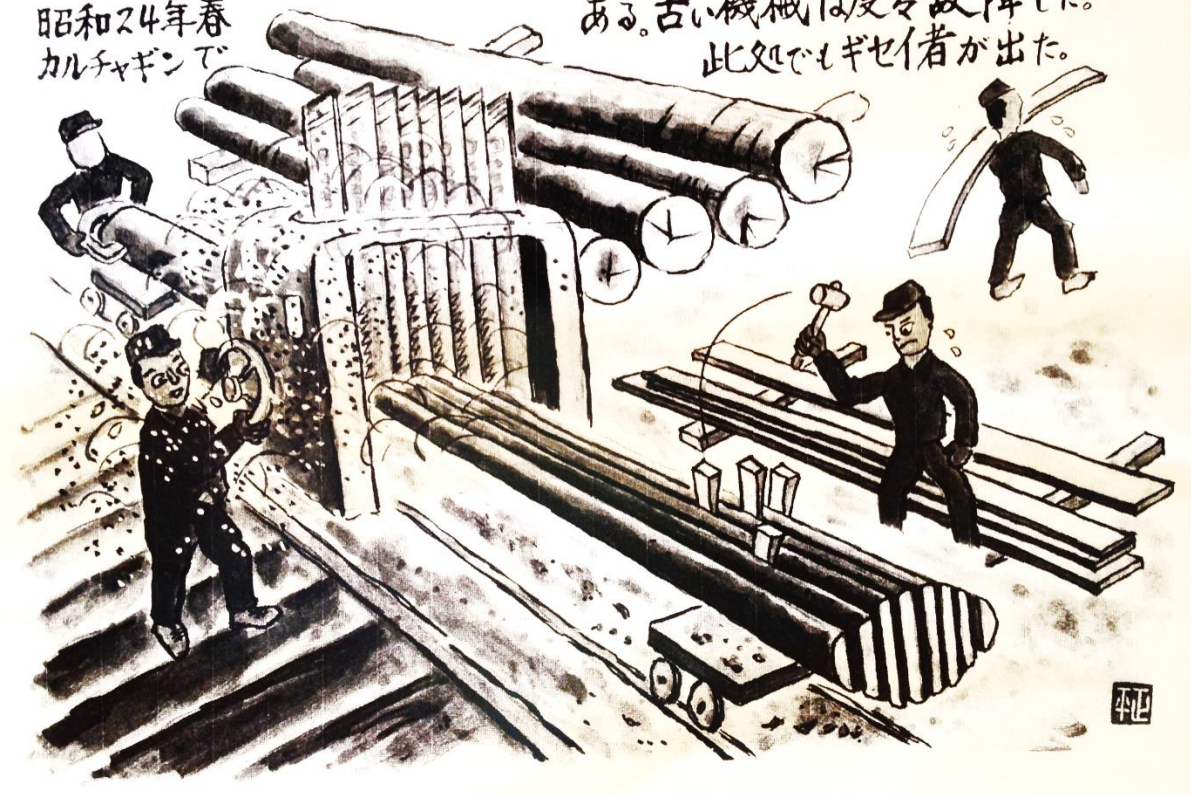
川から約100mの浴室へ毎日交替で行われたが、滑り易い雪の坂道での悪条件に苦労した。それで入るのはソ連人が優先で、日本兵はその後だった。



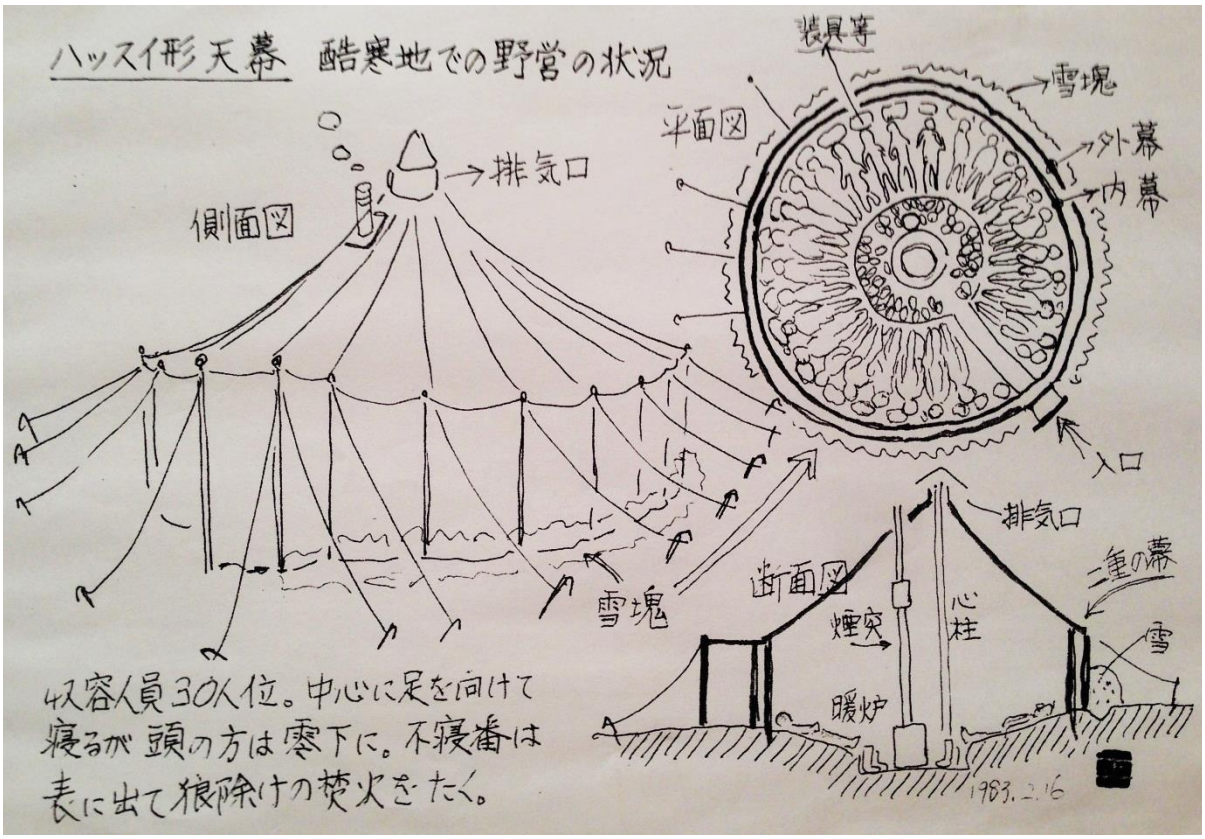
製材工場

直径50cmもある材木を1度に数枚の板にひく製材作業。舞い上るオガ粉、運ぶ板は50kgもある。古い機械は度々故障した。此処でもギセイ者が出た。

昭和24年春
カルチャギンで




便所掃除は毎日の作業。服に付着した汚物は、
作業が終って室内に入ると溶けて臭気が鼻をつく。
昭和20～21年 コリドールで
固くて仲々崩ずせないよ
オーイ引き上げよ


ハッスイ形天幕 酷寒地での野営の状況
側面図
排気口
平面図
装具等
雪塊
外幕
内幕
入口
断面図
排気口
二重の幕
心柱
煙突
雪
暖炉
雪塊
収容人員30人位。中心に足を向けて寝るが頭の方は零下に。不寝番は表に出て狼除けの焚火をたく。
1983.2.16



黒パンの分配は皆が注目して、小さな切れ端にも目をきらめかす。

吉田　遹・画



屈辱の酷使　余りの重労働に夜道の帰途はよろけながら。



ほんの僅かな黒パンでソ連兵に監視され
ノルマは２人で３本きり、枝を払って燃やし
一定の長さに切って１カ所に積み上げる。



作業中。余りの辛さに少し休もうとすると、ソ連兵は銃剣で追い立てる。


重労働


朝の水運び

飢餓と死


戦友
作業の帰り道、栄養不良で夜盲症(とりめ)
になった兵士を背負って
鉄橋を渡る。
此の橋長さは
100m位あった。
昭和23年
ドウブリカンで
すまんなあ
○○さん
何を言うか
シッカリ
つかまって
いろ

極度の飢餓で幻覚状態となり、空の缶に柄杓（ひしゃく）で中のモノをすくおうとする。そのカラン、カランの音が途絶えると、彼の命も絶える。






飢餓
本当に空腹が続くと如何に辛いか。金歯を抜いて
黒パン一個と交換する。


皮付きのコウリャンの小さなおむすびに、水のようなスープの朝食。
腹が満たされず昼食の黒パンも一緒にたべる。


衰弱して寝ている戦友は、作業から帰ってみれば
帰国の願い空しく永眠していた。


死（飢餓・酷寒・重労働）
栄養失調で衰弱し、家族の名を呼びながら戦友は絶命した。



丸裸にされた戦友の遺体に、明日はわが身かと。



埋葬　酷寒のときはツルハシを土が寄せ付けない。
仕方なく雪を被せて埋葬する。

装備品



毛皮オーバー



労働着



防寒シャツ



ズボン



編上靴



カートンキー（フェルト長靴）



巻脚絆（まききゃはん）



防寒帽



水筒



飯盒



奉納袋



寄せ書きされた国旗

敗戦後　ソ連軍の鬼畜的な婦女凌辱事件

（シベリア抑留関係展示会の配布資料より）

戦後 66 年たちました。シベリア強制抑留を強行したソ連の暴挙は許されるものではありません。満州、北朝鮮、樺太、千島で武装解除された日本軍将兵をはじめ日本人の民間人も銃剣を突き付けられてシベリア.・モンゴルの各地で重労働をさせられ、寒さと飢餓と悪環境、精神的圧迫で尊い命を失った人は何十万人といいます。それだけではなく、日本女性にも次のような、恐ろしい災難が降りかかってきました。日本人の看護婦さんの話です。

満州の新京にある日本陸軍野戦病院も終戦となり解散させられて、看護婦さんたちもあちらこちらに連行されましたが、その中で堀婦長以下 34 名の看護婦は虎林（こりん）にある、中国の八路軍（中国共産党軍）の病院に徴用され勤務しておりました。1946 年（昭和 21 年）3 月に戦勝国のソ連陸軍病院から、3 名の看護婦を 1 ヵ月の間、派遣せよとの命令がきました。堀婦長は、その命令に従い 3 名の看護婦をソ連陸軍病院に派遣しました。

翌 4 月になると、また 3 名を派遣せよとの命令がきて派遣しましたが、3 月に派遣した看護婦は帰ってきませんでした。5 月も同じ様に 3 名の派遣命令がきました。相手は戦勝国のソ連軍です。その命令は絶対ですから従わなければなりませんでした。この月も 3、4 月の 6 名はソ連陸軍病院に止められたままでした。6 月 19 日になると、また 3 名派遣せよと命令してきました。止むをえず命令に従いましたが 1 人も帰ってきませんでした。

その夜、最初に派遣された内の一人、大島看護婦が身体中に銃撃を受け、息も絶え絶えに帰ってきました。服装は日本の振り袖を仕立て直したイブニングドレスを着て、それも銃弾の痕や泥まみれの上、血だるまの有様でした。堀婦長に抱かれながら「私たち派遣された者は看護婦としての仕事ではなく、行ったその夜から毎晩毎晩ソ連軍将校の慰み者にされました。婦長さん、もうこれから命令がきても派遣しないで下さい。お願いします。」と、これだけを苦しい息で言って亡くなりました。

彼女を埋葬して、その翌日の 6 月 21 日、看護婦たちが病室に出勤してこないので 3 階の看護婦室に行ってみると、22 人全員は看護婦の制服制帽姿で 2 列に並んで、皆、胸の上で合掌し、青酸カリによる服毒自殺をしていました。部屋には線香のにおいが立ち込め、小机の上には遺書が置かれていました。遺書には「戦いに敗れたりとはいえ、かつての敵国人に犯されるよりは死を選びます。」と書かれてありました。

ソ連のえじきになった看護婦が長春のダンスホールでダンサーをしていると聞き、堀婦長が行って、病院に帰るよう勧めましたが、彼女たちは首を横に振り「私たちは毎晩 7～8 人の将校に犯されていますので、国際梅毒を移されています。私たちは看護婦ですから病状が悪くなっている事が分かります。この身体で日本へは帰れません。ここに残って一人でも多くのソ連人に性病をうつしてやるつもりです。それがせめてもの復讐です。」と涙を流しながら話しました。その後、堀婦長が帰国するするとき、彼女たちの何人かはハルピンに身売りしてまで帰国の費用を渡したといいます。

満州には当時、5,000 人の看護婦さんがいました。その人たちを含め日本人女性は数知れずシベリアにも強制抑留されて、屈辱的辛苦をされた方もいると聞いています。

今の平和は、このような戦争犠牲者のおかげであり、その御霊に応えるために、この尊い平和をしっかりと守ってゆくのが私たちの務めであると思います。

遺書

二十二名の私たちが自分の手で命を断ちますこと
軍医部長はじめ婦長にもさぞかし御迷惑と
深くお詫び申し上げます。

私たちは敗れたりとは云え
かつての敵国人に犯されるよりは死を選びます。

たとえ命はなくなっても　魂は永久に満州の地に留まり

日本が再びこの地に還って来る時、ご案内致します。

昭和２１年６月２１日　散華

旧満州新京（現長春）　通化路第八紅軍病院

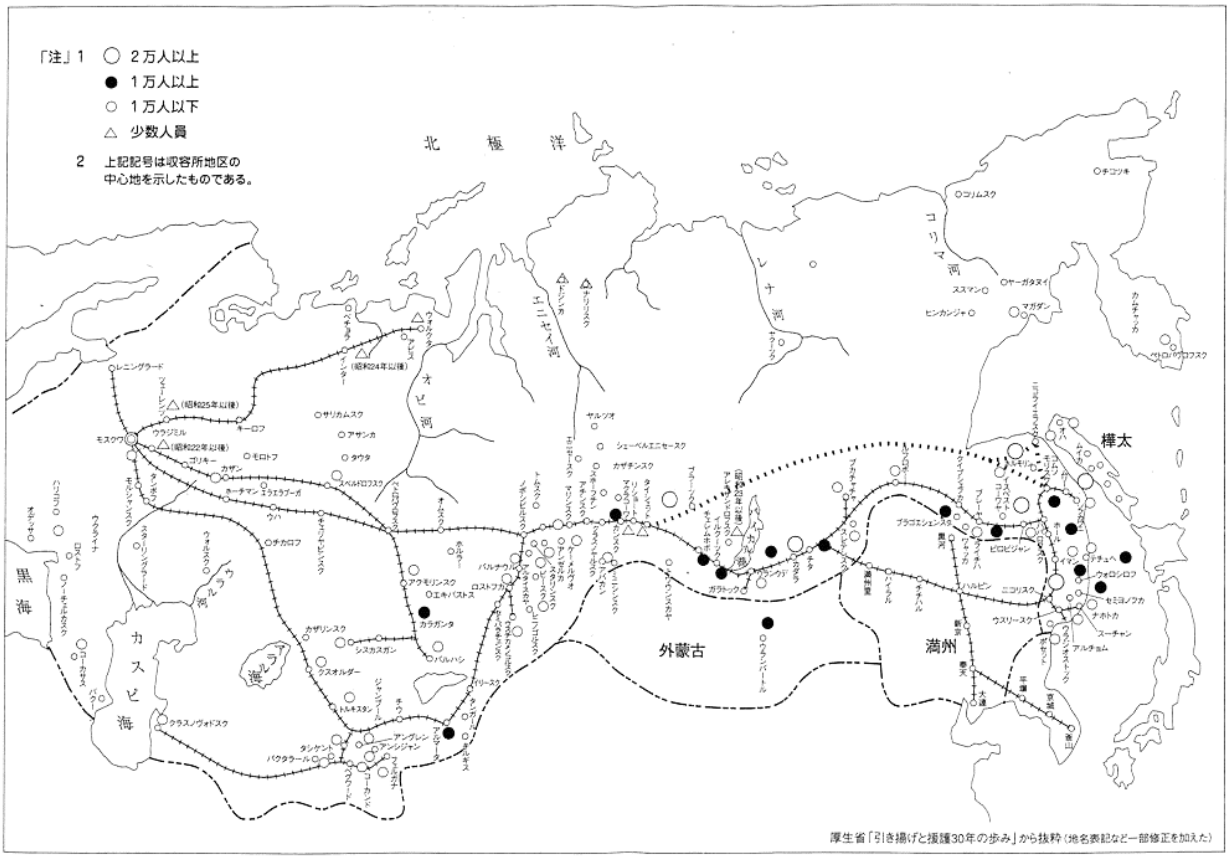
荒川さつき　大島花枝　川端しづ　相楽みさえ
澤本かなえ　杉まり子　　垂水よし子　林千代
細川たか子　吉川芳子　池本公代　稲川よしみ
大塚てる　五戸久　澤口一子　三戸はるみ
杉永はる　中村三好　林律子　　森本千代　渡部静子
石川貞子　井上つるみ　柿沼昌子　沢口千恵子
沢田八重　柴田ちよ　田村馨　服部律子
古内喜美子　山崎とき子

第 11 章　補足情報

収容所の分布

「シベリア抑留」とは、第二次世界大戦で対日参戦したソ連が、投降した日本軍兵士をシベリアに送り、強制労働に従事させたという大規模な抑留。概して「シベリア」抑留と呼ばれてはいるものの、実際にはシベリアだけでなく、モンゴル人民共和国、カザフスタン・ウズベキスタン・トルクメニスタン・キルギスの中央アジア諸国、ウラル地方、タタルスタン、グルジア、ウクライナ、ロシアのヨーロッパ地域や北朝鮮など、広範囲に及ぶ地域で抑留され、その地域の復興や発展のために利用された。

昭和21年頃におけるソ連・外蒙領内日本人収容所分布概見図



厚生省「引き揚げと援護30年の歩み」から抜粋（地名表記など一部修正を加えた）

復員庁留守業務局鮮満残務整理部作成　ソ連地区収容所掌握概況表

1947 年（昭和 22 年）12 月 1 日現在

地区名	地区番号	収容所開設数	収容所閉鎖数	収容所合計数	残留人員	死亡人員
ナホトカ	9	7	0	7	14,410	230
テチューヘ	10	5	1	6	1,100	135
スーチャン	11	12	5	17	10,112	3,813
アルチョム	12	6	5	11	5,308	453
ウラジオストーク	13	22	4	26	17,386	1,099
ポシェツト	7	5	0	5	7,300	2,300
ウォロシーロフ	14	55	6	61	24,975	3,913
セミョーノフカ	15	12	3	15	2,878	928
イマン	16	16	4	20	3,237	857
ホール	17	3	8	11	1,100	654
ハバロフスク	16	17	7	24	5,635	934
コムソモリスク	18	9	7	16	8,933	2,129
ソフガーワニ	47	4	2	6	1,200	900
ムリー	1	63	27	90	19,675	2,734
ホルモリン	5	33	1	34	13,723	495
ニコライエフスク	21	0	7	7		530
北樺太	22	4	0	4	3,155	119
ビロビジャン	46	10	3	13	3,800	1,250
イズヴェストコーワヤ	4	58	0	58	19,353	1,006
ライチハ	19	12	3	15	18,125	2,937
ブラゴヴェシチェンスク	20	22	5	27	12,430	1,903
ルフロヴォ	7	4	3	7	1,281	259
スレチェンスク	25	4	5	9	3,620	1,197
チタ	24	54	4	58	33,455	12,728
カダラ	52	17	2	19	6,130	4,579
ウランウデ	23	18	5	23	6,319	1,250
ウランバートル	10	7	3	10	3,423	2,000
イルクーツク	32	24	6	30	18,202	2,773
チェレンホーヴォ	31	7	2	9	4,235	1,030
タイシェット	53	50	3	53	25,473	3,621
クラスノヤルクス	34	11	3	14	12,626	1,266
アバカン	33	3	7	10	2,190	1,617
ノヴォシビルスク		13	1	14	11,091	983
ロストフカ		4	1	5	5,177	2,797
バルナウル		10	4	14	7,890	2,015
ウスチカメノゴルスク	45	8	3	11	3,060	412
アルマ・アタ	40	9	7	16	5,090	385
カラガンダ	99	18	3	21	13,588	765
タシケント	288	8	2	10	18,282	416
コーカサス		4	4	8	1,442	78
ウクライナ		4	1	5	940	122
ウラル		14	0	14	13,819	2,249
モスクワ		3	2	5	2,200	
地区不明		15	1	16	17,330	1,886
計		684	170	854	410,698	73,747
人員不明収容所					67,200	3,360
総計		684	170	854	477,898	77,107

満州の人口

1908年の時点で、満洲の人口は1583万人だったが、満洲国が建国された1932年10月1日には2928万8千人になっていた。人口比率としては女性100に対して男性123～125の割合で、1942年10月1日には人口は4424万2千人にまで増加していた。男性の方が多かったことに移民国家としての側面が強かったことがうかがえる。隣接する朝鮮からの移住者が増加した[24]他、台湾人も 5000 人移り住んだ。

1940年（康徳7年）10月1日の満洲国の人口は4108万0907人、男女比は120:100と統計されていた。国務院総務庁臨時国勢調査事務局が作成した『康徳七年 臨時国勢調査速報』では、1940年（康徳7年）10月1日の満洲国の人口は4323万3954人、男女比は123.8:100と統計されていた。

人口の構成としては、

	全人口	全人口に占める割合
満洲人（漢族、満洲族）	38,885,562 人	94.65%
日本人	2,128,582 人	5.18%
その他外国人（白系ロシア人を含む）	66,783 人	0.16%

上記の「日本人」の中には、130万9千人の朝鮮人を含む。台湾人は朝鮮人に含まれている。

主要都市の人口は下記のとおり。

都市名	全人口	その内の日本人の人口	データ
営口	176,917 人	8,320 人	1940年
奉天	1,003,716 人	170,580 人	1940年
新京	490,253 人	129,321 人	1940年
哈爾濱	558,829 人	51,650 人	1940年
大連	338,872 人	84,794 人	1938年
安東	246,129 人	43,358 人	1940年
吉林	145,035 人	17,941 人	1940年
斉斉哈爾	118,708 人	14,290 人	1940年

詔勅および協定

陸海軍軍人に賜はりたる敕諭　1882 年（明治 15 年）1 月 4 日

わが国の軍隊は代々天皇の統率したまう所にある。昔、神武天皇みずから大伴物部の兵たちを率い、国中の帰順せぬ者どもを討ちたいらげ、皇位につき天下を治められてから、二千五百年余りを経た。この間、世の移り変わりに従い、兵制の改革もまたしばしばであった。古くは天皇がみずから軍を率いられる制度であり、時には皇后皇太子が代ることもあったが、およそ兵権を臣下に委ねることはなかった。中世に至り、政治軍事の制度をみな唐にならわせ、六の衛府を置き左右の馬寮を建て、防人などを設けて兵制は整った。しかしうち続く平和になれ、朝廷の政務もしだいに文弱に流れたため、兵と農はおのずから二つに分かれ、古代の徴兵はいつとなく志願の姿に変わり、ついには武士となった。軍事の権限は、すべて武士たちの頭領である者に帰し、世の乱れとともに政治の大権もまたその手に落ち、およそ七百年のあいだ武家の政治となった。世のさまの移りでかくなったのは、人の力では挽回できなかったともいえるが、それはわが国体に照らし、かつわが祖先の制度に背く、嘆かわしき事態であった。

時が下って、弘化嘉永の頃から徳川幕府の政治は衰え、あまつさえ外国との諸問題が起こって国が侮りを受けかねない情勢が迫り、わが祖父仁孝天皇、先代孝明天皇をいたく悩ませられたことは、かたじけなくも又おそれ多いことであった。しかるに朕が幼くして皇位を継承した当初、征夷大将軍が政権を返上し、大名小名は版籍を奉還した。年を経ずに国内が統一され、古代の制度が復活した。これは文武の忠臣良臣が朕を補佐した功績であり、民を思う歴代天皇の遺徳であるが、あわせてわが臣民が心に正逆の道理をわきまえ、大義の重さを知っていたからこそである。そこでこの時機に兵制を改め国威を輝かすべしと考え、この十五年ほどで陸海軍の制度を今のように定めたのである。軍の大権は朕が統帥するもので、その運用は臣下に任せても、大綱は朕がみずから掌握し、臣下に委ねるものではない。子孫に至るまでこの旨をよく伝え、天皇が政治軍事の大権を掌握する意義を存続させ、再び中世以降のように、正しい体制を失うことがないよう望む。

朕は汝(なんじ)ら軍人の大元帥である。朕は汝らを手足と頼み、汝らは朕を頭首とも仰いで、その関係は特に深くなくてはならぬ。朕が国家を保護し、天の恵みに応じ祖先の恩に報いることができるのも、汝ら軍人が職分を尽くすか否かによる。国の威信にかげりがあれば、汝らは朕と憂いを共にせよ。わが武威が発揚し栄光に輝くなら、朕と汝らは誉れをともにすべし。汝らがみな職分を守り、朕と心を一つにし、国家の防衛に力を尽くすなら、我が国の民は永く太平を享受し、我が国の威信は大いに世界に輝くであろう。朕の汝ら軍人への期待は、かくも大きい。そのため、ここに訓戒すべきことがある。それを次に述べる。

一　軍人は忠節を尽くすを本分とすべし。我が国に生をうける者なら、誰が国に報いる心がないことがあろう。まして軍人となる者は、この心が固くなければ、物の役に立つとは思われぬ。軍人にして報国の心が堅固でないならば、いかに技量に練達し、また学術に優れても、なお木偶(でく)人形にひとしいのだ。隊伍整い規律正しくとも、忠節の存在しない軍隊は、有事にのぞめば烏合の衆と同じである。国家を防衛し、国権を維持するのは兵の力によるのであるから、兵力の強弱はすなわち国運の盛衰であることをわきまえよ。世論に惑わず、政治に関わることなく、ただ一途におのれの本分たる忠節を守り、義務は山より重く、死は羽毛より軽いと覚悟せよ。その志操を破り、不覚をとって汚名をうけることのないように。

一　軍人は礼儀を正しくすべし。軍人は上は元帥から下は一兵卒に至るまで、階級があって統制に属すだけでなく、同じ階級でも年次に新旧があり、年次の新しい者は、古い者に従うべきものだ。下級の者が上官の命令を受ける時には、実は朕から直接の命令を受けると同義と心得よ。自己の所属するところでなくとも、上官はもちろん年次が自己より古い者に対しては、すべて敬い礼を尽くすべし。また上級の者は下級のものに向かい、いささかも軽侮し傲慢な振るまいがあってはならぬ。公務のため威厳を主とする時は別、そのほかは努めて親密に接し、慈愛をもっぱらに心がけ、上下が一致して公務に勤めよ。もし軍人たる者で礼儀を破り、上を敬わず下をいたわらず、一致団結を失うならば、ただ軍隊の害毒であるのみか、国家のためにも許しがたき罪人である。

一　軍人は武勇を尊ぶべし。武勇は我が国において古来より尊ばれてきたところであるから、我が国の臣民たるものは、武勇なくしてははじまらぬ。まして軍人は戦闘にのぞみ、敵に当たる職務であるから、片時も武勇を忘れてよいことがあろうか。ただ武勇には大勇と小勇があり同じではない。血気にはやり、粗暴に振るまうなどは武勇とはいえぬ。軍人たるものは常によく義理をわきまえ、胆力を練り、思慮を尽くして物事を考えるべし。小敵も侮らず、大敵をも恐れず、武人の職分を尽くすことが、まことの大勇である。武勇を尊ぶ者は、常々他人に接するにあたり温和を第一とし、人々から敬愛されるよう心がけよ。わけもなく蛮勇を好み、乱暴に振舞えば、果ては世人から忌み嫌われ、野獣のように思われるのだ。心すべきことである。

一　軍人は信義を重んずべし。信義を守ることは常識であるが、とりわけ軍人は信義がなくては一日でも隊伍の中に加わっていることが難しい。信とはおのれの言葉を守り、義とはおのれの義理を果たすことをいう。従って信義を尽くそうと思うならば、はじめからその事が可能かまた不可能か、入念に思考すべし。あいまいな物事を気軽に承知して、いわれなき係わりあいを持ち、後になって信義を立てようとしても進退に困り、身の置き所に苦しむことがある。後悔しても役に立たぬ。始めによくよく事の正逆をわきまえ、理非を考えて、この言はしょせん実行できぬもの、この義理はとても守れぬものと悟ったならば、すみやかにとどまるがよい。古代から、あるいは小の信義を貫こうとして大局の正逆を見誤り、あるいは公の理非に迷ってまで私情の信義を守り、あたら英雄豪傑が災難にあって身をほろぼし、死後に汚名を後世まで残した例は少なくない。深く警戒しなくてはならぬ。

一　軍人は質素を旨とすべし。およそ質素を心がけなければ、文弱に流れ軽薄に走り、豪奢華美を好み、ついには貪官となり汚職に陥って心ざしもむげに賤しくなり、節操も武勇も甲斐なく、人々に爪はじきされるまでになるのだ。その身の一生の不幸と言うも愚かである。この風潮がひとたび軍人の中に発生すれば、伝染病のように蔓延して武人の気風も兵の意気もとみに衰えることは明らかである。朕は深くこれを危惧し、先に免黜条例を施行してこの点の大体を戒めた。しかしなおこの悪習が出ることを憂慮し、心が静まらぬため又この点を指導するのである。汝ら軍人は、ゆめゆめこの訓戒をなおざりに思うな。

この五か条は軍人たらん者は、しばしもゆるがせにしてはならぬ。これを行うには誠の一心こそが大切である。この五か条はわが軍人の精神であって、誠の心一つは、また五か条の精神なのである。心に誠がなければ、いかに立派な言葉も、また善き行いも、みな上べの装飾で何の役に立とうか。誠があれば、何事も成しとげられるのだ。ましてこの五か条は、天地の大道であり人倫の常識である。行うにも容易、守るにも容易なことである。汝ら軍人はよく朕の教えに従い、この道を守り実行し、国に報いる義務を尽くせば、朕ひとりの喜びにあらず、日本国の民はこぞってこれを祝するであろう。

教育勅語　1890 年（明治 23 年）10 月 30 日

私が思うには、我が皇室の先祖が国を始められたのは、はるかに遠い昔のことで、代々築かれてきた徳は深く厚いものでした。我が国民は忠義と孝行を尽くし、全国民が心を一つにして、世々にわたって立派な行いをしてきたことは、わが国のすぐれたところであり、教育の根源もまたそこにあります。

あなたたち国民は、父母に孝行し、兄弟仲良くし、夫婦は仲むつまじく、友達とは互いに信じあい、行動は慎み深く、他人に博愛の手を差し伸べ、学問を修め、仕事を習い、それによって知能をさらに開き起こし、徳と才能を磨き上げ、進んで公共の利益や世間の務めに尽力し、いつも憲法を重んじ、法律に従いなさい。そしてもし危急の事態が生じたら、正義心から勇気を持って公のために奉仕し、それによって永遠に続く皇室の運命を助けるようにしなさい。これらのことは、単にあなた方が忠義心あつく善良な国民であるということだけではなく、あなた方の祖先が残した良い風習を褒め称えることでもあります。

このような道は、実にわが皇室の祖先が残された教訓であり、その子孫と国民が共に守っていかねばならぬことで、昔も今も変わらず、国の内外をも問わず、間違いのない道理です。私はあなた方国民と共にこの教えを胸中に銘記して守り、皆一致して立派な行いをしてゆくことを切に願っています。

戦陣訓　1941 年（昭和 16 年）1 月 8 日

序

そもそも戦陣というところは、天皇陛下のご命令をもととして、皇軍の皇軍たる真価を現し、攻撃すれば必ず取り、戦闘すれば必ず勝ち、広く八紘一宇のご聖旨を世界に行き渡らせ、敵軍に、天皇陛下のご威光を仰がせて、その尊さを深く心に刻みつけさせる場所である。だから戦陣にある者は、十分にわが大日本帝国の、世界人類の幸福を増やさねばならぬという、尊い役目を会得して、皇軍の軍人として皇道を顕現するためにふみ行わねばならぬ、正しい道をしっかりと保ち、わが国の威光と恩徳とを、広く世界に揚げ現すように努めねばならない。

思うに、軍人精神の根本となる道は、恐れ多くも軍人にお下しになった勅諭の中に、はっきりとお示しくださっている。そして戦闘や訓練などについて、よりどころとせねばならない大切な点は、また操典や要務令などの綱領に教え示されている。ところが戦陣の様子や事情というものは、また格別な点があって、どうかすると目先の事柄に気を取られて、大切な根本を忘れ、ひょっとするとその行いが、軍人としての義務に背くようなことがないとは限らない。十分に反省し気をつけねばならぬことではないか。そこで、これまでの戦陣における経験から考えて、常に戦陣で勅諭のご聖旨を頂いて、十分にその大御心に添い奉る行いができるように、いちいち実際の事柄について戦陣での行いのよりどころを教え、そして皇軍の将兵が、八紘一宇のご聖旨を世界に行き渡らすために守り行う道徳を、一層高いものにしようと思う。これがつまりこの戦陣訓本来の趣旨とするところである。

本訓　その一

第一　皇国

大日本帝国は、天照大神以来相受けて代々天皇がお治めになっている国である。天地とともに連綿と続いて窮まりのない皇統をお継ぎになっている天皇陛下が上においでになり、天照大神以来変わることのない国家統治のご方針を受け継いで、永遠にこの国をお治めになっているのである。天皇陛下の厚いお恵みは、全ての国民、誰一人これを頂かない者はなく天皇陛下の聖なる徳は、世界中に照り輝いている。この尊くありがたい天皇陛下を上に頂くわれわれ国民もまた、先祖代々、忠・孝・勇・武の徳を受け継いで天皇陛下のみ国日本の道義を、広く世界に揚げ現して、八紘一宇の大御業を助け奉り、天皇陛下と国民とが一体となって、今日のように国の勢いを盛んにしたのである。

戦陣にある将兵は、よくこの万国に比類のないわが国体の根本の意義を十分自分のものとして、しっかりとして動くことのない信念を堅く持ち、断じてわが皇国を守るところの重大任務を成し遂げることに努めねばならない。

第二　皇軍

皇軍は天皇陛下おん自ら率いられて、神武の精神を身をもって示し、このことによって、皇国の威光と恩徳とを世界に揚げ現し、皇室のお栄えをお助け申し上げることを任務とするものである。

常に天皇陛下の大御心を体し奉って、心が正しくて武勇であり、武勇であって情け深く、よく全世界の大協和を実現するもの、これを神武の精神というのである。武の徳は厳格でなければならず、仁の徳は公平に隅々まで行き渡らすことが大切である。仮にも皇軍に反抗する敵があったときは、勢い鋭く、当たるべからざる武力を振るって、断然これを打ち砕かねばならない。しかしまた、たとえそのいかめしい武力をもって、よく敵を屈服させることができたとしても、降伏してくる敵は撃たず、服従する者は哀れむという徳が十分でなかったなれば、いまだ皇軍の道として完全なものとは言うことはできない。武の徳は高ぶらず、仁の徳は見えを主とせず、これらの徳が自然に行いに現れ出るのが尊いのである。皇軍の本来の特色は、慈愛と武威とが同時に並行して行われ、至らぬ隈なく、天皇陛下のご威光を仰がせ慕わしめるということにある。

第三　軍紀

皇軍の軍紀の生命とする点は、恐れ多くも大元帥陛下は対し奉って、絶対に服従申し上げるという気高い精神にあるのである。

上官と部下とが一斉に、天皇陛下の大御心を奉体する指揮命令の、尊く犯すべからざるものである理由を深く心に刻んで忘れず、上官は大元帥陛下のご統帥に服し奉ることが謹み深く厳格であり、部下もまた謹んで上長に服従の誠心を尽くさねばならない。将兵ことごとくが、忠節の誠心をもって堅く結びつき、上下の心のつながりがぴったりとついており、全軍がただ一命令によって整然と行動することは、これが戦闘に勝利を得るために最も必要な条件で、またこのことは、実に地方の安寧と秩序とを堅く保つために、最も大切な方法である。

特に戦陣は、服従の精神を極度にまで発揮し徹底的にこれをふみ行わねばならない場所である。進んで死を恐れず、艱難辛苦に堪えて、ひとたび命令が下るや、喜び勇んで、生還の望めない場所に跳び込み、黙々として、身命をささげてその命令を実行し、これを立派に成し遂げるのは、実にわが軍人精神の最も輝かしい現れである。

第四　団結

皇軍は、恐れ多くも大元帥陛下を上に頂き奉っているのである。だから大元帥陛下の深い大御心をしっかりと頂いて、忠節の誠心によって一致団結し、全軍が一心同体であるという立派な実績を挙げねばならない。

軍隊は、大元帥陛下の大御心に基づく指揮命令の、根本の意義によって、隊長を中心とし、強く堅く結束して、その上なごやかな気分の満ち満ちた団結を作り上げねばならない。上官も部下も、皆が各自の尽くさねばならぬ本分を堅く守り、常に隊長の計画方針に従い、誠心をもって信じ合い、いささかの隔ても置かず、命も損得も眼中になく、全軍のため、ひいては君国のために、わが一身を喜んでささげる覚悟がなくてはならない。

第五　協同

全ての兵が心を一つにして、自分に与えられた任務を成し遂げるために突き進むとともに、全軍に勝利を得させるために、喜び勇んで自分を顧みることなく、いちずに協力し合うという精神を振るい現さねばならない。各隊は、互いにそれぞれ与えられた任務を尊重し、名誉を尊んで、信じ合い助け合い、自分から進んで艱難辛苦を引き受け、力を合わせ心を一つにして、ともに目的を成し遂げるために奮闘せねばならない。

第六　攻撃精神

およそ戦闘には、勇気に満ちて決断がよく、常に攻撃してやまない精神で終始しなければならない。

攻撃する場合には、思い切って自ら進み出て、敵の先手を打ってその気勢をくじき、気力が強くて困難に屈せず、敵を徹底的にたたきつぶさねばならない。また防御に当たっても、よく内に鋭く激しい攻撃精神を保持して、必ず始終敵に働きかけて動作することのできる立場を持ち続けよ。陣地は死んでも敵に渡してはならない。追撃には絶対に容赦なく、どこまでも手を緩めず、とことんまでやっつけねばならない。

勇ましく脇目も振らず突き進んでどんなことにも恐れず、よく落ち着き度胸を据えて困難な場面に当たり、堅く堪え忍んで心を動かさず、どのような苦しみにも打ち勝ち、あらゆる障害を突き破って、まっしぐらに勝利を得るために突き進まねばならない。

第七　必勝の信念

信じる心が強ければ、そこに無限の力が生じるものである。自軍の勝利を固く信じて、断じてひるまない強い意志をもって戦う者こそ、何事の戦闘にも勝つのである。

きっと勝つという信念は、百千万回死に身になって訓練してこそ、始めて生じるものである。よくわずかの時間も惜しんで研究し、ありったけの知恵を絞って工夫して、必ず敵に勝つことのできる実力を身につけねばならない。

戦いに勝つか負けるかは、たちまちわが国の栄えるか滅びるかに直接影響する。名誉ある皇軍の歴史をよく考えて、あらゆる戦に必ず勝ってきた皇軍の歴史を汚してはならないという、自分の責任を深く心に刻みつけ、確実に勝利を得るまでは、絶対に戦闘をやめてはならない。

本訓　其の二

第一　敬神

われわれの一挙一動は、常に皇祖皇宗のみ霊がご覧になっているところである。

心を正しく持ち、身の行いを慎み、深く誠心をもって神を敬い奉り、いつも忠義と孝行との二つを心から離さず、仰いで神々のお守りを受けることのできる、資格を身に備えねばならない。

第二　孝道

忠義と孝行とが一致するということは、わが国だけにある特別の道徳の、最も優れた点で、わが国の忠義の念に厚い人々は、きっとまた誠心から孝行を尽くす人々である。

戦陣においては、君国のためにこの身をささげさせてくださる父母のご恩を、深く心に頂いて、よく身命をなげうって、忠節の道を貫きとおし、このことによって、先祖から伝わってきた忠君の美風を明らかに世に現し、孝行の道を全うするように努めねばならない。

第三　敬礼挙措

敬礼は、純粋で混じり気のない服従心から、自然にあふれ出るもので、また上官と部下との心が一致した現れである。だから戦陣においては、平時にも増して特別に厳格で正しい敬礼をせねばならない。

礼儀に厚い心が内に満ち満ちており、動作が慎み深く厳格でかつ正しいのは、強い武人だという証拠である。

第四　戦友道

戦友間において守られなければならぬ道徳は、忠君の道において生死を誓い合い、互いに心の底から信じ頼り合い、ともに怠ることなく腕前と人格とを磨き、危急の場合に助け合い、間違ったことは注意し合って、一緒にそろって軍人としてのご奉公を完全に成し遂げることにある。

第五　率先躬行

幹部は燃えるような誠心の持ち主であり、部下の全ての行いの手本でなければならない。もしも上官の思想や行動が正しくなかったなれば、部下の行いは必ず乱れるものである。

戦陣では、特に論より実行が大切である。何事も自ら人々の真っ先に立って、しっかりとした強い態度で実行しなければならない。

第六　責任

大元帥陛下の大御心に基づいてわれわれに与えられた任務は、尊厳で犯すことのできないものである。したがって、その任務に伴う責任は非常に重大である。だからわれわれは、一つの仕事一つの役目もおろそかにせず、魂を打ち込んで、ある限りの方法を尽くし、その任務を完全に成し遂げるために努めねばならない。

自分の責任を大切にする者こそ、本当に戦場における最も優れた勇者である。

第七　死生観

必死の場合においても、厳として揺るがぬわれわれの行動のもととなるものは、身命をささげて君国は尽くすという気高い軍人精神である。

生死のいかんを顧みず、一心不乱に、自分の任務を完全に成し遂げるために突き進まねばならない。ひとたび死所を得たなれば、ある限りの体力精神力をささげ切って、落ち着いて死を鴻毛の軽きに比し、永遠に忠勇義烈の士として名を残すことのできるのを、武人としての最大の喜びとせねばならない。

第八　名を惜しむ

名を重んじ武人としての恥ずかしい行動をしない者は強い。常に戦陣における自分の行動が、直ちに郷里の人々や、家族親戚たちの名誉に影響することを考え、一層奮い立って、これらの人々の希望に添うように努力せねばならない。

死ぬべき命を生きて、捕虜となるような恥ずかしいことをせず、死んで汚らわしい罪の名を後の世に残すようなことがあってはならない。

第九　質実剛健

戦陣における行動は、全て飾り気のない誠心をもととして、強くて正しい軍人気質を奮い起こし、勢い盛んな意気を奮い立たせねばならない。

陣中における生活は、簡単で質素でなければならない。不自由はいつものことと思って、何事にも倹約をするように努めねばならない。ぜいたくな生活は、勇猛の軍人精神を失わしめるものである。

第十　清廉潔白

心がさっぱりして私欲がなく、少しも汚れた気持ちのないということは、軍人の気概と節操とのもととなるところのものである。自分の心に生じる欲心を抑えることができないで、物質上の欲望に本心を奪われるような者が、どうして皇国に身も命もささげるというような気高い行いをすることができようぞ。

品行は極めて厳格でなければならない。物事を取り計らうには公平で正しくなければならない。自分の行いを反省して、神にも人にも少しも恥ずかしい点のないように心掛けねばならない。

本訓　其の三

第一　戦陣の戒め

一　ちょっとした油断から思いも寄らぬ大変なことが生じるものである。平生からよく気をつけて準備を整え、厳重に警戒せねばならない。
　敵兵や住民を軽んじ侮ってはならない。わずかな成功に気を緩めて、最後の仕上げに力を惜しんではならない。残敵や住民に対するちょっとした不注意もまた、重大な災いの原因となることを知っていなければならない。

二　軍事上の機密を漏らさぬよう、細かく気を配っていなければならない。スパイはいつもわれわれのすぐ近くにいるのである。

三　哨兵の任務は非常に重くかつ大切である。軍全体の安全か危急かを、自分一身に引き受け、隊全体の軍紀を身をもって示すものである。だからよろしく身命を打ち込んで、その重い責任に当たり、厳かに、心を引き締めてその任務を守り行わねばならない。
　哨兵の責任の重い地位は、自他ともに十分に尊重せねばならない。

四　思想上の戦いは、今日の戦争の大切な一部分である。
わが皇国の使命と実力とに対する、厳として揺るがぬ信念によって、敵の宣伝やごまかしを打ち砕くだけでなく、さらに進んで住民や敵軍にまで、八紘一宇の尊いご聖旨を行き渡らすように努力せねばならない。

五　よりどころのない風説や、無責任なうわさに気を取られるのは、信念の弱いときに起こることである。そんなことに迷ってはならず、信念を動かしてはならない。百戦百勝の皇軍の実力を固く信じて、誰が何と言おうとも、十分に上官を信じ頼らねばならない。

六　敵地の財物や資材を大切にするように注意することが大切である。
　人夫や軍需品を出させたり、取り上げたり、物を焼き払うなどのことは、全て規則どおりにして、是非、指揮官の命令を受けたうえで行わねばならない。

七　世界平和を目標とする、皇軍本来の使命から考えて、哀れみ深い心で、よく罪のない住民を愛し、いたわってやらねばならない。

八　戦陣において、仮にも酒や女のために魂を失い、または欲心の起こるにまかせて持ち前の正しい心をなくし、そのために皇軍の威光と信用とを損ない、君国のために尽くさねばならない大切な自分の一生を駄目にするようなことがあってはならない。十分に自ら戒め慎んで、決して武人としての立派な道を汚さないように努めねばならない。

九　腹を立てぬようにし、不平を起こさぬようにせねばならない。「怒りは自分を滅ぼす敵だと思え」と昔の人も教えている。いっときの腹立ちを抑えることができなかったために、長くいつまでも後悔せねばならなかった実例が多い。

軍の法律の厳しいのは、特別に軍人の名誉を高く保たせ、皇軍の威光と信用とを十分に持たそうがためである。歓呼の声に送られて、出征の途に上ったあの日の、堅い決心と熱い感激とを常に思い起こし、はるかに祖国の父母・妻子が自分の身の上を案じている心の中を思いやり、仮にも罪を犯すようなことがあってはならない。

第二　戦陣のたしなみ

一　古来武徳を尊んできた皇軍の歴史を、一層輝かしいものとするように、武人としての徳を養い、その腕前を磨くことに努力せねばならない。

「何事をするにも途中で飽きるな」ということは、昔の将軍の言った言葉にもある。

二　自分の死後に何の心残りもないようにして、一心に君国に仕え奉るために努力し普段から身の回りを整理して、死んだ後、何の汚れも残していないように用意しておく心掛けが大切である。

自分の死骸を戦場に横たえることは、もちろん軍人としてかねて覚悟しているところである。たとえ遺骨が郷里へ帰らないようなことがあっても、少しも気に掛けないよう、前もって家族の者によく言い聞かせておかねばならない。

三　せっかく戦陣に出ながら、病気のために死ぬようなことがあっては、このうえもない残念なことである。だから戦陣では、特に健康を保つことに心掛け、自分のふしだらな生活が原因となって、ご奉公に差し支えの生じるようなことがあってはならない。

四　刀を自分の魂とし、馬を宝とした、昔の武士の心掛けを、しっかり自分のものとして、戦陣においては、いつも兵器や資材を大切にし、馬をかわいがり、大切にせよ。

五　陣中で、道徳上の義務が完全に守られているということは、強い戦闘力の発揮できるもとである。常にほかの隊の都合の良いように心掛け、宿舎や物品、資材等を独り占めせぬよう注意せねばならない。「水鳥は飛び立っても、跡の水を濁さない」ということわざがある。さすが日本の軍隊は、勇ましいうえに軍紀が厳粛で、正義の念に厚く、奥ゆかしいという評判を、外国の片田舎にも、永久に語り伝えられたいものである。

六　総じて自分の功績を自慢せず、手柄を人に譲るのは、武人の、優れて高い人柄として尊ばれるところである。

人の昇進をうらやむことをせず、自分の認められないのを不平に思わず、深く反省して、自分の誠心の足りない点を考えねばならない。

七　何事も正直にと心掛けて、大げさに言ったり、うそをつくことは、恥ずかしいとせねばならない。

八　常に自分は、世界を率いて立たねばならぬ大日本帝国の、選ばれた軍人であるという、広く大きい度量を持ち、正しい道をふみ行って忠節の志に緩みなく、皇国の威光を広く世界に揚げ現さねばならない。

　しかし、そのために外国人に対して高ぶるようなことなく、外国に対する礼儀もまた、大切にしなければならない。

九　当然死ぬべき命を生き永らえて、祖国へ帰れとの大元帥陛下のご命令を頂くことがあったら、よくよく、戦陣において斃れた戦友の身の上を思い、言葉や行いに気をつけて、国民の手本となり、一層奮励努力して君国に尽くし奉るの覚悟を固くせねばならない。

結び

　以上に言ったことは、全て軍人勅諭のご聖旨から出て、また軍人勅諭のご聖旨に帰り着くものである。だから以上の教えによって、戦陣における道義を立派にふみ行い、そして軍人勅諭のご垂訓を、欠けたところなく完全に守り遂げるように努めねばならない。

　戦陣における将兵は、この戦陣訓を守らねばならぬ道理を十分に会得し守って、一層誠心をささげて君国のために尽くし、よく軍人として尽くさねばならぬ務めを完全に成し遂げ、天皇陛下の厚いお恵みにお報い申し上げねばならない。

日本国およびソビエト連邦間中立条約及び声明　1941 年（昭和 16 年）年　4 月 13 日

昭和 16 年 4 月 13 日「モスクワ」において署名　昭和 16 年 4 月 25 日両国批准

大日本帝国およびソビエト連邦は、両国間の平和および友好の関係を強化させようという希望に促され、中立条約を締結することに決し、次のように協定した。

第 1 条
両締約国は、両国間に平和および友好の関係を維持し、相互に他方締約国の領土の保全および不可侵を尊重すべきことを約束する

第 2 条
締約国の一方か、または、2 以上の第三国より軍事行動の対象となる場合には、他方契約国はその紛争の全期間において中立を守る事

第 3 条
本条約は、両締約国においてその批准を了承した日から実施され、かつ、5 年の期間、効力を有する。両締約国のいずれの一方も、その期間満了の 1 年前に、本条約の廃棄を通告しなかったときは、本条約は次の 5 年間、自動的に延長されたものと認められたこととする。

第 4 条
本条約はなるべく早く批准すること。批准書の交換は東京においてなるべく早くに行うこと。

米英両国に対する宣戦の詔書　1941 年（昭和 16 年）12 月 8 日

神々のご加護を保有し、万世一系の皇位を継ぐ大日本帝国天皇は、忠実で勇敢な汝ら臣民にはっきりと示す。私はここに、米国及び英国に対して宣戦を布告する。私の陸海軍将兵は、全力を奮って交戦に従事し、私のすべての政府関係者はつとめに励んで職務に身をささげ、私の国民はおのおのその本分をつくし、一億の心をひとつにして国家の総力を挙げこの戦争の目的を達成するために手ちがいのないようにせよ。

そもそも、東アジアの安定を確保して、世界の平和に寄与する事は、大いなる明治天皇と、その偉大さを受け継がれた大正天皇が構想されたことで、遠大なはかりごととして、私が常に心がけている事である。そして、各国との交流を篤くし、万国の共栄の喜びをともにすることは、帝国の外交の要としているところである。今や、不幸にして、米英両国と争いを開始するにいたった。

まことにやむをえない事態となった。このような事態は、私の本意ではない。

中華民国政府は、以前より我が帝国の真意を理解せず、みだりに闘争を起こし、東アジアの平和を乱し、ついに帝国に武器をとらせる事態にいたらしめ、もう四年以上経過している。

さいわいに国民政府は南京政府に新たに変わった。帝国はこの政府と、善隣の誼（よしみ）を結び、ともに提携するようになったが、重慶に残存する蒋介石の政権は、米英の庇護を当てにし、兄弟である南京政府と、いまだに相互のせめぎあう姿勢を改めない。米英両国は、残存する蒋介石政権を支援し、東アジアの混乱を助長し、平和の美名にかくれて、東洋を征服する非道な野望をたくましくしている。

あまつさえ、くみする国々を誘い、帝国の周辺において、軍備を増強し、わが国に挑戦し、更に帝国の平和的通商にあらゆる妨害を与へ、ついには意図的に経済断行をして、帝国の生存に重大なる脅威を加えている。

私は政府に事態を平和の裡（うち）に解決させようとし、長い間、忍耐してきたが、米英は、少しも互いに譲り合う精神がなく、むやみに事態の解決を遅らせようとし、その間にもますます、経済上・軍事上の脅威を増大し続け、それによって我が国を屈服させようとしている。

このような事態がこのまま続けば、東アジアの安定に関して我が帝国がはらってきた積年の努力は、ことごとく水の泡となり、帝国の存立も、まさに危機に瀕することになる。ことここに至っては、我が帝国は今や、自存と自衛の為に、決然と立ち上がり、一切の障害を破砕する以外にない。

皇祖皇宗の神霊をいただき、私は、汝ら国民の忠誠と武勇を信頼し、祖先の遺業を押し広め、すみやかに禍根をとり除き、東アジアに永遠の平和を確立し、それによって帝国の光栄の保全を期すものである。

カイロ宣言　1943（昭和 18）年　12 月 1 日

ルーズベルト大統領、蒋介石大元帥、チャーチル総理大臣は、各自の軍事および外交顧問と共に北アフリカにおいて会議を終了し、次の一般的声明を発表した。

各軍事使節は、日本国に対する将来の軍事行動を協定した。

三大同盟国は、海路、陸路及び空路によって野蛮な敵国に仮借のない圧力を加える決意を表明した。この圧力は、既に増大しつつある。

三大同盟国は、日本国の侵略を制止し罰するため、今次の戦争を行っている。

同盟国は、自国のためには利得も求めず、また領土拡張の念も有しない。

同盟国の目的は、1914 年の第一次世界戦争の開始以後に日本国が奪取し又は占領した太平洋におけるすべての島を日本国からはく奪すること、並びに満洲、台湾及び澎湖島のような日本国が清国人から盗取したすべての地域を中華民国に返還することにある。

日本国は、また、暴力及び強慾により日本国が略取した他のすべての地域から駆逐される。
前記の三大国は、朝鮮の人民の奴隷状態に留意し、やがて朝鮮を自由独立のものにする決意を有する。
以上の目的で、三同盟国は、同盟諸国中の日本国と交戦中の諸国と協調し、日本国の無条件降伏をもたらすのに必要な重大で長期間の行動を続行する。

ヤルタ協定　1945（昭和 20）年　 2 月 4 日　米国国務省発表

三大国、すなわちソビエト連邦、アメリカ合衆国及び英国の指導者は、ドイツ国が降伏し、かつヨーロッパにおける戦争が終結した後二ヶ月または三ヶ月を経て、 ソビエト連邦が、次の条件で連合国側において日本国に対する戦争に参加することを協定した。

一 外蒙古（蒙古人民共和国）の現状は維持する。

二 1904 年の日本国の背信的攻撃により侵害されたロシア国の旧権利は、次のように回復される。

(イ) 樺太の南部及びこれに隣接するすべての島を、ソビエト連邦に返還する。
(ロ) 大連商港を国際化し、この港におけるソビエト連邦の優先的利益を擁護し、 また、ソビエト社会主義共和国連邦の海軍基地としての旅順口の租借権を回復する。
(ハ) 東清鉄道及び大連に出口を提供する南満州鉄道は、中ソ合併会社を設立して共同に運営する。 但し、ソビエト連邦の優先的利益を保障し、また、中華民国は、満州における完全な利益を保有するものとする。

三 千島列島は、ソビエト連邦に引渡す。

前記以外の外蒙古並びに港湾及び鉄道に関する協定は、蒋介石総統の同意を要する。大統領は、スターリン元帥からの通知により、この同意を得るために措置を執る。

三大国の首班は、ソビエト連邦のこれらの要求が日本国の敗北した後に確実に満足されることを合意した。

ソビエト連邦は、中華民国を日本国の束縛から解放する目的で、自国の軍隊によりこれに援助を与えるため、 ソビエト社会主義共和国連邦と中華民国との間の友好同盟条約を中華民国政府と締結する用意があることを表明する。

ポツダム宣言　1945（昭和 20）年 7 月 26 日

１．合衆国大統領、中華民国政府主席およびイギリス総理大臣は、自国の数億人の国民を代表して協議した上で日本国に対し、今回の戦争を終結させる機会を与えるということで意見が一致した。

２．合衆国、英帝国および中華民国の巨大な陸、海、空軍は西方から自国の陸軍および空軍による数倍の増強を受け日本国に対して最終的な打撃を加える態勢を整えた。右軍事力は日本国が抵抗を終止するまで同国に対して戦争を遂行する一切の連合国の決意によって支持され、かつ、鼓舞されているものである。

３．覚悟を決めた世界の自由な人民に対抗するドイツ国の無益かつ無意義な抵抗の結果は、日本国国民に対する先例を極めて明白に示している。現在、日本国に対して結集しつつある力は、抵抗するナチスに対し適用された場合において全ドイツ国人民の土地、産業および、生活様式を必然的に荒廃に帰せしめたのに比べ、計り知れないほどにさらに強大なものになるぞ。我らの決意に支持される我らの軍事力の最高度の使用は、日本国群体の不可避かつ完全な壊滅を意味すべく、また、同様必然的に日本国本土の完全な破滅を意味する。

４．無分別な打算によって日本帝国を滅亡の淵に陥れたわがままな軍国主義的な助言者によって日本国が引き続き統制されるべきか、あるいは理性の道を日本国が進むべきかを日本国が決定すべき時期が到来した。

５．我らの条件を次に述べる
我らは右の条件を絶対に離脱しない。これに変わる条件は存在せず、我らは遅延を認めない。

６．我らは無責任な軍国主義が世界より駆逐されるまでは平和、安全、および、正義の新秩序が生じ得ないことを主張する。従って、日本国国民を欺瞞して世界征服の暴挙に出る過ちを犯させた者の権力と勢力は永久に除去する。

７．右のような新秩序が建設され、かつ、日本国の戦争遂行能力が破壊されたことの確証が得られるまでは連合国の指定する日本国領内の諸地域は我らの指示する基本的な目的の達成を確保するために占領されるべきだ。

８．カイロ宣言の条項は履行されるべきで、また、日本国の主権は本州、北海道、九州および四国と我らの決定した島嶼（とうしょ）に限定されるべきだ。

９．日本国の軍隊は完全に武装を解除された後、各自の家庭に復帰し平和的かつ生産的な生活を営む機会をえさせるべきだ。

10. 我らは日本人を民族として奴隷化しようとしたり、または、国民として滅亡させようとする意図を有するわけではないが、我らの捕虜を虐待した者を含む一切の戦争犯罪人に対しては厳重な処罰を加える。日本国政府は日本国国民の間における民主主義的傾向の復活強化に対する一切の障害を除去すべきだ。言論、宗教、思想の自由、ならびに基本的人権の尊重は確立されなければならない。

11. 日本国はその経済を維持し、かつ公正な損害賠償の取り立てを可能にするように産業を維持することを許される。ただし、日本国に戦争のための再軍備をさせるような産業はこの限りではない。右の目的のための原料の入手、（原料の支配は含まない）を許可される。日本国は将来世界の貿易関係への参加を許される。

12. 前期の諸目的が達成され、かつ、日本国国民の自由に表明された意思に従って平和的な傾向を有し、かつ、責任ある政府が樹立された場合には、連合国の占領軍はただちに日本国より撤収する。

13. 我らは日本国政府がただちに日本国軍隊の無条件降伏を宣言し、かつ、右行動における同政府の誠意によって適正かつ十分な保障を提供することを同国政府に対し要求する。右以外の日本国の選択は、迅速かつ完全なる壊滅があるだけだ。

対日宣戦布告文　1945 年（昭和 20 年）8 月 8 日深夜　日本に手渡す

ヒトラードイツの敗北および降伏後においては、日本のみが戦争を継続する唯一の大国となった。

三国、すなわちアメリカ・イギリス・シナの日本軍隊の無条件降伏に関する本年 7 月 26 日の要求は日本により拒否されてしまった。よって極東戦争に関する日本政府のソ連邦に対し、同政府が日本の侵略に対する戦争に参加し、もって戦争終了を促進し、犠牲者の数を減少し、かつ急速に一般的平和回復に資すべき提案した。

ソ連邦は、その連合国に対する義務に従い、連合国の上記の提案を受諾し、本年 7 月 26 日の連合国宣言に参加した。ソ連邦政府は、このような同政府の政策が平和を促進し、各国民をこれ以上の犠牲と苦難より救い、日本人に、ドイツがその無条件降伏拒否後にこうむった危険と破壊を回避させうる唯一の手段であると考えた。

以上の見地よりソ連邦政府は、明日、すなわち 8 月 9 日より、同政府は日本と戦争状態にあるべき旨を宣言する。

終戦の詔書　1945 年（昭和 20 年）8 月 15 日

私は、深く世界の大勢と日本国の現状とを振返り、非常の措置をもって時局を収拾しようと思い、ここに忠実かつ善良なあなたがた国民に申し伝える。私は、日本国政府から米、英、中、ソの四国に対して、それらの共同宣言（ポツダム宣言）を受諾することを通告するよう下命した。

そもそも日本国民の平穏無事を図って世界繁栄の喜びを共有することは、代々天皇が伝えてきた理念であり、私が常々大切にしてきたことである。先に米英二国に対して宣戦した理由も、本来日本の自立と東アジア諸国の安定とを望み願う思いから出たものであり、他国の主権を排除して領土を侵すようなことは、もとから私の望むところではない。

ところが交戦はもう四年を経て、我が陸海将兵の勇敢な戦いも、我が多くの公職者の奮励努力も、我が一億国民の無私の尽力も、それぞれ最善を尽くしたにもかかわらず、戦局は必ずしも好転していないし、世界の大勢もまた我国に有利をもたらしていない。それどころか、敵は新たに残虐な爆弾（原爆）を使用して、しきりに無実の人々までをも殺傷しており、惨澹たる被害がどこまで及ぶのか全く予測できないまでに至った。

なのにまだ戦争を継続するならば、ついには我が民族の滅亡を招くだけでなく、ひいては人類の文明をも破滅しかねないであろう。このようなことでは、私は一体どうやって多くの愛すべき国民を守り、代々の天皇の御霊に謝罪したら良いというのか。これこそが、私が日本国政府に対し共同宣言を受諾（無条件降伏）するよう下命するに至った理由なのである。

私は、日本と共に終始東アジア諸国の解放に協力してくれた同盟諸国に対しては遺憾の意を表せざるを得ない。日本国民であって前線で戦死した者、公務にて殉職した者、戦災に倒れた者、さらにはその遺族の気持ちに想いを寄せると、我が身を引き裂かれる思いである。また戦傷を負ったり、災禍を被って家財職業を失った人々の再起については、私が深く心を痛めているところである。考えれば、今後日本国の受けるべき苦難はきっと並大抵のことではなかろう。あなたがた国民の本心も私はよく理解している。しかしながら、私は時の巡り合せに逆らわず、堪えがたくまた忍びがたい思いを乗り越えて、未来永劫のために平和な世界を切り開こうと思うのである。

私は、ここに国としての形を維持し得れば、善良なあなたがた国民の真心を拠所として、常にあなたがた国民と共に過ごすことができる。もしだれかが感情の高ぶりからむやみやたらに事件を起したり、あるいは仲間を陥れたりして互いに時勢の成り行きを混乱させ、そのために進むべき正しい道を誤って世界の国々から信頼を失うようなことは、私が最も強く警戒するところである。

ぜひとも国を挙げて一家の子孫にまで語り伝え、誇るべき自国の不滅を確信し、責任は重くかつ復興への道のりは遠いことを覚悟し、総力を将来の建設に傾け、正しい道を常に忘れずその心を堅持し、誓って国のあるべき姿の真髄を発揚し、世界の流れに遅れを取らぬよう決意しなければならない。

あなたがた国民は、これら私の意をよく理解して行動せよ。

参考文献

参考文献	出版社	著者
731 石井四郎と細菌戦部隊の闇を暴く	新潮文庫	青木冨貴子
今が分かる時代がわかる世界地図 2005 年版	成美堂出版	
関東軍	講談社	中山隆志
関東軍 在満陸軍の独走	中公新書	島田俊彦
棄民のあしあと	かもがわ出版	夏梅誠一
月刊 ASAHI 7緊急増刊 1991VOL.3 No.8		
思郷の譜-ソ連抑留生活	中根昭二	
死者が語る戦争	河出書房新社	
シベリアからの手紙-戦後強制抑留	平和祈念展示資料館	北田瀧
シベリア捕虜収容所	サイマル出版会	若槻泰雄
シベリア抑留全史	原書房	長勢了治
シベリヤ日記	山中 淺男	
写説 満州	ビジネス社	太平洋戦争研究会
週間読売 臨時増刊 1990 12/20 シベリア捕虜収容所の記録		
図説 写真で見る満州全史	太平洋戦争研究会	平塚柾諸
戦後史の正体	創元社	孫崎享
戦争とくらしの辞典	ポプラ社	
大日本帝国の戦争1 満洲国の幻影	毎日新聞社	
天山の鳥	明窓出版	西二郎
日本外交 現場からの証言	中公新書	孫崎享
遥かなる紅い夕陽-満州からの引揚げ	平和祈念展示資料館	森田拳次
遥かなる黒竜江	有朋書院	小林静雄
ビルマ戦線を語り継ぐ-沈没「対馬丸」遭難救助	恒川利雄	
復刻-日本新聞	朝日新聞社	
平和の礎-シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦 11	平和記念事業特別基金	
平和の礎-シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦 13	平和記念事業特別基金	
平和の礎-シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦 16	平和記念事業特別基金	
平和の礎選集 3-戦争体験の労苦を語り継ぐために	平和記念事業特別基金	
平和の礎選集-戦争体験の労苦を語り継ぐために	平和記念事業特別基金	
捕虜体験記Ⅶ タイシェト イルクーツク編	平文社	
満州国の最期	新人物往来社	太平洋戦争研究会
満州古写真帖	新人物往来社	
満洲第六国境守備隊満洲独立混成 135 旅団-想い出の写真集		
満洲帝国 北辺に消えた王道楽土の全貌	学習研究社	
満洲に消えた分村 秩父・中川村開拓団顛末記	草思社	山川暁
満州 敗戦 シベリア抑留 石川倶恵 作品集	株式会社リーヴ(印刷)	石川倶恵
満蒙開拓青少年義勇軍	青木書店	櫻本富雄